

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第370集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成12年度)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成12年度)

序

岩手県は、埋蔵文化財の宝庫と言われておりますが、先人達が遺したこの貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。また一方では、幹線道路網や農業基盤整備など、社会資本を充実させることもまた行政上の重要な施策であり、このため埋蔵文化財の保存・保護と調整・調和のとれた地域開発の進展が今日的な課題でもあります。

こうした見地から、財団法人岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会文化課による調整と指導のもとに、道路建設などによってやむを得ず消滅していく遺跡について発掘調査を実施し、記録保存する措置をとって参りました。平成12年度は、この趣旨のもとに県内24市町村におよぶ51遺跡に対して発掘調査を実施致しました。

調査しました遺跡の時代は縄文時代から近世まで多時期にわたりますが、特に注目される遺跡として、平泉町里遺跡が挙げられます。この遺跡は北上川東岸地区の水田地帯に立地し、現市街地より一段低い氾濫原から12世紀代のかわけや国産・中国産の陶磁器、国産の銅鏡などが出土し、北上川の氾濫原にも藤原氏関係遺跡の存在を推測させました。その他、縄文時代の遺跡である遠野市権現前遺跡と住田町小松Ⅰ遺跡の前期初頭の集落など、多岐にわたる多くの貴重な発見がありました。

この発掘調査略報は、調査報告書の発刊に先立って、今年度調査遺跡の調査概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くの方々に活用、埋蔵文化財のご理解を一層深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査を進めるにあたり、ご協力とご指示を賜りました委託者をはじめ、市町村教育委員会や関係各位に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成13年 2 月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 千葉 浩 一

目次

序

平成12年度の調査結果について

I. 国土交通省関係

(1) 泉屋遺跡第21次調査(平泉町) ……………	5	(5) 矢崎I遺跡第1次調査(平泉町) ……………	17
(2) 河崎の柵擬定地(川崎村) ……………	9	(6・7) 大清水・大清水上遺跡(胆沢町) ……	19
(3) 仁昌寺II遺跡(一戸町) ……………	11	(8) 古館遺跡(釜石市) ……………	25
(4) 北田II遺跡(水沢市) ……………	15		

II. 公団・公社関係

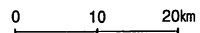
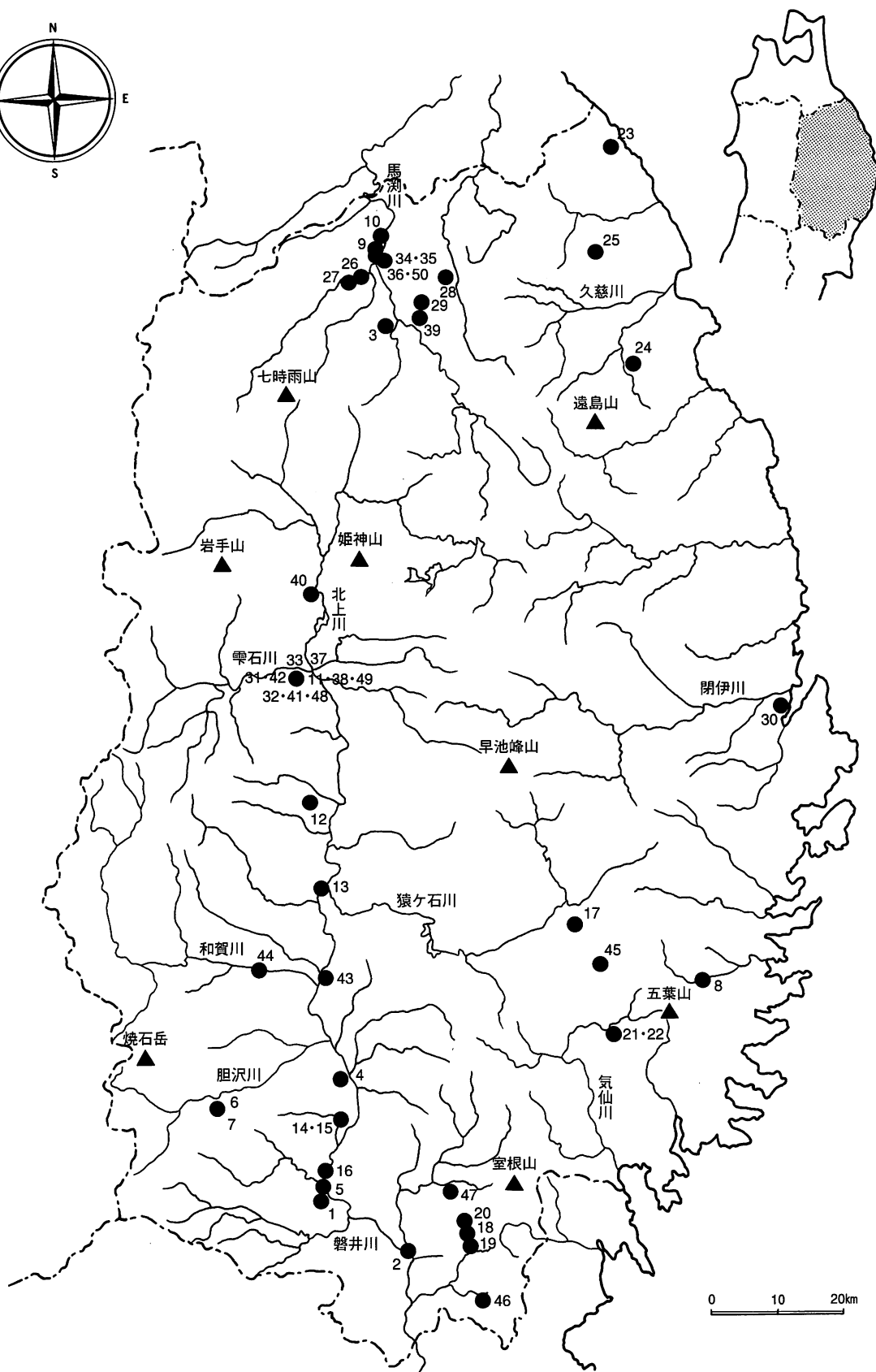
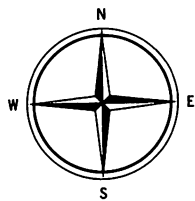
(9) 上村遺跡(二戸市) ……………	29	(11) 熊堂B遺跡第10次調査(盛岡市) ……	33
(10) 米沢遺跡(二戸市) ……………	31		

III. 岩手県・市関係

(12) 金館跡(紫波町) ……………	39	(25) 上水沢II遺跡(大野村) ……………	73
(13) 上似内遺跡(花巻市) ……………	41	(26) 大向II遺跡(二戸市) ……………	75
(14・15) 漆林II・本宿迎畑遺跡(水沢市) ……	45	(27) 浅石遺跡(二戸市) ……………	79
(16) 里遺跡(平泉町) ……………	49	(28) 長興寺I遺跡(九戸村) ……………	81
(17) 権現前遺跡(遠野市) ……………	53	(29) 野尻III遺跡(一戸町) ……………	85
(18) 清田台遺跡(千厩町) ……………	55	(30) 島田II遺跡(宮古市) ……………	87
(19) 要害館跡(千厩町) ……………	59	(31) 飯岡才川遺跡第3次調査(盛岡市) ……	93
(20) 船丸館跡(千厩町) ……………	61	(32) 細谷地遺跡第4次調査(盛岡市) ……	97
(21) 小松I遺跡(住田町) ……………	63	(33) 台太郎遺跡第26次調査(盛岡市) ……	101
(22) 小松II遺跡(住田町) ……………	67	(34) 諏訪前遺跡(二戸市) ……………	107
(23) ゴッソー遺跡(種市町) ……………	69	(35) 諏訪前(2)遺跡(二戸市) ……………	109
(24) 山根館跡(久慈市) ……………	71	(36) 台中平(2)遺跡(二戸市) ……………	111

IV. 本報告

(37) 鬼柳A遺跡第7次調査(盛岡市) ……	115	(44) 飯島遺跡(北上市) ……………	193
(38) 熊堂B遺跡第11次調査(盛岡市) ……	131	(45) 宇南田I遺跡(遠野市) ……………	203
(39) 道白II遺跡(一戸町) ……………	139	(46) 要害館跡B遺跡(藤沢町) ……………	221
(40) 川前遺跡(滝沢村) ……………	157	(47) 八丁館跡(大東町) ……………	233
(41) 小幡遺跡第16次調査(盛岡市) ……	163	(48) 小幡遺跡第15次調査(盛岡市) ……	249
(42) 飯岡才川遺跡第4次調査(盛岡市) ……	173	(49) 熊堂B遺跡第9次調査(盛岡市) ……	263
(43) 館II遺跡(北上市) ……………	181	(50) 台中平遺跡(二戸市) ……………	267



平成12年度調査遺跡位置図

平成12年度の調査結果について

平成12年度の発掘調査事業は、年度当初は48遺跡178,307㎡を対象としてスタートしたが、最終的には51遺跡186,424㎡を調査して終了した。全体的には、委託者の計画変更等が原因となり遺跡数、面積とも増加しているが、なかには調査未了等によって次年度に繰越した遺跡も含まれている。当センターの調査遺跡数は平成10年度に急激に増加し、そのまま推移して現在に至っているが、その要因としては、県が行う開発事業に伴う調査件数が大幅に増加していることがあげられる。

調査は県内9市9町4村に及んでおり、検出した遺構の概数は竪穴住居跡451棟、掘立柱建物跡91棟、各種土坑類5,401基などである。

調査した48遺跡のなかで特徴的な遺跡を各時代ごとに紹介すると次のようになる。旧石器時代を主体とする遺跡の調査はなかったが、遠野市権現前遺跡(17)でナイフ形石器等が発見されている。

縄文時代では、住田町小松Ⅰ遺跡(21)、権現前遺跡、胆沢町大清水上遺跡(7)、千厩町清田台遺跡(18)、一戸町仁昌寺Ⅱ遺跡(3)などで大規模な集落跡の調査を行っている。小松Ⅰ遺跡は早期末葉から前期初頭にかけた集落跡で、竪穴住居等の遺構が、厚い土砂に挟まれて層位的に発見された。権現前遺跡も小松Ⅰ遺跡とほぼ同時期の集落で、調査範囲が僅少であったにもかかわらず竪穴住居跡15棟がまとまって検出された。大清水上遺跡は大形の長方形住居を中心にして構成される特異な集落跡で、前期後葉の住居跡が20棟発見された。昨年度からの継続調査となった清田台遺跡では、272㎡という極めて狭い範囲から31棟の住居跡が重複して検出され、中期を主体とする大集落跡となることが明らかになった。仁昌寺Ⅱ遺跡は中期末葉を主体とする集落跡で、縦に半裁した丸太材を柱に用いた住居跡も発見されている。

弥生時代の遺構としては、九戸村長興寺Ⅰ遺跡(28)から、4点の完形土器を埋設した後期の墓墳が1基だけ検出されている。ただし、遺物が発見された遺跡はかなりの数にのぼり、なかでも二戸市浅石遺跡(27)からは前・中期の土器がまとまって出土した。

古墳時代の遺構・遺物は発見されなかった。その一方、奈良・平安時代の遺跡は盛岡市台太郎遺跡(33)、同細谷地遺跡(32)、花巻市上似内遺跡(13)、宮古市島田Ⅱ遺跡(30)など数多くの遺跡が調査された。志波城跡に近接する台太郎遺跡と細谷地遺跡では、合わせて100棟以上の竪穴住居跡が検出された。上似内遺跡は平安時代初めを主体とする集落跡で、多くの墨書土器や刻書土器が出土している。島田Ⅱ遺跡は丘陵に立地する大規模な平安時代の製鉄遺跡で、製鉄炉・工房などが多数発見された。また、二戸市大向Ⅱ遺跡(26)では、外周溝や竪穴中段のテラスなど、特異な施設をもつ住居跡が発見されている。

奥州藤原氏関連では、北上川左岸の沖積地に立地する平泉町里遺跡(16)の調査が行われた。掘立柱建物跡・井戸跡などの遺構を検出したほか、陶磁器やかかわりけ等に混じって銅鏡2枚が出土し、北上川左岸にも藤原氏関連の何らかの重要施設が存在することが明らかになった。

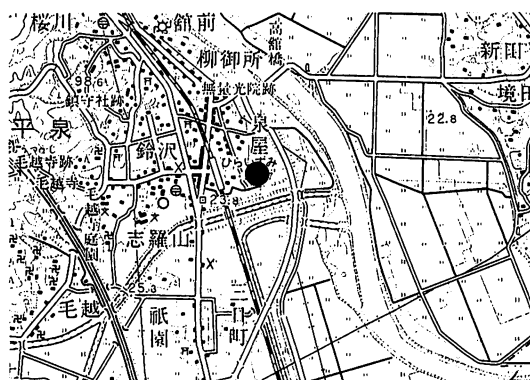
中世の遺跡としては多くの城館跡を調査した。なかでも、久慈市山根館跡(24)は丘陵の端部を二重の空堀と土塁で囲す極めて堅固な備えをもつ山城であることが判明した。また、仁昌寺Ⅱ遺跡では、大規模な掘立柱建物跡がまとまって発見されている。

今年度の調査遺跡の大まかな概要は以上のとおりであるが、その詳細については、平成14年度以降に本報告書として発刊する予定であり、そちらを参照していただければ幸いである。なお、検出遺構・出土遺物とも少なかった14遺跡については、本書をもって本報告としている。(調査第一課長 佐々木 勝)

I. 国土交通省関係

(1) 泉屋遺跡第21次調査

所在地 西磐井郡平泉町字泉屋31-3ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事業名 一関遊水地太田川左岸築堤等
発掘調査期間 平成12年5月18日～11月10日
調査対象面積 1,875㎡
発掘調査面積 1,875㎡
遺跡番号・略号 NE76-1079・IY00-21
調査担当者 濱田 宏・吉川 徹
協力機関 平泉町教育委員会



遺跡位置

1 : 50,000 平泉

1. 遺跡の立地

泉屋遺跡は、JR東北本線平泉駅の南東に広がる遺跡で、周辺には北に伽羅之御所、西に志羅山遺跡がある。今年度の調査区は遺跡の南東隅にあたり、平泉駅からの距離は南東方向におよそ250mである。遺跡の南側には河川改修を受けた太田川が東流し、さらに南側には沖積地が広がっている。遺跡の標高は19～22mである。

2. 調査の概要

今回の第21次調査は、調査区西側に形成された縄文時代前期・後期・晩期を主体とする遺物包含層と、東側の旧河道に形成された12世紀の遺物包含層の精査が中心であった。遺構は、それぞれの包含層を掘り下げていく段階で僅かながら確認されているが、その内容は平安時代（9～10世紀代）の竪穴住居跡2棟・焼土遺構1基・土坑2基、12世紀代と思われる土坑3基・溝跡1条、近世と思われるカマド状遺構5基・焼土遺構1基、時期不明の土坑11基、柱穴50個あまり、12世紀を含むそれ以降に存在した可能性のある木柱列2列1組（材の残るもの45本）1ヵ所と1列（材の残るもの4本）1ヵ所である。

旧河道の遺物包含層については、かわらけ・国産陶器・中国産磁器を含む12世紀代の遺物が出土する層と、その下に9～10世紀代のロクロ成形の土師器・須恵器等を含む層があり、後者は二次堆積した十和田a降下火山灰を挟んだ上下の層から出土している。

＜竪穴住居跡＞ 9～10世紀代と思われるものが2棟確認された。いずれも後世に壊されており、1棟はカマド本体の一部が、もう1棟はカマド燃焼部・煙出しとその脇の貯蔵穴のみが残存する。カマドは前者が南壁に、後者は東壁に設置されていたものと考えられる。

＜焼土遺構＞ 本来は遺構に伴っていたと思われる焼土遺構が2基確認されている。検出状況から、1基は平安時代の住居跡のカマド燃焼部、もう1基は近世のカマド状遺構のものと思われる。

＜土坑＞ 全部で16基検出された。このうち、検出状況から縄文時代に属する可能性のあるものは2基、出土遺物から9～10世紀代に属すると思われるものが2基、12世紀代と思われるものは3基で、他は詳細な時期が不明である。

＜溝跡＞ 旧河道内の西側に12世紀の包含層を掘りきった段階で確認された。完形のかわらけ等が出土することから12世紀代のものと思われる。昨年度確認されている溝跡の南側に続くものである。

＜カマド状遺構＞ 近世に属すると思われる遺構で、5基確認された。基本的に焚口・燃烧部・煙道部からなり、鍋や釜を据える部分が1カ所または2カ所のものがある。

＜柱穴＞ 50個あまり確認されたが、これらだけで掘立柱建物跡を構成するに至らない。昨年度のもの併せて検討する必要がある。

＜木柱列＞ 旧河道の南側に2列1組のものが、北側に1列のものが検出された。前者は、旧河道を横断する総長12.0m（木柱の間隔50～55cm）、幅1.5～1.8mを測る栈橋状の木柱列で、いずれの杭跡にも掘り込みが確認されないことから、打ち込まれたものと思われる。確認された層位は、12世紀を含むそれ以降に造成されたと思われる整地層面と十和田a降下火山灰層の上20～30cmである。後者は、十和田a降下火山灰層面で検出されたもので、これも打ち込み杭である。今のところ、この2つの木柱列の構造・用途については明確にできないが、時期は12世紀を含むそれ以降の可能性を考えている。

＜遺物包含層＞ 既述のように、縄文時代と12世紀という大きく二時期の遺物包含層があり、前者は調査区中央部に前期、中央部北寄りに後・晩期の包含層が形成されていた。前期の遺物包含層には、剥片石器・フレーク・チップを多く含み、土器は前期前葉の時期のものが出土している。後期は初頭～前葉、晩期では中葉の土器を主体とするものである。

12世紀の遺物を含む包含層は、旧河道東向きの斜面を主体として形成されている。下層ほどかわらけ等の遺物の破片が大きくなる傾向が認められる。ここから出土した遺物の総量は大コンテナ17箱におよぶが、ほとんどはかわらけの細片である。このほか、12世紀代の遺物としては、完形のかわらけ、常滑・渥美産の国産陶器、中国産磁器、漆器、鉄製品、ガラス玉、馬歯、植物遺存体など、古代の遺物では、土師器、須恵器、墨書土器、木鍬の柄の根元と思われる製品、曲物、土鈴、土錘、植物遺存体などがある。この各包含層が形成された時期については、かわらけ・陶磁器類の年代や各層に混入する時期の異なる遺物の割合などを詳細に検討する必要がある。また、馬歯・獣骨などの動物遺存体が出土する理由についても同様である。

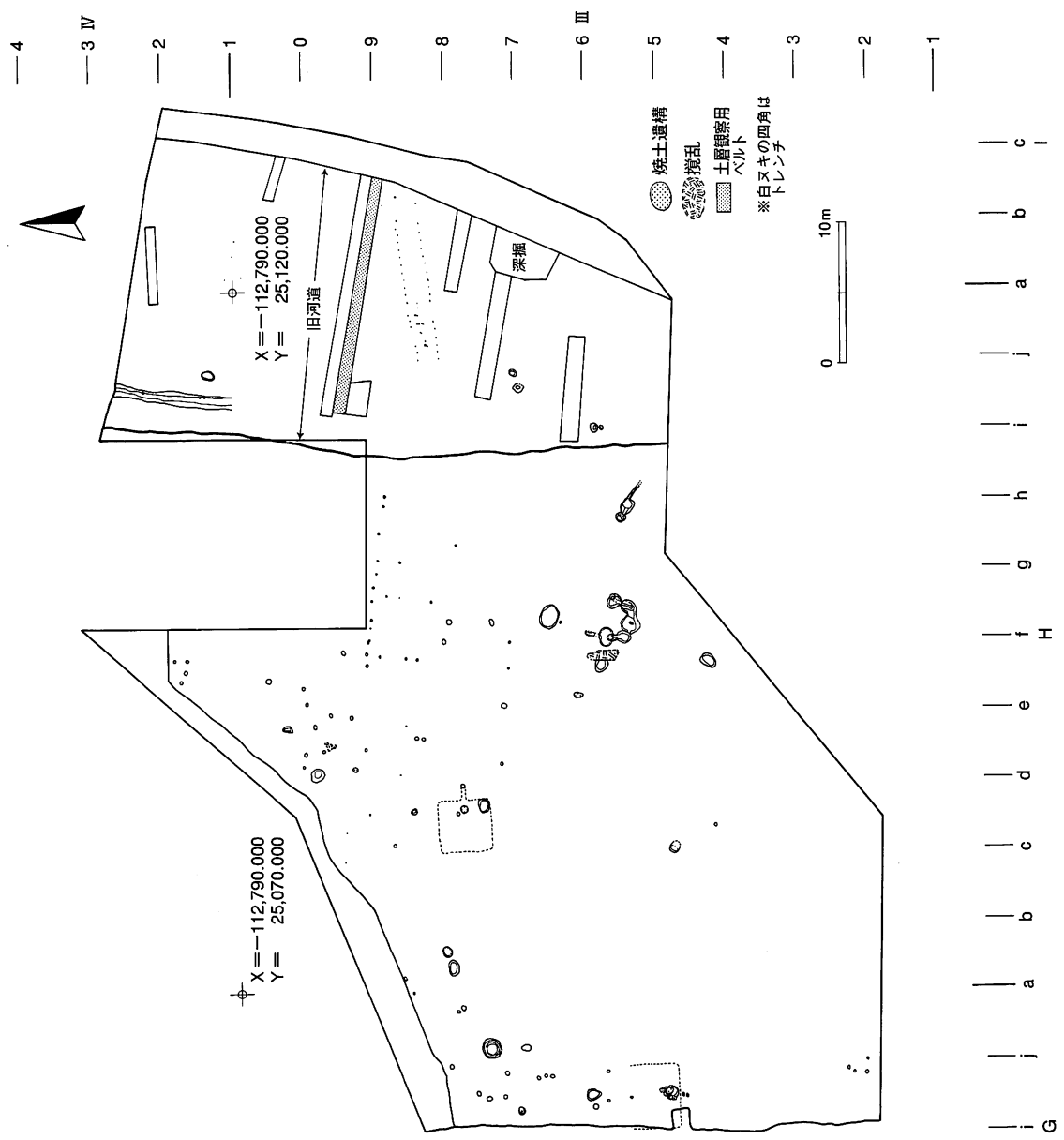
3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総量は、大コンテナ20箱程度である。ほとんどは既述した旧河道からの遺物で占められる。それ以外には、縄文時代の包含層から出土した縄文土器大コンテナ2箱、剥片石器・フレーク・石製品、磨石類あわせて大コンテナ1箱、中世以降の遺物では、陶磁器類・銭貨などがある。

4. まとめ

今回の調査によって、12世紀のみならずそれ以前（9～10世紀ごろ）の平泉の様相を検討できる資料が得られたことは、今後12世紀「都市平泉」を再現していく上で重要である。また、調査の主体であった12世紀の遺物包含層について、出土遺物等からその形成時期を検討し、平泉遺跡群における泉屋遺跡の位置付けを明らかにすることも課題の1つとして挙げられる。この他にも、旧河道内の各遺物包含層の形成時期、12世紀代と思われる整地層の造成時期、木柱列の用途と時期など再考すべき問題が多い。

これまでの調査結果から、この泉屋地区に縄文時代から現在に至る何らかの生活の痕跡が残されていることは明らかであるが、今後これらの課題や問題点を昨年度の第19次調査、平成8年度の第16次調査の成果と考え合わせながら、都市平泉における泉屋遺跡の有り方について検討していきたい。



泉屋遺跡第21次調査遺構配置図



縄文時代晩期の土器



土師器出土状況（坏）



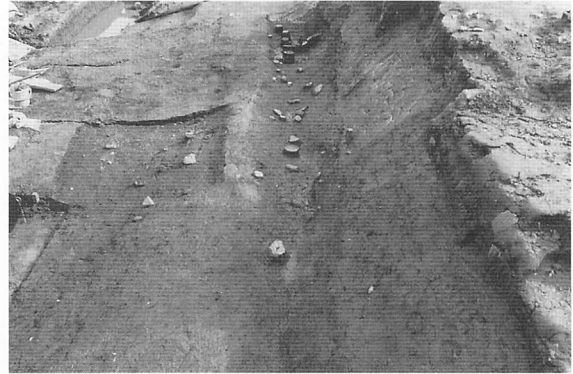
土製品出土状況（土鈴）



木製品出土状況（鋤）



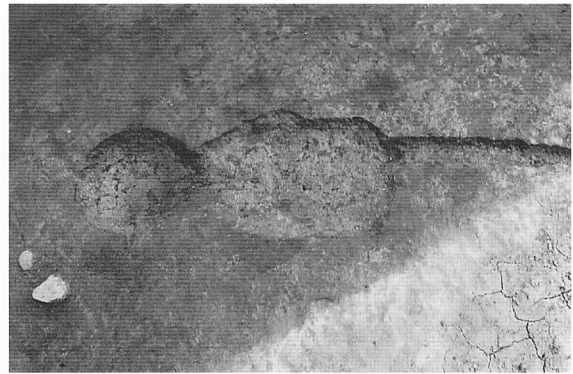
旧河道全景（白く見えるのが火山灰）



溝跡<12世紀>



かわらけ出土状況

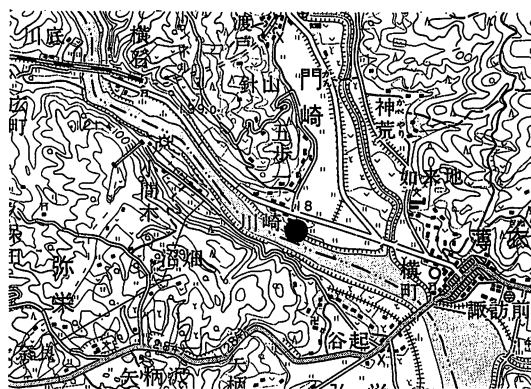


カマド状遺構<近世>

泉屋遺跡第21次調査検出遺構・出土遺物

(2) 河崎の柵擬定地

所在地 東磐井郡川崎村字川崎83-1ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事業名 床上浸水対策特別対策事業
発掘調査期間 平成12年4月18日～11月1日
調査対象面積 4,680㎡
発掘調査面積 4,680㎡
遺跡番号・略号 OE09-1173・KSG-00
調査担当者 高橋義介・島原弘征
協力機関 川崎村教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一関・千厩

1. 遺跡の立地

本遺跡は、川崎村役場の西北西側約1kmに位置し、北上川左岸の河岸段丘に立地している。標高は18.60～19.80mで、北緯38度54分、東経141度15分付近にあたる。調査区の現況は住宅跡と畑地で占められている。

2. 調査の概要

検出された遺構は掘立柱建物跡4棟、土坑38基、溝跡2条、溝状遺構34条、門跡1基、柱穴状土坑145基等である。平安時代11世紀の河崎の柵擬定地に伴う遺構は確認されなかった。

<掘立柱建物跡> 近世の掘立柱建物跡は4棟検出しているが、内2棟は重複し一部が調査区域外に延びる事から規模の全容が不明である。規模は①が桁行2間(4.2m)×梁行1間(3m)、②が桁行4間(8.2m)×梁行1間(4.2m)である。棟方向は①が北北東～南南西、②が東南東～西北西を示している。

<土坑> 大小合わせて38基検出している。平面形は方形、円形、楕円形等があり、円形が大部分を占めている。規模は開口部径54cm～1.5m、深さが8cm～1.2m前後である。時期は不明なものが多い。

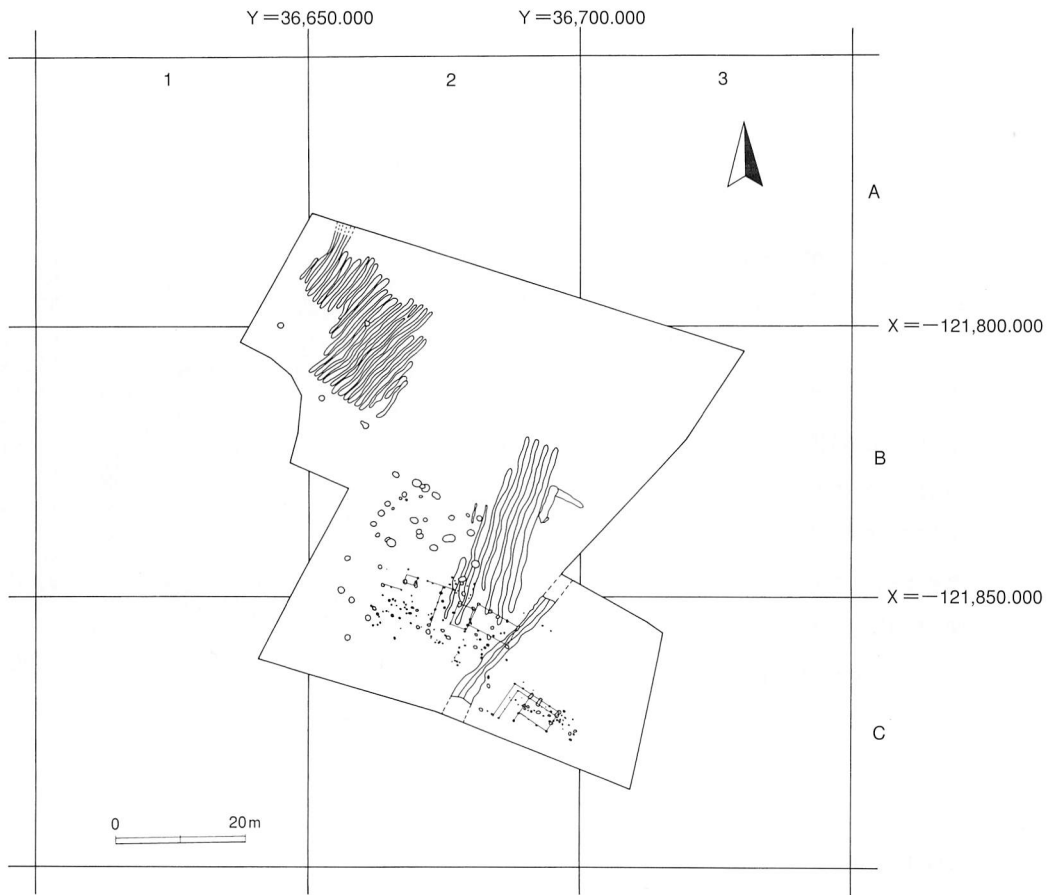
<溝跡> 2条検出している。内1条は両端が調査区域外に延びており規模の詳細が不明である。確認された長さは約25m、上幅が1.8～2.1m、深さが50cm～1m前後である。時期は中世ないし近世と思われる。

<溝状遺構> 2カ所で34条確認している。長さは6.5～35m、幅が70～80cm、深さが15～30cmである。長軸方向は①が北東～南西側、②が北北東～南南西側で並行している。時期は遺物の出土がなく不明である。

<出土遺物> 土器は弥生時代の高坏・甕・蓋、平安時代の土師器かわらけ・坏・甕、中世のかわらけ、陶磁器、手捏ね土器等があり、多くは遺構外から破片で出土している。他に鉄製の釘、刀子、フィゴの羽口、寛永通寶、煙管、石器、土製品もある。

3. まとめ

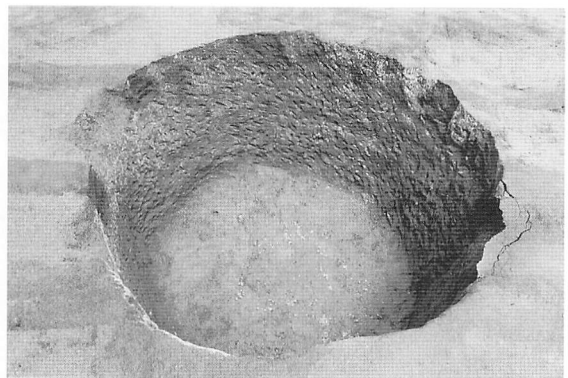
今回の調査では、近世の掘立柱建物跡を中心とする集落跡が確認されている。また、『陸奥話記』に記述された安倍貞任が本陣を置いたとされる河崎の柵に関連する遺構は検出されなかったが、平安時代同時期の土師器坏や甕の破片が出土する事から、周辺部での調査が進むにつれ全容が明らかになるとと思われる。



河崎の柵擬定地遺構配置図



掘立柱建物跡



土坑



溝状遺構

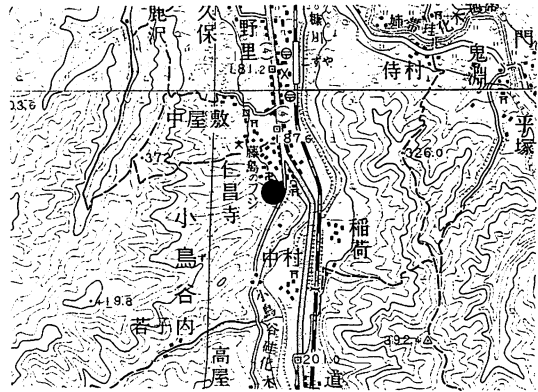


弥生土器

河崎の柵擬定地検出遺構・出土遺物

(3) 仁昌寺Ⅱ遺跡

所在地 二戸郡一戸町小鳥谷字仁昌寺 4
ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事業名 国道4号小鳥谷バイパス建設
発掘調査期間 平成12年4月17日～11月17日
調査対象面積 5,801㎡
発掘調査面積 5,801㎡
遺跡番号・略号 JF30-2094・NSJⅡ-00
調査担当者 中村直美・北田 勲・原 美津子
協力機関 一戸町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一戸・浄法寺

1. 遺跡の立地

仁昌寺Ⅱ遺跡はJ R東北本線一戸駅の南方約5.2km、東北自動車道一戸インターチェンジの南方約7.6kmの地点に位置し、馬淵川支流の平糠川が形成した砂礫（小鳥谷）段丘と火山灰砂（小姓堂）段丘が出会う地点の背後に接する丘陵の縁辺部に立地する。丘陵は両側に谷が入り込む細い舌状を呈し、現況は畑地である。標高は200～205mで、平糠川との比高は約25mを測る。

2. 調査の概要

仁昌寺Ⅱ遺跡の調査は平成12年度より6,217㎡の範囲を対象として開始され、本年度は5,801㎡を終了した。未了分の416㎡は次年度に調査が継続する。今年度検出した遺構は陥し穴10基、竪穴住居跡39棟、土坑21基、炉跡2基（縄文時代）、掘立柱建物跡15棟、竪穴建物跡6棟、鍛冶工房跡2棟（中世～）、墓坑46基（近世～）、竪穴状遺構1棟、井戸跡2基、柱穴列11列（時期不明）である。

縄文時代

<竪穴住居跡> 今年度の調査では、中期中葉～後期初頭までの時期幅をもつ39棟の竪穴住居跡が見つかった。北側と南側の斜面上半は中央部の沢地形を挟んで標高がやや高く、住居跡の分布もこの部分に集中する傾向が見られる。本遺跡で見つかった住居跡の特徴を次に述べる。

住居跡の炉には大きく分けて二つの形態が見られ、一方は中期中葉～末葉に大木土器文化圏で流行する複式炉、他方は深鉢土器を斜位に設置した状態で使用した土器埋設炉に分かれる。これに伴う柱穴配置には相違点があり、炉を中心として5本～7本の主柱穴がまわるもの、壁際に点々とまわるもの、柱穴を持たないものに大別できる。住居跡の規模は最小のもので径2.78m、最大のもので9.4mを測り、大形とそうでないものがある。調査区北側で検出した27号住居跡は、最大径9.4mの大形住居跡であるが、複式炉を中心とした軸線上と、それに対して3対の柱穴が見つかった。これら7本の柱穴のうち、軸線上のひとつを除いた6本の柱で、丸太材を半分に断ち割った半裁木柱痕が確認されている。この柱の痕跡は、平らな面を外側に向けて配される傾向が認められる。柱の大きさは70～110cm、深さ73～94cmを測り、遺跡のなかでは大形である。柱穴の埋土は暗褐色～黄褐色シルト主体で構成され、半円形の柱痕跡はいずれも埋土の下半部近くま

で掘り下げを行わないと確認できなかったことから、抜き取られた可能性が考えられる。同様の半円形の柱材は近接する御所野遺跡でも例がある。また、この住居はのちに拡張され、柱配置が壁際をまわるものへと変化している。また、本遺跡で見られる重複パターンには、上下に重なるものが比較的多くみられる。

<土坑> 調査区全域から21基を検出した。平面形は円形を基調とし、径は最小のもので0.6m、最大で2.74mを測る。埋土～底面より縄文時代の土器片・石器が出土するものがあるが、用途を推測できるものはほとんどない。

中世・近世

<竪穴建物跡> 調査区から6棟が検出された。張り出しを持つものと持たないものがある。張り出しを持つ1号竪穴建物跡からは床面に接した状態で白磁皿と模鑄銭が各一点出土している。このことから建物の時期を14末～15世紀ごろと位置付けたい。

<鍛冶工房跡> 調査区から工房跡と思われる長方形の建物跡を2棟検出した。1号工房跡は焼失建物で、床面から半截された鉄鍋片、札15点と雁股鋸1点が出土している。また、双方の建物跡床面からは現地性の焼土と鉄床石の可能性のある扁平礫が検出されており、床面採取の土壌サンプルからは鍛造剥片が採取されていることから、小鍛冶操業が行われていたことが窺える。また、成分分析を行い、床面の鉄滓、焼土、鉄鍋、札、雁股鋸からどのような関係が導き出されるか、結果を待ちたい。

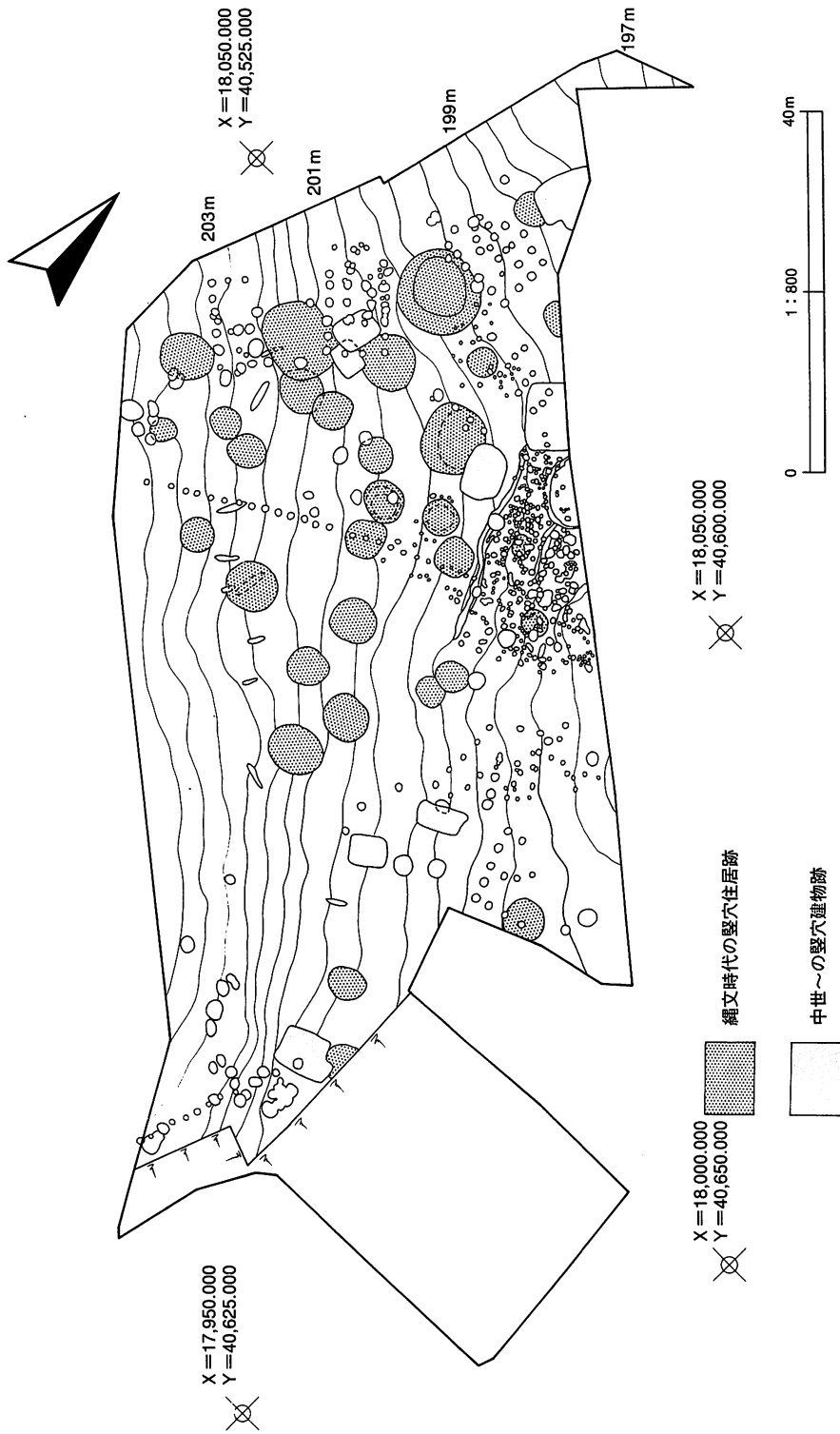
<掘立柱建物跡> 調査区北側と斜面下方から15棟が検出された。北側のエリアで見つかった1号掘立柱建物跡は、柱穴の径約70～100cm・深さ70～105cm、3間×5間ほどの規模を持ち、長辺約9.4mを測る建物跡である。斜面下方の建物跡は、勾配のある地面を削って整地が行われている。この平場では庇の付属する3間×5間ほどの規模の建物跡の他、多数の建て替えが認められる。これらの柱穴埋土からは石臼片・漆塗り椀片などが出土している。また、周辺からは中～近世の陶磁器片が出土している。

<墓坑> 調査区北側斜面上部～南側全域で墓坑を46基検出した。平面形はすべて円形で、断面形は逆台形を呈する。出土遺物からおおむね近世の墓坑と考えられるが、一部の墓坑底面に方形の棺痕跡が認められたことから、近代以降のものも混在するとみられる。

<出土遺物> 今回の調査で出土したのは縄文時代の土器・石器・土製品・石製品・中～近世の陶磁器・鉄製品・鉄滓・古銭である。縄文土器・石器はおもに竪穴住居跡から出土しているが、床面からの出土は多くなく、遺構数に比べ比較的出土量が少ない傾向にある。土器の時期は縄文時代中期末葉～後期初頭の大木8b・9・10式、上村・葦窪式、十腰内I式期相当のものが大半を占めるが、前期・晩期のものも少量出土する。中世の遺物は、竪穴建物跡床面から出土した白磁皿のほか、13～15世紀に位置付けられる青磁皿破片が3点出土している。また、工房跡から鎧の部品である札15枚分と雁股鋸、半截された鉄鍋片が出土した。近世の遺物としては肥前産陶磁器（大橋編年：Ⅳ～Ⅴ期）が少量出土している。また、墓坑から寛永通宝が162点、キセル12点、簪3点（ガラス製1・銅製2）、鋏・小形鉈各1点ほかが副葬品として出土した。

3. まとめ

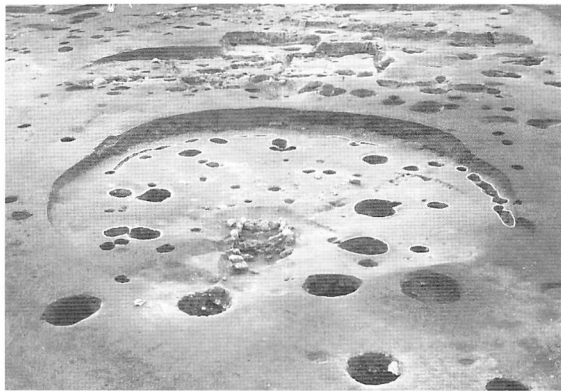
調査の結果、遺跡の内容が縄文時代、中世、近世以降の三時期に大別されることが明らかとなった。この場所は縄文時代において、はじめは狩猟の場であり、やがて人々の居住の場としてムラが営まれる様子が看取された。一方、中世においては居住の場であり、また生産の場としても小鍛冶操業が行われていたことが判明した。また、14末～15世紀の白磁皿が出土したことで、これら一連の遺構と、谷を挟み遺跡の南東に隣接する城館「五月館」との繋がりを示す可能性を残した。また、近世以降においては墓所であったことが判明した。このことは谷を挟み北西に隣接する仁昌寺とのかかわりを考えるうえでも良好な資料となろう。



仁昌寺Ⅱ遺跡遺構配置図



調査区全景



竪穴住居跡



掘立柱建物跡



鍛冶工房跡

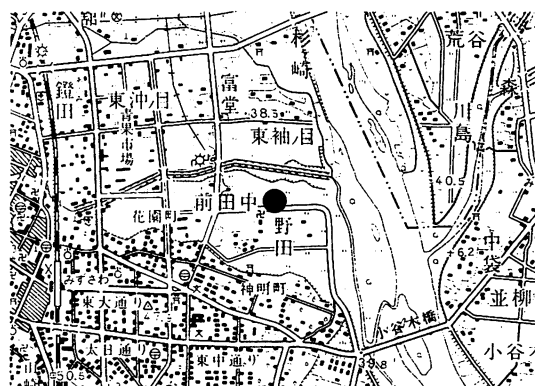


墓坑群

仁昌寺Ⅱ遺跡検出遺構

(4) 北田Ⅱ遺跡

所在地 水沢市佐倉河字前田中4-3ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事業名 水沢東バイパス建設工事
発掘調査期間 平成12年8月11日～10月17日
調査対象面積 2,408㎡
発掘調査面積 2,408㎡
遺跡番号・略号 NE17-2038・KDⅡ-00
調査担当者 工藤 徹・齋藤麻紀子
協力機関 水沢市教育委員会
水沢市埋蔵文化財調査センター



遺跡位置

1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

北田Ⅱ遺跡はJR東北本線水沢駅の東北東約1.5kmに位置し、胆沢扇状地を東流する網状河川に浸食された沖積地に立地する。標高は約38mで、遺跡の東方約600mを北上川が南流する。遺跡の現況は水田である。周辺には常盤小学校遺跡、杉の堂遺跡などがある。

2. 調査の概要

調査区は市道慶徳杉の堂線を挟み南北に分かれる。南側は今年度、水沢市埋蔵文化財調査センターで調査した区域に隣接する。検出された遺構は、縄文時代と思われる土坑2基、時期不明の柱穴状土坑80基、溝状遺構3条、その他、旧河道1カ所である。

<土坑> 調査区北側で2基検出された。平面形はほぼ円形で規模は開口部径134×120cmと82×72cm、深さは25～34cmを測る。検出状況や周囲の出土遺物から縄文時代のものと思われる。

<柱穴状土坑> 調査区北側で80基検出した。規模は径20～40cm、深さ17～40cm前後である。住居の床面となる痕跡も確認されず、配列等からは住居跡の柱穴とは断定できなかった。時期についても不明である。

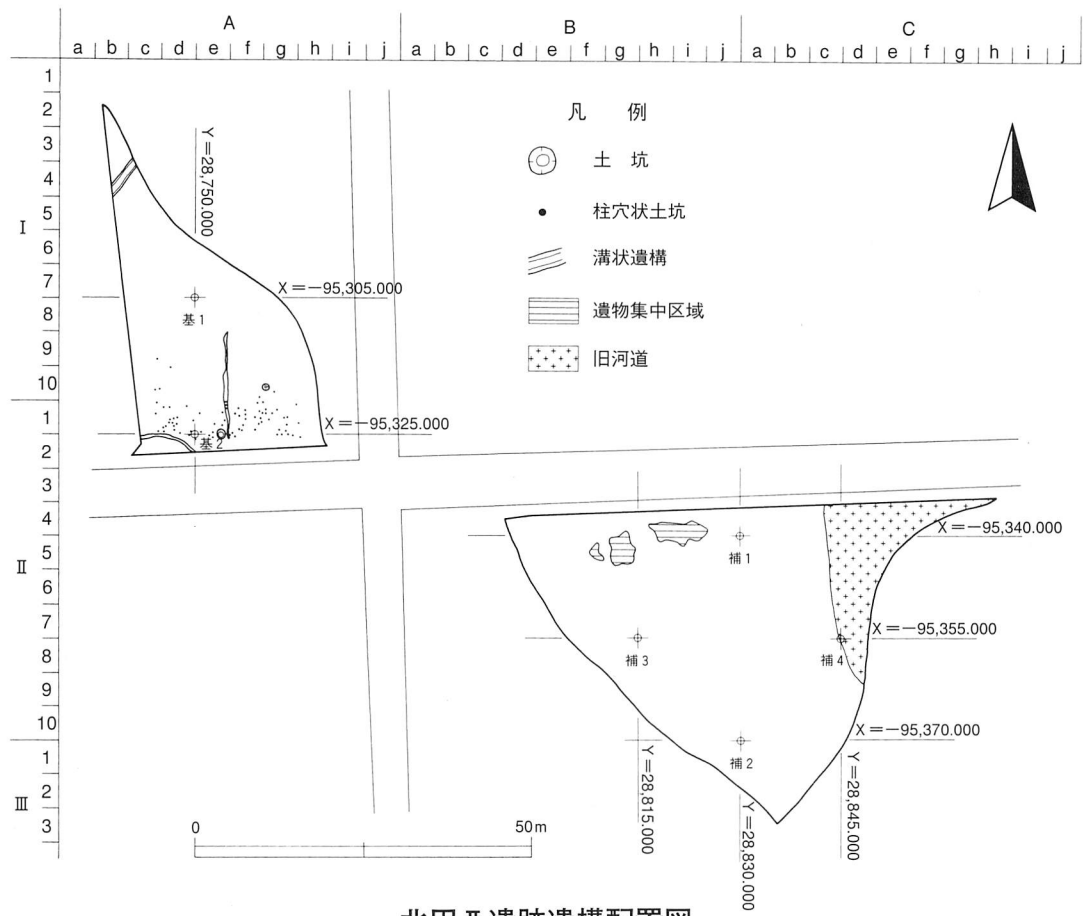
<溝状遺構> 調査区北側で3条検出された。出土遺物もなく遺構の詳細は不明である。

<旧河道> 調査区南側で1ヶ所確認された。隣接する区域では水沢市埋蔵文化財調査センターが旧河道を確認しており、一連のものと思われる。旧河道内からは150cmほどの自然木が発見されたのみである。

<出土遺物> 出土した遺物は大きなコンテナで1.5箱である。その内、土器は1箱で、時期は縄文晩期から弥生初頭が中心である。ほとんどが調査区南側の遺物集中区域とした地点からの出土である。土師器は15点出土している。石器の出土は0.5箱で、石鏃、石錐、磨製石斧、磨石、凹石等がある。

3. まとめ

今回の調査では遺構、遺物とも些少ではあったものの、土坑の検出や遺物の出土などから周辺地域に縄文時代から弥生時代にかけての集落跡の存在が想定される。今後、周辺地域の調査が進むにつれ本遺跡の全容が解明されるものと思われる。



北田 II 遺跡遺構配置図



調査区北側全景 (南から)



1号土坑



柱穴状土坑群



遺物出土状況

北田 II 遺跡検出遺構・出土遺物

(5) 矢崎 I 遺跡第 1 次調査

所在地 西磐井郡平泉町長島字矢崎
126-1 ほか

委託者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所

事業名 一関遊水地内河川工事

発掘調査期間 平成12年 9月1日～11月10日

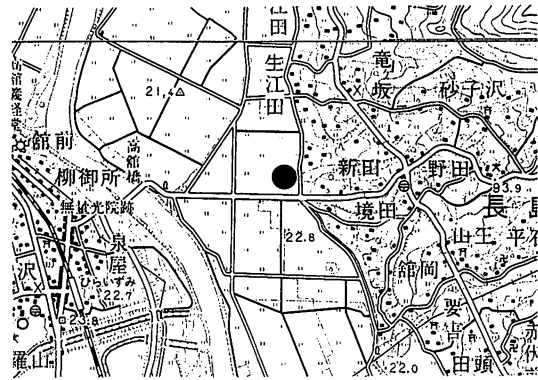
調査対象面積 2,150㎡

発掘調査面積 2,150㎡

遺跡番号・略号 NE76-0283 YZ I-00-1

調査担当者 早坂 悟・安藤由紀夫

協力機関 平泉町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一関

1. 遺跡の立地

矢崎 I 遺跡は J R 東北本線平泉駅から東北東約 2 km に位置し、北上川左岸の沖積地に立地している。遺跡の西側は平坦で水田地帯が広がり、東側は北上山地の山裾にあたりいくつかの支流が北上川に注いでいる。調査前の遺跡の現況は主に畑地及び水田で、遺跡の標高は 23 m 前後である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡 2 棟、竪穴状遺構 1 棟、土坑 5 基、溝跡 1 条、焼土遺構 2 基である。

＜竪穴住居跡＞ 2 棟の住居跡は調査区北側から検出された。うち 1 棟はそのほとんどが削平されてしまっており東壁の一部を確認するに留まった。もう 1 棟の竪穴住居跡の平面形は隅丸長方形で、規模は 5 × 4.2 m である。カマドは東壁のほぼ中央に位置し、また、カマド右脇・南東隅に貯蔵穴と思われる土坑を有している。出土した遺物から本遺構は 9 世紀前半から中頃にかけて存在していたと思われる。

＜竪穴状遺構＞ 調査区のほぼ中央から 1 棟検出された。平面形はほぼ円形で、規模は 3 m 前後である。出土した遺物から縄文時代後・晩期に属すると思われる。

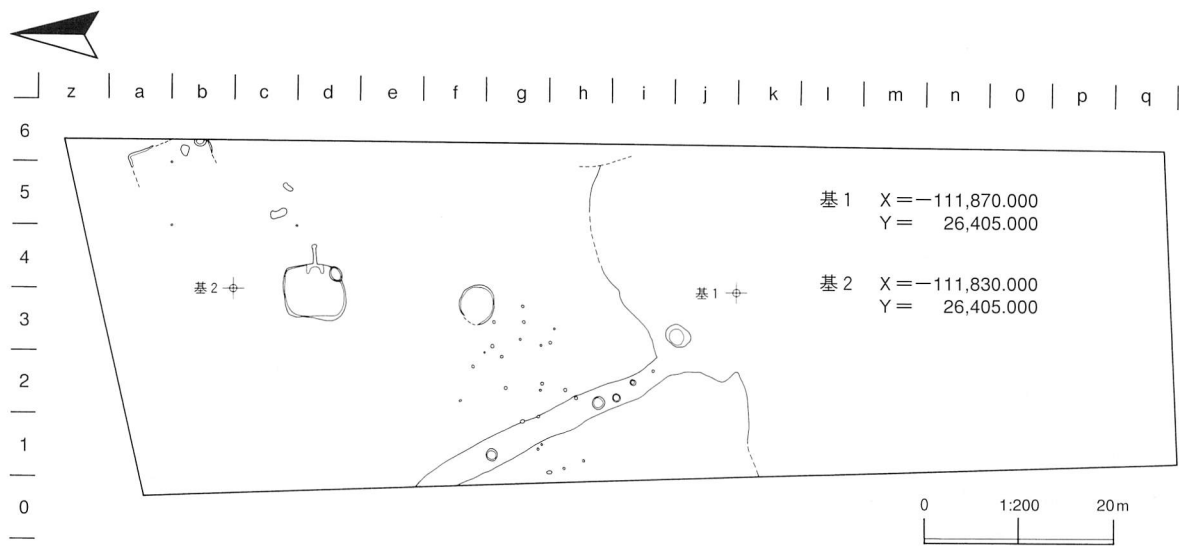
＜土坑＞ 調査区の中央やや西寄りから 5 基検出された。平面形は円形で、詳細な時期は不明である。

＜溝跡＞ 調査区の中央やや西寄りから 1 条検出された。長さ 22 m (さらに調査区外に延びる)、幅 1.3～2.3 m 前後、深さ 0.8～1.1 m 前後で南東から北西方向に延びる。埋土からは土師器片が出土している。

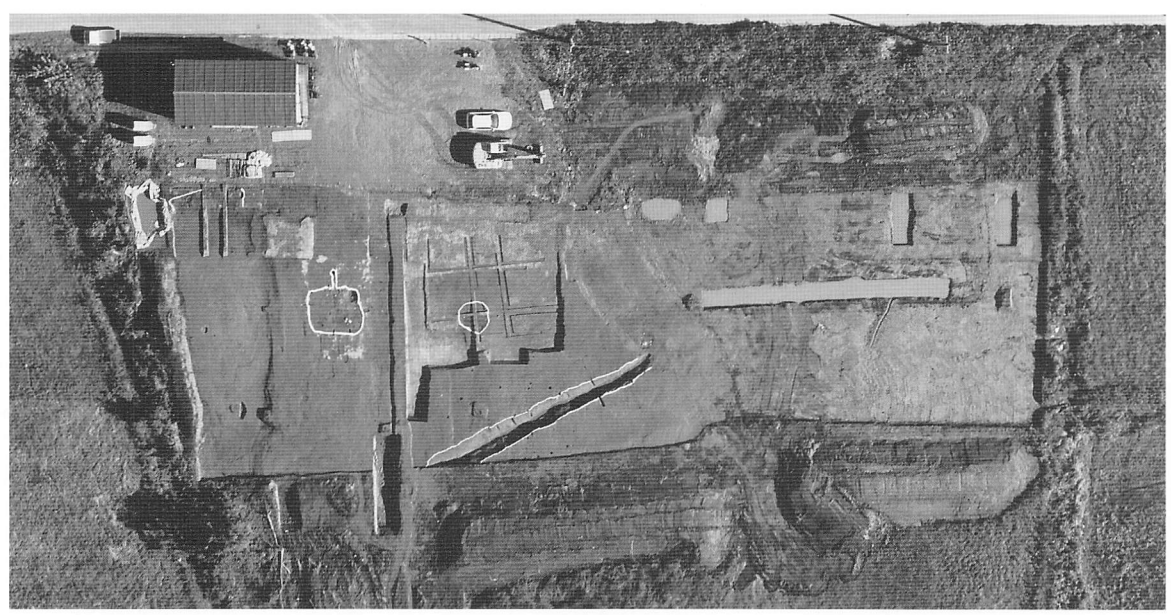
＜焼土遺構＞ 2 基検出された。上部から土師器片が出土している。住居内のカマドの可能性はあるが残存状況が不良であることから焼土遺構として報告する。

＜出土遺物＞ 大コンテナ 2 箱分の土器・土製品が出土している。土器のうちの 9 割が平安時代の土師器で、残りが須恵器と縄文土器である。土師器の器種は、主に坏・甕である。坏は黒色処理されたものの占める割合が多い。土製品は土錘が 8 点、土鈴が 1 点、また、竪穴住居跡から鉄製品 (刀子) が出土している。

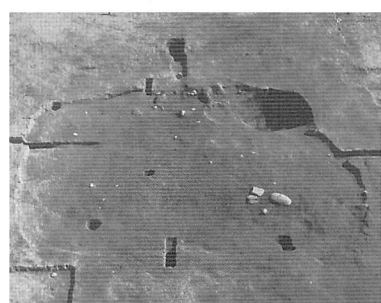
3. まとめ 今回の調査により、矢崎 I 遺跡は縄文時代、平安時代の集落跡であることが明らかになった。今後、隣接する地区の調査により溝跡の性格も含め集落の様相が明らかになるとと思われる。



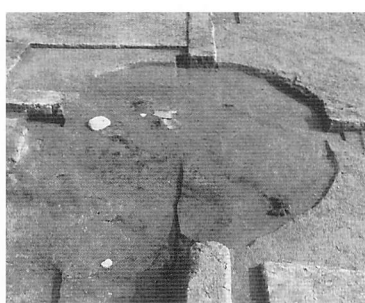
矢崎 I 遺跡第 1 次調査遺構配置図



遺跡全景



平安時代の竪穴住居跡



縄文時代の竪穴状遺構

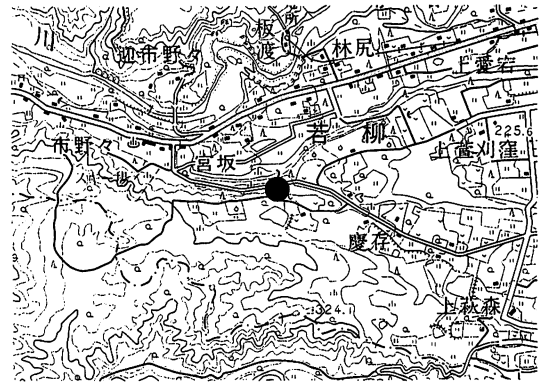


平安時代の溝跡

矢崎 I 遺跡第 1 次調査検出遺構

(6)・(7) ^{おおしみず}大清水・^{おおしみずかみ}大清水上遺跡

所在地 胆沢郡胆沢町若柳字慶存ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局
胆沢ダム工事事務所
事業名 胆沢ダム建設
発掘調査期間 平成12年4月18日～11月22日
調査対象面積 9,120㎡・10,630㎡
発掘調査面積 9,120㎡・10,630㎡
遺跡番号・略号 NE22-2289・OS00
NE22-2286・OSK00
調査担当者 佐藤淳一・鈴木 聡・工藤 徹
齋藤麻紀子・松尾芳幸
協力機関 胆沢町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 焼石岳

1. 遺跡の立地

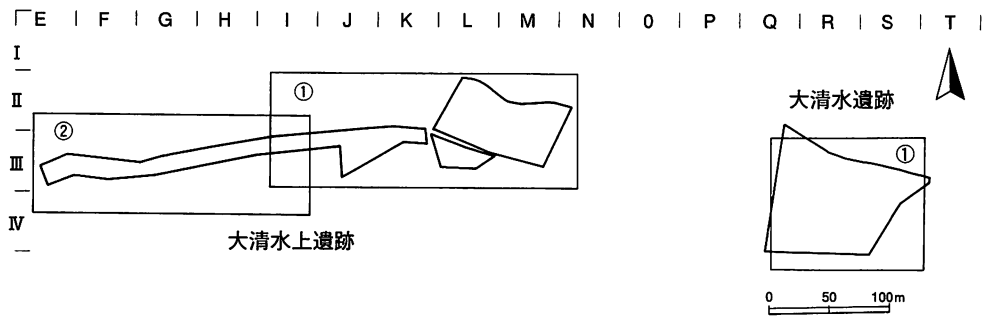
大清水・大清水上遺跡はJR東北本線水沢駅から西へ約20km、胆沢川によって形成された河岸段丘上に位置する。標高は約270～285mで、調査前の状況は使用されなくなって原野化した畑地ならびに水源涵養保安林として植林が行われた林地であった。

2. 調査の概要

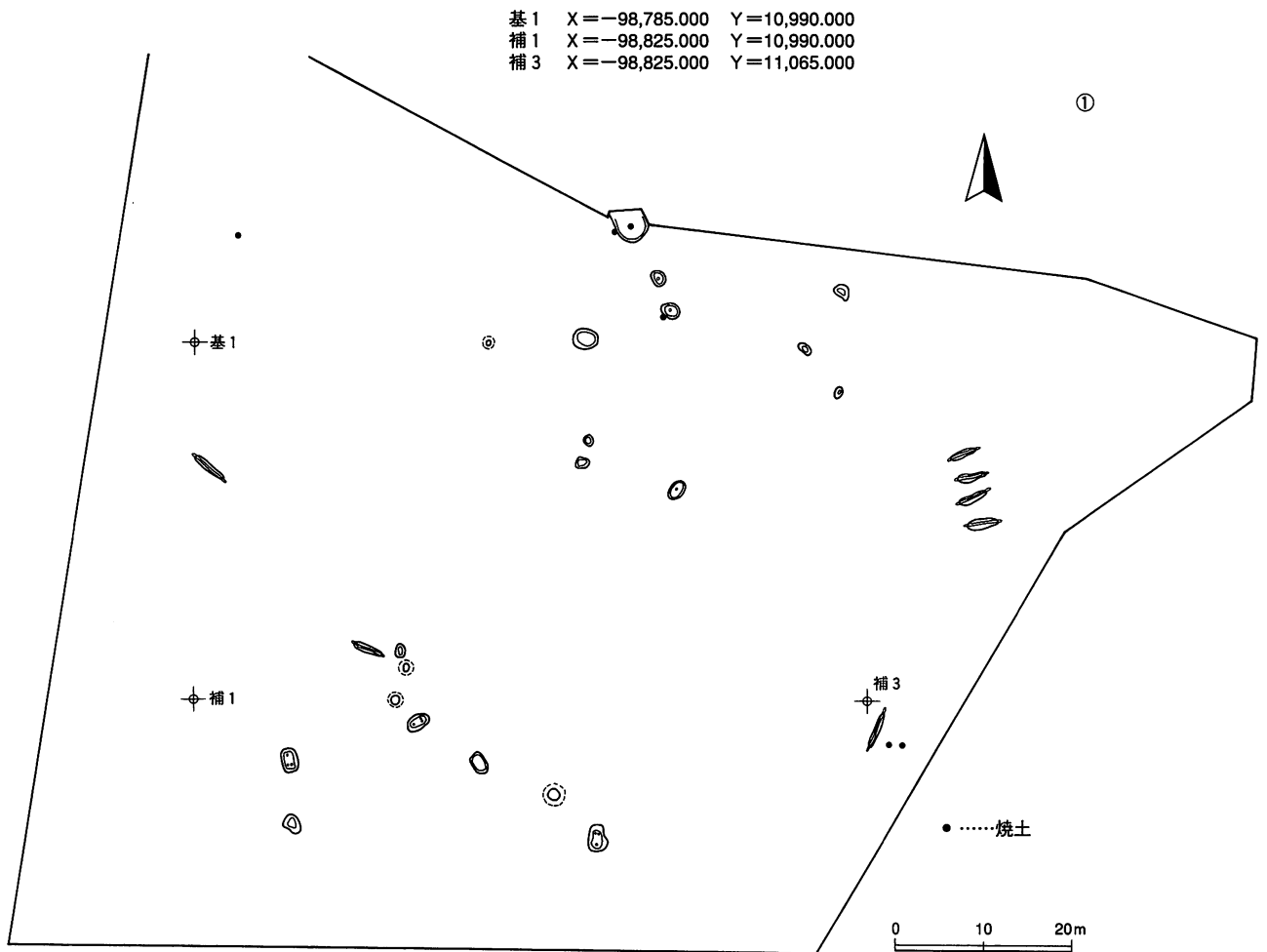
調査区は、最も東側にある大清水遺跡（9,120㎡）とその西側にある大清水上遺跡（10,630㎡）により構成される。検出された遺構は、竪穴住居跡21棟（大清水上）、土坑59基（大清水11+大清水上48）、陥し穴41基（大清水10+大清水上31）、焼土遺構13基（大清水6+大清水上7）、沢跡2カ所、溝跡1条、石器集中部1（いずれも大清水上）などである。

<竪穴住居跡> 大清水上遺跡の東部において集中して検出されている。平面形は長方形ないしは長楕円形を基調とするいわゆる「長方形大形住居（ロングハウス）」であり、規模は大きなもので長軸が20m程度、平均すると13～15m程度である。ほとんどの住居内床面には長軸に沿って地床炉が等間隔で複数配置され、壁際には溝（周溝）がめぐっている。周溝あるいは柱穴の配置、炉の位置などから判断して、これらの大形住居は幾度かにわたって建て替えが行われたと考えられる。住居跡の長軸について見てみると、遺跡中央部付近の南側を中心としてほぼ放射状に展開する様子をうかがうことができ、集落構造を考える上で非常に興味深い。また、規模4～5m程度の円形プランを呈し、炉をもたない住居跡も複数検出されており、これらの住居跡についても一部の大型住居跡と重複する。

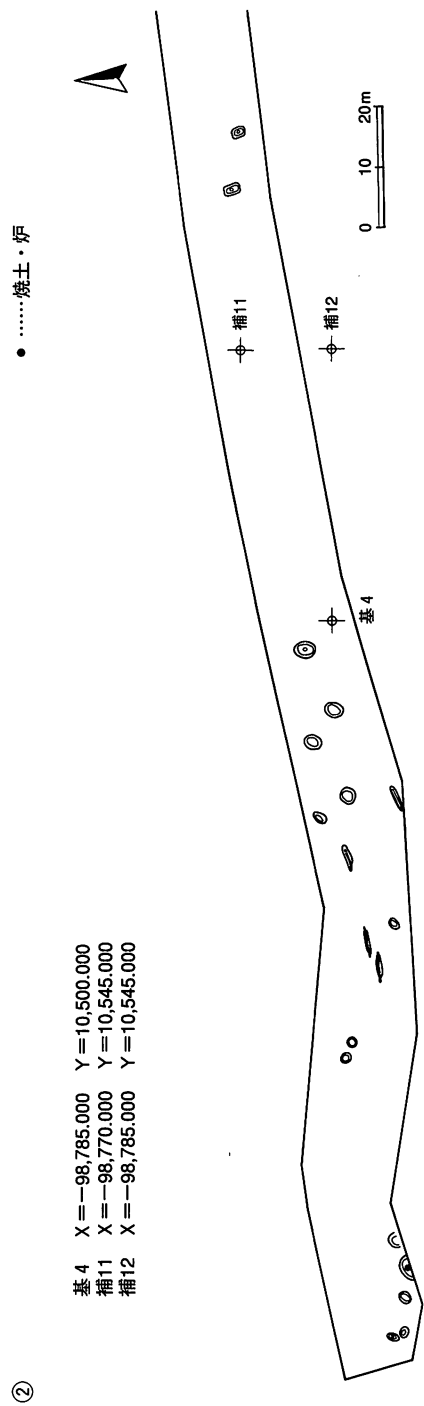
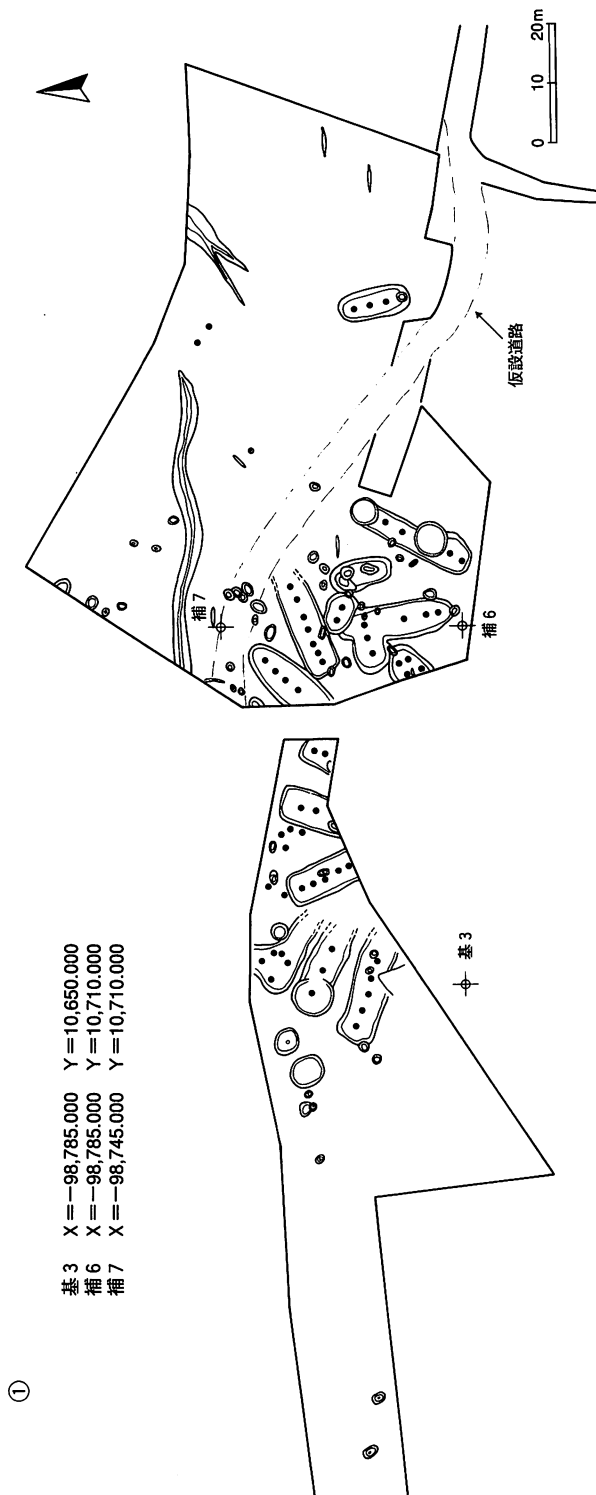
<土坑> 大清水上遺跡における住居跡の集中する区域ならびに大清水遺跡において検出されている。フラスコ状ないしは円筒状の断面をもつ貯蔵穴と思われる土坑のほか、大清水上遺跡では覆土上部から下部にわたり大量の土器片を含む径2m程度、深さ40～60cm程度の規模をもつ「土器廃棄用」とと思われる土坑も3基検出されている。



調査区全体図



大清水遺跡遺構配置図



大清水上遺跡遺構配置図

＜陥し穴＞ 大清水遺跡、大清水上遺跡の西端部を中心として検出されている。平面形は細長い溝状を呈するもの、円形を呈するもの、楕円形を呈するものと多様である。深さは平均すると1.2～1.5m程度であるが、深いものになると2mを超えるものも検出されている。陥し穴の底面には逆茂木をさしたと思われる小穴が認められ、底面中央に1ヶ所のみ見られるもののほか壁際に近いところに複数見られるもの、規則正しく6ヶ所に配置しているものなどがある。大清水遺跡では溝状の陥し穴が尾根筋から谷に向かって4基連続して検出されている。

＜焼土遺構＞ 13基検出されている。大清水遺跡では谷状をなす地形の谷頭部にて検出された土坑の覆土最上部から、比較的規模の大きな焼土が検出された。同様に大清水上遺跡でも谷頭部付近で焼土を検出した。いずれも遺物を伴わないため時期は不明である。また、大清水上遺跡で検出された別の焼土群の周囲には、隣接して複数の竪穴住居跡が密集しており、出土遺物等から判断して竪穴住居跡と時期を同じにするものと考えられる。これらは上層の攪乱により、竪穴住居跡の壁が削平された結果残ったものの可能性もある。

＜石器集中部＞ 大清水上遺跡中央部北端付近にて検出された。地山直上にて剥片石器の製品・半製品を中心とする約100点余りが折り重なるようにして出土した。石器の製作・保管場所であったと推測されるが掘り込み等は確認していない。

＜沢跡・溝跡＞ 溝跡は調査区の境界付近で検出されており、小規模で竪穴住居跡の壁溝をなす可能性もある。沢跡の断面については、自然堆積ではなく開墾時に受けたと思われる攪乱層がその中心をなしており、時期はかなり新しいと推測される。

＜出土遺物＞ 大コンテナ換算で土器は計55箱（大清水2、大清水上53）、石器は計45箱（大清水5、大清水上40）、その他（土製品、石製品等）計2箱の出土である。土器は大清水遺跡において遺構外から、縄文時代前期末大木6式や中期後半大木8b～9式のほか、晩期大洞C2式～A'式と思われるものが出土している。一方、大清水上遺跡の中央部付近においては、円盤状、円筒状あるいは鋸歯状の装飾体を口縁部にもち、波状の貼付け文や電光状の沈線文が施される特徴をもつ縄文時代前期後葉大木5式や、球胴型の器形に波状口縁をもつ大木6式と思われるものなどが出土している。石器に関しては磨石、凹石、石皿、石錘などの礫石器が計750点（大清水85、大清水上665）、剥片石器では、定形・不定形の製品が計1800点余り出土し、そのほかにフレイクが大コンテナ換算で計3箱出土している。土製品については有孔土製品（土玉）130点、耳栓3点、ミニチュア土器5点のほか土偶の一部と思われる破片が出土している（いずれも大清水上）。このうち土玉と耳栓については207号住居跡南端の一ヶ所からまとまって出土しており、このような事例は当該期ならびに出土遺構からして極めて珍しいといえる。また、石製品では石棒、磨製石斧、石剣など計50点のほか、けつ状耳飾りの欠損品が3点（大清水上）出土している。

3. まとめ

今回の調査で出土した遺物から判断して、大清水遺跡は縄文時代中期～晩期ごろの狩場であった可能性が高い。しかしながら、陥し穴の覆土から出土した遺物はわずかで、時期も不明であることから陥し穴の構築された時期を特定することは困難である。

一方、大清水上遺跡では縄文時代前期後葉に相当する大木5～6式の土器片が大量に出土しており、その他の時期に該当する遺物が見あたらないことから、ほぼ当該時期に限定される大規模な集落跡であると考えられる。特徴としては集落を構成する住居のほとんどがいわゆる「長方形大形住居（ロングハウス）」であることがあげられる。このような遺構は昭和47年に富山県不動堂遺跡においてはじめて発掘調査されて以来、現在までに東日本を中心として多数の事例が報告されている。そしてこれらは従来、住居跡というよりは雪

深い地方における冬場の共同作業場ないしは集会所的な機能を持ったものという解釈がなされてきた。ところが、近年になって雪国において大形住居の分布が卓越するのは縄文時代中期中葉から後葉の時期に限られた現象であり、雪国以外でも大形住居の分布事例が確認されるようになってきていることや、大形住居だけで集落が構成される遺跡も明らかになってきたことなどから、前述のような機能や用途ばかりではない複合居住家屋であるという考え方が趨勢となりつつある。従って今回の調査結果は、こうした考古学上の未解決な部分を解明していくため、あるいは当該時期の遺構や遺物、集落構造などについて考える上で貴重な資料と成り得るものと思われる。

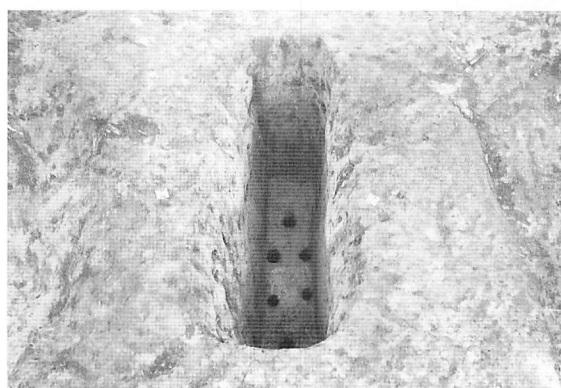
大清水上遺跡については、次年度以降も調査が継続される予定となっており、集落の全体構造の解明が期待される。



調査区近景（大清水上）



調査区近景（大清水）

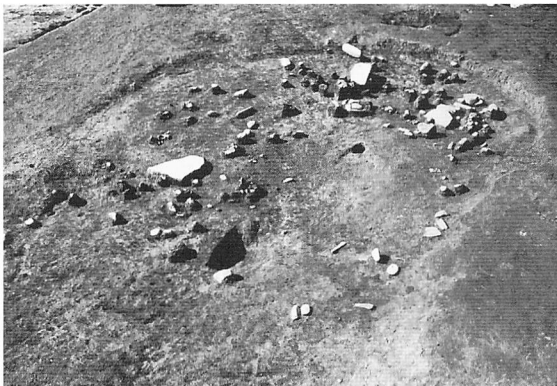


陷し穴（大清水上）

大清水・大清水上遺跡検出遺構 1



住居跡群（大清水上）



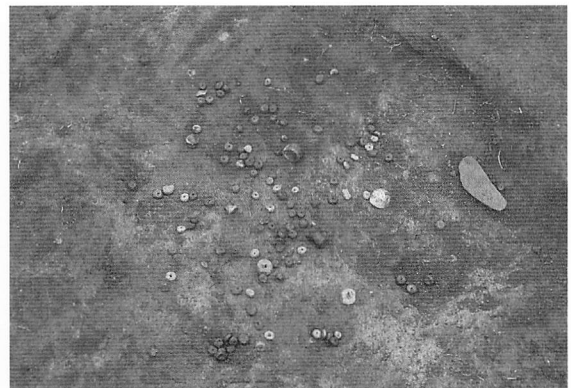
住居内遺物出土状況（大清水上）



土坑内遺物出土状況（大清水上）



石器集中部出土状況（大清水上）

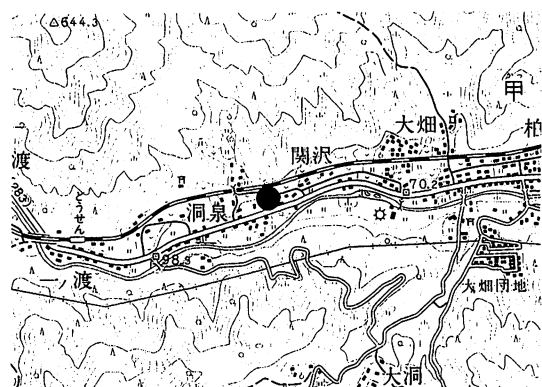


土玉出土状況（大清水上）

大清水・大清水上遺跡検出遺構 2

(8) 古館遺跡

所在地 釜石市甲子町第7地割29—2
委託者 国土交通省東北地方整備局
三陸国道工事事務所
事業名 仙人峠道路工事
発掘調査期間 平成12年4月12日～5月31日
調査対象面積 2,880m²
発掘調査面積 2,880m²
遺跡番号・略号 MG70—1175・FD—00
調査担当者 早坂 悟・岩淵 計
協力機関 釜石市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 釜石

1. 遺跡の立地

古館遺跡は、JR釜石線洞泉駅の東約1.5km、国道283号線沿いに位置し、甲子川左岸の河岸段丘状の緩斜面に立地している。付近は、北側の山地を水源とした小河川より流入したと思われる小礫や褐色の砂質シルト土が堆積を繰り返す形で地形が形成されている。遺跡の標高は94mで、調査前の現況は宅地及び畑地である。

2. 調査の概要

調査区の西側は戦後の水田造成のため傾斜地を削平及び盛土により平坦地へと改変している。この地区からは遺構は検出されなかった。調査区の中央部から東側にかけて掘立柱建物跡4棟、土坑が2基、近世の墓坑14基、柱穴状ピットが30基前後検出された。

<掘立柱建物跡> 調査区中央から縄文時代のものが2棟（一部昨年度調査区内に入る）、調査区東側から近世に属すると思われるものが2棟検出された。縄文時代のものはいずれも6本柱の建物と思われる。

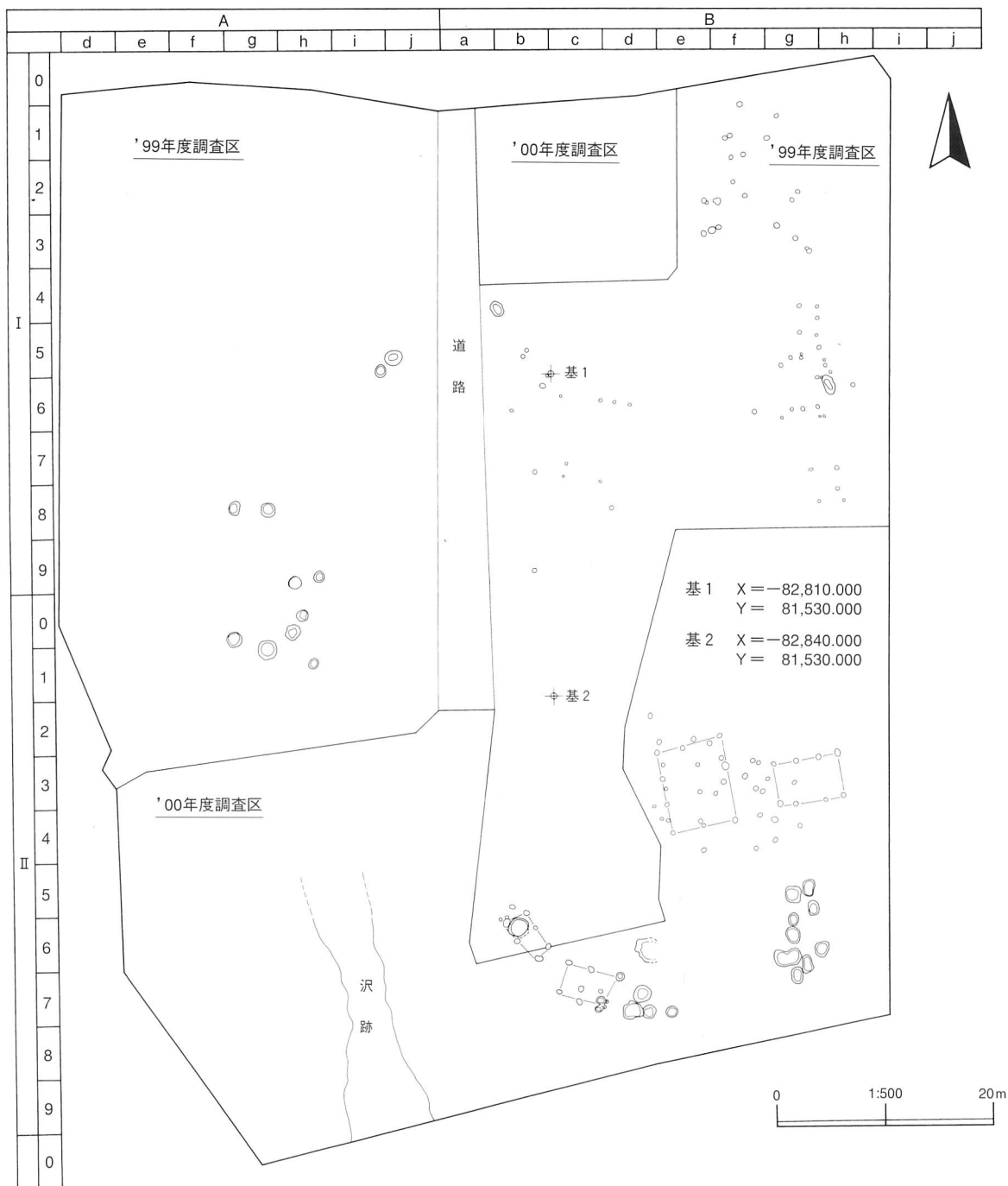
<土坑> 調査区中央から2基検出した。平面形は楕円形及び円形である。両土坑共に出土遺物から縄文時代後期から晩期に属すると思われる。

<墓坑> 調査区東側から人骨及び寛永通宝を伴う墓坑が14基検出された。近世以降に属すると思われる。

<柱穴状ピット> 掘立柱建物跡の周辺から計32基検出された。開口部はそのほとんどが円形を呈する。同遺構に伴うかどうかは不明である。

<出土遺物> 表土からはほとんど遺物が出土せず、検出面まで掘り下げて出土し始めている。出土量は少なく、土器が中のコンテナ1箱程度である。時期は縄文時代後期初頭～前葉と晩期前葉に属する。また、粗製土器がほとんどで遺構外から出土したものが多。この他、墓坑から古銭12枚、和鏡、陶磁器2点出土した。

3. まとめ 昨年度及び今年度の調査により、縄文時代及び近世の掘立柱建物跡、土坑を確認することができた。特に、縄文時代に属する遺構が沢跡の周辺にあることから、集落は形成しなかったものの、少なからず生活を成り立たせていく上でこの土地を利用していたことが窺える。



古館遺跡遺構配置図



調査区全景 (北から)



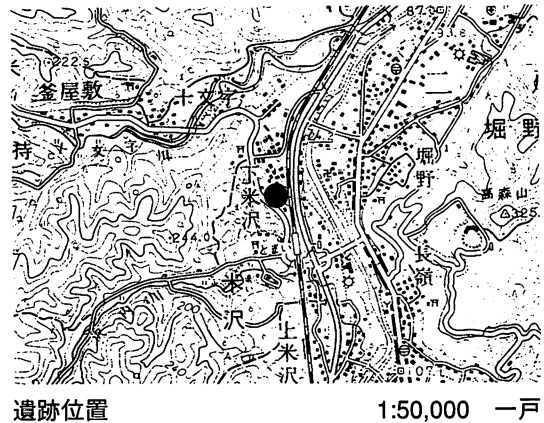
近世墓坑

古館遺跡検出遺構

Ⅱ. 公団・公社関係

(9) 上村遺跡

所在地 二戸市米沢字上村138
委託者 日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名 東北新幹線盛岡八戸間建設工事
発掘調査期間 平成12年8月1日～8月10日
調査対象面積 286㎡
発掘調査面積 286㎡
遺跡番号・略号 IE99-2391・UM-00
調査担当者 前田 稔・星 雅之・戸根貴之他
協力機関 岩手県教育委員会・
二戸市教育委員会



1. 遺跡の立地

上村遺跡は、JR東北本線斗米駅の南方約0.8kmに位置している。遺跡は馬淵川の西岸に形成された河岸段丘上に立地し、標高は約115mである。現況は新幹線建設工事に伴う仮設水路が設けられていた区域であるが、以前は果樹園として利用されていた。本調査区は、平成9年度調査区の西側に、平成11年度調査区の南側に隣接している。

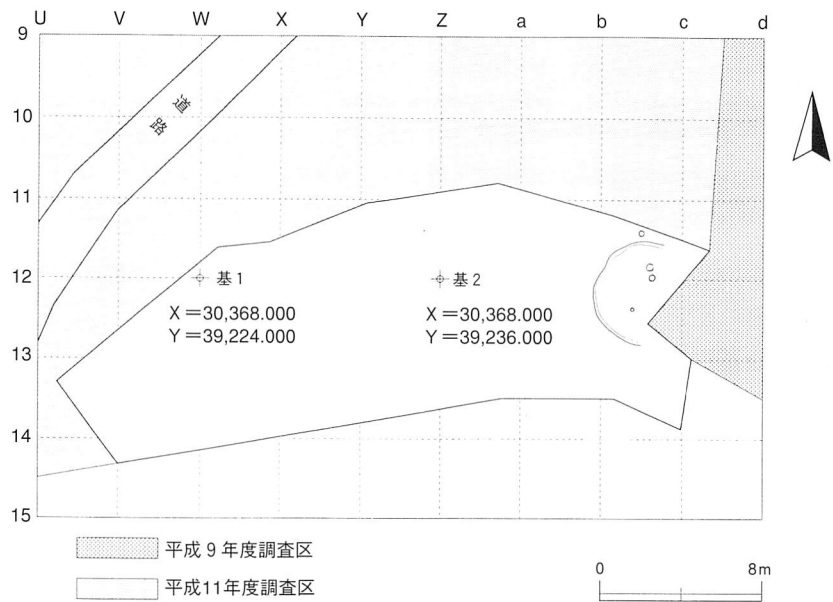
2. 調査の概要

今回の調査では、縄文時代後期中葉の竪穴住居跡1棟と、縄文時代前期～晩期の遺物を包含する遺物集中区（遺物包含層分布範囲）1カ所を検出した。竪穴住居跡は調査区東端部で検出され、住居の東部は調査区外へ延びる。規模5m程の円形を呈するものと思われ、竪穴中央付近に地床炉をもつ。遺物集中区は調査区南東端部分で確認され、層厚30～40cmの遺物包含層の堆積である。

出土した遺物は、土器が大コンテナ1/2箱、石器12点、石製品1点である。出土した土器は全て縄文時代のもので、前期～晩期まで、広範囲にわたっている。竪穴住居跡からは後期中葉の鉢および鉢のミニチュア土器の完形が出土した。石器は、敲磨器、削器、石錘等が出土している。その他円盤状石製品1点が出土した。

3. まとめ

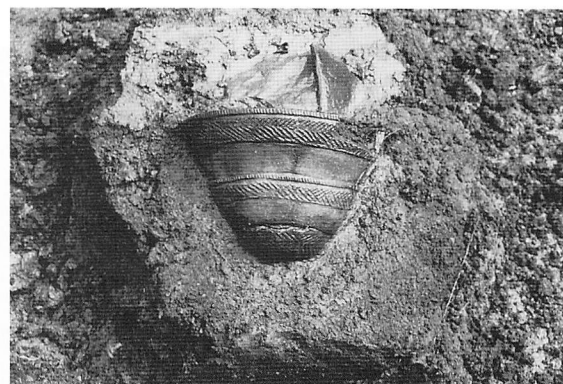
平成9年度調査成果から、縄文時代の集落はかなりの密度で東側に広がるものと推定されたが、西側は不明瞭であった。今回竪穴住居跡を検出したことにより、本遺跡の集落域西端が確認されたといえる。また今回の調査から、本遺跡では、遺物の捨て場が集落域より上方（標高が高い）に位置するといった特徴がみられる。一部の類例を除いて縄文遺跡では集落の下方側に捨て場が形成されるのが通例であるため、推測の域は越えないものの、本調査区南側あるいは南西側の段丘上に集落が存在し、それに伴う捨て場の土砂流出によって本調査区に遺物が溜まった可能性もある。



上村遺跡遺構配置図



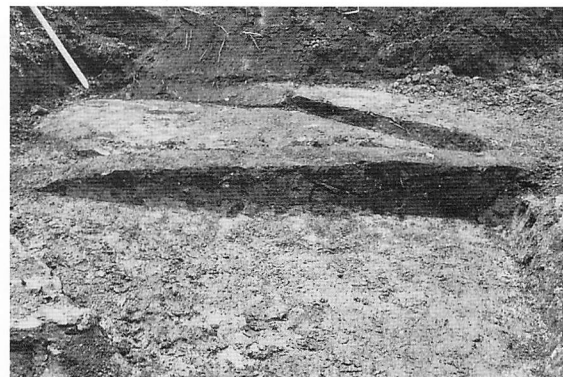
遺物出土状況



土器出土状況



竪穴住居跡



竪穴住居跡埋土断面

上村遺跡検出遺構・出土遺物

(10) 米 沢 遺 跡

所在地	二戸市米沢字長瀬24-2ほか
委託者	日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名	東北新幹線盛岡八戸間建設工事
発掘調査期間	平成12年4月11日～6月2日
調査対象面積	1,069㎡
発掘調査面積	1,069㎡
遺跡番号・略号	I E99-0390・MZ-00
調査担当者	工藤 徹・齋藤麻紀子
協力機関	二戸市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 一戸

1. 遺跡の立地

米沢遺跡はJR東北本線斗米駅の北約300m地点に位置する。市内を北流する馬淵川左岸に形成された河岸段丘上（米沢段丘）に立地し、遺跡の標高は105m前後である。東方約300mの馬淵川との比高は約25mを測る。遺跡の現況は、宅地・道路である。遺跡の周辺には長瀬遺跡群、沢内B遺跡等がある。

2. 調査の概要

本遺跡の調査は平成10年度から行われ、今回が3年目にあたる。今年度の調査区は昨年度縄文早期及び古代の遺構・遺物が多く確認された区域と接する。検出された遺構は、古代の竪穴住居跡7棟、縄文時代の陥し穴状遺構1基、土坑4基、焼土遺構6基、溝状遺構3条（縄文1、古代2）、柱穴状土坑3基である。

＜竪穴住居跡＞ 検出された古代の住居跡7棟のうち2棟は平成11年度の調査時に精査途中となっていたものである。時期は奈良時代が4棟、平安時代が3棟と思われる。住居跡の規模は一辺2.5～5.2m、壁高が40～70cm、平面形は隅丸方形を呈する。カマドの設置される方向は北西・北東壁のいずれかである。

＜陥し穴状遺構＞ 1基検出した。溝状を呈し、規模は290×40cm、深さ164cmを測る。

＜土坑＞ 4基検出された。1基は前期、3基は早期と推定される。形状は楕円形である。

＜柱穴状土坑＞ 近接した地点で3基検出したが、住居跡の柱穴とは断定できず、詳細は不明である。

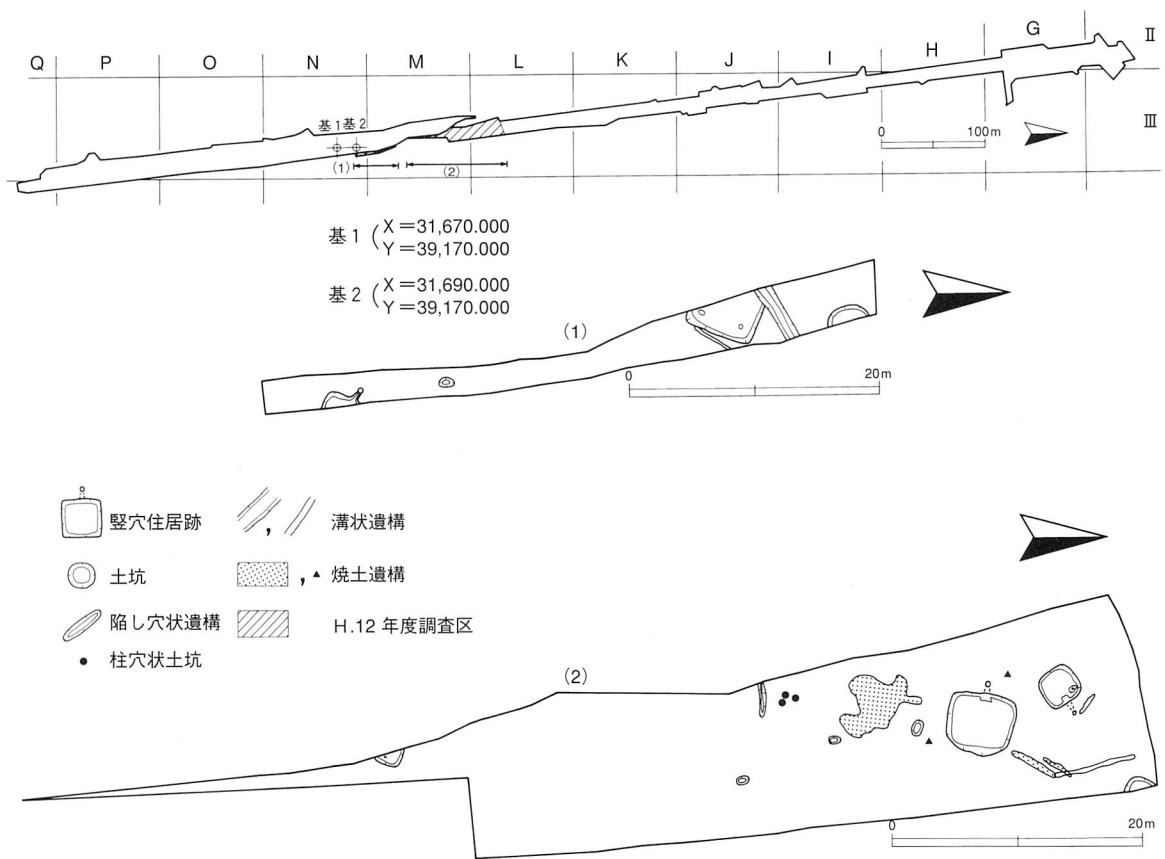
＜焼土遺構＞ 6基検出した。この内5基は縄文早期と思われる。形状・規模は一様ではない。

＜溝状遺構＞ 3条検出した。その内2条は埋土や周囲の遺物出土状況から判断し古代の遺構と推定される。

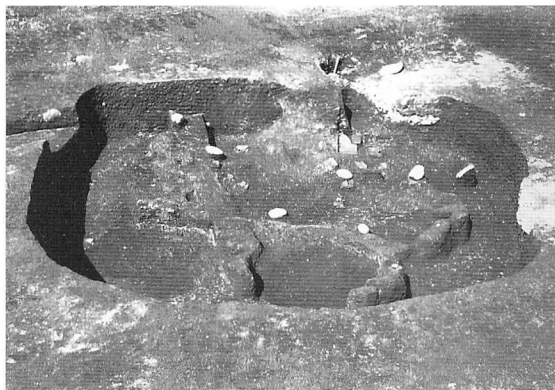
＜出土遺物＞ 出土した遺物は縄文土器が4.5箱で、時期は早期から前期が中心である。8世紀前半から10世紀初頭と思われる土師器は2箱出土した。石器は0.5箱で、石鏃・石匙・削搔器類・磨製石斧等がある。その他、土製品として紡錘車2点が住居内から出土している。

3. まとめ

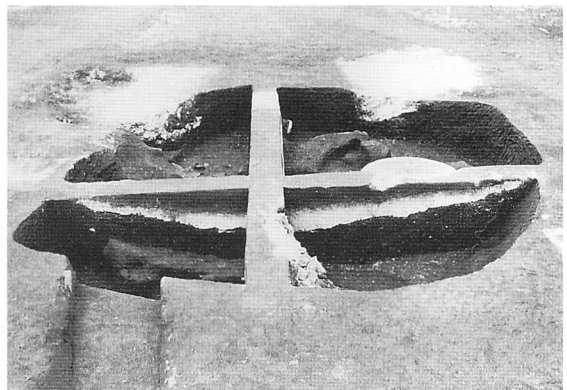
3カ年にわたる調査により本遺跡が縄文時代の集落跡・狩り場、奈良・平安時代の集落跡であることが判明した。今後さらに詳細な分析・考察を進め、特に隣接する長瀬遺跡群との関連から本遺跡の性格・内容を明らかにしていきたいと思う。



米沢遺跡遺構配置図



21号竪穴住居跡（奈良）



21号竪穴住居跡埋土状況（T o - a 含む）



21号竪穴住居跡遺物出土状況

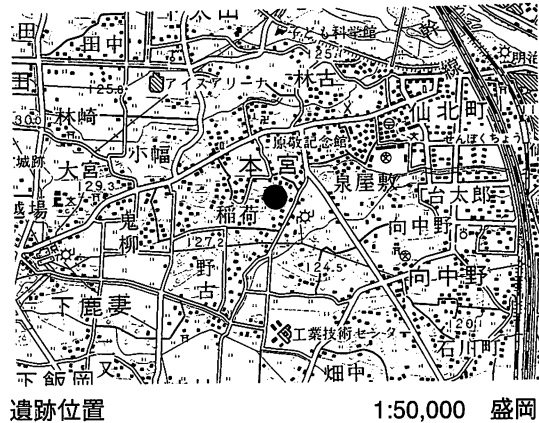


土器出土状況（縄文早期）

米沢遺跡検出遺構・出土遺物

(11) 熊堂^{くまどう}B遺跡第10次調査

所在地 盛岡市本宮字稲荷1ほか
委託者 地域振興整備公団
岩手総合開発事務所
事業名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成12年4月14日～6月16日
調査対象面積 3,235㎡
調査終了面積 3,235㎡
遺跡番号・略号 LE16-2118・OKO -00-10
調査担当者 千葉正彦・中田 迪
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

熊堂B遺跡は、JR東北本線仙北町駅の西約1.5km、雫石川右岸の微高地上に所在しており、北緯39度40分52秒、東経141度8分付近に位置する。今次調査区は、東西を第1次調査区に挟まれた東西約27m・南北約125mの細長い台形状の範囲で、南西端部では今次調査と並行して行われた第9次調査区と隣接している。調査区の標高は約124m、雫石川との比高は約6m、現況は水田である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡4棟、住居状遺構1棟、土坑8基、陥し穴状遺構1、溝跡4条、溝状遺構2条である。遺物は、縄文土器・土師器・須恵器・石器・土製品がT-40規格コンテナで約4箱分出土した。

なお、調査区南半部で時期不明(近現代か)の柱穴状ピット群が検出されているが、文章記載・図化ともに割愛した。

<竪穴住居跡> 調査区北半部で古代の住居跡4棟を検出した(RA04・25～27; RA04は第1次調査で東半分が調査されている)。規模・床面積で見ると、床面積約50㎡のRA27、約25㎡のRA04・25(RA04は第1次調査と合算)、約11㎡のRA27に分類できる。カマドはいずれも北西壁の中央付近に構築され、煙道部の構築方法は、地下式1(刳り貫き式; RA26)、半地下式3(掘り込み式; RA04・25・27)である。これらの竪穴住居群は、カマドの方向および出土遺物等から考えると4棟ともに奈良時代のものと思われる。但し、RA26・27は覆土最上位が再堆積と思われるIV層土で被覆され、さらにRA26の覆土上位に十和田a降下火山灰(To-a)と思われる火山灰微小ブロックが疎らに含まれていること、およびRA26の覆土上～中位に「あかやき土器」が包含されることから、これらの4棟は若干の時期差をもって存在した可能性も考えられる。

<住居状遺構> 調査区北東部で1棟を検出した(RE09)。RD68と重複し、RD68を地山土で被覆して床面としている。覆土から出土した土師器片から、奈良時代に属するものと推定される。

<土坑> 調査区北半部で9基検出した。一部、柱穴状の小規模なものを含めている。うち奈良時代に属するものは2基のみで、その他は伴出遺物を欠いており具体的な時期は不明である。平面形は、円形、楕円形、小判形、不整形等があり、斉一性を欠く。調査区中央付近に位置する楕円形のRD67からは、投げ捨てられ

たような状態で土師器片約5kg・勾玉1点・紡錘車1点が出土しており、他の土坑とは様相を異にする。

<陥し穴状遺構> 調査区北半部で1基検出した(RD61)。平面形が溝状、縦断面形が箱状の土坑である。遺物は出土していないが、形状から縄文時代(中期以降)の陥し穴状遺構と推定される。

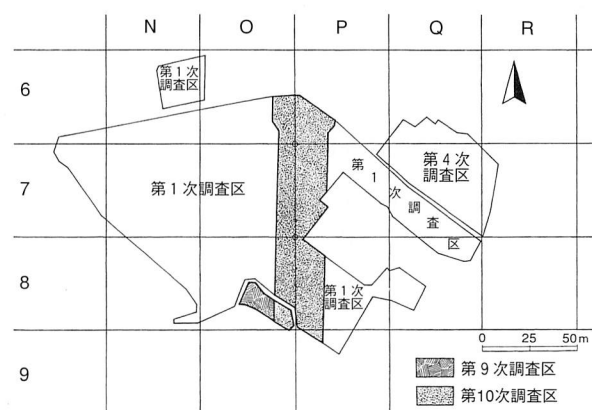
<溝跡> 調査区北半部で4条を検出した。RG83は、覆土上面にTo-aと思われる灰白色火山灰ブロックが混入し、底面付近でロクロ整形された土師器片が出土しており、平安時代の溝であると推定される。その他の溝跡からは遺物が出土しておらず、時期の詳細は不明であるが、RG83との載り合い関係から平安時代以降の溝である。なお、他に5条の溝跡を検出しているが、覆土の様相や配置から現代の水田に伴う畦畔の痕跡と判断し、遺構登録を抹消している。

<溝状遺構> 調査区北西部で2条検出した(RZ09・10)。いずれも短小で狭い小規模なもので、溝跡とは認定できない溝状の小土坑である。遺物は出土しておらず、時期・用途ともに不明である。

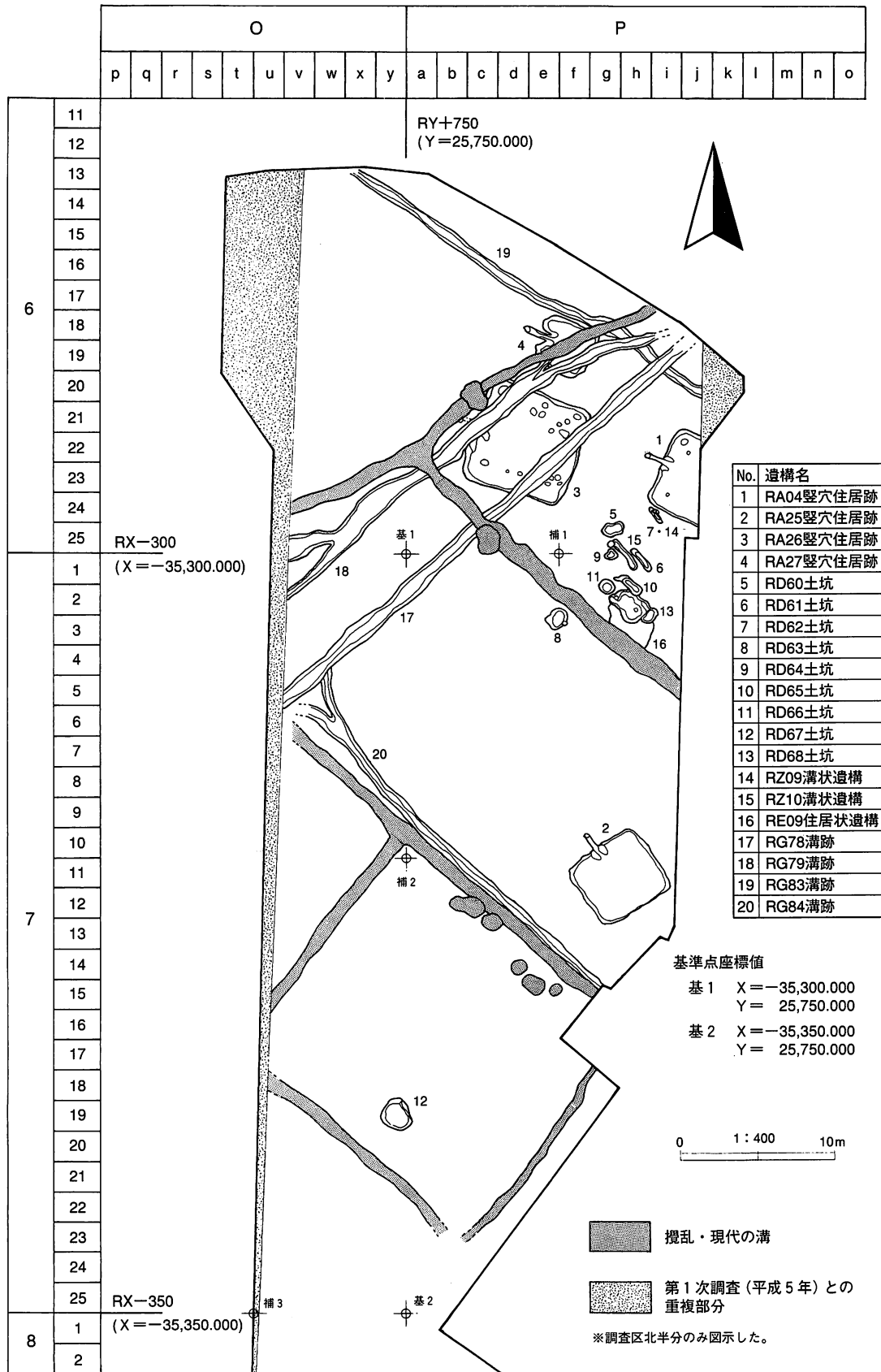
<出土遺物> 出土遺物の総量はT-40規格のコンテナで約4箱分である。遺物の内訳概数は土器約40kg分、土製品2点、石器2点である。土器は、縄文土器・土師器・須恵器が出土している。主体を占めるのは、非ロクロ成形された奈良時代の土師器である。器種は甕・鉢(少量)・坏・高台付坏(1点のみ)が見られる。うち、甕では、頸部に段があるものが一定量あり、器面調整は刷毛目が多用されている。頸部に沈線を持つものは見られない。一方、ロクロ成形された土師器はRG83および遺構外からごく少量出土したのみである。須恵器は破片数点が出土したが、復原できるものはなかった。また、縄文土器は遺構外から粗製の深鉢胴部破片が出土しており、晩期に属するものと思われるが、出土点数は僅かであり詳細不明である。土製品は古代のもので、RD67から出土した勾玉(完形)1点・紡錘車(1/2欠損)1点である。石器は、磨石と剝片(または削器か)が遺構外で1点ずつ出土した。

3. まとめ

今次調査では、古代に属すると推定される遺構は、調査区北半部では竪穴住居跡・土坑・溝等が検出されているが、南半部においては確認されていない。今次調査と並行して行われた第9次調査区(80グリッド南側)では遺構は確認されず、調査区全体が旧河道であることが判明した。平成5年に実施された第1次調査でも、やはり現用水路側では遺構は検出されておらず、今次と第1次調査の成果とが符合するところである。さらに、今次調査検出の古代に属する遺構は、奈良時代と平安時代の2時期に分類可能である。奈良時代では、住居跡等の遺構が検出されており、今次調査区北半部が奈良時代の集落範囲の一部であることが判明した。奈良時代の集落は今次調査区北半部を含め、主に調査区の東側～北側へと展開していると推測される。一方、確実に平安時代と思われる遺構は溝のみであり、第1・4次調査の成果に鑑みて該期の集落の主体は調査区の東～北東側にあることが窺われる。以上より、1・4次調査と今次調査を踏まえると、本遺跡の古代集落の南限は、7O-7P-8Qグリッド付近であると思われ、さらに時期別の占地に違いが認められる。但し、その詳細については今後の検討課題である。



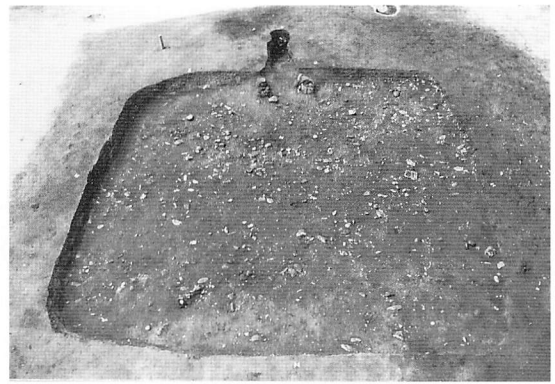
グリッド配置および調査範囲



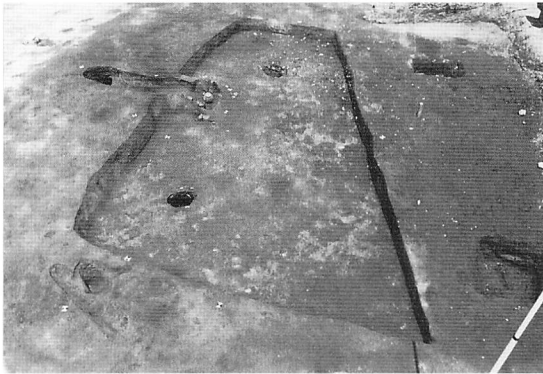
熊堂B遺跡第10次調査遺構配置図



調査区北半部近景（西から）



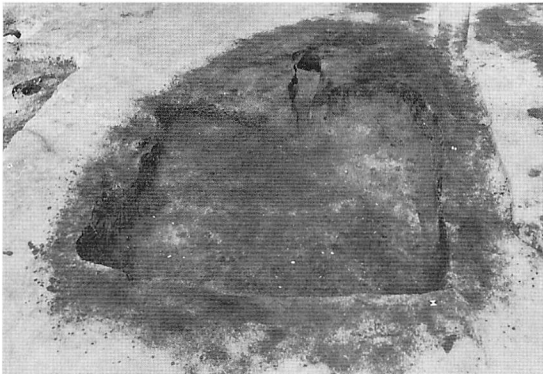
「中形」のRA25竪穴住居跡



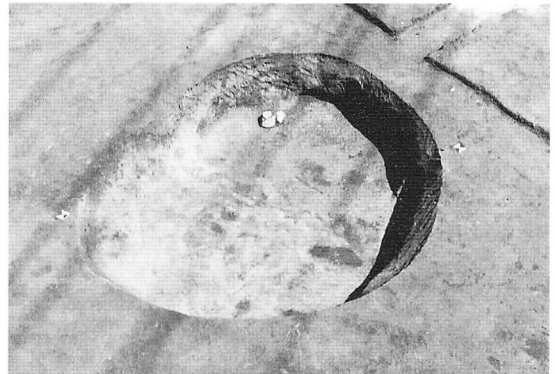
「中形」のRA04竪穴住居跡



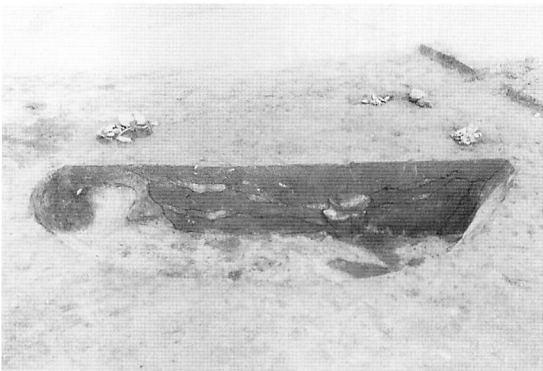
「大形」のRA27竪穴住居跡



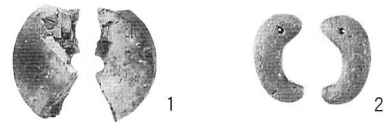
「小形」のRA26竪穴住居跡



多量の遺物が出土したRD67土坑



RD67土坑の覆土断面



1. 紡錘車
2. 勾玉

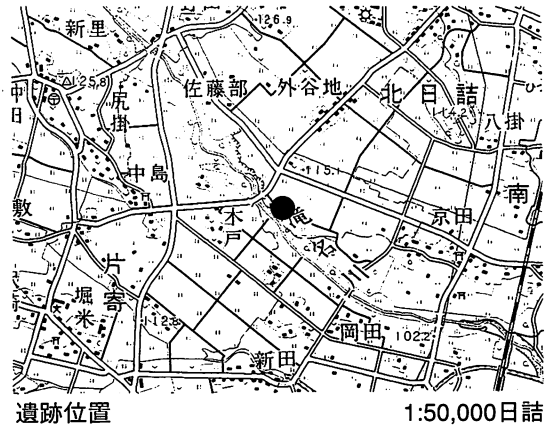
RD67土坑から出土した土製品

熊堂B遺跡第10次調査検出遺構・出土遺物

Ⅲ. 岩手県・市関係

(12) 金館跡

所在地 紫波郡紫波町南日詰字梅田 2-1
ほか
委託者 盛岡地方振興局土木部
事業名 一級河川滝名川基幹河川改修事業
発掘調査期間 平成12年10月2日～11月7日
調査対象面積 2,300㎡
発掘調査面積 2,300㎡
遺跡番号・略号 L E76-1235・KD-00
調査担当者 岩淵 計・吉田真由美
協力機関 紫波町教育委員会



1. 遺跡の立地

金館跡はJR東北本線日詰駅から南西に約2kmに位置し、滝名川北岸の自然堤防状の微高地に立地している。遺跡の標高は107～112m、滝名川との比高は6m前後で、調査前の状況は果樹園及び畑地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、堀跡1条、曲輪1カ所、掘立柱建物跡1棟、土坑13基、溝跡2条、焼土遺構8基、陥し穴状遺構2基、柱穴列2列、柱穴状小土坑37基である。

<堀跡> 曲輪と考えられる平坦な部分の南東部から、完全に埋没した状況で空堀1条を検出した。規模は上幅が11m前後、深さが最深部で約2.2mで、ほぼ東西方向に延びている。堀の南側の約4分の3は、礫層を掘り込み、壁と底を粘土によって貼っていたものと考えられる。

<掘立柱建物跡> 曲輪中央部の西端から1棟検出した。柱穴6基で構成される1間×2間の建物で、西側と南側の柱列はともに総長4.5m(15尺)である。槽である可能性も考えられる。

<土坑> 13基検出したが、遺物が少なく時代が不明なものほとんどである。

<溝跡> 1条は削平を受け先端部のみの検出であるが、ともに北東から南西方向へ延びる。

<焼土遺構> 8基検出したが、現地性のものは4基である。2基から土師器、須恵器片が出土している。

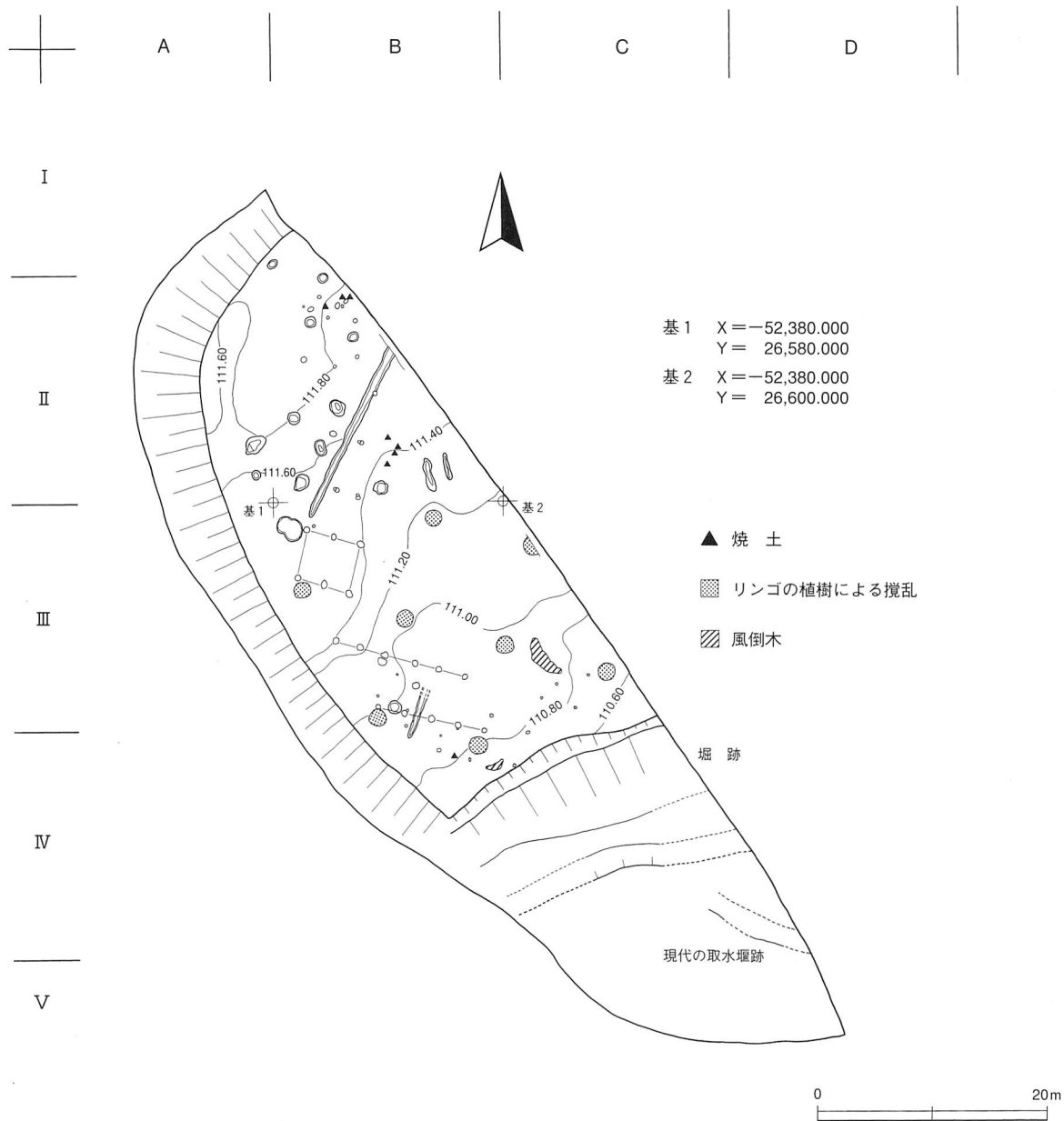
<陥し穴状遺構> 同じ方向に並ぶ、縄文時代の陥し穴の可能性のある遺構を2基検出した。

<柱穴列> 掘立柱建物跡の南側から2列を検出した。掘立柱建物跡の軸方向とほぼ同じ方位に延びる。

<出土遺物> 縄文土器、土師器、須恵器の破片が少量出土している。摩滅が激しいため、はっきりした時期の特定はできないが、縄文土器は中期、土師器と須恵器はロクロ成形のものが大部分である。中世と考えられる遺物は出土していない。

3. まとめ

本遺跡は周辺の住民から「金館(こんだて)」「金様(こんさま)」と呼ばれているが、文献には記載がない。今回の調査で堀跡、曲輪などが検出されたことから、城館もしくは居館であったと考えられる。出土した遺物が少なかったために明確な時代を特定できないが、古代から機能していた可能性がある。



金館跡遺構配置図



遺跡全景

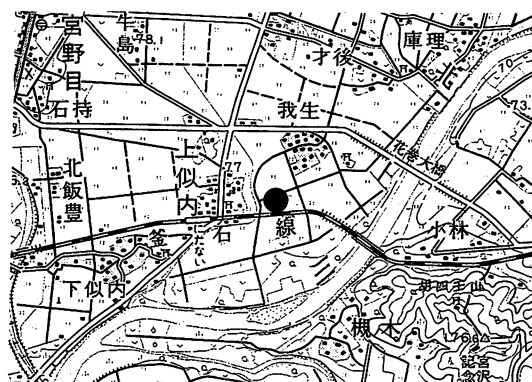


堀跡

金館跡検出遺構

(13) 上似内遺跡

所在地 花巻市上似内12地割3番地ほか
委託者 花巻地方振興局
花巻農村整備事務所
事業名 ほ場整備（宮野目第3地区）
発掘調査期間 平成12年4月14日～10月20日
調査対象面積 7,900㎡
発掘調査面積 8,300㎡
遺跡番号・略号 ME16-0302・KNN-00
調査担当者 溜浩二郎・吉田真由美
協力機関 花巻市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 花巻

1. 遺跡の立地

似内遺跡は、JR花巻駅から北東約3.5km、JR釜石線似内駅から東へ約300mに位置し、北上川の右岸に形成された河岸段丘上に立地している。遺跡のすぐ西側には北上川の支流である五内川が隣接して流れる。遺跡の標高は74m前後である。調査前の遺跡の現況は水田・畑地跡である。

2. 調査の概要

今回の調査では、縄文時代の陥し穴29基、平安時代の竪穴住居跡（住居状含む）26棟、土坑8基、中世の墓坑1基、堀3条、他に溝跡5条、柱穴列1基、柱穴状小土坑81基が検出された。

<竪穴住居跡> 26棟検出された。調査区ごとにみるとA区7棟、B区8棟、C区2棟、D区4棟、E区5棟で、削平の影響が比較的少ない場所から検出され、調査区域内における偏った住居の分布は見られない。形状は正方形・長方形を呈し、規模は小型のもので一辺約244×243cm、大型のものでは一辺6mを越え、平均で一辺4m前後のものが多い。

カマドを有する住居跡は22棟、カマドが構築されていないものが2棟、遺構が調査区外へ延びるためカマドの存在を確認出来なかったものが2棟である。カマドの設置場所は北壁2棟、東壁18棟、南壁2棟で、北壁に設けられているものは壁の中央部、東壁に構築されるものは壁面中央部より南寄り、南壁に構築されるものは壁面中央部より東寄りである。

1棟の住居跡から複数のカマドが検出されたものが6棟ある。このうち2棟は燃焼部の位置などから住居の拡張に伴ってカマドを移築した形跡がある。カマドの設置場所は東壁と北壁、東壁と南壁など違う方角の壁面に構築されるものや同じ壁に複数のカマドを有する住居もあるがカマドの使用時期は異なる。

時期は出土遺物などから全て平安時代（9世紀前半～10世紀初頭）のものであると考えられる。

<陥し穴状遺構> 29基検出されている。A区・E区に多く、2～5基ずつまとまって見つかった。形状は大半が溝状を呈し、他に楕円形、長楕円形のものがある。検出面での規模は最大で開口部径356×28cm、最小で開口部径116×38cmあり、多くは開口部の長軸径が250～300cm前後を測る。深さは最も深いもので100cm、浅いもので24cm、平均で約70cm前後である。遺構の検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

＜土坑＞ 8基検出された。形状は円形、楕円形などで、規模は最大のもは開口部径193×140cm、深さ31cm、最小のもは開口部径62×61cm、深さ19cmである。時期は検出面や出土遺物から平安時代のものであると考えられる。

＜墓坑＞ A区の北側から1基検出された。形状は円形基調であるが、北側の一部は歪んだ形状を呈する。規模は開口部径120×98cm、底部径90×80cm、深さ20cmある。水田造成によって遺構が削平を受けているため遺物の一部が消失ないし破損しているが、出土遺物から中世の遺構と考えられる。

＜堀跡＞ 調査区中央部で東西に延びる堀1条、南北に延びる堀1条、調査区東端部で南北に延びる堀1条を検出した。いずれも両端が調査区外へと延びるため全長は明らかでないが調査区中央部で南北に延びる堀は館内を東西に区画するものであると考えられる。幅は最大のもので約10.20m、深さは2.50mある。堀からは時期を知り得る遺物は出土していないが、当地は室町～戦国時代にこの地を支配していた似内氏の居館、似内館があった場所という伝承があり、堀はこの館に伴う遺構と考えられる。

＜溝跡＞ 検出された5条の溝のうち古代の可能性のあるものは3条、他は近世以降に掘られた溝と考えられる。狭い調査区での検出のため、遺構の全容は明らかでない。また、住居跡と重複している溝からは土師器甕の破片が出土している。

＜柱穴列＞ E区で1基検出された。全長は11.34m、柱間は1.92～1.94mで遺構のすぐ北側が調査区外であるため建物跡を構成するものなのか確認はできない。

＜柱穴状小土坑＞ 調査区全体で81基の柱穴状小土坑が検出された。すべてE区西端～中央部からで、検出面は平安時代の住居跡と同じで、埋土も住居跡と同じ褐色土混じりの黒褐色土を主体とする土層が堆積する。規模は開口部径が30cm以下のものが多い。また柱痕跡が認められるものは少なく、明確な配列も見られないことから建物跡を推定することはできない。

＜出土遺物＞ 住居跡を中心に平安時代の土師器・須恵器が大コンテナで13箱出土している。全体的に須恵器は土師器と比較して出土量が少なく、器種は土師器・須恵器いずれも坏・甕が多い。また墨で文字が書かれた土師器坏が2点出土している。土製品は漁労に使用された土錘が2点、石器は砥石・磨石が主で、中コンテナで1箱出土している。他に石匙2点や少量の剥片石器が遺構外から出土している。鉄器は刀子、鎌、鋤、釘、鍬、紡錘車など約15点が主に住居跡から出土している。他に墓坑から人骨、銅銭29点（永楽通寶27点、宣徳通寶1点、大観通寶1点）、硯1点、鉈1点、白磁片2点、鉄鍋の破片などが出土している。

3. まとめ

今回の調査で検出された遺構や遺物から上似内遺跡は、縄文時代の一時期には狩猟場として、平安時代には集落跡として、中世には館跡として利用されていたことが明らかになった。

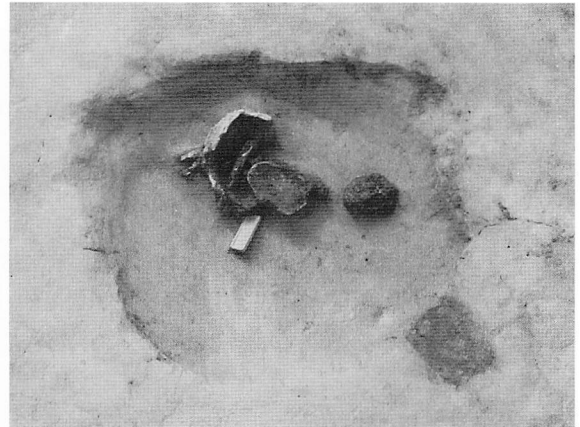
縄文時代の陥し穴は隣接する似内遺跡や石持Ⅰ遺跡の調査でも多数検出されており、このあたり一帯が狩猟生活を営む人々にとって重要な土地であったことが窺える。平安時代になると北上川西岸一帯には本遺跡の他に似内遺跡、庫理遺跡、下似内遺跡、石持Ⅰ遺跡など多くの遺跡で住居跡が見つまっている。いずれも平安時代以前の住居跡が見つかっていないことから、9世紀初頭に律令国家権力がこの地に及び、その支配下のもとで新たに集落が形成されたと考えられる。中世の館跡は室町～戦国時代この地を支配していた似内氏の居城であり、北上川を挟んで隣接する矢沢館とともに郡主稗貫氏の東の要として重要な役割を担っていたものと思われる。今回の調査で見つかった堀跡はこの館に伴う遺構と考えられ、その規模や構造を知る上での一助となった。



調査区全景



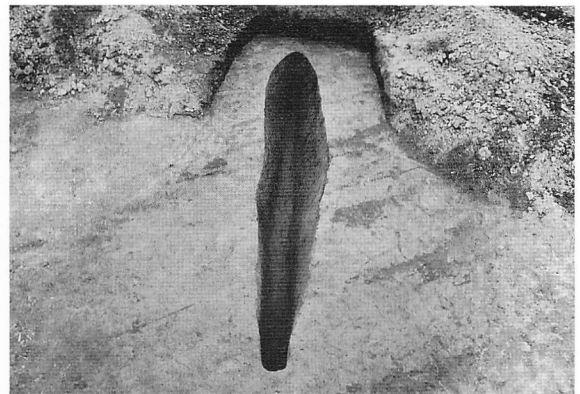
竪穴住居跡



墓坑



堀跡 (E区東端)



陥し穴状遺構

上似内遺跡検出遺構

(14) ^{うるしばやし}漆林Ⅱ遺跡

(15) ^{もとじゆくむかいはた}本宿迎畑遺跡

所在地 (漆林Ⅱ遺跡)
水沢市姉体町字漆林55ほか
(本宿迎畑遺跡)
水沢市姉体町字鍛冶屋32-1ほか

委託者 水沢地方振興局
水沢農村整備事務所

事業名 ほ場整備水沢姉体地区

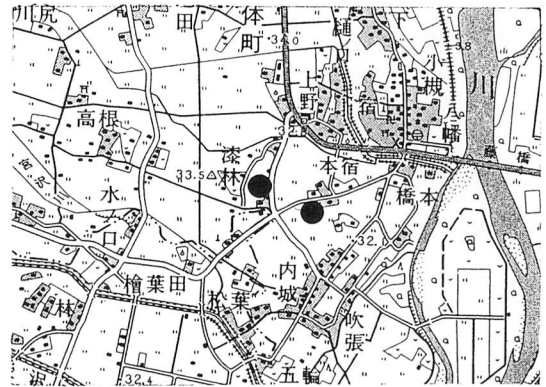
発掘調査期間 (漆林Ⅱ遺跡)
平成12年4月10日～4月26日
(本宿迎畑遺跡)
平成12年4月27日～6月2日

調査対象面積 (漆林Ⅱ遺跡) 600m²
(本宿迎畑遺跡) 1,194m²

発掘調査面積 (漆林Ⅱ遺跡) 600m²
(本宿迎畑遺跡) 1,194m²

遺跡番号・略号 (漆林Ⅱ遺跡) ME37-1182・UBⅡ-00
(本宿迎畑遺跡) NE37-1198/MMH-00

調査担当者 金野 進・小笠原健一郎



遺跡位置 1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

漆林Ⅱ遺跡、本宿迎畑遺跡は、JR東北本線水沢駅の南南東約5.8kmに位置しており、北上川右岸の河岸段丘上の標高32mに立地している。

2. 調査の概要

(1) 漆林Ⅱ遺跡

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居2棟(奈良・平安時代)、掘建て柱建物跡1棟、陥し穴状遺構5基、溝跡1条、焼土遺構1基、土坑類61基(柱穴状ピット含む)である。

<竪穴住居跡> 1号竪穴住居跡は、貼り床のみが検出され、カマドは検出されていない。また、貼り床の下からは、焼土に覆われた土坑も検出されているので、この住居跡は、建て替えられた可能性が高い。

2号竪穴住居跡は、カマドのみが検出された。カマドの焼土跡からは、土師器の甕が検出されている。

<掘立柱建物跡> 調査区の西側で1棟検出されている。検出された規模は、桁行2間(1.9m)×梁行1間(2.3m)である。埋土から、土師器が出土した柱穴もある。調査終了時に西側盛り土の一部を除去し、掘立柱の有無を確認したところ、掘立柱は、検出されなかった。

<陥し穴状遺構> 5基が検出された。いずれも溝状を呈するもので、軸方向は、北西方向に3基、北東

方向に2基である。

<焼土遺構> 1基が検出された。

<土坑類> 61基を検出した。多くは、柱穴状の土坑である。土師器などの土器が出土した土坑もある。

<出土遺物> 遺物は、土師器の坏や甕を中心に小コンテナ1箱程出土している。また、16世紀前半の瀬戸・美濃系灰陶器の皿の破片や江戸時代の肥前産の磁器片も出土している。

(2) 本宿迎畑遺跡

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡7棟（平安時代）、住居状遺構1棟、溝跡3条、円形周溝1条、陥し穴状遺構4基、土坑類79基である。

<竪穴住居跡> 1号住居跡からは、カマドが検出された。煙道は、攪乱されて残存していない。煙出穴のみ検出された。貼り床からは、土師器、須恵器、砥石などが出土している。2号住居跡からは、カマドは検出されていないが、焼土痕が検出されている。また、土師器、土錘（網の重り）が出土している。なお、2号住居下位からは、3号住居跡が検出されており、そこからも、須恵器や土師器が出土している。4号住居跡からは、カマドが検出された。また、重複して、5号住居跡が検出された。どちらも、出土遺物から、平安時代のもと考えられる。6号住居跡からは、カマドの袖が検出された。煙道は、攪乱されており、確認されなかったが、カマド付近からは、土師器が密集して出土している。7号住居跡からは、焼土が検出された。カマドは、検出されなかった。

<溝跡> 1号溝跡は、遺跡中央部に位置し、東西およそ11mの規模である。1号溝跡からは、須恵器・土師器の破片が出土していて、平安時代のもと思われる。2号溝跡は、1号住居跡と2号住居跡をはさんで周溝の切れたところに交差して位置している。長さは、およそ3mで、須恵器の破片がわずかながら出土している。3号溝跡は、遺跡南側の畦畔に沿って15m程の規模のものである。ここからも、須恵器の破片がわずかながら出土している。

<円形周溝> 1条検出されている。調査区東側1号竪穴住居跡と2号竪穴住居跡の間に位置する。規模は、直径約4mの円形を呈する。幅は、約20～30cmで、深さは、6～16cmほどである。

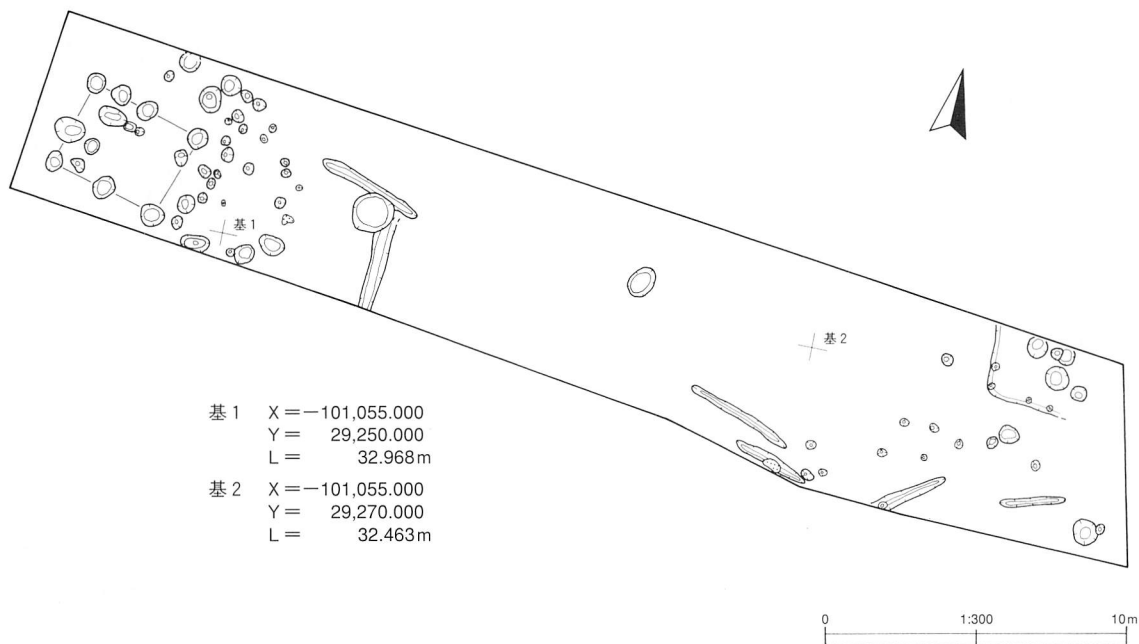
<陥し穴状遺構> 溝状の陥し穴状遺構が4基検出されている。出土遺物はないが、縄文時代のもと思われる。

<土坑類> 土坑類が17基、柱穴状ピットが62基出土している。1号～3号土坑は、北西側に並列しており、長径約2m、短径約1m、深さ約0.5mの楕円形で、墓穴ではないかと推測される。遺物は出土していない。

<出土遺物> 遺物は、土師器・須恵器の坏や甕を中心に大コンテナ2箱程出土した。また、1号住居跡からは、砥石、すり石が出土しており、2号住居跡からは、土錘が3点、砥石1点が出土している。

3. まとめ

今回の調査により、本遺跡は、縄文時代には、狩場として利用され、また、平安時代には、大きな集落跡であった可能性が高いと考えられる。また、遺物から、中世や近世においても生活の痕跡が発見された。今後の周辺調査が進むことで、検出された大型の柱穴を持つ掘立柱建物跡の性格や遺跡全体の詳細な様子も明らかになってくるとと思われる。



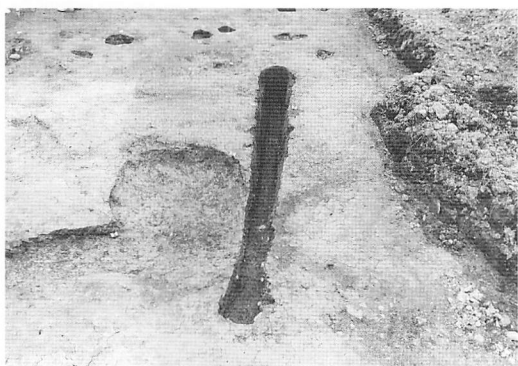
漆林Ⅱ遺跡遺構配置図



調査区全景（南から）



掘立柱建物跡

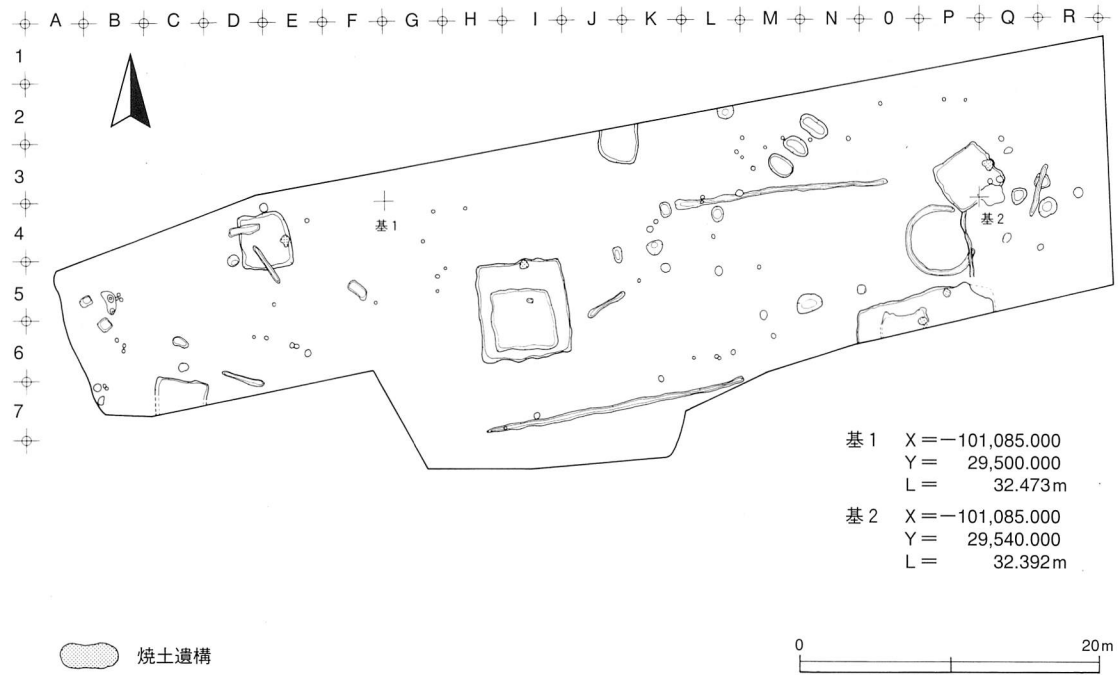


1号陥し穴状遺構



2号住居カマド付近遺物出土状況

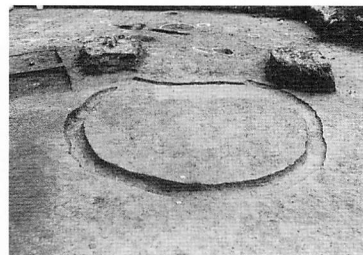
漆林Ⅱ遺跡遺構写真



本宿迎畑遺跡遺構配置図



調査区全景 (南→)



円形周溝



4号竖穴住居跡

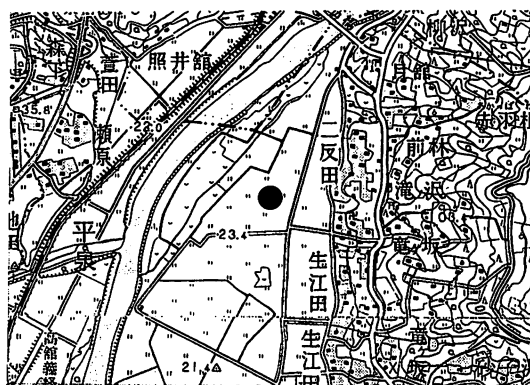


6号住居カマド検出状況

本宿迎畑遺跡遺構写真

(16) 里 遺 跡

所在地 平泉町長島字若宮10ほか
委託者 一関地方振興局
一関農村整備事務所
事業名 ほ場整備（一関第2地区）
発掘調査期間 平成12年4月11日～8月4日
発掘対象面積 4160㎡
発掘調査面積 4160㎡
遺跡番号・略号 NE66-2119・ST-00
調査担当者 村木 敬・菅原靖男
協力機関 平泉町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 水沢・一関

1. 遺跡の立地

里遺跡は、JR東北本線平泉駅から北北東約2.5kmに位置し、北上川東岸の沖積地の微高地上に立地している。標高は24m前後で、北緯39度00分、東経141度8分付近に当たり、現河床との比高差は約10mである。現況は、水田・畑地及び農道である。柳之御所遺跡は北上川を挟んだ南南東2kmの位置にある。

2. 調査の概要

本調査は、ほ場整備事業に伴う用・排水路の埋設部分の調査であるため、東西に細長い調査区となった。D区以外で遺構・遺物等が検出され、以下にそれらの概要を記す。便宜上、各調査区を北からA～F区と呼称している（調査区配置図参照）。

＜竪穴住居跡＞ B区で4棟、F区で5棟検出した。B・F区で検出したすべての住居跡が調査区外に延びるため、全体の平面形を把握できるものはなかった。B区で検出した4棟は、それぞれ1辺が3～5m前後の規模のものと確認できたが、出土遺物のほとんどが埋土上層からの出土のため時期は不明である。ただし、重複している3棟のうち最も新しい住居が、12世紀後半の国産陶器やかかわらけなどが埋土上層から出土する井戸や柱穴によって切られていることから、それら重複している住居跡はそれ以前のものと判断できる。

F区で検出された5棟は1辺が2～4mの規模で、すべて10世紀前後のものである。その内の3棟は水田耕作時に削られほぼ床面のみの確認となった。

＜掘立柱建物跡＞ F区で2棟検出した。2棟とも調査区外に延びていくため全容は不明であるが、出土遺物や埋土状況から近世のものと考えられる。

＜井戸＞ B・C区で井戸を1基ずつ検出した。B区で検出したものは、竪穴住居跡の上から形成されており、平面形が円形を呈し、規模は径約2m、深さ2mを測る。埋土上層からは、大形の焼け礫と共に常滑産の国産陶器やかかわらけなどが出土している。C区で検出したものは、平面形が円形を呈し、規模は径約1.5m、深さ約2mを測る。埋土上層からは、中国産陶磁器とかかわらけが出土している。

＜土坑＞ A区で1基、B区で8基、C区で1基、E区で4基、F区で2基検出されている。A・B区で縄

文・弥生時代のものが1基ずつ確認されている。B・E区で平面形が円形を呈し、規模は径約1m、深さ1.0～1.5mを測る同様なものを3基検出した。かわらけや礫などの出土遺物や埋土状況なども共通している。これらは埋土状況からトイレ状土坑の可能性もある。

<溝> B・C・F区では調査区東端において南北方向に延びるものを1条ずつ検出した。B・C区で検出した溝は南北方向に延び、上幅約0.3～0.5m×下幅約0.2m、深さ約0.2mと規模共に共通している。これらは遺物が伴わないため時期は不明である。F区の調査区東端で検出した溝は、ほぼ南北方向に延び、検出長12m、上幅約2m×下幅約0.3～0.5m、深さ1.5mである。埋土中層から和鏡2面と共に渥美産の国産陶器などが出土している。

<柱穴> B区で31基、C区で11基、E区で32基、F区で182基を検出した。B・E区の東端では掘立柱建物跡を構成するような柱穴が検出されているが、調査区が狭く調査区外に延びていくためその全容は不明である。それらの数基の埋土からはかわらけが出土している。これらは今後プランの検討を要する。C区のものは井戸の周辺に柱穴が集中しているが、遺物が伴わないことなどから時期は不明である。F区の柱穴は、埋土状況や出土遺物などから近世以降のものとして推定される。これらは掘立柱建物跡を構成する可能性を有するため、今後プランの検討を要する。

<その他> A区から縄文時代の陥し穴と近世の配石遺構1基ずつ、B区から弥生時代の炭化物集中部2カ所、中世のカマド状遺構1基、C区から焼土遺構1基が検出された。

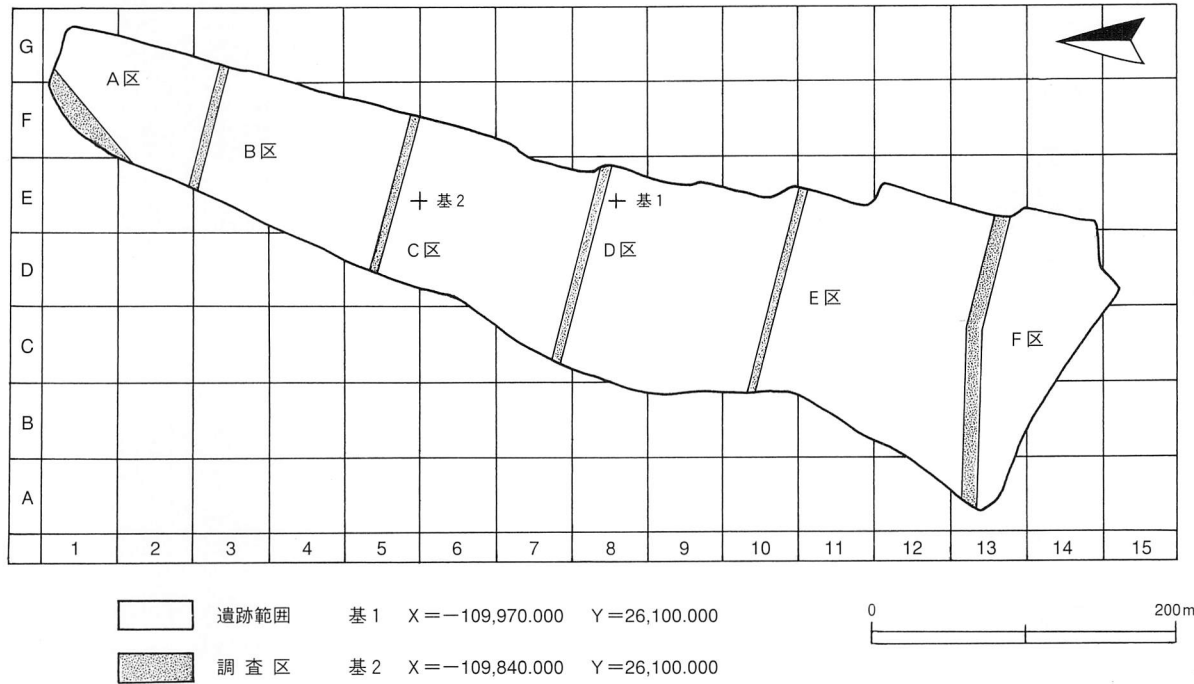
<出土遺物> 弥生時代中期の土器や石器は大コンテナ2箱、10世紀前後の土師器は大コンテナ3箱が出土している。12世紀の遺物は、常滑産や渥美産の国産陶器、かわらけ、中国産陶磁器などが中コンテナ1箱、和鏡が2面出土している。

3. まとめ

今回の調査は、用・排水路埋設に伴うもので調査範囲が限られたため、遺跡の性格や遺構の全容を把握するにまで至らなかったものの、弥生時代以降、断続的に現代まで利用されていることが明らかとなった。

特に、都市平泉の中心である北上川西岸地域との関連を窺わせるかわらけ・国産陶器・中国産陶磁器・和鏡などの遺物が遺構に伴い出土したこと、それらがB区からF区と遺跡の広範囲に渡って検出されたことの意義は大きい。

これらの成果は都市平泉を考えていく上で重要な資料となり、さらに今後、北上川東岸地域の調査を行うことで、その全体像が明らかになるものと思われる。



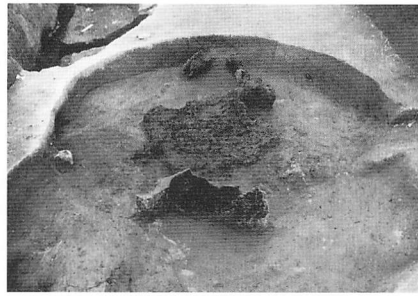
里遺跡調査区配置図



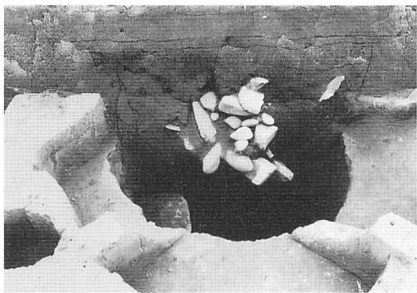
里遺跡全景



遺跡遠景



炭化材出土状況（B区）



井戸跡（B区）



かわらけ出土状況（E区）



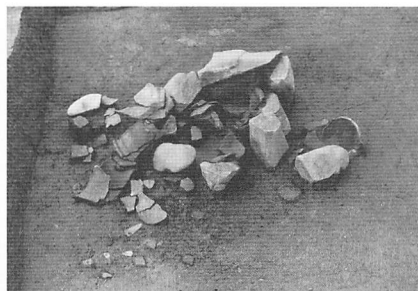
和鏡出土状況（F区）



和鏡出土状況（F区）



平安時代の竪穴住居跡（F区）

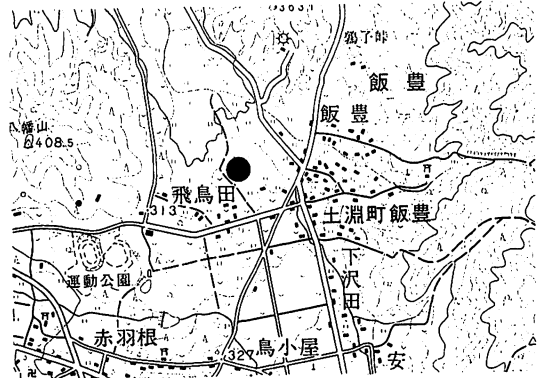


遺物出土状況（F区）

里遺跡検出遺構・出土遺物

(17) 権現前遺跡

所在地	遠野市青笹町糠前台22地割 権現前34-2ほか
委託者	遠野地方振興局 遠野農村整備事務所
事業名	ほ場整備(飯豊地区)
発掘調査期間	平成12年7月26日～11月6日
調査対象面積	1,180㎡
発掘調査面積	1,180㎡
遺跡番号・略号	MF46-1062・GGM-00
調査担当者	小笠原健一郎・金野 進
協力機関	遠野市教育委員会・遠野市立博物館



遺跡位置 1:50,000 遠野土淵

1. 遺跡の立地

権現前遺跡はJR遠野駅の東方約3kmに位置し、猿ヶ石川の支流である五日市川左岸の微高地に立地している。遺跡の現況は水田である。

2. 調査の概要

検出した遺構は、竪穴住居跡15棟(住居状含む)、焼土遺構13基、土坑43基、陥し穴1基、柱穴列2基、配石1基、堀跡1条、柱穴状小土坑274基である。南西区の遺構の残存状況は不良である。

<竪穴住居跡> 15棟(住居状を含む)を検出した。また、大木2a式土器が出土した住居跡には北側を除く3面にテラス状の施設が構築されている。北側床面には梯子の跡と考えられる柱穴も検出された。

<土坑> 土坑は43基(内フラスコ3基)を検出した。土坑に伴う柱穴も検出されている。

<柱穴列> 2基を検出した。時期・詳細は不明であるが、埋土から土器片が出土した柱穴もある。

<焼土> 住居跡の周辺を中心に13基を検出した。住居に近接するものは屋外炉の可能性も考えられる。

<陥し穴> 1基を検出した。形状は溝状を呈する。中期以降の遺構と考えられる。

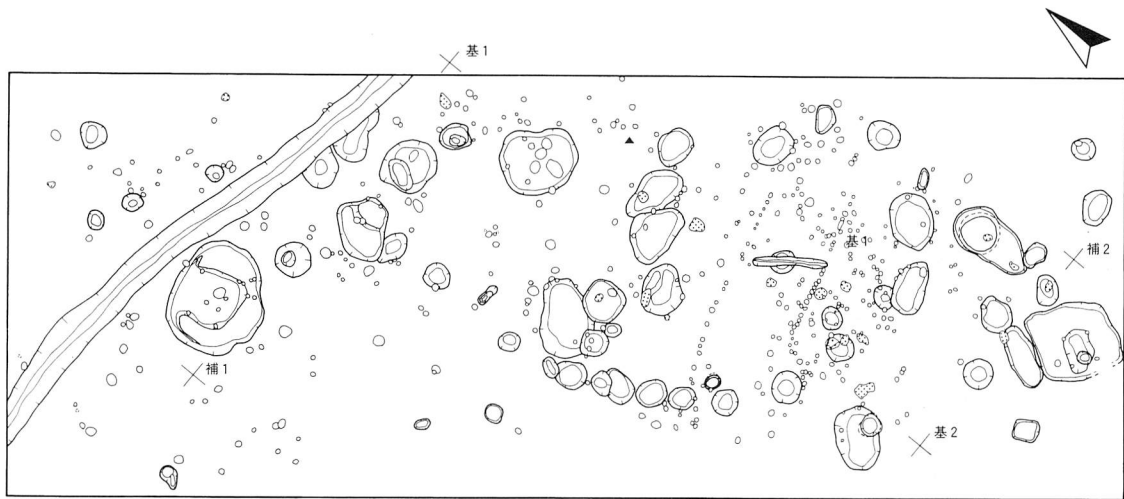
<配石> 配石は1基を検出した。

<堀跡> 堀は1条を検出した。空堀で断面の形状は箱薬研堀である。埋土中層から土師器の甕片、床面付近からは羽状縄文土器片が出土したが、古代～中世の堀跡と考えられる。



<遺物> 大コンテナ約8箱が出土している。土器は、表裏縄文系・羽状縄文系を主体に大木2a式(網目状捺糸文)土器も出土している。また、石器類は、石斧・石鏃・石匙・石皿等が出土している。

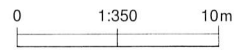
3. まとめ

今回の調査によって、本遺跡は縄文時代早期末～前期初頭を主体とする集落跡であることが明らかになった。表裏縄文系土器が出土した住居跡の形状はおおむね不整な楕円形のものが多く、いずれも床面中央に方形に対応する4～6本の支柱穴を中心に壁の中場から樫木(壁柱穴径約8cm)を組み上げたテント型の住居と考えられる。遺構の配置は、環状帯を呈する配置となっている。

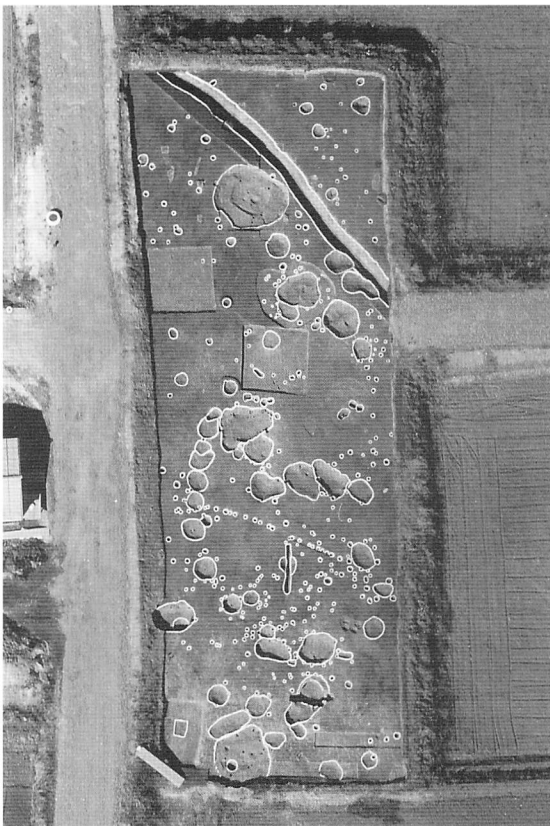


基1	X = -73,675.000	補1	X = -73,675.000
	Y = 64,370.000		Y = 64,350.000
	L = 309.110 m		L = 308.590 m
基2	X = -73,705.000	補2	X = -73,705.000
	Y = 64,350.000		Y = 64,382.000
	L = 308.841 m		L = 308.817 m

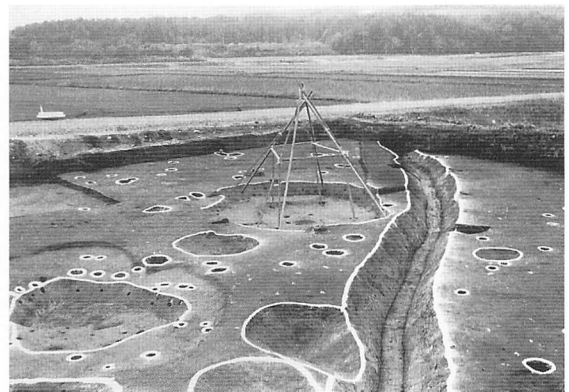
 焼土遺構
 配石



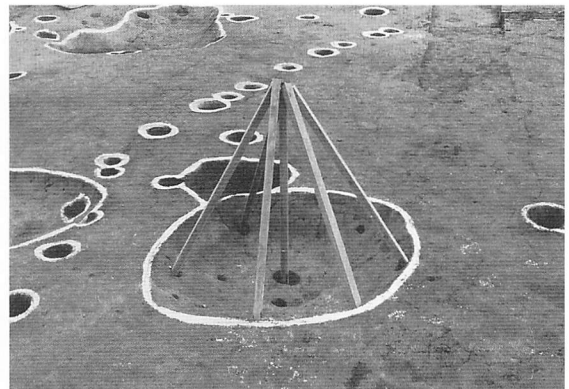
権現前遺跡遺構配置図



空中写真



1号竖穴住居跡・1号掘跡

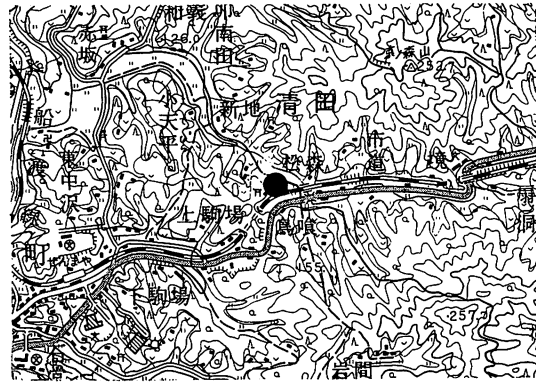


22号土坑

権現前遺跡検出遺構

(18) 清田台遺跡

所在地 千厩町清田字台5-4ほか
委託者 千厩地方振興局
千厩農村整備事務所
事業名 ふるさと農道緊急整備
発掘調査期間 平成12年7月17日～11月30日
調査対象面積 580m²
発掘調査面積 580m²
遺跡番号・略号 NF91-1291・KTD-00
調査担当者 小原眞一・岩淵 計・菊池 賢
東海林淳美・菊池貴広・
長村克稔
協力機関 千厩町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 千厩

1. 遺跡の立地

遺跡は、JR大船渡線千厩駅の東北東約1.3kmに位置し、千厩川の支流金田川が形成した沖積地に南側から張り出す尾根上に立地している。遺跡を東西に国道284号とJR大船渡線が横切る。標高は113～114mである。東側には縄文時代中期の桃園遺跡、南には縄文時代の鳥喰Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡がある。

本遺跡は、以前から地元の人々によって土器片や石鏃などが表採されており、縄文時代の遺跡であることが知られていた。

基本土層

I層	暗褐色土	層厚	20cm	耕作土
II層	黒褐色砂質土	層厚	45cm	遺物包含層（竪穴住居等の埋土）
III層	暗褐色砂質土	層厚	15cm	遺物包含層（竪穴住居等の埋土）
IV層	暗褐色砂質土	層厚	30cm	遺物包含層（廃棄土）
V層	黒色土	層厚	25cm	無遺物層
VI層	黄褐色土～褐色砂	層厚不明		無遺物層

竪穴住居等の埋土であるⅡ・Ⅲ層は、主に調査区中央の高く平坦な地区に広がり、Ⅳ層は沢に近い斜面上に分布する。Ⅴ層は主に斜面から沢にかけて分布している。Ⅵ層は砂層およびその上に載るローム層で、砂層の下にはこの地域の基盤になっている風化花崗岩がある。

2. 調査の概要

今年度調査した遺構は、竪穴住居跡27棟、炉跡6基、焼土遺構3基、土坑5基、配石遺構3基、柱穴状土坑である。

遺物は、縄文時代中期初頭から縄文晩期にかけての土器を中心に約130箱出土している。

<竪穴住居跡> 27棟調査した。最も小さいものは長径が2m位のものから、最大の住居は長径約7.2mで

ある。確認できた平面形は、円形や楕円形が多く、中には隅丸長方形をしたものもあった。炉の種類としては、複式炉、土器埋設炉、土器埋設石囲炉、石囲炉、地床炉がある。

住居同士の重なりが多く、後で構築された住居によって壁や床面が壊され、炉と床面の一部のみしか確認できなかった住居も多い。また、住居の埋土中に掘り込まれている住居も多く、平面形や床面の確認は困難を極めた。

<炉跡> 6基検出された。住居の炉である可能性が高い。

<焼土遺構> 3基検出された。住居の埋土中であつたため床面や壁面を確認できず焼土としたが、周辺から柱穴状土坑が多数検出されているので、住居の炉である可能性が高い。

<土坑> 5基検出されている。楕円形および円形の平面形をしている。円形のものの中には、直径が1.5～2mで断面形がフラスコ形の土坑3基が含まれている。楕円形の土坑は、配石の下部土坑である。

<配石遺構> 3基検出された。長さ1mの細長い亜角礫と径75cmの円盤状の礫で構成されているが、元々は細長い礫が立っていた可能性がある。

<出土した遺物> 約130箱出土した遺物の90%以上は縄文土器で、石器は少ない。

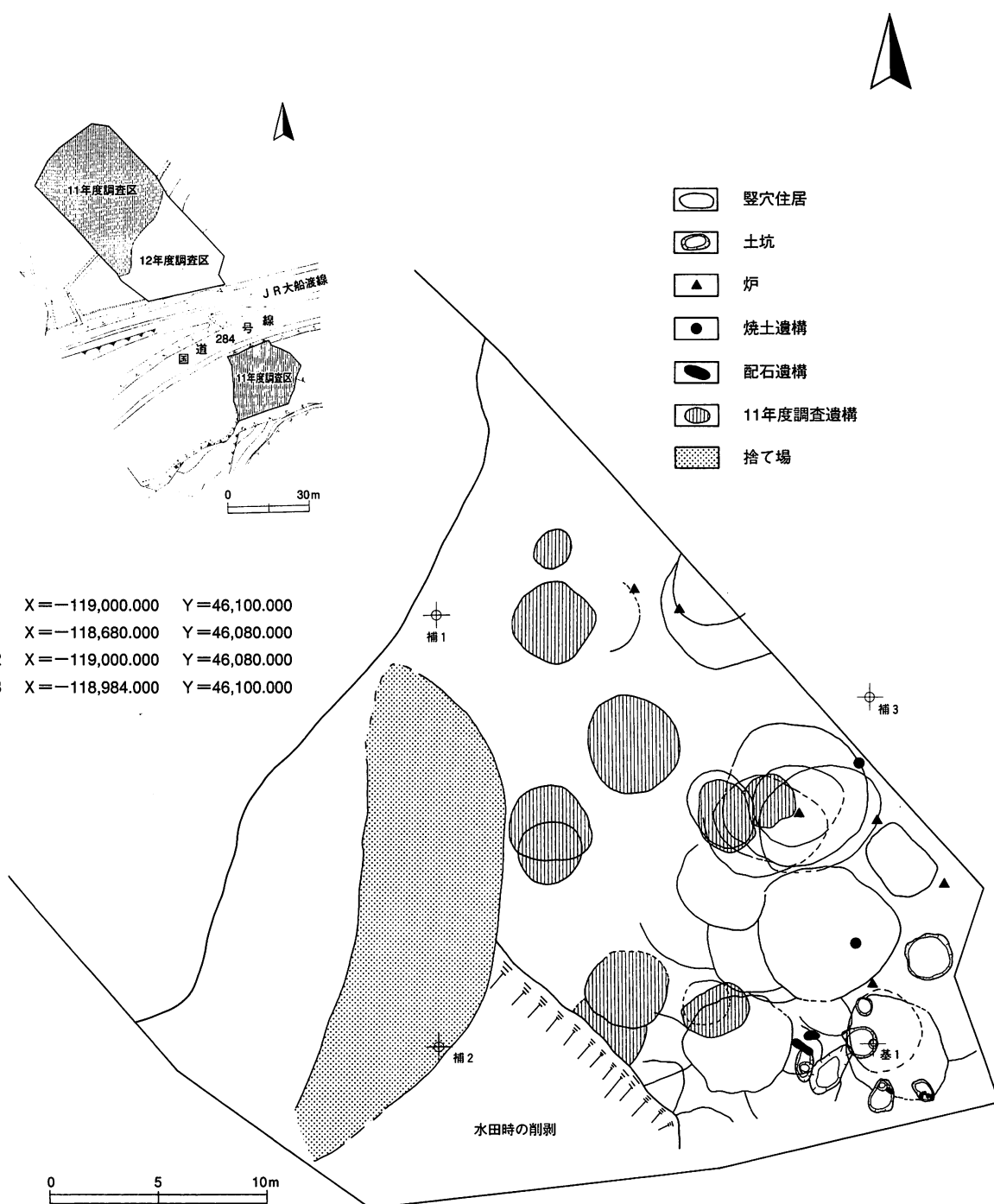
土器の時期としては、縄文中期初頭から晩期まで出土している。最も多いのは縄文時代中期の土器である。

石器は、剥片石器、特に石鏃の占める割合が多く、礫石器が少ない。また、黒曜石の石器や剥片も多数出土している。

その他には、土偶、鐸状土製品、イノシシを表したと見られる土製品、石棒、玦状耳飾りなどの石製品も出土している。また、焼けた動物のものと見られる骨やアスファルトと見られる塊も出土している。

3 まとめ

清田台遺跡は、出土した遺物や遺構の特徴から、縄文時代中期初頭から晩期にかけての約2000年以上もの長い間継続して集落として使われていることがわかった。また、今回調査した範囲は遺跡の北西端のごく一部に限られており、集落は尾根全体に広がっている可能性が高い。また、今回の調査範囲と同様な密度で分布するとすれば住居跡の総数は数百棟を超えるものと考えられる。



清田台遺跡遺構配置図



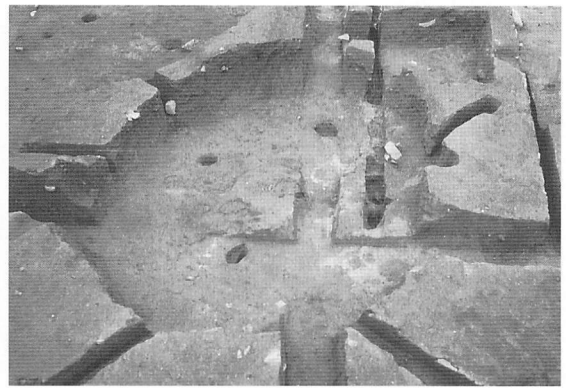
II B 10 i 住居平面



II B 9 i 住居平面



II B 8 j ③住居平面



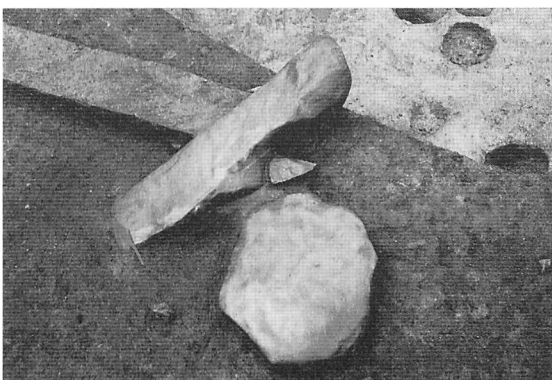
II B 7 i 平面



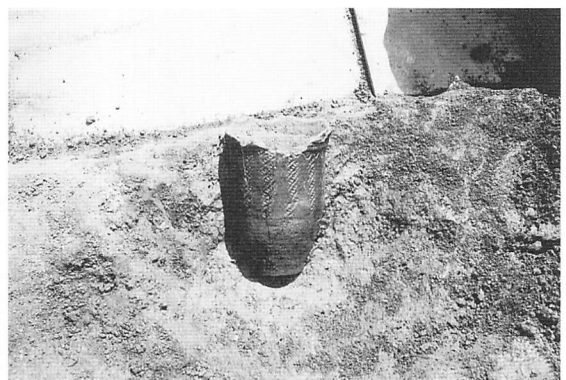
II B 5 h 住居平面



II B 10 i ②住炉平面



III B 1 j 配石

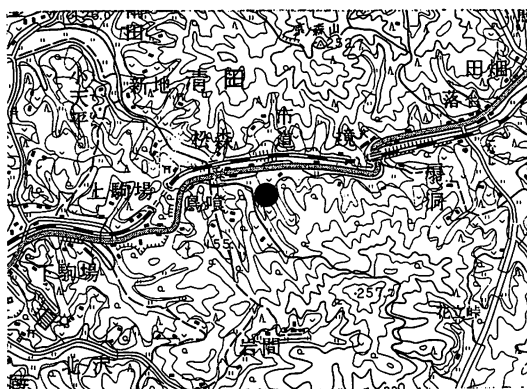


土器出土状況

清田台遺跡検出遺構・遺物出土状況

(19) ようがいであと 害館跡

所在地 千厩町清田字要害16ほか
委託者 千厩地方振興局
千厩農村整備事務所
事業名 ふるさと農道緊急整備
発掘調査期間 平成12年4月13日～7月15日
調査対象面積 5,071m²
発掘調査面積 5,071m²
遺跡番号・路号 NF91-2216・YD-00
調査担当者 小原真一・東海林淳美
協力機関 千厩町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 千厩

1. 遺跡の立地

遺跡は、JR大船渡線千厩駅の東約1.5kmに位置し、千厩川の支流金田川が形成した沖積地に張り出す尾根上に立地している。遺跡の東西と北側は、比高7～8mの崖で囲まれ、南側は緩やかに背後の山地に続く。

本遺跡は、伝承で中世城館（千厩町史 中世城館一覧）とされてきているが、地元の言によれば、本遺跡には、江戸時代に屋敷があり、北側崖下の旧気仙街道を通る人々を相手にお金の切り替え（両替？）を行っていたとも伝えられている。

2 調査の概要

検出した遺構は、掘立柱建物跡25棟、縄文住居1棟、土坑22基、焼土遺構2基等である。

<掘立柱建物跡> 建て替えによる重複があり、確認できた建物跡は25棟である。南北方向を意識した向きに構築されている。柱の掘り方は径30～40cm程度のもの、径70～80cm程度の2種類あり、柱痕跡から、柱の太さは約15～30cmと見られる。

<縄文住居> 平場の北側西端に残る黒色土中に6個の円礫・角礫が円形に配列する石囲炉とその東側に焼土を伴う横位に埋設された土器を検出した。埋設された土器の特徴から中期末葉の住居と見られる。

<土坑> 平面形から円形14基、長・正方形8基の2種類が検出された。円形の土坑には、フラスコ形土坑が2基含まれる。

<焼土遺構> 2基とも表土除去後の地山上で検出した。具体的な時代は不明である。

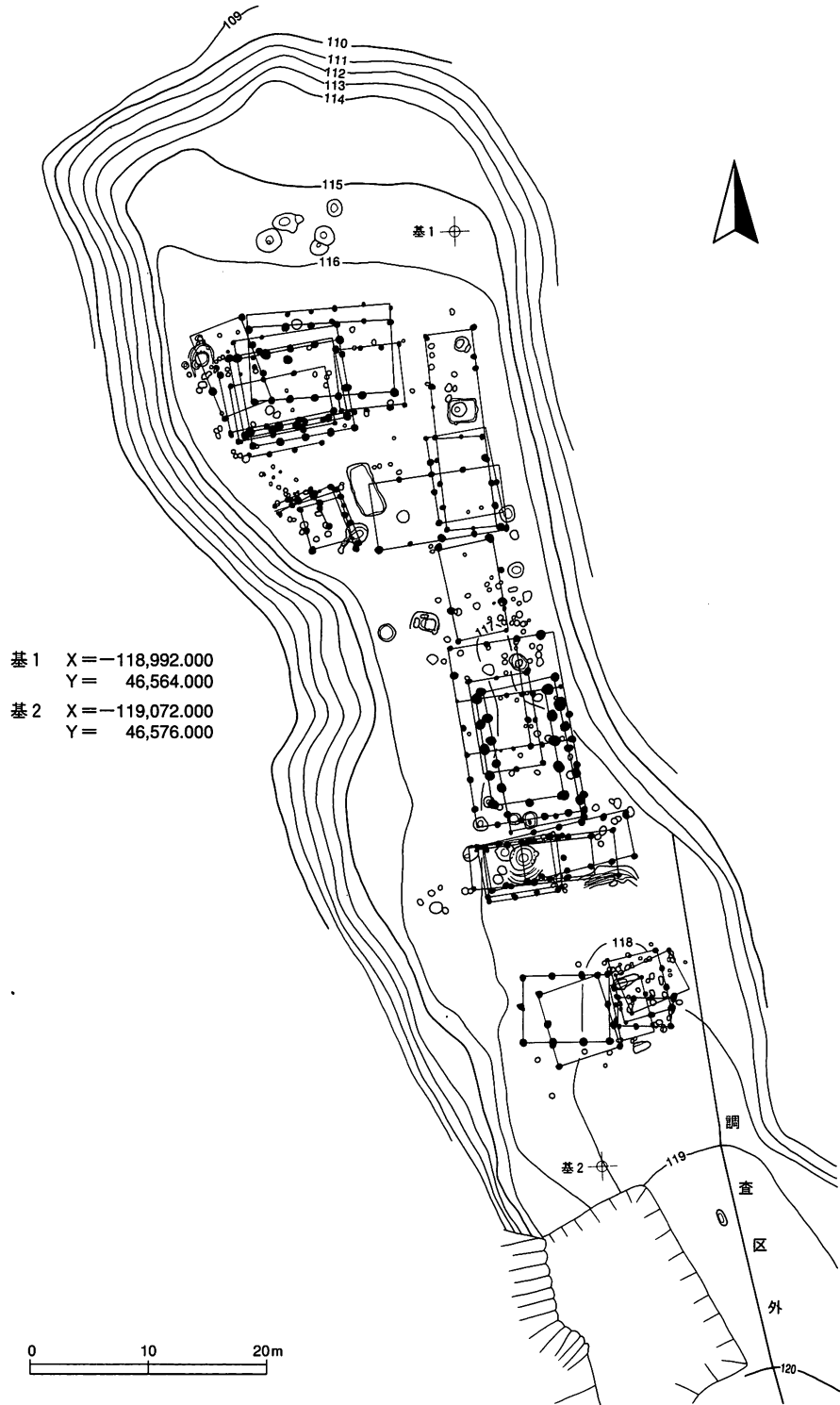
<出土した遺物> 中世・近世の陶磁器の破片が数点、古銭（永楽通宝）1枚、縄文土器、石器などである。

陶磁器の産地や時代については、15世紀の瀬戸・美濃の灰釉陶器、中国の青磁や染付、江戸時代の陶器である。縄文土器は、その文様の特徴から、中期中葉から末葉にかけての土器である。

3 まとめ

要害館跡は、出土した遺物や遺構の特徴から、縄文時代の集落跡と中世から近世にかけての屋敷跡である。

旧気仙街道跡



基1 X=-118,992.000
Y= 46,564.000
基2 X=-119,072.000
Y= 46,576.000

要害館跡遺構配置図

(20) 船丸館跡

所在地 東磐井郡千厩町奥玉字船丸51ほか
委託者 千厩地方振興局
千厩農村整備事務所
事業名 広域農道整備
発掘調査期間 平成12年6月2日～7月26日
調査対象面積 4,612㎡
発掘調査面積 4,612㎡
遺跡番号・略号 NF81-2212・FMD-00
調査担当者 小笠原健一郎・金野 進
協力機関 千厩町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 千厩

1. 遺跡の立地

船丸館跡はJR千厩駅の北東方約3.9 kmに位置し、千厩川左岸の段丘に立地している。現況は山林である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、郭3カ所、堀跡2条、土坑11基、掘立柱建物跡2棟、土塁状遺構1基、柱穴状小土坑86基、焼土1基、溝跡7条である。

<郭> 調査区内で3カ所が検出された。南側の郭は近世まで屋敷が存在していたことが確認されている。

<堀跡> 堀跡は2条を検出した。中央の1条は自然地形が利用されている。

<掘立柱建物跡> 2棟が検出された。規模は3×6mで詳細は不明である。天目茶碗が出土している。

<土坑> 11基が検出されたが、出土遺物はなく時期不明である。

<土塁状遺構> 1基が検出されたが、垂直土壁高が60～90cmと低いため、防御のための土塁ではなく地境等に利用されたものと考えられる。

<焼土> 1基が検出されたが、出土遺物はなく詳細は不明である。

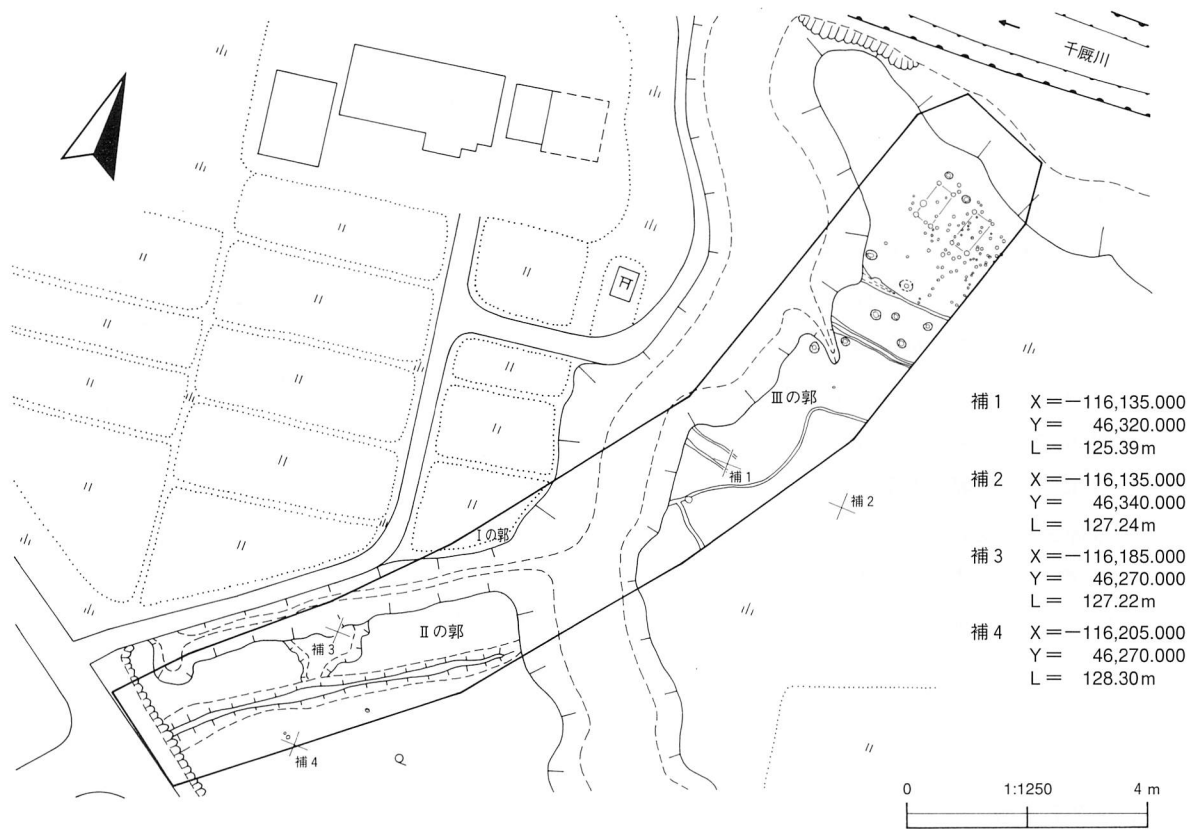
<溝跡> 7条が検出された。排水用の溝跡と考えられるが、時期は不明である。

<遺物> 大コンテナ2箱が出土した。大半は磨滅した縄文土器（後期～晩期）で、中国産染付片や瀬戸・美濃系鉄釉陶器、肥前産磁器、硯、砥石、羽口や、木樋等が出土している。

3. まとめ

船丸館跡は、八ツ花城として『奥玉村誌』に「この城址は字船丸にあり、何人の居館なりしや詳しからざれども、その館址たりしは明らかなり」と記されている。昭和25年の空中写真には主郭（Iの郭）を巡る土塁が確認されるが、この土塁は昭和30年頃の開田時に削平されている。調査区はこの主郭の南東辺から堀を挟む2ヶ所の郭を縦断している。遺跡は検出された遺物から16世紀を中心とした館跡であることが確認された。地形から居館として利用され、そのまま近世から近代に至ったものと推定される。

また、縄文時代の遺構は検出されていないが、これらは館の普請時に削平されたものと考えられる。



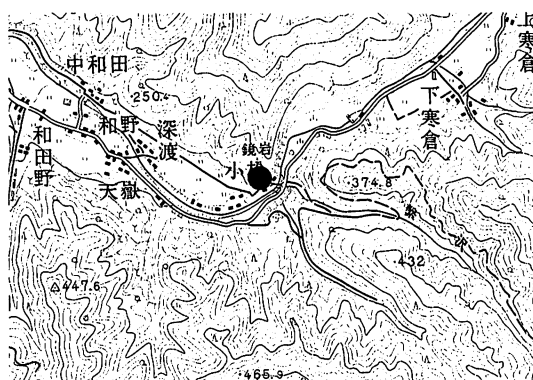
船丸館跡遺構配置図



空中写真（北から）
船丸館跡検出遺構

(21) 小松 I 遺跡

所在地 気仙郡住田町上有住字小松
28-1 ほか
委託者 岩手県大船渡地方振興局土木部
事業名 一般県道釜石住田線改良工事
発掘調査期間 平成12年6月19日～12月4日
調査対象面積 2,050㎡
発掘調査面積 1,305㎡
遺跡番号・略号 NF07-0030・KMI-00
調査担当者 吉田 充・鳥居達人
協力機関 住田町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 遠野

1. 遺跡の立地

小松 I 遺跡は JR 釜石線上有住駅の南西約 8.5 km に位置する。本遺跡を含む上有住地域には古生代の石灰岩が分布し、滝観洞をはじめとする洞穴が点在する。遺跡の数百 m 上流付近には小松洞穴が、約 3 km 下流には蔵王洞穴が気仙川に隣接して分布している。地形的には、小松洞穴付近で気仙川が狭窄し下流側に広がるため、多量の河川性堆積物が、また、北側の山体から供給された崖錐堆積物や局所的な扇状地性堆積物が厚く堆積している。調査以前は水田および畑地であった。

2. 調査の概要

山裾にあり、戦争当時防空壕を掘ったり、水田用に黒土を剥ぎ取ったりしたという地元の人の話があったため、遺跡の一部は攪乱が予想された。遺跡中央には幅 2 m 程度の生活用道路が走り、遺跡を東西に 2 分するとともに、道路面が旧地形面であることがわかった。畑の黒土は数 cm の花崗岩礫を含む砂質土で非常にしまりの良い土であり、人力による試掘は困難をきわめた。地山と見られる面を確認した後、重機による粗掘りに切りかえた。この結果、遺跡内は東側が台地状に高く、また遺跡中央に旧河道とみられる凹地形が連なり、西側に傾斜していることが判明した。中央道路西側の旧地形から地山まで層厚は 3 m を超える。

検出された遺構は、竪穴住居跡 17 棟、土坑 9 基、竪穴状遺構 12 棟、柱穴状土坑 117 基、焼土遺構 30 基、溝跡 3 条、捨て場 4 箇所である。遺構の時期は、検出層位や出土遺物から判断して縄文時代早期中葉から弥生時代初頭頃と考えられる。

<竪穴住居跡> 構築された時期は、縄文時代早期中葉が 4 棟、早期末葉が 5 棟、前期初頭が 8 棟である。中央道路より東側に密に分布し、同じ場所に時期の異なる住居跡が検出される傾向がある。地山と遺構の埋土は同様な土質を呈するため、土質による検出は困難をきわめた。遺物の出土量と焼土や柱穴等で遺構と認定した。早期の住居跡は円形～楕円形状を呈し、規模は 5～2 m である。地床炉を有する。なかには屋外炉と考えられるものもある。出土土器片には貝殻文、口縁部に並行沈線を格子状に組み合わせた文様を施文されたもの、表裏縄文を施文されたものなどがある。前期初頭の住居跡は方形～楕円形状を呈し、規模は長軸が約 8 m のものもある。数箇所に地床炉を持ち、壁は緩やかに立ち上がる傾向にある。埋土および床面から、

特徴的な斜位沈線文で充填された斜位並行線と渦巻きを組み合わせた縄文圧痕文の口縁部片と羽状縄文を施文された胴部片など、上川名式（花積下層式）に相当するとみられるものが出土している。

＜土坑＞ 時期別にみると、縄文時代早期末から前期初頭に属するとみられる土坑は4基、晩期のものが5基である。前者の土坑には楕円形で皿状の浅いものが2基検出された。長軸が約1mで、深さは約10cmである。後者の土坑は楕円形のものが多く、最大規模約1.8×1.2mで、深さは15cmである。

＜竪穴状遺構＞ 住居跡に類似するような形状・規模を有するが、地床炉を持たない等の遺構を竪穴状遺構とした。構築された時期は縄文時代早期末が8棟、晩期が4棟である。住居跡と同様な分布・検出状況である。早期のものは円形～楕円形状を呈し、規模は2～5mである。晩期のものは円形を呈し、規模は約4mで、円形状に柱穴がめぐる。

＜柱穴状土坑＞ ほとんどの柱穴状土坑は、黒色土下位の中礫火山灰と考えられる橙色粘土を斑に含む褐色粘土面で検出されている。層位的に縄文時代晩期のものと考えられる。不整な形のものも多く、円形～楕円形状を呈する。規模は長軸が10～20cmで、深さは10cm前後である。遺物はほとんど出土しない。

＜焼土遺構＞ ほとんどが中央道路西側の調査区で検出している。不整な楕円形状が多く、円形のものもある。規模が50～80cmの不整な楕円形で、対になって検出されたものが比較的多かった。検出面は粘土質の小砂礫層で遺跡内の遺構の配置から考えると、単独で使用した可能性が高い。また、捨て場付近では、1m前後の不整な広がりを持つ焼土を検出した。捨て場の縁に分布する特徴がある。異地性のものと考えられる。

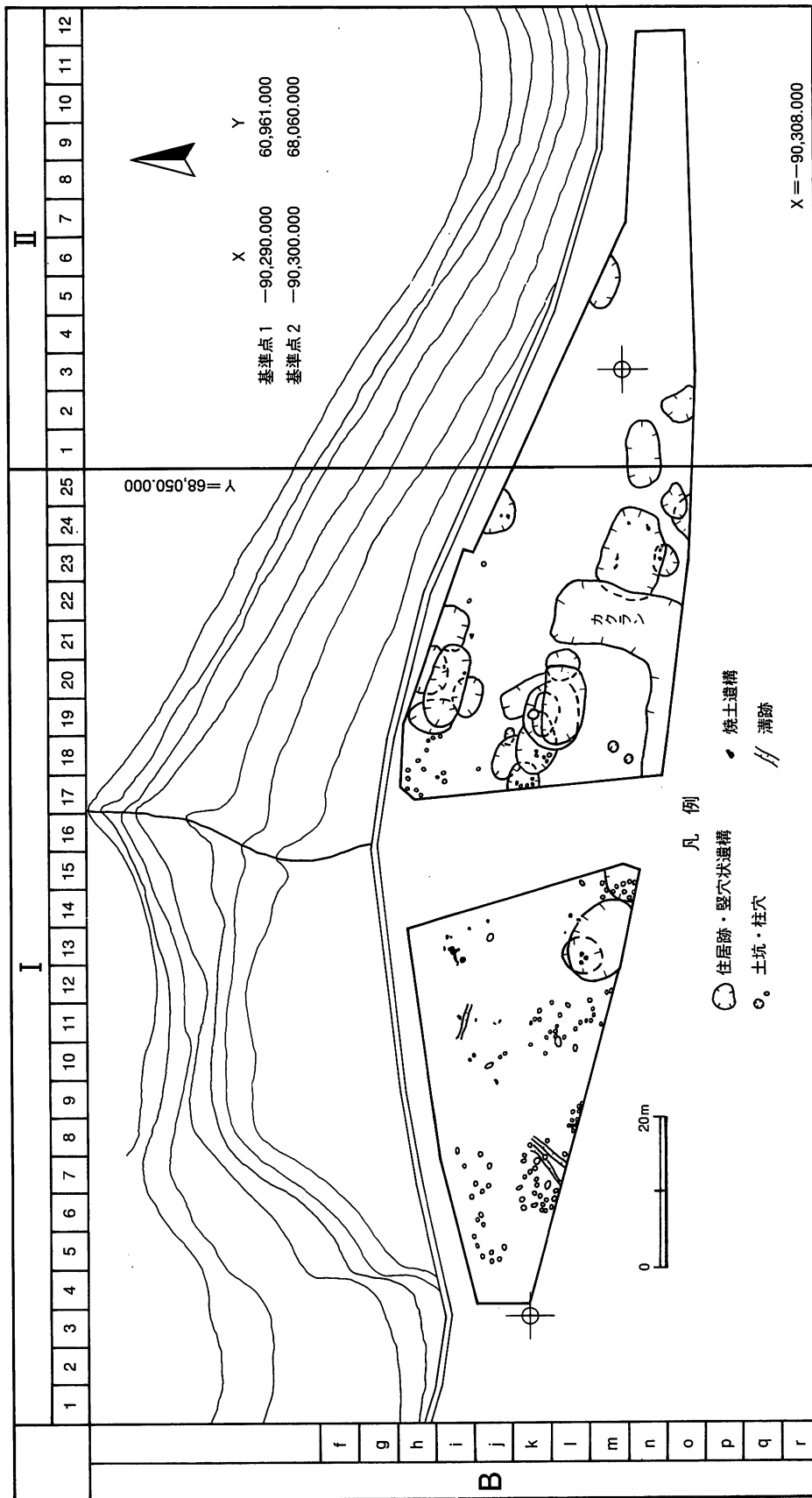
＜溝跡＞ 3条とも粘土質土を地山として小砂礫が埋土である。50～80cm幅で、深さが約10cmと浅い。2条は黒色土下位の砂質粘土で検出され、層位的には縄文時代晩期の可能性がある。残り1条は周辺から出土している遺物や検出層位から早期から前期初頭と考えられる。遺構内からの出土遺物はなく、詳細は不明である。

＜捨て場＞ 中央道路西側の調査区で、山側にのみ分布する。西側調査区は中央が約10m幅で凹地形を呈し、旧河道跡と考えられる。捨て場の層は、この旧河道跡を埋める層とこれを覆うように山側にのびる層があり、その分布からは時期による変遷が考えられる。出土遺物からは縄文時代早期から前期初頭にかけての捨て場と考えられ、数m規模の楕円形状の捨て場や旧川岸沿いに不整な形で細長く分布する捨て場がある。厚さは10～20cmと薄い。捨て場からは、土器片・石器のほかに異地性の焼土、炭化物、獣の骨・歯が出土する。獣は歯の特徴からシカやイノシシと考えられる。量的にはシカの歯が圧倒的に多い。

＜出土遺物＞ 大コンテナで15箱の土器片と2箱の石器が出土した。土器片は、ほとんどが住居跡と捨て場から出土し、貝殻文・捺糸文・条痕文・圧痕文・沈線文・縄文の文様を持ち、縄文時代早期中葉から晩期に属するものである。このうち、前期初頭に属するとみられる土器片は、口縁部が斜位平行線と渦巻きを組み合わせ縄文圧痕文、胴部が非結束の羽状縄文で施文された上川名式（花積下層式）に対比される土器で、北東北では貴重な土器と考えられる。石器は剥片石器が多く、石鏃や石匙などが出土している。

3. まとめ

小松I遺跡は、気仙川の河川性堆積物を地山として、遺跡北側からの崖錐性堆積物や局所的な扇状地性堆積物により厚く覆われていた。地山までの埋土厚は旧地形面からは最大3m以上である。出土遺物から縄文時代早期中葉から前期初頭、および晩期～弥生時代初頭頃の集落跡と考えられる。前者は温暖化がすすむ時期で、シカなどの豊富な食料資源を背景に集落ができたと考えられる。後者は寒冷な時期を抜け出し、不安定ながら温暖な気候に戻った時期で、再び食料資源を求めて住みついたとみられる。今回の調査で縄文時代をさらに解明する上で貴重な情報を提供できたと思われる。



小松 I 遺跡遺構配置図



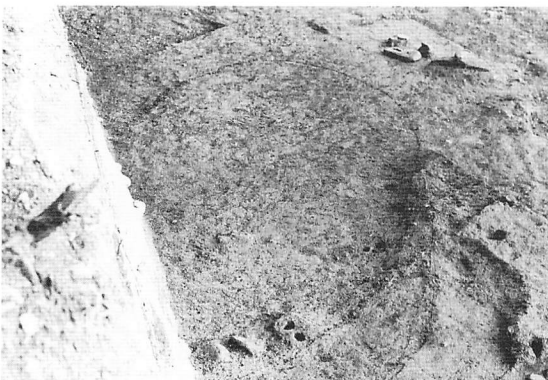
縄文時代前期初頭住居跡精査状況（手前と奥）西から撮影



遺物出土状況



地床炉



縄文時代早期中葉住居跡



遺物出土状況

小松 I 遺跡検出遺構・出土遺物

(22) 小松Ⅱ遺跡

所在地 気仙郡住田町上有住字小松
177-1ほか

委託社 大船渡地方振興局土木部

事業名 新交流ネットワーク道路整備事業

発掘調査期間 平成12年4月9日～6月16日

調査対象面積 2000㎡

発掘調査面積 2000㎡

遺跡番号・略号 NF07-0023 KMⅡ-00

調査担当者 鳥居達人・吉田 充

協力機関 住田町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 遠野

1. 遺跡の立地

小松Ⅱ遺跡は住田町役場から北東方向にあり、JR釜石線上有住駅の南西方向約10km地点に位置する。西には縄文時代早期から前期初頭の集落跡である小松Ⅰ遺跡が、南には小松洞窟が隣接する。気仙川に削られた左岸の段丘上にある遺跡の標高は約200mで、現況は畑作地である。遺跡の山体側は最低でも2回の崩落があったと思われる、大型の石灰岩が土器とともに埋まっている。

2. 調査の概要

検出された遺構は竪穴住居跡4棟、竪穴住居状遺構7基、土坑36基、柱穴状土坑90基で、時代は縄文時代中期末葉と晩期末から弥生時代を中心とする。

出土遺物は縄文(弥生)土器が大コンテナで7箱、石器は小コンテナ1箱、土偶などの土製品が15点出土している。その他では平安時代の坏の破片が出土している。

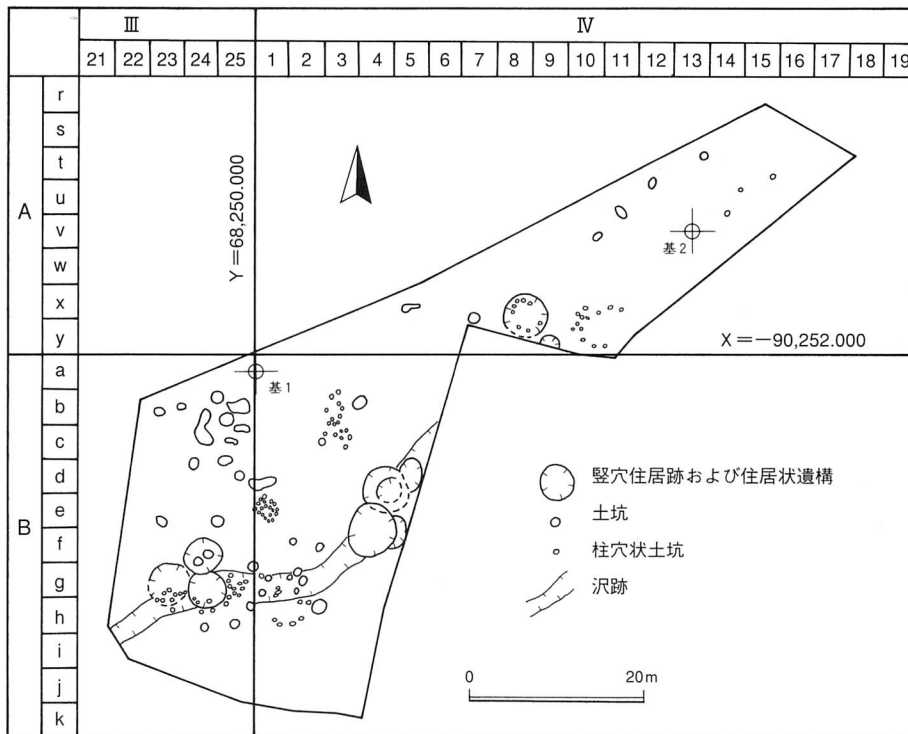
<竪穴住居跡および住居状遺構> 竪穴住居跡の時代の内訳は中期末葉1棟、晩期末から弥生時代初頭の住居跡1棟、時期不明2棟である。中期のものは、大型の石灰岩の下から検出され、平面形・規模は円形の4m前後、中央部に地床炉をもつ。晩期末の1棟は平面形はだ円形で、中央より北側によったところに地床炉がある。炉跡をもたない竪穴住居状遺構は縄文時代前期または中期のものが多い。

<土坑> 土坑36基のうち6基が晩期から弥生時代の集石土坑で、そのうちの1基は開口部1m、深さ80cmあり、墓坑の可能性が高い。小型の柱穴状土坑のなかには、時代不明であるが掘っ立て柱建物跡状を呈すものや円形に壁柱穴を構成するかのようにならぶものがある。

<遺物> 出土土器は、縄文時代中期と晩期末葉から弥生時代初頭が主体で、中でも大洞A'式土器の出土が多い。器種は大型の浅鉢や壺形土器など多様である。石器は、礫石器が凹み石など3点、剥片石器が石匙など7点出土している。

3. まとめ

今回の調査で、縄文時代中期及び晩期末頃に集落が営まれていたことが確認できた。また前期からの生活の痕跡もあり、先人の生活活動範囲は隣接する小松洞窟との関わりも考慮すべきであろう。



小松Ⅱ遺跡遺構配置図



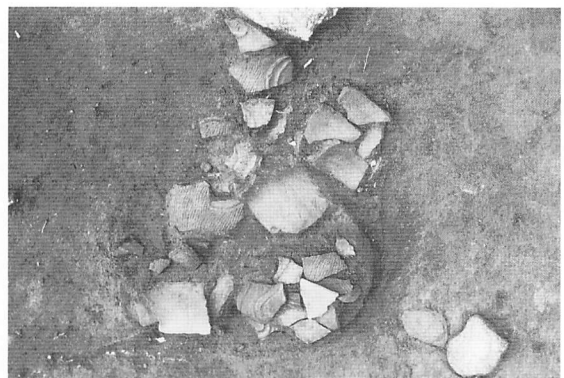
B区全景（北から）



土層断面



縄文時代中期竪穴住居跡



土器出土状況

小松Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物

(23) ゴッソー遺跡

所在地	九戸郡種市町第18地割字小路合 65-1ほか
委託者	久慈地方振興局土木部
事業名	一般県道明戸種市線改良事業
発掘調査期間	平成12年4月18日～8月30日
発掘対象面積	4,180㎡
発掘調査面積	4,180㎡
遺跡番号・路号	I F 58-0341・G S-00
調査担当者	丸山浩治・井上信介
協力機関	種市町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 階上岳

1. 遺跡の立地

ゴッソー遺跡は、JR八戸線種市駅の南側約1km付近、国道45号の西側に位置し、東側約500mに太平洋を望む海岸段丘上の緩斜面地に立地している。調査区を横断する形でワウザイ川が東流する。標高は約22～35mで、現況は畑地・山林である。なお、平成6年調査区域は国道45号を挟んだ東側にあたる。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡4棟、土坑17基、時期不明の柱穴状小土坑28基である。なお、ワウザイ川以北の区域からは旧河道跡が4本確認された。

<竪穴住居跡> 4棟とも斜面下方にあたる北東部から検出された。平面形は円形または楕円形を呈し、規模は概ね4m前後である。内、3棟は地床炉を、1棟は石囲炉状の石組みを伴う。また、前者中の2棟からは、南東側に入出口状施設が検出されている。床面からは遺物がほとんど出土せず、細片ばかりであるため明確な時期は判断し兼ねるが、おそらく縄文時代後期頃と思われる。

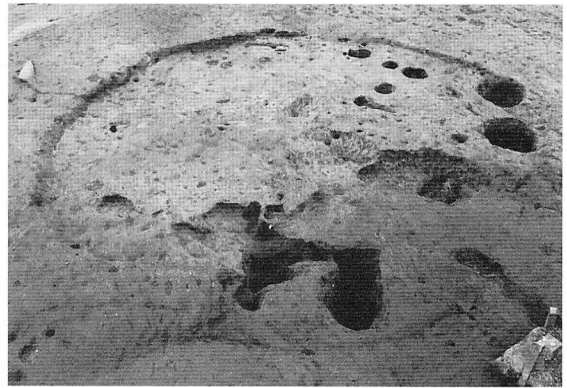
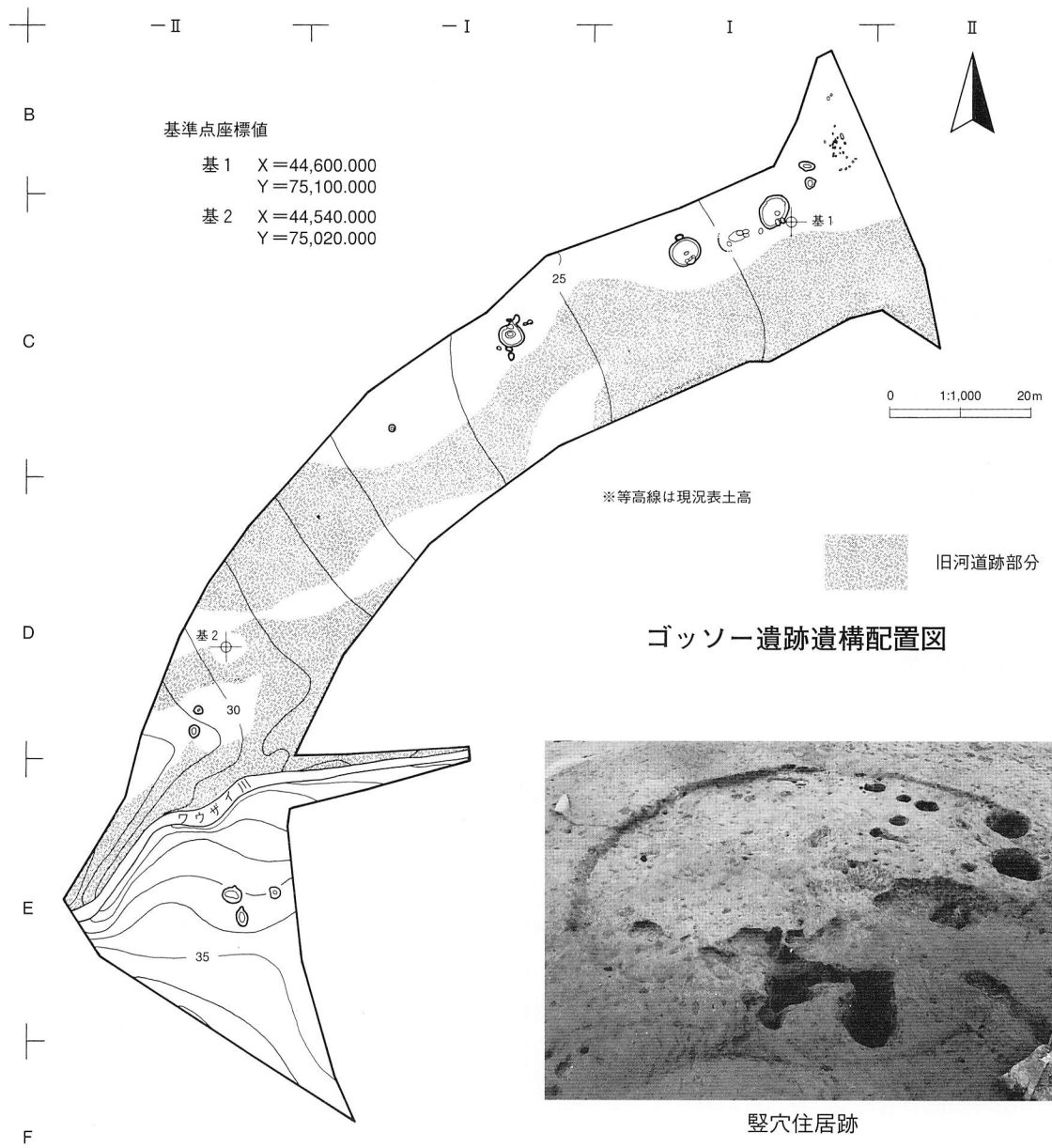
<土坑> ワウザイ川北側から14基、南側から3基検出された。内、8基は住居跡周辺から検出されたもので、全て1m以下と小さい。住居跡に関連を持つ可能性がある。

<柱穴状小土坑> 28基とも斜面下方の北東端で検出された。規則的な配列等は確認できない。平成6年調査時も同様の遺構群が国道45号傍から検出されており、これに関係するものと思われる。

<出土遺物> 大半が旧河道跡覆土から出土したもので、総量は大コンテナ約23箱分になる。内訳は、土器約15箱分、石器約8箱分、土製品、石製品、銭貨が各数点である。土器は縄文時代前期初頭から晩期まで存在するが、前期後半のものが主体をなす。特徴的なものとしては製塩土器（晩期頃か?）がある。石器は石核石器中心で、中でも片面礫器が多い。

3. まとめ

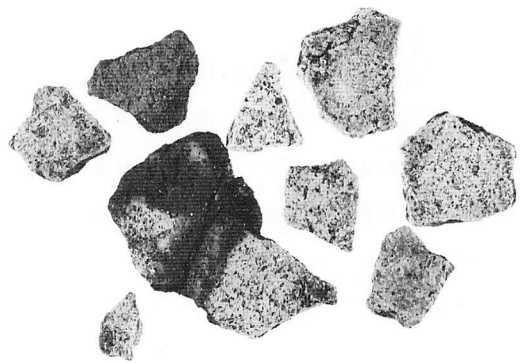
今回の調査で縄文時代後期頃と思われる居住域が確認された。住居時期と主体遺物時期に差異があるが、遺物は各時期のものが同一層から伴出しており、また出土地点が旧河道跡周辺であることから、大半が斜面上部から流入したものと考えられる。このため縄文前期の主体部は一段上の段丘に存在する可能性がある。



竪穴住居跡



旧河道跡



製塩土器

ゴッソー遺跡検出遺構・出土遺物

(24) 山根館跡

所在地 久慈市山根町字下戸鎖第6地割
97番地11ほか

委託者 岩手県久慈地方振興局土木部

事業名 主要地方道久慈岩泉線改良工事

発掘調査期間 平成12年4月17日～11月2日

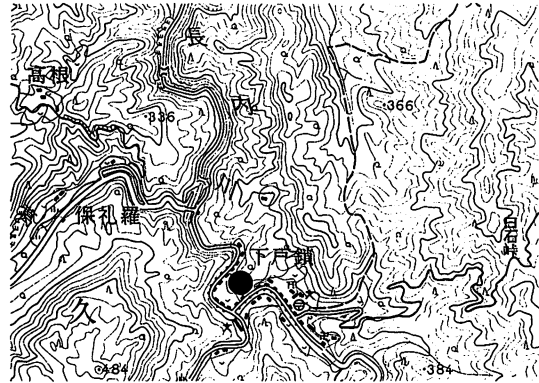
調査対象面積 9,000m²

発掘調査面積 9,000m²

遺跡番号・略号 J F 68-2228、YND-00

調査担当者 阿部勝則・岩渕 計・江藤 敦

協力機関 久慈市教育委員会・
山形村教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中関

1. 遺跡の位置と立地

山根館跡は、久慈市街地から南東約15km、下戸鎖にある山根中学校の北約200mに位置し、蛇行しながら北流する長内川によって形成された低地に向い南西側に張り出す丘陵尾根に立地する。館跡の標高は240～270mで、長内川との比高は約40mある。館跡の現況は山林で、戦後は畑地として利用された時期がある。

2. 調査の概要

館跡は、北東から南西に張り出す丘陵の尾根部を利用して築かれている。南側は断崖、北側は険しい急斜面の自然の要害を利用し、尾根裾の西側の緩斜面上に二重の空堀と土塁(A)、後背となる東側に空堀と土塁(B)が廻り、それらに囲まれた頂上付近に三つの曲輪(曲輪1～3)が築かれている。今回の調査区は、館跡の西側部分で、館跡に関連して、曲輪1箇所、空堀6条、土塁2基、虎口1箇所、竪穴住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、焼土遺構15基、土坑20基、柱穴状土坑100基が検出された。

<空堀> 6条すべて空堀で、断面V字形をした葉研堀である。館跡の西側に大きく二重の空堀が廻る。各堀の実効堀幅は10mを越える。曲輪3と曲輪2の間には実効堀幅3.5m、法高2.5mの竪堀1条が廻る。

<土塁> 二重の空堀の外側に2基見つかっており、北側が地山の削り出し、南側が盛土で構築されている。

<曲輪> 自然の尾根を削平して造られており、西側の堀に近接する部分では整地した痕跡が確認された。

<虎口> 西側の土塁が途切れる箇所から入り、外側を2条の空堀が廻る窪地が搦手と思われる。

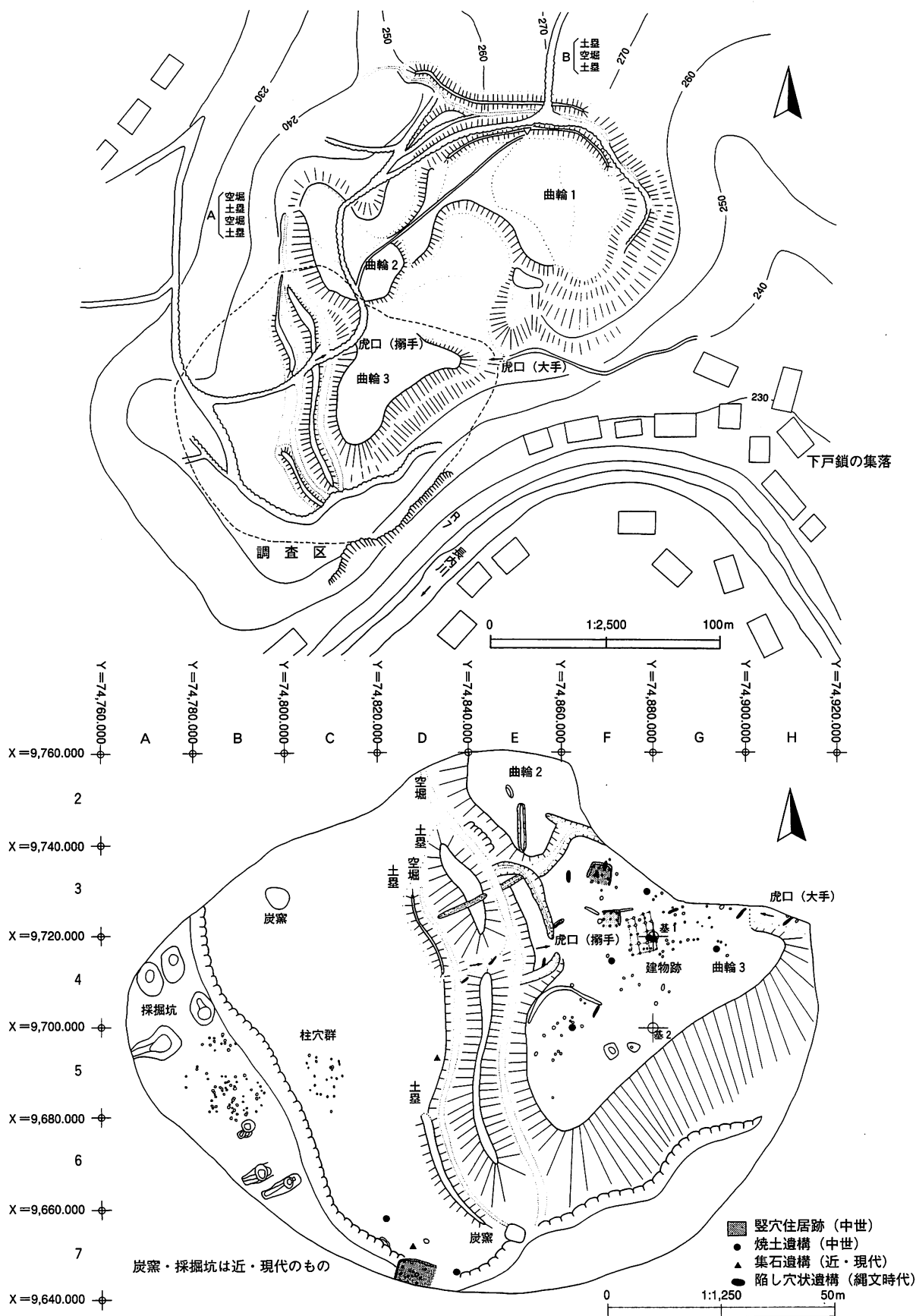
<竪穴住居跡> 3棟検出された。一辺4m前後の方形で、壁際に柱穴が廻り、中央に地床炉を持つ。

<掘立柱建物跡> 曲輪から1棟検出された。桁行4間×梁行3間の建物跡で、ほぼ南北に軸線をもつ。

<出土遺物> 陶磁器・金属製品・銭貨が出土している。陶磁器は中国産の白磁の皿の破片で、15世紀初頭ごろと考えられる。銭貨は渡来銭で唐銭・北宋銭・明銭などがあり、本銭の他に模倣銭もある。

3. まとめ

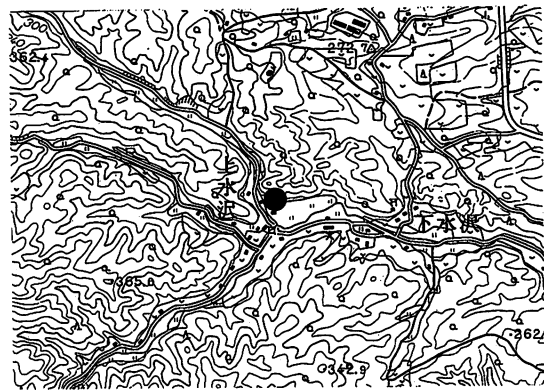
山根館跡は別称「伊藤館」と呼ばれているが、築城主については詳細は不明である。時期は15～16世紀を中心とした館跡の可能性が高い。下戸鎖の地は、近世には塩の道と呼ばれる野田街道の馬継所であったことが記録に残されている。遺構や遺物が少ないことから、この館跡での日常生活は想定し難く、戦乱などの非常時に交通の要衝に築かれた砦的な性格の館跡であると考えられる。



山根館跡縄張図・遺構配置図

(25) ^{かみみずさわ}上水沢Ⅱ遺跡

所在地 九戸郡大野村大字水沢第7地割
字日当12番地2
委託者 久慈地方振興局
久慈農村整備事務所
事業名 ふるさと農道緊急整備
発掘調査期間 平成12年5月25日～9月25日
調査対象面積 1,364m²
発掘調査面積 1,364m²
遺跡番号・略号 J F07-2188・KMSⅡ-00
調査担当者 北村忠昭・小野寺正之
協力機関 大野村教育委員会



遺跡位置 1:50,000 陸中大野

1. 遺跡の立地

上水沢Ⅱ遺跡は大野村役場の南東約2.8km、水沢小学校の東北東約0.4kmに位置し、高家川の上流左岸、丘陵裾部の南向き緩斜面上に立地する。標高は約228～235m、遺跡の現況は草地と畑地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡13棟（縄文時代早期～前期1棟、後期11棟、弥生時代1棟）、住居状遺構4棟、土坑36基（内フラスコ状土坑4基、墓坑1基）、焼土遺構9基、柱穴状土坑158基、埋設土器1基等である。

＜竪穴住居跡＞ 早期～前期の住居跡は南側で検出され、炉は地床炉である。規模は確認できる部分で判断すると径4m前後になると思われる。後期の住居跡は中央部から北側にかけて検出され、石囲炉の住居2棟、地床炉の住居6棟である。残りの3棟は炉を確認できず、壁柱穴のみである。炉を持つ住居8棟のうち全体の様相が窺えるものは6棟で、平面形は円形2棟、楕円形2棟、不整形2棟である。規模は大形（長軸径6m以上）1棟、中形（長軸径4～6m）4棟、小形（長軸径4m未満）1棟である。中形の4棟のうち2棟には壁柱穴がほぼ全周に確認された。また、出入口が確認された住居跡もある。

＜住居状遺構＞ 調査区の中央に3棟、北側に1棟検出された。形状が判別できるものは2棟だけで、楕円形と不整形である。規模は5.0×3.7mと6.8×6.0mである。

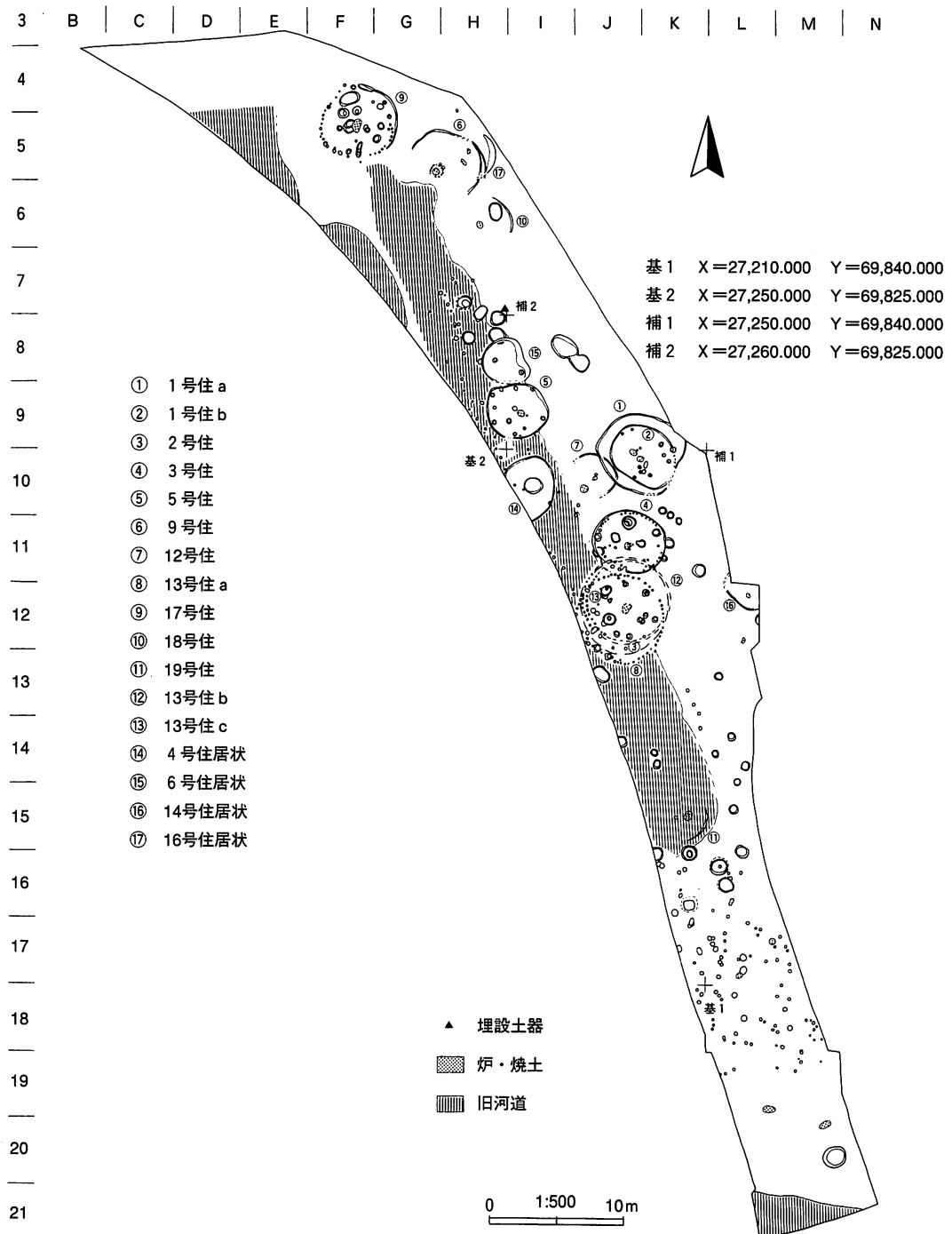
＜土坑＞ 南側を中心に36基検出された。このうち4基がフラスコ状土坑で、1基が墓坑である。フラスコ状土坑の規模は大きいもので径約1.4m、小さいもので径約1.2mである。時期は縄文時代である。墓坑の平面形は8字状で礫と伴に獣骨が検出された。規模は土坑類最大で約2.0×1.5mである。時期は現段階では確定できない。その他の土坑の平面形は円形もしくは楕円形である。規模は大きいもので開口部径約1.8m・深さ約0.4m、小さいもので開口部径約0.4m・深さ0.2mである。時期は出土する遺物が少なく、現段階で確定できるものは少ないが、覆土などから縄文時代に属すると思われる。

＜焼土遺構＞ 平面形は不整形のものが多く、規模は最大で約1.2×0.6m、最小で約0.3×0.2mである。

<出土遺物> 大コンテナで土器13箱、石器2箱出土した。土器は縄文時代早期・前期・中期・後期・弥生時代のものが出土しているが、大半は縄文時代後期中葉のものである。石器は礫石器が多く、剥片石器は数十点で出土は少なかった。土偶やスタンプ形土製品などの土製品も数点出土している。

3. まとめ

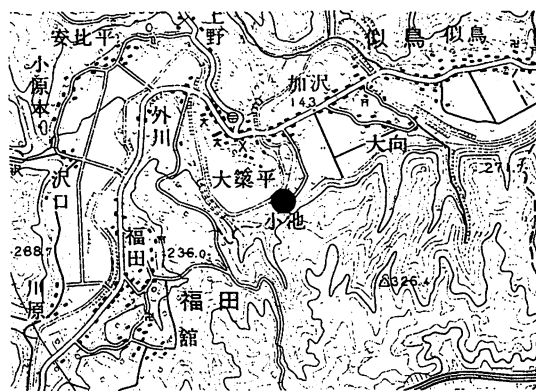
今回の発掘調査で主に縄文時代後期の集落跡であることが判明した。また、縄文時代早期から弥生時代までの遺物が出土しており、長い間に渡って断続的に人々が利用していた土地であることがわかった。



上水沢Ⅱ遺跡遺構配置図

(26) ^{おおむかい}大向Ⅱ遺跡

所在地 二戸市似鳥字田中坪13-1 ほか
委託者 岩手県二戸地方振興局土木部
事業名 緊急地方道路整備
発掘調査機関 平成12年4月13日～6月21日
調査対象面積 2,100m²
発掘調査面積 2,100m²
遺跡番号・略号 J F 18-1149・OMⅡ-00
調査担当者 菊池貴広・長村克稔
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 浄法寺

1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線二戸駅から南西方向に約6kmに位置し、安比川右岸に形成された河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は、約145mである。安比川のとの比高は約5～10mである。

2. 調査の概要

今回の調査は、平成11年度からの継続調査である。検出された遺構は、竪穴住居跡16棟・土坑11基・畝間状遺構・畝復旧溝跡約200m²・柱穴状ピット約150基である。時代は平安時代である(奈良時代の住居跡1棟)。
<竪穴住居跡> 16棟検出された。16棟中1棟は奈良時代、他は平安時代である。テラス状の張り出しを持つ住居が12棟検出された。その中で外周溝を伴う住居が2棟ある。外周溝は、住居の周辺の中で比較的地形が高い場所に位置することから、住居に雨水等が流れ込むことを防ぐ溝の機能性等が考えられる。テラスの性格については、土器の出土状況から土器を置くスペースと推定されるが、他の用途も考えられる。また、16棟の竪穴住居跡の中で8棟が焼失住居である。以下項目毎に竪穴住居跡の特徴を述べる。

(規模) 平面形の規模は最大で約7.0×7.0m、最小で約2.0×1.9mである。検出面から床面までの深さは最深で約1.0m。最も浅いもので約30cmである。

(形状) 概ね方形・隅丸方形を呈する。

(埋土) 十和田a降下火山灰がすべての住居に堆積しており、堆積状況は次の3つに大別される。①検出面から床面までレンズ状に堆積するもの。②埋土上部にレンズ状に堆積するもの。③ブロック状に堆積するもの。

(カマド) 削り貫き式と掘り込み式の2形態である。削り貫き式については、煙出部に礫を筒状に構築されたものも見られた。また、掘り込み式については、すべての住居が礫をカマドの袖部・煙道部を構築する際に使用し、残存状況が良好なカマドは天井石が残存しているものもある。カマドの方角は東・南東・北・西向きとそれぞれバリエーションがある。

(柱穴) 柱穴が認められた住居は7棟で、床面に4基あるもの、住居外側に柱穴を円形状にもつもの等の特徴がある。

＜土坑＞ 11基検出された。うち6基は底面に焼土を伴う、底面に焼土を伴う土坑は住居に隣接した位置で確認された。住居に関連した遺構と推測される。規模は2.5～1.8mの範囲に入り、平面形は方形・小判形・楕円形を呈する。

＜畠復旧痕跡＞ 約200㎡検出された。断面観察により、十和田a降下火山灰がブロック状・ラミナ状に堆積した状態が、平面に溝状のプランとして確認された。数回にわたる復旧痕跡と考えている。溝状のプランの軸は南北方向である。

＜柱穴状ピット＞ 約150基検出された。埋土には十和田a火山灰が認められ、時代は十和田a火山灰降下前後の遺構と考えられる。

＜出土遺物＞ 大コンテナで7箱出土した。遺物の大半は住居内から出土した土師器・須恵器である。住居内の出土遺物は他に紡錘車・刀子等がある。また、縄文時代の遺物としては早期の貝殻沈線文土器・中期の大木8b式土器・晩期前葉の土器と凹石・剥片石器等が出土している。また、近世～近代と思われる陶器片が数点出土している。

4. まとめ

今回の調査により、平成11年度に調査した遺構数と合わせて考えると大規模な集落の一部と考えられる。竪穴住居跡については、規模・形状（テラス状・外周溝）・埋土の堆積状況・カマドの形態と位置・焼失住居と焼失されていない住居の区分・出土遺物等で、分類し時期差が判別できればと考えている。また、畠復旧痕が検出されたことから、耕地に従事していた住民の竪穴住居跡を推定出来ればと考えている。

土坑・柱穴状ピットについても竪穴住居跡に関連する遺構の可能性が考えられる。それぞれの遺構を関連づけて、集落の性格を明らかに出来ればと考えている。



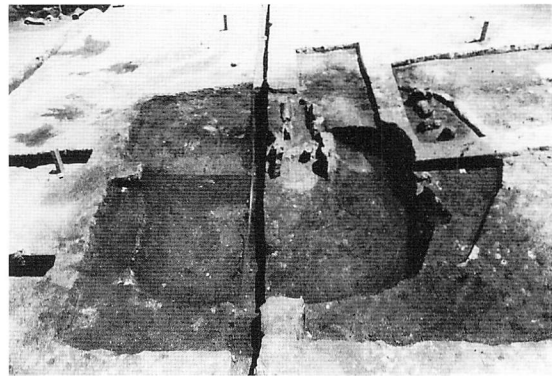
14号竪穴住居跡・外周溝が伴う



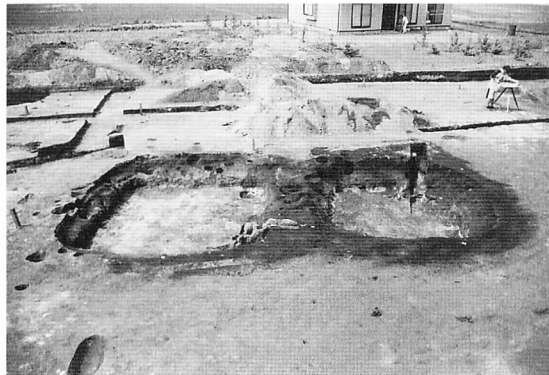
14号竪穴住居跡煙出し部



12号竪穴住居跡



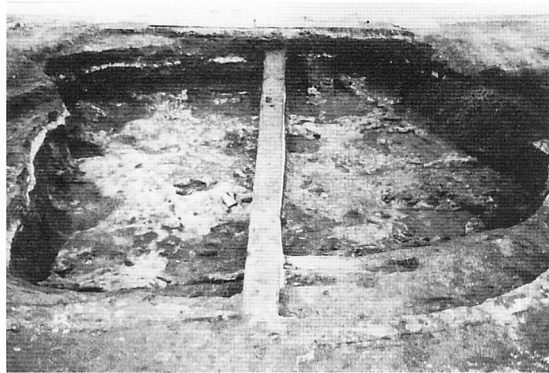
10号竪穴住居跡



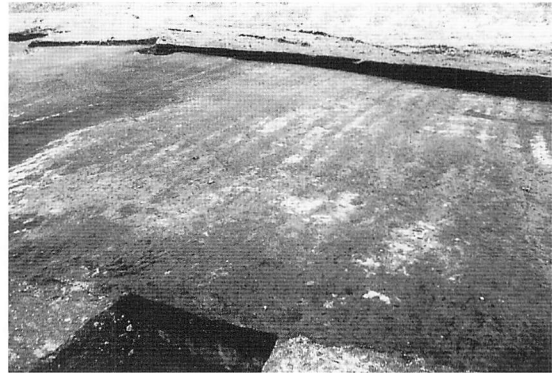
18・19号竪穴住居跡



12号竪穴住居跡埋土（白色To-a）

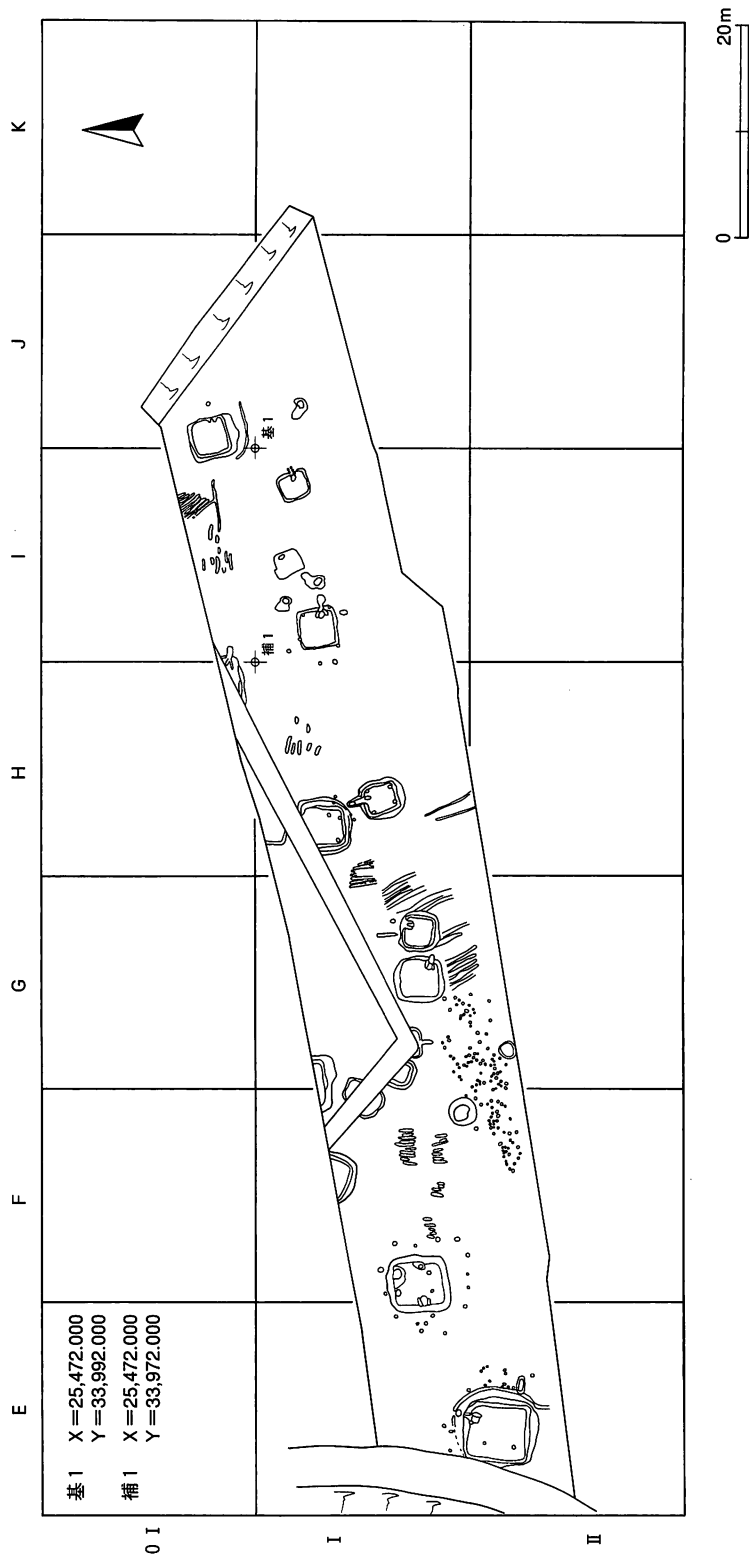


14号竪穴住居跡焼失状況



畠復旧痕跡検出状況

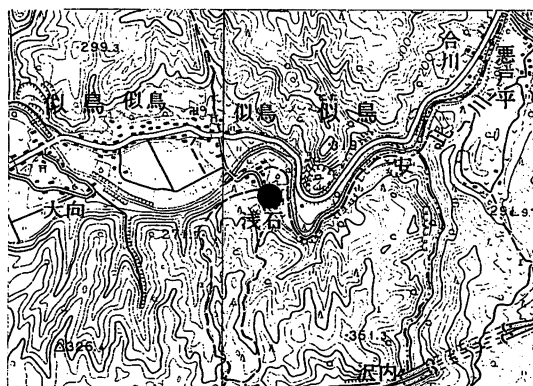
大向Ⅱ遺跡検出遺構



大向Ⅱ遺跡遺構配置図

(27) 浅石遺跡

所在地 二戸市似鳥字嘸ノ坂19-1
委託者 岩手県二戸地方振興局土木部
事業名 緊急地方道路整備
発掘調査機関 平成12年6月5日～8月11日
調査対象面積 1,760㎡
発掘調査面積 1,760㎡
遺跡番号・略号 J E18-0396・A I-00
調査担当者 菊池貴広・長村克稔
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 浄法寺・一戸

1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線二戸駅から南西方向に約4kmに位置し、安比川右岸に形成された河岸段丘に立地する。標高は約140mである。

2. 調査の概要

検出した遺構は、竪穴住居跡3棟・土坑3基・焼土11基・畝間状遺構41条・柱穴列6基・柱穴状ピット34基である。その他に縄文時代後期中葉～後葉の土器を主とする遺物包含層1ヶ所を確認した。

本遺跡の出土遺物は、大コンテナで20箱出土した。時代は縄文土器（後期中葉～末葉・晩期前葉～中葉）・弥生土器（前期～中期）が出土した。土製品は土偶・スタンプ形土製品・円盤状土製品等が出土。石器は、石鏃・石匙等の剥片石器と石錘・凹石・磨石・石棒・石斧の礫石器が出土した。比較的礫石器の出土が大半を占める。礫石器の中でも石錘が半数以上の割合を示す。その他に土師器坏・中国産の白磁・青磁・国産の染付の磁器片が出土している。

＜竪穴住居跡＞ 3棟を検出した。1棟は縄文時代後期中葉～後葉と思われる。壁際に柱穴列を持ち、入り口も確認された。他2棟は、縄文時代晩期前葉～中葉の竪穴住居跡と思われる。住居の炉はそれぞれ石囲炉と土器埋設炉を持つ。

＜土坑＞ 3基検出された。性格については不明である。

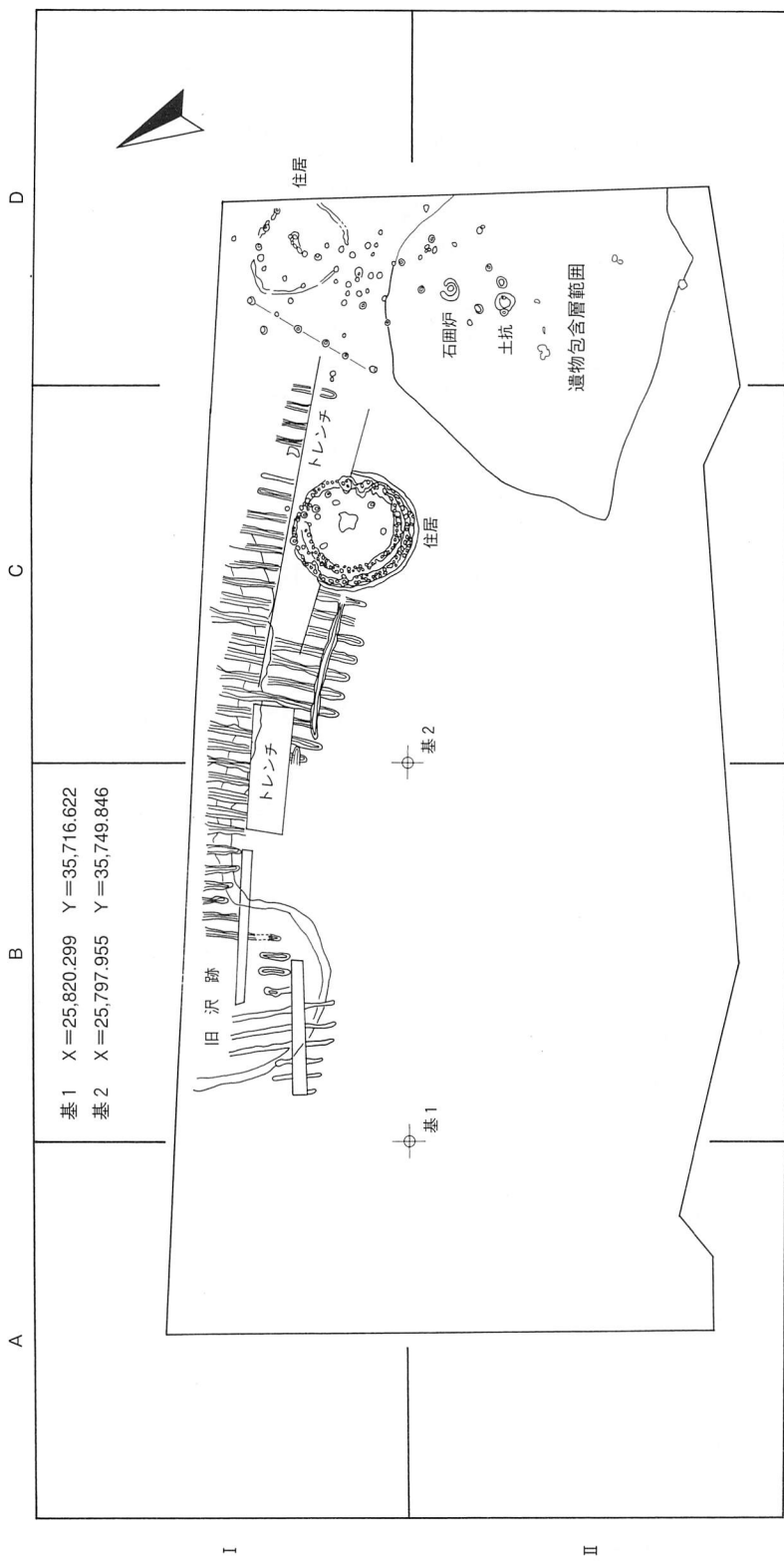
＜焼土＞ 11基検出された。断面観察から異地性と原地性に分かれる。

＜柱穴列＞ 6基の柱穴で構成されている。

＜畝間状遺構＞ 調査区西側の沢の氾濫により、土砂に埋没した遺構と考えている。畝幅は約40～60m、畝間幅は25～45cmである。畝の断面形はかまぼこ形を呈する。

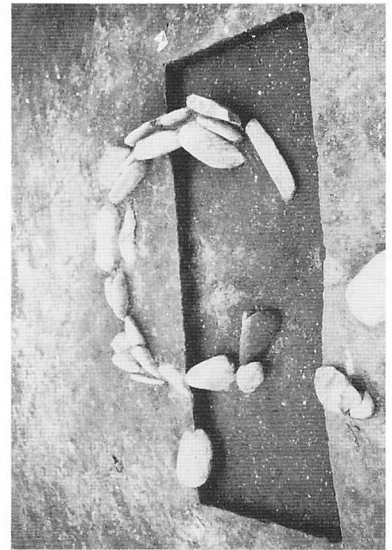
3. まとめ

今回の調査では、遺物数の多くは縄文時代後期中葉～後葉を主とした土器・石器が大量に出土した。前記した時代に伴う遺構は、竪穴住居跡1棟のみである。他2棟の竪穴住居跡の時代時期は出土遺物から縄文時代晩期の可能性があると推定しているが検討中である。遺物量・遺構の立地条件から、調査区東側（平成13年度調査予定）に遺構の存在が高いと考えている。現段階で検出した遺構の性格・時期等を検討し、遺跡の性格を明らかにし、次年度の調査に生かしたいと考えている。

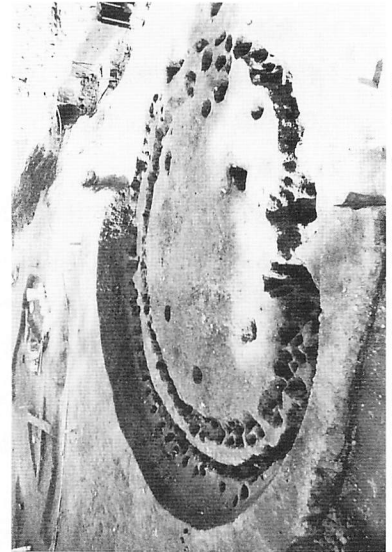


遺物包含層内白ぬき焼土

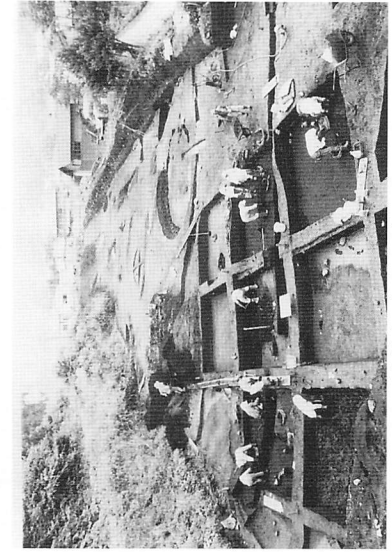
浅石遺跡遺構配置図



石囲炉



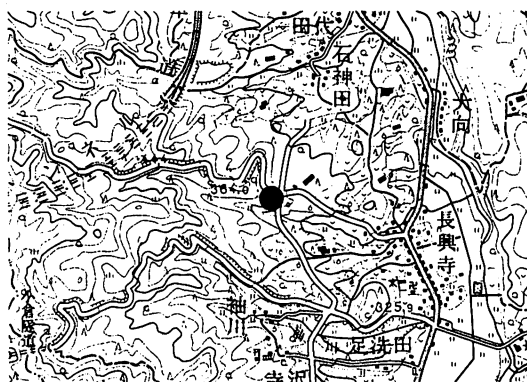
竪穴住居跡（縄文時代後期中葉～後葉）
浅石遺跡検出遺構



遺物包含層調査風景

(28) 長興寺 I 遺跡

所在地 九戸郡九戸村大字長興寺48-31
ほか
委託者 二戸地方振興局土木部
事業名 新幹線関連道路整備
発掘調査期間 平成12年4月17日～11月22日
調査対象面積 13,600m²
発掘調査面積 13,600m²
遺跡番号・略号 J F 12-1110・CK J I-00
調査担当者 金子昭彦・菊池 賢・北田博義
井上信介
協力機関 九戸村教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一戸

1. 遺跡の立地

長興寺 I 遺跡は、八戸自動車道九戸インターチェンジの南南東約 2 km、主要地方道二戸・九戸線沿いに位置する。瀬月内川に向かって緩やかに延びる丘陵斜面に立地し、両側は沢によって開析されている。付近は、このような東西に延びる馬の背状の細長い尾根が連続している。本遺跡の北西には折爪岳がそびえる。

調査範囲は、尾根頂部から南東に下る斜面であり、途中傾斜の急な場所を含んでいる。以下、尾根頂部（周囲の斜面を若干含む）、斜面（急勾配の場所）、斜面下と呼び分ける。調査範囲は、主要地方道の北側も含んでいたが、トレンチを入れた結果（図参照）、遺構は検出されず、遺物も縄文土器が数片出土したのみであった。現況は牧草地で、その造成の際に斜面下の一部を除き大きく削平されている。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡 6 棟、住居状遺構 2 基、土坑 71 基、陥し穴状遺構 10 基、焼土 2 基、土器埋設遺構 6 基で、斜面下では縄文時代前期後半を主体とする遺物包含層が検出されている。

<竪穴住居跡> 尾根頂部に 2 棟、斜面下に 4 棟検出した。尾根の 2 棟は、不整形だが、1 棟は一辺 3.8 m 程の方形、もう 1 棟は 3.4 × 3 m 程の楕円形であり、両方とも地床炉を持つ。方形の住居からは縄文時代後期の瘤付土器が出土している。もう 1 棟も後期の可能性がある。斜面下の 4 棟は、西側に偏在しているが、立地は傾斜が急なところから緩やかなところまで、尾根から谷までマチマチである。1 棟が 5 × 4 m 程度の五角形、2 棟が直径 2.6 m 程度の円形～隅丸方形、残り 1 棟は不明である。五角形のは、周溝を持つが、炉は石が抜きとられ掘り起こされて、埋め戻されていた。埋土中から比較的多くの土器が出土した。円形のうち標高の高い方は、床面が非常に堅く締まっていたが、炉はなかった。もう 1 棟は、五角形の住居の隣にあり、地床炉で埋設土器を持つ。残り 1 棟は、中振火山灰層中に壁と床があったため不明な点が多いが、地床炉で埋設土器を持つ。斜面下の 4 棟は、いずれも縄文時代前期後半の可能性が高い。

<住居状遺構> 竪穴住居跡に類似するが、炉を持たず、かつ底面が床のように堅く締まることもない遺構である。斜面下に 2 基検出した。1 基は 2 × 0.8 m 程度の方形、もう 1 基は直径 2.8 m 程度の円形に近い。

<土坑・墓坑> 形態や埋土の類似性で、5 つに分けられる。平面形が隅丸長方形のもの、小判形で人為的

に埋め戻され弥生土器を含むもの、やや不整形で埋土に十和田a火山灰を含むもの、最後はその他の円形を基調とするもので、大型と小型の二つに細分される。隅丸長方形のものは、尾根頂部に1基検出された。時期は不明。十和田a火山灰を含むものは、尾根頂部に1基、斜面下に1基検出された。古代のものと思われる。

小判形のもの、尾根頂部に1基発見された。長さ1.2m、幅0.9m、深さ0.6mで、明らかに埋め戻されており、底から管玉が3、鉄製品が1点出土した。これらの特徴とこれまでの調査例から、骨は残っていないが墓の可能性が高い。さらに埋土中から4つの土器が出土し、ほぼ完形に復元された。それぞれの場所から別々に出土し、埋め戻されており、一つは後北C2・D式の影響を受けている。

その他の円形を基調とする中で小型のものは、尾根頂部に1基、斜面に1基検出された。大型のものは、多寡はあるが尾根頂部から斜面下まで広がっている。64基検出された。多くは断面形が袋状（フラスコ形に代表）を呈す。馬の背状に東西に延びる尾根側（南側）に多く検出され、斜面（下半）に1つ、斜面下に1つ集中する場所がある。遺物が出土した土坑は少ないが、4基から完形に近い土器が出土した。縄文時代前期後半（2基）、後期前葉と晩期前葉である。晩期前葉のものは、出土状態から副葬品の可能性がある。

<陥し穴状遺構> 1基が円形、9基が溝状の陥し穴である。円形のもの、斜面と斜面下の境付近に検出された。埋土には中礫火山灰を含んでおらず、縄文時代前期以前に遡る可能性が高い。底面に不整形の副穴が見られる。溝状のものは、尾根頂部に1基、斜面（下半）に5基、斜面下に3基検出した。斜面の5基は並んでいるととらえられなくもないが、基本的にはみな単独で点在している。斜面下の1基は、縄文時代前期の竪穴住居跡と重複しており、明らかに陥し穴の方が新しく、埋土上部に黒土を含んでいる。

<焼土遺構> 斜面下の、東端と中央付近に1基ずつ検出した。中礫火山灰層（二次堆積）中である。中央の方は近くに焼けた礫があり、炉跡であった可能性もある。

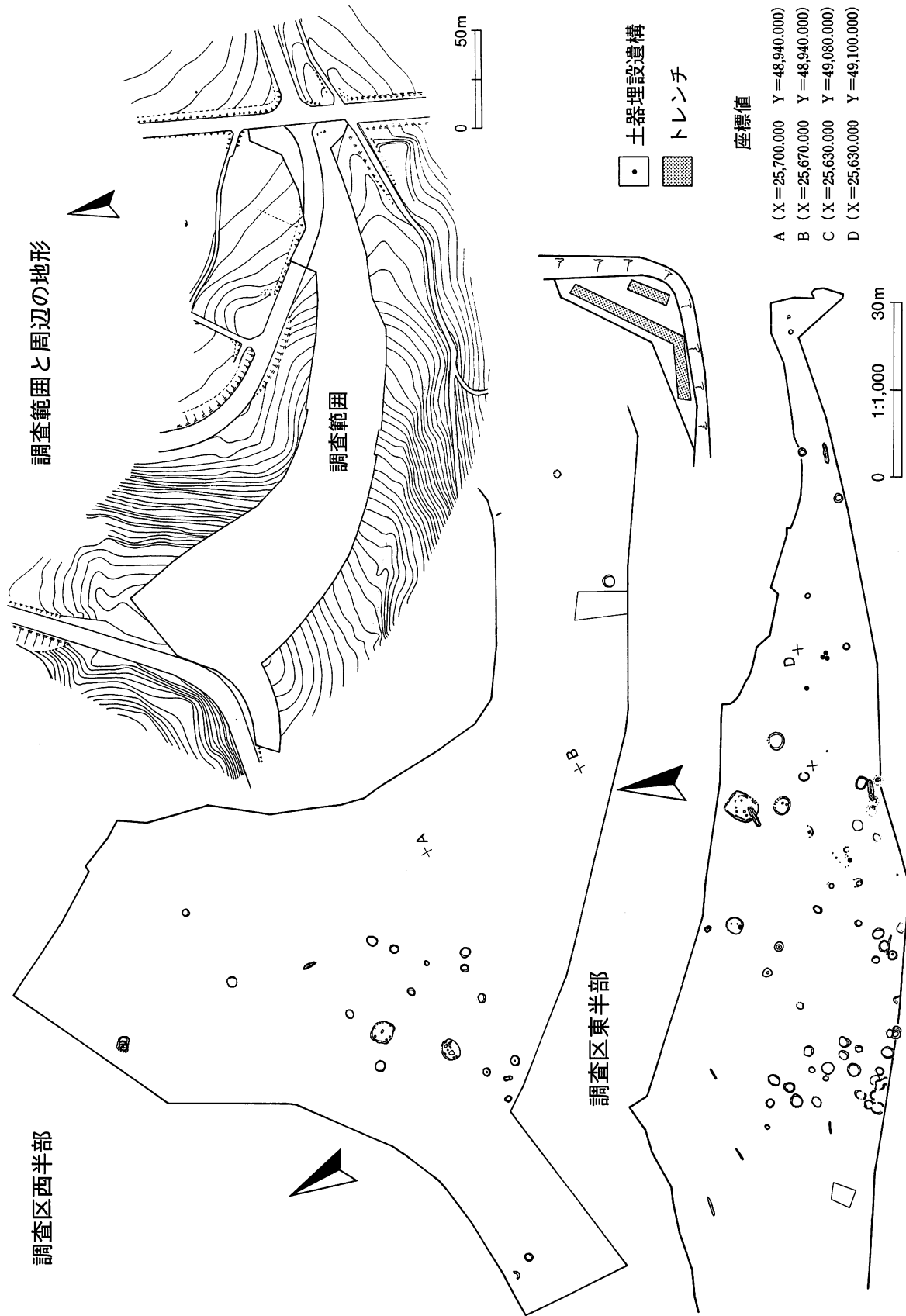
<土器埋設遺構> 斜面下に5基検出した。いずれも縄文時代前期後半の土器で、掘り方ははっきりしなかった。1基は、竪穴住居跡の壁際埋土中に埋設されており、上面に礫が載っていた（写真図版参照）。また、縄文時代前期の竪穴住居跡の2棟からも埋設土器が検出されている。

<遺物包含層> 斜面下のみ検出された。遺構構築に伴う排土や焼土等はほとんど見られず、人為的に形成された捨て場と言うよりは、自然堆積の土の間に土器が挟まれているという状態に近い。この地域によく見られる、黒土層と中礫火山灰層（二次堆積）の間に面的な広がりをもって出土する。ただし、土器が集中する場所は比較的限られ、上下に厚みをもって出土することはなかった（写真図版参照）。

<出土遺物> 土器は、大コンテナ（30×40×30cm）で46箱出土しており、うち約40箱を縄文時代前期後半（円筒下層b～d式）の土器が占める。ほとんどが遺物包含層から出土したものである。その他、縄文時代前期初頭、中期初頭（円筒上層a式）、後期前葉（蜚沢式、十腰内I式）、後期末葉（瘤付土器第Ⅱ段階～第Ⅳ段階）、晩期前葉（大洞BC1式）、弥生時代末期（赤穴式？、後北式系）の土器などが出土している。石器は、中コンテナ（30×40×20cm）で17箱出土しており、凹石等の礫石器が大半を占める。以上の他、管玉3点、石剣1点などが出土している。

3. まとめ

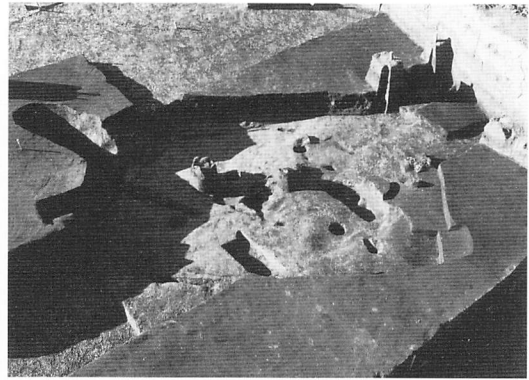
調査の結果、今回の調査区は、縄文時代前期後半の集落跡、後期～晩期の狩猟採集を中心とした場所で、弥生時代の終わり頃に墓が作られたことがわかった。古代（奈良時代？）にも何らかの活動が行われたようである。尾根頂部の竪穴住居跡2棟は縄文時代後期の可能性が高いが、住居のあり方や遺物の出土状況から恒常的に集落が営まれていたとは考えにくい。縄文時代前期後半では、田代遺跡という同時期の大きな集落跡が北北東約1.5kmの瀬月内川そばにある。当センターが調査しており、その関係も今後の課題となろう。



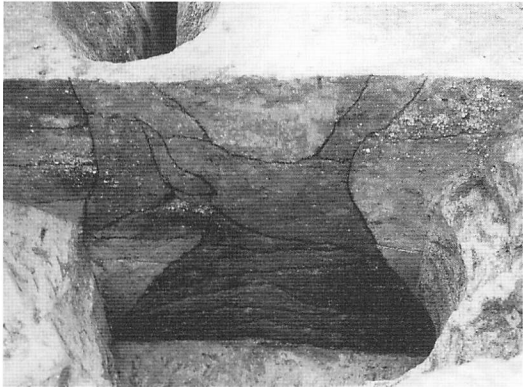
長興寺 I 遺跡遺構配置図



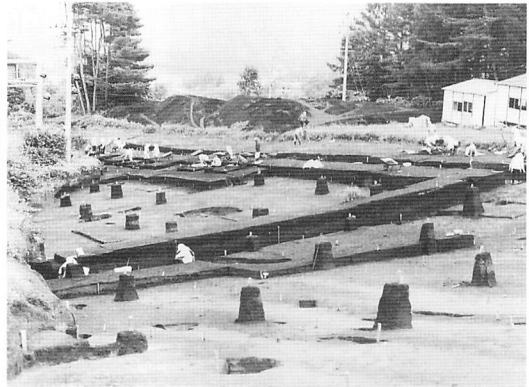
調査前風景（北西から）



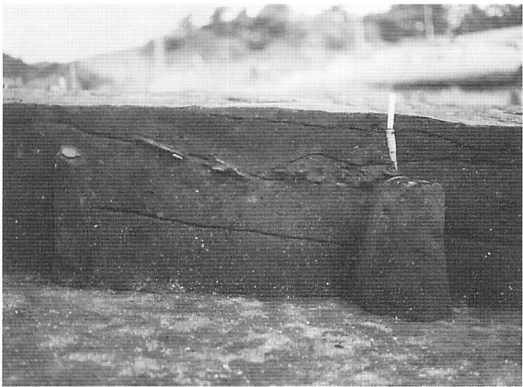
竪穴住居跡



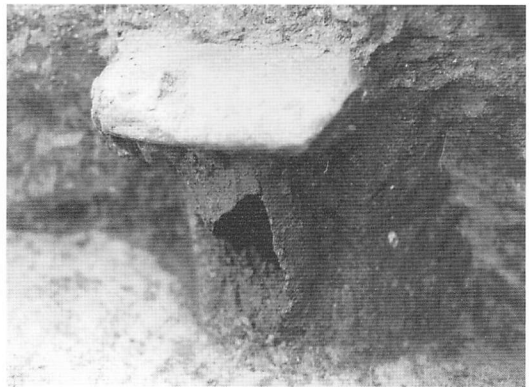
フラスコ状土坑断面



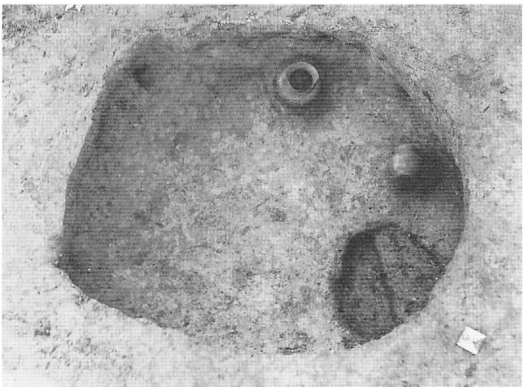
遺物包含層調査風景



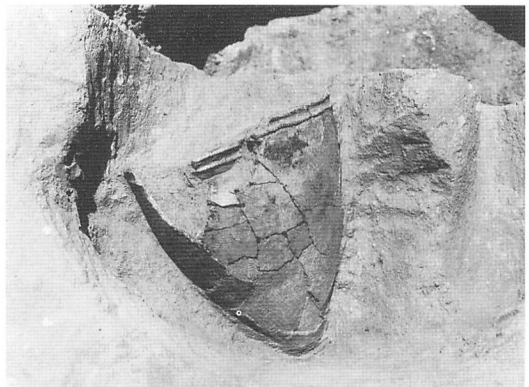
包含層遺物出土状況



埋設土器



縄文時代晩期土器が出土した土坑

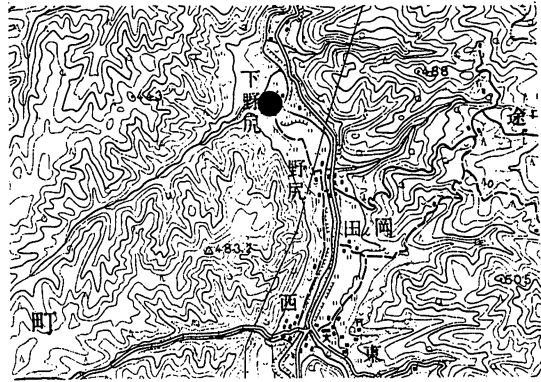


弥生時代末期の土坑

長興寺 I 遺跡検出遺構・出土遺物

(29) のじり 野尻Ⅲ遺跡

所在地 二戸郡一戸町平糠字野尻22番ほか
委託者 岩手県二戸地方振興局
二戸農村整備事務所
事業名 一般農道整備（野尻地区）
発掘調査機関 平成12年8月1日～8月31日
調査対象面積 375m²
発掘調査面積 375m²
遺跡番号・略号 J E 69—0302・N J Ⅲ—00
調査担当者 菅原靖男・村木 敬
協力機関 一戸町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 葛巻

1. 遺跡の立地

野尻Ⅲ遺跡はJR東北本線小繋駅の東約4.5kmに位置し、北流する平糠川左岸の河岸段丘に立地している。標高は270m前後で、調査区の現況は北側が水田、中央部がタバコ畑、南側は休耕田である。

2. 調査の概要

今回の調査は調査区西側を並行して走る一般農道の整備に伴うものであるが、盛土による工法を採用するため検出面以下が保護されるとの理由から、遺跡の内容確認調査のみを行った。調査内容は遺構の検出作業と遺物の出土状況等の把握である。確認された遺構は竪穴住居跡1棟、土坑17基、柱穴状土坑19基である。遺構は平面プランの確認のみでとどめているため詳細な時期は不明であるが、出土遺物から判断して縄文時代後期から晩期にかけてのものと思われる。

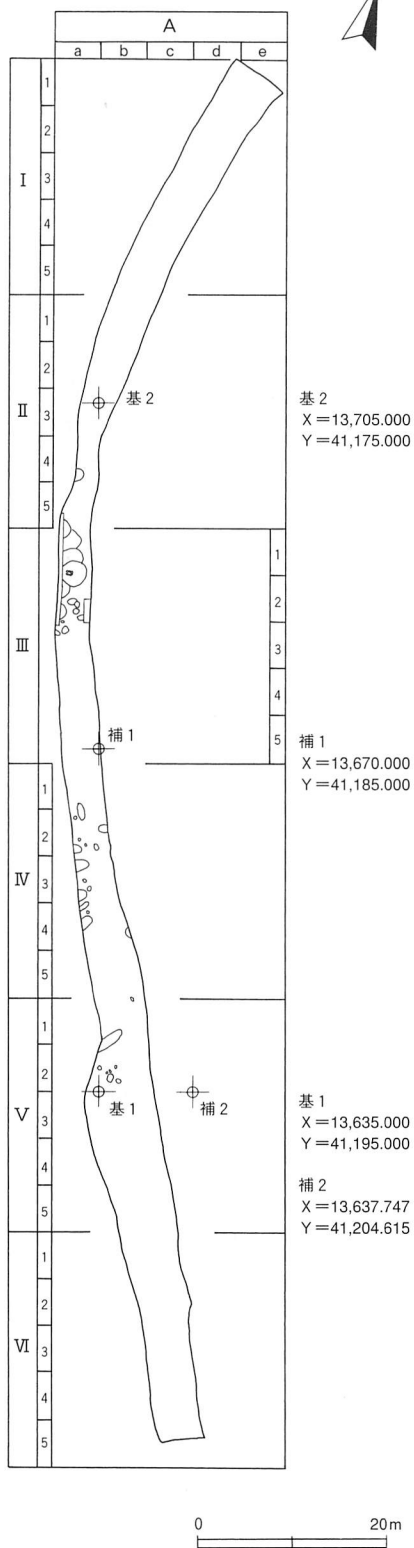
<竪穴住居跡> ⅢA区の畑地として利用されていた場所から1棟検出した。耕作土を除去した時点で石囲炉が検出されたことから、これまでの耕作によって削平を受け、床面のみが残ったと推測される。西側が調査区外へ延びるため規模の全容は不明であるが、確認された規模は東西2.9m×南北2.75mである。炉は6個の礫を径60×50cmの円形に配している。焼土は確認していない。

<土坑> ⅢA区で6基確認したものの中には竪穴住居跡と重複関係にあるものも見られるが、詳細が不明なため土坑としてとらえている。どの遺構も西側が調査区外へ延びるため全容は不明であるが確認された部分の長軸が86～260cmと比較的規模の大きなものもある。一方、ⅣA区、ⅤA区で確認したものは長軸86～296cm、短軸40～116cmの長楕円のもが多く、形状からその多くが陥し穴と思われる。

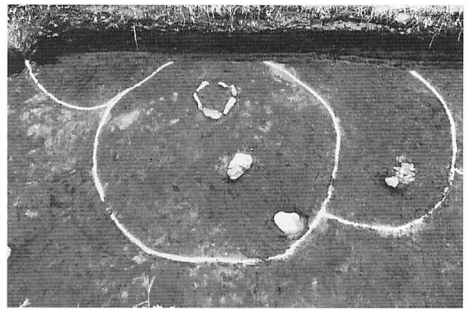
<出土遺物> 今回出土した遺物は大きなコンテナ9箱でそのほとんどが縄文時代後期～晩期にかけての土器であるが、土偶の脚部も1点出土している。石器は大きなコンテナ0.5箱ほどである。

3. まとめ

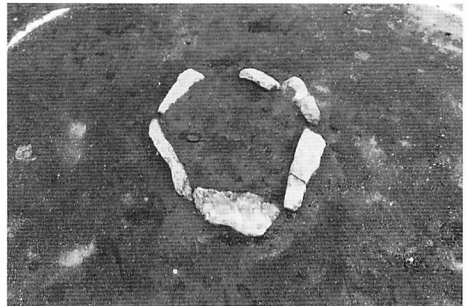
1棟ではあるが竪穴住居跡が確認されたことで、周辺部にさらに住居跡が存在することが考えられる。また、調査区内において遺構が確認された場所に偏りが見られるため、場所の使い分けについても可能性が考えられ、今後検討が必要である。出土遺物や周辺遺跡との比較検討から本遺跡の性格を明確にしていきたい。



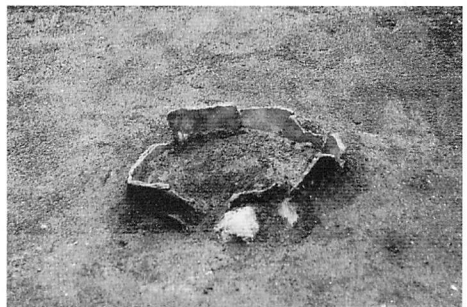
調査区全景 (南から)



1号竖穴住居跡検出状況 (東から)



石囲炉検出状況 (東から)

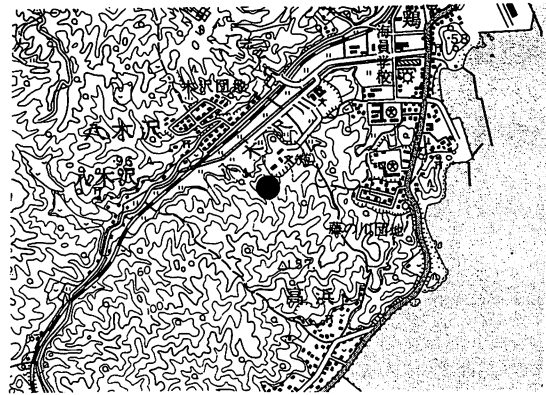


遺物出土状況

野尻Ⅲ遺跡遺構配置図・検出遺構

(30) しまだ 島田Ⅱ遺跡

所在地 宮古市大字八木沢第4地割ほか
委託者 岩手県住宅供給公社
事業名 宮古短大地区宅地造成事業
発掘調査期間 平成12年4月19日～11月30日
調査対象面積 22,718m²
発掘調査面積 23,942m²
遺跡番号・略号 LG43-0338・SMDⅡ-00
調査担当者 小山内透・赤石 登
東海林淳美・本多準一郎
小林弘卓・川又 晋
菊池 賢・藤原賢徳



遺跡位置

1:50,000 宮古

協力機関 宮古市教育委員会・宮古市都市計画課

1. 遺跡の立地

島田Ⅱ遺跡は、JR山田線宮古駅の南方約2.5kmに位置し、遺跡の北東部には「島田遺跡」として調査が行われた県立宮古短期大学が接している。遺跡は北側方向に樹枝状に延びる複数の尾根と、それに挟まれる谷からなり、今年度調査区の標高は、30～84mである。遺跡の現況は勾配のきつい山林で一部は、伐採用道路となっている。遺跡周辺には、尾根続きで本遺跡の一部と考えられる島田遺跡をはじめ、平安時代の集落でもある中世城館の磯鶏館山遺跡、八木沢古館・新館、縄文・弥生・古代の複合遺跡である上村貝塚など、すでに調査が行われた遺跡も多く分布している。

2. 調査の概要

島田Ⅱ遺跡においては、平成10年度に当センターが用地内全域にわたり分布調査を行なっている。その際、平安時代の竪穴住居跡、製鉄・鍛冶関連の多数の遺構・遺物を検出し、調査が必要とされる範囲は約76,000m²となり、平成11年度より3カ年計画をもって実施される予定となった。この試掘調査の結果を受け昨年度は遺跡西側部分の約30,000m²の発掘調査を行ない、今年度は遺跡中央部約22,000m²の調査を行なった。本年度調査区は大きく尾根部と谷部に分かれ尾根部は、南端を起点に北側と西側にそれぞれV字形に伸びている。谷部は両側の尾根に挟まれる中央部分で鉄生産関連遺構の集中する標高35m前後の北側低部と標高48m前後の南側部分の2段になっている。

検出された遺構は縄文時代の竪穴住居跡2棟、焼土遺構4基、古代の竪穴住居跡41棟、竪穴住居状遺構7棟、工房跡19棟、鉄生産鍛冶炉跡17基、炭窯32基、土坑36基、焼土遺構15基、炉跡4基、溝跡1条、貝層1基である。

<竪穴住居跡> 縄文時代の竪穴住居は2棟が確認されており、谷部北側低部で検出された。1棟は西側部分が削平を受けており残存状態は良くないが、平面形は楕円形ないし円形を呈すると考えられ、規模は直径3m前後である。もう1棟は直径約3mの円形で複式炉が検出された。

古代の竪穴住居跡は尾根部を中心に存在するが、谷部でも10数棟が検出されている。尾根部の竪穴住居は標高50m以上の頂部平坦地に主に作られている。これは地形上の制約によるものが大きいと思われる。谷部でも同様に建てられる場所が限られるという結果、標高35m前後の斜面上の同じ所で何度も建て替えが行なわれている。規模は1辺4～5m前後のものが多く、最少は1辺約2.5m、最大は1辺約6.5mで平面形は方形及び隅丸方形を呈する。かまどは刳り貫き式の煙道を持つものがほとんどで、本体は粘土だけで造られたものと石を芯材にしているものがある。付設場所は東西南北どの位置にも付き、規則性はみられないがそれぞれ山側の高い側に設置される傾向がある。柱穴が確認された住居は多くはないが確認された住居には4本の支柱穴が配置されているものが多い。また床面に炉跡や現地性の焼土が確認されたり、羽口、鉄滓類が出土するものもあることから、住居でも鉄製品加工の小鍛冶を行っていた可能性が考えられる。また埋土中の大量の炭化物と廃棄焼土から焼失住居と考えられるものが2棟あり、1棟からは屋根の材料と思われる萱（カヤ）の炭化材も床面で確認された。

<工房跡・竪穴状遺構> 工房跡は19棟検出されているがすべて鉄生産関連遺構の集中する谷部でみつかった。平面形は、遺構の重複が多いことと谷側が崩れている場合が多いことから工房としてははっきりとした形は不明であるがほぼ長方形を呈し、長軸は3～4m、短軸は1～2mのものが多い。工房は斜面を利用し何度も同じ場所に作られる場合が多く、床の貼りかえを何度も行なった形跡がみられる工房もある。またひとつの遺構に5基のかまどが確認されたりするものもあり、工房から竪穴住居へさらに工房へといった変遷を繰り返すことが多い。工房に伴う炉は原料鉄を精錬するための大鍛冶の炉（精錬鍛冶炉）、精錬した鉄から鉄製品を製作した小鍛冶の炉（鍛練鍛冶炉）が確認されているが今後の検査結果を待たなければ性格がはっきりしない地床炉のみのものも多い。大鍛冶の炉は東側斜面最上部の工房から直径約40cm、深さ10cm程度の浅い椀形に掘り込まれ、内面が青変した還元焼土の炉跡として検出された。小鍛冶の炉は金床石や鍛造剥片を伴う形で5基検出されている。また、原料と思われる砂鉄の溜まりが発見された工房もみつまっている。こうした遺物の出土状況、鍛造剥片の分布等から鉄製品を製作する上での使用道具類の配置、人的な配置も推測されつつある。その他の工房からは地床炉以外の床面施設はほとんど見つかってはいない。

竪穴状遺構は尾根部で5棟、谷部で2棟検出されている。長軸3m短軸2m程度の楕円状のものが多いが大きさ、形状については規則性はみられない。柱穴はみられないが床面に掘り込みや廃棄焼土があるものが尾根部でみつかっており、なんらかの作業をした形跡がうかがえるが用途ははっきりしない。

<炉跡・焼土遺構> 炉跡としたものは地面を掘り窪めた中で火を燃やした跡が確認されたもので尾根部で4基検出された。大きさは1～1.5mの円形や楕円形で深さは60cmほどである。うち1基は掘り込みの内面に新たに土を貼った構造で、また別の1基は青く還元した焼土になっており製鉄か大鍛冶の鉄生産炉の可能性が大きい。

焼土遺構は15基検出されているが、尾根部・谷部でほぼ同数みつまっている。その広がりには20～30cm前後のものが多い。これらの焼土遺構は工房に伴うものではなく、火を使用した目的は現段階でははっきりしないが、中には立地や付近から鉄関連遺物が多く出土していることなどから、鉄生産に関連したものも含まれると思われる。

<炭窯> 炭窯は32基が検出されているが、尾根部・谷部にほぼ平均的に分布している。平面形は楕円形・長方形・略円形のものがあり、大きさも直径1m程度のものから短軸1m長軸4m程度のものであり変化に富んでいる。楕円形と長方形のものはすべて尾根部に位置し、竪穴住居が埋まりきる前の窪みを利用しており、円形のものはいずれも谷部の工房付近の斜面に位置している。これらの炭窯は底面及び壁面が火熱を受

け赤褐色変化を示しており、また埋土中に多量の炭化物を含むことから簡便な伏せ焼き窯と考えられる。

<土坑> 土坑は炭窯同様、尾根部・谷部に偏在せずに36基が検出された。平面形は円形のものほとんどであるが楕円形のものも少数ある。円形ものは直径約2 m前後、深さは約1～2 m程度のもが多く、大きくなるほど深くなる傾向がある。底面は碗型ものは少なく平坦なものがほとんどで、筒状を呈する。いずれも出土遺物がほとんどないため具体的用途は不明であるが、工房付近に位置するものは鉄生産に関する遺構であると考えられる。

<溝跡> 北側尾根部の斜面に位置する竪穴住居の西側で検出された。等高線と平行するように南北に延び、規模は約5 m、幅は約40 cmで、昨年度調査でも同様のものが検出されており溝の一部と考えられる。

<貝層> 北側谷部から西方にやや離れた小さな谷の斜面上にある竪穴住居で検出された。住居が埋まっていく途中で、遺構南東部の端の窪みに廃棄されたものと考えられる。大きさは南北に約2 m、東西に約1 mの広がりを持ち、厚みは約20 cm、貝層は14層を数え、総量は中コンテナ7箱であった。貝の種類はイガイ・アワビ等が多く魚類の骨・ウニ等も散見される。

<出土遺物> 今回の調査で出土したのは縄文時代の土器・石器、古代の土師器・須恵器・あかやき土器・砥石・磨石・羽口・炉壁・鉄製品・鉄滓等である。



縄文土器は、竪穴住居内からは小コンテナ1/5程度、他は遺構外から4/5程度の出土ですべて破片である。また、石器では石鏃5点・磨石3点・有孔石製品1点が出土している。

古代の遺物は土師器・須恵器・あかやき土器が大コンテナ8箱、羽口が大コンテナ8箱、炉壁が大コンテナ2箱、鉄製品が約100点、石製品が大コンテナ6箱、鉄滓類が大コンテナ20箱、貝が大コンテナ7箱出土している。土器類は竪穴住居から出土したものが多く、羽口・炉壁・鉄滓等は大半が工房跡が集中する谷部から出土しており、遺構と関連した分布を示している。土器類は土師器の甕と坏が大半を占めるが遺構数に比較して多くはない。鉄製品には刀子・釣り針・鉄鏃・釘・鍋・金鉗（カナハシ）・鉄先・古銭・用途不明のものがある。県内で4例目となる金鉗は鉄関連遺構の集中する谷部斜面中腹にある1辺2 m前後の工房跡の検出面から出土した。鉄鏃は尾根部谷部どちらからも出土しており、昨年度の調査で出土した鉄鏃と形状が似ていることから平安時代のものと考えられる。鉄釘はすべて角釘でその他の釣り針・鍋等と工房跡が集中する谷部から出土しているが、一番大きな刀子は尾根部の竪穴住居床面から出土している。これらの鉄製品も遺構内から出土しているものが多く、本遺跡内で製作された製品の一部である可能性がある。鉄滓も同様にこの谷部から大半が出土している。ほとんど遺構外からの出土であるが、遺構内からは羽口が中コンテナ1箱、鉄塊系遺物が中コンテナ1/2箱、炉内滓が中コンテナ1/2箱、精錬鍛冶の際に生じたと思われる流出滓が中コンテナ1箱出土した。

3. まとめ

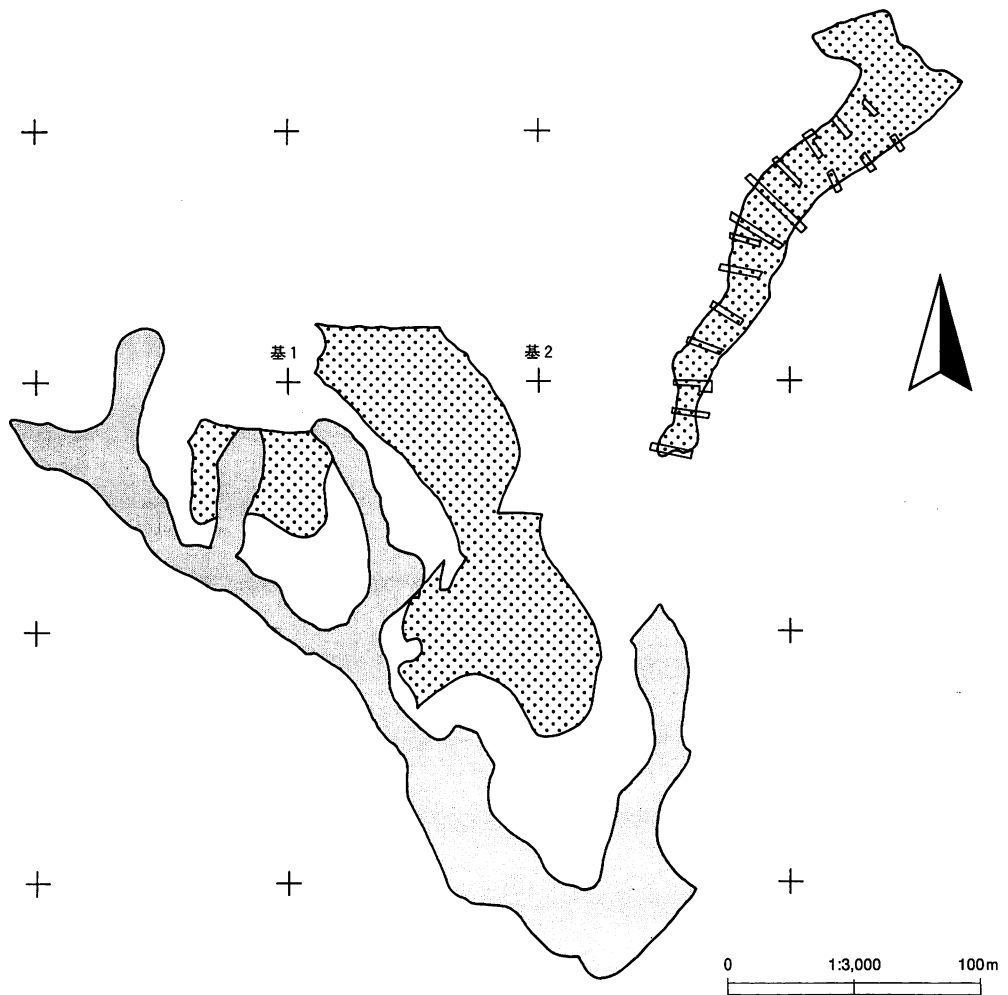
今回の調査では前年までの調査結果同様、古代の竪穴住居群と鉄生産関連遺構が発見された。昨年度と比較して小鍛冶を行なったと思われる工房跡や、鍛冶炉が多数検出された。昨年度は鉄原料（砂鉄等）から鉄塊（鋼）を作るまでの炉跡の割合が多く発見されている。今年度調査区は特に谷部において鉄製品の生産加工を中心とした作業現場的性格がうかがわれる結果となった。同時に遺構内での作業の流れが明確になってきた。昨年度の結果もふまえ、徐々に一連の鉄生産を生業とした古代の大集落の様相がみえてきたといえる。来年度に調査を行なう予定の東側調査区でも試掘調査の結果から今年度と同程度に遺構・遺物が濃密な分布状況を示していることが確認されており、今後の調査によって本地区の鉄生産に関する一大集落の様相がさらに明らかになるものと考えられる。

凡例

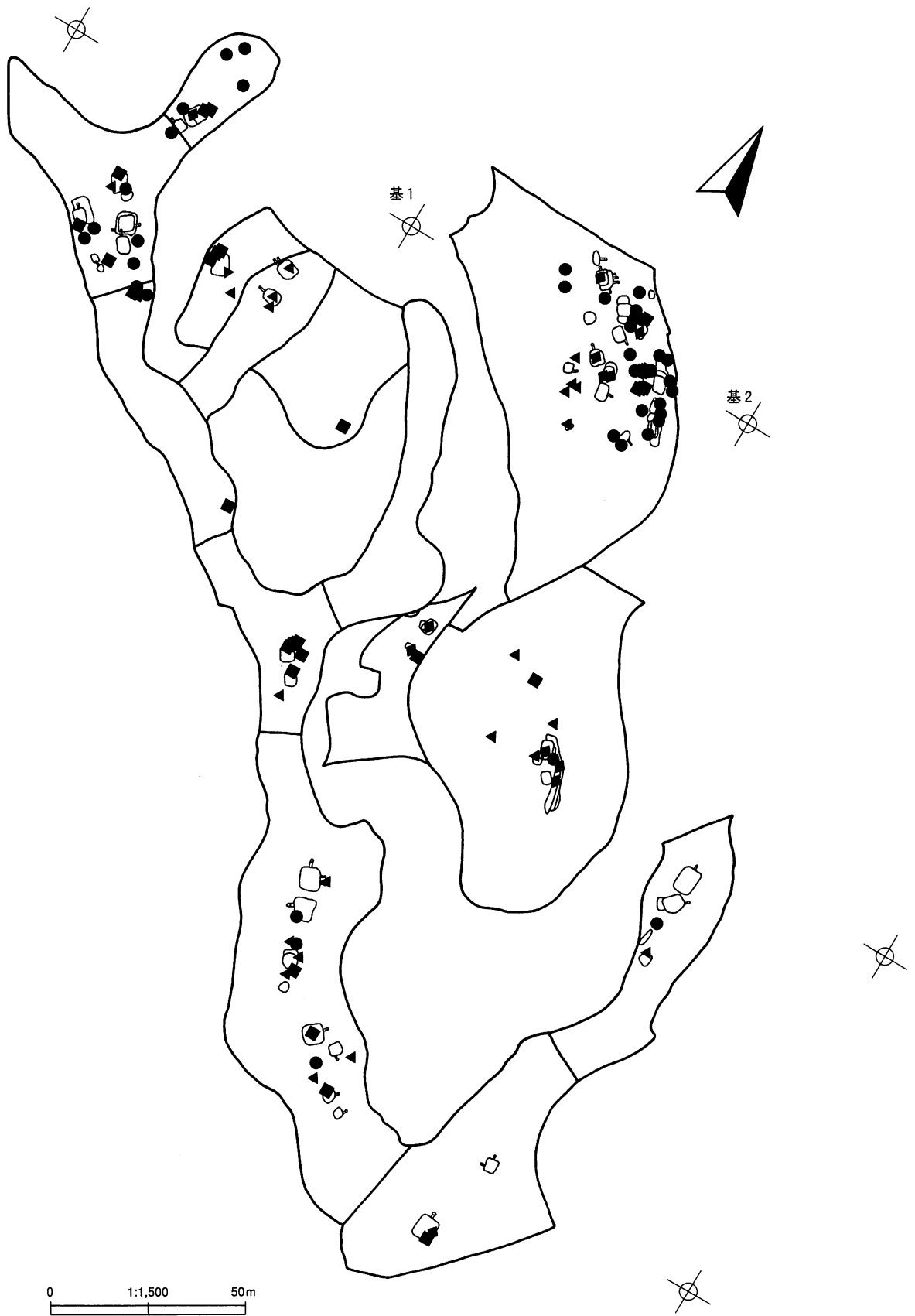
- 竪穴住居・工房跡・竪穴状遺構
 - 土坑
 - 炭窯
 - ▲ 焼土遺構・炉跡
 - ◆ 鉄生産関連炉跡
 - ▼ 貝塚
-
-  谷部
 -  尾根部

基1 X=-42,200.000
Y= 96,200.000

基2 X=-42,200.000
Y= 96,300.000



島田Ⅱ遺跡配置図



島田Ⅱ遺跡遺構配置図



調査区全景



尾根部近景



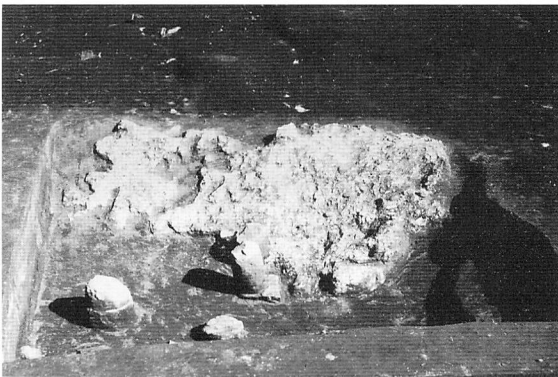
谷部近景



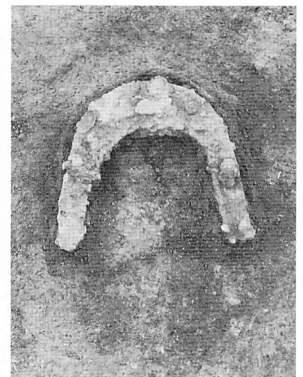
竪穴住居跡（焼失）



鍛冶炉跡



貝層出土状況

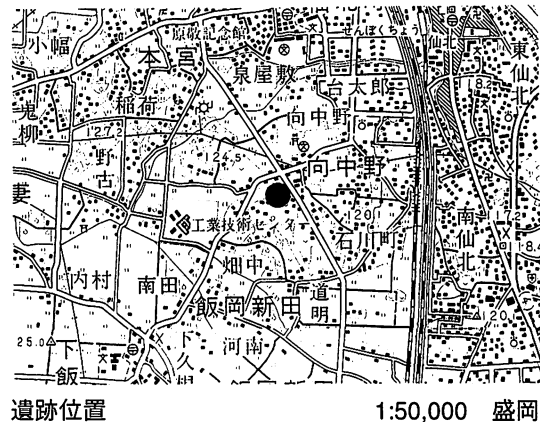


遺物出土状況

島田Ⅱ遺跡検出遺構・遺物出土状況

いいおかさいかわ
(31) 飯岡才川遺跡第3次調査

所在地 岩手県盛岡市飯岡新田2地割
110-1ほか
委託者 盛岡市盛南開発課
事業名 盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間 平成12年7月17日～11月29日
調査対象面積 1,582㎡
発掘調査面積 1,582㎡
遺跡番号・略号 LE16-2291・ISW-00-03
調査担当者 中田 迪・千葉正彦・鈴木 聡
吉田里和・島原弘征
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

飯岡才川遺跡は岩手県盛岡市本宮字稲荷1ほかに所在し、JR東北本線仙北町駅の西側約1.5km、雫石川右岸に立地している。遺跡は雫石川右岸の氾濫平野の微高地に広がっている。今回の調査区域は東西約52～55mを測る。南北約41～52mを測る。概ね台形状の範囲である。現況は宅地・畑地・果樹園となっている。なお、本遺跡の南側には、一段低位の水田(埋没沢)を挟んで対峙する微高地に平安時代の大規模集落である細谷地遺跡が存在する。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構4基・平安時代の竪穴住居跡8棟・竪穴住居状遺構1棟・掘立柱建物跡4棟・土坑32基(不確定なものを含む)・溝4条・円形周溝2条・溜池状遺構1基のほか、近世土坑3基、時期不明の柱穴状ピット約500基である。遺物は、土器、土製品、金属製品等、平安時代～近世までのものが出土している。

<竪穴住居跡> 検出された8棟はともに平安時代に属し、調査区域東南部で密な分布を示す。規模・床面積を見ると、大形住居のRA05(床面積約80㎡)・RA06(約66㎡)、中型住居のRA01・07(ともに約42㎡後者は推定値)・RA03(約36㎡推定値)、小形住居のRA02(約9㎡)に分類できる。なお、RA04・11については調査区外に延びており、分類不能である。

検出されたカマドの煙道は、いずれも地下式(刳り貫き式)であり、主軸方向は、北東に2棟・東4・南東1・北西に2棟で、斉一性に欠ける。

RA01・05・07・11の4棟は焼失住居跡であり、覆土中に多量の焼土・炭化材が混入していた。RA05では主に壁際で炭化した板材・垂木・縄等が良好に残存している。また、RA05・11では、焼失・廃絶した後に一括廃棄されたと思われる多量の遺物(とりわけ須恵器片が異常に多い)が検出され、両者間で接合関係が認められる。これら8棟は大きな時間差はないものと推測されるが、数時期に分離が可能と思われ、今後の検討課題である。

＜**竪穴住居跡状遺構**＞ 1基検出している。小規模でカマドを欠く方形の掘り込みである。底面付近で高台付坏が出土しており、古代に属するものと思われる。方形を基調としほぼ同規模のRD15・16土坑も、竪穴住居跡状遺構の可能性はある。

＜**掘立柱建物**＞ 2間×2間の建物4棟を検出した。RB02～04は軸が若干ずれているが、概ね並列ぎみに配列している。いずれも平安時代に属するものと思われる。類例から、倉庫（米倉？）の可能性が考えられるようである。

＜**土坑**＞ 32基を検出したが、分布は調査区域西側で密である。一部、風倒木痕の可能性のあるものを含んでいる。

前述の方形基調のRD15・16以外にも、円形ないし楕円形を基調とし、断面がすり鉢状、径2m以上と規模の大きいものが数基ある。いずれも性格は不明である。

＜**その他の遺構**＞ 調査区域南側1H3rグリッド付近のRZ03は、調査区域以外に延びるため詳細は不明であるが、約1m弱のすり鉢状掘り込みであるが、覆土下位は泥炭、底面はグライ化しさらに周囲からの湧水が著しい。これから「溜池状遺構」としている。これにRG12溝が接続しており、付随する用水路的なものかもしれない。覆土中に十和田a降下火山灰（To-a）が混入しており、平安時代の遺構と思われる。

また、近世の土坑3基を検出したが、その中のRZ04土坑から人の頭髪・歯・銅鏡（柄鏡）・櫛・ガラス球（数珠球）などが出土している。これから近世の墓坑と考えられている。

＜**出土遺物**＞ 土器、土製品、金属製品など、T-40規格のコンテナで約20箱分である。土器は、大部分が平安時代の土師器・須恵器で、主体を占めるのは須恵器である。須恵器は、大甕・壺等のいわゆる袋物が多く、坏は少量である。土師器は、坏・高台付坏・鉢・甕が出土した。坏はロクロ成形で比較的底径が小さい。また「あかやき」の回転糸切り無調整の坏が出土している。

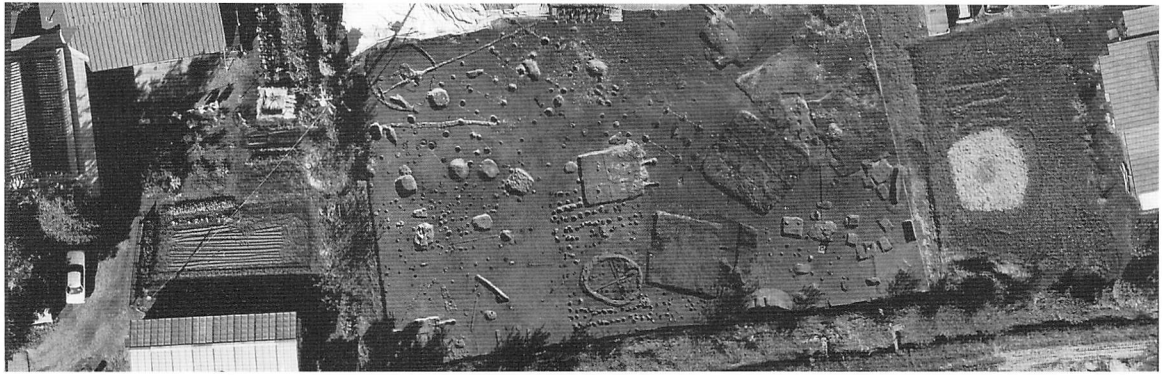
かかる様相から、出土した土器の年代観は、概ね9世紀後半～10世紀前半かと思われるが、検討を要す。土製品は土錘が、金属製品は古代住居跡から鉄鏃・刀子・釘、近世墓坑から柄鏡が出土した。

3. まとめ

調査の結果、本遺跡の今次調査区付近は、縄文時代には狩場、平安時代には集落跡、また近世は一部が墓域であることが判明した。

調査面積は、1,500㎡たらずではあるが、比較的多種の遺構が検出されている。とりわけ、平安時代の検出遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物、土坑、円形周溝、溝跡、溜池状遺構であり、これらが即ち「住宅、倉庫、穴倉（貯蔵庫）？、墓、生活用水」というムラの最小ユニットをなすものと推測される。

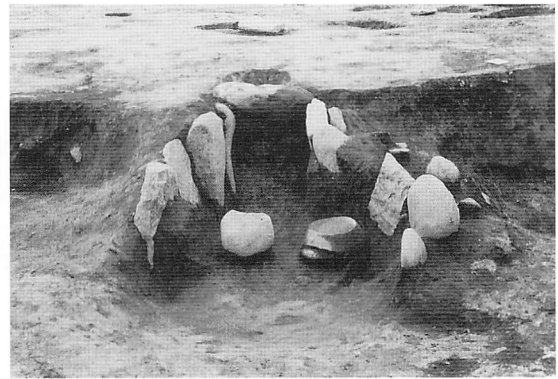
時期を無視した単純な遺構配置からは、調査地域南東側を中心とする住居域、西側に建物群・土坑域・墓域という構成が見取れ、集落の中心部はさらに東に延びているものと推測される。今次調査検出の集落跡は、土器の編年観から9世紀～10世紀前半に営まれたものと思われる。今後、遺構の前後関係・共時性、ひいては集落の時期別の構成・占地を解明していくことが課題である。



遺跡全景



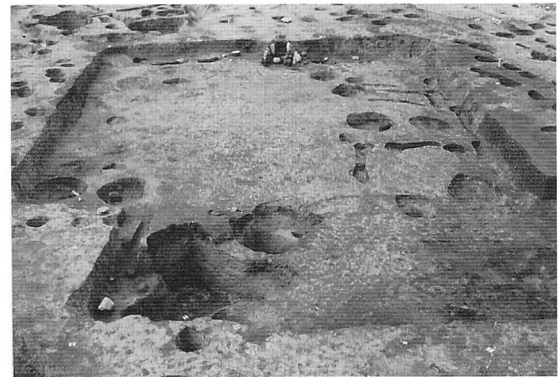
焼失竪穴住居跡



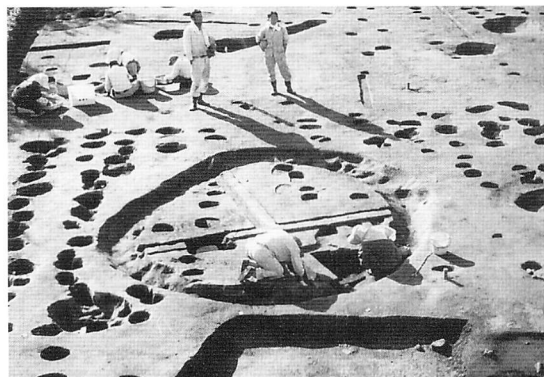
竪穴住居跡カマド



遺物出土状況



竪穴住居跡完掘



円形周溝



掘立柱建物跡

飯岡才川遺跡第3次調査検出遺構

(32) ^{ほそやち}細谷地遺跡第4次調査

所在地 盛岡市飯岡新田第2地割71-10
ほか
委託者 盛岡市盛南開発課
事業名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成12年6月14日～11月8日
調査対象面積 3,477m²
発掘調査面積 3,342m²
遺跡番号・略号 LE24-0214・OHY-00
調査担当者 阿部真澄・高木 晃・岩淵 計
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 盛岡・日誌

1. 遺跡の立地

細谷地遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.5kmに位置し、雫石川右岸の河岸段丘上に立地している。今回の調査区の標高は122m前後で、現況は水田である。遺跡の北端となる東西に延びる旧河道をはさんで、北約100mの位置に飯岡才川遺跡、さらに約300mの位置に台太郎遺跡があり、いずれも盛南開発事業に関連した発掘調査が本年度実施され、古代の集落が検出されている。

2. 調査の概要

遺跡の層序については表土以下、Ⅱ層黒色土、Ⅲ層黒褐色土、Ⅳ層褐色土と区分し、Ⅲ層上面が古代の遺構検出面となる。なお今回の調査区は全体が北側の旧河道に向かう緩斜面であったものが、近現代の造成により南側のⅡ～Ⅲ層が削平され平坦となっている場所で、北側ほど遺構の残存状況が良い。

検出遺構は平安時代の竪穴住居跡35棟、掘立柱建物跡3棟、土坑81基、焼土遺構1基、溝9条、柱穴状小ピット120基余り、風倒木痕4ヶ所である。

<竪穴住居跡> 竪穴住居跡は調査区のほぼ全域に分布しており、出土遺物から9世紀後半～10世紀前半を中心とした時期に比定できる。埋土中に灰白色火山灰をブロック状に含むものと全く含まないものの両者があり、個々の時期については細分できる余地を残す。住居跡同士の重複や他の遺構との重複もあるが、総じて残存状態は良好である。竪穴の平面形状はいずれも方形で、規模は約5～6m四方の大形、約3.5～4m四方の中形、約2.5～3m四方の小形、約1.8m四方の極小形の4タイプに明瞭に区分できる。極小は1棟のみで他は小形の棟数が最も多い。住居跡に付随する柱穴、カマドなどの施設では、竪穴の規模に応じて違いが見られる。大形の住居跡ではカマドの作り替えが目立ち、最多では5基のカマドを有する例がある。また支柱穴は4本配置されている場合が多い。一方、中形以下の住居跡では柱穴は検出できず、カマドも一部で2基持つ他は1基のみである。

カマドの設置位置は東西南北いずれの方向にも見られ、一定の方向に偏る傾向はない。煙道は大部分が刳り貫き式であり、溝状に残存しているものも天井が落下、削平された刳り貫き式であった可能性が高い。カ

マドの袖は褐色シルトを積み上げたものが主体で、礫や完形土器を埋め込んで芯材としているもの、天井石が残存しているものがある。また、燃焼部の焼土上面に破砕した土師器片を敷き詰めているカマドを2基検出している。カマドの脇に貯蔵穴が設けられているものが一般的で、その他に壁面を抉ってオーバーハングとなる袋状の施設も半数近くの住居跡で見られる。

床面からやや浮いて炭化材と焼土ブロックが堆積した焼失住居跡は7棟検出している。炭化材の中には壁際において壁面に平行に遺存する板状の部材や、壁面に沿って直立した状態で残る棒状の材があり、壁の構造材の一部になる可能性がある。床面ではヨシのような草本類の炭化材が方向を揃えて残っている例があり、敷物の痕跡と見られる。

<掘立柱建物跡> 調査区北東部で3棟検出している。全体像のわかる建物は2棟で、うち1棟は2×1間の長方形建物で棟方向はおおよそ南北、もう1棟は2×2間の矩形を呈する建物で方向は約30°西に振れる。柱穴掘方は径40～50cm程度、深さ30～50cm前後で柱痕跡の径は15～20cm程になる。これら建物跡の時期は柱穴埋土中の灰白色火山灰、出土遺物から竪穴住居跡と平行する10世紀初頭を中心とした時期が考えられる。他にも柱痕を有する柱穴を複数検出しており、これ以外にも掘立柱建物跡を構成できると思われる。

<土坑> 調査区全域から81基検出している。大部分が平安時代の遺構と考えられる。特徴的な土坑として以下を挙げておく。①：底面から壁面にかけてが焼成を受ける方形ないし楕円形の土坑で11基ある。規模は1.5×1m程度で深さは20～30cm前後、焼成は比較的弱いいため、炭窯や土器焼成土坑とは考えにくく具体的な性格は不明である。②：径2m程度の円形や方形を呈し深さが50cmを超える土坑で3基ある。遺物の出土状況では他遺構と異なる点は見られず、規模から住居外に設置された貯蔵穴の類かと思われる。③：長径2m弱の長方形を呈し底面から完形土器が出土する土坑で2基確認した。墓坑の可能性があるものと考えているが人骨の出土はなく確実ではない。④：断面がV字形で平面形が溝状を呈するいわゆる陥し穴状土坑で1基のみ検出した。検出層位から古代の遺構である可能性が高い。

<焼土遺構> 径1.5mで不整形を呈する焼土遺構を1基確認した。時期は不明。焼土の下位に土坑が位置しており、埋め戻された土坑上面が焼成を受けている状況である。

<溝跡> 長短合わせて9条検出している。うち2条は近世～近代の水路跡である。調査区中央部～東寄りの部分では住居跡群などをコの字形に囲繞するような状況で4条の溝が巡っている。これらは他遺構との重複関係や出土遺物から平安時代の溝跡で、何らかの区画施設と考えられる。

<柱穴状小ピット> 調査区全域から120基以上を検出している。径40cm前後のものが多い。時期を確定できないものが大部分で、建物跡や柵列を構成するかどうかについては検討中である。

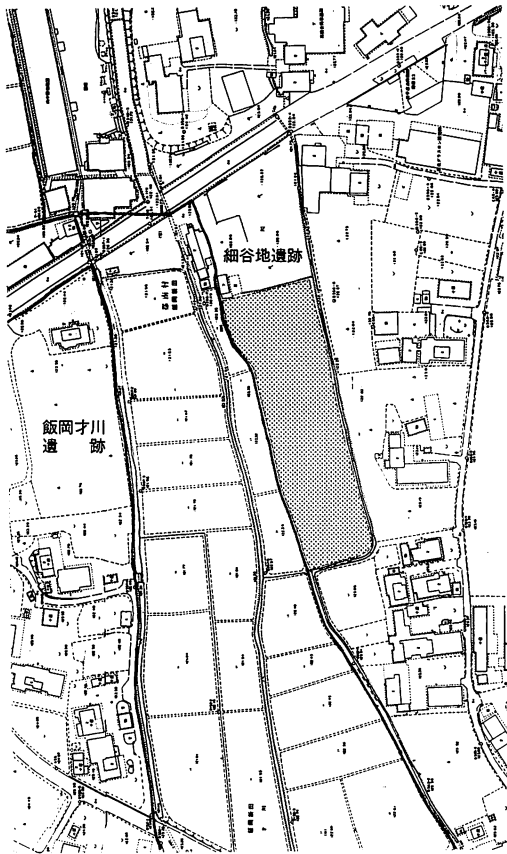
<出土遺物> 遺物は大コンテナで約28箱の出土がある。種類は土器（土師器・須恵器・あかやき土器）、石製品（砥石・磨石）、土製品（土錘・羽口）、鉄製品（刀子・釘・手鎌）、鉄滓がある。土器類では刻書のある坏、耳皿、砂底土器の甕を含む。坏における内面黒色処理の土師器とあかやき土器の比率は半々程度になる遺構が多い。

3. まとめ

今回の調査では平安時代の集落跡が明らかになった。時期は9世紀後半～10世紀前半にかけてが中心である。住居跡の規模は大中小の格差があり、また規模に応じてカマドや柱穴の状況に違いが明確に認められる。検出した遺構数は当初の見込みより多く、また調査範囲ほぼ全域に遺構密度の高い部分が広がっている。次年度以降は今回の調査区の北側～西側を調査する予定となっており、集落の広がりや北側に隣接する飯岡才川遺跡との関係等についてより具体的な形で判明してくるものと期待される。



基1 : X=-36,080.000
Y= 26,400.000
基2 : X=-36,080.000
Y= 26,360.000



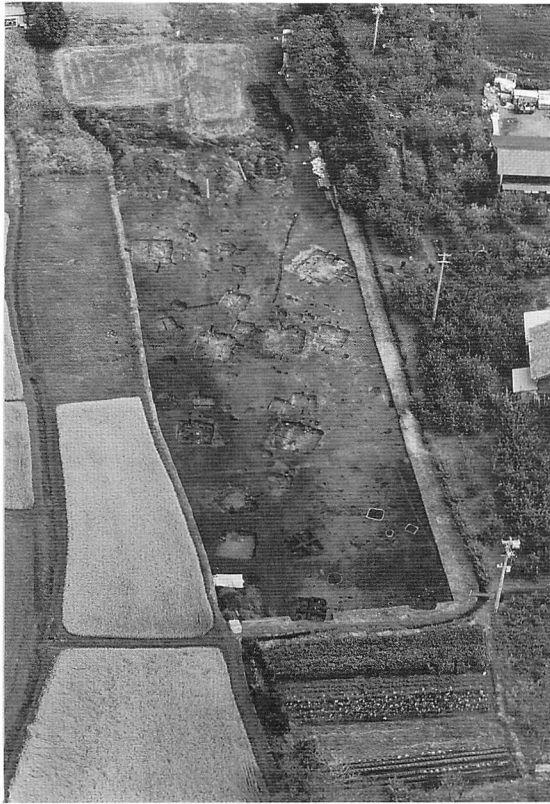
調査区周辺現況 (S=1:3,000)



遺構配置図

0 1:500 10m

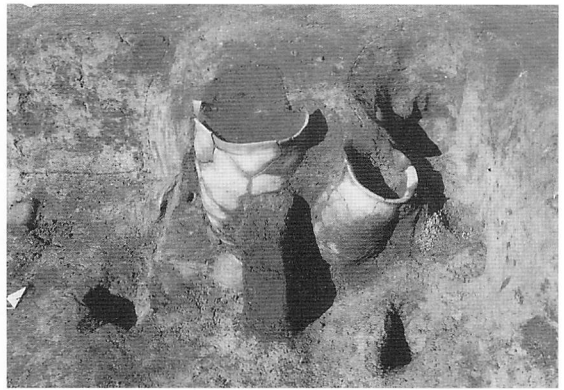
細谷地遺跡第4次調査遺構配置図



調査区全景



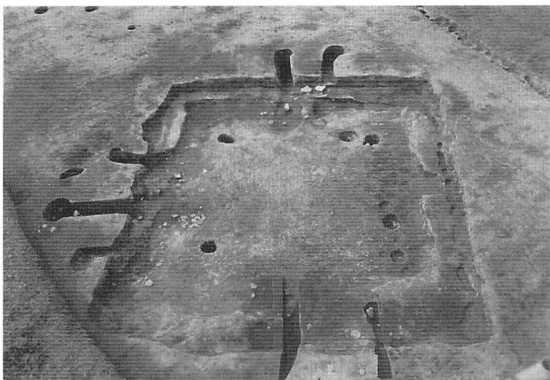
土器片敷カマド



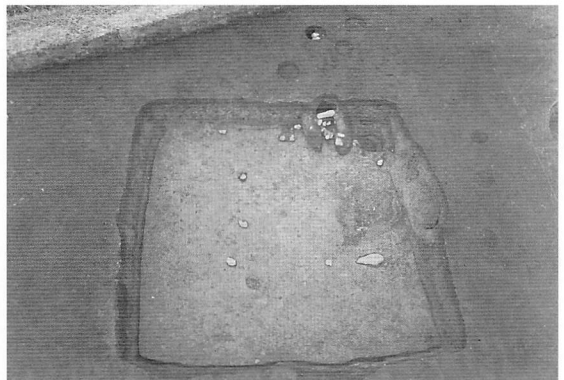
カマド内土器出土状況



調査状況



竪穴住居跡（大形）

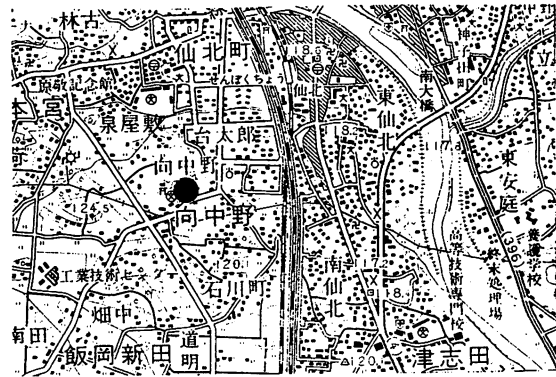


竪穴住居跡（中形）

細谷地遺跡第4次調査検出遺構

(33) 台太郎遺跡第26次調査

所在地 盛岡市向中野字向中野3-5ほか
委託者 盛岡市盛南開発課
事業名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成12年4月19日～10月30日
調査対象面積 14,229㎡
発掘調査面積 13,662㎡
遺跡番号・略号 LE16-2269・ODT-00-26
調査担当者 杉沢昭太郎・半澤武彦・吉田里和
古舘貞身・原美津子
協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 盛岡

1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線仙北町駅の南西約900mに位置し、雫石川南岸の河岸段丘面上に立地している。標高は120～122mで、調査区の現況は休耕田と畑地で占められる。概ね平坦な地形であるが、中でも若干の高低差が見られ、遺跡の南端には一部湿地が広がっている。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡72棟（奈良時代31棟、平安時代37棟、中世4棟）、掘立柱建物跡9棟（平安時代1棟、中世6棟、近世2棟）、土坑126基（この内中世の墓壇33基）、竪穴状遺構3棟、焼土・炉跡11基、溝跡48条、周溝2基、井戸跡3基と多数の柱穴が検出されている。

<竪穴住居跡> 奈良時代の竪穴住居跡は、出土遺物から7世紀末～8世紀の遺構と考えられる。規模・形状は、一辺が約2.2～7.8mの隅丸方形を呈し、北西壁の中央にカマドをもつものが大半を占める。平安時代の竪穴住居跡は、出土遺物から9～10世紀の遺構と考えられる。カマドの位置は東西南北壁に散在し、1つの住居に複数のカマドを構築しているものもみられる。中世と思われる竪穴建物跡にはカマドがなく、平面形は隅丸長方形を基調とし、東側調査区の南東部及び南西側調査区の南端部にのみ分布している。

<掘立柱建物跡> 平安時代の建物跡は、2間×2間の規模で倉庫跡と思われる。中世の建物跡は何れも南西側調査区から見つかると、建物間の重複から最低でも2時期以上の変遷が考えられる。またこの建物群に伴う井戸跡も1基検出されている。近世の建物跡は、北西側調査区から検出され、母屋6間×3間に厩部2間×2間が取り付く曲家と、それに付属する施設である。

<土坑> 調査区のほぼ全域から126基の土坑が検出された。このうち、東側調査区の西端から検出された隅丸長方形プランを呈するものの大部分は、中世の墓壇とみられる。以前の調査では、この周辺から約400基の墓壇が検出され、この場所が大きな中世墓地であったことが判明している。この他の土坑は遺物を伴わず、時期不明のものが多い。

<焼土・炉跡> 屋外炉とみられる遺構が、東側調査区の南東部を中心に検出されており、比較的残存状態のよいものをみると前庭部と掛け口、小さな煙出しからなる構造のようである。周囲の遺構の状況から、概

ね中世の遺構と思われる。

＜溝跡＞ 大小合わせて48条検出しているが、時期は不明なものが多い。以前の調査から確認されている平安時代の溝の続きが、本年度の調査でも見つかっており、東側調査区の北端から南東方向へ直線的に約62m延びている。

＜周溝＞ 南西側調査区の南西端から検出された周溝は、10.7×7.8mの隅丸長方形に幅50cmの溝が巡っている。北西側調査区の北端で検出された周溝は、南側の一部分が調査区外に延びるが、概ね直径6mの円形を呈すると思われる。

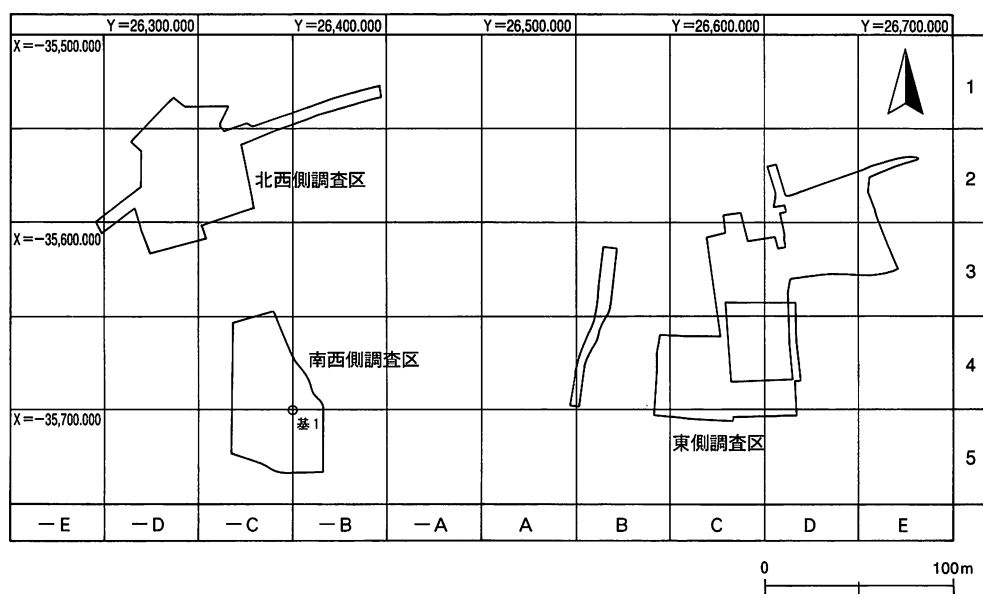
＜井戸跡＞ 開口部は円形を呈し、深さは2m前後で現在も湧水が認められる。近世頃の井戸には一部井戸枠が残存していたが、中世の井戸は単に地面を掘り込んだだけの構造であったようである。

＜柱穴状土坑＞ 調査区のほぼ全域から約1700基の柱穴が検出された。北西側調査区の柱穴は主に近世、南西側調査区及び東側調査区の南東部に分布するものは、中世頃の遺構と推測され、建物跡になるか検討中である。

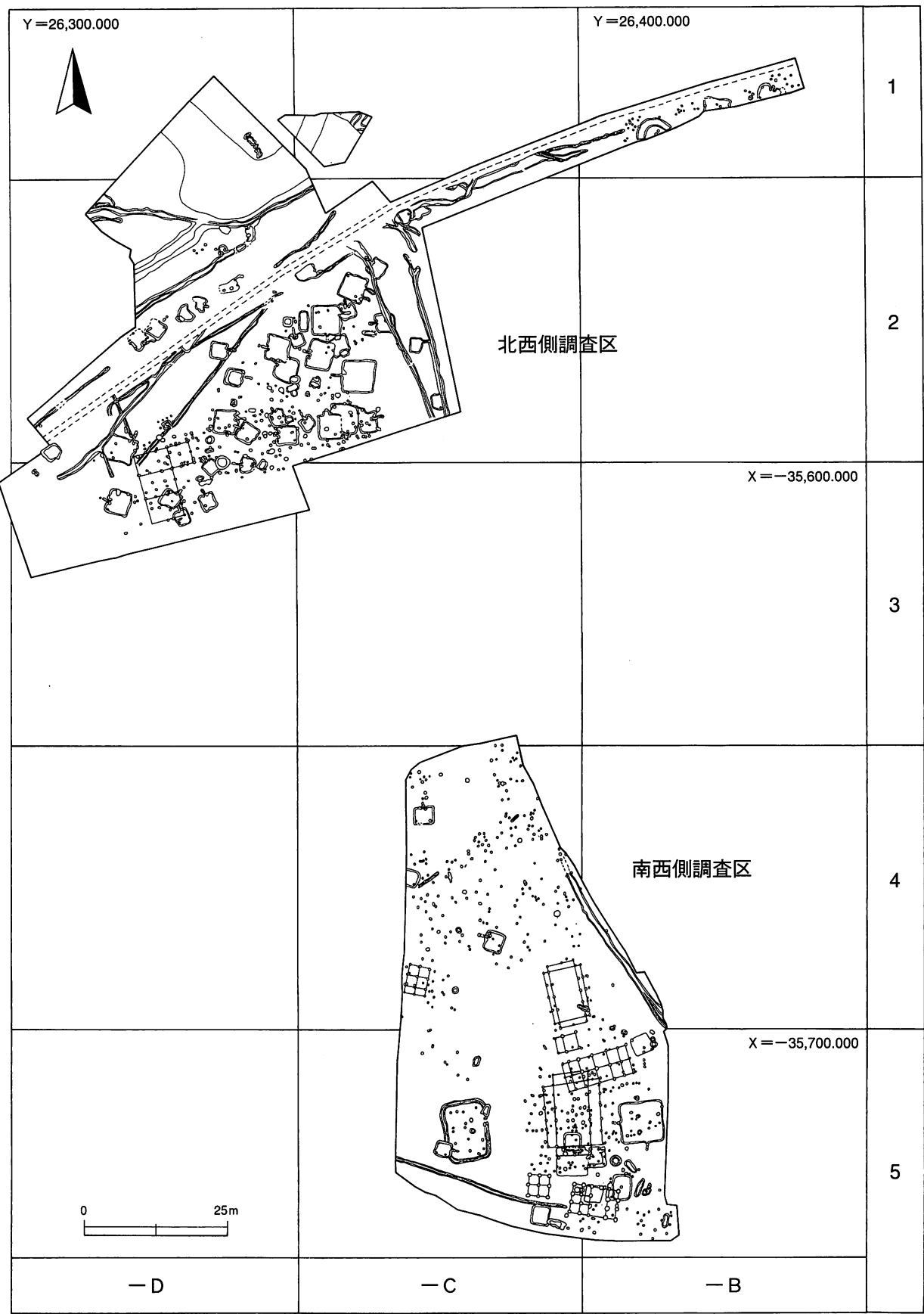
＜出土遺物＞ 7世紀末頃～10世紀の土師器・須恵器が大部分を占め、大コンテナで35箱ほど出土し、8世紀代の球胴甕には塗彩されているものもある。奈良時代の竪穴住居跡から、切子玉・土製勾玉・紡錘車・鋤先などが、中世の墓壇周辺からは北宋銭が見つかっており、調査区内からはこの他に、寛永通寶や近世陶磁器・石器類が出土している。

3. まとめ

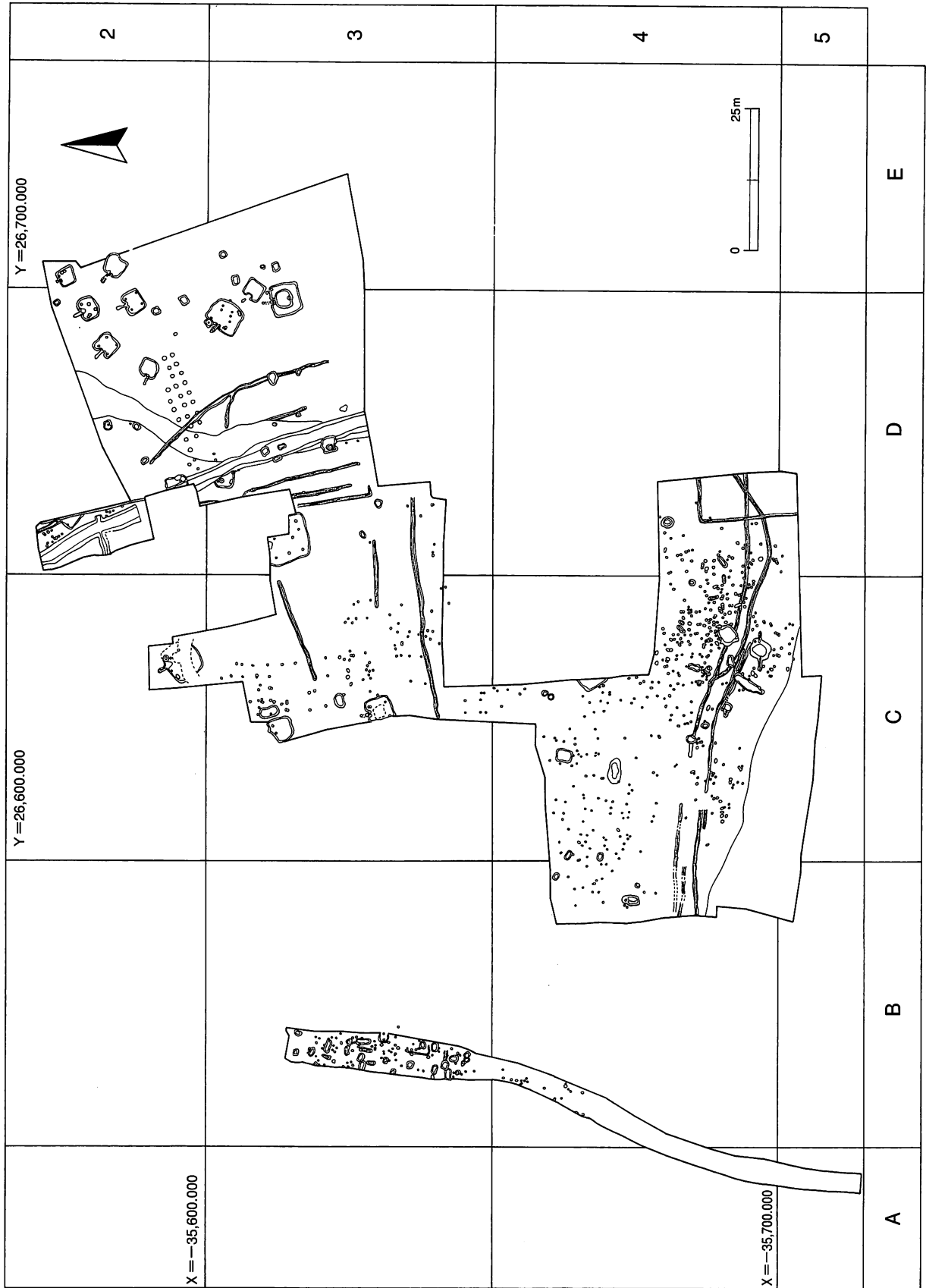
本遺跡は、奈良～平安時代を中心とした大規模な集落跡であることが明らかになっていたが、今年度の調査でも68棟の住居跡が見つかり、昨年度までのものと合計すると400棟以上にもものぼる。これまでの調査結果も含めて、奈良時代から平安時代におけるムラの変遷や、遺跡北西約3kmに位置する志波城や周辺遺跡との関係も検証していきたい。南西側調査区で検出された中世の建物跡は、その規模から有力農民の屋敷跡ではないかと思われる。本遺跡では大規模な中世墓壇群が確認されており、未調査区には中世の屋敷跡が展開している可能性が高い。



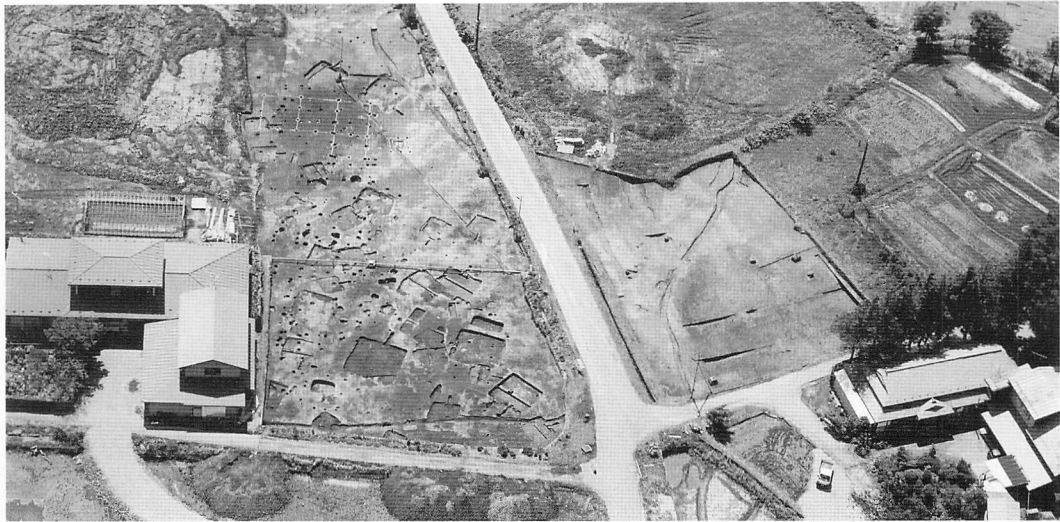
台太郎遺跡第26次調査グリッド配置図



台太郎遺跡第26次調査遺構配置図（北西・南西側調査区）



台太郎遺跡第26次調査遺構配置図（東側調査区）



北西側調査区（東から）

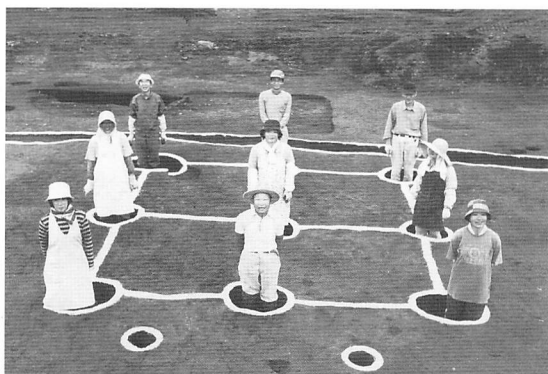


南西側調査区（東から）

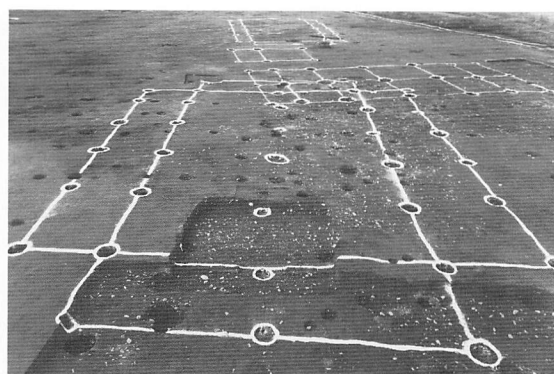


東側調査区（北から）

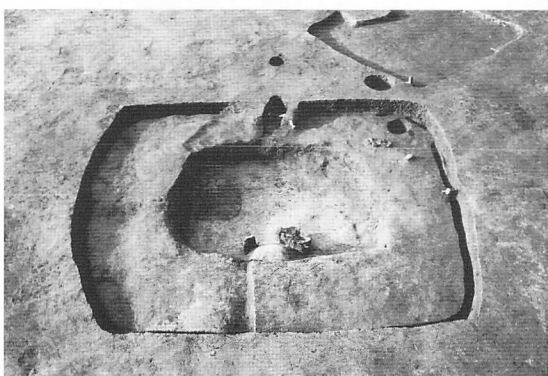
台太郎遺跡第26次調査調査区全景



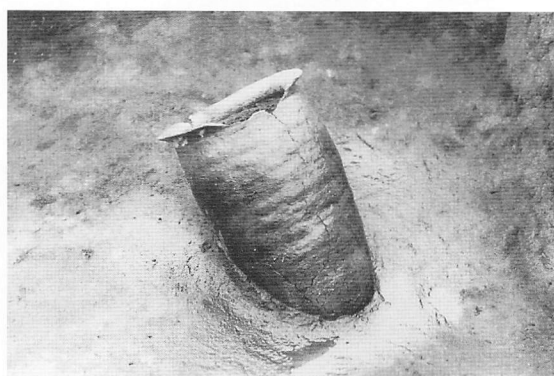
掘立柱建物跡（平安時代）



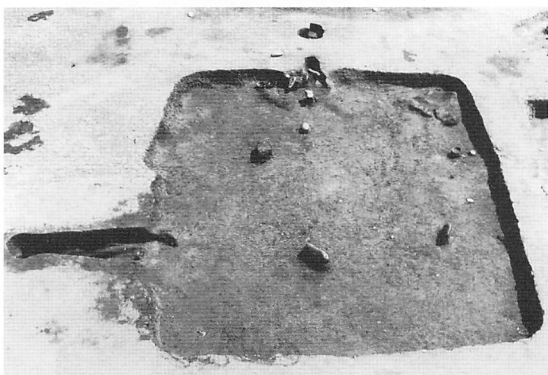
掘立柱建物跡（中世）



住居跡（奈良時代）



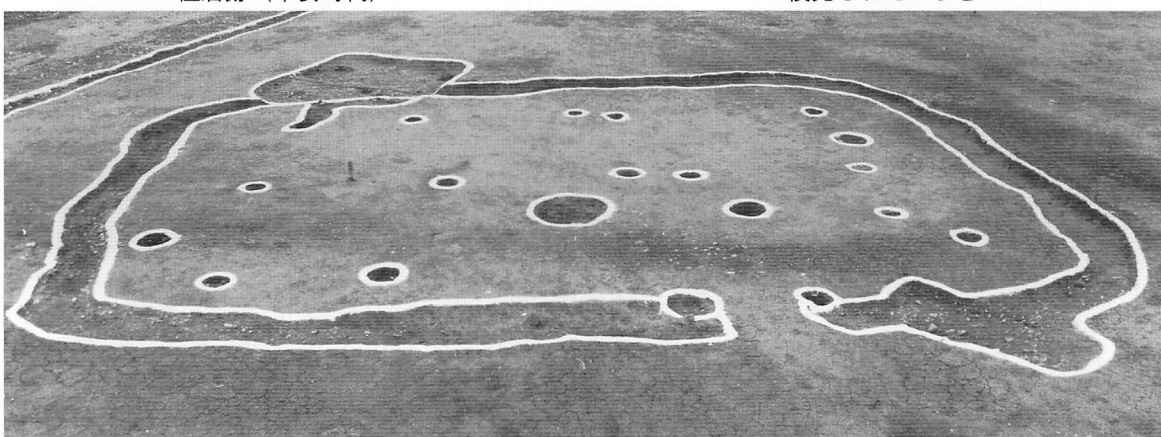
住居跡から出土した土師器甕（平安時代）



住居跡（平安時代）



復元されたかまど

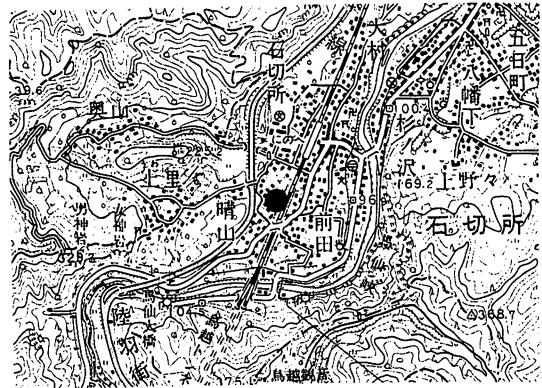


方形周溝

台太郎遺跡第26次調査検出遺構・出土遺物

(34) 諏訪前遺跡

所在地 二戸市石切所晴山15-1ほか
委託者 二戸市新幹線対策課
事業名 東北新幹線盛岡以北建設事業
及び新幹線二戸駅周辺地区土地区
画整理事業
発掘調査期間 平成12年4月12日～8月4日
調査対象面積 4,714㎡
発掘調査面積 4,714㎡
遺跡番号・略号 JE09-1073・SWM-00
調査担当者 前田 稔・鈴木 聡
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 一戸

1. 遺跡の立地

諏訪前遺跡は上里遺跡群に属する遺跡で、標高はおよそ120m、JR二戸駅から南南西約550mに位置し、JR東北本線沿いにある。現況は調査区のほぼ中央部を流れる下水路より北方（調査A区）は畑地、南方（調査B区）は宅地であった。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡2棟、井戸跡2基、土坑20基、柱穴状土坑約160基、溝1条、近世の墓坑5基である。

＜竪穴建物跡＞ 規模が4×3m程の矩形で、北西-南東壁に張り出しが見られる。中世と推定される。

＜掘立柱建物跡＞ 1棟は出土遺物から近世のものと推定され、規模は4間×3間で、棟方向は北西-南東である。もう1棟は、埋土の様相および周辺の遺跡で調査された遺構等から、中世の可能性が高い。棟方向は北東-南西で、柱穴が調査区外へ延びること、また攪乱を受けていることから規模は不明である。

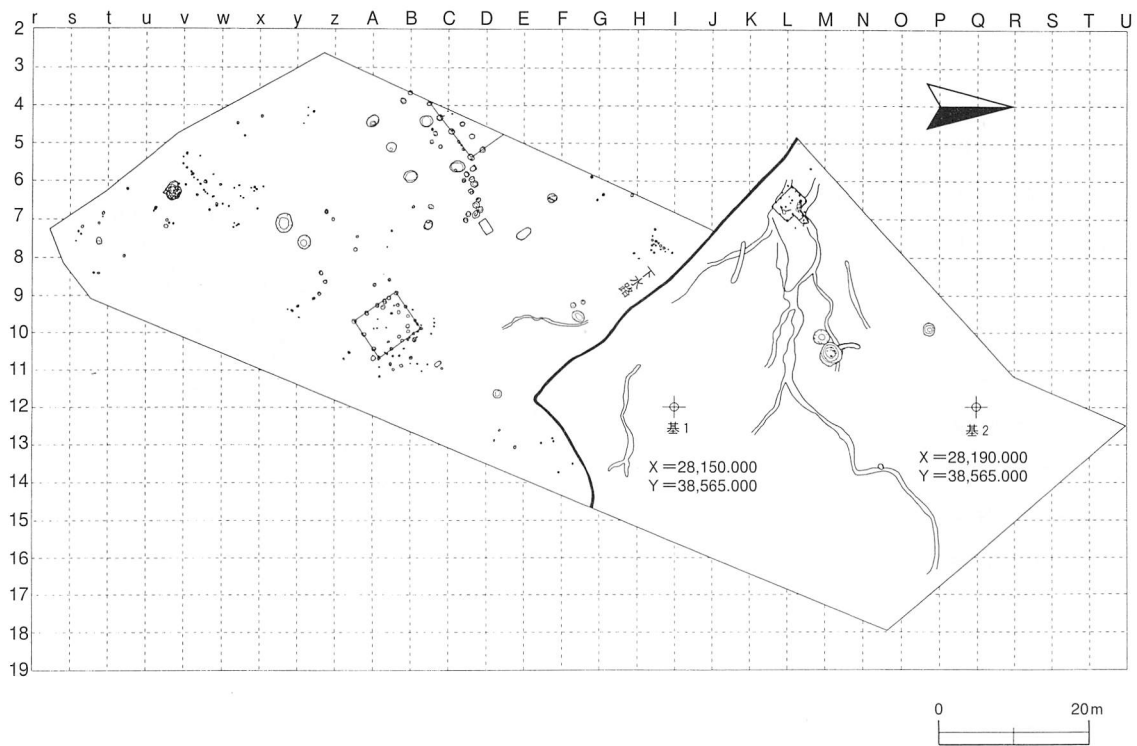
＜井戸跡＞ A区検出の1基は、遺物が出土しなかったため時期は不詳であるが、埋土に十和田a降下火山灰がレンズ状に堆積していたことから古代まで遡る可能性がある。井筒は一木の割り貫き式であった。B区検出の1基は、石組みで、近世のものであると考えられる。

＜土坑＞ A区で開口部径および深さが1mを越える大形のものが2基検出されている。その他B区から検出されている土坑のうち数基は、近世の墓坑の可能性が高い。

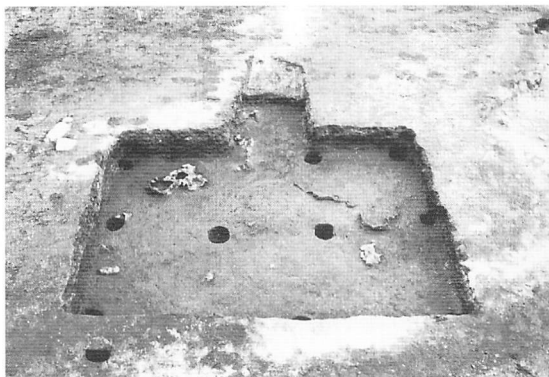
＜出土遺物＞ 土器は大コンテナで約9箱分出土した。縄文時代後期～晩期を主体とし、縄文時代前期・中期の土器が続く。その他に円盤状土製品3点、土偶1点、近世の陶磁器片・寛永通宝が数点出土した。石器は23点で、敲磨器等礫石器が多く、剥片石器は石鏃、石匙、削搔器等である。その他石臼が4点出土した。

3. まとめ

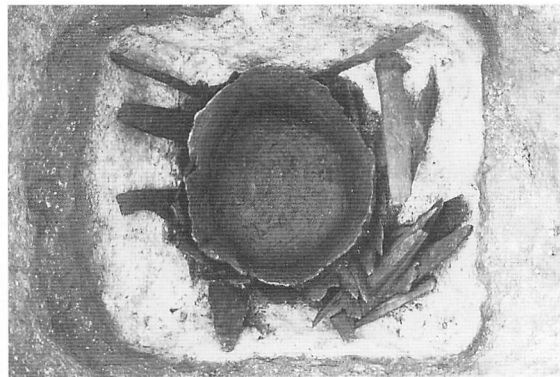
今回の調査により、本遺跡は中・近世において生活の場として利用された土地であることがほぼ明らかとなった。古代および縄文時代については住居跡を確認するにいたっていないが、井戸跡や出土した土器から、周辺部に集落があった可能性がある。



諏訪前遺跡遺構配置図



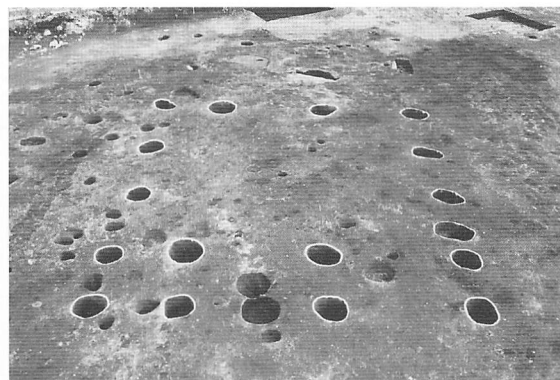
竪穴建物跡



井筒出土状況



掘立柱建物跡



掘立柱建物跡

諏訪前遺跡検出遺構

(35) 諏訪前^{すわまえ}(2) 遺跡

所在地 二戸市石切所字諏訪前44-51ほか
委託者 二戸市新幹線対策課
事業名 東北新幹線盛岡以北建設事業
及び新幹線二戸駅周辺地区土地区
画整理事業

発掘調査期間 平成12年8月1日～9月21日

調査対象面積 2,300㎡

発掘調査面積 2,300㎡

遺跡番号・略号 J E09-1273・SWM(2)-00

調査担当者 前田 稔・鎌田 勉・日下和寿
協力機関 岩手県教育委員会・二戸市教育委員会



遺跡位置 1:50,000 盛岡

1. 遺跡の立地

J R二戸駅の南側J R東北本線沿いに位置している。標高はおよそ119mで、現況は宅地及び畑地として利用されていた。また二戸市教育委員会が今年度発掘調査を行った「諏訪前遺跡」の南側に隣接している。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、住居状遺構2棟、掘立柱建物跡2棟、溝跡3条、土坑9基、陥し穴1基、柱穴状土坑約160基である。

<竪穴住居跡・住居状遺構> 竪穴住居は、平面形が4×3mの不整形を呈し、中央部に土器埋設炉をもつ。縄文時代中期と推定される。東端部で検出された住居状遺構は出土遺物から縄文時代晩期と思われる。調査区中央から西南西側に検出された住居状遺構は、北西壁に張り出しを持つ形状から中世と思われる。

<掘立柱建物跡> 掘立柱建物跡は調査区西部に1棟、調査区北部に1棟検出された。北部側は、建て替えが行われていたものと推定される。

<土坑> 9基検出された。深さは約15～50cm程で、断面形は浅皿形のものが多い。

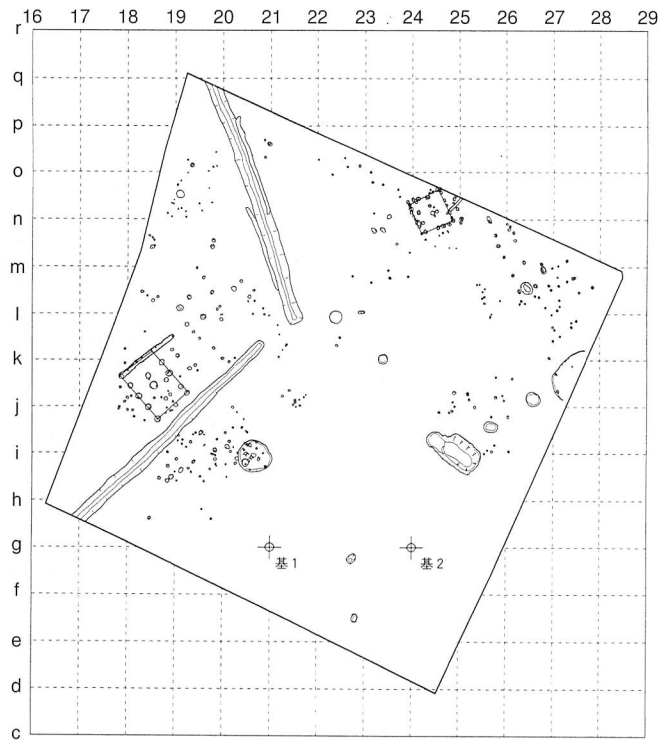
<陥し穴> 規模は、長さ約4m、幅約30cm、深さ約60cmで、軸はおよそ北東-南西である。

<溝跡> 3条検出された。調査区北西部で北北西-南南東を軸にしたもの(幅1.5～1.7m、深さ1.2m)と、調査区南西部で北東-南西を軸にしたもの(幅1.7m、深さ60～70cm)の2条は規模が大きい。両者は埋土及び掘り方が異なっており、双方を関連付ける付属施設は検出されなかった。

<出土遺物> 本遺跡で出土した遺物のうち、土器は大コンテナ3箱で縄文時代中期・晩期が主体である。石器は小コンテナ1箱で、フレークの他、石斧、磨石、異形石器等が出土している。

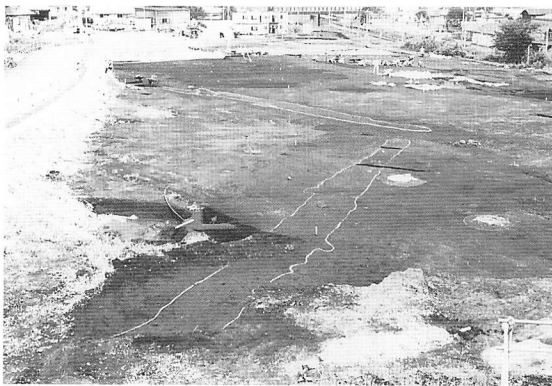
3. まとめ

過去に周辺で二戸市教委が行った調査においても縄文時代中期の住居が確認されていることから、今回の調査と合わせて、本遺跡では縄文時代中期の集落があった可能性が高いことが分かった。また同教委で調査した「諏訪前遺跡」では、鎌倉時代の堀以外に溝跡も検出されている。遺跡の全容が明らかになったときに本遺跡で検出された溝跡の性格も明らかになるものと思われる。



基 1
 X=28,270.000
 Y=38,610.000
 基 2
 X=28,270.000
 Y=38,625.000

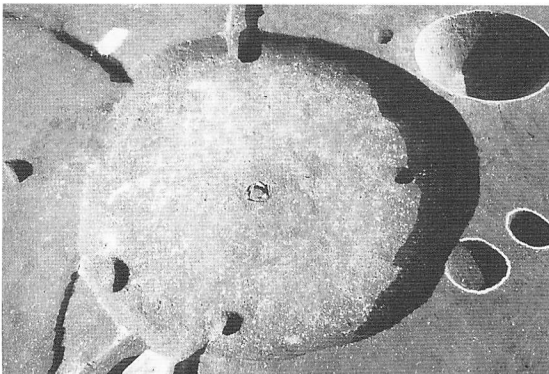
諏訪前(2)遺跡遺構配置図



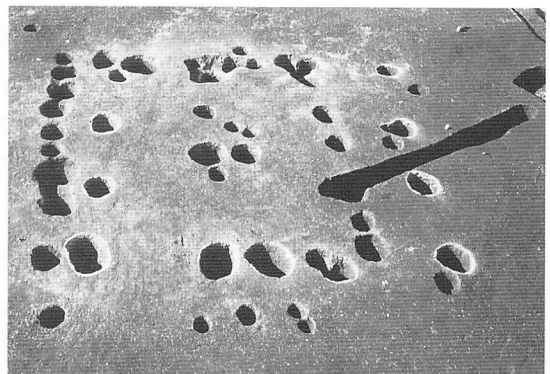
溝 1・2号検出



溝 1号



竪穴住居跡



掘立柱建物跡と陥し穴

諏訪前(2)遺跡検出遺構

(36) だいなかたいら
台中平(2)遺跡

所在地 二戸市石切所台中平101-1
委託者 二戸市新幹線対策課
事業名 新幹線二戸駅周辺地区土地区画
 整理事業（公共上下水道敷設）
発掘調査期間 平成12年9月21日～10月2日
調査対象面積 53m²
発掘調査面積 53m²
遺跡番号・略号 J E09-1273・DNT(2)-00
調査担当者 前田 稔・小田野哲憲・神 敏明
協力機関 岩手県教育委員会・
 二戸市教育委員会



1. 遺跡の立地

台中平(2)遺跡は、JR二戸駅から南方およそ1 kmに位置し、JR東北本線沿いにある。標高はおよそ119mを測る。周辺では東北新幹線盛岡八戸間建設工事に伴い、諏訪前遺跡・晴山遺跡・台中平遺跡が調査されている。この台中平遺跡は東北新幹線本線部分を跨いで広がる遺跡である。本調査区は新幹線本線部分より東側の一部分である。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、住居状遺構2棟、土坑3基、柱穴状土坑1基である。調査区の土層は、八戸火山灰層まで掘削したのち、整地した様相を示している。遺構は八戸火山灰層を掘り込んでいたものを検出した。

<住居状遺構> 調査区西部に1棟、中央部に1棟検出された。いずれも調査区外へ延びるため、規模・形状は不詳である。柱穴や炉・カマドも検出されなかった。西部の住居状遺構は、検出された部分から、平面形は隅丸方形を呈するものと思われる。埋土上位から縄文土器小片が1片出土している。中央部の住居状遺構の平面形は、不整形を呈する。埋土中から敲磨器、縄文時代中期と思われる土器が出土している。

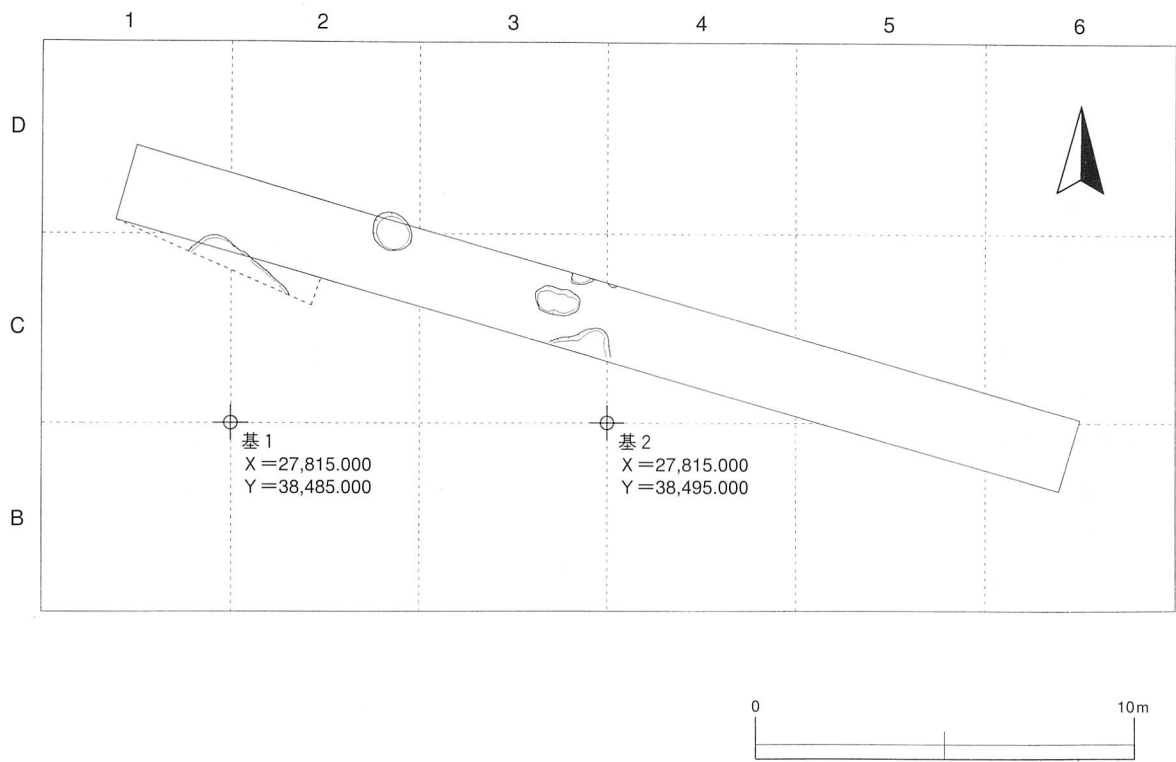
<土坑> 3基検出された。遺物の出土はなく時期は不明である。

<柱穴状土坑> 断面が調査区境に見られた。深さは20cm程である。

<出土遺物> 出土した遺物は小コンテナで1箱分である。住居状遺構から数点、その他は八戸火山灰層上部に広がる砂層からの出土で、小破片のみである。縄文土器の時期は、早期～後期と広範囲に渡り、その他土師器片が出土している。石器は、敲磨器・剥片石器が出土している。

3. まとめ

今回の調査は、面積が53m²と狭範囲であり、調査区も上下水道の通る部分の細長い矩形のため、遺跡の全容を把握するには至らなかった。2棟検出された住居状遺構はいずれも調査区外へ延びるため、今後の調査によって規模・時期等が明らかになるものと思われる。



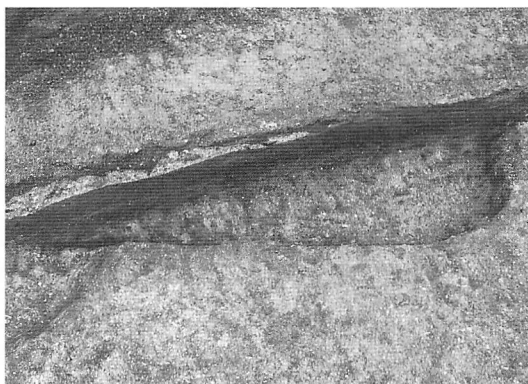
台中平(2)遺跡遺構配置図



調査前風景



遺物出土状況



住居状遺構



土坑断面

台中平(2)遺跡検出遺構・出土遺物

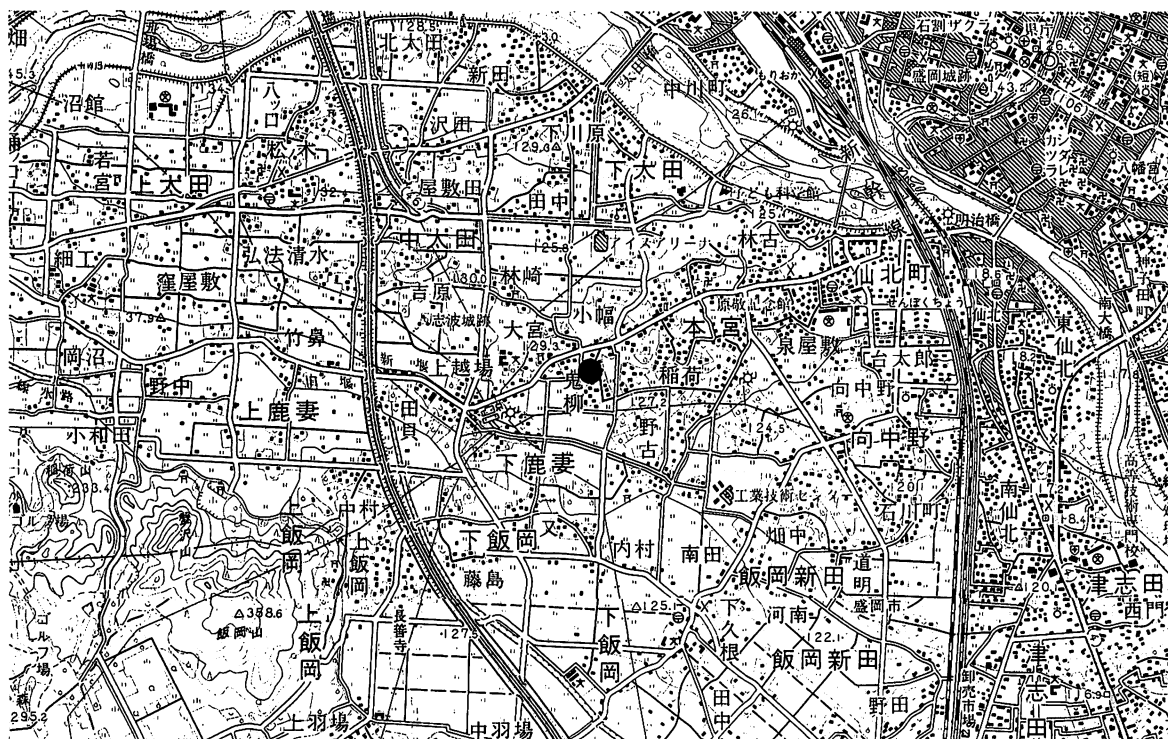
IV. 本 報 告

おにやなぎ
(37) 鬼柳 A 遺跡第 7 次調査

所在地 盛岡市本宮字鬼柳47-4ほか
委託者 国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所
事業名 盛岡西バイパス建設工事
発掘調査期間 平成12年4月12日～7月14日
調査対象面積 3,194㎡
発掘調査面積 3,194㎡
遺跡番号・略号 LE16-2120・OOA-00-7
調査担当者 高木 晃・阿部眞澄・岩淵 計・中田 迪
協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

鬼柳A遺跡第7次調査は、一般国道46号線盛岡西バイパス鬼柳地区の工事着手に先立ち、その工事区域内に所在する埋蔵文化財の発掘調査とその記録保存を図ることを目的として実施したものである。鬼柳地区の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査を実施し、その結果に基づいて国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとなった。



遺跡位置

1:50,000 盛岡・日誌

平成12年度は、埋蔵文化財調査事業に関する平成12年1月24日付教文第1074号通知を受け、委託契約に基づき4月12日から発掘調査に着手し、同年7月14日に調査を終了した。調査範囲面積は当初計画では1,770㎡であったが、調査の進捗状況により5月22日付けで3,194㎡に拡大された。

2. 遺跡の立地

当遺跡は、JR東北本線仙北町駅の西約2.5km、雫石川右岸の河岸段丘上に位置する。本年度調査区の標高は約126m、宅地と用水路に囲まれた休耕田、畑地と宅地である。調査区東側には幅50mの旧河道をはさんで本宮熊堂遺跡があり、本年度調査区南側・北側隣接地では平成9年度に第4次調査が実施されている。

3. 遺跡の基本層序

地点により違いがあるが、およそ次のような特徴の土層が順に堆積する。

I層 黒褐色土(10YR3/1)粘性無締まりやや有 表土・水田耕作土 層厚10～26cm

II層 黒褐色土(10YR3/1)粘性無締まりやや有 水田の床土赤褐色酸化鉄(5YR4/6)30%混 層厚4～8cm

III層 黒褐色土(10YR3/2)粘性有締まりやや有 層厚10～30cm

IV層 暗褐色土(10YR3/3)粘性締まりやや有 遺構検出面 層厚8～35cm

V層 黄褐色土(10YR5/6)粘性締まりやや有 層厚30～60cm

VI層 黄褐色砂質土(10YR5/6)粘性無締まりやや有 層厚不明

以前に行われた圃場整備のため現表土はおおむね平坦である。南東、東、西側のI～III層は薄く、表土から30cmないし40cmでIV層に至るのに対し、5Eグリッド東側と北側は、III層が50cmと厚くなる。

4. 調査の概要

検出遺構は奈良時代の竪穴住居跡2棟と土坑1基、以下時期不明の掘立柱建物跡1棟、土坑9基、溝跡4条、柱穴状ピット288基である。

<竪穴住居跡> 本年度調査区の北東からRA008住居跡が、南東からRA009住居跡が検出された。2棟の住居跡は規模やカマドの方向などはほぼ同じで、出土遺物の特徴から奈良時代に属するものと考えられる。

RA008は5F3d～5F4eグリッドに位置し、北側の一部がRG002に切られる。IV層上面で微量の十和田a降下火山灰(To-a)の存在により検出、平面形は隅丸方形を呈し、規模は3.1×2.75m、主軸方向はN-22°-Wである。埋土は黒褐色シルトを主体とする4層に細分できる。各壁中央部壁高の残存値は、北壁41cm、東壁47cm、南壁47cm、西壁35cmである。壁はIV層とV層を掘り込んでつくられており、わずかに外傾して立ち上がる。床面は全体に締まりがあり、北西コーナー付近がやや高く他は平坦である。カマド付近と北東部床面から3～5cmの高さに炭化材が、東部埋土中より甕の口縁～体部片が出土した。柱穴は検出されない。カマドは南壁の西側コーナー寄りに設置されている。東側の袖はやや締まりのある褐色砂質土で構成され、その上に黒褐色土が堆積し、袖芯材等に使用された垂円礫が残る。煙道は長さ1.03mで径43×38cm、深さ60cmの煙出に向けてほぼまっすぐに刳り貫かれている。

RA009は、RA008の南方11m、5F11c～5F11dグリッドに位置する。検出はIV層上面で、平面形は隅丸方形、規模は3.5×3m、主軸方向はN-12°-Wである。埋土は黒褐色土を主体とする6層に細分できる。壁はIV層とV層を掘り込んでつくられており、ほぼ垂直に立ち上がる。各壁中央部壁高の残存値は、北壁56cm、東壁60cm、南壁43cm、西壁49cmである。床面は全体に締まりがあり平坦である。カマド東側袖下に貯蔵穴とみられる土坑が1基検出され、埋土中より甕の口縁部が出土した。カマドは南壁の西側コーナー寄りに設置され、残存状態はよく、先端部分には芯材等に利用された垂円礫が残っている。袖構成土はやや締まりが有る黄褐色砂質土で、内側と上部に赤褐色焼土が主になる天井部分の崩落土と炭片や暗褐色土が堆積している。

燃焼部中心には南北65×東西42cmの範囲に厚さ5cmの赤褐色焼土が形成されている。煙道は長さ80cm、緩やかに下降しながら径30×40cm、深さ61cmの煙出に向けて削り貫かれている。

カマドの構成礫は、両住居とも奥羽山脈を起源とする石英安山岩、安山岩、礫質砂岩と砂岩である。

<掘立柱建物跡> 調査区西側でRB001を検出、平面形式は2間×5間、3面庇の長方形建物で、棟方向はN-10°-Wであり、東側の柱列で複数の切合があることから建て替えや重複の可能性はある。柱穴は径25~40cm、深さ17~78cmで、そのうち3基は柱痕を有する。埋土は柱穴状ピットと同様黒褐色土を主にした黄褐色土との混合土である。埋土中に遺物はなく時期については不明である。

<土坑> 調査区東側グリッド5E~5FのIV層上面で10基検出された。平面形は主に楕円形であり、長径90~270cm、深さは50cm以下である。RD014とRD015は、IV層の下面から検出された。平面形は細長い溝状で、断面もU字形であり陥穴状遺構ともみられるが、黒褐色土の落ち込みとも考えられる。略完形の坏が出土したRD009は竪穴住居跡と同時代のものと考えられる。他は時期不明である。

<溝跡> 長短合わせて4条検出された。RG002溝跡は東西方向に走り、検出長は約17m、上端幅50~70cm、深さは6~15cmであり、RA008を切る。RG003溝跡は東西方向に走り、検出長は約13.5m、上端幅60~84cm、深さは8~12cmである。RG004溝跡は、検出長約13.5m、上端幅62~90cm、深さは8~15cm、軸方向はN-76°-Eである。RG005溝跡は、検出長4.8m、上端幅50~70cm、深さ10~20cm、軸方向はN-5°-Wである。埋土は、RG002とRG003については黒褐色土を主体にした黄褐色土との混合土、RG004とRG005については黄褐色土が主である。溝埋土中から出土遺物はなく時期については不明であるが、RG002は竪穴住居跡との切り合いから奈良時代以降の溝であり、他は近現代の溝ではないかと考えられる。

<柱穴状ピット> 調査区全域、IV層上面で288基検出された。平面形は円形または不整形で、規模は径30~40cm、深さ25cm前後のものが多い。埋土は、黒色土か黒褐色土を主体にした黄褐色土との混合土で構成される。埋土中に遺物はなく時期及び性格は不明である。

5. 出土遺物

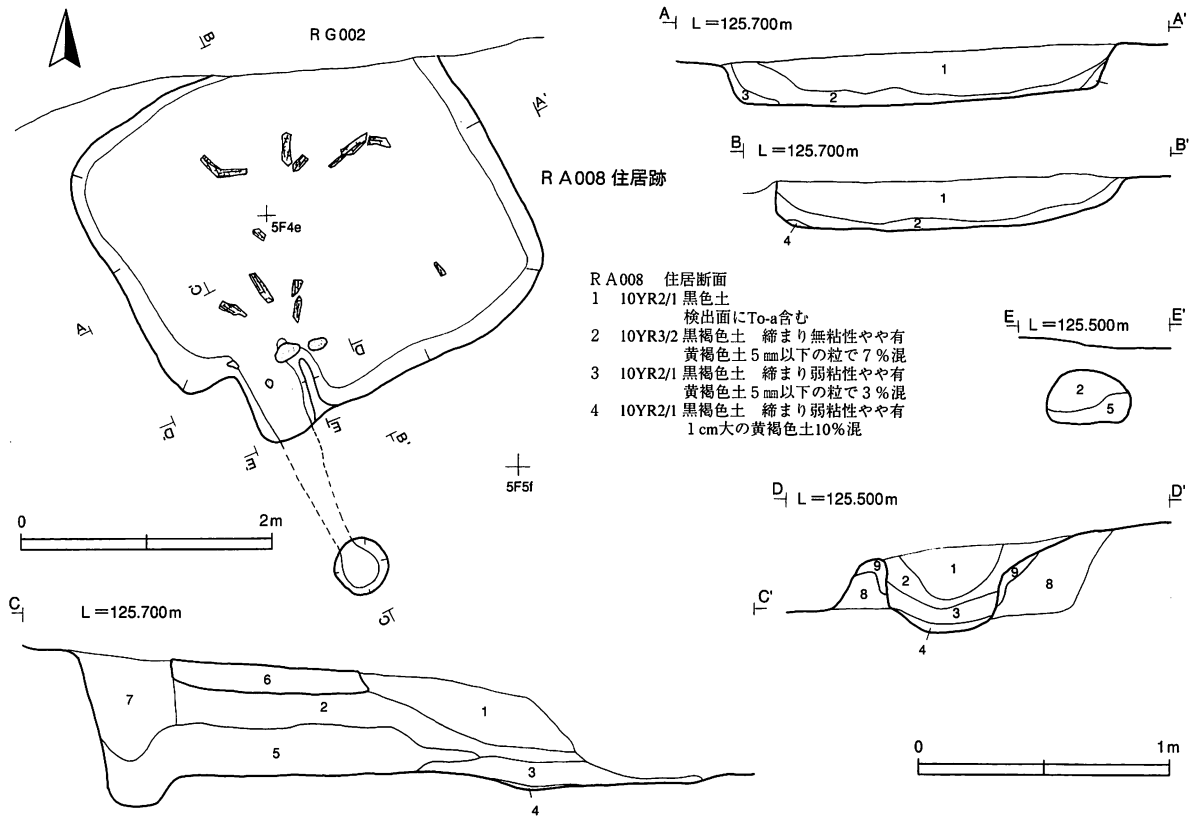
中コンテナで1箱、土師器片が主で全部で110点、奈良時代のものが多く、実測可能なものは7点である。出土場所は住居内とRD009の埋土中である。2と3は内黒・略完形の坏で、いずれもRD009から出土した。1は甕の口縁部から体部、4~7は甕と坏の口縁部や体部破片であり、内外に調整がなされている。遺構検出の段階でトレンチや表土部分より17世紀後半~18世紀後半の陶磁器片が10点出土した。

6. まとめ

平成12年度発掘調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡と土坑、時期不明の掘立柱建物跡、土坑、溝跡、柱穴状ピットを確認した。また第4次調査結果とあわせると、調査区中央部の窪地をはさんで東側に奈良時代の住居跡3棟、北側と南側に計4棟の平安時代の住居跡が存在したことになり、本遺跡は旧河道に沿った自然堤防状の土地に形成された古代集落であることが判明した。

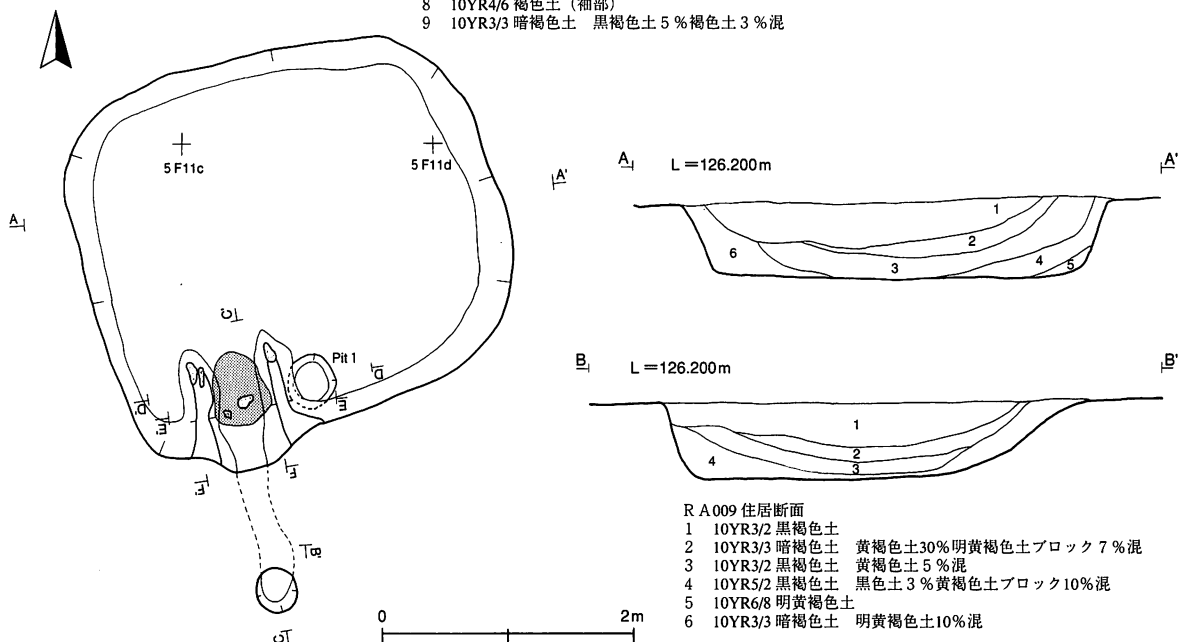
一方、窪地をはさみ一段高くなっている調査区西側は、時期不明の掘立柱建物跡と多数の柱穴状ピットが分布する。その分布状況と少数ではあるが近世後半の陶磁器類の出土により、近世以降の住居や作業小屋が存在し、人々の生活の場になっていたと想定される。

なお、鬼柳A遺跡第7次調査（国土交通省東北地方整備局岩手工事事務所分）に関する報告はこれをもって全てとする。

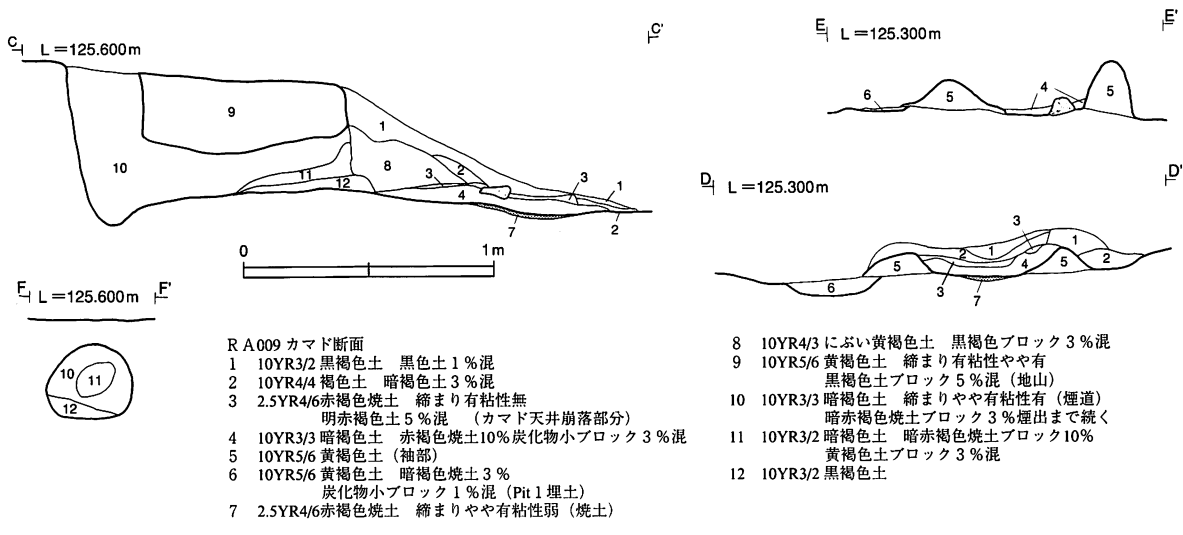


- R A 008 カマド断面**
- 10YR3/2 黒褐色土 におい黒褐色ブロック15%混
 - 10YR5/4 におい黄褐色土 締まりやや有粘性有
黒褐色土5%煙出に近い煙道に明赤褐色焼土ブロック3%混
 - 2.5YR4/6 赤褐色焼土 締まり強粘性有
黒褐色土3%混 (焼土とカマド天井崩落部分)
 - 10YR3/4 暗褐色土 黒色土5%赤褐色焼土ブロック3%混 (燃焼部堆積土)
 - 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土5%赤褐色焼土3%混 (煙道)
 - 10YR4/6 褐色土 締まり有粘性無 暗褐色土5%混 (地山)
 - 10YR5/4 におい黄褐色土 締まり粘性有 暗褐色土5%混
 - 10YR4/6 褐色土 (袖部)
 - 10YR3/3 暗褐色土 黒褐色土5%褐色土3%混

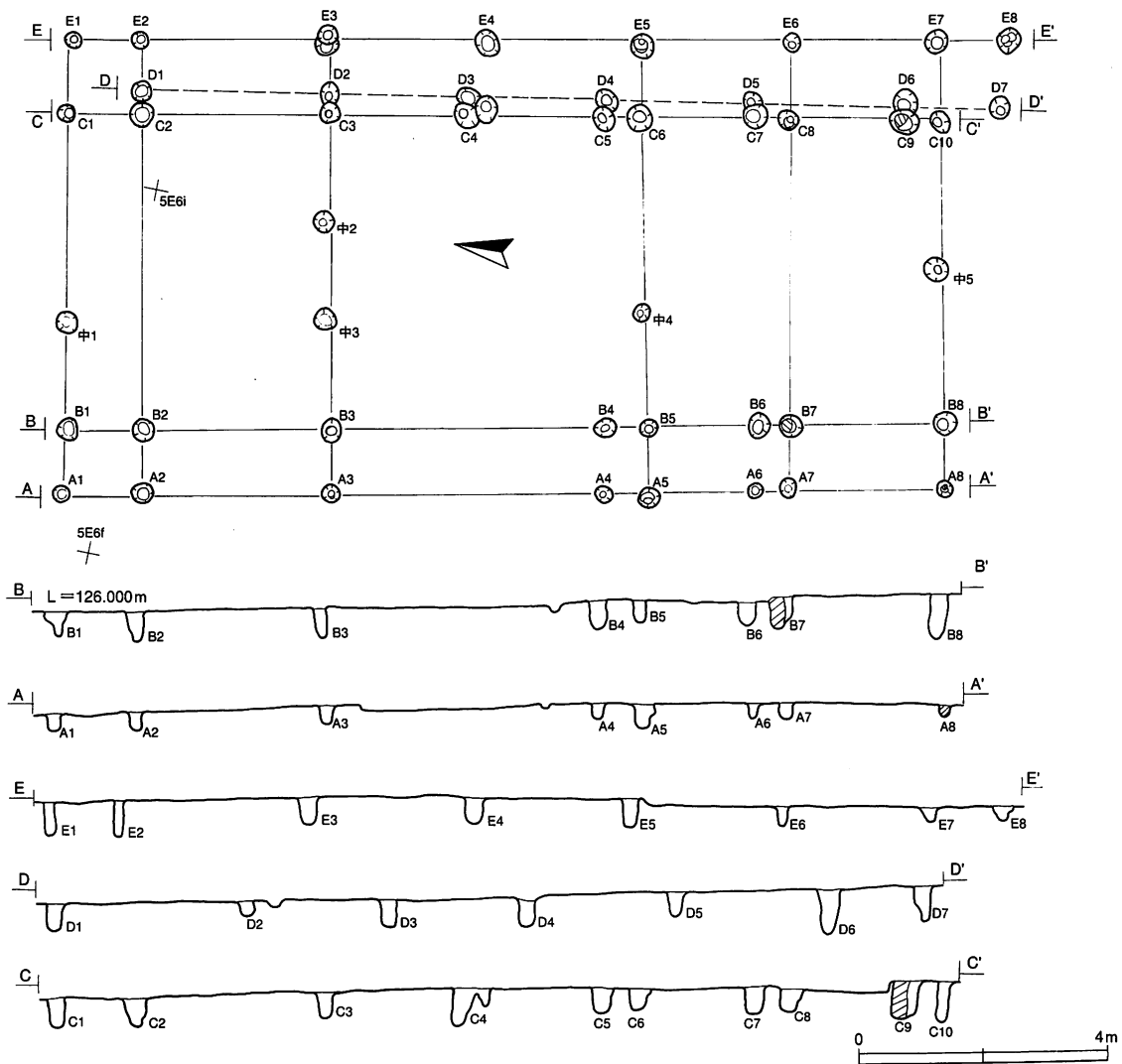
R A 009 住居跡



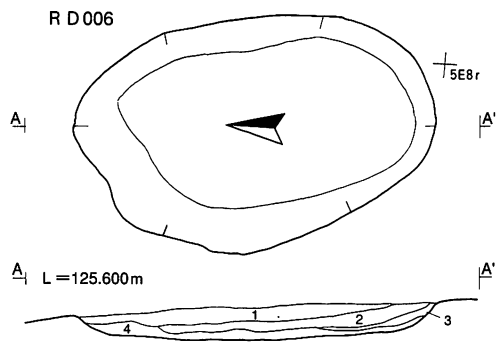
第1図 鬼柳A遺跡第7次調査RA008・009住居跡



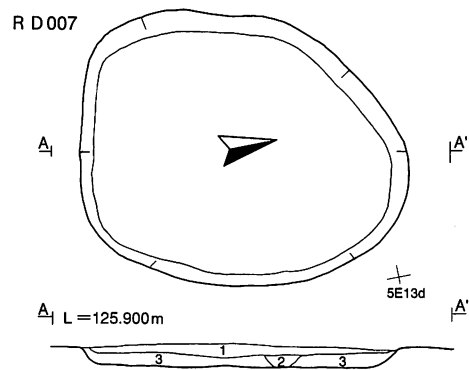
R B001 掘立柱建物跡



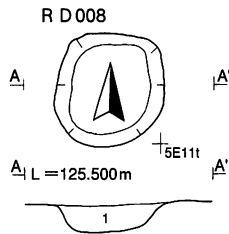
第2図 鬼柳A遺跡第7次調査RA009住居跡、RB001掘立柱建物跡



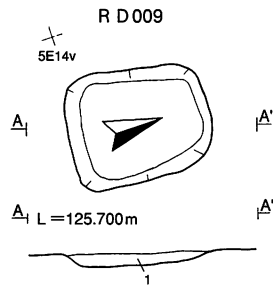
R D006 埋土
 1 10YR3/2 黒褐色土
 2 10YR3/2 黒褐色土 褐色土 5%混
 3 10YR3/3 黒褐色土 褐色土 1%混
 4 10YR3/3 黒褐色土 褐色土10%にぶい黄褐色土 3%混



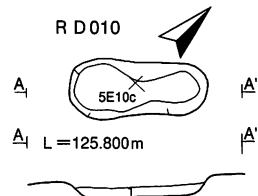
R D007 埋土
 1 10YR3/2 黒褐色土
 2 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土10%混
 3 10YR3/2 黒褐色土 明黄褐色土 5%混



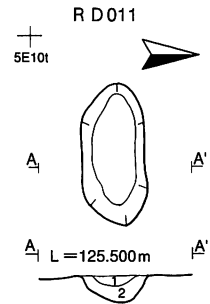
R D008 埋土
 1 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土 3%混



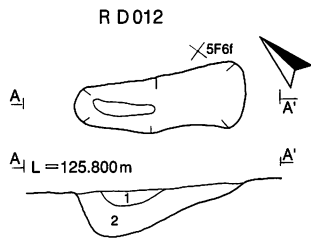
R D009 埋土
 1 10YR3/2 黒褐色土



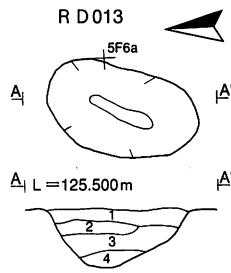
R D010 埋土
 1 10YR3/2 黒褐色土 締まり有粘性無
 にぶい黄褐色土 3%混



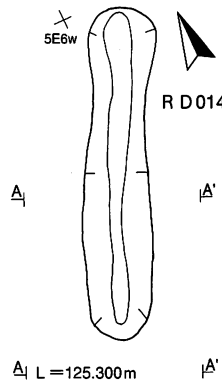
R D011 埋土
 1 10YR3/2 黒褐色土 Hue5Y6/2 灰オリブ 15%混
 2 10YR3/2 黒褐色土 にぶい黄褐色土 3%混



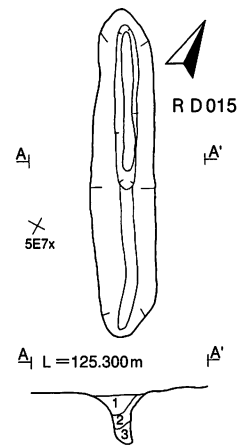
R D012 埋土
 1 10YR2/1 黒色土 締まり粘性弱
 黄褐色土シルト 1%混
 2 10YR2/1 黒色土 締まり粘性弱
 黄褐色土大ブロック状10%混
 この中には砂質シルトも混



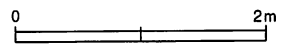
R D013 埋土
 1 10YR2/1 黒色土 締まり有粘性弱
 2 10YR2/2 黒褐色土 締まり有粘性弱
 3 10YR2/1 黒色土 締まり粘性弱黄褐色土 3%混
 4 10YR2/1 黒色土 締まり弱粘性やや有
 黄褐色土シルト 1cm以上板状に20%混
 5 10YR5/6 黄褐色土 締まり粘性やや有り



R D014 埋土
 1 10YR2/1 黒色土 黄褐色土シルト 2%混
 2 10YR5/6 黄褐色土 締まり弱粘性やや有
 黒色土シルト 2%混

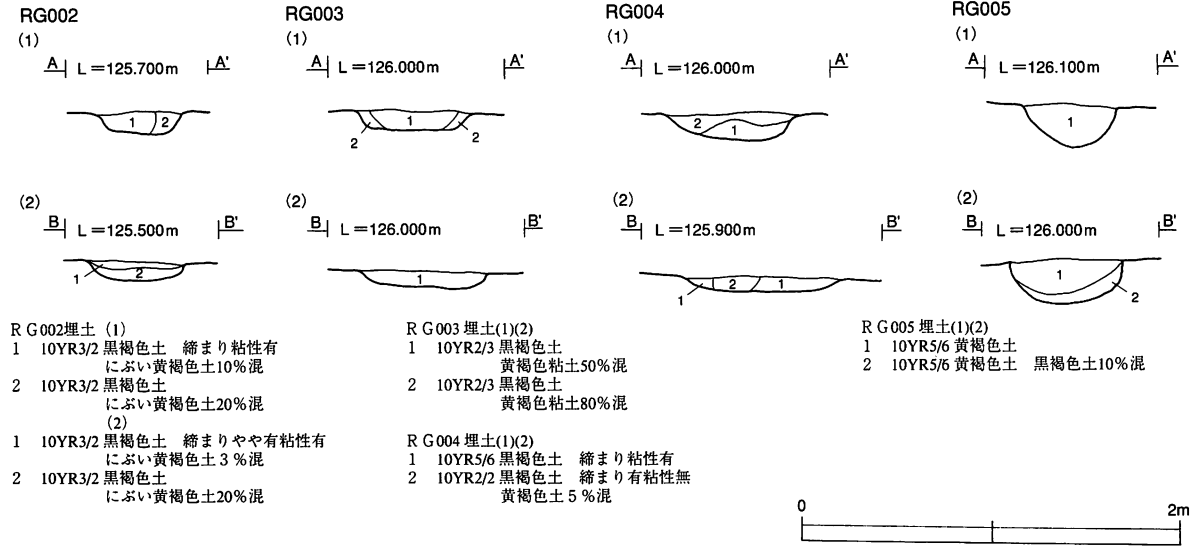


R D015 埋土
 1 10YR2/1 黒色土 黄褐色土シルト 5%混
 2 10YR5/6 黄褐色土 締まり弱粘性やや有
 黒色土シルト部分的に 2%混
 3 10YR5/6 黒褐色土 締まり弱粘性やや有
 黒色シルト全体的に 3%混

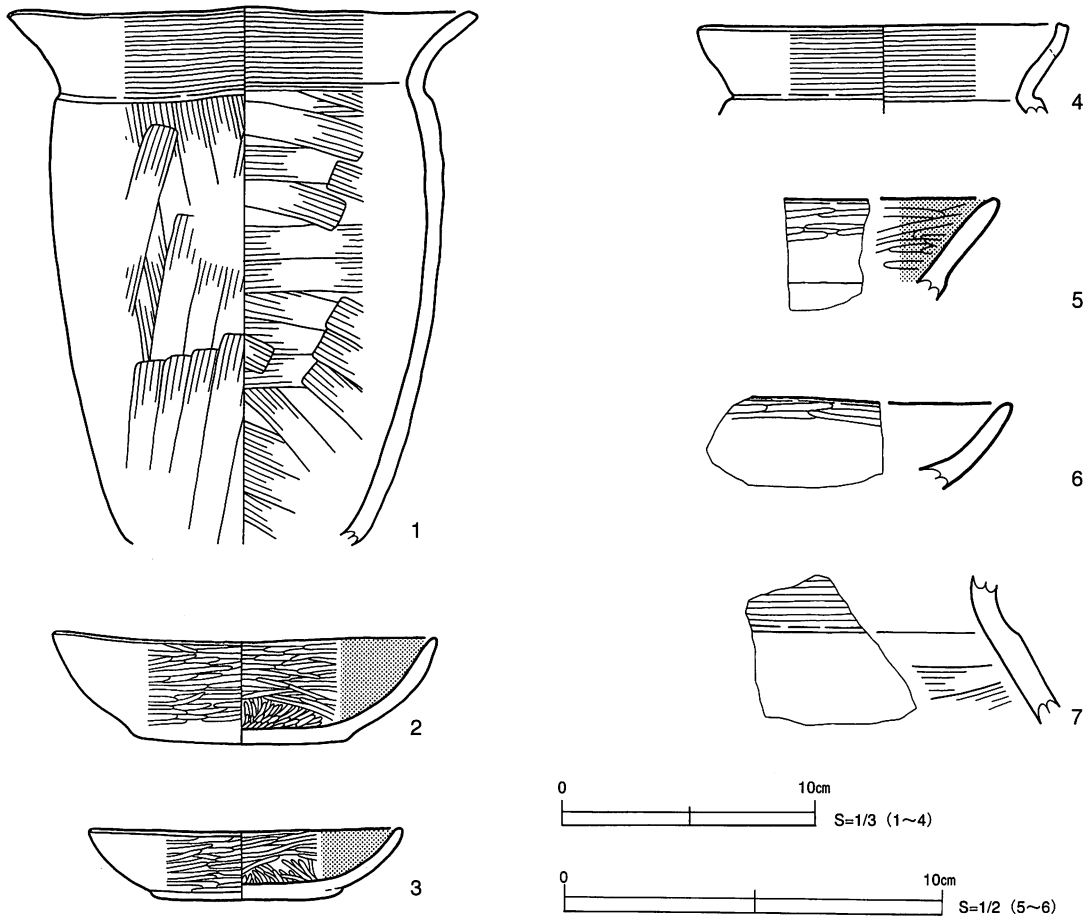


第3図 鬼柳A遺跡第7次調査土坑

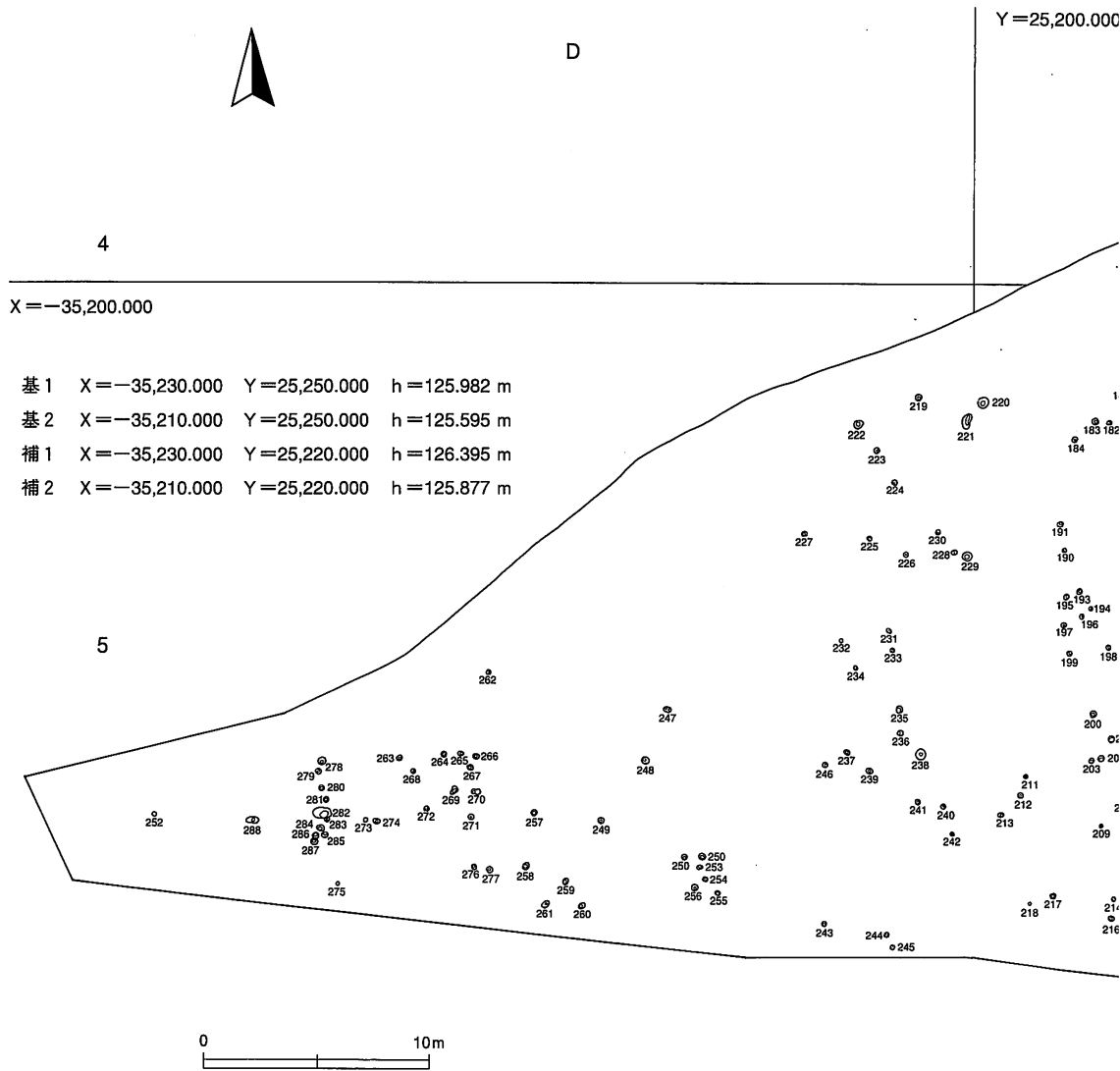
溝跡断面

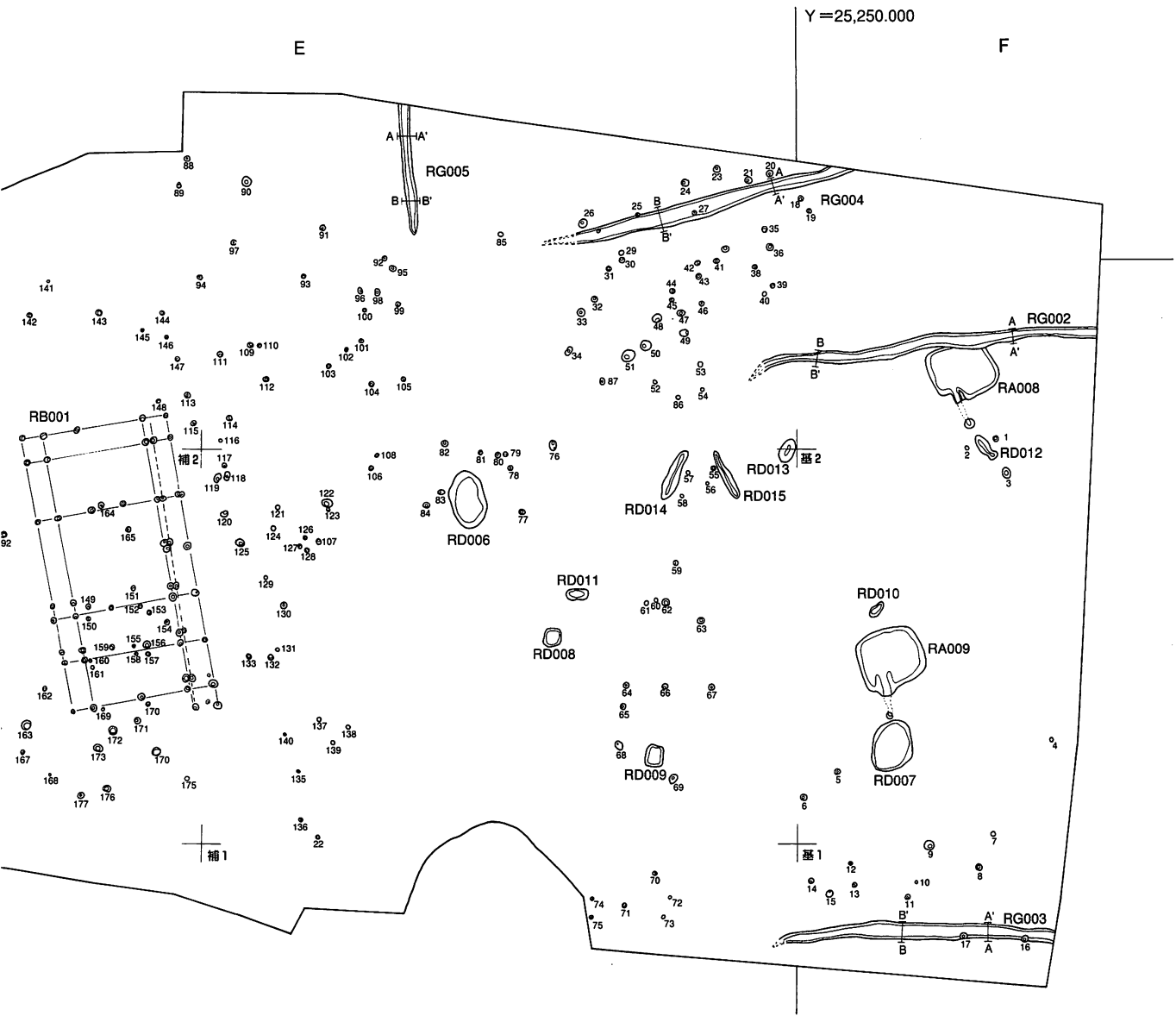


出土遺物



第4図 鬼柳A遺跡第7次調査溝跡、出土遺物





第5図 鬼柳A遺跡第7次調査遺構配置図

R Z 008柱穴群

☆-柱痕あり

※-計測値はcm

柱穴番号	径(長×短)	深さ
1	32×30	30
2	25×20	5
3	55×45	18
4	25×25	45
5	30×25	25
6	32×30	37
7	30×20	20
8	33×32	23
9	60×55	22
10	25×24	27
11	30×20	43
12	18×18	12
13	25×24	23
14	26×25	28
15	40×40	43
16	35×35	21
17	35×32	22
18	30×30	34
19	25×25	30
20	48×35	30
21	48×36	33
22	20×22	17
23	33×30	20
24	45×38	20
25	25×22	24
26	40×40	15
27	22×20	28
28	35×32	24
29	30×30	35
30	32×30	35
31	35×25	20
32	30×30	25
33	45×45	22
34	35×25	20
35	40×30	31
36	40×35	29
37	35×35	20
38	30×25	15
39	30×25	17
40	30×25	41
41	30×30	12
42	30×30	14
43	48×38	24
44	30×25	26
45	25×20	23
46	25×20	16
47	45×30	13
48	55×45	13
49	45×38	23
50	52×52	21
51	70×55	25
52	22×20	21
53	25×23	14
54	25×20	17
55	40×30	34
56	20×20	23
57	32×20	20
58	25×20	33
59	30×26	25
60	25×22	35
61	23×20	39
62	40×40	16
63	43×42	20
64	30×30	20
65	28×25	24
66	45×25	30
67	25×20	15
68	45×45	46
69	50×45	12
70	35×35	35
71	37×34	40
72	32×32	44
73	40×35	32
74	28×22	37
75	28×20	44
76	52×32	30
77	37×32	24
78	30×25	20
79	25×24	20
80	35×30	25
81	25×23	29
82	30×30	36
83	35×25	26
84	25×20	28
85	40×35	21

柱穴番号	径(長×短)	深さ
86	27×27	16
87	35×20	21
88	45×36	7
89	43×40	24
90	45×45	21
91	34×30	51
92	25×25	22
93	26×25	22
94	30×25	30
95	38×30	25
96	35×30	17
97	30×30	33
98	33×26	36
99	28×23	46
100	24×22	14
101	24×22	16
102	25×24	17
103	28×25	15
104	26×26	38
105	26×25	36
106	25×22	26
107	15×14	15
108	27×20	15
109	30×30	12
110	25×25	14
111	30×27	30
112	35×30	28
113	35×35	39
114	28×28	24
115	30×30	41
116	15×12	19
117	25×25	32
118	50×30	32
119	40×38	37
120	35×30	17
121	20×20	23
122	50×50	32
123	30×22	14
124	30×25	17
125	48×32	38
126	22×22	30
127	20×20	30
128	22×20	17
129	20×20	28
130	35×35	48
131	20×18	25
132	36×28	55
133	30×30	16
134	35×32	28
135	24×21	24
136	30×20	53
137	30×28	27
138	25×20	14
139	30×30	13
140	30×30	52
141	40×36	10
142	32×28	12
143	40×36	20
144	26×21	28
145	26×20	11
146	26×26	17
147	30×30	28
148	26×24	23
149	30×30	22
150	26×24	17
151	32×30	16
152	32×30	33
153	26×20	20
154	26×26	21
155	28×24	23
156	50×48	13
147	24×22	24
158	21×20	15
159	40×26	17
160	24×24	8
161	22×20	10
162	30×20	30
163	52×48	26
164	40×30	13
165	32×32	23
166	24×26	16
167	22×20	20
168	22×12	17
169	24×20	13
170	26×20	16

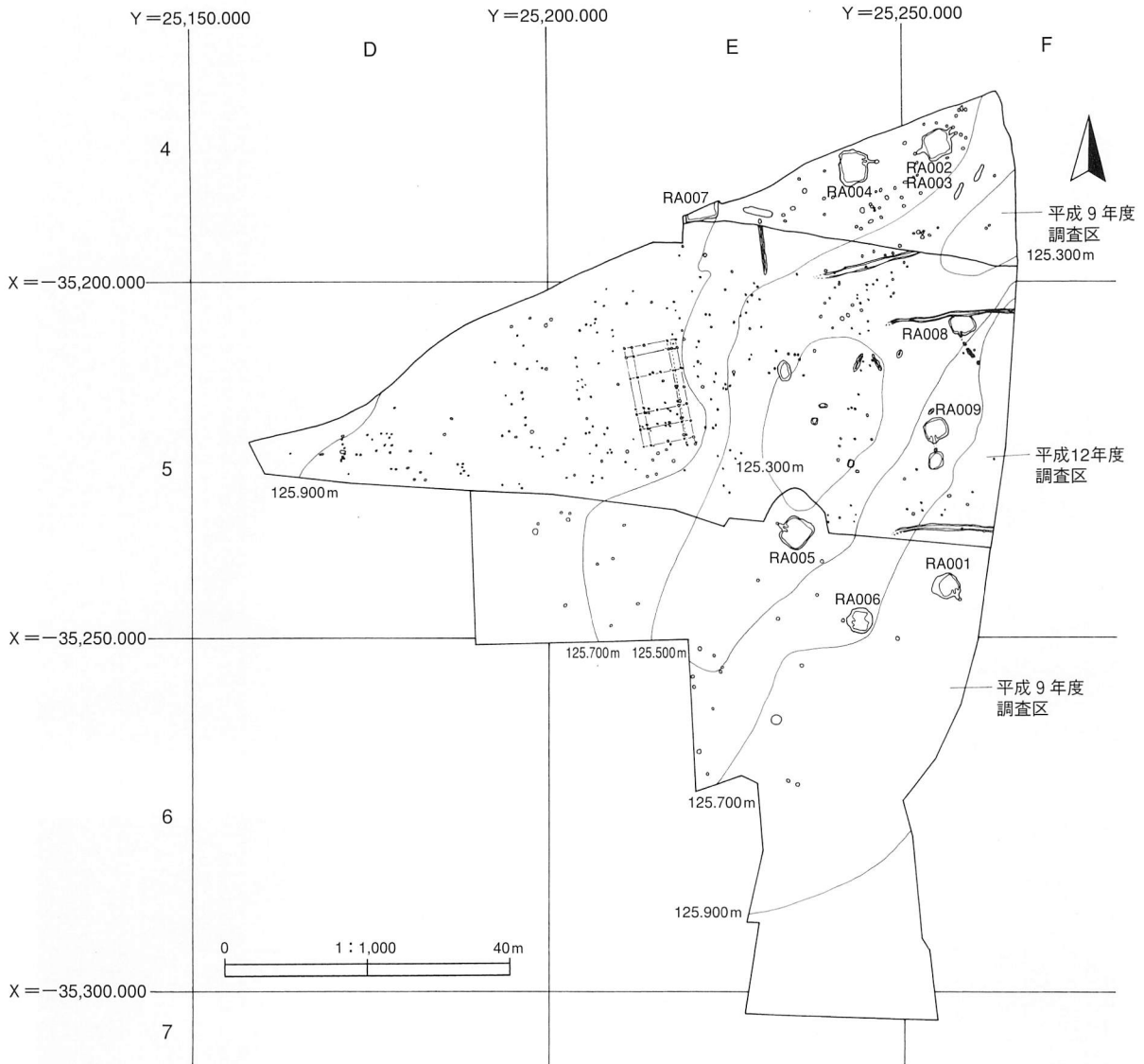
柱穴番号	径(長×短)	深さ
171	30×20	19
172	50×46	22
173	42×34	16
174	52×48	15
175	26×22	10
176	38×30	15
177	30×30	22
178	24×22	19
179	26×24	20
180	38×32	28
181	22×22	25
182	22×20	12
183	36×30	19
184	24×22	32
185	26×22	11
186	24×22	15
187	24×22	16
188	25×20	10
189	30×28	13
190	22×20	13
191	34×24	17
192	30×30	20
193	28×22	14
194	22×22	15
195	24×22	39
196	22×20	30
197	27×24	37
198	32×26	10
199	28×24	20
200	32×26	14
201	30×30	14
202	30×30	11
203	26×24	17
204	30×30	17
205	22×20	23
206	30×26	10
207	22×21	17
208	30×30	37
209	22×20	11
210	46×40	14
211	24×22	12
212	26×26	33
213	22×20	11
214	24×20	13
215	28×22	10
216	28×23	13
217	30×30	25
218	22×18	18
219	38×30	33
220	46×46	23
221	70×40	18
222	50×40	45
223	24×22	28
224	24×22	28
225	24×24	18
226	24×22	16
227	26×22	16
228	32×20	20
229	42×30	17
230	26×20	24
231	30×24	17
232	20×20	10
233	30×24	46
234	22×20	13
235	30×30	19
236	30×30	16
237	28×22	20
238	50×50	10
239	24×22	17
240	24×20	21
241	28×24	20
242	26×24	12
243	25×20	42
244	28×26	26
245	22×20	18
246	24×22	16
247	30×30	25
248	30×30	25
249	30×25	13
250	30×22	26
251	30×30	18
252	24×20	30
253	24×20	30
254	26×22	18
255	26×26	19

柱穴番号	径(長×短)	深さ
256	26×24	26
257	30×28	21
258	32×30	30
259	28×26	20
260	32×30	36
261	34×30	30
262	22×22	14
263	18×12	35
264	24×22	14
265	28×20	17
266	28×24	13
267	30×28	21
268	24×20	46
269	34×30	14
270	42×20	28
271	24×24	30
272	28×26	33
273	22×22	13
274	30×24	33
275	26×24	20
276	20×18	17
277	28×24	42
278	34×30	42
279	24×22	42
280	26×22	40
281	30×24	18
282	80×50	60
283	22×20	11
284	30×22	18
285	30×28	34
286	28×26	25
287	22×20	17
288	50×30	26

R B 001掘立柱建物跡

柱穴番号	径(長×短)	深さ
A 1	27×25	28
A 2	30×28	33
A 3	28×25	31
A 4	27×20	40
A 5	35×30	46
A 6	25×20	28
A 7	25×24	32
☆A 8	20×20	17
B 1	36×35	42
B 2	35×34	57
B 3	37×30	59
B 4	32×25	46
B 5	26×25	38
B 6	35×33	39
☆B 7	37×35	39
B 8	34×34	78
C 1	30×30	46
C 2	36×36	47
C 3	28×24	54
C 4	40×30	70
C 5	35×35	44
C 6	42×40	34
C 7	30×25	45
C 8	30×30	40
☆C 9	45×42	51
☆C 10	30×25	47
D 1	30×20	49
D 2	32×24	29
D 3	35×29	45
D 4	34×27	47
D 5	30×35	43
D 6	36×35	69
D 7	30×30	59
E 1	25×25	57
E 2	25×25	63
E 3	32×26	57
E 4	40×36	48
E 5	35×30	56
E 6	25×25	32
E 7	32×32	27
E 8	40×30	24
中 1	35×30	39
中 2	35×30	40
中 3	30×28	45
中 4	22×22	56
中 5	35×31	38

柱穴一覧表



第6図 鬼柳A遺跡遺構配置図（平成9・12年度）

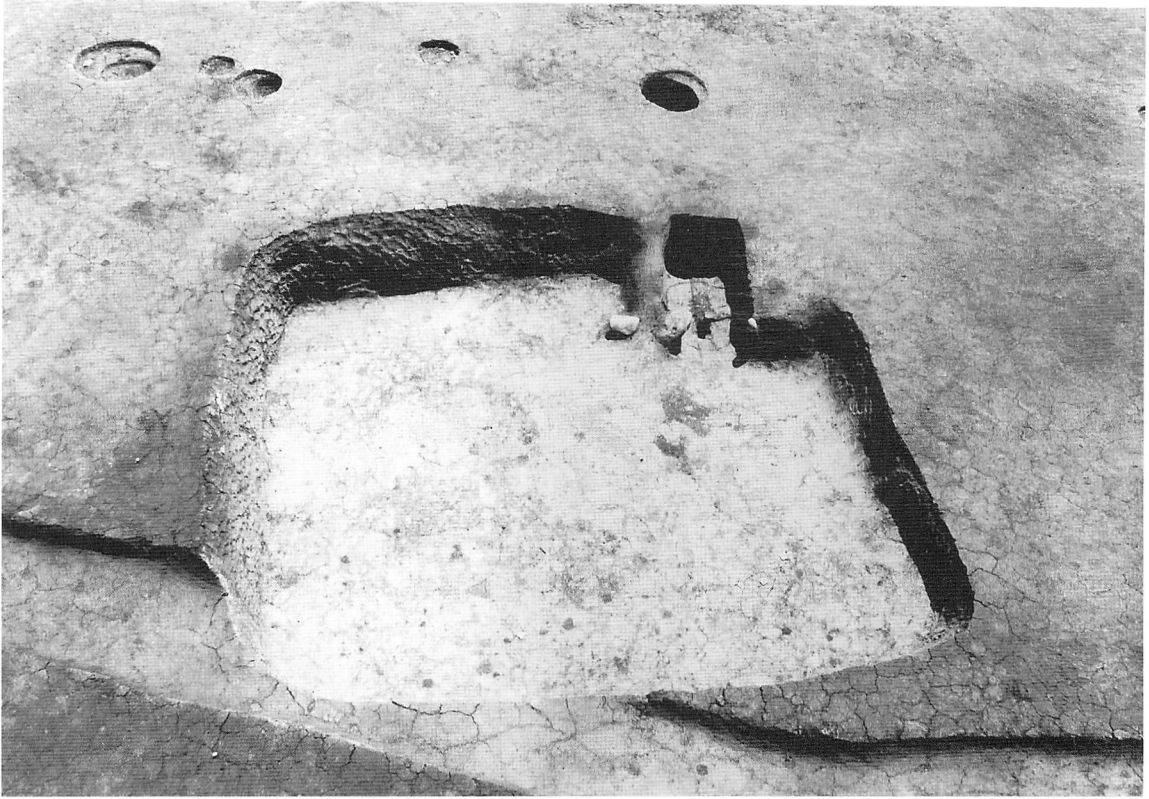


調査区 東側

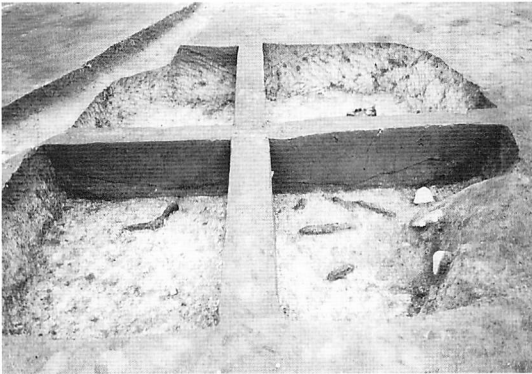


調査区 西側

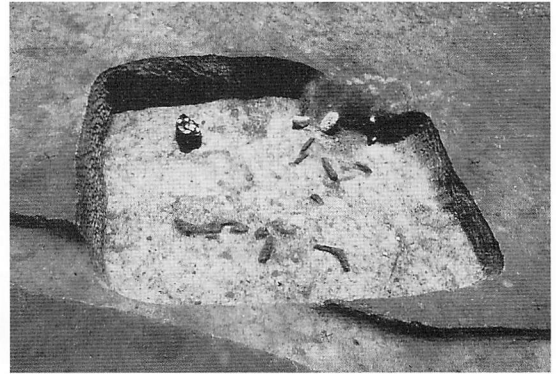
写真図版1 鬼柳A遺跡第7次調査調査区東側、西側



住居全景



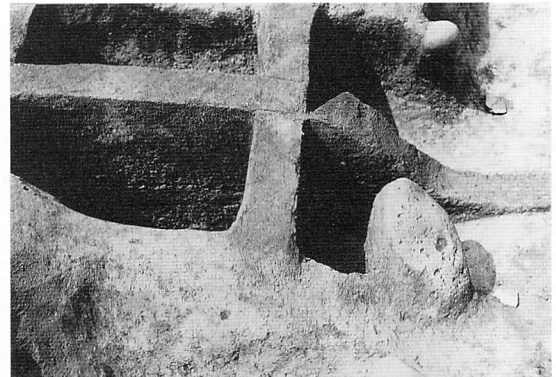
住居断面



遺物出土状況

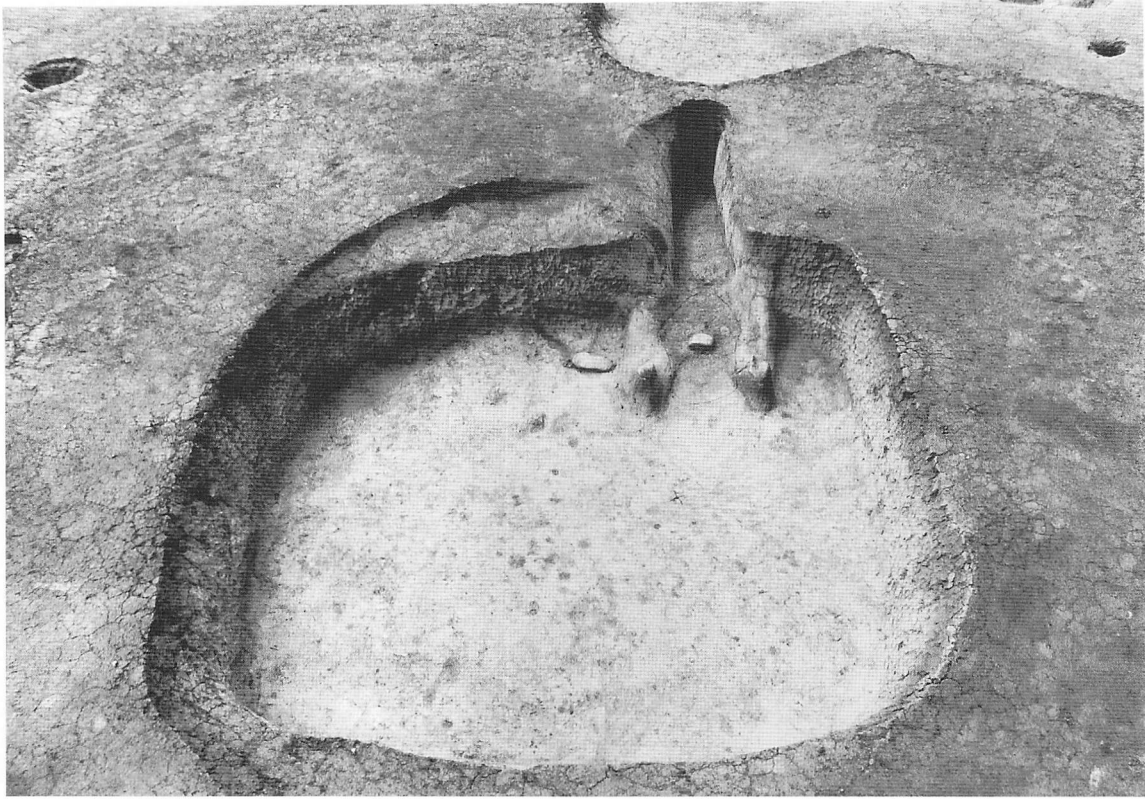


遺物出土状況

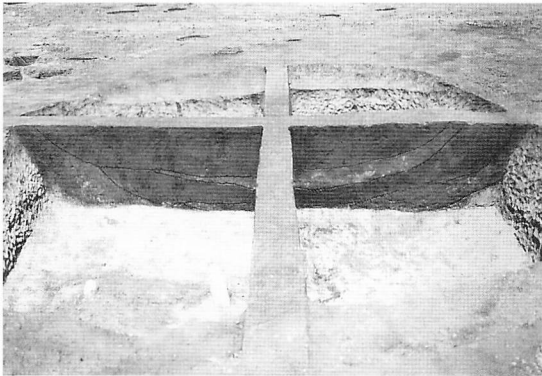


カマド断面

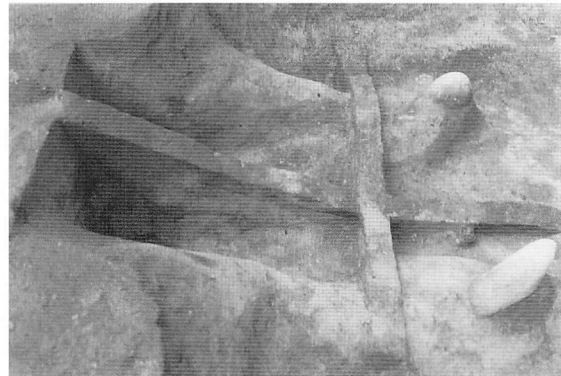
写真図版 2 鬼柳 A 遺跡第 7 次調査 RA008 住居跡



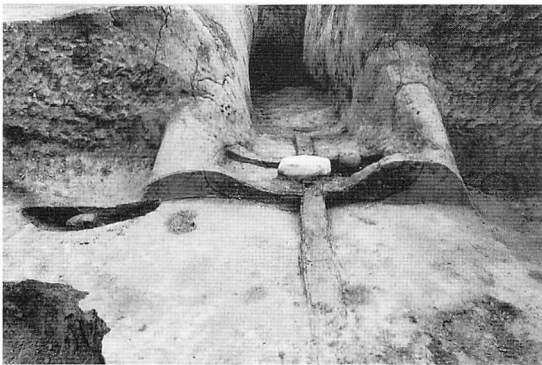
住居全景



住居断面



カマド断面

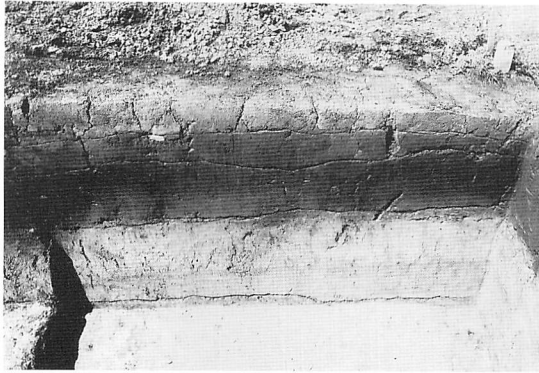


カマド袖断面



カマド煙道断面

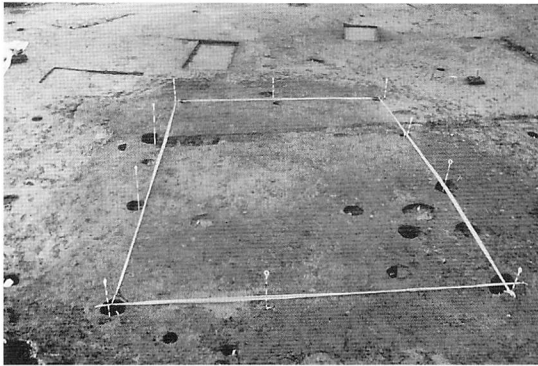
写真図版 3 鬼柳 A 遺跡第 7 次調査 RA009 住居跡



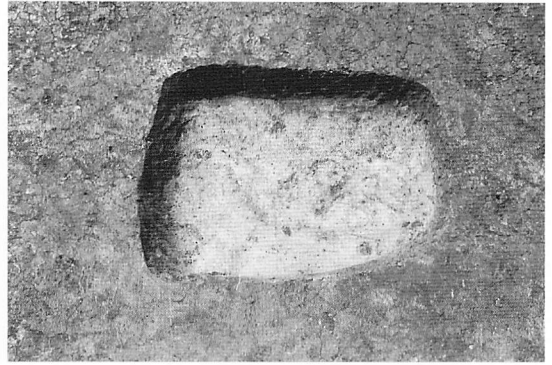
基本土層（北東端）



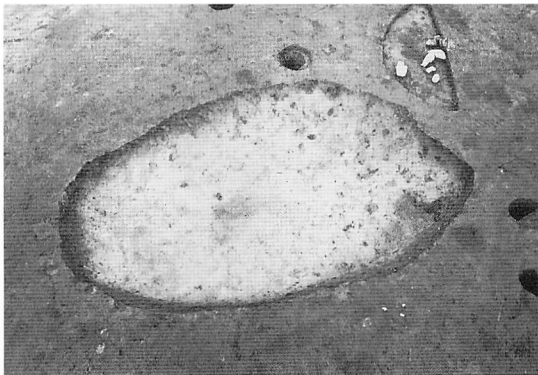
R D 008 完掘



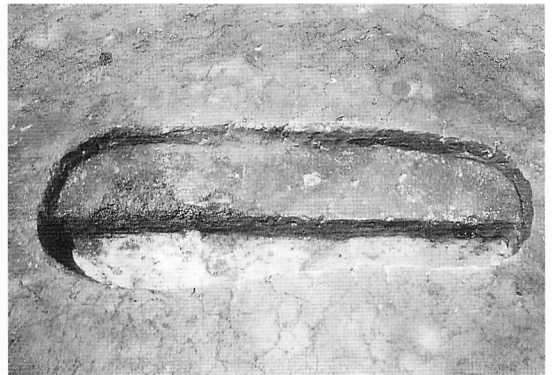
掘立柱建物跡



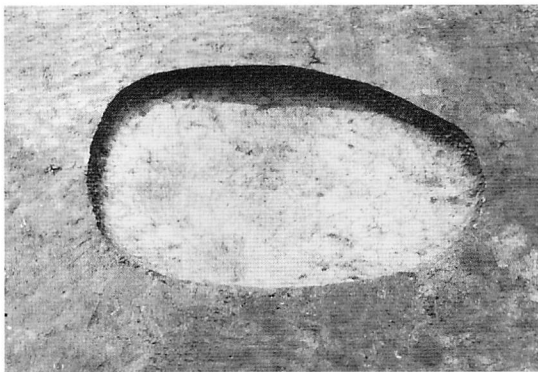
R D 009 完掘



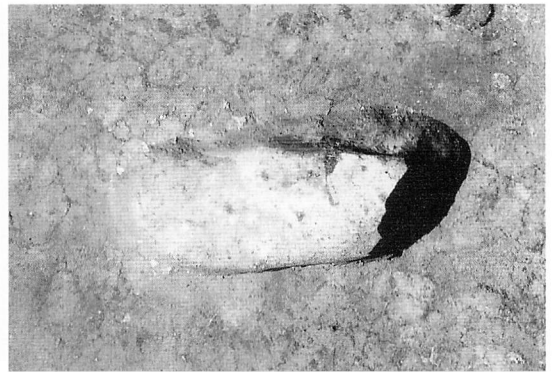
R D 006 完掘



R D 010 断面

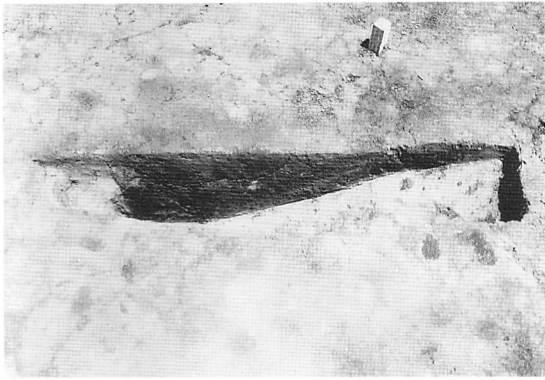


R D 007 完掘

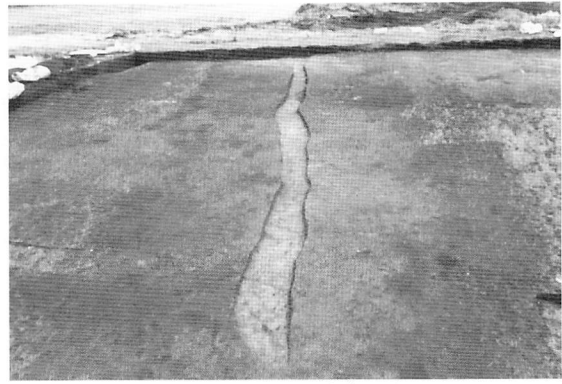


R D 011 完掘

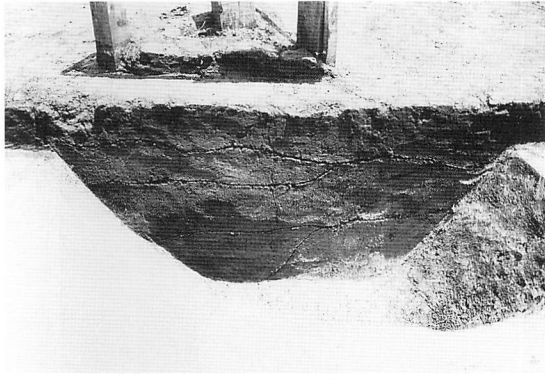
写真図版 4 鬼柳 A 遺跡第 7 次調査基本土層、掘立柱建物跡、土坑



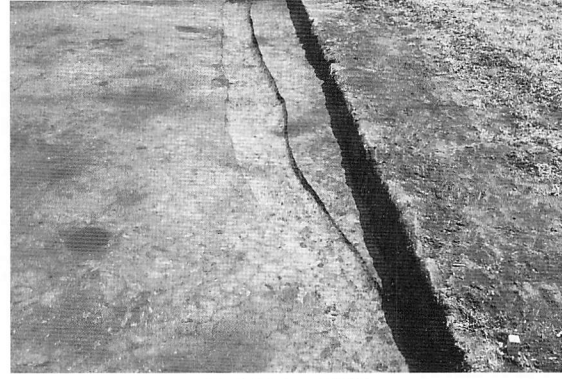
R D012 断面



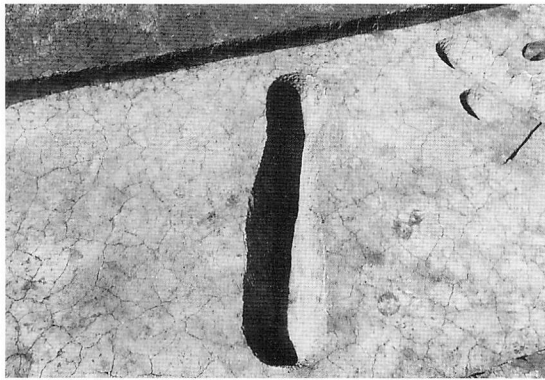
R G002 完掘



R D013 断面



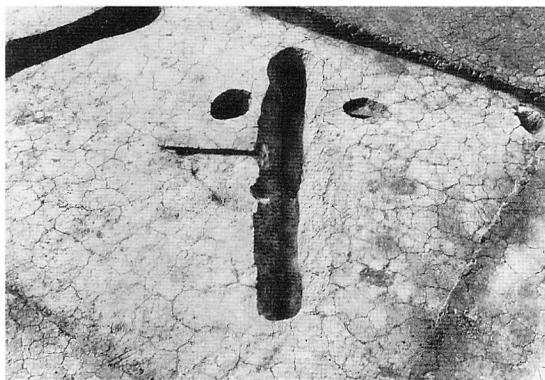
R G003 完掘



R D014 完掘



R G004 完掘



R D015 完掘



R G005 完掘

写真図版 5 鬼柳 A 遺跡第 7 次調査土坑、溝跡



写真図版 6 鬼柳 A 遺跡第 7 次調査出土遺物

土師器観察表

No.	器種・部位	出土位置	法 量 (cm)			特 徴
			口径	底径	器高	
1	甕 口縁～体部	RA008 1層	18.6	—	(21.5)	外-ヨコナデ ヘラナデ, 内-ヨコナデ ヘラナデ, にぶい橙色
2	坏 略完形	RD009 1層	(15.3)	(8.5)	4.5	外-ヘラミガキ, 底-ヘラミガキ, 内-ヘラミガキ, 内黒, にぶい黄橙色
3	坏 略完形	RD009 1層	(12.3)	7.6	3	外-ヘラミガキ, 底-ヘラミガキ, 内-ヘラミガキ, 内黒, にぶい黄橙色
4	甕 口縁部	RA009 Pit1	(14.7)	—	—	外-ヨコナデ, 内-ヨコナデ, にぶい黄橙色
5	坏 口縁部	RD009 1層	—	—	—	外-ヘラミガキ, 内-ヘラミガキ, 内黒, にぶい黄橙色
6	坏 体 部	RA009 2層	—	—	—	外-ヘラミガキ, 内黒, にぶい黄橙色
7	甕 口縁部	RA009 2層	—	—	—	外-ヨコナデ, 内-ヘラナデ, 灰黄褐色

報 告 書 抄 録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書 名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編 集 者	阿部真澄							
編 集 機 関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019 (638) 9001							
発行年月日	2001年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	。 , ”	。 , ”			
おにやぎえいせき 鬼柳 A 遺跡 第 7 次 調 査	もりおかし 盛岡市 もとみやあざおにやなぎ 本宮字鬼柳 47-4 ほか	03210	LE16 -2120	39度 40分 56秒	141度 7分 39秒	20000412 ～ 20000714	3,194m ²	「盛岡西バイパス建設工事」に伴う緊急発掘調査
所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鬼柳 A 遺跡 第 7 次 調 査	集落跡	奈良時代 ・ 近世	竪穴住居跡 2 棟・掘立 柱建物跡 1 棟・土坑 10 基・溝跡 4 条・柱穴状 ピット 288 基		土師器 陶磁器			

(38) 熊堂^{くまどう}B遺跡第11次調査

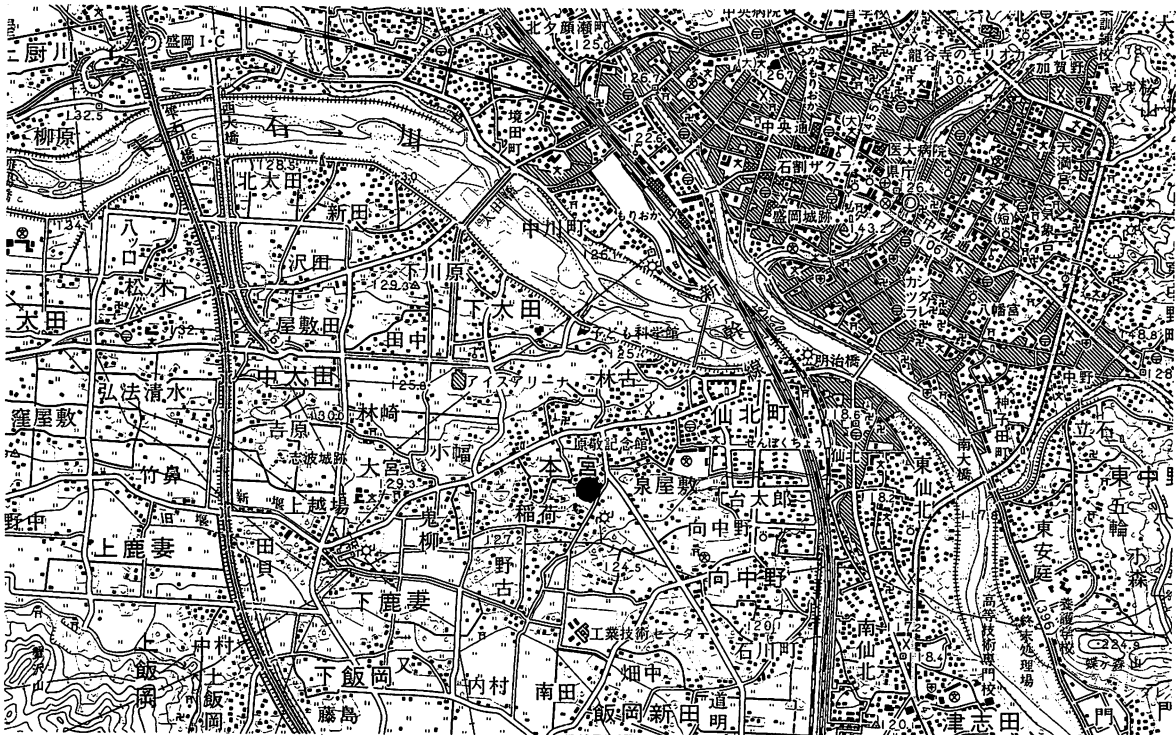
所在地 盛岡市本宮字熊堂36番地1ほか
委託者 国土交通省東北地方建設局岩手工事事務所
事業名 盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間 平成12年5月1日～5月17日
調査対象面積 660m²
発掘調査面積 660m²
遺跡番号・略号 LE16-2118・OKO-00-11
調査担当者 中田 迪・千葉正彦
協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発整備事業は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済、文化などに対する各機能を兼ね備えてきた東北の拠点都市を目指して、現在の概成市街地に南部地区を新市街地として開発し、両者が有機的に結び付いた軸状都市を形成するために策定された地区整備事業である。この間、事業の対象地域にかかわる埋蔵文化財のとり扱いについても協議が重ねられた。その結果平成12年度事業として確定した。

2. 遺跡の立地

熊堂B遺跡の所在する盛岡市は岩手県の中央部に位置している。遺跡はJR東北本線仙北町駅の西側約1.9kmにあり雫石川の西岸に形成された河岸段丘上に立地している。国土地理院発行の2万5千分の1地形図「盛岡」NJ-54-13-14-2（盛岡14号-2）の図幅に含まれ北緯39度40分47秒、東経141度8分40秒



遺跡位置

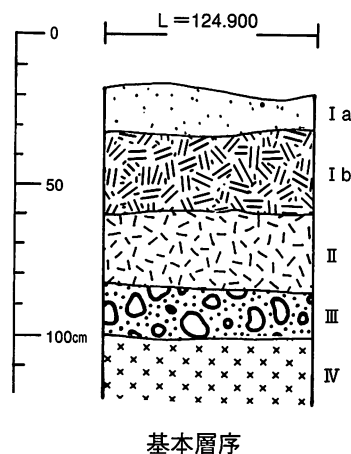
1:50,000 盛岡

付近にあたる。標高は120.30～121.60mで現状は水田及び畑地である。

3. 遺跡の基本層序

調査区の北～中央部では、次のような土の堆積である。

- I a 層 10YR2/3 黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり
水田の耕作土
- I b 層 10YR2/1 黒色土 粘性中 しまり中 酸化鉄(サビ)
の集積が見られる。水田の床土
- II 層 10YR3/2 暗褐色土と黒褐色土の混合土 粘性中 しま
り中 この層に土師器の破片が含まれている。この層の
面で住居跡などが見つかる。
- III 層 10YR5/6 黄褐色砂質土 粘性なし しまり弱 砂っぽ
い土 下層では石を多く含んでいる。
- IV 層 10YR5/8 黄褐色砂土 粘性なし しまりなし サラサ
ラ



4. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、住居状1棟、溝跡2条、焼土1基、柱穴135基である。

<住居状> 調査区の南東側で検出され、規模は長軸300cm・短軸240cmの隅丸方形を呈している。底径は210×295cm、深さ10cm・壁高は東壁16.1cm・西壁7.4cm・南壁6.5cm・北壁8.9cmである。埋土は3層で1層目は黒褐色土の粘土質シルトに5YR6/6の焼土がブロック状に含まれている。2層目は10YR4/1褐灰色土の粘土と2/2黒褐色土質シルトの混合土である。3層目は6/1の褐灰砂質と3/2の黒褐色粘土質の混合土である。カマドは検出できなかった。出土遺物は、土師器片14点が出土した。出土遺物より、平安時代のもと思われる。

<焼土遺構> 調査区5I15tグリッドで検出した。いびつな楕円形を呈し、径は33～46cm・焼土の厚さは6cmである。出土遺物は土師器片が51点である。

<溝状遺構> 溝跡は2条検出した。RG80は東西に走り、長さは約42m・上端幅95～200cm・深さ35～40cmである。流路はやや蛇行している。RG81も東西に走り、検出長は約39m・上端幅75～80cm・深さ30～35cmである。流路は同じく蛇行してRG80と交差しており、切り合いの関係にある。RG80よりは埋土から新しいものと判断をする。遺物の出土はなく、遺構の構築年代は新しい可能性が高い。

<柱穴> 調査区全体で柱穴は135基検出された。個々の柱穴の詳細については表のとおりである。出土遺物がないのと、埋土から近現代の可能性が高い。

5. 出土遺物

遺物は、土師器片が69片出土した。住居状で14片、RF01焼土遺構で51片出土した。鉢と壺と思われるが復元できるものはなかった。

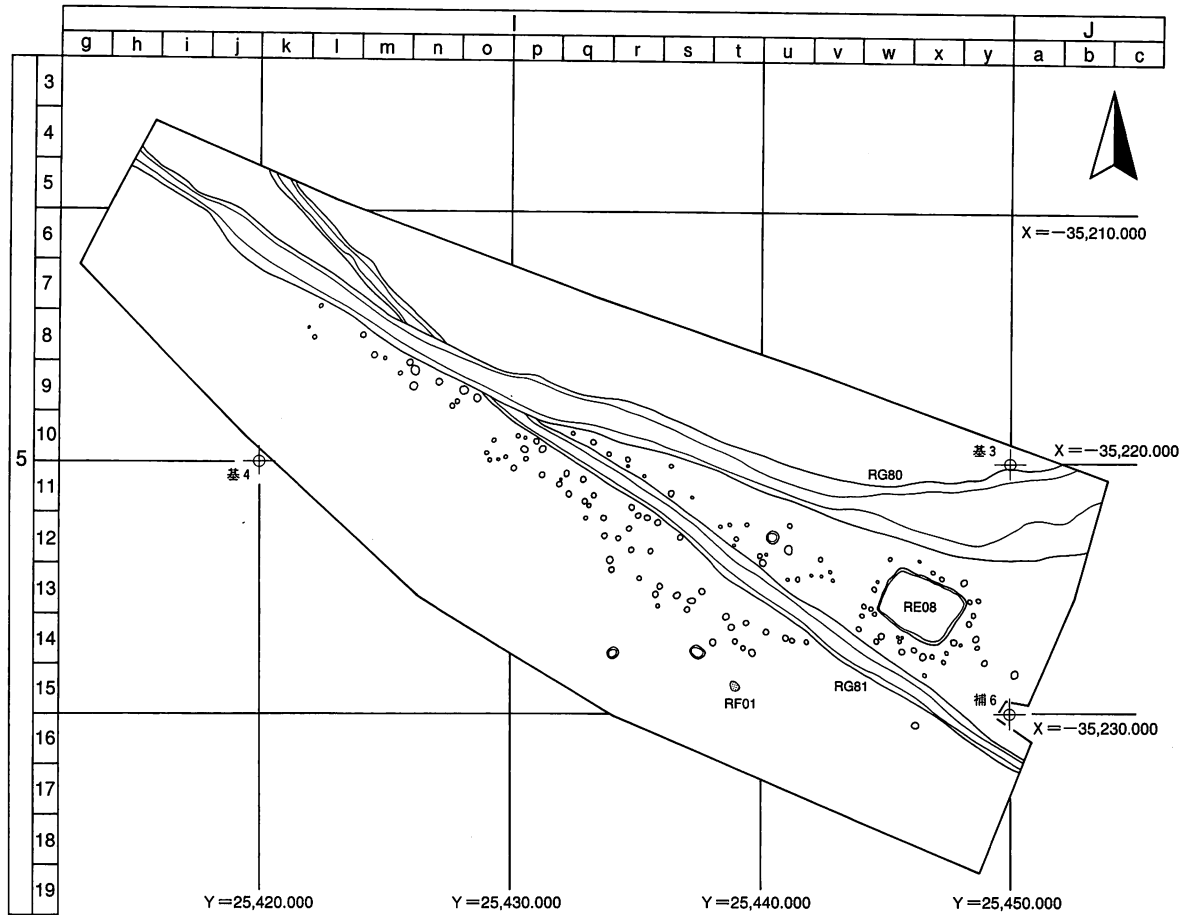
6. まとめ

今回の調査により、平安時代の竪穴状住居跡と近現代の溝跡を確認し、同時代における人々の生活の痕跡及び土地利用の一端を知ることができた。

なお、熊堂B遺跡第11次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。

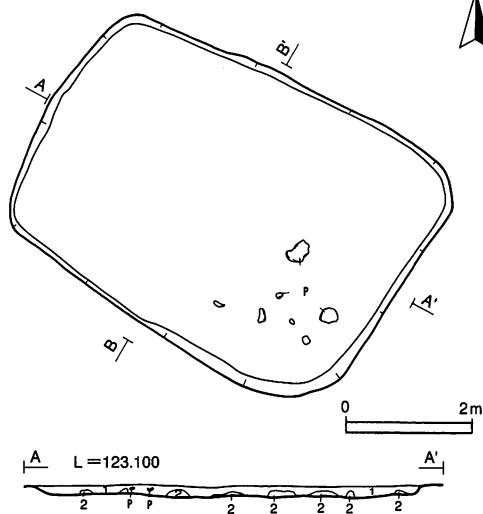
報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	中田 迪							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019 (638) 9001							
発行年月日	西暦2001年 3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 。 。	東経 。 。 。	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くまどうびいせき 熊堂B遺跡 だいじゅういちじょうさ 第11次調査	もりおかしとみやまぐま 盛岡市本宮字熊 堂36-1ほか	03201	LE16- 2118	39度 40分 47秒	141度 08分 40秒	20000511～ 20000517	660㎡	盛南開発事業 (盛岡西バイ パス)に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
熊堂B遺跡 第11次調査	集落跡	平安時代	住居状 1棟 溝跡 2条 焼土 1基		土師器片			



熊堂B遺跡第11次調査遺構配置図

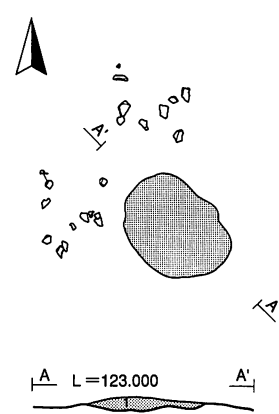
RE08 竪穴状遺構



A-A' B-B'

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘土質シルト 粘性あり しまりあり
5YR6/6 橙色土が焼土ブロック状に含む
2. 10YR4/1 褐灰色土 粘土と10YR2/2 黒褐色土粘土質シルトの混合土 粘性あり しまりあり
3. 10YR6/1 褐灰色土 粘質土と10YR3/2 黒褐色土の粘土質との混合土 粘性あり しまりあり

RF01 焼土遺構

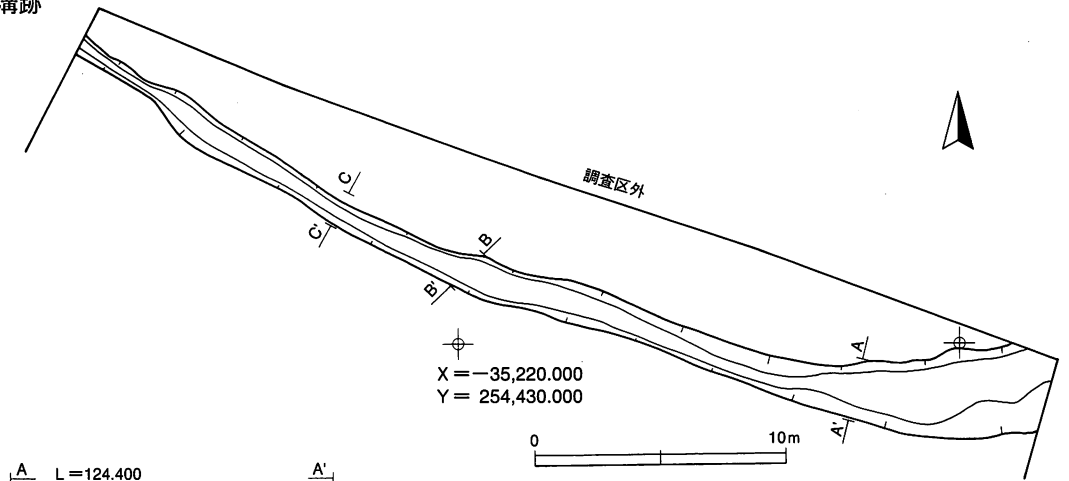


A-A'

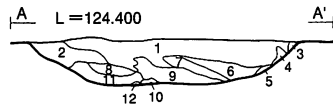
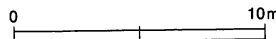
1. 5YR6/8 橙色土 焼土 粘性なし しまりややあり

熊堂B遺跡第11次調査竪穴状遺構・焼土遺構

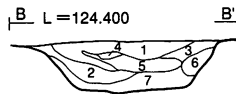
R G80溝跡



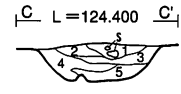
X = -35,220.000
Y = 254,430.000



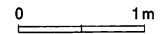
- A-A'
- 10YR3/4 暗褐色土 粘性中 しまり中
 - 10YR3/4 暗褐色土 粘性なし しまりなし 砂状
 - 10YR3/4 暗褐色土 粘性中 しまり中
 - 10YR5/8 黄褐色土 粘性強 しまり強 粘土状
 - 10YR5/8 黄褐色土 粘性強 しまり強 粘土状
 - 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性なし しまりなし 砂と親指大から握りこぶし大の小石含む
 - 10YR4/6 褐色土 粘性なし しまりなし 砂状
 - 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまりなし 砂状
 - 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりなし
 - 10YR5/8 黄褐色土 粘性強 しまり強 粘土状
 - 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性なし しまりなし 砂と小石含む
 - 10YR5/8 黄褐色土 粘性強 しまり強



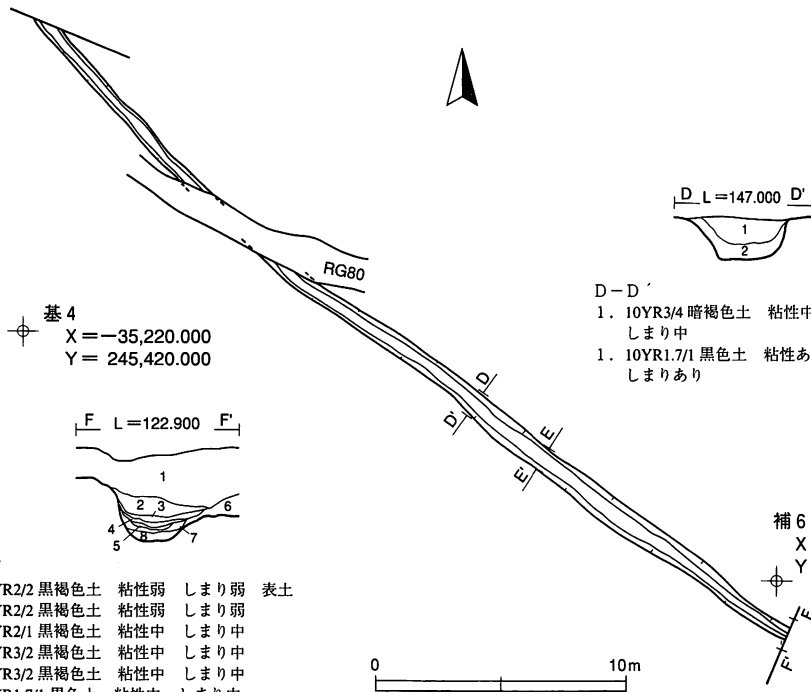
- B-B'
- 10YR3/4 暗褐色土 粘性中 しまり中
 - 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまりなし 砂状
 - 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし しまりなし 砂状
 - 10YR2/3 黒褐色土 粘性中 しまりなし
 - 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性なし しまりなし
 - 10YR1.7/1 黒色土 粘性中 しまり中
 - 10YR4/4 褐色土 粘性中 しまり中



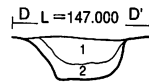
- C-C'
- 10YR3/4 暗褐色土 粘性中 しまり中
 - 10YR3/3 暗褐色土 粘性なし しまりなし
 - 10YR3/2 黒褐色土 粘性なし しまりなし 砂状
 - 10YR2/3 黒褐色土 粘性なし しまりなし
 - 10YR4/4 褐色土 粘性中 しまり中



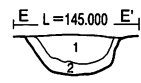
R G81溝跡



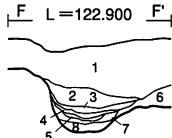
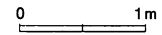
基 4
X = -35,220.000
Y = 245,420.000



- D-D'
- 10YR3/4 暗褐色土 粘性中 しまり中
 - 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり しまりあり

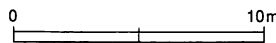


- E-E'
- 10YR3/4 暗褐色土 粘性中 しまり中
 - 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり しまりあり

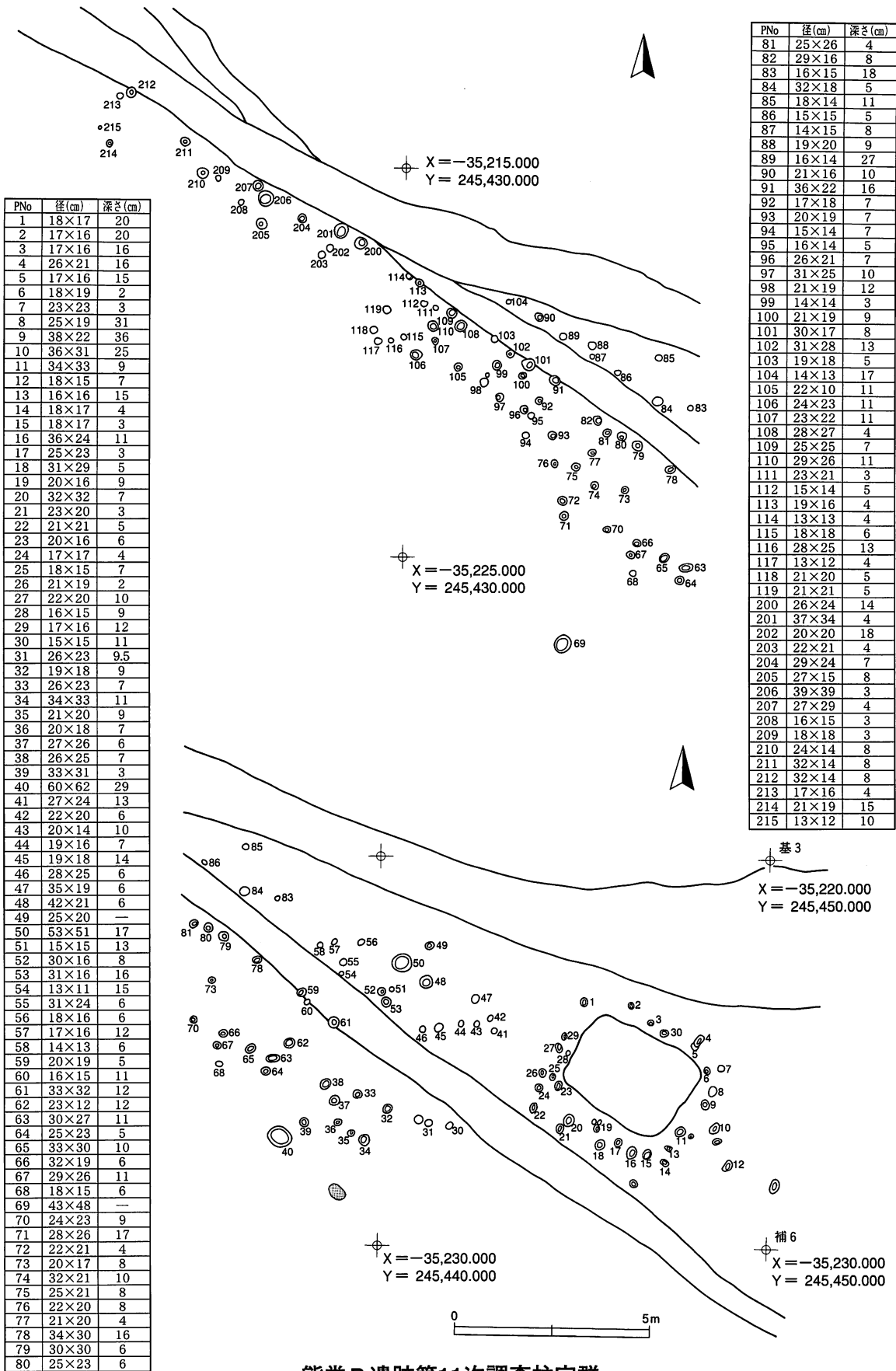


- F-F'
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱 しまり弱 表土
 - 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱 しまり弱
 - 10YR2/1 黒褐色土 粘性中 しまり中
 - 10YR3/2 黒褐色土 粘性中 しまり中
 - 10YR3/2 黒褐色土 粘性中 しまり中
 - 10YR1.7/1 黒色土 粘性中 しまり中
 - 10YR3/2 暗褐色土 粘性あり しまりあり
 - 10YR2/1 黒色土 粘性あり しまりあり

補 6
X = -35,230.000
Y = 245,450.000



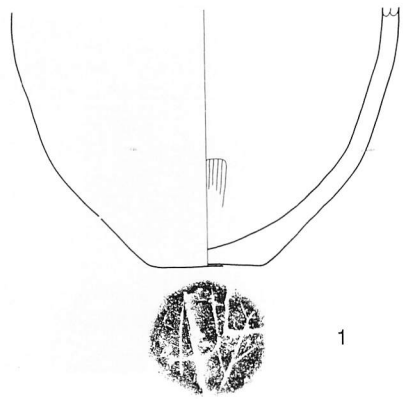
熊堂B遺跡第11次調査溝跡



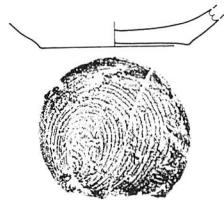
PNNo	径(cm)	深さ(cm)
1	18×17	20
2	17×16	20
3	17×16	16
4	26×21	16
5	17×16	15
6	18×19	2
7	23×23	3
8	25×19	31
9	38×22	36
10	36×31	25
11	34×33	9
12	18×15	7
13	16×16	15
14	18×17	4
15	18×17	3
16	36×24	11
17	25×23	3
18	31×29	5
19	20×16	9
20	32×32	7
21	23×20	3
22	21×21	5
23	20×16	6
24	17×17	4
25	18×15	7
26	21×19	2
27	22×20	10
28	16×15	9
29	17×16	12
30	15×15	11
31	26×23	9.5
32	19×18	9
33	26×23	7
34	34×33	11
35	21×20	9
36	20×18	7
37	27×26	6
38	26×25	7
39	33×31	3
40	60×62	29
41	27×24	13
42	22×20	6
43	20×14	10
44	19×16	7
45	19×18	14
46	28×25	6
47	35×19	6
48	42×21	6
49	25×20	—
50	53×51	17
51	15×15	13
52	30×16	8
53	31×16	16
54	13×11	15
55	31×24	6
56	18×16	6
57	17×16	12
58	14×13	6
59	20×19	5
60	16×15	11
61	33×32	12
62	23×12	12
63	30×27	11
64	25×23	5
65	33×30	10
66	32×19	6
67	29×26	11
68	18×15	6
69	43×48	—
70	24×23	9
71	28×26	17
72	22×21	4
73	20×17	8
74	32×21	10
75	25×21	8
76	22×20	8
77	21×20	4
78	34×30	16
79	30×30	6
80	25×23	6

PNNo	径(cm)	深さ(cm)
81	25×26	4
82	29×16	8
83	16×15	18
84	32×18	5
85	18×14	11
86	15×15	5
87	14×15	8
88	19×20	9
89	16×14	27
90	21×16	10
91	36×22	16
92	17×18	7
93	20×19	7
94	15×14	7
95	16×14	5
96	26×21	7
97	31×25	10
98	21×19	12
99	14×14	3
100	21×19	9
101	30×17	8
102	31×28	13
103	19×18	5
104	14×13	17
105	22×10	11
106	24×23	11
107	23×22	11
108	28×27	4
109	25×25	7
110	29×26	11
111	23×21	3
112	15×14	5
113	19×16	4
114	13×13	4
115	18×18	6
116	28×25	13
117	13×12	4
118	21×20	5
119	21×21	5
120	26×24	14
121	37×34	4
122	20×20	18
123	22×21	4
124	29×24	7
125	27×15	8
126	39×39	3
127	27×29	4
128	16×15	3
129	18×18	3
130	24×14	8
131	32×14	8
132	32×14	8
133	17×16	4
134	21×19	15
135	13×12	10

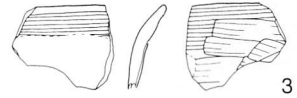
熊堂B遺跡第11次調査柱穴群



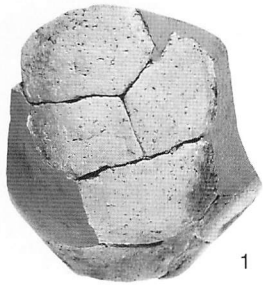
1



2



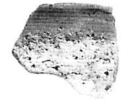
3



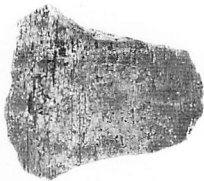
1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

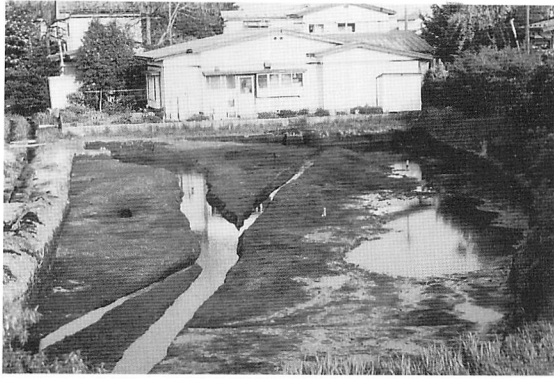


11

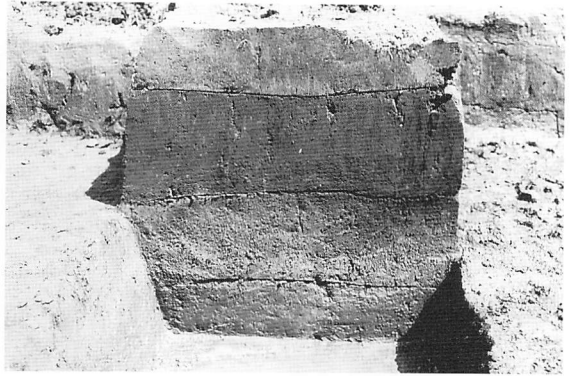


調査区全景

熊堂B遺跡第11次調査出土遺物・調査区全景



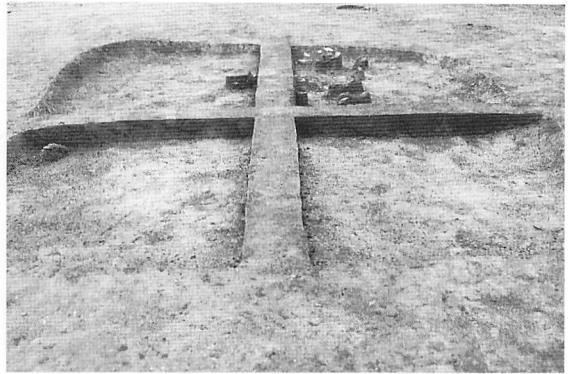
調査区全景



基本層序



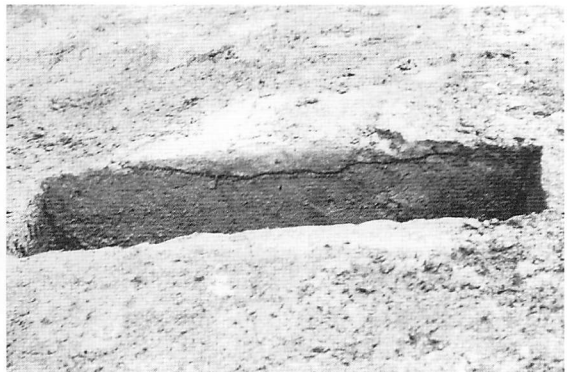
RE08 平面



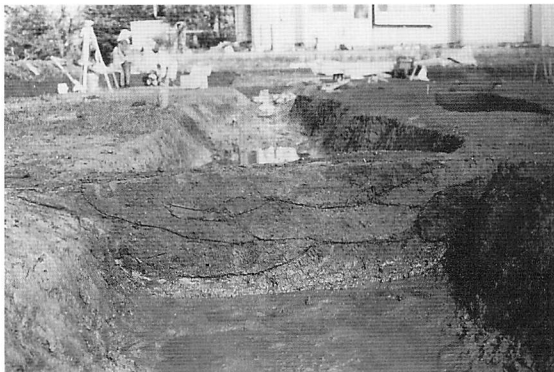
RE08 断面



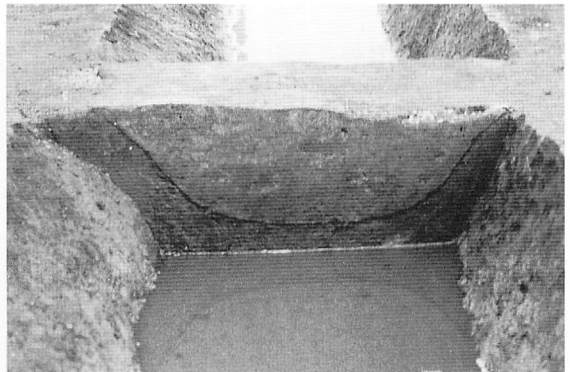
RF01 平面



RF01 断面



RG80 断面

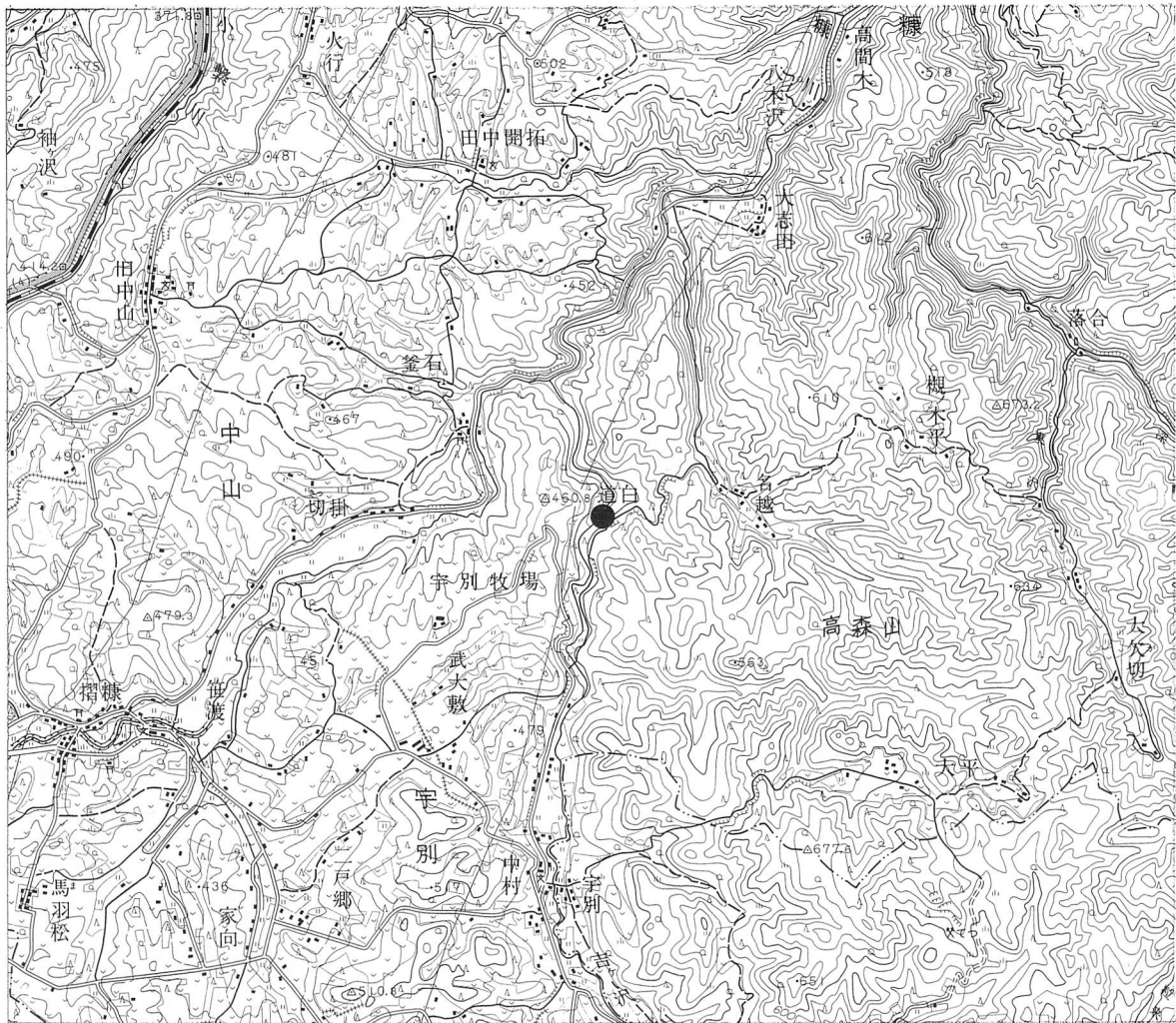


RG81 断面

写真図版 熊堂B遺跡第11次調査検出遺構

(39) 道白Ⅱ遺跡

所在地 二戸郡一戸町宇別字道白5番地ほか
委託者 農林水産省東北農政局
馬淵川沿岸農業水利事業所
事業名 大志田ダム建設
発掘調査期間 平成12年6月1日～8月31日
調査対象面積 6,000m²
発掘調査面積 6,000m²
遺跡番号・略号 J E 79-0383・D J Ⅱ-00
調査担当者 安藤由紀夫・早坂 悟
協力機関 一戸町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 一戸・葛巻

1. 調査に至る経過

本地区は、岩手県北部を貫流する馬淵川の沿岸に位置し、二戸市及び一戸町にまたがる2,810haの畑作農業地帯である。この地域は灌漑施設が未整備で、作物の生育期間における降水量不足のため、干害による被害がしばしば生じており、農業生産の阻害要因となっていた。このため、2,590haの灌漑を目的に新規水源として、馬淵川支流の平糠川に大志田ダムを築造する工事を進めている。

この大志田ダムの湛水敷には周知の埋蔵文化財包蔵地があったため、岩手県教育委員会に依頼し、平成10年10月から平成11年4月にかけて11カ所の試掘調査を実施した。この試掘調査の結果、縄文時代に属する土器片と遺構が2箇所で見出されたため、工事着手前に記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨、平成11年5月14日付け教文第156号により通知があった。

この通知を受け、岩手県文化課へ平成12年度発掘調査の要請を行い、文化財保護法第57条の3第1項の規定により、平成11年10月14日文化庁長官あて発掘届の通知をした。

これに対し、平成11年11月1日付け教文第7-220号にて発掘調査を実施するよう通知があり、平成12年3月6日付け教文第1220号によって平成12年度に道白Ⅱの発掘調査を行うこととした。

調査は財団法人岩手県文化振興事業団に委託し、平成12年6月1日から同年8月31日まで現地調査(6,000m²)を実施した。

2. 遺跡の立地

道白Ⅱ遺跡は、JR奥中山駅の東3kmに位置し、南から流入する宇別川左岸の自然堤防状の平坦地に立地している。遺跡の標高は377m前後で、北・西・東側は標高400m前後の山地に囲まれている。調査前の現況は畑地及び牧草地である。

3. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

Ⅰ層 黒褐色土(10YR2/2) 表土。植根・径5mm程度の小礫を疎らに含む。

Ⅱ層 黒色土(10YR2/1) 植根を僅かに含む。

Ⅲa層 黒色土(10YR2/1) 上位に灰黄褐色の中礫火山灰を、下位に褐色土ブロックを含む。

Ⅲb層 褐色粘質土(10YR4/6) 黒色土粒を疎らに含む。漸位層。遺構検出面に当たる。

Ⅲc層 黒褐色土(10YR2/2) 基本層序では確認されなかったが、調査区北側において確認された層。

Ⅳa層 黄褐色粘質土(10YR5/6) 地山層。

Ⅳb層 黄褐色土(10YR5/8) 砂礫層。径20mm～人頭大の礫を全体に含む。

Ⅳc層 黄褐色砂質土(10YR5/8) 砂層。径3mm程度の極小礫を全体に含む。

4. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、土坑2基、焼土遺構2基、炭窯1基である。また、調査区域内を南北に少なくとも3条の旧沢跡が走っており、東端の旧沢跡には遺物包含層が形成されていた。

<竪穴住居跡> 調査区北端中央、ⅢA2cグリッド付近のⅢb～Ⅲc層中において、部分的に焼土ブロック・炭化材を含む黒～黒褐色土のほぼ円形の広がりとして検出された。規模・平面形は径295cm前後の略円形を呈する。壁は北東側のみ残存し、やや外傾して立ち上がる。壁高の残存値は6～13cm程度で、Ⅲb～Ⅲc層中に構築されている。埋土は黒～黒褐色土を主体とする。床面上5～10cmの面で、多量の炭化材と焼土が検出されたことから、本遺構は焼失したものと考えられる。なお、炭化材の樹種はクリ・ケヤキ・タモ・イタヤである。床面は、ほぼ平坦で、Ⅲb～Ⅲc層中に構築されており、床面南側の石囲炉付近を除き、非

常に固く締る。柱穴・壁溝・貼床痕跡は確認されなかった。床面中央北東寄りと南側で、石囲炉が検出されている。1号炉(北東寄り)は、長径30cm程度の4個の礫(掘り方を持つ)をほぼ正方形に配置して、構築されている。焼土層は、床面から9cm程高い面で検出され、27×30cmの範囲に、最大7cmの厚さで焼土層が形成されていた。2号炉(南側)は、床面より13cm程低い面に、径10~20cmの礫をほぼ円形に配列して構築されている。明確な焼土層は確認されていないが、炉の埋土の1層中には暗赤褐色焼土粒が含まれていた。住居跡の規模・構築面の高低差・焼土の焼成具合・炉の形態の違いから、2基の炉の同時存在は考えにくく、2号炉の廃絶後、1号炉を構築・使用したものと考えられる。また、1号炉の焼土層が床面より高いレベルで検出されていることから、1号炉使用時の床面レベルはもっと高かった可能性もある。遺構の時期は、出土遺物の特徴から縄文時代中期末葉に属する可能性が高い。

＜土坑＞ 2基検出されている。RD01は、ⅢB4cグリッド内のⅣc層上面において、黒色土の円形の広がりとして検出された。規模は、開口部径112×98cm・深さ約14cmである。平面形は略円形を呈し、断面形は浅皿状を呈する。埋土は単層で、小礫を全体に含む黒色土主体である。RD02は、ⅡC5d・ⅢC1dグリッド内のⅣa層上面において、黒褐色土の円形の広がりとして検出された。規模は、開口部径120×110cm・深さ約7cmである。平面形は略円形を呈し、断面形は浅皿状を呈する。埋土は単層で、黒色土と黒褐色土の混合土主体である。2基共に出土遺物がなく、時期・性格は不明である。

＜焼土遺構＞ 2基検出されている。RF01は、ⅣB1cグリッド内のⅡ層中において検出された。95×50cmの範囲に、最大6cmの厚さで、焼成の比較的良好な焼土層が形成されている。焼土の周囲に径10~50cmの川原石が4個存在するが、被熱の痕跡は確認されなかった。RF02は、ⅢA2aグリッド内のⅡ層下面で検出された。55×35cmの範囲に、最大7cmの厚さで焼土層が形成されている。2基共に焼土内からの出土遺物がなく、時期を特定することはできないが、周辺から縄文土器が比較的多く出土していることから縄文時代の遺構である可能性がある。

＜炭窯＞ 調査区南端のⅡD1aグリッド付近のⅡ層上面で、炭化物を多量に含む黒色土の長楕円形の広がりとして検出された。規模は開口部径520×140cm・深さ23~33cmで、平面形は長楕円形を呈し、長軸は南北方向に伸びる。断面形は皿状を呈する。埋土は黒色土主体で、炭化材を多量に含む。樹種はナラとイタヤである。底面は、若干の凹凸があるが、ほぼ平坦でⅢb層中に構築されている。南側では、部分的に焼土層が確認された。出土遺物がないため、詳細は不明であるが、形態から考えて近世以降の遺構である可能性が高い。

＜出土遺物＞ 出土した土器は大コンテナ1.5箱である。遺構内出土土器は1~3で、ⅡA2c竪穴住居跡床面直上からの出土である。1(P2)は波状口縁(波頭部欠損)を持つ深鉢である。口唇部は角状(前にひき出される)でミガキ調整を施され、口縁部には刺突列を有する。胴部は原体LR斜位・横位の単節縄文を有し、沈線によって文様が描かれ鱗状の隆帯装飾が付けられている。2(P3)は深鉢の胴部で、原体RLR縦位の複節斜行縄文を有し、沈線によって文様が描かれている(磨消縄文か?)。3(P1)は原体RL横位の単節斜行縄文を有する深鉢の底部である。いずれも縄文時代中期末葉(大木10式に相当)の遺物であると考えられる。4~31は遺構外出土土器で、そのほとんどは調査区東側を南北に走る旧沢跡に形成された遺物包含層からの出土である。縄文時代中期・後期・晩期に属すると考えられるものが出土している。後期に属すると考えられる土器の占める割合が最も高い。土器型式をある程度特定し得る特徴を持った土器としては6・7・11・16・17・21が挙げられる。6は口縁部に沈線と瘤を有し、胴部には帯縄文とその上に2個一對の瘤を6対有する深鉢である。7は頸部に平行沈線を巡らし、その上に先の尖った瘤を3段にわたって貼り

付けた、壺あるいは注口土器の口縁～頸部である。共に縄文時代後期後～末葉(十腰内Ⅳ～Ⅴ式に相当)の遺物であると考えられる。11はミニチュア土器で、器種は台付鉢である。口唇部に刻みを持つ突起を有し、頸部には入組み文を持つ。縄文時代後期末葉～晩期初頭(大洞B1式に相当)の遺物と考えられる。16は入組み文・三叉文を口縁部に有する鉢の口縁～胴部片、17は口縁部が小波状を呈し、入組み三叉文を持つ鉢あるいは深鉢片で、共に縄文時代晩期初頭～前葉(大洞B～BC式に相当)の土器片と考えられる。21は波状口縁を持つと考えられる深鉢の口縁部片で、隆帯で区画し、区画された部分を半裁竹管による刺突文で充填している。また隆帯上には原体圧痕文を付している。縄文時代中期前葉(円筒上層C式に相当)の土器片と考えられる。

石器の出土は、32の不定形石器1点のみである。尖頭器的な使われ方をしたものと考えられる。調査区東側の遺物包含層からは、33の石核が1点と剝片が15点出土している。32・33は共に石質は頁岩で、産地は北上山地である。なお、ⅢA2c堅穴住居跡床面において、擦痕が認められる礫を数個確認したが、使用痕が顕著ではなかったため、石器としては登録・掲載しなかった。

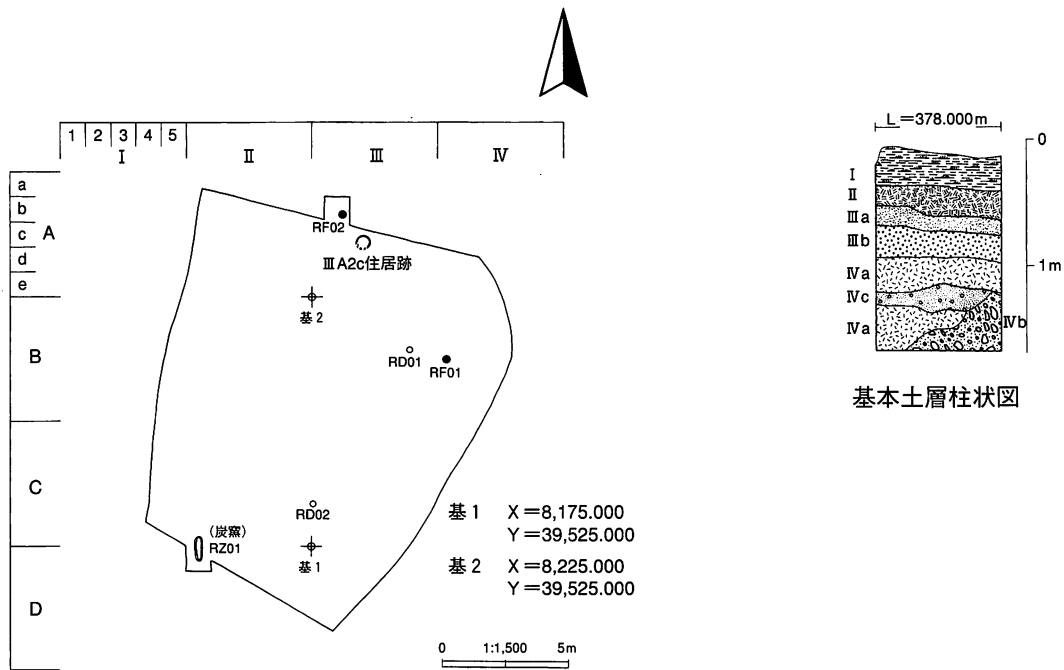
5. まとめ

調査の結果、縄文時代中期末葉の堅穴住居跡1棟の存在を確認し、当時の人々の生活の痕跡の一端を窺い知ることができた。また、縄文後期～晩期にかけての遺物が出土したことは、本遺跡の周辺に該期の集落が存在する可能性を示すと考えられる。さらに、炭窯跡の確認によって、近世以降の土地利用の一端を知ることができた。

なお、道白Ⅱ遺跡(東北農政局分)に関わる報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	安藤由紀夫・早坂 悟							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019(638)9001							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。、。、	。、。、			
どろじろにいきき 道白Ⅱ遺跡	いわてけん 岩手県二戸郡 いちのへちよう 一戸町宇別字 どろじろ 道白5番地ほか	03524	JE79- 0383	40度 12分 31秒	141度 19分 34秒	20000601 ～ 20000831	6,000m ²	「大志田ダム 建設」に伴う 緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
道白Ⅱ遺跡	散布地	縄文時代 近世～近代	堅穴住居跡	1棟	縄文土器	縄文時代中期末葉の堅 穴住居跡を検出		
			土坑	2基	石器・石核			
			焼土遺構	2基				
			炭窯	1基				

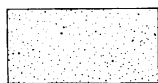


遺構配置図

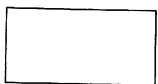
遺構・遺物実測図凡例



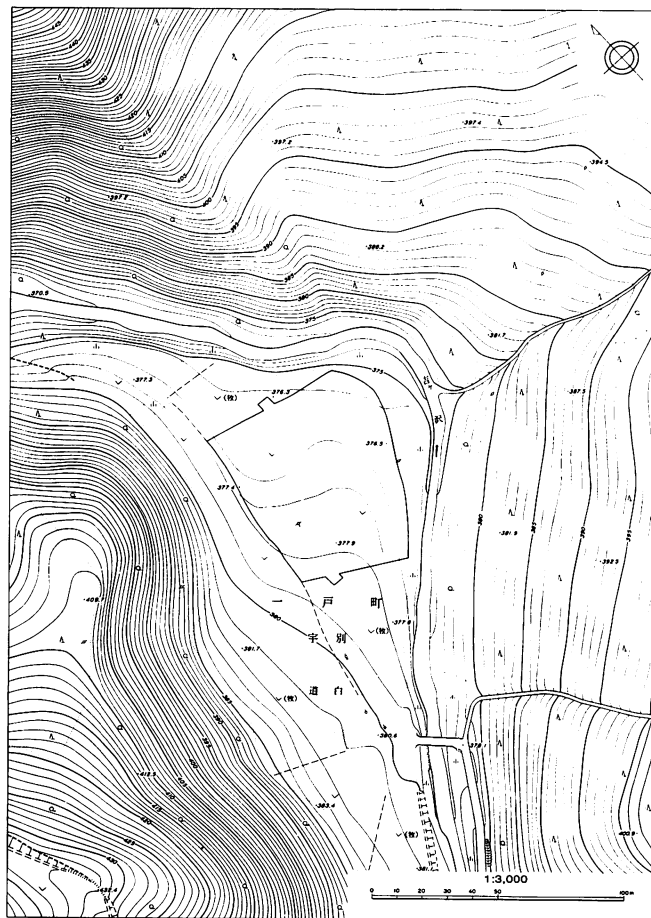
焼土



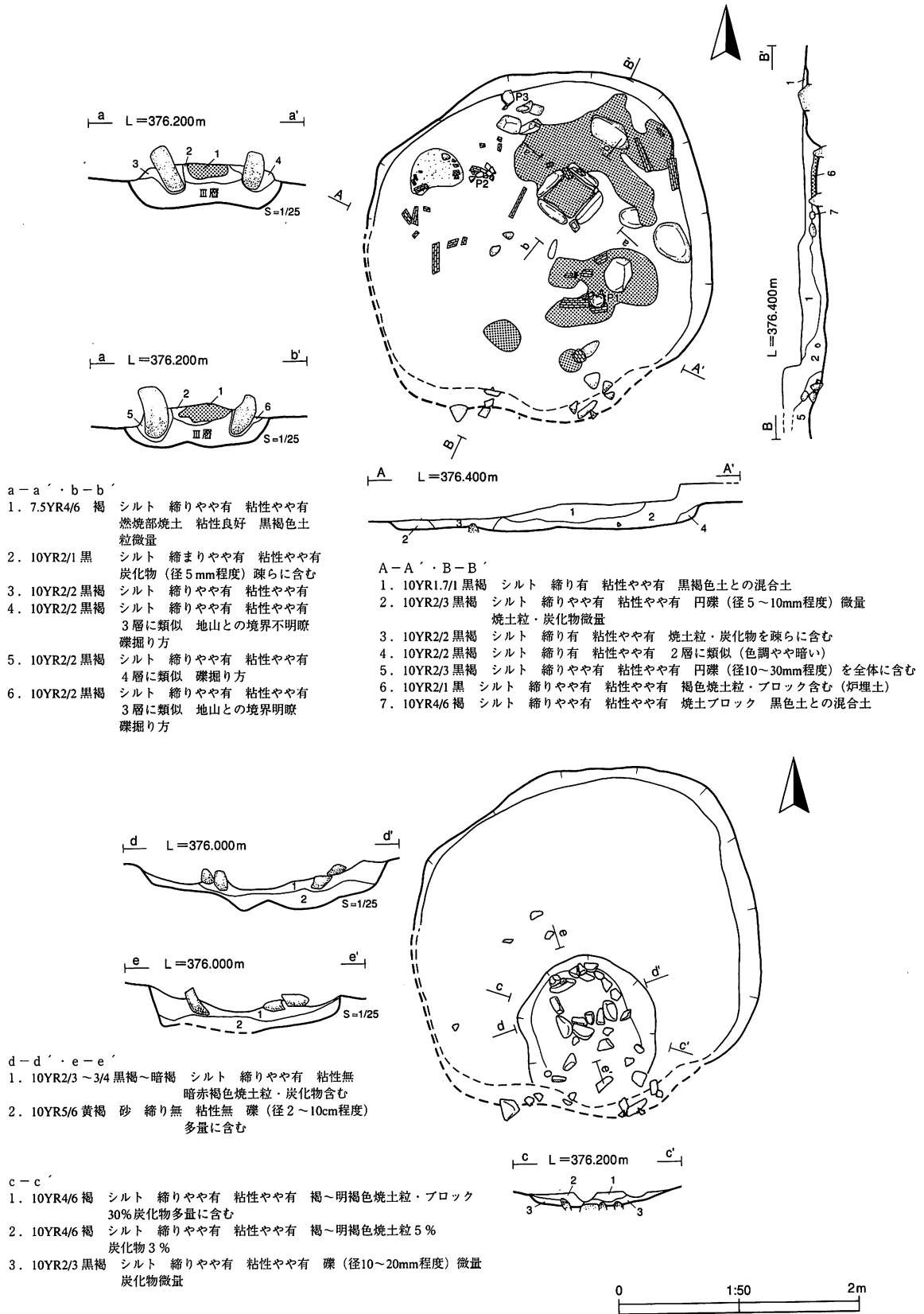
炭化材分布範囲



土器欠落部

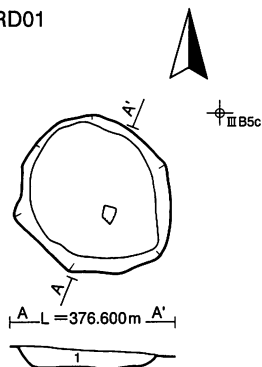


第1図 道白Ⅱ遺跡遺構配置図



第2図 道白Ⅱ遺跡住居跡

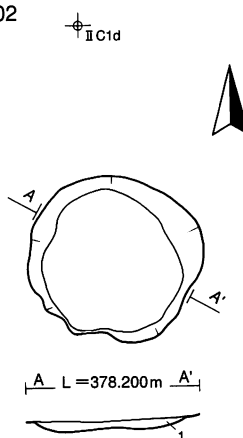
RD01



A-A'

1. 10YR2/1 黒 シルト 締りやや有 粘性やや有 礫 (径5~10mm程度) を全体に含む 砂粒微量

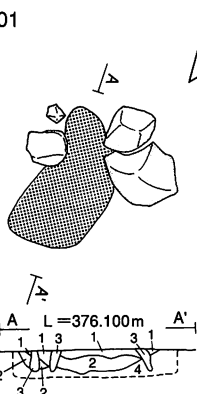
RD02



A-A'

1. 10YR2/1 黒 シルト 締り有 粘性やや有 黒褐色土との混合土 褐色土ブロック疎らに含む

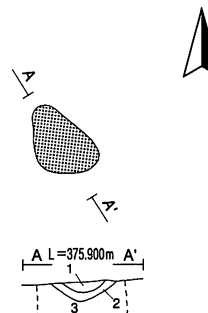
RF01



A-A'

1. 7.5YR5/6~5/8 明褐 焼土 締りやや有 粘性やや有 焼成やや良 黒褐色土 ブロック (径5~8mm) 若干
2. 10YR3/3 暗褐 シルト 締りやや有 粘性やや有 明褐色焼土との混合土 礫 (径10mm程度) 微量
3. 10YR3/1~3/2 黒褐 シルト 締り無 粘性無 木根による攪乱?
4. 10YR2/2 黒褐 シルト 締りやや有 粘性やや有 地山 III a 層に相当

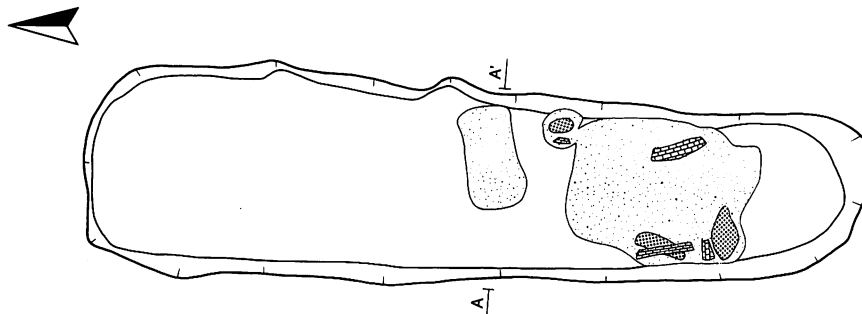
RF02



A-A'

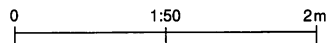
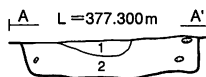
1. 5YR4/8 赤黒 焼土 締りやや有 粘性やや有 暗褐色焼土・黒褐色土混入
2. 10YR2/1 黒 シルト 締りやや有 粘性やや有 赤褐色焼土ブロック (径10mm) 若干
3. 10YR2/1 黒 シルト 締りやや有 粘性やや有 II 層下面に相当

RZ01

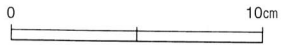
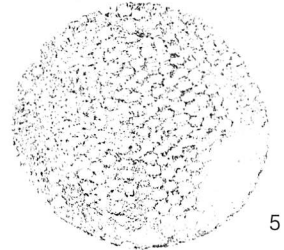
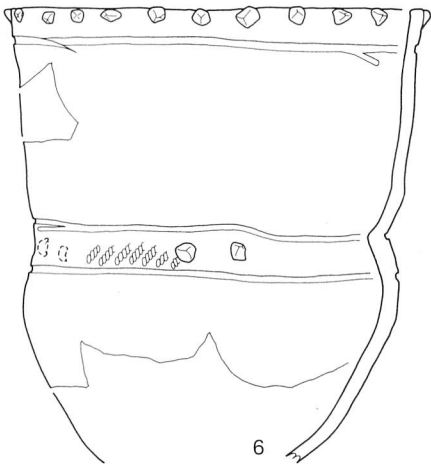
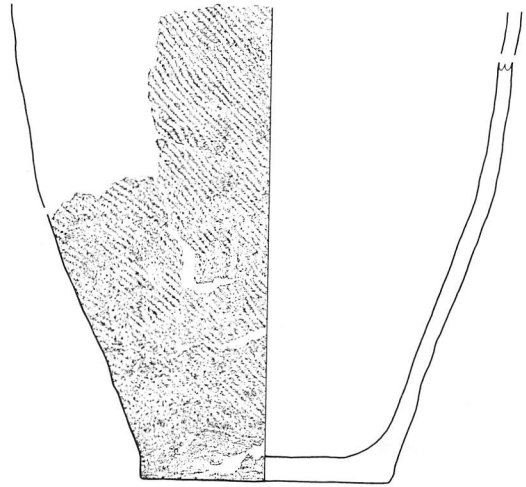
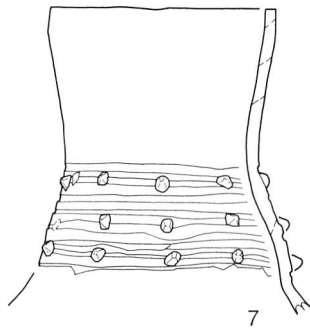
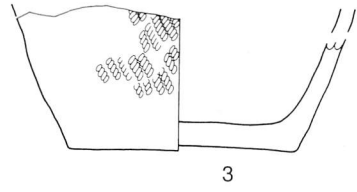
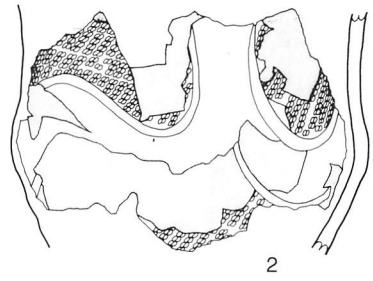
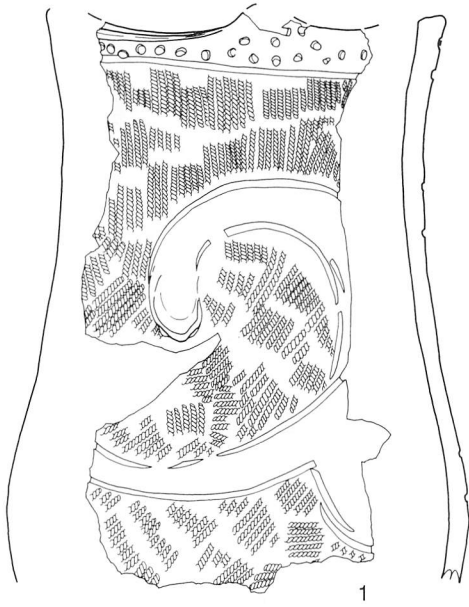


A-A'

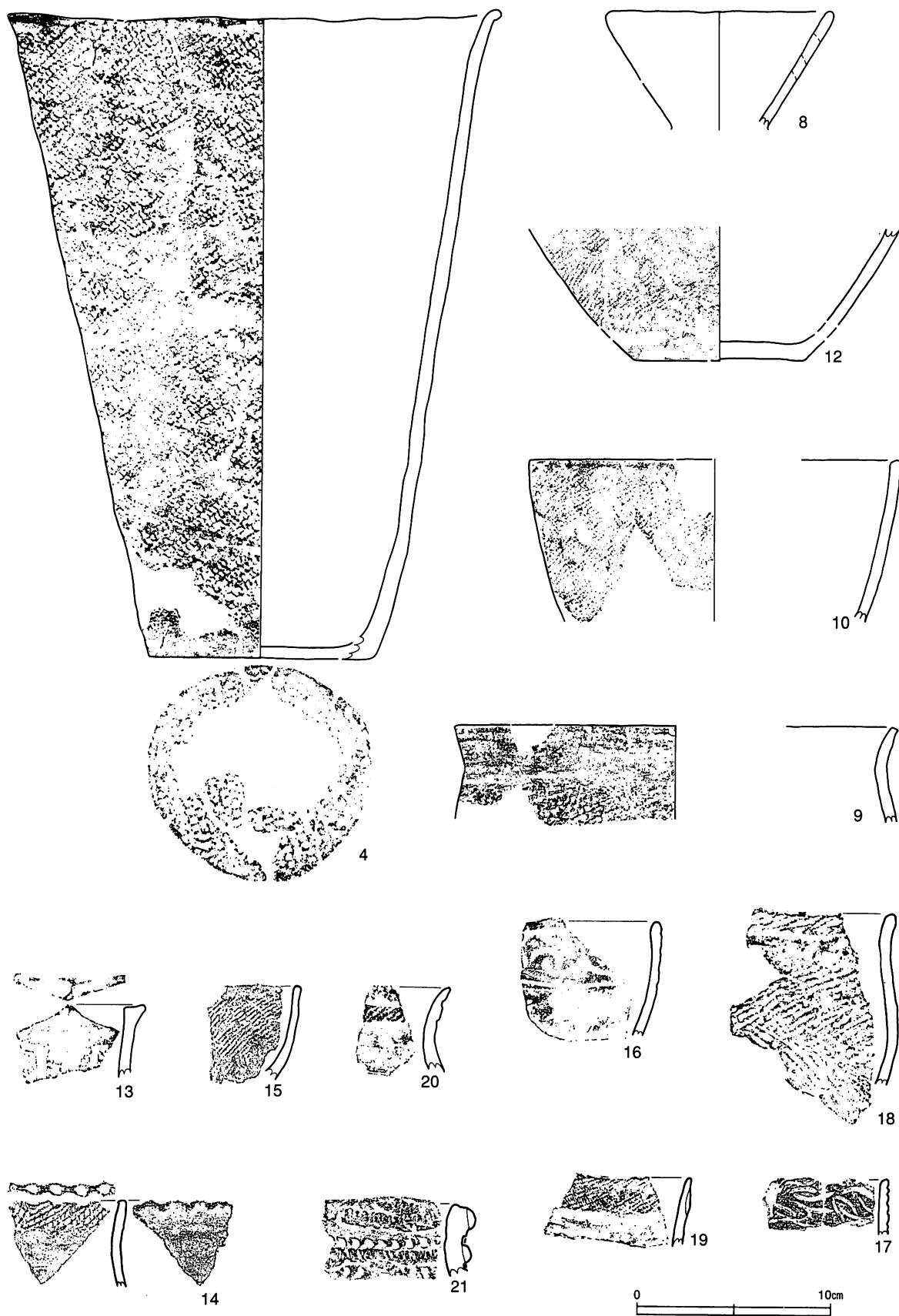
1. 10YR2/3 黒褐 シルト 締りやや有 粘性やや有 炭化物 (径5~10mm程度) 微量
2. 10YR2/1 黒 シルト 締りやや有 粘性やや有 炭化物 (径5~20mm程度) 疎らに含む 礫 (径5~20mm) 微量



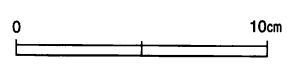
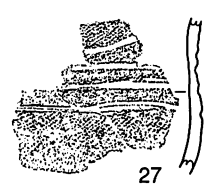
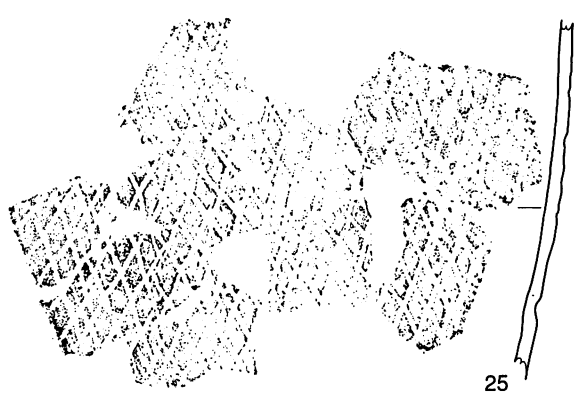
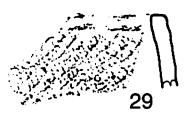
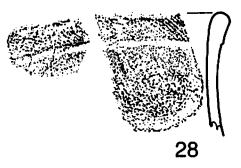
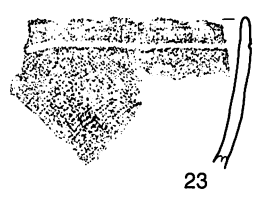
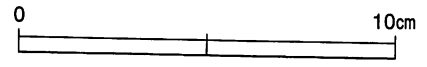
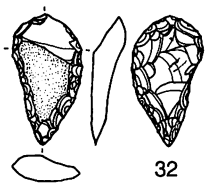
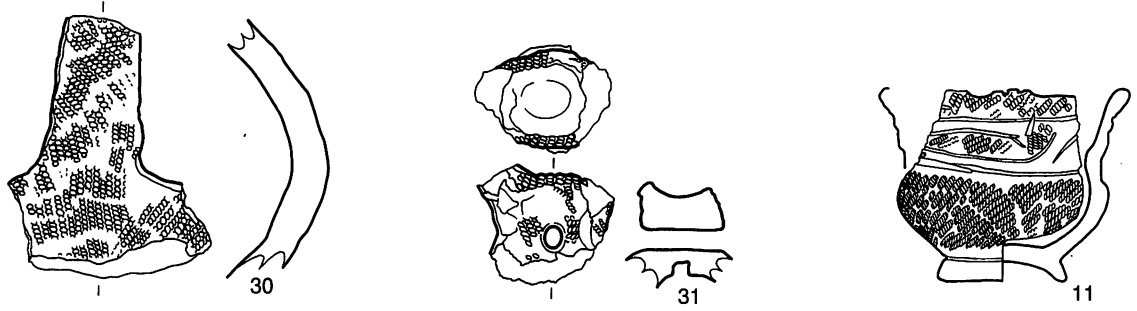
第3図 道白II遺跡土坑・その他



第4図 道白Ⅱ遺跡出土遺物1



第5圖 道白Ⅱ遺跡出土遺物2



第 6 图 道白 II 遺跡出土遺物 3

土器観察表

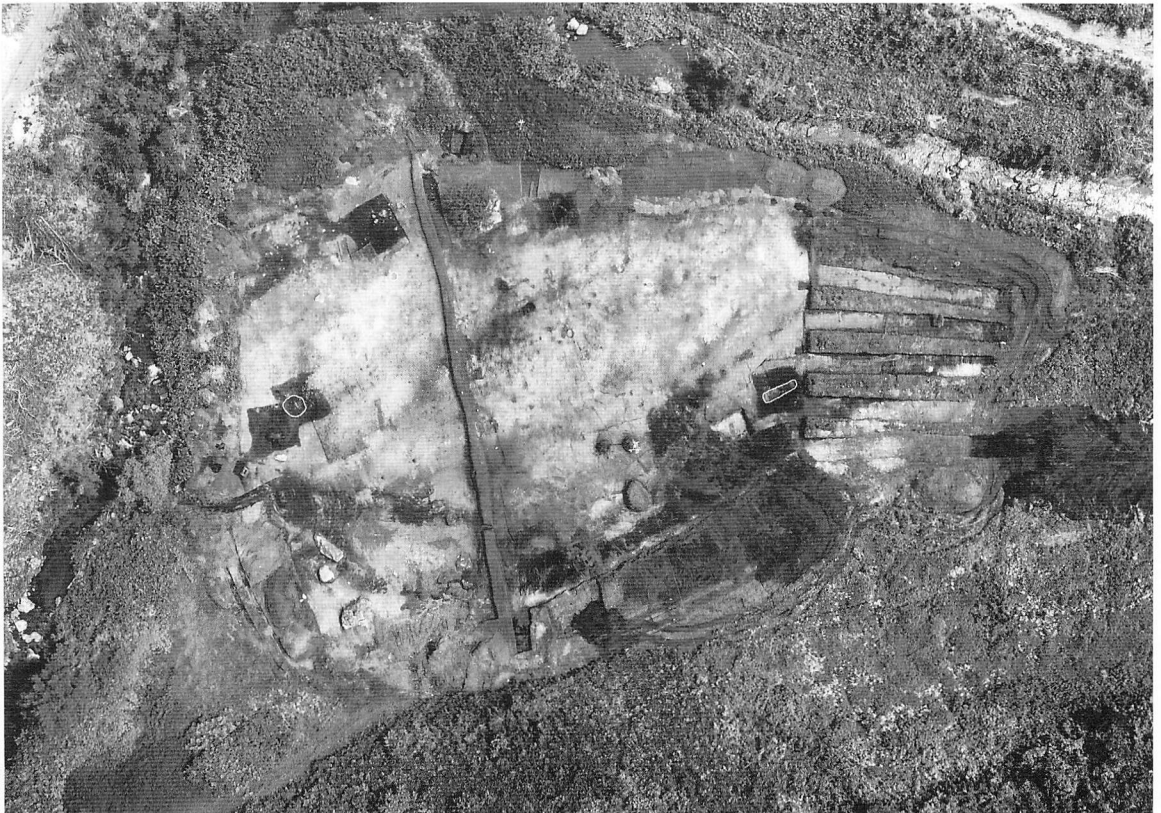
No	出土地点・層位	器種	部位	原体	特徴	時期
1	ⅢA2c住・床面直上	深鉢	口縁～胴部	L R斜位・横位	口縁：波状・刺突列 描線：隆帯(鐮状)と沈線 磨消 口唇部・内面：ミガキ	縄文時代中期末葉
2	ⅢA2c住・床面直上	深鉢	胴部	R L R縦位	描線：沈線 磨消縄文？ 内面：ミガキ・被熱(痘痕状)	縄文時代中期末葉
3	ⅢA2c住・床面直上	深鉢	底部	R L横位	地文のみ 内面：ナデ	縄文時代中期末葉
4	ⅣB1cⅡ層下	深鉢	口縁～底部	R L縦位	平縁 口唇部：やや外反 内面：ナデ 底部：網代痕	縄文中期末～後期初
5	ⅣB1cⅡ層下	深鉢	胴部～底部	L R縦位	内面：ミガキ 底部：網代痕	縄文中期末～後期初
6	ⅥC5aⅡ層下～Ⅲ層上	深鉢	口縁～胴部	L R横位	平縁 貼瘤 帯状文 充填縄文 補修孔 外面：ミガキ 内面：ナデ	縄文後期後葉～末葉
7	ⅣC1aⅡ層下～Ⅲ層上	注口土器か壺	口縁～頸部		平縁・角状 平行沈線 貼瘤 外面：ミガキ 内面：ナデ	縄文後期後葉～末葉
8	ⅢC5aⅡ層下～Ⅲ層上	壺	口縁部		平縁 内外面ミガキ	縄文時代後期中葉
9	ⅣA5dⅡ層下	深鉢	口縁部	L横位	口縁：無文・やや外反 胎土に砂粒を多く含む	縄文時代後期
10	ⅢB5cⅡ層下	深鉢	口縁部	L R横位	平縁 内面ナデ	縄文時代後～晩期
11	ⅣB1cⅡ層下	台付鉢	口縁～底部	L R横位	ミニチュア土器 口唇部に突起(頂部に刻み) 入組み文 内外面：ミガキ	縄文後期末～晩期初
12	ⅣB2bⅡ層下～Ⅲ層上	深鉢	胴部～底部	L R縦位	内外面煤付着・被熱	縄文時代後期
13	ⅣA3eⅡ層下	深鉢	口縁部	L R縦位	口縁：波状 描線：沈線 磨消？ 充填？ 外面：ミガキ	縄文時代中期末葉
14	ⅣA5eⅡ層下	深鉢	口縁部	L横位	小波状口縁 口縁部のみ施文	縄文時代後期
15	ⅣC2dⅡ層下	鉢	口縁部	L横位	平縁	縄文時代後期
16	ⅢB5bⅡ層下	鉢	口縁～胴部		平縁 入組み文 三叉文 外面：ミガキ 内面：ナデ	縄文晩期初頭～前葉
17	ⅢB5cⅡ層下	深鉢か鉢	口縁部		小波状口縁 入組み三叉文 内面：ナデ	縄文晩期初頭～前葉
18	ⅢB5eⅡ層下	深鉢	口縁～胴部	L横位・縦位	折り返し口縁 口縁部短く僅かに外反 非結束羽状縄文 内面：ミガキ	縄文時代後期
19	ⅢA1aⅡ層下	深鉢	口縁部	L R横位	折り返し口縁	縄文時代後期
20	ⅢA2cⅡ層下	深鉢	口縁部	L R横位	口縁：粘土貼付け・施文後沈線で区画？	縄文時代後期
21	ⅢC4dⅡ層下	深鉢	口縁部		波状口縁？ 刺突文による充填 隆帯(粘土紐・原体圧痕文)	縄文時代中期前葉
22	ⅣA1eⅢ層	深鉢	口縁部	L縦位	平縁 外面煤付着	縄文時代中期～後期
23	ⅣB1bⅡ層下	鉢	口縁部	L R横位	小波状口縁 口縁：無文・沈線 内面：煤付着	縄文時代後期
24	ⅣB1dⅡ層下	深鉢	口縁部	単軸結条体	平縁 網目状燃糸文	縄文時代後期
25	ⅣB1dⅡ層下～Ⅲ層上	深鉢	胴部	単軸結条体	網目状燃糸文 外面：煤付着 No24と同一個体	縄文時代後期
26	ⅣB1dⅡ層下～Ⅲ層上	深鉢	胴部		渦巻状の沈線 内面：ミガキ	縄文時代晩期？
27	ⅣB2bⅡ層下～Ⅲ層上	鉢	胴部	L R横位	沈線 磨消 内面：ミガキ	縄文時代後期
28	ⅣB2cⅡ層下～Ⅲ層上	壺	口縁部	R L横位	平縁 口唇部：僅かに外反・肥厚 内外面赤色塗彩	縄文時代後期後半
29	ⅣB2cⅢ層	鉢	口縁部	L R横位	平縁・角状 地文のみ 内面ナデ	縄文時代後～晩期
30	ⅣB1bⅡ層下	香炉形土器？	胴部？	L R縦位	地文のみ	縄文時代後期
31	ⅣB1bⅡ層下	香炉形土器？	突起部？	L R	貫通孔 No30と同一個体	縄文時代後期

石器観察表

No	出土地点・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	産地	備考
32	ⅣA1eⅡ層下	不定形石器	3.4	1.8	0.8	5.4	頁岩	北上山地	尖頭器様
33	ⅢB5eⅡ層下～Ⅲ層上	石核	8.3	9.7	4.4	442.7	頁岩	北上山地	写真のみ掲載

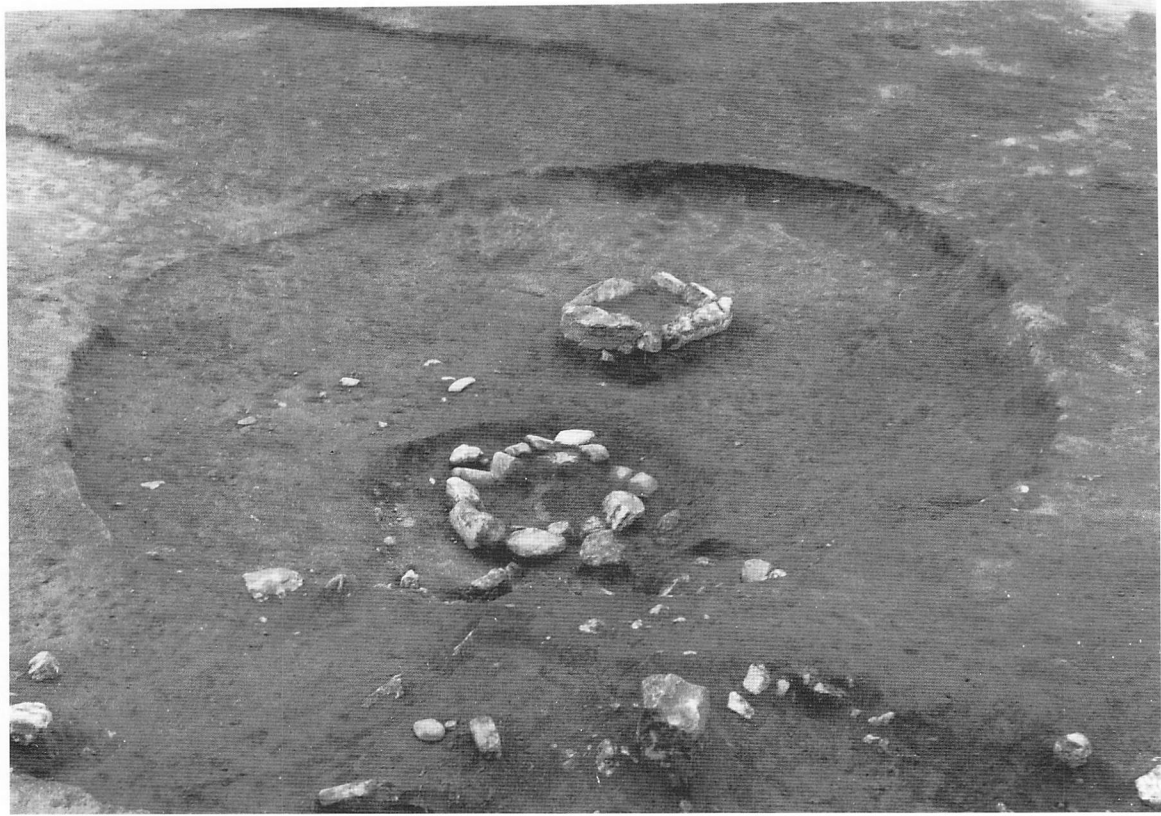


調査区遠景



調査区全景

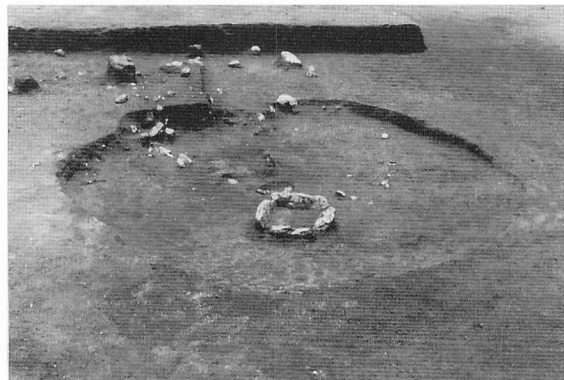
写真図版1 道白Ⅱ遺跡航空写真



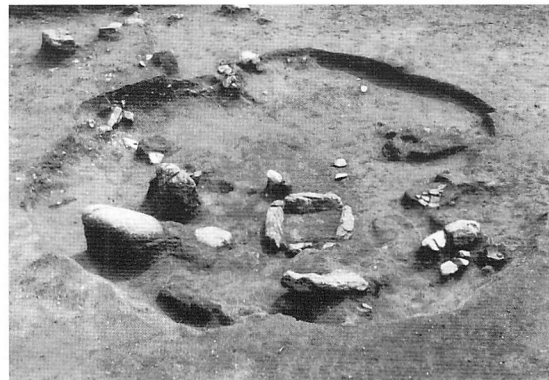
Ⅲ A 2 c 住 全景



Ⅲ A 2 c 住 埋土断面

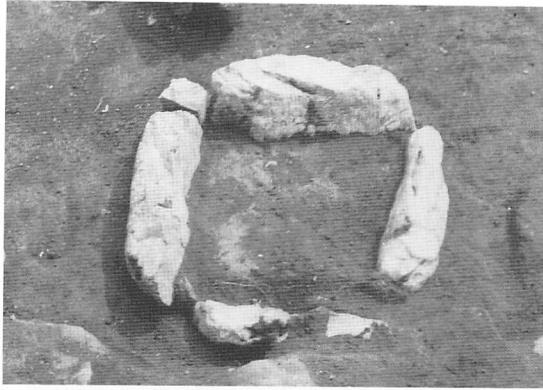


Ⅲ A 2 c 住 1次完掘

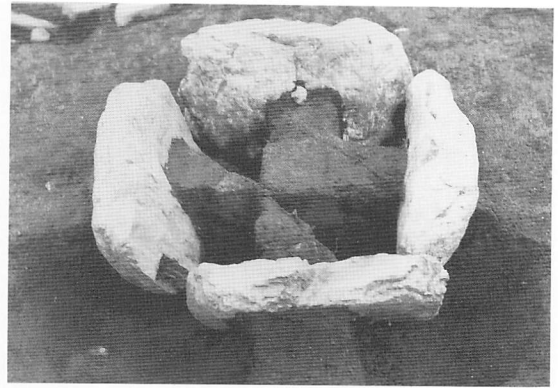


Ⅲ A 2 c 住 炭化材検出状況

写真図版 2 道白Ⅱ遺跡竪穴住居跡(1)



Ⅲ A 2 c 住 1号炉平面



Ⅲ A 2 c 住 1号炉断面



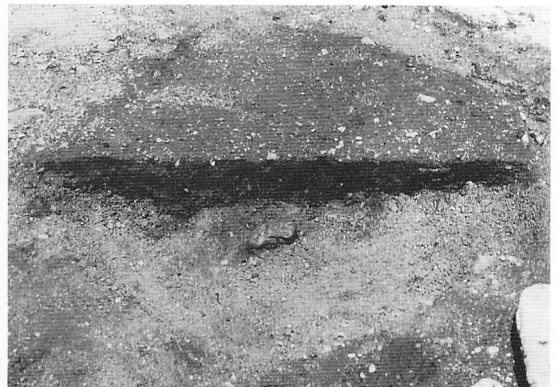
Ⅲ A 2 c 住 2号炉平面



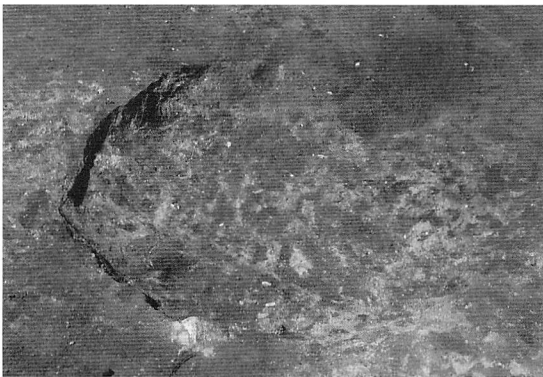
Ⅲ A 2 c 住 2号炉断面



R D 01 平面



R D 01 断面

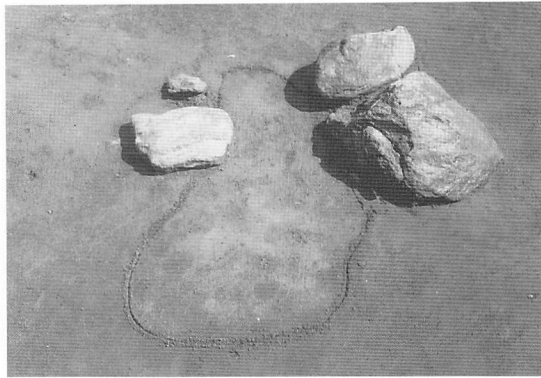


R D 02 平面



R D 02 断面

写真图版 3 道白Ⅱ遺跡豎穴住居跡(2)・土坑



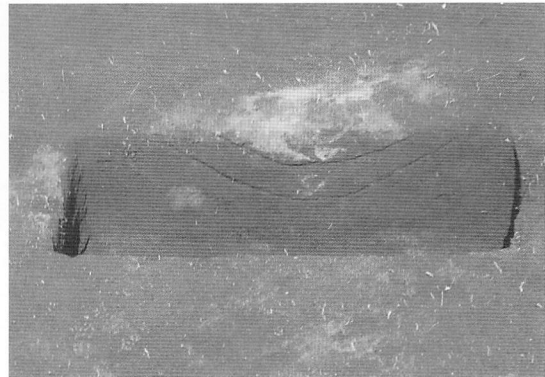
RF01 平面



RF01 断面



RF02 平面



RF02 断面



炭窯 (R Z01) 平面



炭窯 (R Z01) 断面

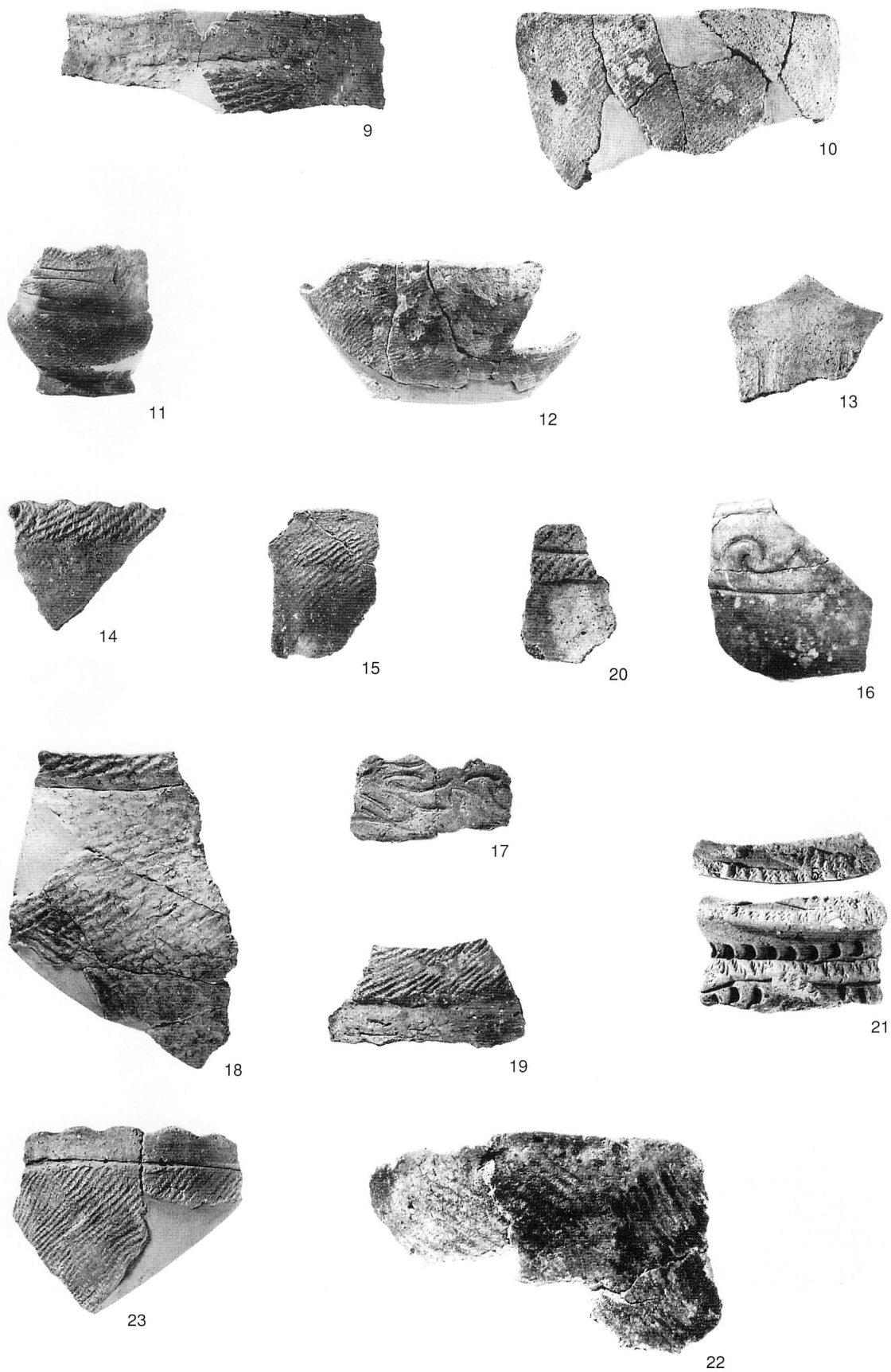


基本層序

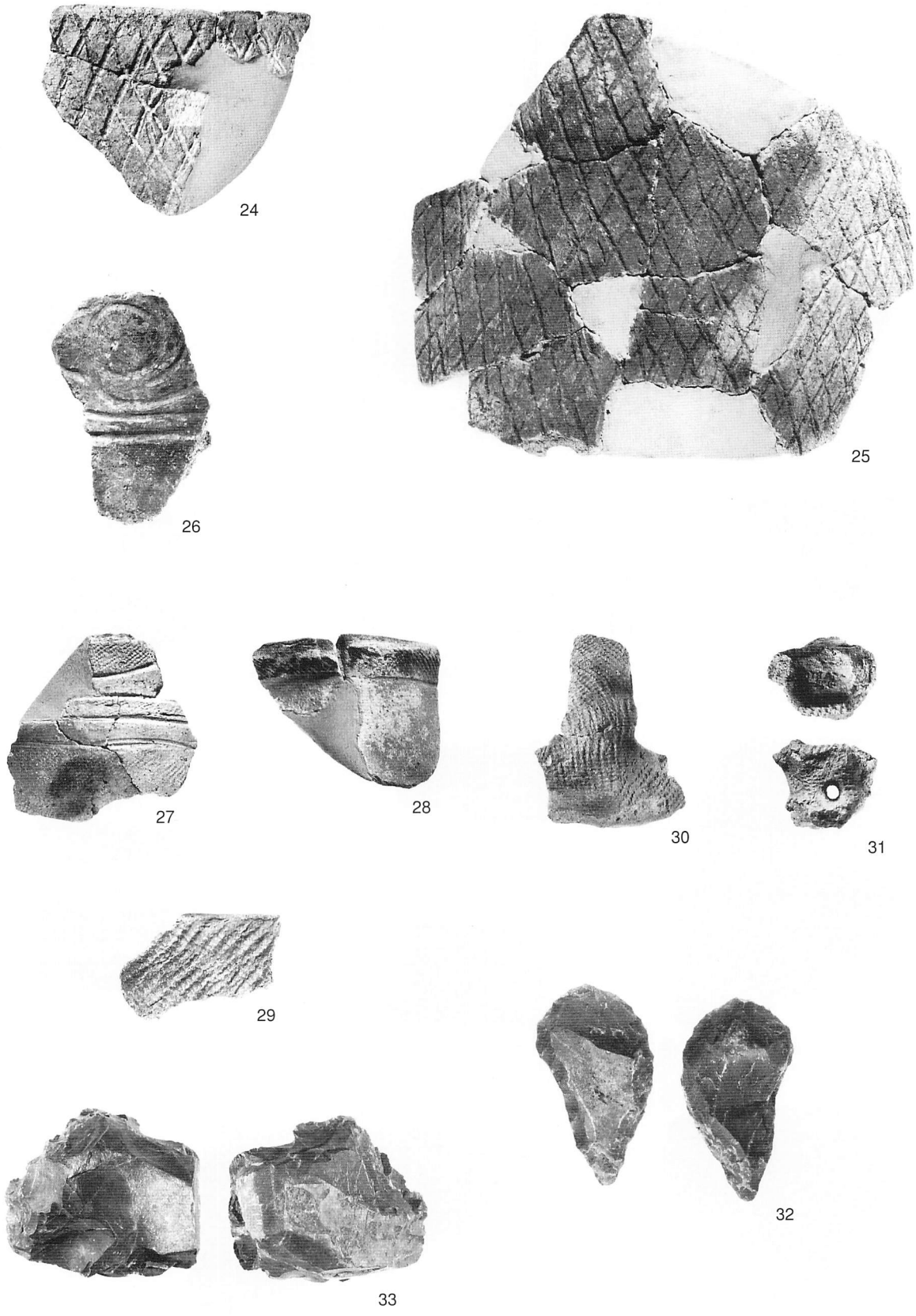
写真図版 4 道白Ⅱ遺跡焼土遺構・炭窯・基本層序



写真図版5 道白Ⅱ遺跡出土遺物1



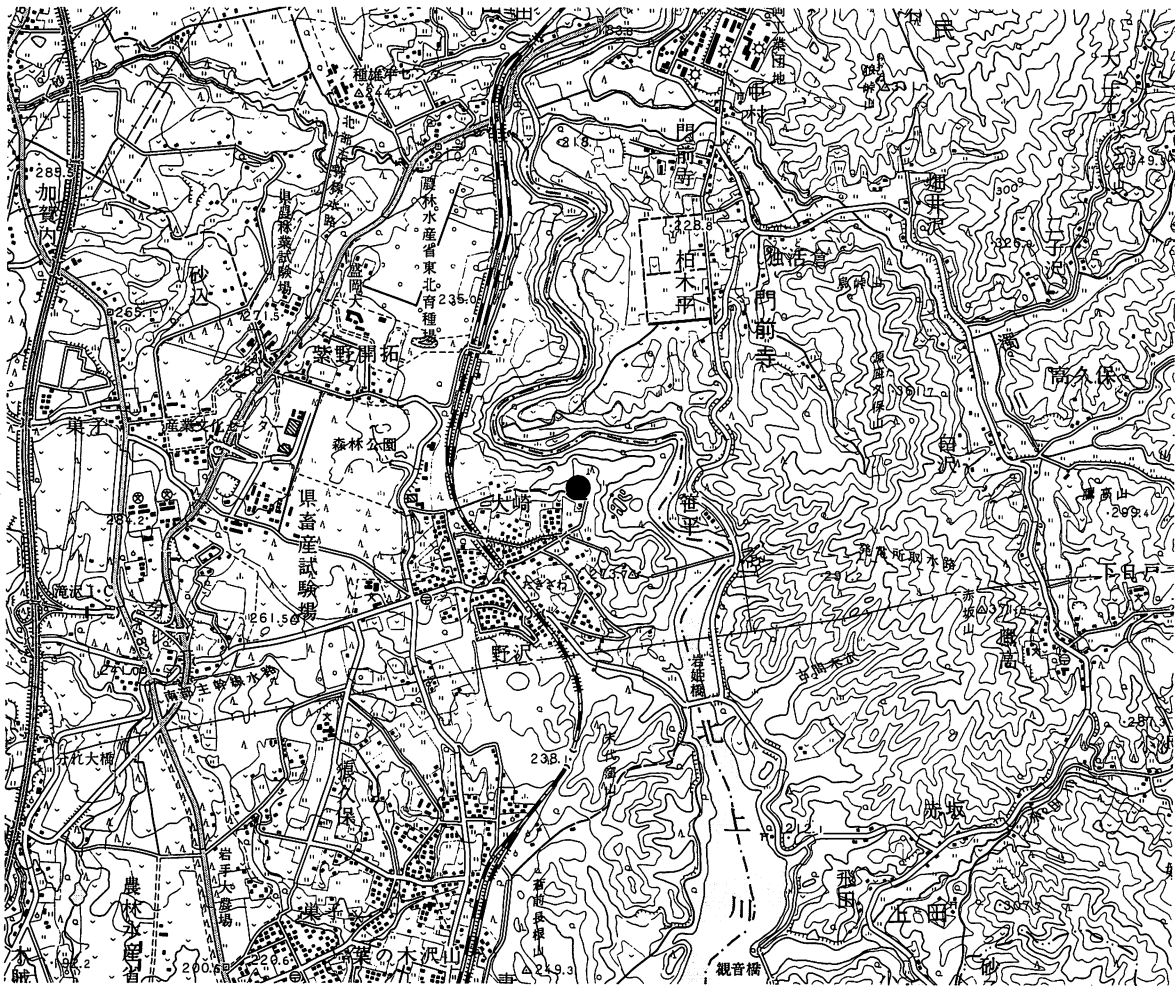
写真図版6 道白Ⅱ遺跡出土遺物2



写真図版 7 道白Ⅱ遺跡出土遺物 3

(40) 川^{かわ}前^{まえ}遺跡

所在地 岩手郡滝沢村滝沢字大崎3-1ほか
委託者 日本鉄道建設公団盛岡支社
事業名 東北新幹線盛岡八戸間鉄道建設工事
発掘調査期間 平成12年4月11日～5月17日
調査対象面積 840m²
発掘調査面積 840m²
遺跡番号・略号 KE77-0070・KM-00
調査担当者 濱田 宏・吉川 徹
協力機関 滝沢村教育委員会



遺跡位置

1:50,000 盛岡

1. 調査に至る経過

川前遺跡は、「東北新幹線盛岡～八戸間の建設工事」の施工に伴って、滝沢村大崎付近の切り取り工事により発生する残土の土捨て場にする事から、発掘調査を実施することになったものである。

東北新幹線は、昭和48年に盛岡～青森間の整備計画が策定され、平成3年に盛岡～沼宮内間および八戸～青森間は新幹線鉄道直通線（ミニ新幹線）とし、沼宮内～八戸間は標準軌新幹線（フル規格新幹線）として実施計画が認可され、同年9月に盛岡～青森間の建設工事に着手した。その後、平成7年に盛岡～沼宮内間がフル規格新幹線に変更になり、現在盛岡～八戸間96.6kmの新幹線工事が本格的に進められている。

また、八戸～新青森間については、平成10年3月に標準軌新幹線（フル規格新幹線）として実施計画の認可を受けて、同年7月に八甲田トンネル出口の工事に着手している。

盛岡～八戸間の埋蔵文化財については、かつて岩手県教育委員会が分布調査を実施し、川前遺跡もその際に確認された。その結果に基づいて、岩手県教育委員会は、日本鉄道建設公団盛岡支社に対し事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は、日本鉄道建設公団と協議を行い、川前遺跡の発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。調査は、平成12年4月11日～5月17日まで実施された。

2. 遺跡の立地

川前遺跡は、JR東北本線滝沢駅の北東約800mに位置し、遺跡の東方を南流する北上川に向かって張り出す尾根の頂部に立地している。遺跡の標高は230m前後で、調査前の状況は一昨年まで雑木林であったという。昨年度、当埋蔵文化財センターが調査した大崎遺跡は、本遺跡の東約300mほどにある。

3. 基本層序

本遺跡の基本層序は次のとおりである。

第Ⅰ層	10YR3/2	黒褐色シルト質土層	現表土で草木根を多く含む。層厚10～20cm。
第Ⅱ層	10YR3/2	黒褐色シルト質土層	旧表土。層厚10～35cm。
第Ⅲ層	10YR3/4	暗褐色土シルト質土層	オレンジパミス・浮石を含む。層厚10～30cm。本層上面が陥し穴状遺構・土坑の遺構検出面である。
第Ⅳ層	10YR4/4	褐色シルト質土層	オレンジパミス・浮石・堀切スコリアを含む。本層から第Ⅴ層にかけて縄文時代早期の遺物が出土する。層厚20cm。
第Ⅴ層	10YR3/4	暗褐色シルト質土層	オレンジパミス・浮石をわずかに含む。層厚10～25cm。
第Ⅵ層	10YR4/5	褐色粘土質シルト質土層	浮石を10%前後含む漸移層。層厚30cm以上。
第Ⅶ層	10YR5/6	黄褐色浮石層	柳沢軽石層で層厚は不明。

4. 調査の概要

今回の調査は、掘削工事で排出される土砂の捨て場として遺跡内が利用されるとのことで、盛土によって検出面以下が保護されるとの理由から、遺跡の内容確認調査だけを行った。調査内容は、遺構の検出作業と遺物の出土状況等の把握である。よって、この調査では遺構の精査は一切行わず、検出された遺構の配置を図化し、出土した遺物から遺跡の時期を確認したのみである。

また、調査区北端に深掘りをかけたところ、縄文時代早期あるいはそれ以前の可能性のある遺物が第Ⅳ層中から出土したため、その深掘りをT1としそれから南側にT2～T4の計4本のトレンチを設定して、遺物・遺構の状況を確認する調査も並行して行った。いずれのトレンチも第Ⅵ層まで掘削したが、T3・T4を中心に早期の土器片（30点あまり）と無加工のレキ（20点あまり）が出土した。

<検出遺構> 検出された遺構は、陥し穴状遺構5基、土坑4基、現代の溝跡1条である。

陥し穴状遺構は、すべて縄文時代に属すると思われる溝状を呈するものである。土坑は、いずれも時期が不明である。平面形は円形を基調とするものが多い。溝跡は、検出状況からごく最近のものと思われた。

<出土遺物> 土器は、縄文時代早期および後・晩期のものが50点あまり出土した。このうち半数以上は、出土した層位から早期に属すると思われるもので、無文で胎土に砂を含むものが多い。中には、貝殻腹縁文・貝殻条痕文が施されているものや細い沈線で方形の区画が描かれる、いわゆる貝殻沈線文系の土器なども見られる。

1～9は早期中葉～後葉に属するものと思われる。1・2は貝殻腹縁の押圧および押し引きによる文様が施されるもの。3・4は表面のみに貝殻条痕がみられる。5は口唇部に連続する刻みが施されるが、胴部は無文である。6の文様は不明瞭だが、不整の捺糸文と思われるもの。7・8は同一個体で、細い沈線で方形の区画が表現される。9は口縁部上半に斜位の絡条体圧痕がかすかに観察されるものである。10は口唇部に刺突が巡る口縁部破片で、早期の可能性もあるもの。11・12は口唇部まで斜位のLR縄文が施文されている。時期は早期・前期まで遡るものか不明である。層位的には後期以降の可能性もある。13～18は後期と思われる深鉢胴部で、14は羽状縄文が施されている。それ以外はLR縄文のみが施文されている。18・19は晩期の鉢の破片と思われるもの。20・21は調査区北側のT1から出土したものである。同一個体と思われるが、いずれも無文で外面は磨かれている。出土した層位が不明なため、時期が明確でない。他の出土遺物から古代に属する可能性は低いと思われるが、縄文時代のいずれの時期に属するものか不明である。

石器は図示した5点のほか、第IV層・第V層の早期の層準から既述の無加工のレキが出土している。

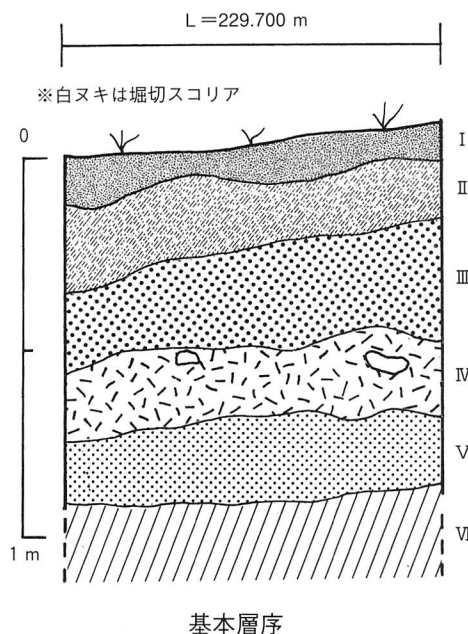
22はIV層上位出土の1縁辺に刃部加工が施される削器、23・24は剥片である。25はいわゆる特殊磨石で、断面形が三角形の石材の2辺に磨面が認められるもの。26は使用痕は不明瞭であるが、V層上位出土の台石である。

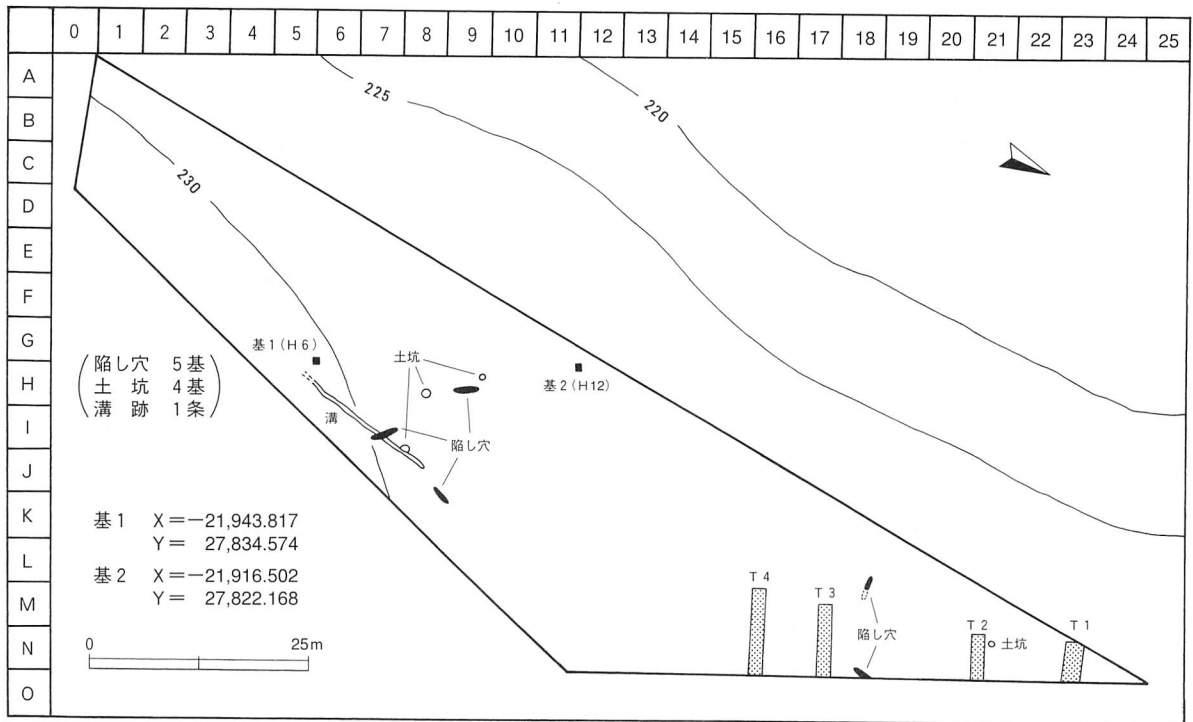
5. まとめ

今回の内容確認調査によって縄文時代の遺構・遺物が確認され、本遺跡は早期を含むそれ以前の古い文化層も残された遺跡であることが明らかとなった。検出された遺構から、この周辺は縄文時代のある時期に動物の狩り場であったと思われるが、地形等の状況から陥し穴状遺構の分布域はさらに東側に広がるものと考えられる。

繰り返しになるが、本遺跡からは縄文時代早期の遺物が出土し、さらに昨年度調査した大崎遺跡からは後期旧石器時代の遺物が出土している。このことから、この大崎地区周辺には旧石器時代および縄文時代の草創期・早期の生活の痕跡を残す遺跡が他にも存在するものと思われる。

なお、川前遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

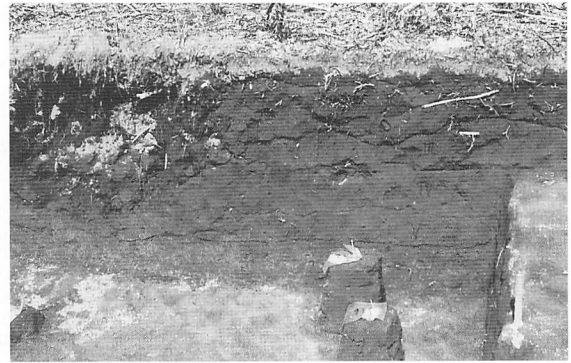




川前遺跡遺構配置図



調査前の状況



基本層序 (N21区)

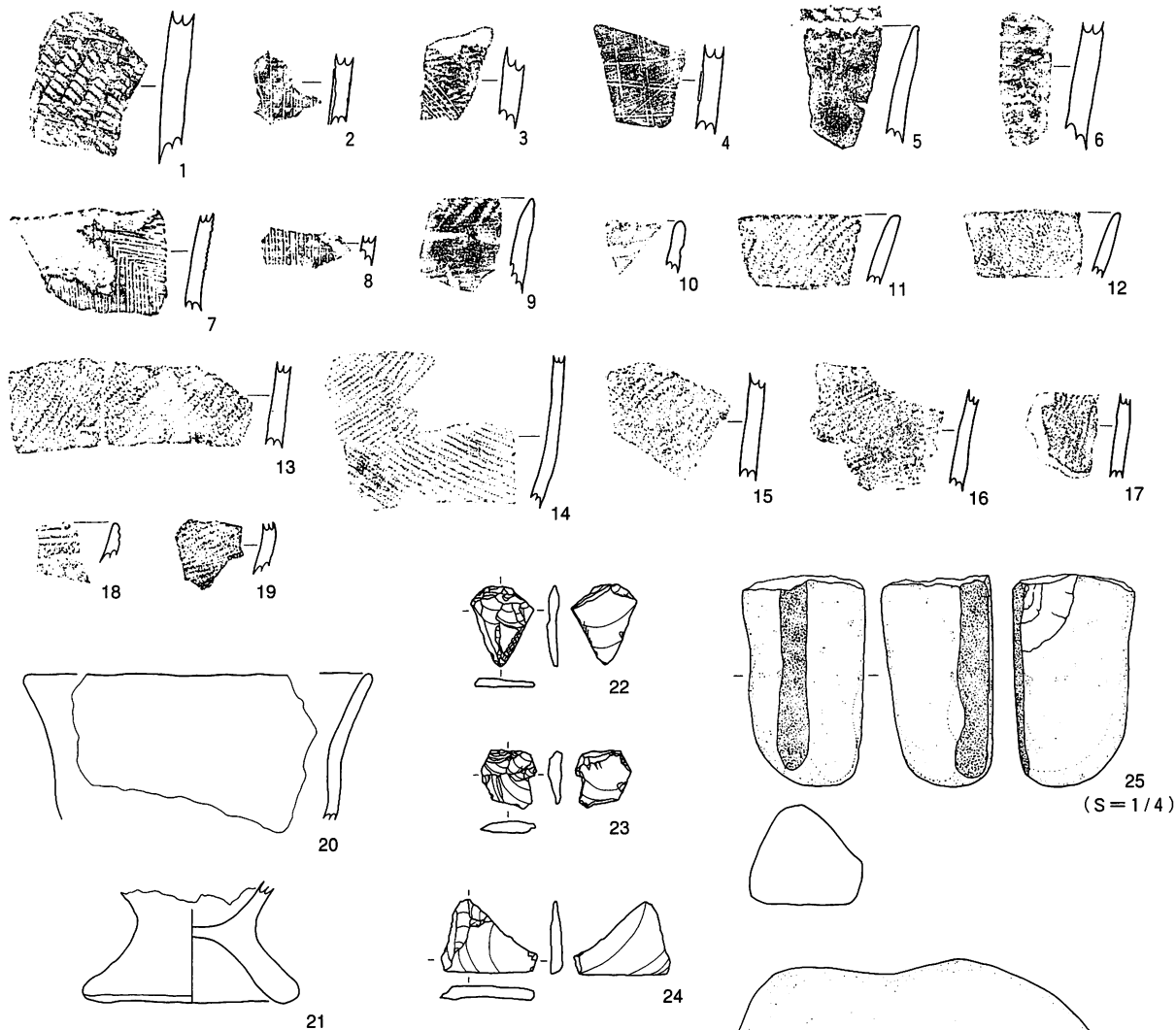


遺構検出状況 (H9区周辺)



作業風景

川前遺跡写真図版



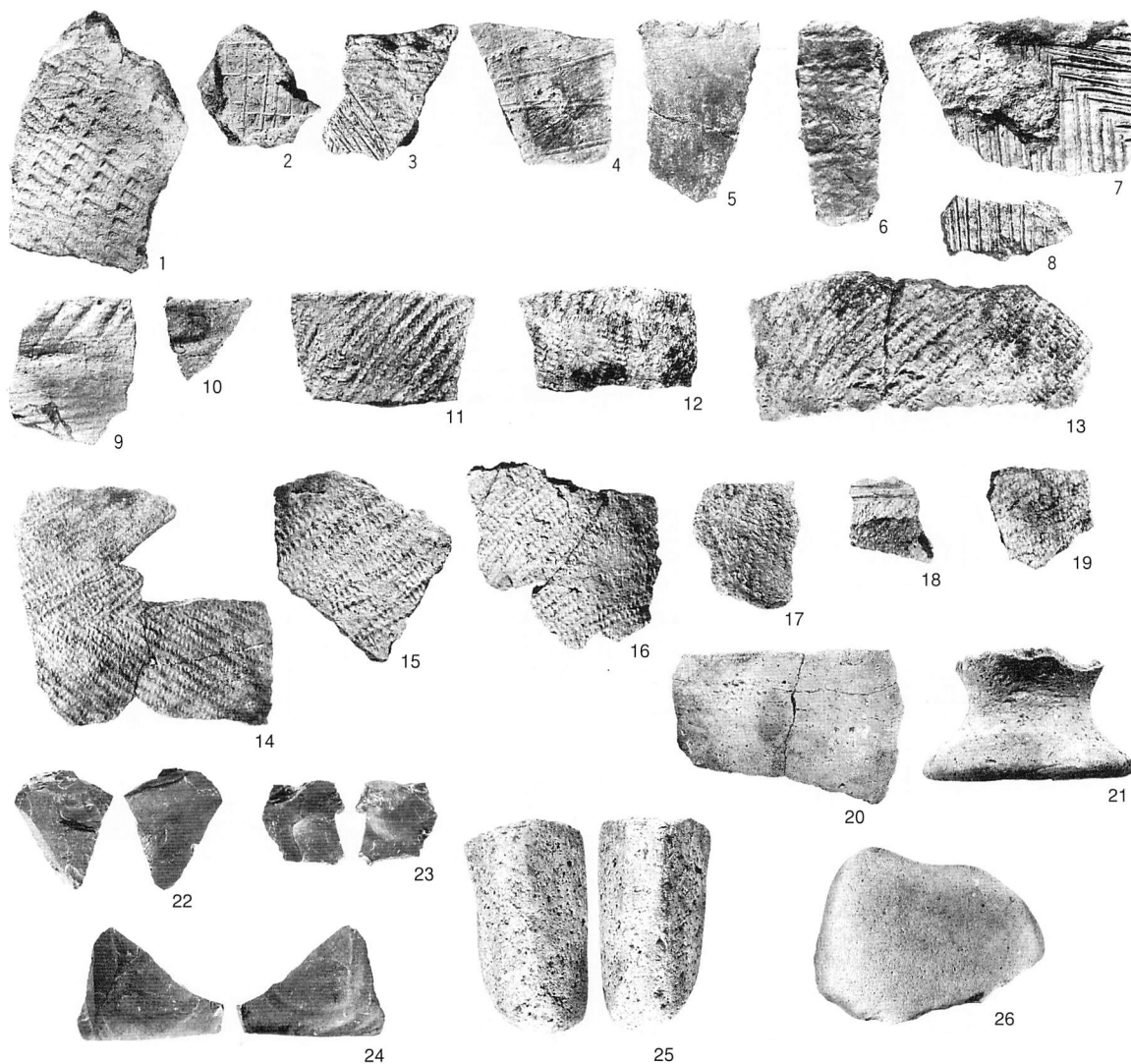
土器観察表

番号	地点	層位	器種	部位	文様等	内面	時期
1	N23	不明	深鉢	胴部	貝殻腹縁押し引き	ナデ	早期
2	N23	攪乱部	深鉢	胴部	貝殻腹縁押し引き	ナデ?	早期
3	D4	攪乱部	深鉢	胴部	貝殻条痕文?	ナデ	早期
4	N23	V層上	深鉢	胴部	貝殻条痕文	ミガキ	早期
5	N17	IV~V層上	深鉢	口縁部	無文、外面ミガキ、口唇刻み	ナデ	早期
6	N21	IV~V層上	深鉢	胴部	不整然糸文?	ナデ	早期
7	N23	IV層下	深鉢	胴部	平行沈線による方形区画	ミガキ	早期
8	N23	III層下	深鉢	胴部	平行沈線	ミガキ	早期
9	N21	V層	深鉢	口縁部	絡条体圧痕、口唇部先細り	ナデ	早期?
10	H6	攪乱部	深鉢	口縁部	口唇上面刺突	ナデ	早期?
11	N20	III層	深鉢	口縁部	L R、口唇上面までL R施文	ナデ	後期以前?
12	N20	III層	深鉢	口縁部	L R、口唇上面までL R施文	ミガキ	後期以前?
13	N20	III層	深鉢	胴部	L R	ナデ	後期
14	D3	III層上	深鉢	胴部	非結束羽状縄文	ミガキ	後期
15	N20	III層	深鉢	胴部	L R	ナデ	後期
16	E5	III層	深鉢	胴部	L R	ナデ	後期
17	H6	攪乱部	深鉢	胴部	L R?	ナデ	後期
18	N20	攪乱部	鉢	口縁部	口唇山形、平行沈線、R L	ミガキ	晩期?
19	N20	III層	鉢	胴部	沈線、L R	ミガキ	晩期?
20	N23	不明	台付鉢	口縁部	無文、内外面ミガキ	ミガキ	不明
21	N23	不明	台付鉢	脚部	無文、外面ミガキ	ナデ	不明

石器観察表

番号	出土地点	層位	器種	長さ	幅	厚さ	重量 (g)	石質
22	N23	IV層	削器	3.3	2.6	0.5	3.4	頁岩
23	N23	IV層?	剥片	2.4	2.3	0.5	2.7	頁岩
24	N20	攪乱部	剥片	3.1	3.9	0.6	5.6	頁岩
25	N19	III層	特殊磨石	11.5	6.7	5.5	679.0	石英安山岩
26	L16	V層上	台石?	24.1	30.9	4.6	5 kg	石英安山岩

川前遺跡出土遺物



川前遺跡出土遺物写真図版

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	濱田 宏、吉川 徹							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。、"	。、"			
川前遺跡	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう 岩手県岩手郡滝沢町滝沢字大崎 3-1ほか	03305	KE-77 0070	39度 48分 7秒	141度 9分 23秒	20000411~ 20000517	840㎡	東北新幹線盛岡以北建設に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
川前遺跡	散布地	縄文時代	土坑 陥し穴状遺構 溝跡(現代)	4基 5基 1条	縄文土器(早期・後期) 縄文時代の石器類		内容確認調査	

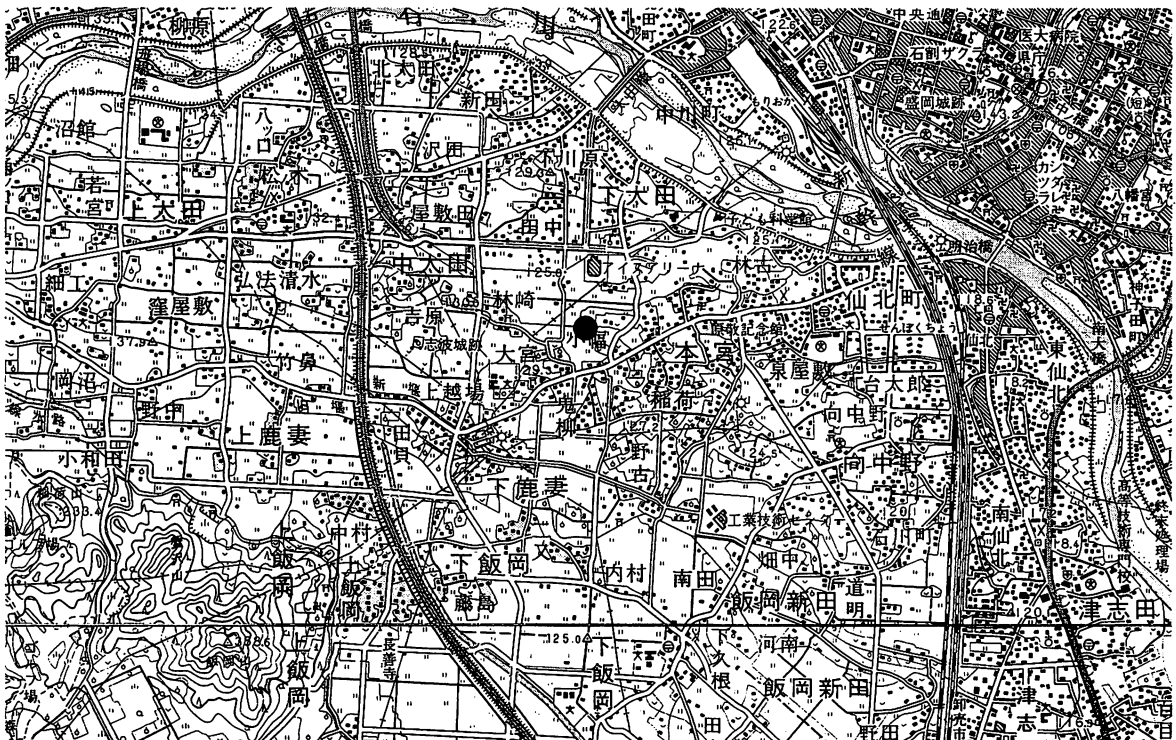
(41) 小^こ幅^{はば}遺跡第16次調査

所在地 盛岡市本宮字小^こ幅45-1ほか
委託者 地域振興整備公団岩手総合開発事務所
事業名 盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間 平成12年9月18日～10月13日
調査対象面積 2,157m²
発掘調査面積 1,192m²
遺跡番号・略号 LE16-2009・OKH-00-16
調査担当者 古舘貞身・原美津子
協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に、市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に、岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事



遺跡位置

1:50,000 盛岡・日誌

業の実施認可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間に事業予定期間とし、面積313haを対象とした、土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業対象地域に係わる埋蔵文化財取扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

ここに地域振興整備公団分1,192㎡の調査が財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターによって、平成12年9月18日から10月13日まで行われるに至った。

調査の結果、遺構・遺物とも少なかったことから、同年冬期間に整理をし、当埋蔵文化財センターの平成12年度調査略報に本報告として掲載した。

2. 遺跡の立地

小幅遺跡は、JR東北本線仙北町駅より西へ約2.3kmに位置する。雫石川によって形成された河岸段丘上に立地し北緯39度41分3秒、東経141度7分31秒周辺にあたる。標高は126m前後で、調査区の現況は宅地跡の更地、及び畑地である。

なお、西方約1kmには古代城柵「志波城」跡があり、本遺跡は志波城跡の外郭東辺の外に位置する10世紀前後の平安時代の一般集落であり、周辺には本宮熊堂B遺跡・林崎遺跡・矢盛遺跡などがある。

3. 遺跡の基本層序

本調査区は、第15次調査C区に隣接しており、基本土層はC区と同じである。

I層 10YR2/2 黒褐色土 しまり疎 粘性中 畑の耕作土(表土)

II層 10YR4/4 褐色土(砂質シルト) しまり中 粘性弱 褐灰色シルトを層状に含む。

III層 10YR2/1 黒色土 しまり中 粘性弱

IV層 10YR5/3 におい黄褐色 しまり密 粘性強(粘土)

II層は河川の氾濫による堆積層と思われる。古代の遺構検出面はこの層位である。

IV層の下位は砂層、礫層となっている。

4. 調査の概要

調査区の現況は畑地であるが、以前は水田であつたらしい。ここは厚さ20cm前後の耕作土を除去すると、砂質の褐色土となり、これが平安時代の遺構検出面である。ほとんどの遺構はこの面で検出した。

内訳は、焼土遺構1基、土坑12基、井戸跡2基、柱穴状ピット50基であるが、何れも掘り込みは上の面からなされていたようである。これらの遺構は陶磁器片や箍、木っ端等を伴出するすものがあり、また、遺物を伴わなくても埋土が近似しており、ほとんどはさかのぼっても近世後半以降のものと思われる。さらに、ガラス片、ビニール袋等現代の物を伴出するものもある。

<焼土遺構> (RF018)

表土除去後の褐色土砂質シルトの面で検出した。径60cmの範囲に収まる不整形で、焼土の層厚は最大でも10cmほどである。周囲からも出土遺物はなく、時期は不明である。

<土坑> (RD401~RD412)

表土除去後12基検出したが、代表的なもののみを掲載し、他は表掲載とする。大半は用途不明で、陶磁器片、ガラス片等を伴出し、時期は近世後半以降若しくは近現代と思われる。

RD407は長径3.7m、短径2.8mで一部調査区外にかかる用途不明の土坑であるが、今回の調査で一番多く遺物の出土した所である。その多くは陶磁器、木片がほとんどであり、江戸末か明治期にゴミと一緒に埋め

られたものと思われる。RD408もこれとほぼ同類である。RD409・412は長径10m前後あり、埋土は礫が多量に混じる暗褐色土である。人手以外の方法で一気に埋められたと思われるものであり、出土遺物は少ない。RD410・411はこのRD412の中に作られているもので、特にRD411は桶か樽を埋めたらしく、その痕跡は底部の竹製籬のみが残っていることにより判明した。

<井戸跡> (R I 011・012)

何れも表土除去後検出した。2基とも礫が多量に混じる同じ埋土であり、人為的に一気に埋められたようである。RI011は検出面より1.6m下がった地点で湧水をみたため井戸跡と判定した。RI012は1.35mの深さで砂礫の層となり湧水は見られなかったが、RI011と形態が同じなためこれも井戸跡と判断した。両者の間は3.5mの距離である。出土遺物は陶磁器片、炭化物が数点あり、RI011からは埋土中位よりガラス片も出土している。なお、埋土の状況はRD409・412等と似ている。

<柱穴状ピット群> (R Z 027)

全て円形基調のものである。埋土は礫が混在する暗褐色土で、殆どが単層である。建物跡を構成する配置は見られない。

5. 出土遺物

土師器片と須恵器片が1点ずつ出土しており、何れも細片である。他に陶磁器片があるがこれらは何れも破片である。

1は須恵器体部片であるが、器形は不明。RI011上位出土。2は土師器甕の底部と思われる。RD409出土。3は肥前産の染め付けの磁器碗である。RD412出土。4は陶器で産地不明、火入れと思われる。RD409出土。5も陶器で産地は不明。19C以降の新しいものであろう。薄手で、飴色の釉薬がかかり、器種は不明である。RD412出土。6・7は磁器で産地不明、染め付けの碗である。それぞれRD409・403出土。8は陶器、瀬戸美濃系の皿か、浅い鉢であろう。RD407出土。9も陶器、これも瀬戸美濃系の瓶か若しくは徳利下部と思われる。RD407出土。10も陶器で瀬戸美濃系のようである。たぶん皿か或いは浅い鉢かもしれない。貫入が見られる。RI011上位出土。11は陶器の小さな壺か甕で、産地不明、19C以降のものであろう。RD409出土。12は磁器、肥前産で染め付けの碗である。RD403出土。13は磁器であるが、時期、産地不明である。猪口と思われる。RI011上位出土。14は陶器、筆立てと思われる。下部に墨書痕があるが判読不能である。時期的には古くなく明治頃にならうか。RD408出土。15は肥前産磁器、染め付けの大皿である。内面に墨はじきの技法が見られる。RD407出土。16も肥前産磁器、染め付けの鉢で口縁部が目立たない波状となる。RD407出土。17も肥前産の磁器で染め付けの蓋である。RD408出土。

以上代表的なもののみを掲載したが、陶磁器のほとんどは18～19Cのものである。

6. まとめ

今年度は第15・16次と二次にわたる調査が行われたが、今年度の調査で確実に平安時代の遺構と確認できたものはなかった。出土遺物が土師器、須恵器の小片が2点のみで、それ以外は近世末から近現代にかけての陶磁器類である。しかも土師器、須恵器の出土地点からは、陶磁器やガラス片が伴出しており、出土遺物をもって判定出来る遺構は極めて時代的に新しいものに限られる。出土遺物が無く時期を特定できなかった遺構についても、その埋土状況から、古代に属するものはないのではないかと考えられた。

以前に第2・4次調査が隣接して行われているが、本調査区に近づくにつれて遺構は薄くなる様相を呈していることから見て本調査区は遺跡の外縁部にあたるものと思われる。

なお、小幅遺跡第16次調査（地域振興整備公団分）に関わる報告はこれをもって全てとする。

遺構一覧表

焼土遺構

遺構名	位置	平面形	規模cm	厚さcm	備考(時期)
R F 018	025 V V	不整形	61×-	10	不明

土坑

遺構名	位置	平面形	規模cm	深さcm	備考(時期)
R D 401	025 V V	楕円形	260×107	27	不明
R D 402	025 V V	卵形	128×77	16	不明
R D 403	1 V V	楕円形	341×293	53	近世?
R D 404	025 V V	不整形	118×-	69	不明
R D 405	025 V V	台形	270×168	34	近現代
R D 406	025 V V	円形?	122×-	29	近現代

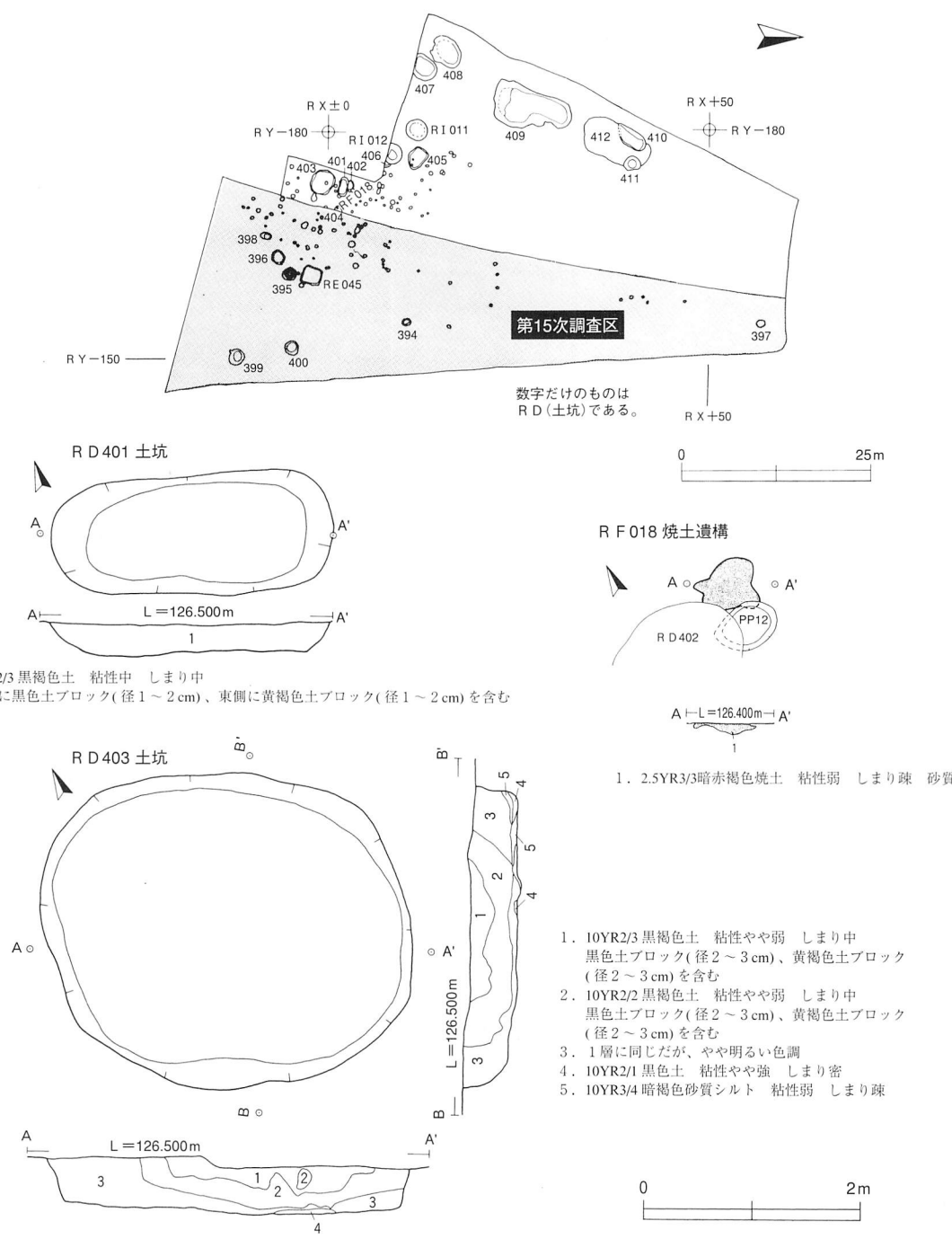
遺構名	位置	平面形	規模cm	深さcm	備考(時期)
R D 407	025 V V	楕円形	370×287	73	近現代
R D 408	025 V V	楕円形	455×358	60	近現代
R D 409	025 V V	不整形	1073×-	130	不明
R D 410	025 V V	楕円形	460×212	55	不明
R D 411	025 V V	卵形	218×178	61	近世?
R D 412	025 V V	楕円形	946×476	95	不明

井戸跡

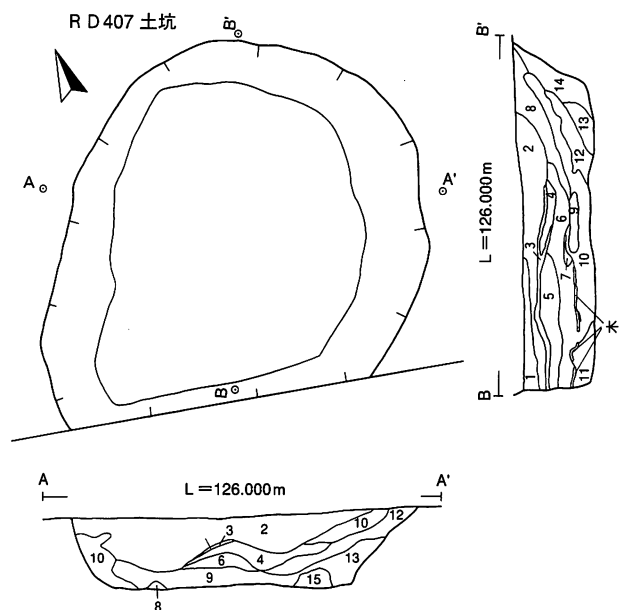
遺構名	位置	平面形	規模cm	深さcm	備考(時期)
R I 013	025 V V	円形	281×270	168	近現代
R I 014	025 V V	円形	266×-	129	近現代

報告書抄録

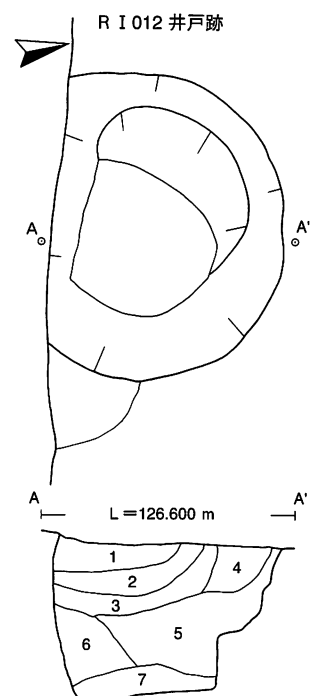
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	古舘貞身・原美津子							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185 TEL019-638-9001							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。、"	。、"			
小幅遺跡	いわてけんりょうかしもと 岩手県盛岡市本 みやぎこほ 宮字小幅45-1 ほか	03201	LE16- 2009	39度 41分 03秒	141度 07分 31秒	20000918~ 20001013	1,192㎡	盛岡南新都市 開発整備事業 に伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
小幅遺跡	集落跡	近・現代	土坑、井戸跡 柱穴状 ピット		土師器・須恵器片・陶 磁器片		ほとんどが近世後半以 降の遺構である	



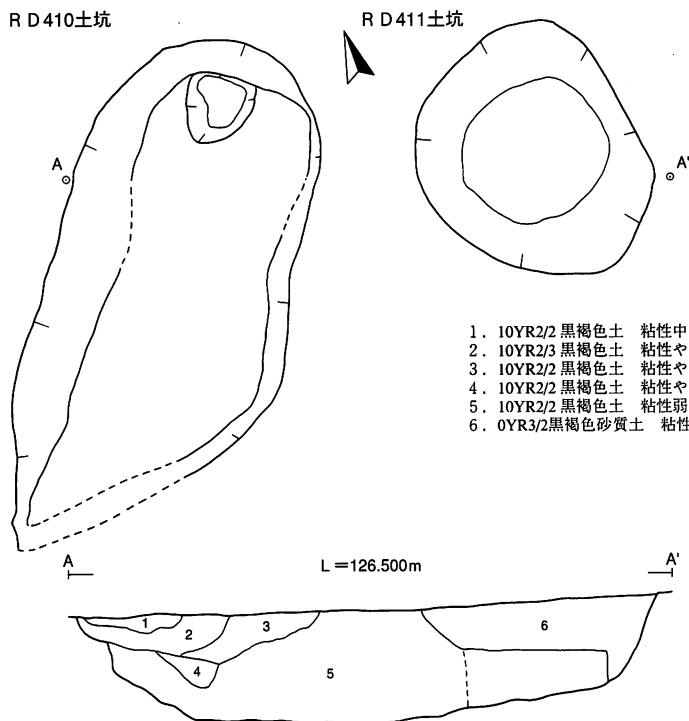
第1図 小幅遺跡第16次調査遺構配置図・土坑・焼土遺構



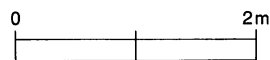
1. 10YR2/1 黒色土 粘性中 しまり中 10YR1.7/1黒色土ブロックを含む
2. 10YR2/1 黒色土 粘性中 しまり中 炭化物を含む
3. 10YR3/4 暗褐色土 粘性弱 しまり中 酸化鉄の層
4. 2層に同じ
5. 10YR2/1 黒色土 粘性やや強 しまり中 礫・木材・炭化物を含む
6. 10YR1.7/1 黒色土 粘性やや強 しまり中 礫・木材を少量含む
7. 10YR3/2 黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまり疎
8. 10YR2/3 黒褐色土 粘性中 しまり中 砂・酸化鉄を含む
9. 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱 しまり中 木材・炭化物を含む
10. 10YR1.7/1 黒色土 粘性強 しまりやや疎6層との境界に板材が並ぶ
11. 10YR1.7/1 黒色土と10YR2/2 黒褐色土と10YR3/4 暗褐色土の混合土 粘性やや強しまりやや疎 炭化物・礫を含む
12. 10YR2/3 黒褐色土と10YR1.7/1 黒色土と10YR3/4 暗褐色土の混合土 粘性中 しまり中
13. 10YR1.7/1 黒色土に10YR3/4 暗褐色土が混入している。粘性やや強 しまり中
14. 10YR4/4 褐色土 粘性中 しまり中 円礫・黒褐色土が混入している
15. 10YR4/6 褐色土 粘性やや強 しまりやや密



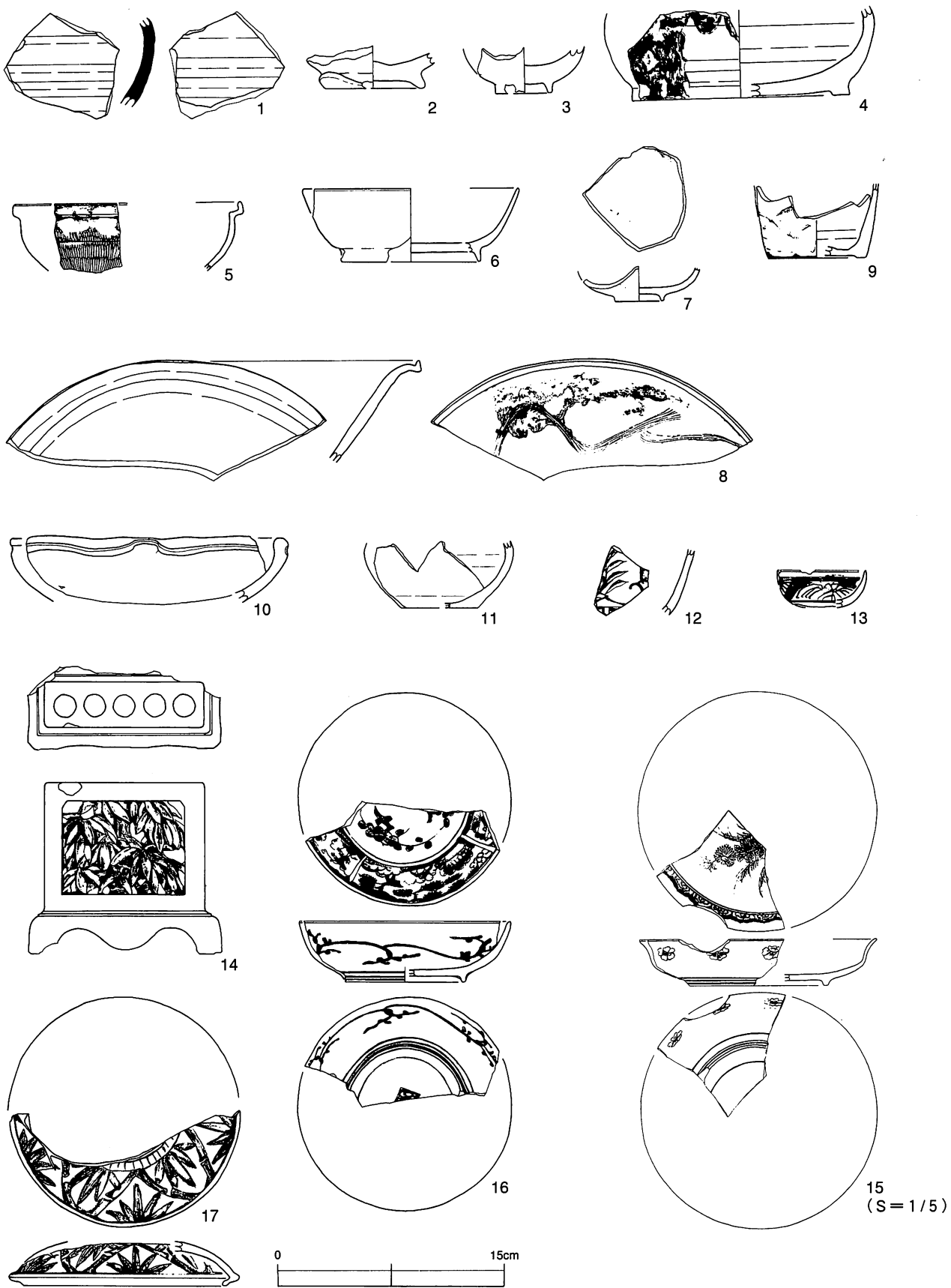
1. 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや強 しまり中 黄褐色土・黒色土の小ブロック(径1~2cm)を少量含む
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや強 しまりやや疎 黄褐色土ブロック(径4~10cm)、黒色土ブロック(径2~3cm)を多く含む
3. 2層に同じだが、さらに径5~10cmの円礫を多く含む
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性中 しまりやや疎 炭化物を少量含む
5. 4層に同じだが、径5cm前後の円礫を含む
6. 5層に黄褐色土が混入している
7. 10YR3/4 暗褐色土 土より円礫(径5~10cm)の方が多い



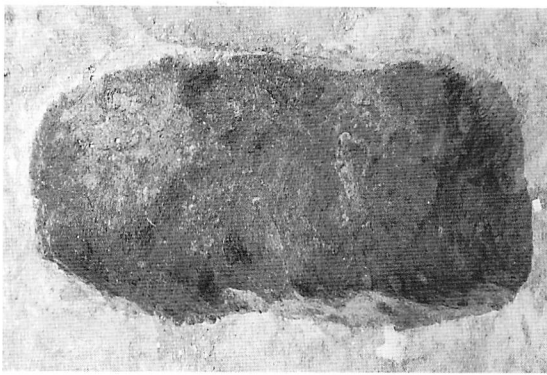
1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性中 しまり中
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱 しまり中 黄褐色土ブロックを含む
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱 しまり中 黒色土・黄褐色土ブロックを含む
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱 しまり中
5. 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱 しまりやや疎 円礫を多量に含む(礫層)
6. 0YR3/2黒褐色砂質土 粘性やや弱 しまりやや疎 円礫を含む



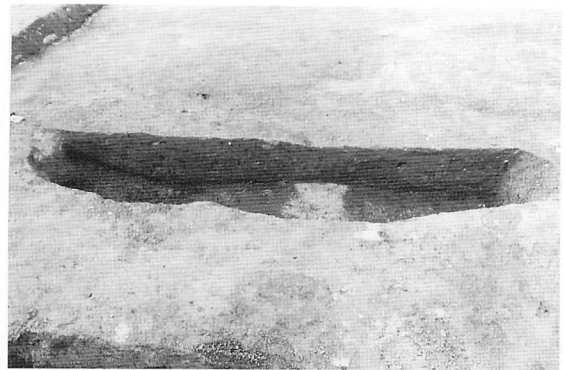
第2図 小幡遺跡第16次調査土坑・井戸跡



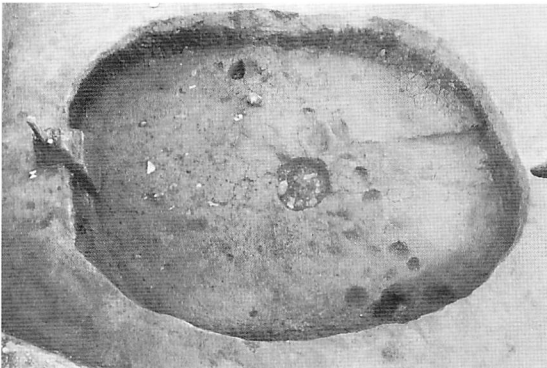
第3図 小幅遺跡第16次調査出土遺物



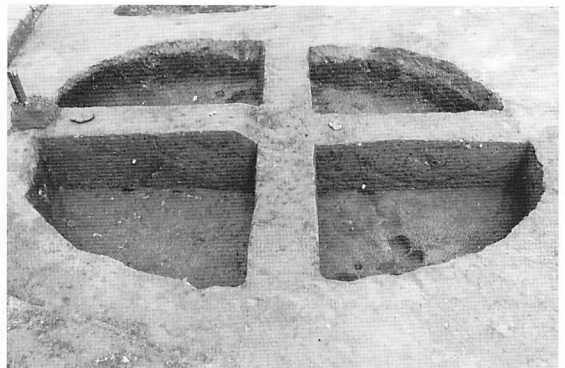
R D 401 平面



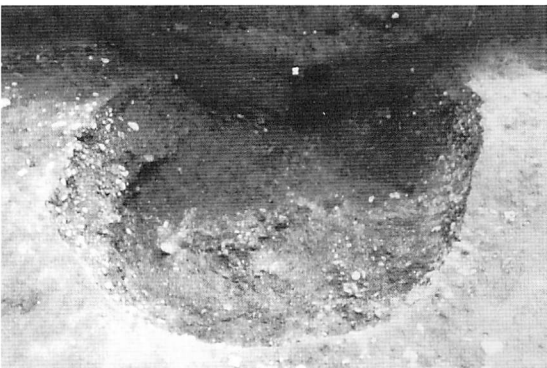
R D 401 断面



R D 403 平面



R D 403 断面



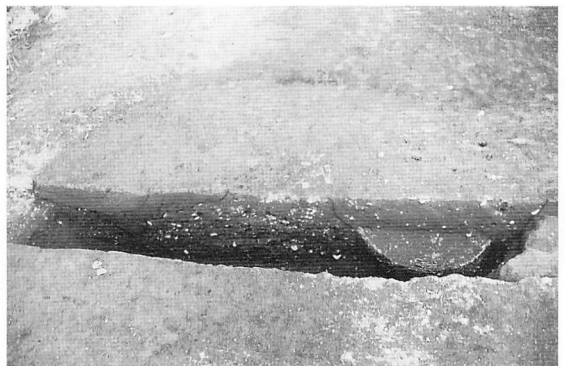
R D 407 平面



R D 407 断面

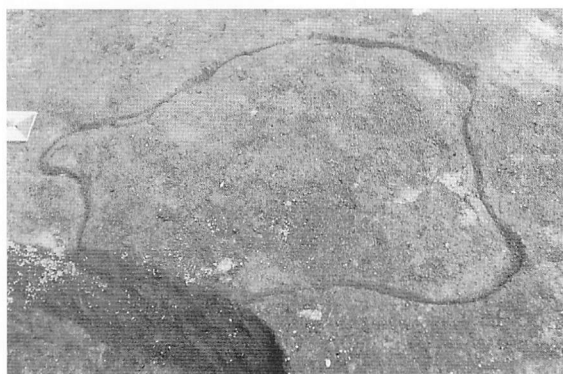


R D 411 平面

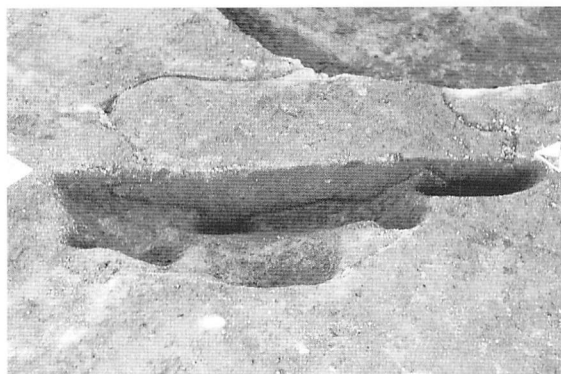


R D 411 断面

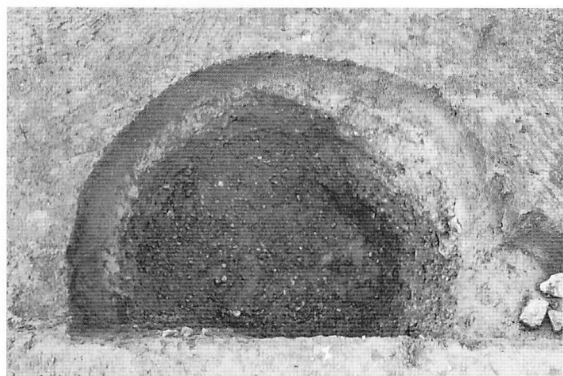
写真図版 1 小幅遺跡第16次調査土坑



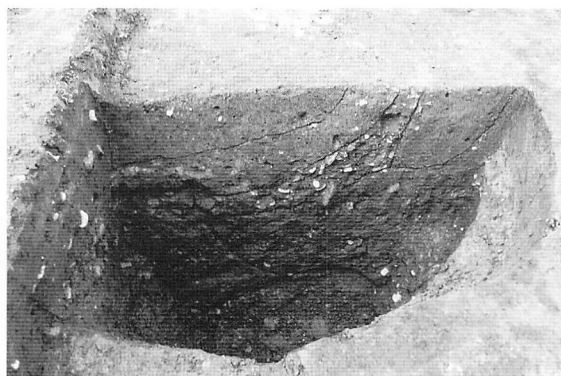
R F 018 平面



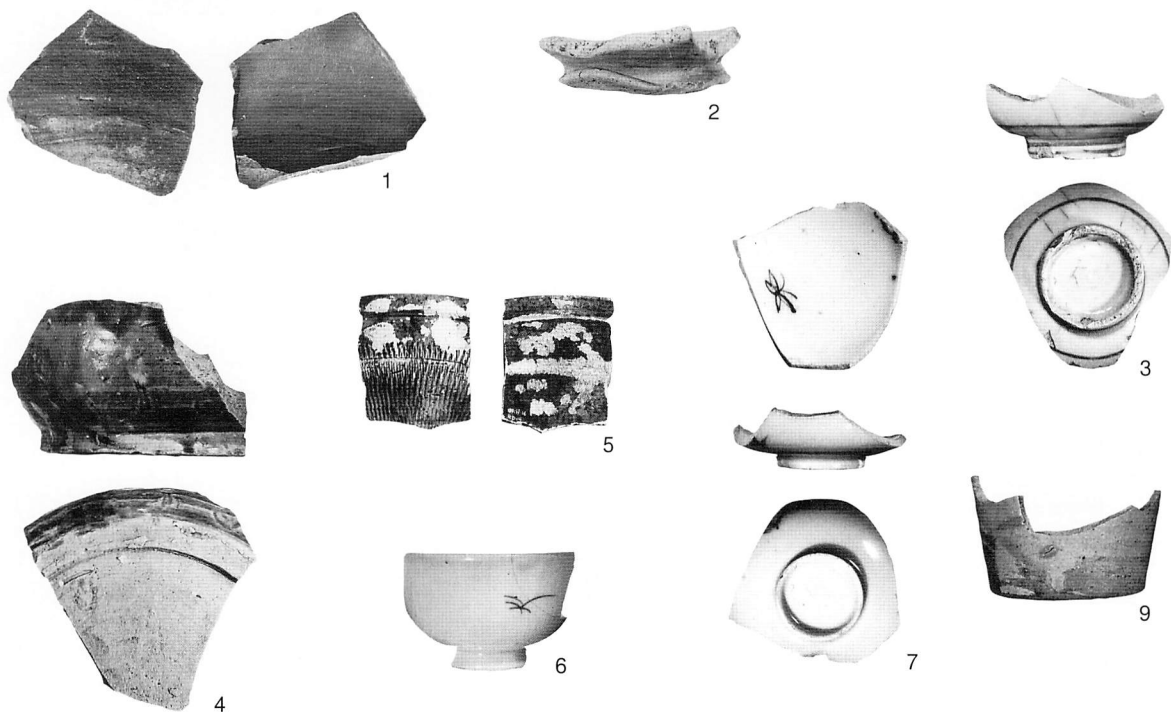
R F 018 断面



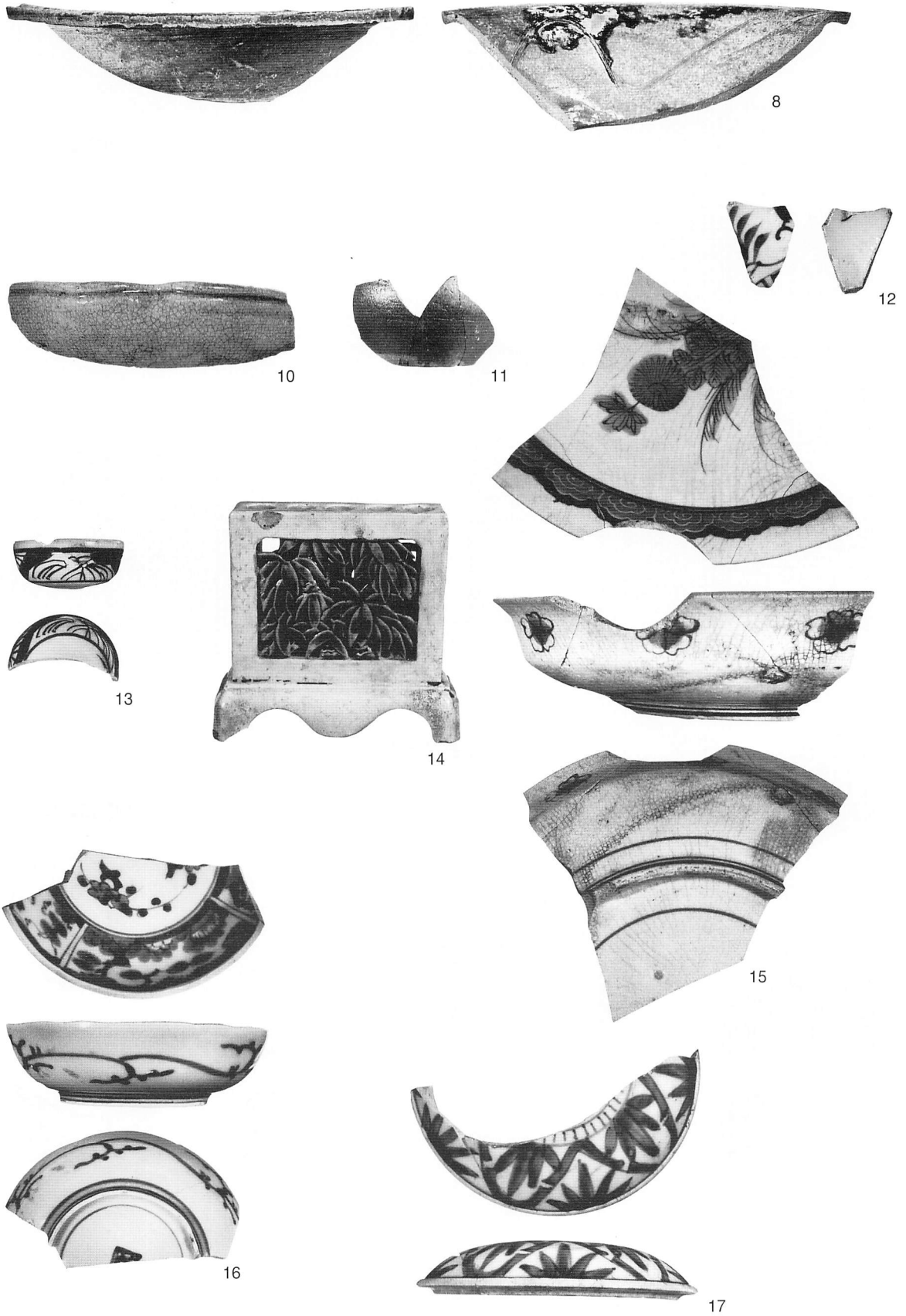
R I 012 平面



R I 012 断面



写真図版 2 小幅遺跡第16次調査焼土遺構・井戸跡出土遺物



写真図版 3 小幅遺跡第16次調査出土遺物

(42) ^{しいおかさいかわ}飯岡才川遺跡第4次調査

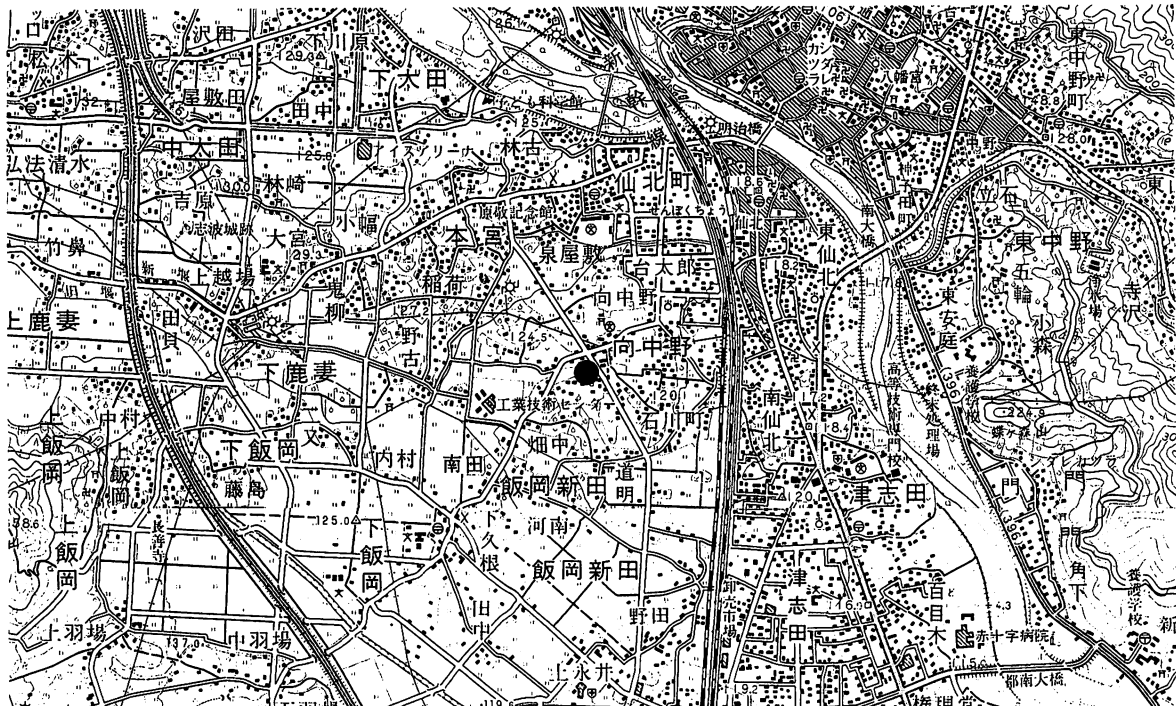
所在地 盛岡市飯岡新田2地割110-1ほか
委託者 地域振興整備公団岩手総合開発事務所
事業名 盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間 平成12年8月1日～8月14日
調査対象面積 288㎡
発掘調査面積 288㎡
遺跡番号・略号 LE16-2291・ISW-00-4
調査担当者 中田 迪・千葉正彦・鈴木 聡
協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結び付いた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要請を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成12年の事業として確定した。これを受



遺跡位置

1:50,000 盛岡

け平成12年4月3日に財団法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結し発掘調査を実施する事となった。飯岡才川遺跡の第4次調査は平成12年8月1日に開始され、同年8月14日に終了した。

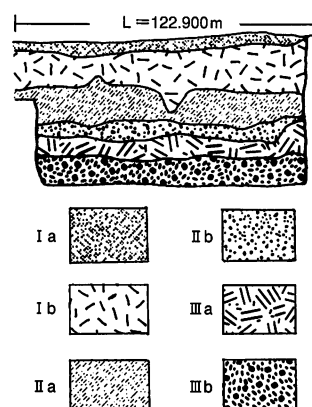
2. 遺跡の立地

飯岡才川遺跡はJR東北本線仙北町駅西約1.5km、雫石川南側の標高123m前後の河岸段丘上に位置している。現雫石川との比高は約6mである。調査区の南側は用水路と宅地に囲まれ水田、畑に使用されていた土地である。遺跡の西北西約2.3kmには志波城、北東約300mの地点には、奈良・平安時代の大規模集落跡である台太郎遺跡が、東側約500mには平安・中世の複合遺跡の向中野館跡、そして、細谷地遺跡が近接している。

3. 遺跡の基本層序

本遺跡は雫石川の氾濫によって運ばれた砂礫やシルト質、沖積面の砂礫段丘上に立地する。表土下の地層は、基本的には以下のとおりである。

- 第I a層：10Y R3/2 黒褐色土 粘性中 しまり中 草根部分 層厚10cm
 第I b層：10Y R2/2 黒褐色土 粘性弱 しまり強 親指大の石が2・3個混入
 深く長めの草根がある 層厚10~40cm
 第II a層：10Y R2/1 黒色土 粘性中 しまり中 2/2黒褐色土ブロック3
 %が混在する 層厚10~30cm
 第II b層：10Y R2/3 黒褐色土 粘性中 しまり弱 層厚10cm
 第III a層：10Y R4/3 におい黄褐色土 粘性弱 しまり弱 砂質
 層厚20~25cm 地山
 第III b層：10Y R4/6 褐色土 粘性強 しまり強 これ以下は湧水 地山



基本層序

4. 遺跡の概要

調査区は畑地でリング畑であった。調査を開始する前にリングの木を伐採してから始めた。検出された遺跡は、竪穴住居跡の一部が1基、土坑が1基、陥し穴が2基、溝が2条、柱穴状遺構である。

<竪穴住居跡> RA03竪穴住居跡は調査区の南側-1H14Gグリッドに位置し、住居跡の角であろうと思われる部分を検出した。住居跡は一部分約60cmであるため検出確認をしたのみで、隣の飯岡才川遺跡第3次調査で、残りの細部を調査することにした。3次調査結果は径5.1×4.9mの住居跡の一部分であることが確認された。遺物は土師器と須恵器等が出土している。

<土坑> 土坑は2基検出した。RD19は歪な円形で長軸178cm、短軸152cmである。断面形は、ピーカー形を呈している。何に使用されたかは不明である。出土遺物はない。RD36は調査区外の部分があり不明である。

<陥し穴> 陥し穴は2基検出された。RD35は、調査区西側端より検出した。開口部が楕円形に広がり、長軸33cmで次第に狭りながら垂直に70cm落ち込むV字形で、溝形楕円形・底に行くに従って狭くなる陥し穴特有の形状をしている。調査区中央部のRD21陥し穴は、開口部は前者と同一であるが、底部までの深さは約40cmとなっている。出土遺物はない。形状から縄文時代に属するものと思われる。

<溝跡> 溝跡は2条検出している。RG09は長さ約37m・幅31~12cm・深さは20~30cmで、第3次調査区の南西から北東に延び、第4次調査区外にも延びていることが確認された。検出面からの掘り込みは浅く、断面形は不明瞭な部分もある。

埋土は10Y R 2 / 2 黒褐色土、粘性なし、しまりなし、10Y R 4 / 6 褐色土、粘性弱、しまり弱の砂質が30%

含まれている。時期は埋土内に須恵器片1点が出土したが流れ込みと思われ不明である。

R G 10は長さ約11m・幅約20cm・深さ約15cmである。埋土は10 R Y 2/2 黒褐色土、粘性なし、しまりなし10 Y R 4/6 褐色土、粘性弱、しまりなしの砂質が60%含まれている。遺物は出土していない。

いずれも水路的な用途を果たした遺構と考えられる。

<柱穴> 柱穴状ピットは23基検出した。規模は直径10～54cm、深さは8～36cmである。埋土はおおむね10 Y R 2/1 黒色土、粘性中、しまり中であり、柱痕は認められなかった。出土遺物はない。性格は不明であり新しい時期のものと思われる。

5. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器片1点、須恵器片1点、石器1点である。

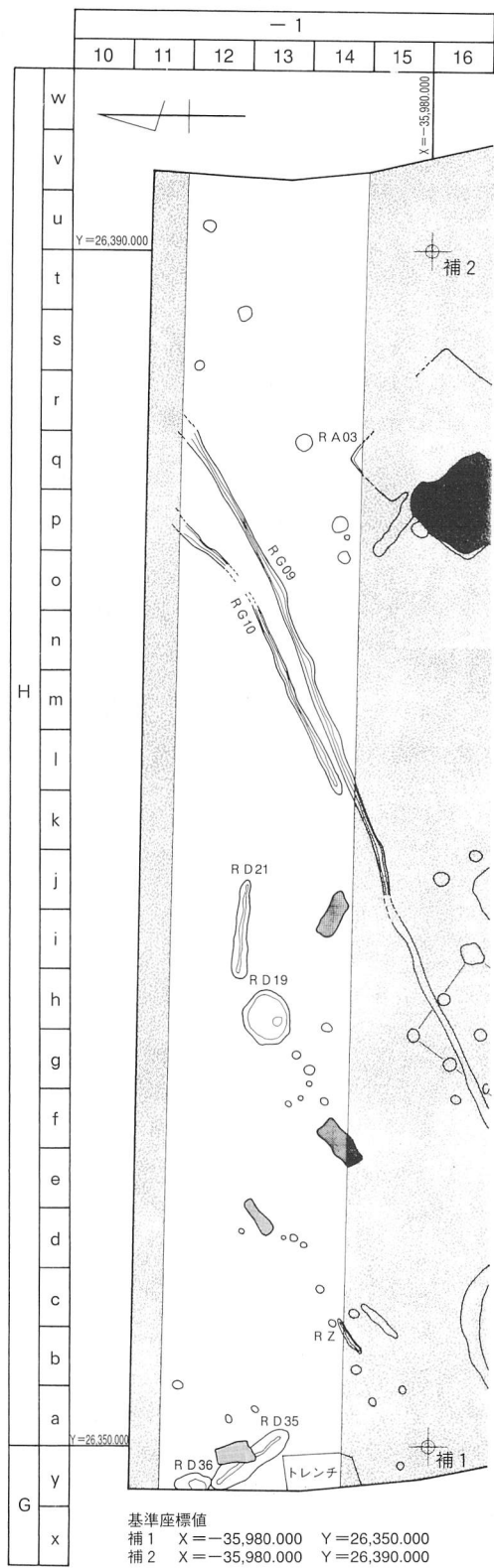
内面黒色処理を施した糸切り痕のある土師器の底部が、-1 H 14 g グリッド表土下Ⅱ層より出土している。須恵器はR G 10溝跡埋土より出土している。-1 H 14 c グリッド基本層序Ⅱ層より、横型石匙、最大長4.8cm・幅5.8cm・厚さ1.1cm・重さ20.7gが出土している。石質は赤色頁岩で産地は北上山地である。

6. まとめ

調査区は現代の畑地であった所であり、幅6m、長さ約44.5mの部分である。隣の飯岡才川遺跡第3次調査区と境をなしており、3次調査区と続いている溝と住居跡の遺構もあった。

第3次調査区では平安時代の遺構と遺物が出土していることから、本遺跡の時期は、検出遺構・出土遺物より縄文時代から平安時代であろうと思われる。全容細部把握は第3次調査報告書を参考にされたい。

なお、飯岡才川遺跡第4次調査に関わる報告は、これをもって全てとする。



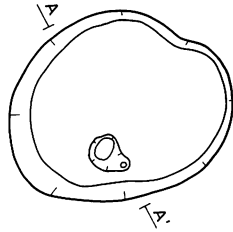
○ 土坑 ○ 柱穴状ピット // 溝 ■ 攪乱

遺構配置図 0 50m

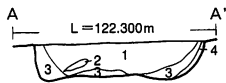


飯岡才川遺跡第4次調査遺構配置図・空中写真

R D 19土坑

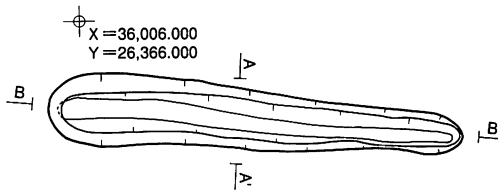


X=36,002.000
Y=26,364.000

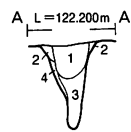


- A-A'
- 10YR2/1 黒褐色土 粘性強 締まり弱 土師器混入 (ほぼ黒色単一層)
 - 10YR2/2 黒褐色土 粘性強 締まり弱 黒褐色土と地山起源褐色土 (10YR4/6) の混合土
 - 10YR2/2 黒褐色土 粘性強 締まり弱 下部に地山褐色土 (10YR4/6) が混入
 - 10YR4/6 褐色土 粘性強 締まり弱 地山

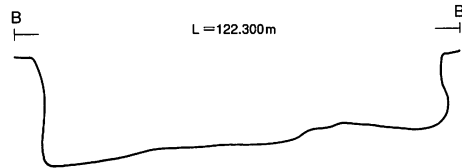
R D 21土坑



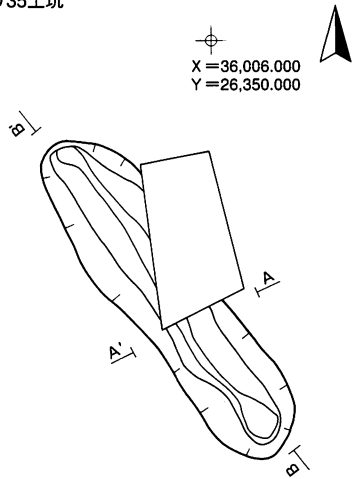
X=36,002.000
Y=26,366.000



- A-A'
- 10YR2/1 黒色土 粘性強 締まり中 粘土質シルト
 - 10YR3/3 暗褐色土 粘性強 締まり中 粘土質シルト 2層底部から湧水
 - 10YR2/1 黒色土と10YR4/6 褐色土の混合土 粘性強 締まり弱
 - 10YR4/6 褐色土 粘性強 締まり弱 砂質シルト 地山

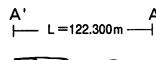


R D 35土坑



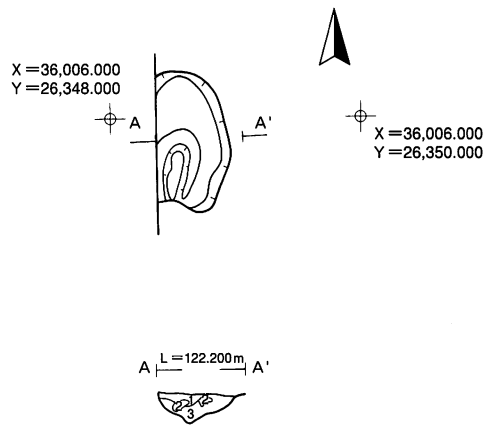
X=36,006.000
Y=26,350.000

X=36,002.000
Y=26,350.000



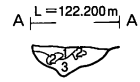
- A-A'
- 10YR1.7/1 黒色土 粘性極強 締まり弱 粘土質シルト
 - 10YR2/1 黒色土 粘性極強 締まり弱 黄褐色土粒下部中心に5%含む
 - 10YR2/3 黒褐色土 粘性強 締まり弱 黒色土と黄褐色土の混土 (6:4)

R D 36土坑

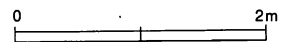


X=36,006.000
Y=26,348.000

X=36,006.000
Y=26,350.000



- A-A'
- 10YR2/1 黒色土 粘性強 締まり弱 粘土質シルト
 - 10YR2/2 黒褐色土主体 粘性 締まり弱 粘土質シルト 10YR5/6 黄褐色土ブロックが混入
 - 10YR1.7/1 黒色土 粘性強 締まり弱 黄色褐色土ブロックを3%含む



飯岡才川遺跡第4次調査検出遺構1

L=122.500m



B-B'

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりなしに10YR4/6 褐色土
粘性弱 しまりなしの砂質が60%含まれる

X=36,002.000
Y=26,372.000



X=36,002.000
Y=26,378.000

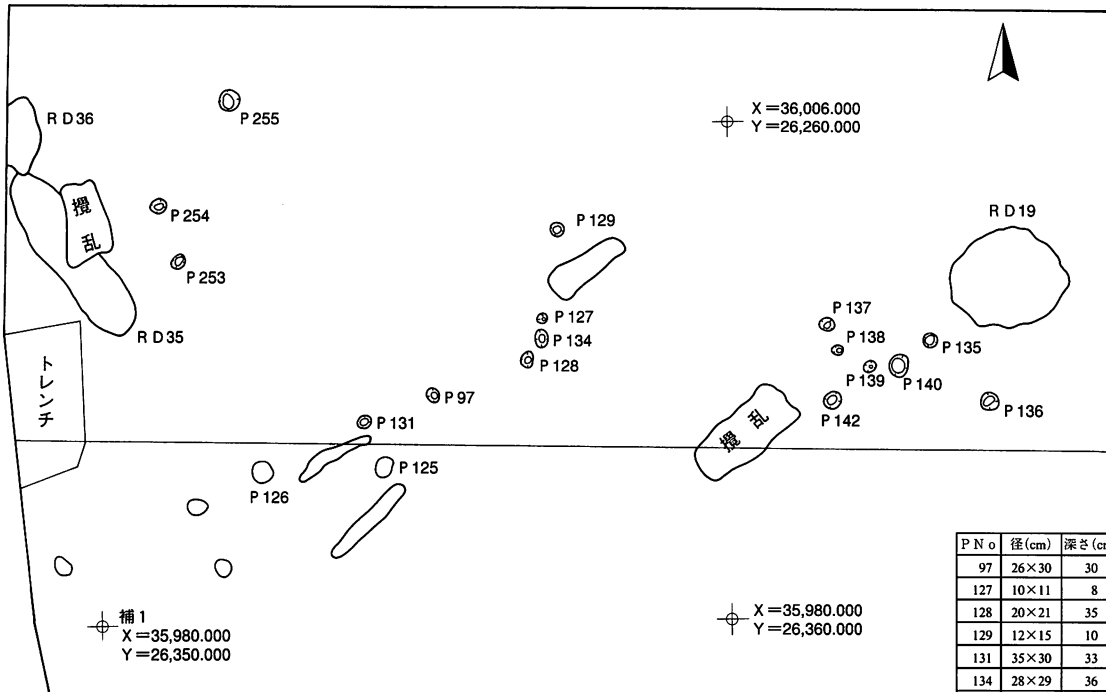
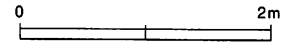
A-A'

1. 10YR2/2 黒褐色土 粘性なし しまりなし 10YR4/6 褐色土
粘性弱 しまりなしの砂質が30%含まれる

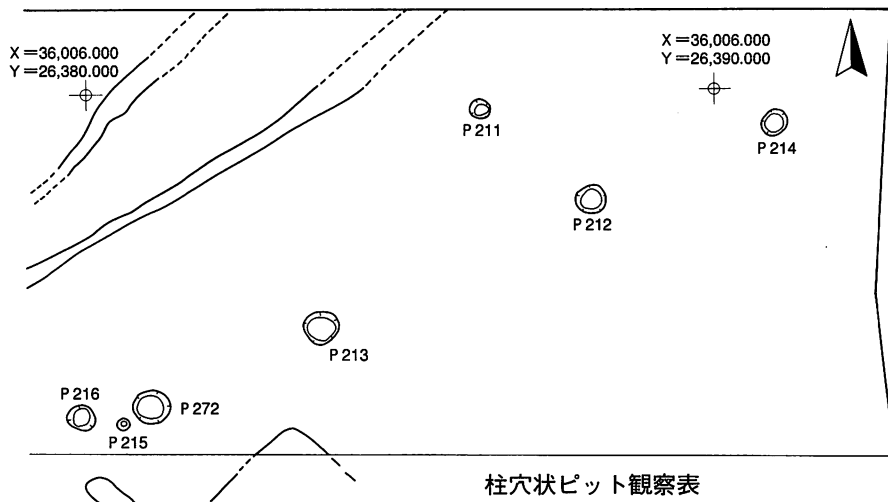
L=122.500m



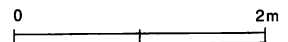
R G 09・10溝跡



P N o	径(cm)	深さ(cm)
97	26×30	30
127	10×11	8
128	20×21	35
129	12×15	10
131	35×30	33
134	28×29	36
135	24×25	25
136	30×30	11
137	19×20	27
138	21×21	10
139	22×22	27
140	40×34	28
142	22×20	26
253	26×27	21
254	20×24	20
255	22×18	16
211	28×29	30
212	38×34	28
213	48×54	14
214	32×34	20
215	33×33	18
216	44×43	21
272	24×22	17



柱穴状ピット観察表



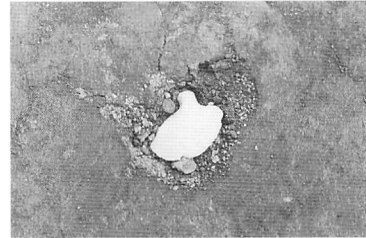
飯岡才川遺跡第4次調査検出遺構2



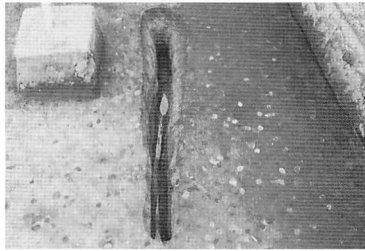
第3・4次調査区航空写真（北から）



基本層序



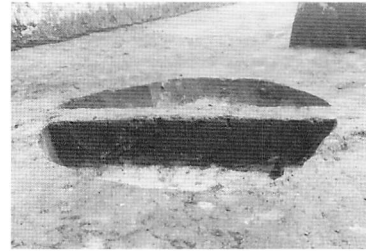
遺物出土状況



R D21 平面



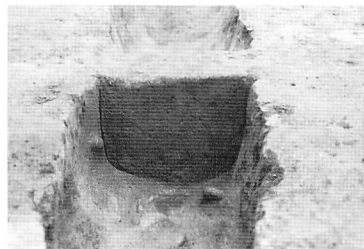
R D21 断面



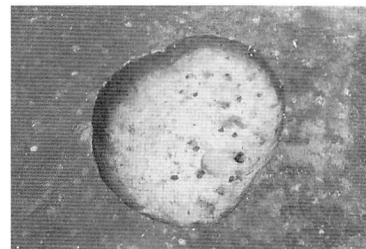
R D19 断面



R G09・10 平面



R G09 平面



R D19 平面



R D35・36 平面

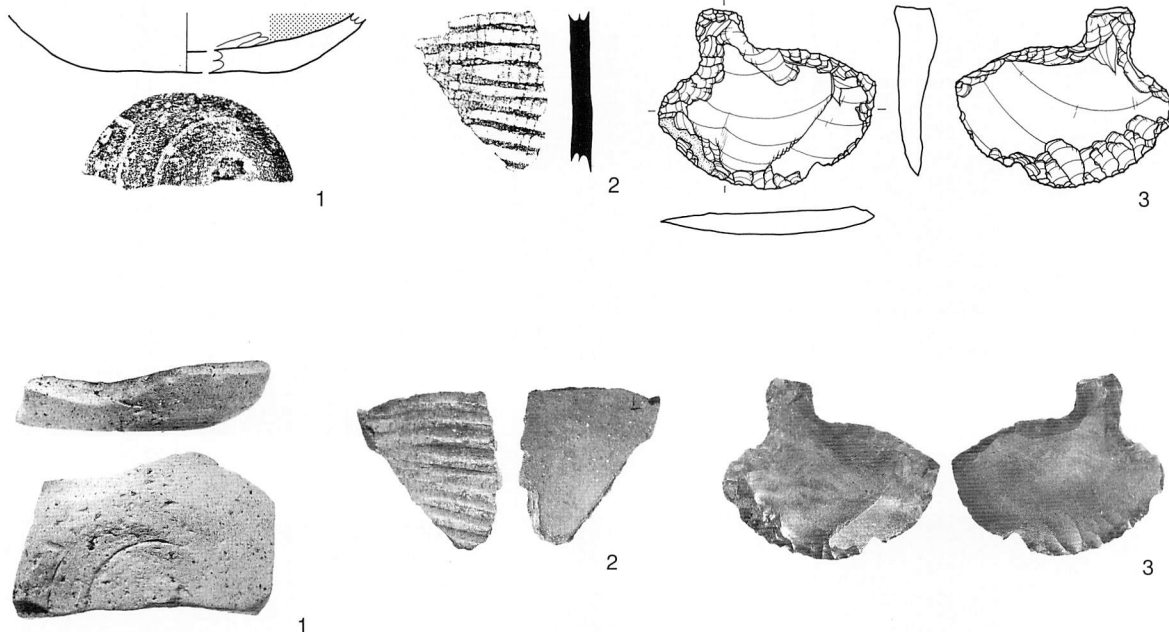


R D35 断面



R D36 断面

飯岡才川遺跡第4次調査検出遺構



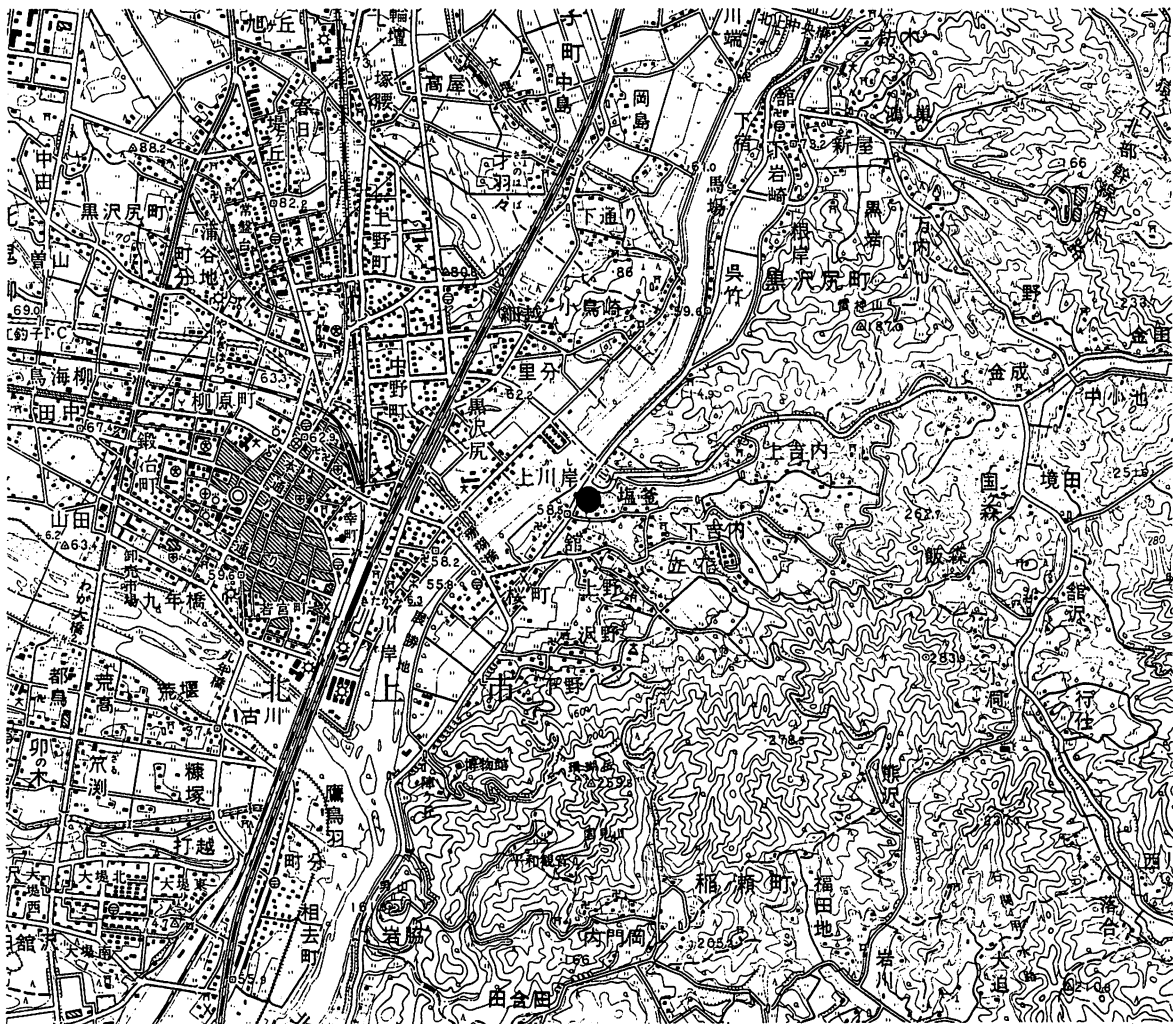
飯岡才川遺跡第4次調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	中田 迪							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185 TEL019-638-9001・9002							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 。、。、	東経 。、。、	調査期間	調査面積	調査原因
飯岡才川遺跡 第4次調査	岩手県盛岡市飯 岡新田2地割 110-1ほか	03201	LE16- 2291	39度 40分 30秒	141度 8分 27秒	20000801~ 20000814	288㎡	盛岡南新都市 開発整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
飯岡才川遺跡 第4次調査	集落跡	平安時代	土坑	2基	土器	土師器・須恵器		
			陥し穴	2基	石匙			
			溝跡	2条				
			柱穴状ピット	23基				

(43) 館Ⅱ遺跡

所在地 北上市立花第3地割51番地
委託者 岩手県北上地方振興局土木部
事業名 主要地方道一関北上線地方特定道路整備事業
発掘調査期間 平成12年9月1日～10月10日
調査対象面積 400m²
発掘調査面積 400m²
遺跡番号・略号 ME66—1237・TTⅡ—00
調査担当者 菅原靖男・村木 敬
協力機関 北上市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 北上

1. 調査に至る経過

館Ⅱ遺跡は、主要地方道一関北上地方特定道路整備事業の実施に伴い、その事業区域内に存することから、発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、本路線が、小・中学校への通学路、又は展勝地公園および野球場・ラグビー場等公共公益施設へのアクセス道路等生活路線として重要な道路でありながら、現道は幅員狭小かつ、歩道が未設置であり、歩行者・自転車に対してきわめて危険性が高く、円滑かつ安全な交通が阻害されているとともに、車両の大型化に伴う沿道環境の悪化が生じているため、現道を拡幅改築するもので、平成6年度より執行中である。

本地区は岩手県教育委員会が既に館Ⅱ遺跡として確認しているため、岩手県教育委員会は、北上地方振興局と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

2. 遺跡の立地

館Ⅱ遺跡はJR東北本線北上駅の東北東約1.8kmに位置し、北上川左岸の河岸低地に立地している。標高は58～59m前後で、現況は宅地及び畑地である。本遺跡の北西側約40mを北上川が北東から南西にかけて流れ、約4.5km下流で和賀川が合流する。周辺には館Ⅳ遺跡、館Ⅰ遺跡、立花遺跡、横町遺跡などがある。

3. 基本層序

宅地の造成や耕作によって改変を受けている部分が多いが、基本的には下記のような基本層序である。

I層：10YR 2/3 現耕作土

II層：10YR 3/3 旧耕作土

III層：10YR 2/3 粘性強 締まり強 シルト

IV層：10YR 3/4 粘性強 締まりやや強 シルト

V層：10YR 3/4 粘性強 締まり強 シルト

VI層：10YR 4/6 粘性強 締まり強 シルト

4. 調査の概要

本遺跡の調査区は幅1.5～5.0mと狭いため、遺構の大半は部分的にしか検出できなかつたり、道路拡幅や宅地造成による攪乱を受けている。II A区においては宅地造成時の攪乱がひどく遺構は検出できなかった。今回の調査で検出された遺構は土坑12基、柱穴状土坑17基である。

<1号土坑> IA3b区とIA3c区にまたがって検出されたが、東端は調査区外へ延び、西端は道路拡幅時に攪乱を受けているため規模の全容は不明である。確認された規模は開口部径195×(105)cm、底部長軸185cm、深さ10cmである。出土した遺物がないため遺構の時期・性格は不明である。

<2号土坑> 1号土坑と同じくIA3b区とIA3c区にまたがって検出されたが、同様に規模の全容は不明である。確認された規模は開口部径(115)×(85)cm、深さ18cmである。遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。3号土坑と重複関係にあり、3号土坑を切っているため、本遺構の方が新しい。

<3号土坑> 1号、2号土坑と同じくIA3b区とIA3c区にまたがって検出されたが、やはり規模の全容は不明である。確認された規模は開口部の長軸(105)cm、深さ12cmである。2号土坑と重複関係にあり、2号土坑に切られているため、本遺構の方が古い。遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<4号土坑> IIIA3b区とIIIA3c区にまたがって検出されたが、東側半分が調査区外へ延びるため規模

の全容は不明である。確認された規模は開口部径95×(80) cm、底部径65×(45) cm、深さ62cmである。遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<5号土坑> IV A 3 b区で検出されたが、西側半分が調査区外へ延びるため規模の全容は不明である。確認された規模は開口部径190×(120) cm、底部径135×(110) cm、深さ36cmである。埋土の堆積の様相から、自然堆積と思われる。遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<6号土坑> VA 1 b区で検出された。平面形は隅丸方形をしており、規模は開口部径130×125cm、底部径105×95cm、深さ52cmである。底部中央に、開口部径45×40cm、深さ20cmの副穴を1個持っている。埋土に炭化粒を少量含んでいるが、遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<7号土坑> VA 1 b区とVA 2 b区にまたがって検出された。西側が調査区外へ延びるため、平面形、規模の全容は不明である。確認された規模は開口部径85×(55) cm、底部径40×(35) cm、深さ62cmである。5号柱穴状土坑と重複関係にあり、5号柱穴状土坑に切られるため、本遺構の方が古い。埋土に炭化粒を少量含むが遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<8号土坑> VA 1 c区で検出されたが、東側が調査区外へ延びるため、平面形、規模の全容は不明である。確認された規模は開口部径80×(35) cm、底部径55×(20) cm、深さ60cmで、埋土に径5mm程の炭化粒を少量含むが遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<9号土坑> VA 2 b区とVA 2 c区にまたがって検出された。平面形は隅丸方形に近く、規模は開口部径135×125cm、底部径100×85cm、深さ46cmである。底部中央やや東よりに開口部径25×20cm、深さ40cmの副穴1個を持っている。埋土の堆積の様相から自然堆積と思われる。遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<10号土坑> VA 4 a区で検出された。北側が住宅への進入路下に延びるため平面形、規模の全容は不明である。確認された規模は開口部径90×(40) cm、底部径60×(25) cm、深さ54cmである。埋土の堆積の様相から自然堆積と思われる。遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<11号土坑> VIA 2 b区とVIA 2 c区にまたがって検出された。平面形は隅丸方形に近く、規模は開口部径105×95cm、底部径80×70cm、深さ50cmである。底部中央に開口部径25×20cm、深さ46cmの副穴を1個持っている。埋土に径5mm程の炭化粒と径1～5cm程の小礫をそれぞれ少量含んでおり、堆積の様相から自然堆積と思われる。遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<12号土坑> VIA 2 b区で検出された。開口部の西端が調査区外へ延びるため平面形、規模の全容は不明であるが、確認された規模は開口部径140×(115) cm、底部径95×85cm、深さ70cmである。底部中央に開口部径35×30cm、深さ56cmの副穴を1個持っている。遺物が出土していないため遺構の時期・性格は不明である。

<柱穴状土坑> IA区2基、IIIA区2基、VA区10基、VIA区3基の計17基検出された。開口部の規模は直径が30cm程度のものが5基、40cm程度のものが6基、50cm以上のものが6基である。深さは5～58cmであるが、その大半は15～30cm程のものである。平面形は円形のものが8基、楕円形のものが4基、不整形やその他が5基である。5号柱穴状土坑は7号土坑と重複関係にあり、7号土坑を切っていることから5号柱穴状土坑の方が新しい。また、6号柱穴状土坑では柱痕が確認できた。埋土は粘性の強い暗褐色および黒褐色土となり、出土遺物がないため時期は不明である。調査区が狭いため、建物跡を構成するような対応関係は確認できなかった。

5. 出土遺物

<概要> 縄文土器、須恵器、石鏃等の剥片石器あわせて小コンテナ1箱分出土しているが、遺構内から出土した遺物は1点もない。また、出土した遺物のうちⅡA区・ⅢA区の耕作土中から出土したものは畑地造成時に他の場所から運び込まれた土の中に含まれていたものであり、現地性のものではない。

<土器の特徴> No.1はⅣA1b区の縄文時代の包含層と思われる層から出土したもので、深鉢の体部である。磨滅が激しく僅かに縄文が確認できる程度である。No.2も同じグリッドの同じ層から出土した深鉢の体部である。縄文の他に1本の沈線が施されている。No.3～7は深鉢の体部、No.8は深鉢の頸部で、No.9は須恵器の甕の体部である。

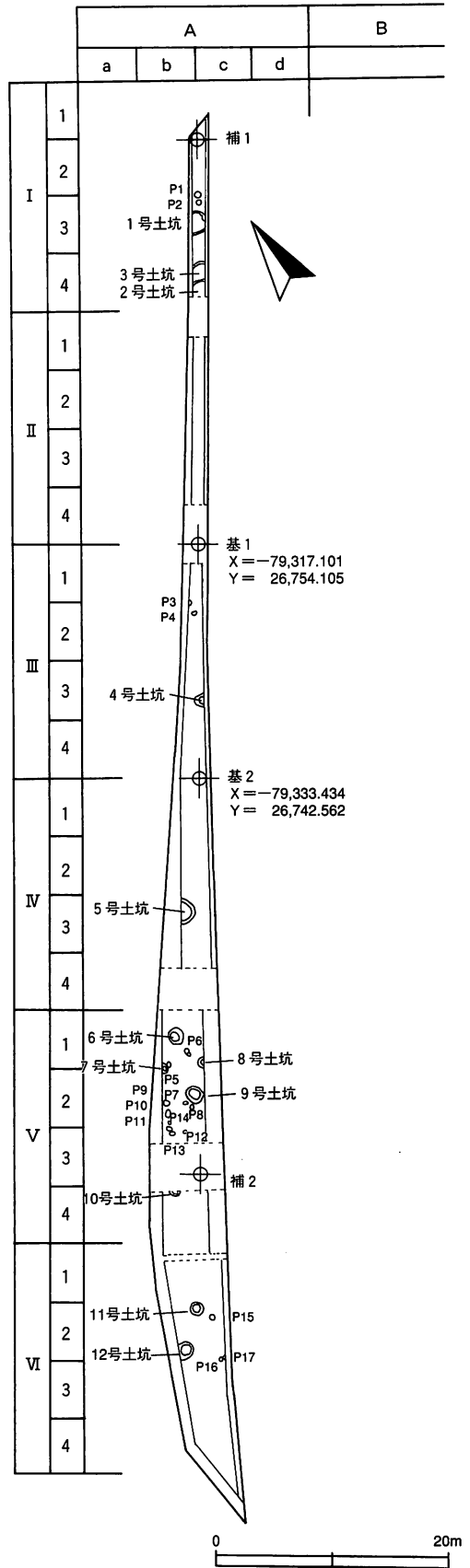
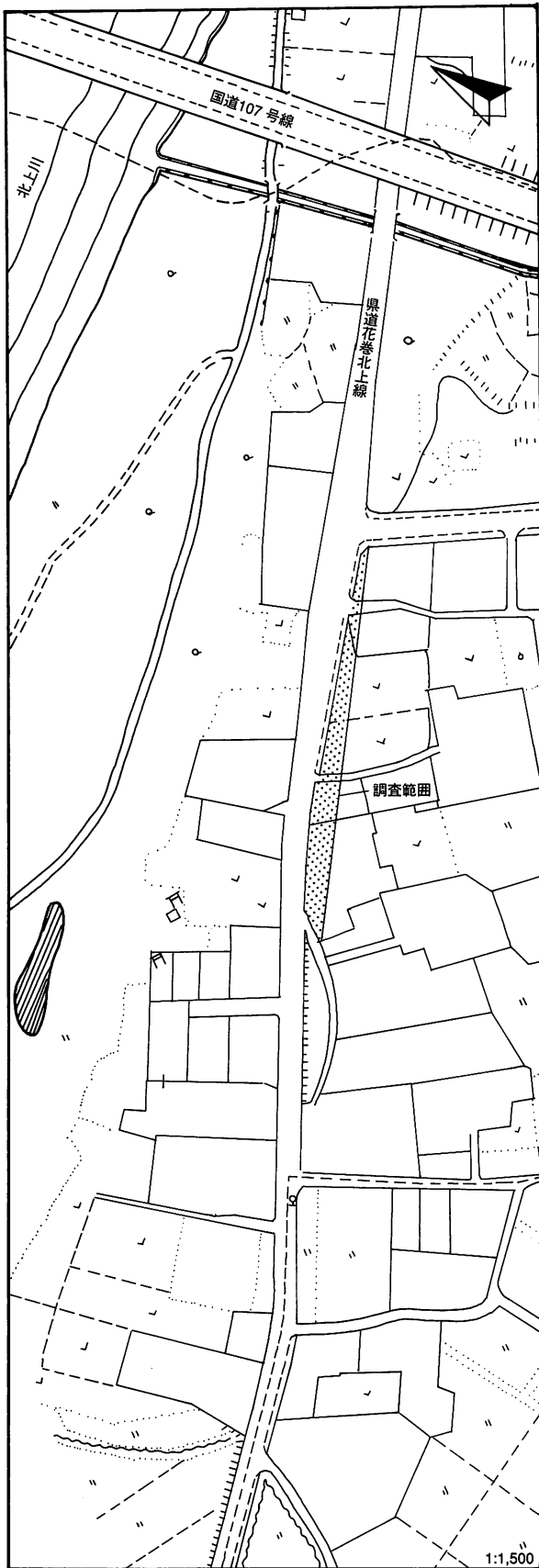
6. まとめ

今回の調査区の北北東側に隣接する館Ⅳ遺跡では縄文時代と平安時代の集落跡が確認されており、本遺跡においても当該期の遺構や遺物の検出・出土が予想されたが、今回の調査では住居跡やそれに伴う遺物は確認されなかった。本遺跡で確認された遺構は底部に副穴を伴う土坑と、伴わない土坑および規模の小さな柱穴状土坑である。副穴を伴う土坑の時期・性格については、調査範囲が狭いうえ、遺構に伴う遺物が出土していないため不明である。縄文時代の陥し穴や建物跡を構成するような柱穴の可能性も考えられるが、周辺のさらなる調査によって全容は明確になるものと思われる。

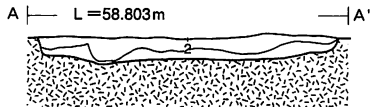
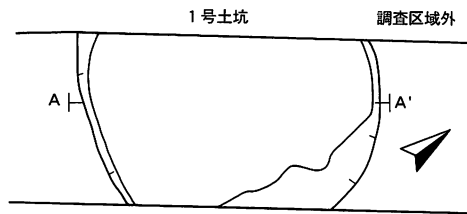
なお、館Ⅱ遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。

報告書抄録

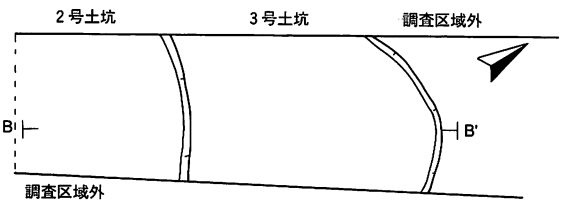
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	菅原靖男・村木 敬							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019-638-9001							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。、。、	。、。、			
館Ⅱ遺跡	きたかみしちちばなだい 北上市立花第3 ちわりほんち 地割51番地	03206	ME66- 1237	39度 17分 11秒	141度 08分 40秒	20000901～ 20001010	400㎡	「主要地方道 一関北上線整 備事業」に伴 う緊急発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
館Ⅱ遺跡	散布地	不明	土坑12基 柱穴状土坑17基		縄文土器 須恵器 石鏃、石錐、打製石斧、 剥片			



第1図 館Ⅱ遺跡遺構配置図

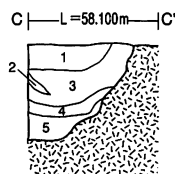
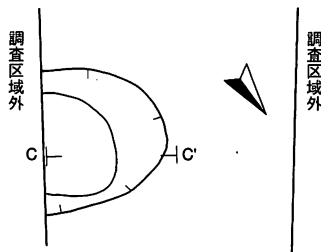


- 1号土坑 (西断面)
 1層: 10YR3/2 黒褐色 粘性やや強 締まり強 シルト
 (径1~2mmの炭化粒を微量と径2~3cmの地山ブロックを含む)
 2層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (地山ブロックをやや多く含む)

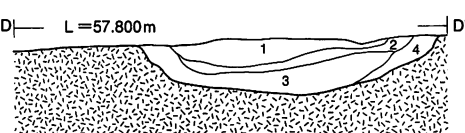
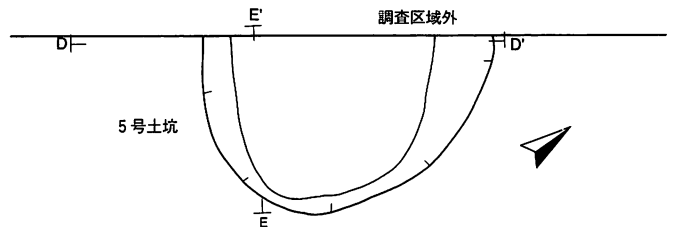


- 2号土坑 (西断面)
 1層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まりやや強 シルト
 (径1~3mmの炭化粒が若干見られ、下部には地山ブロックをやや多く見られる)

- 3号土坑 (西断面)
 1層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (少量の地山ブロックと径1~3mmの炭化粒が僅かに含まれる)
 2層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まり強 シルト (地山ブロックをやや多く含む)

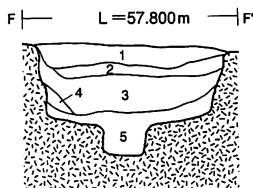
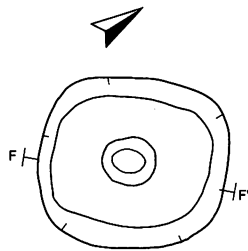


- 4号土坑 (南断面)
 1層: 10YR2/2 暗褐色 粘性強 締まりやや強 シルト
 2層: 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (地山に近い様相を呈する)
 3層: 10YR2/2 暗褐色 粘性強 締まり強 シルト (1層目の色調に似ている)
 4層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まりやや強 シルト
 5層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まりやや強 シルト

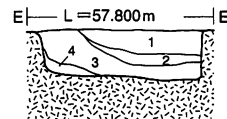


- 5号土坑 (西断面)
 1層: 10YR2/2 黒褐色 粘性強 締まり強 粘土
 2層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まり強 粘土
 3層: 10YR2/3 黒褐色 粘性強 締まり強 粘土
 4層: 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (地山崩落土)

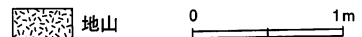
調査区域外



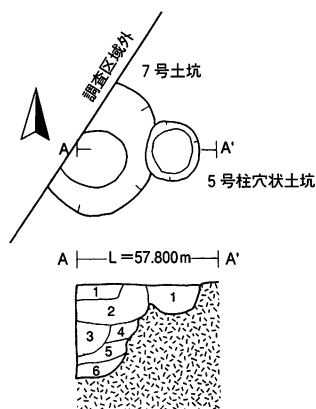
- 6号土坑 (西断面)
 1層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり強 粘土質土
 (微量であるが径3mm程の炭化粒を含む)
 2層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり強 粘土質土
 (10YR4/3のにぶい黄褐色の粘土を含む)
 3層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり強 粘土質土
 (径3~5mm程の炭化粒を少量含む)
 4層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (地山崩落土)
 5層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり強 粘土質土
 (1層より締まり、粘土質とも強くなる)



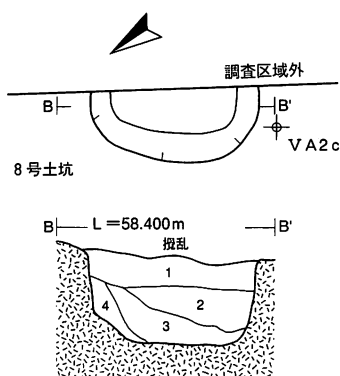
- 5号土坑 (南断面)
 1層: 10YR2/2 黒褐色 粘性強 締まり強 粘土
 2層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まり強 粘土
 3層: 10YR2/3 黒褐色 粘性強 締まり強 粘土
 4層: 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (地山崩落土)



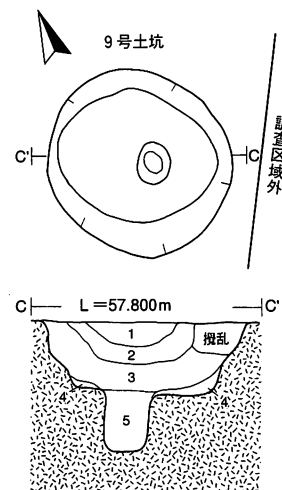
第2図 館Ⅱ遺跡1号~6号土坑



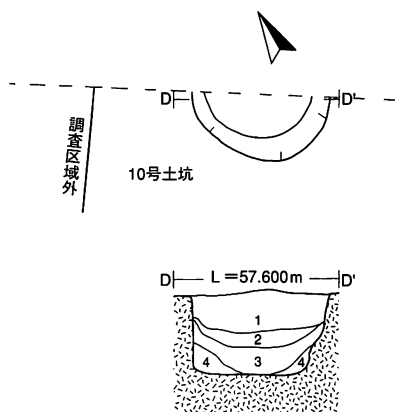
- 7号土坑 (北西断面)
 1層: 10YR3/1 黒褐色 粘性やや強 締まり強 シルト
 (径1~3mmの炭化粒を少量含む)
 2層: 10YR2/2 黒褐色 粘性強 締まり強 シルト
 3層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まり強 シルト
 4層: 10YR4/2 灰黄褐色 シルト (地山崩落土)
 5層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり強 シルト
 6層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まりやや強 シルト



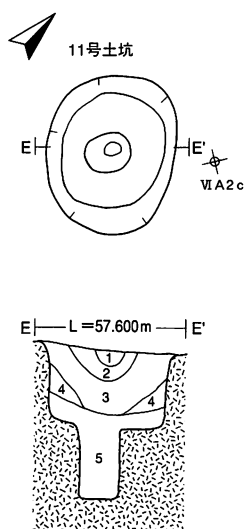
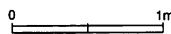
- 8号土坑 (東断面)
 1層: 攪乱
 2層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり強 シルト
 (径1~3mmの炭化粒を少量含む)
 3層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり弱 シルト
 (径5mm程の炭化粒を少量含む)
 4層: 10YR2/3 黒褐色 粘性強 締まりやや強 シルト



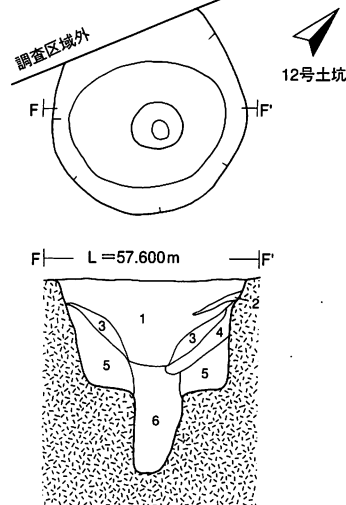
- 9号土坑 (南断面)
 1層: 10YR2/2 黒褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (径1~3mmの炭化粒を少量含む)
 2層: 10YR2/3 黒褐色 粘性強 締まり強 シルト
 3層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり強 シルト
 (地山ブロックを少量含む)
 4層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (地山崩落土)
 5層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まりやや強 シルト



- 10号土坑 (北断面)
 1層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり強 粘土
 2層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まり強 粘土
 (地山ブロックを少量含む)
 3層: 10YR3/1 黒褐色 粘性強 締まり強 粘土
 4層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まり強 粘土
 (地山ブロックをやや多く含む)

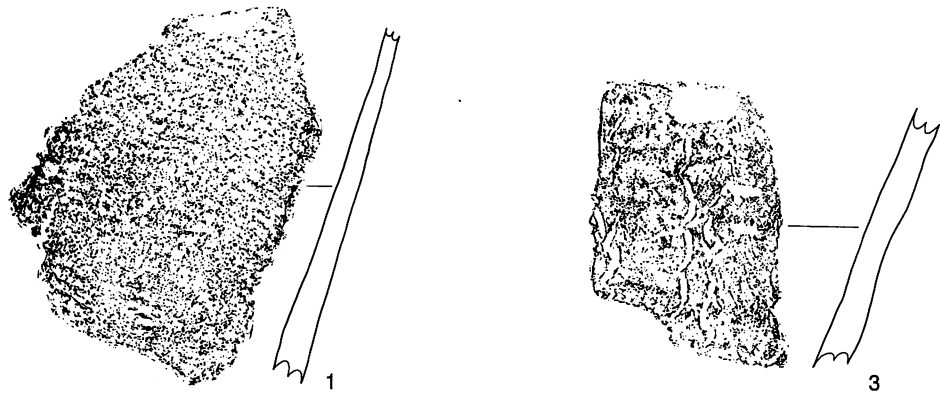


- 11号土坑 (西断面)
 1層: 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘性やや強 締まり強 シルト
 2層: 10YR2/2 黒褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (径1~5mmの炭化粒を少量含む)
 3層: 10YR2/2 黒褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (地山ブロックを少量と径5cm程の礫を含む)
 4層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まり強 シルト
 (地山ブロックをやや多く含む)
 5層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まりやや強 シルト
 (地山ブロックを少量含む)

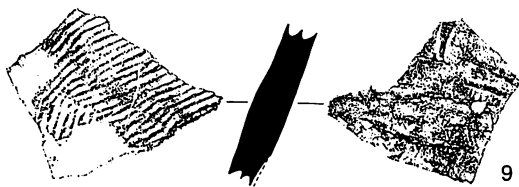


- 12号土坑 (西断面)
 1層: 10YR2/1 黒色 粘性強 締まりやや強 粘土質土
 (径5~10mmの炭化粒が少量含まれる)
 2層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まりやや強 シルト
 3層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まりやや強 シルト
 (地山がやや多く含まれる)
 4層: 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘性強 締まりやや強
 粘性の強いシルト
 5層: 10YR3/2 黒褐色 粘性強 締まりやや強 シルト
 (地山ブロックを多く含む)
 6層: 10YR3/3 暗褐色 粘性強 締まり強 シルト

第3図 館Ⅱ遺跡7号~12号土坑



S = 1/2



第4図 館Ⅱ遺跡出土遺物1

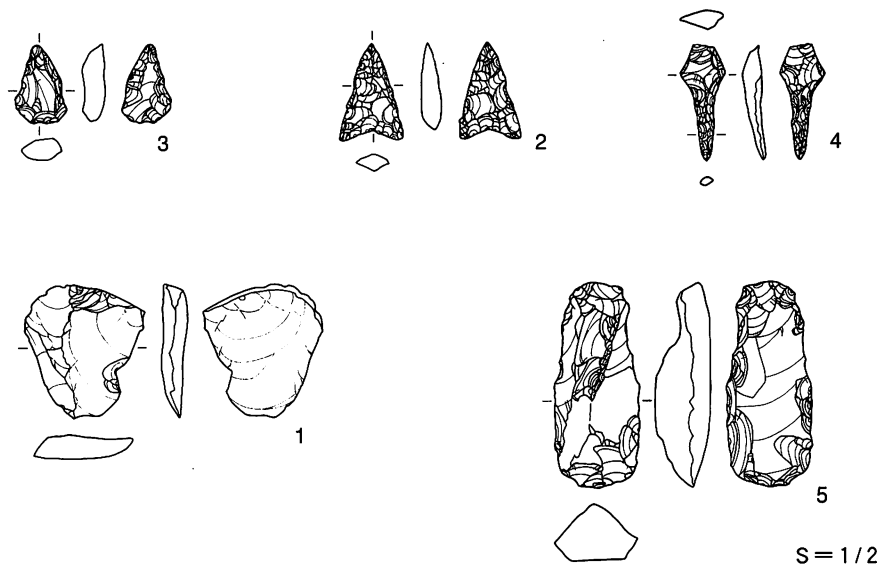


表1：土器観察表

番号	出土地点	器種	部位	特徴	時代・時期
1	IV A 1 b Ⅲ層	深鉢	体部	地文（LR横）	縄文時代
2	IV A 1 b Ⅲ層	深鉢	体部	地文（LR横）沈線	縄文時代
3	Ⅲ A・IV A区 I層	深鉢	体部	縦位の結節回転文	縄文時代（中期）
4	Ⅲ A・IV A区 I層	深鉢	体部	横位の沈線 棒状工具による3段の鋸歯状沈線	縄文時代（中期）
5	Ⅲ A・IV A区 I層	深鉢	体部	反時計回りに収束する渦巻沈線	縄文時代（中期）
6	Ⅲ A・IV A区 I層	深鉢	体部	棒状工具による2段の鋸歯状沈線 地文（LR斜）	縄文時代（中期）
7	Ⅲ A・IV A区 I層	深鉢	体部	縦位の結節回転文	縄文時代（中期）
8	Ⅲ A・IV A区 I層	深鉢	頸部	棒状工具による鋸歯状沈線	縄文時代（中期）
9	Ⅲ A・IV A区 I層	甕	体部	外面：タタキメ	縄文時代

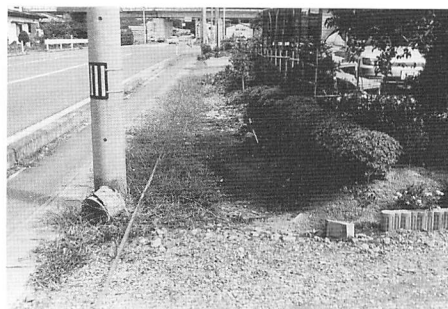
表2：石器観察表

番号	器種	出土地点	長さmm	幅mm	厚さmm	質量g	石質
1	剥片	IV A 1 b 区 Ⅲ層	45	40	9	14.7	珪化木（奥羽山脈）
2	石鏃	Ⅲ A・IV A区埋土	32	21	7	3.2	赤色頁岩（奥羽山脈？）
3	石鏃	Ⅲ A・IV A区埋土	26	17	8	3.4	珪質頁岩（奥羽山脈）
4	石錐	Ⅲ A・IV A区埋土	39	15	7.5	2.2	頁岩（北上山地）
5	打製石斧	Ⅲ A・IV A区埋土	69	28	19	39.2	頁岩（産地不明）

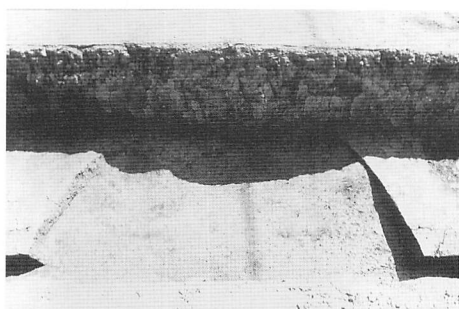
第5図 館Ⅱ遺跡出土遺物2



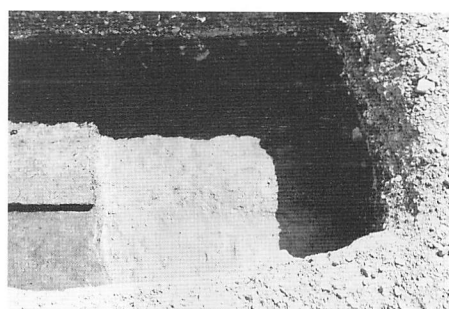
Ⅲ A・Ⅳ A区調査前風景（北から）



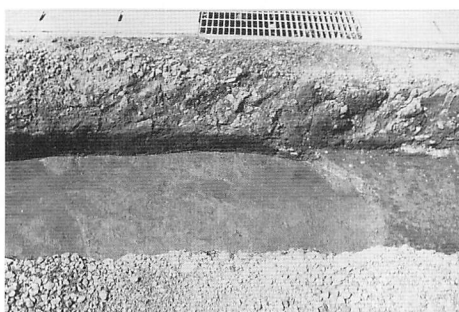
Ⅱ A区調査前風景（南から）



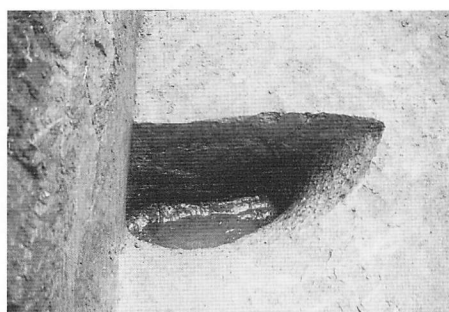
1号土坑平面（西から）



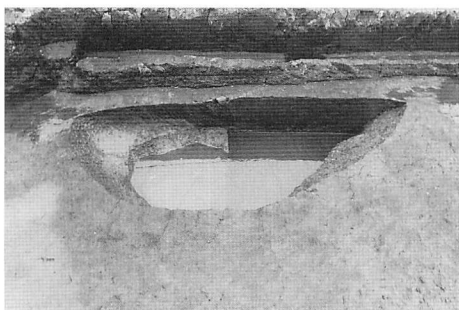
2号土坑平面（西から）



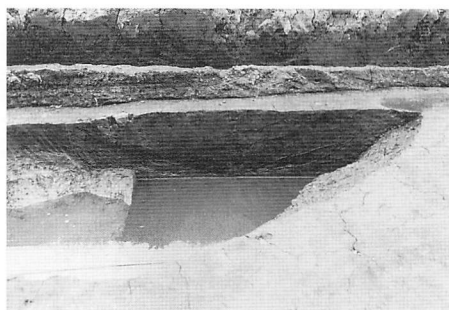
3号土坑平面（東から）



4号土坑南断面（北から）

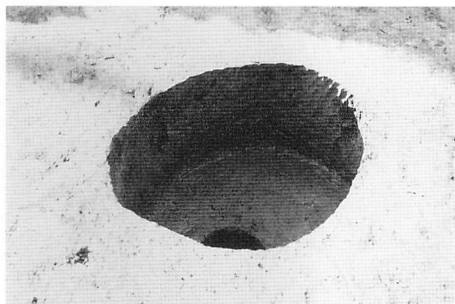


5号土坑平面（東から）

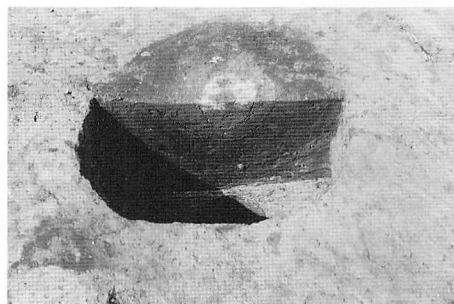


5号土坑西断面（東から）

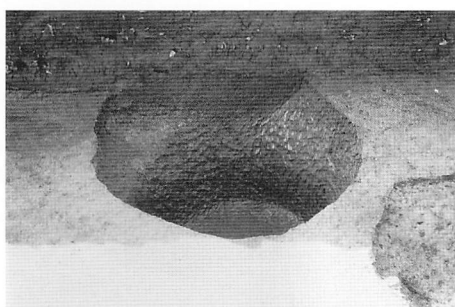
写真図版1 館Ⅱ遺跡検出遺構1



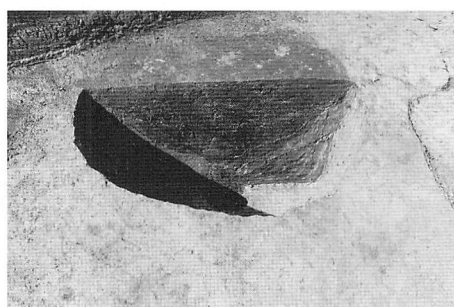
11号土坑平面（東から）



11号土坑西断面（東から）



12号土坑平面（東から）



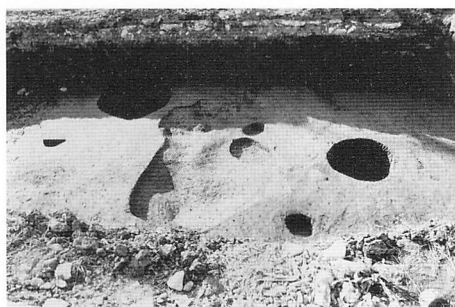
12号土坑西断面（東から）



ⅢA区 全景（南から）



ⅤA区全景（南から）

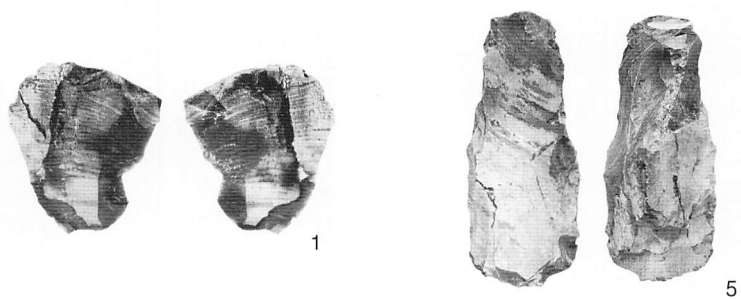
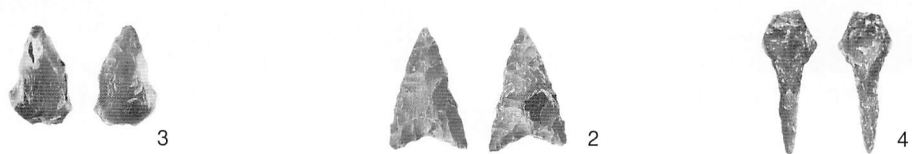
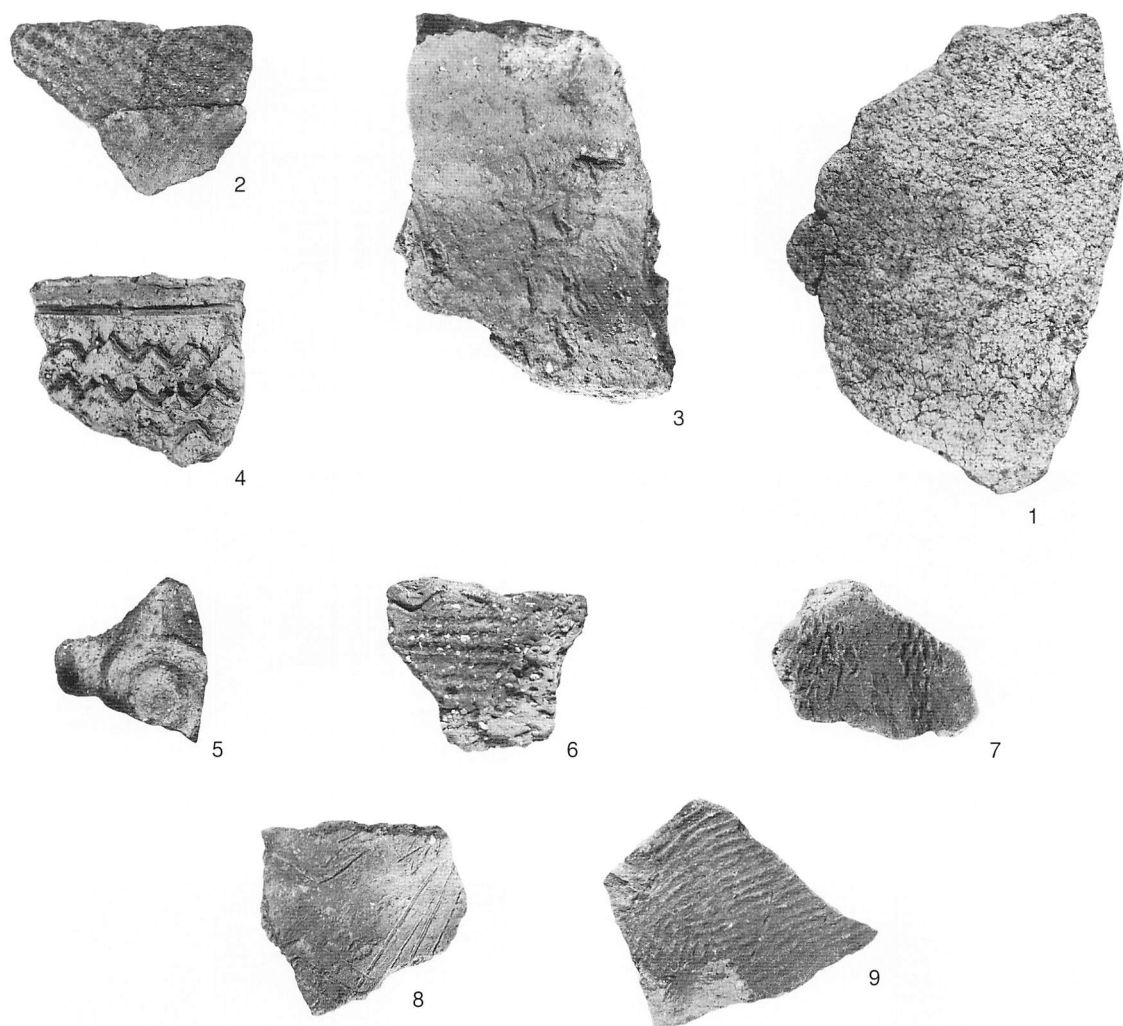


ⅥA区全景（東から）



作業風景

写真図版2 館Ⅱ遺跡検出遺構2



写真図版3 館Ⅱ遺跡出土遺物

(44) 飯島遺跡

所在地 北上市和賀町長沼7地割112番地の1ほか
委託者 岩手県北上地方振興局土木部
事業名 一般県道岩崎藤根線地方特定道路整備事業
発掘調査期間 平成12年10月1日～11月1日
調査対象面積 435㎡
発掘調査面積 435㎡
遺跡番号・略号 ME64-0156・IJ-00
調査担当者 菅原靖男・村木 敬
協力機関 北上市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 北上

1. 調査に至る経過

飯島遺跡は、一般県道岩崎藤根線地方特定道路整備事業の実施に伴い、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、本路線が、小・中学校への通学又は公共公益施設等へのアクセス等生活路線として重要な道路でありながら、現道は幅員狭小かつ、歩道が未設置であり、小中学校・役場等へのアクセス路として歩行者・自転車に対してきわめて危険性が高く、和賀中央橋も近年の重交通量の増加により著しく劣化しており、早急な対応が求められていることから早期解消を目指し、平成9年度より執行中である。

本地区は、岩手県教育委員会が既に飯島遺跡として確認しているため、岩手県教育委員会は、北上地方振興局と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

2. 遺跡の立地

飯島遺跡は、J R北上線藤根駅の南西約1.0km付近に位置し、調査区の南側を東流する和賀川左岸の河岸段丘上に立地している。標高は84～85m前後で、現況は宅地及び水田である。

本遺跡は県道岩崎藤根線によって東側調査区と西側調査区に分けられるが、両調査区とも同じ様相を呈している。段丘の縁の部分にあたると思われる調査区の南側は、道路整備や宅地造成によってかなりの削平を受けているため、現表土を除去すると段丘の基盤をなすと思われる砂礫層が露呈する。調査区の中央付近から北側にかけては平坦もしくは緩やかな下り勾配を示している。

3. 基本層序

地点によっては、攪乱や削平を受けている所もあるが、概ね次のような基本層序を示している。

I層：10YR3/1 粘性強 締まり強 現耕作土（本層の下部には酸化鉄の層が見られる）

II層：10YR2/1 粘性やや強 締まり強 旧耕作土

III層：10YR2/1～2/3 粘性強 締まりやや強 シルト

（調査区の北側に向かうにつれ、酸化鉄のブロックが確認できる。草茎・根が残っている）

IV層：10Y R3/2ないし4/2 粘性強 締まり強 シルト 本遺跡の遺構検出面である

（調査区北側では灰色味を増し、南側では黄色味が増す。酸化鉄のブロックが確認できる）

V層：10G Y4/1 粘性強 締まり並 砂質土

（調査区南側10Y R4/6 粘性強 締まり強となる）

VI層：10Y R4/6 直径10～30cmの円礫、亜鉛礫が見られる

4. 調査の概要

本調査に先立って、西側調査区に3×3m、東側調査区に1.5×3mのトレンチを数カ所ずつ設定し、各地点の遺物出土状況や土壌の層序を確認しながら重機による表土除去を行い、検出作業を行った。その結果調査区の中央から北側寄りにかけて土坑1基、溝2条、柱穴状土坑9基が検出された。

<1号土坑> II B 4 a 区に位置し、調査区の壁際で検出された。一部が調査区外へ延びるため遺構の規模の全容および形状は不明であるが、検出された部分は40×(30)cmで、深さは20cmである。埋土は黒色シルト質土が主体で微量の炭化粒と直径1cm程の小礫を含んでいる。遺物が出土していないため時期、性格は不明である。

<1号溝> 県道岩崎藤根線の両側II A 3 a 区とII B 3 b 区で検出されたが、配置から一本の溝として登録した。II A 3 a 区で検出された規模は長さ3.0m、上幅30～35cm、下幅10～15cm、深さ34cmで東西方向に延

びている。ⅡB3a区で検出された規模は長さ1.7m、上幅35～40cm、下幅20～25cm、深さ30cmで、同じく東西方向に延びている。ⅡA3a区で検出された部分の覆土の2層目から磨滅した縄文土器数点と剥片が僅かに出土しているが、他から流れ込んだ可能性が高く、時期は不明である。遺構の東端と西端は調査区外へ延びるため規模の全容および性格は不明である。

<2号溝> 1号溝と同様県道岩崎藤根線の両側ⅡA4b区とⅡB4a区で検出され、配置から一本の溝として登録した。ⅡA4b区で検出された規模は長さ3.05m、上幅30～40cm、下幅15～20cm、深さ18cm、1号溝と並行してはいないもののほぼ東西方向に延びている。ⅡB4a区で検出された規模は長さ1.5m、上幅30～35cm、下幅18～20cm、深さ18cmでⅡB4b区のものと同様に東西方向に延びている。本遺構から遺物は出土していないが、覆土の1層目に十和田a火山灰が確認できることから古代の溝跡と思われる。1号溝と同様に遺構の東端と西端が調査区外に延びるため規模の全容および性格は不明である。

<柱穴状土坑> 全部で9基検出された。直径25～30cm、深さ14～24cmで平面形が円形の比較的規模の小さいものと、直径40～65cm、深さ14～40cmで平面形が楕円形のものに分けることができるが、建物跡を構成するような対応関係は見られない。また、覆土は大部分が黒色および暗褐色のシルト質土である。

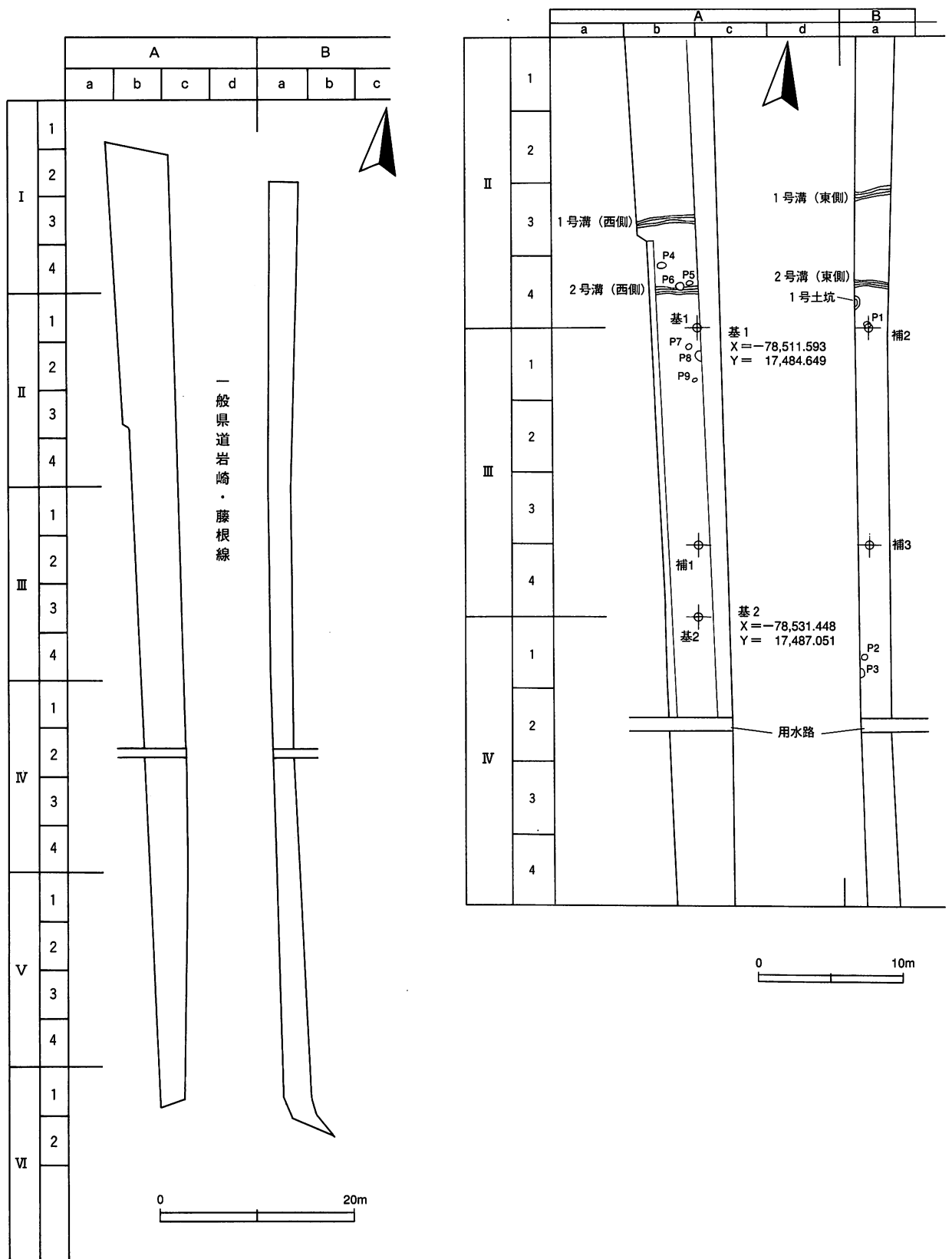
5. 出土遺物

小コンテナ1箱分の土器と石器が出土している。遺構内から出土した遺物は西側調査区(ⅡA3b区)の1号溝から磨滅した縄文土器数点と剥片が出土しただけである。遺物の大半は現耕作土中からの出土である。土器はそのほとんどが磨滅した縄文土器の小破片であり器種や時期等の詳細は不明である。また、僅かではあるが須恵器の破片も見られる。石器は全てが剥片であり、完形品は1点も出土していない。土器、石器とも東側調査区からの出土が多く見られた。No.1～3は西側調査区1号溝出土の縄文土器である。No.1、2は体部、No.3は頸部であるが、破片が小さく断片的であり、磨滅も激しいため大きさ等は不明である。No.4、5は調査区西側のⅡA3bグリッドの青灰色のグライ化した層から出土した土器であるが、磨滅が激しく詳細は不明である。この周囲は湧水が激しく、当時から水の影響を受けやすい場所だったことが考えられ、他の場所から流れ込んだ可能性が高い。No.6は東側調査区のⅣB2aグリッドの遺構検出面から出土した土器である。縄文土器と思われるが磨滅が激しく詳細は不明である。No.7は東側調査区の耕作土中から出土した縄文土器の深鉢の頸部である。No.8は東側調査区の耕作土中から出土した縄文時代晩期の土器の体部で、工字文が施されている。やはり破片が小さく、断片的であるため大きさ等は不明である。No.9は東側調査区の耕作土中から出土した須恵器の坏の体部～底部である。ロクロ成形され、底部に回転糸切痕が確認できる。No.10は東側調査区ⅢB2aグリッドの耕作土中から出土した須恵器の甕の体部である。外面にはタタキメ、内面にはあて具痕が確認できる。

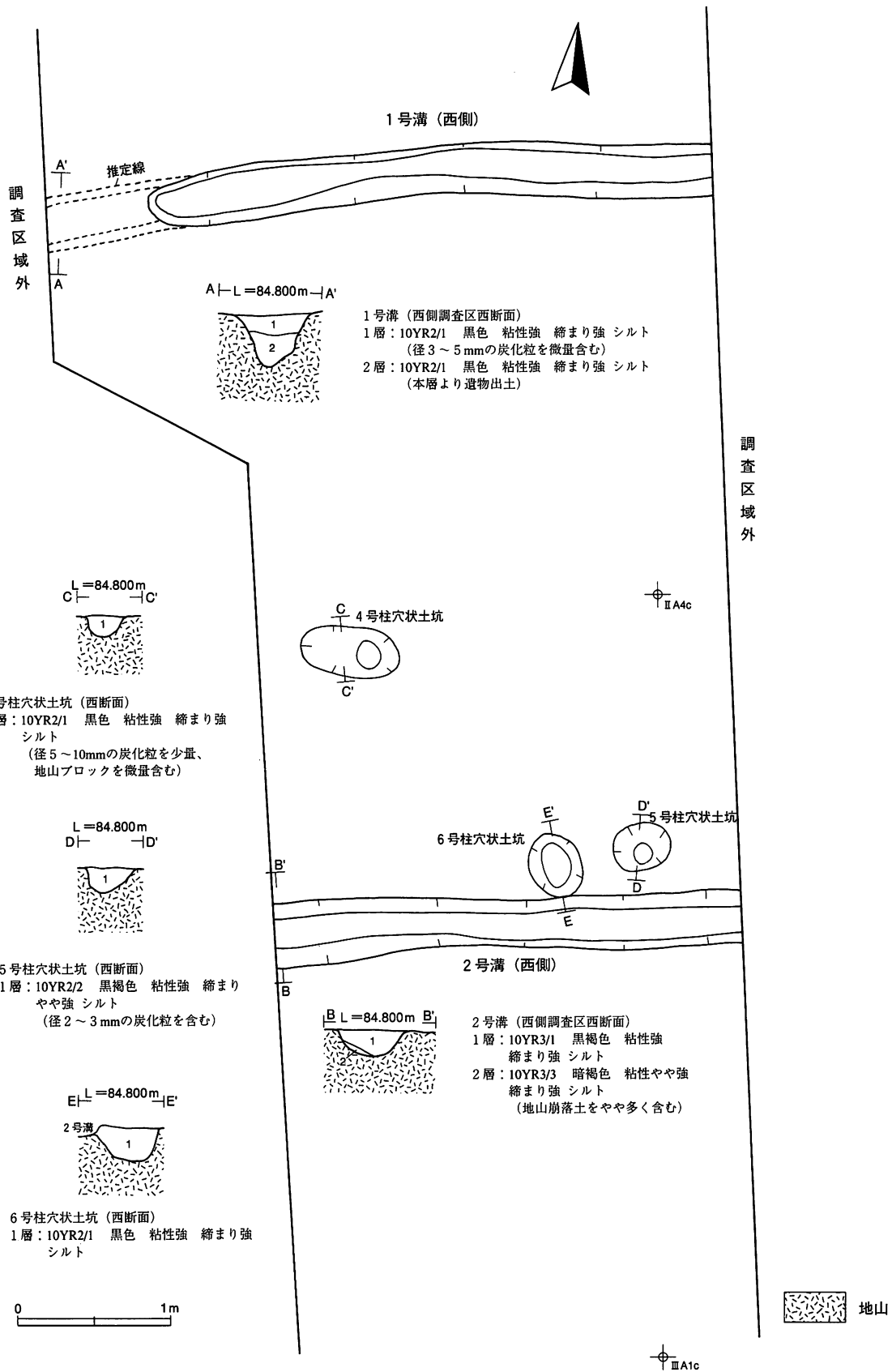
6. まとめ

今回の調査では検出された遺構および出土した遺物が少なく、遺跡全体の性格を明らかにすることはできなかったが、調査の過程で調査区北側(東側調査区、西側調査区とも)は湧水に富み、人々がこの周辺で生活を営むのに適していた場所であることが確認できた。本遺跡の周囲には念仏車遺跡、下長沼遺跡、蔵屋敷遺跡、長沼古墳群、菖蒲田古墳群などがあり、今後、周辺地域の調査が進むことによって遺跡の全容が明らかになるものと思われる。

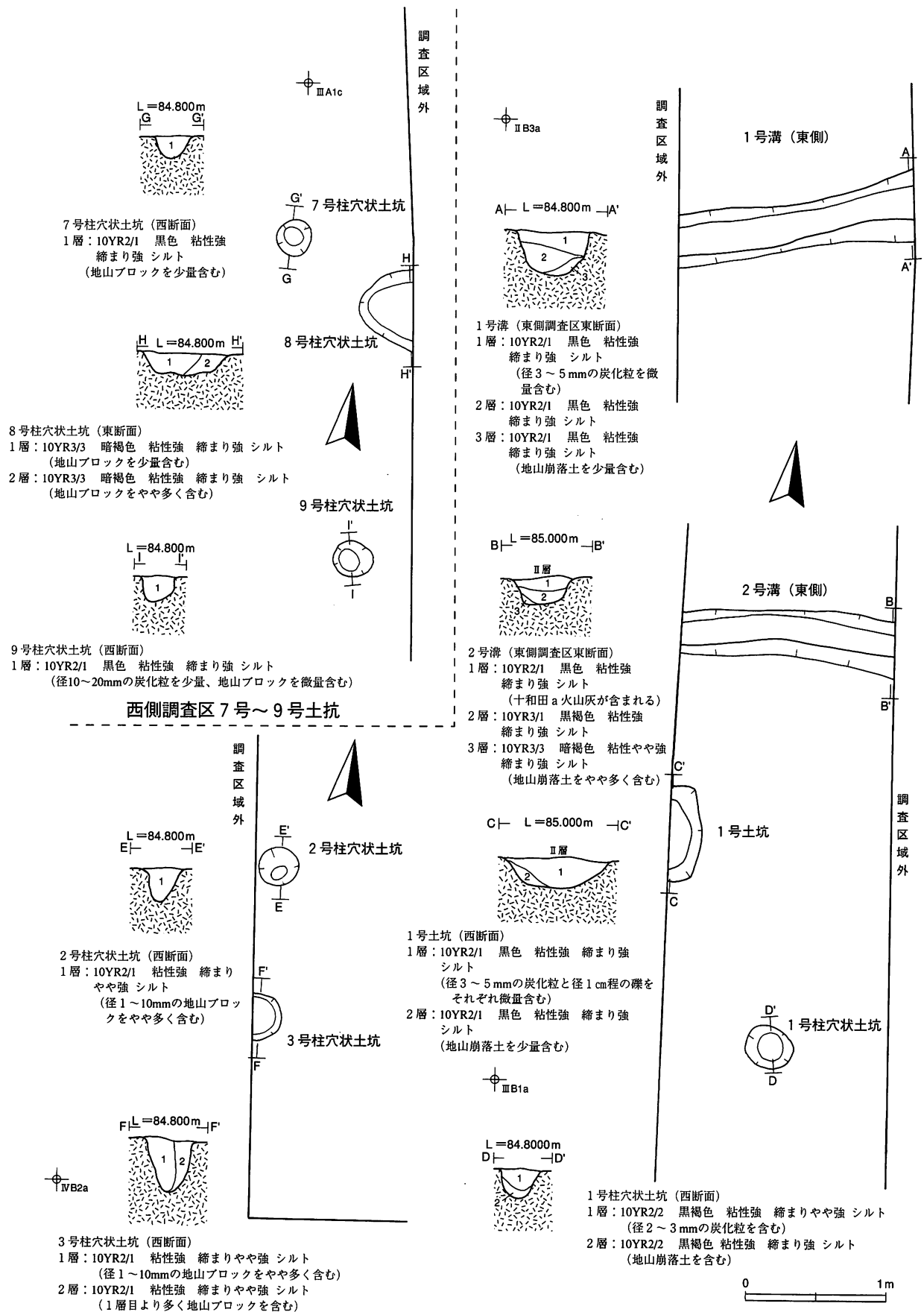
なお、飯島遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



第1図 飯島遺跡グリッド配置図・遺構配置図



第2図 飯島遺跡1・2号溝跡、4号~6号柱穴状土坑



第3図 飯島遺跡 1号土坑、1・2号溝跡、1～3号柱穴状土坑



S=1/3

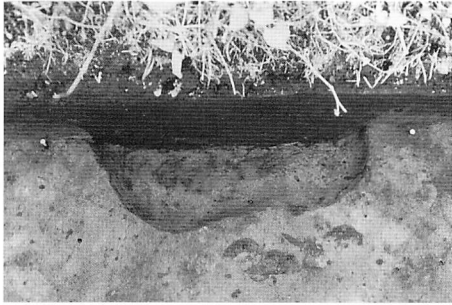
表1：土器観察表

番号	出土地点	器種	部位	特徴	時代・時期
1	1号溝(西側)	深鉢	体部	地文(LR横)	縄文時代
2	1号溝(西側)	深鉢	体部	地文(LR横)	縄文時代
3	1号溝(西側)	深鉢	頸部		縄文時代
4	ⅡA3b Ⅲ層	深鉢?	体部		縄文時代
5	ⅡA3b Ⅲ層	深鉢?	体部		縄文時代
6	ⅣB2a 検出面	深鉢	体部		縄文時代
7	ⅡB~ⅢB区	深鉢	頸部		縄文時代
8	ⅡB~ⅢB区	浅鉢	体部	工字文	縄文時代(晩期)
9	ⅡB~ⅢB区	坏	体~底部	須恵器:ロクロ成形 底部回転糸切跡	平安時代
10	ⅡB~ⅢB区	甕	体部	須恵器:外面たたき目・内面あて具痕	平安時代

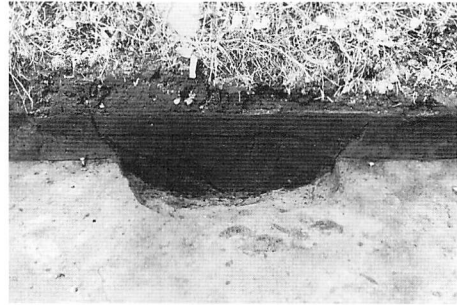
表2：石器観察表

番号	器種	出土地点	長さmm	幅mm	厚さmm	厚さmm	石質
1	剥片	ⅢB区 1層	50	25	6.5	7.1	頁岩(産地不明)
2	剥片	ⅢB区 1層	56	59	13	34.2	頁岩(産地不明)
3	剥片	ⅢB2a 2層	35	41	13	9.8	頁岩(産地不明)
4	剥片	ⅢB2a 2層	100	86	19	124.1	頁岩(産地不明)
5	石核	ⅢB3a 2層	68	48	33	127.4	頁岩(北上山地)

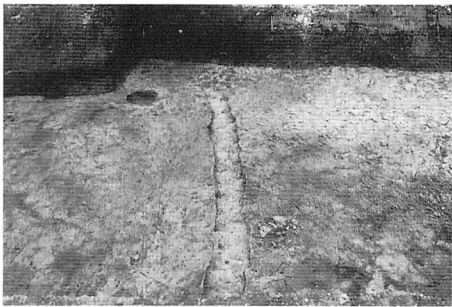
第4図 飯島遺跡出土遺物



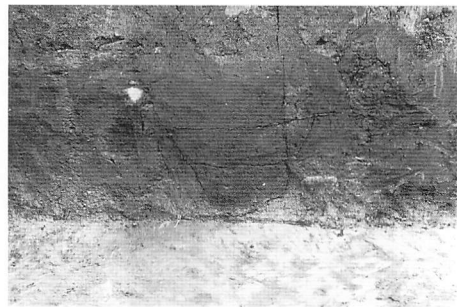
1号土坑平面



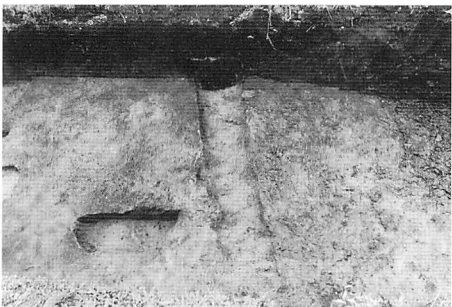
1号土坑西断面



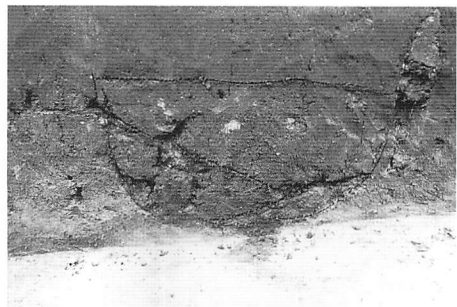
1号溝西側平面



1号溝西側西断面



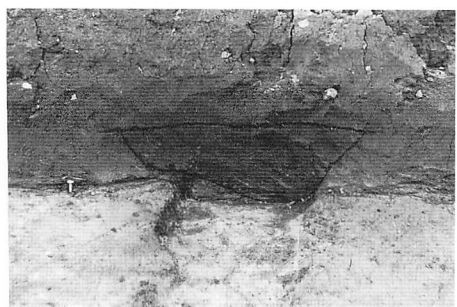
1号溝東側平面



1号溝東側東断面



2号溝西側平面

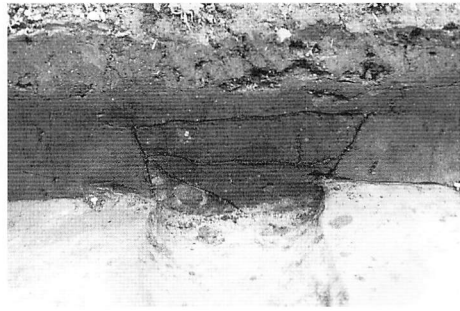


2号溝西側西断面

写真図版1 飯島遺跡1号土坑、1・2号溝跡



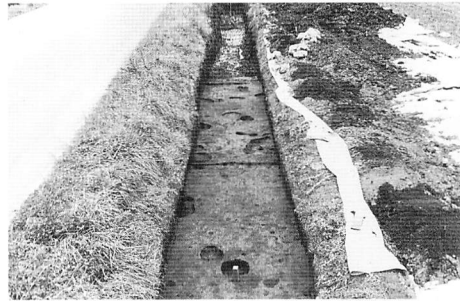
2号溝東側平面



2号溝東側東断面



西側調査区遺構集中部全景（南から）



東側調査区遺構集中部全景（南から）



1



2



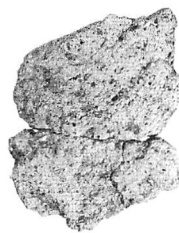
3



4



5



6



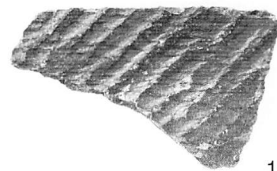
7



8

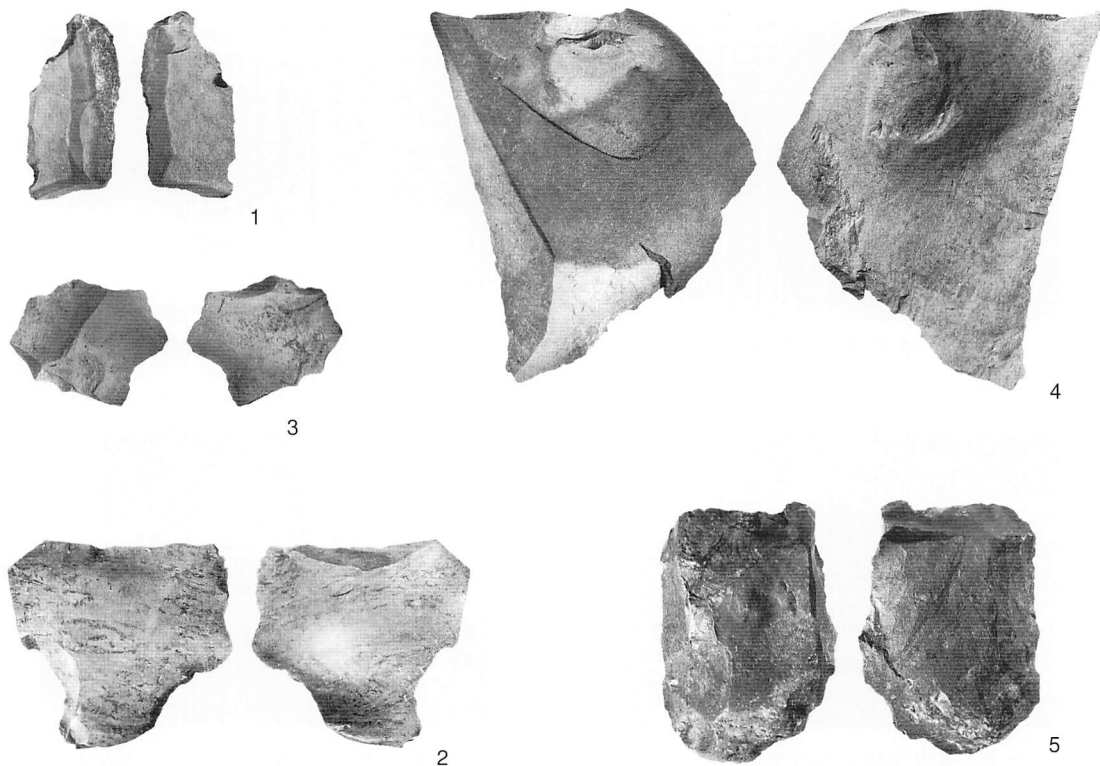


9



10

写真図版2 飯島遺跡2号溝跡・出土遺物1



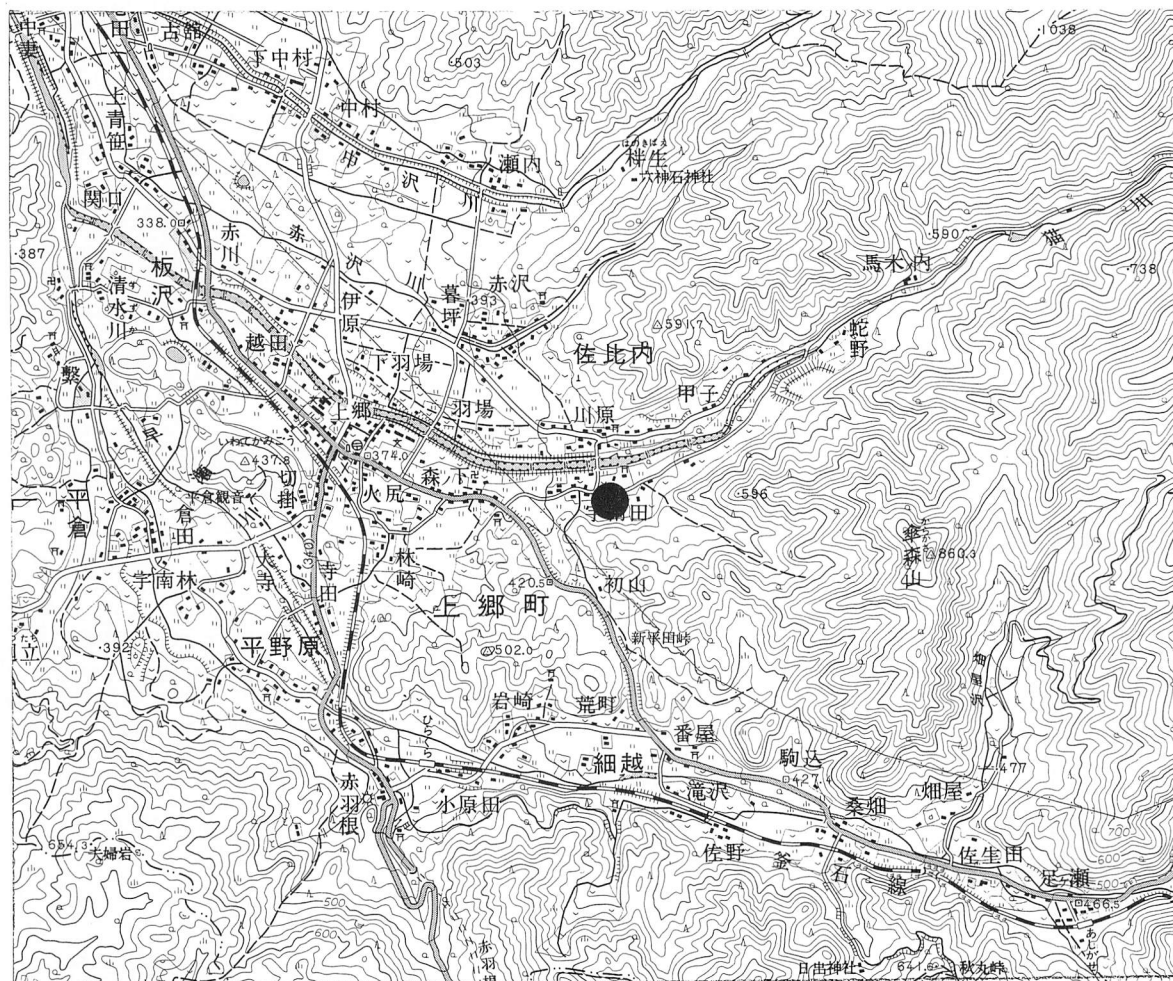
写真図版3 飯島遺跡出土遺物2

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	菅原靖男・村木 敬							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019-638-9001							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。、。、	東経 。、。、	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
飯島遺跡	きたかみしわがちょう 北上市和賀町 かがねま 長沼7地割112 びんら 番地の1ほか	03206	ME-64 0156	39度 17分 35秒	141度 02分 10秒	20001002~ 20001101	435m ²	「一般県道岩 崎藤根線整備」に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
飯島遺跡	散布地	平安時代	土坑1基 溝2条 柱穴状土坑9基		縄文土器 須恵器 石器(剝片)			

うなだ
(45) 宇南田 I 遺跡

所在地 遠野市上郷町佐比内7地割14ほか
委託者 岩手県遠野地方振興局遠野農村整備事務所
事業名 ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）猫川左岸地区
発掘調査期間 平成12年8月31日～10月31日
調査対象面積 2,580m²
発掘対象面積 2,580m²
遺跡番号・略号 ME66-1357・UND I-00
調査担当者 小野寺正之・北村忠昭
協力機関 遠野市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 遠野

1. 調査に至る経過

宇南田Ⅰ遺跡は、「ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）猫川左岸地区」の施行に伴って、その事業区域に位置することから発掘調査することとなったものである。

当事業は、遠野市上郷町地内の受益面積91haの地区で、昭和30年代に水田は一部10a区画に整理されたが、区画状況が小さく農道の幅員も狭い状況であった。

また、小用道路は土水路で濡水し、小排水路は用水不足を補うために用排兼用で浅く、排水不良となって湿田化しているなど、営農の機械化、耕地の汎用化、さらには農地の流動化、生活環境の向上など高生産性農業を阻害していた。

これらの阻害要因を除去し、効率的で安定的な経営体に農地を集積し、高生産性農業の確立を図り、併せて農村環境水準の向上に資するために、大規模ほ場整備を実施するものとして、平成10年度新規採択された地区であり、平成12年度で3年目である。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、遠野地方振興局遠野農村整備事務所から平成11年3月3日付け遠農整第539号「県営ほ場整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（依頼）」の文章によって、岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をしたのが最初である。

依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成11年5月17日～19日・24日に調査を実施し、その結果は平成11年6月8日付け教文第261号「県営ほ場整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（回答）」で回答し、その際工事施行範囲内が宇南田Ⅰ遺跡の範囲内であることが付記された。

回答を受けた遠野地方振興局遠野農村整備事務所では、宇南田Ⅰ遺跡を含む面工事実施年度である平成11年10月4日付け遠農整第600-3号「ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）猫川左岸地区における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文章によって、岩手県教育委員会に対して試掘調査を依頼した。

依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成11年11月4日・5日に試掘調査を実施し、その結果は平成11年11月19日付け教文第817号「ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）猫川左岸地区における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」で回答し、その際宇南田Ⅰ遺跡の発掘調査が必要である旨が付記された。

（遠野地方振興局農村整備事務所）

2. 遺跡の立地

宇南田Ⅰ遺跡は、JR釜石線岩手上郷駅の東方約2.1kmに位置し、調査区の北側を西流する猫川の左岸に形成された扇状地状地形内に立地する。遺跡の標高は約409m、調査前の状況は水田（休耕田）であった。

3. 遺跡の基本層序

本遺跡の基本層序は、次のとおりである。

I層	10YR3/2	黒褐色土	シルト	層厚10～30cm	粘性なし	しまりややあり	現表土。木根・礫多し。
II層	10YR2/2	黒褐色土	シルト	層厚15～30cm	粘性なし	しまりややあり	水田の盛（客）土。
III層	10YR2/1	黒色土	シルト	層厚0～60cm	粘性なし	しまりなし	遺物包含層・遺構検出面。
IV層	10YR5/8	黄褐色		層厚10～30cm	粘性なし	しまりなし	中礫火山灰層。
V層	2.5Y4/4	オリーブ褐色土	砂	層厚不明	粘性なし	しまりなし	地山層。一部でグライ化。

4. 調査の概要

まず岩手県教育委員会文化課が行った試掘調査の結果を元に、試掘トレンチの再掘・クリーニングを行い、土層・遺物出土状況の確認を行った。その後重機で表土除去を行い、III層（検出）面直上まで調査区全体を掘り下げた。この段階で調査区南側では、表土直下から礫混じりのV層（地山）土がすぐ検出されたため、

部分的に深掘りを行ったが状況に変化が無く、遺構が検出されなかった上、遺物の出土がほとんど見られなかった。そのため、ここで調査区南側については精査を終了し、調査の主体を調査区北側に移行した。その後、公共座標第X系に合わせて3級基準点（2点）と補点（4点）を打設し、それを用いて1区画20mの大グリッドと1区画2mの小グリッドを設定した。遺構の検出・精査は小グリッドを単位として調査を進め、出土した遺物については写真記録した後、グリッドごと一括して取り上げた。最終的に調査区北側については、旧河道跡のほぼ全体をV層（地山）面の上まで掘り下げている。また、調査区北端の一部と調査区西端において駄目押しの深掘りをかけてみたが、調査区南側同様に礫混じりのV（地山）層が広がっている状態であった。

(1) 検出遺構

検出された遺構は竪穴住居跡1棟、土坑1基、柱穴状土坑4基、旧河道跡1箇所である。

<1号住居> I B区9・10jグリッドおよびI C区9・10aグリッドにまたがり、V層上面より検出した。平面形は東側の円形部と、西側の楕円形部とが結合したひょうたん形を呈しており、断面形は椀状である。長軸は約4m、深さは一番深いところで約90cmである。底部が平坦であり、その中央部付近で焼土が確認されたことから、住居であると推定した。西側は床面が次第に浅くなっており、住居の入口にあっていたのではないかと思われる。時期的には、出土遺物などから縄文晩期以降に属すると思われる。

<1号土坑> I B区10aグリッド、V層上面より検出した。平面形はやや歪んだ楕円形、断面形は浅い皿状を呈している。長軸は約90cm、深さは約30cmを測る。埋土は大小の礫混じりの黒色シルト質土（Ⅲ層土）で構成されている。時期については出土遺物が無く、詳細は不明である。

<柱穴状土坑> I C区2aグリッド、V層上面より4基を検出した。平面形はほぼ円形を呈しており、規模は直径30～50cm、深さ30～45cmを測る。埋土は中小の礫を含む黒褐色シルト土（Ⅲ層土）で構成される。埋土内から弥生時代の土器片が出土しており、その時期に属するものと思われる。

<旧河道跡> 調査区北側のほぼ全域にわたり、西へ向かって流れていた跡が確認された旧河道跡である。確認できた範囲では幅は4～17m、深さは現表土から最大で1mである。中央部は河道が蛇行した跡が見られ、それにより削平を受け河床が深くなっている部分に中礫火山灰が堆積している。このことなどから、この河道の時期については縄文前期以前に属すると思われる。

(2) 出土遺物

土器・石器など合わせて大コンテナ5箱分を出土した。大半が調査区北側にある旧河道跡の範囲内から出土し、層位はⅡ層下～Ⅲ層上に集中している。

<土器> 時期は弥生時代である。多くが摩滅しており破片での出土であったため、遺構内外を問わず一括して扱い、形状や文様などの特徴から、次のように分類した。

1. 弥生時代中期前半に属すると思われるもの（1～4、9～35、46、48、49、52～57、61～64）

変形工字文（斜行する2条の沈線が貼り瘤で交わり、底辺に沿って沈線が加えられている）を持つもの（9～11）、変形工字文（平行する沈線と斜行する沈線による）を持つものとそれに類するもの（12、63、64）、波状口縁部で平行する沈線を持つもの（13）、波状口縁でボタン状貼付突起を持つもの（14、15）、波状口縁で突起部に円形刺突文を持つもの（16）、平口縁で平行する沈線文を持つもの（17、18）、波状口縁でそれに沿った沈線を持つもの（3、21、22）、波状口縁で無文のもの（1、2、19、20）、平口縁で頸部にナデ・区画文が施されているもの（4、23、24、25、26）、口縁と頸部に平行する沈線が施されているもの（28～35）、全体に施文が施されているもの（27、52～56、61、62）、脚部で上位に沈線が施されて

いるもの(48、49)、穿孔を持つもの(46)、網代痕を持つもの(56、57)がある。

多くが大洞A'式の特徴を残しており、それに後続する谷起鳥式土器に類するものであると思われる。

2. 弥生時代中期後半に属すると思われるもの(5~8、36~41、47、50、51、65)

変形工字文(より直線的な沈線を施し、平行する沈線と斜行する沈線、それを繋ぐ沈線によるもの)と磨消縄文を施しているもの(8、36~39)、沈線により三角状もしくは円状に区画され、磨消縄文を施しているもの(5~7、40、41、47、65)、脚部で上位に平行する沈線と波状文が施されているもの(50)、全体に地文のみが施されているもの(51)がある。

これらは橋本式土器、もしくは大釜式土器に類するものと思われる。

3. 弥生時代後期に属すると思われるもの(42~45、58、66~70)

沈線による山形文もしくは連弧文に近いものを持つもの(42~44、70)、刺突文を持つもの(45、66~68)、燃糸文を持つもの(58、69)がある。48は交互刺突文を持つ。

これらは常盤式土器、もしくは一本松式土器に類するものと思われる。

4. 土師器に属すると思われるもの(59、60、71)

59はナデによる調整が施されている。59・60は底部側面に円形刺突を持つ。71は全体に赤みが掛っている。いずれも酸化炎焼成であると思われる。

なお、72は口縁部の注口と思われるが、詳細は不明である。

<土製品> 73は原体RLにより全体に施文が施されており、残存している部分の形状が球形に近い形をしている。実見していただいたおり、土偶の肩部分ではないかという助言を得たが、詳細は不明である。

<石器> 全部で20点が出土している。磨石が4点(74、77、78、80)、石棒が1点(79)、石鏃が3点(81~83)、剥片が12点である。石質は多くが頁岩で、産地は北上山地に集中している。74は1号住居跡からの出土で、両面が使用されている。77、78、80は旧河道跡からの出土で、78はほぼ全面が、77、80は両面が使用されている。82、83の石質は赤色頁岩である。

なお、94、95は石英の剥片、96は石英の原石と思われるものであり、97、98はめのうの剥片である。これらについては、実測した図版のみを掲載した。75、76、83は写真不明のため、図版のみを掲載した。

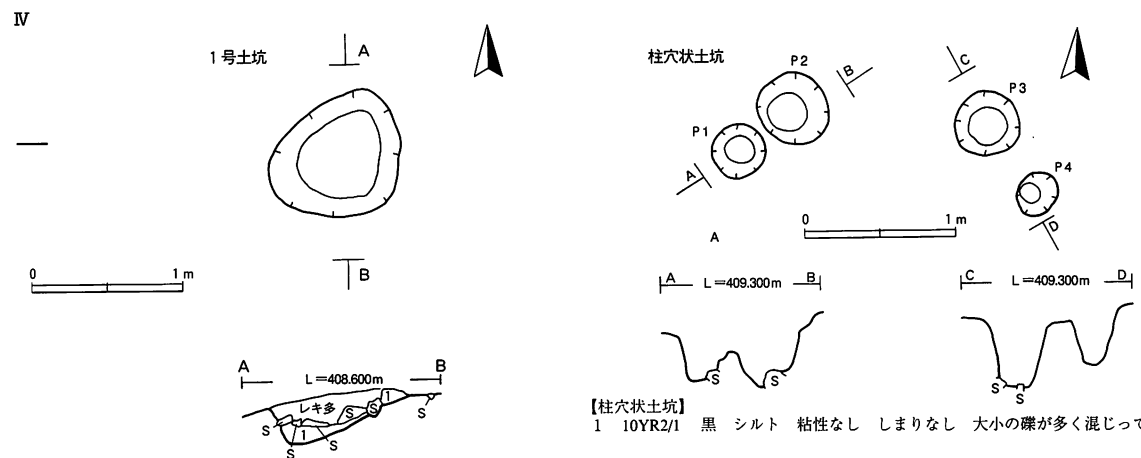
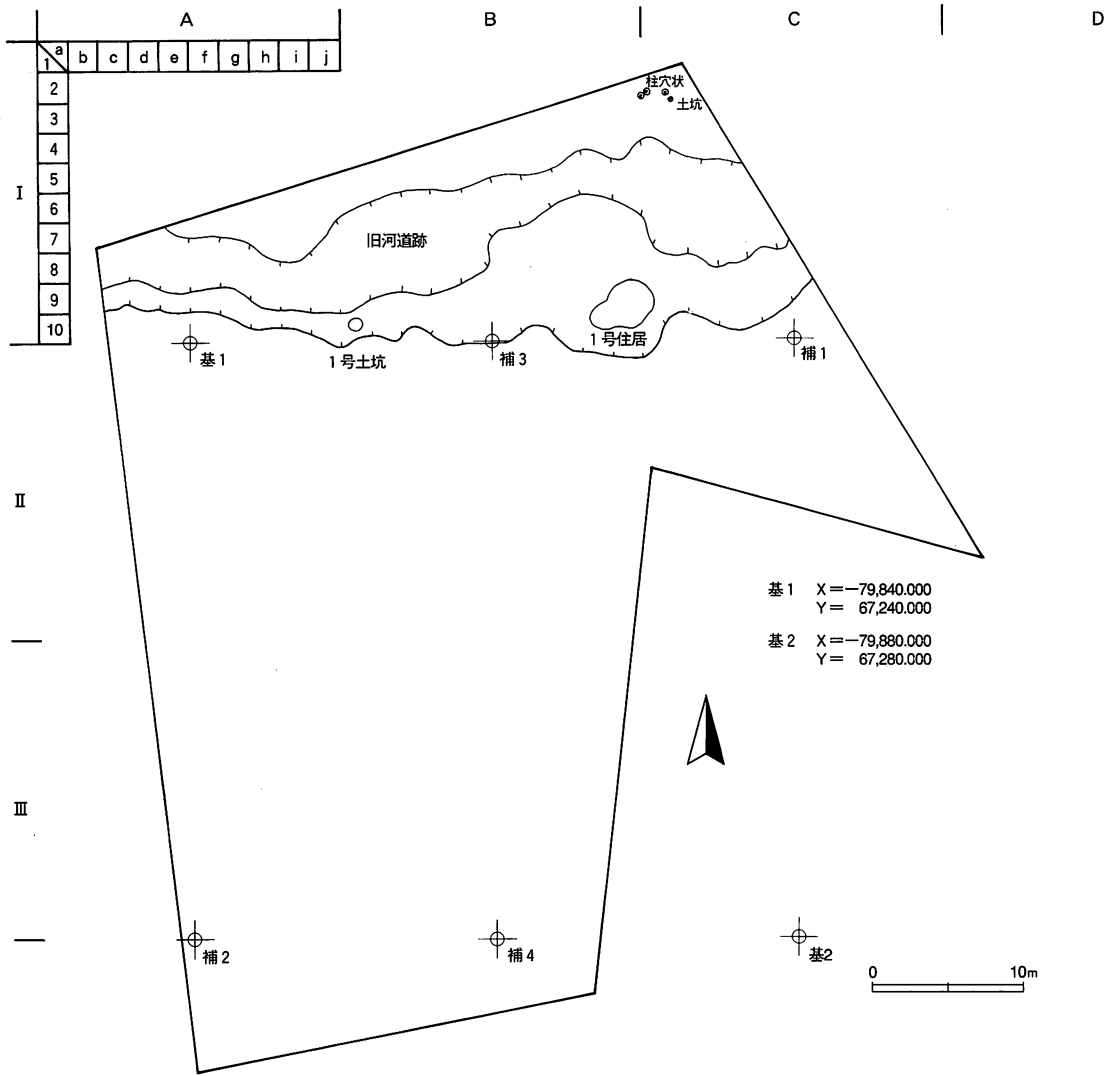
5. まとめ

今回の調査では、弥生時代を中心とする遺構・遺物が検出され、当時の生活痕跡などを伺うことができた。住居跡は1棟しか検出されなかったが、地形的な状況などから単独で存在していたとは考えにくく、昭和30年代もしくはそれ以前における調査区周辺の水田や道路整備の段階で、削平を受けたところもあるのではないだろうかと思われる。また、出土した遺物のほとんどが旧河道跡内からであることから、調査区東側に延びる旧河道の上流(猫川左岸)地域にも、同様に集落跡の存在が想定される。また、調査区北東端で検出された柱穴状土坑については、今回調査できなかった北側にも同様の遺構が存在する可能性がある。

遺物については、破片での出土がほとんどのため一部のみの掲載にとどまらざるを得なかった。出土している遺物の時期は、弥生時代中期前半を主体としつつ全般にわたっている。また、土師器と思われる破片が出土しているが、出土地点が水田客土のすぐ下であるため、流れ込みの遺物である可能性がある。

今回は遺跡の性格などの詳細を明らかにすることができなかったが、この地域の歴史を探る上での資料の一端を提供できたものと思われる。今後周辺地域の調査が進むにつれて、本遺跡の性格なども明らかになってくるとと思われる。

なお、宇南田I遺跡に関わる報告は、これをもって全てとする。

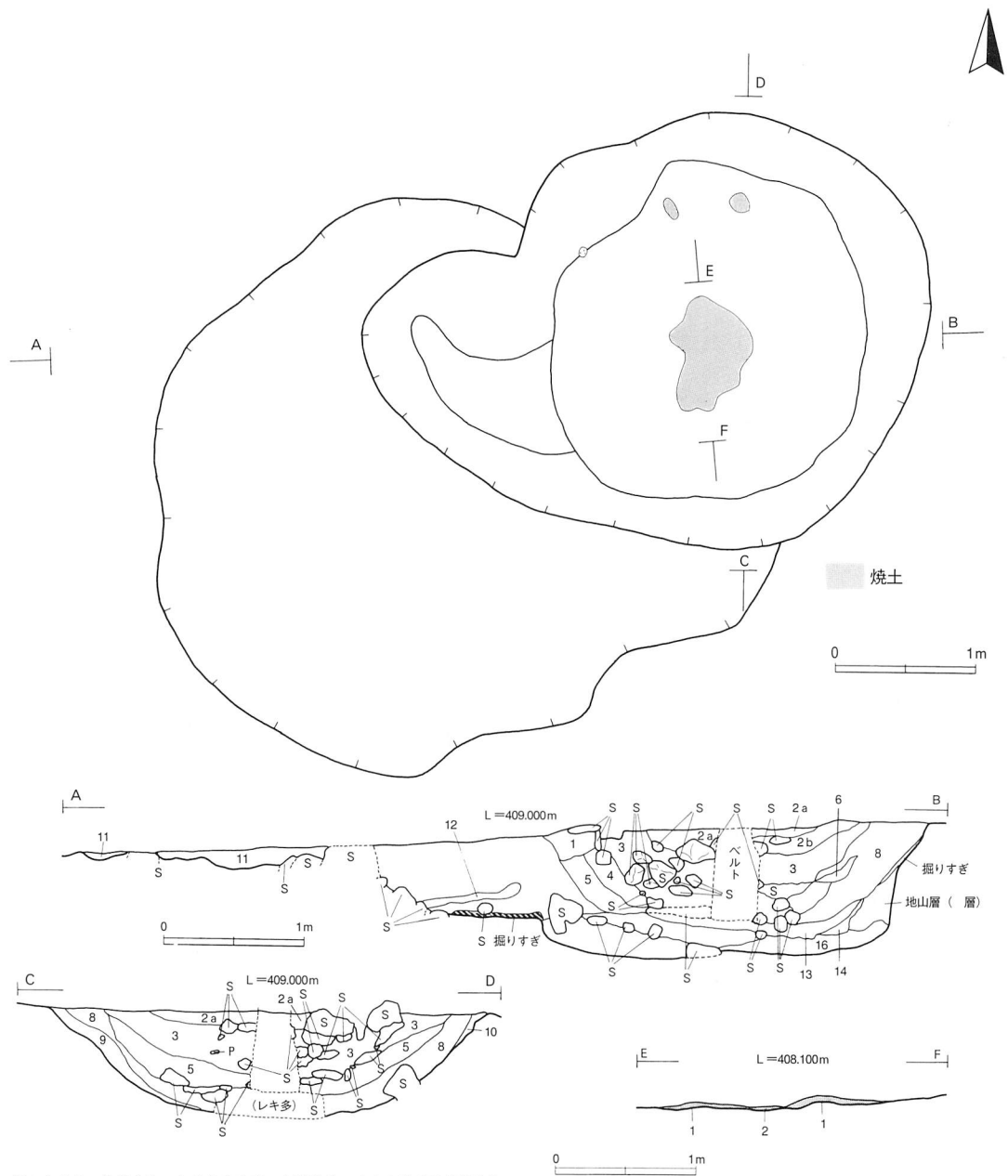


【1号土坑】
 1 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性やや有 しまりなし 地山 (V層) 土をまばらに含む。ほぼ単一層。

【柱穴状土坑】
 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性なし しまりなし 大小の礫が多く混じっている。

No	深さcm	底面標高m	出土遺物
P01	30.0	408.67	
P02	40.9	408.62	土器片
P03	40.7	408.60	
P04	35.1	408.75	

第1図 宇南田I遺跡遺構配置図、1号土坑、柱穴状土坑



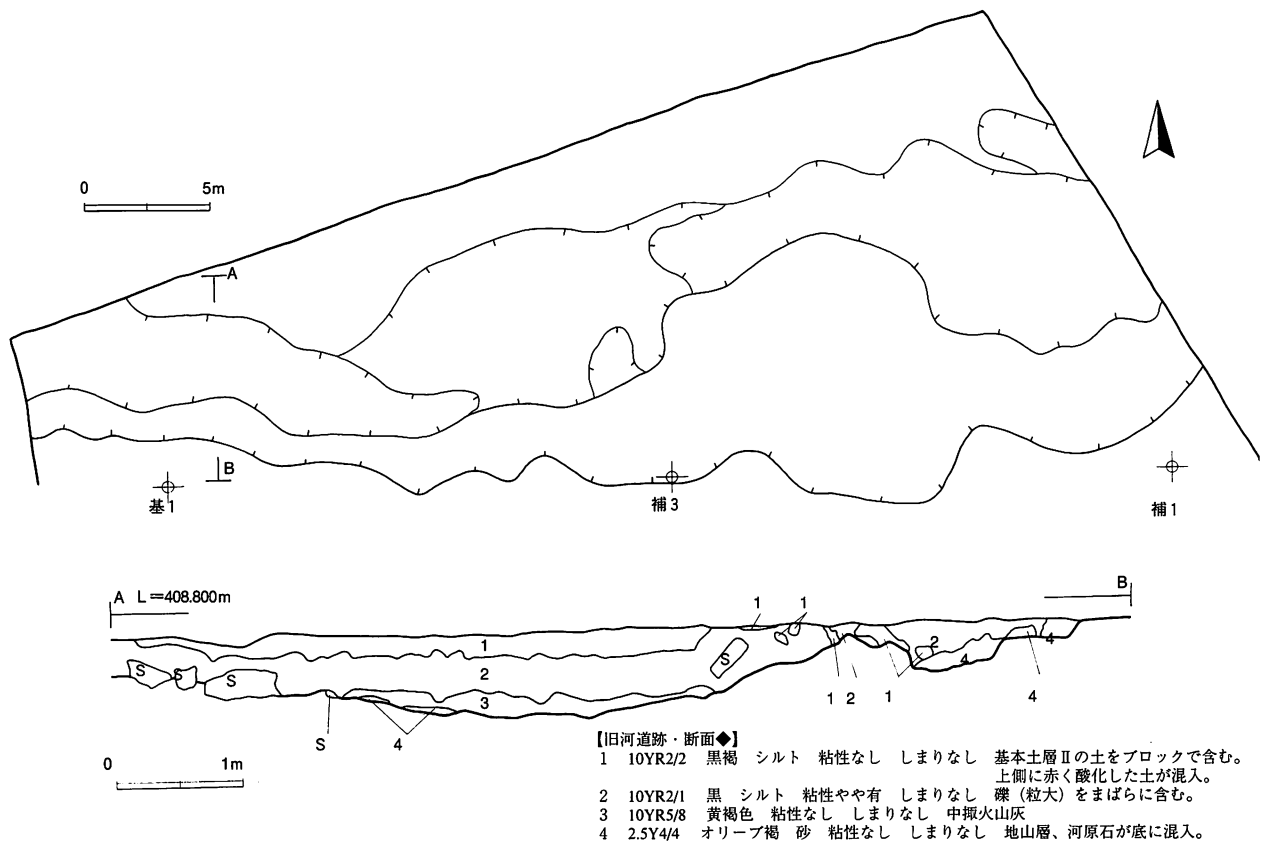
【1号住居】

- 1 10YR2/1 黒 シルト 粘性なし しまりやや有 木根混入、大小の礫3%未満含む。
- 2a 10YR 2/1 黒 シルト 粘性なし しまりやや有 小礫(河原石)3%未満含む。
- 2b 10YR 2/1 黒 シルト 粘性なし しまりやや有 中小礫(河原石)10~20%含む。
- 3 10YR2/1 黒 シルト 粘性なし しまりなし
人頭大~径2~3cmの礫(河原石)80%以上混入、土器片含む。
- 4 10YR2/1 黒 シルト 粘性なし しまりなし 径2~3cmの礫(河原石)5~10%混入。
- 5 10YR2/1黒と10YR 3/3暗褐の混合土 粘性なし しまりなし
径3cmの礫(河原石)10~20%混入炭少量(2~3%)含む。砂混入。10YR3/1 黒褐色土も混入。
- 6 10YR2/1 黒 シルト 粘性なし しまりやや有 炭化物40%混入。
- 7 10YR2/1 黒 シルト 粘性なし しまりやや有
焼土ブロック20%混入。河原石5~10%混入。
- 8 10YR2/1~1.7/1 黒 シルト 粘性なし しまりやや有 大小礫(河原石)少量混入。
- 9 10YR3/1 黒褐 シルト 粘性なし しまりなし
地山(V層)小ブロック5%含む。小礫(河原石)少量混入。
- 10 10YR2/1~1.7/1 黒 シルト 粘性なし しまりやや有
地山(V層)小ブロック5~10%含む。
- 11 10YR2/1~1.7/1 黒 シルト 粘性なし しまりなし
径2~3cmの礫(河原石)少量混入。木根混入。
- 12 10YR2/1~1.7/1 黒 シルト 粘性なし しまりなし
明褐色シルト(10YR6/6)土30~40%混入。
- 13 10YR2/1 黒 シルト 粘性やや有 しまりなし
炭5~10%、焼土粒1~3%含。モソモソしている。
- 14 10YR2/2 黒褐 シルト 粘性なし しまりなし
地山(V層)ブロック混入。中振5%含。人為。
- 15 10YR3/1 黒褐 シルト 粘性なし しまりなし
こぶし大の礫多量に含む。炭3~5%含む。人為。
- 16 2.5Y3/1 黒褐 シルト 粘性なし しまりなし
地山(V層)の小粒・10YR2/1黒シルト・砂との混合土。焼土粒微量、長2~5cmの炭5~10%、径2cm程度の河原石を多量に含む。

【1号住居・炉断面】

- 1 7.5YR4/4 褐色 焼土 粘性ややあり しまり弱い 炭5~10%含む。
やや柔らかい。上部では7.5YR4/6褐色焼土小粒5~10%含む。
- 2 10YR4/1 褐灰色 シルト 粘性ややあり しまりなし 炭30%含む。

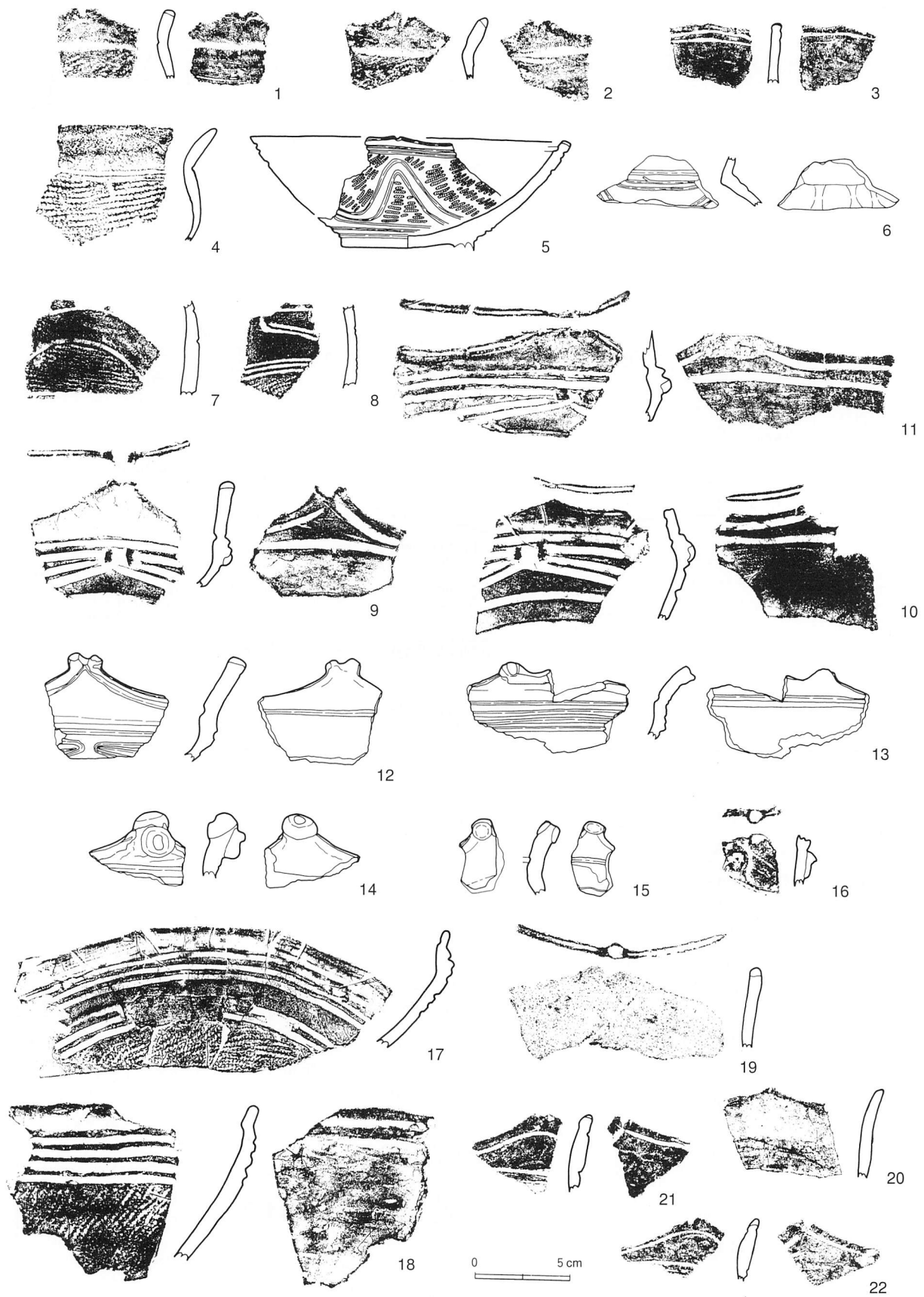
第2図 宇南田I遺跡1号住居跡



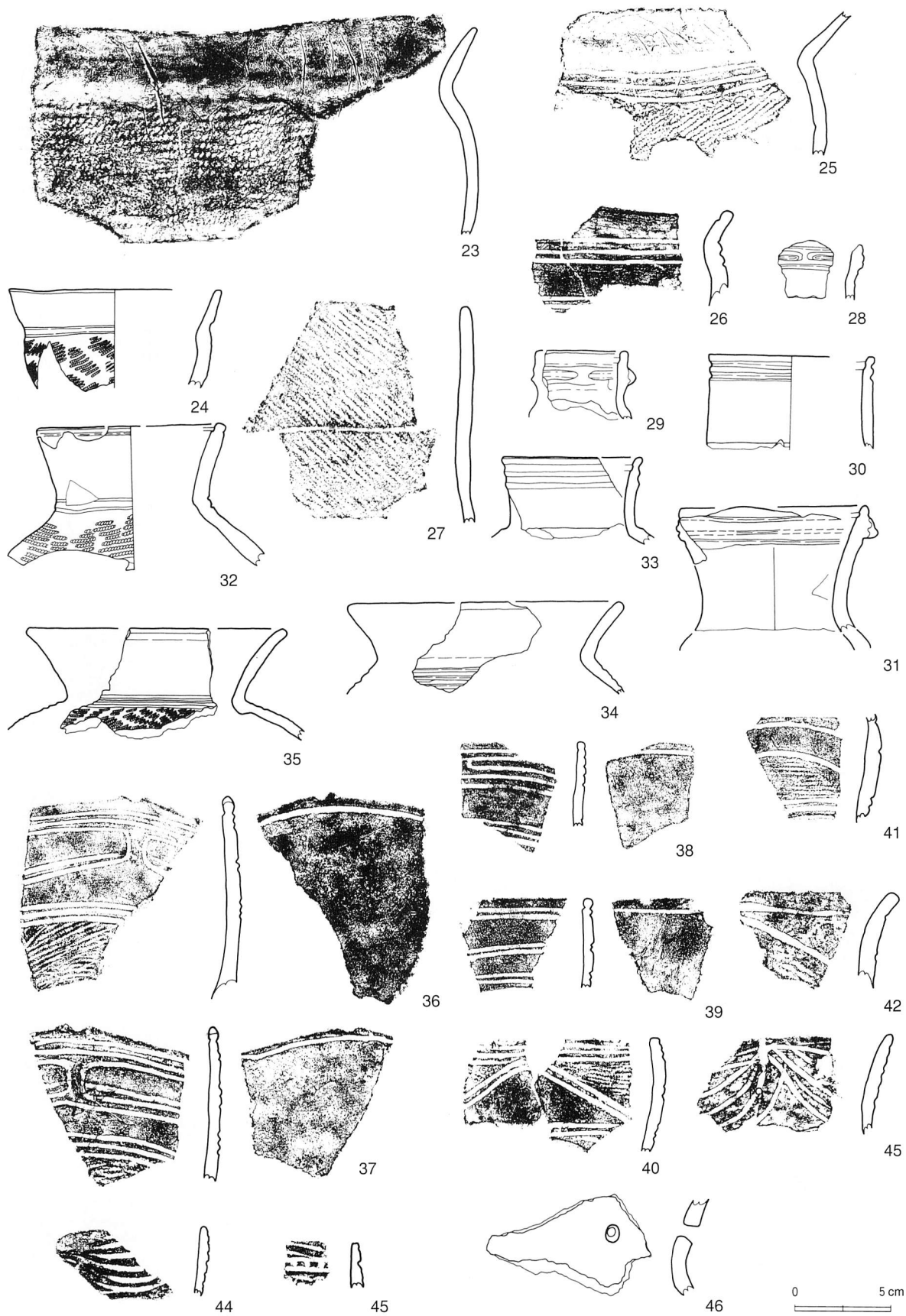
第3図 宇南田 I 遺跡旧河道跡 (平面・断面)

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	小野寺正之							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019(638)9001							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 〇.〇	東経 〇.〇	調査期間	調査面積	調査原因
宇南田 I 遺跡	いわてけんとうのしかみ 岩手県遠野市上 郷町佐比内7 ちわり 地割14ほか	03201	ME66- 1357	39度 16分 40秒	141度 36分 45秒	20000831~ 20001031	2,580㎡	「ほ場整備 (担い手育成 区画整理型) 猫川左岸地 区」に伴う緊 急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
宇南田 I 遺跡	散布地	弥生時代	竪穴住居跡 1棟 土坑 1基 柱穴状土坑 4基 旧河道跡 1箇所		弥生土器 石器 剥片石器			



第4図 宇南田I遺跡出土遺物（土器1）



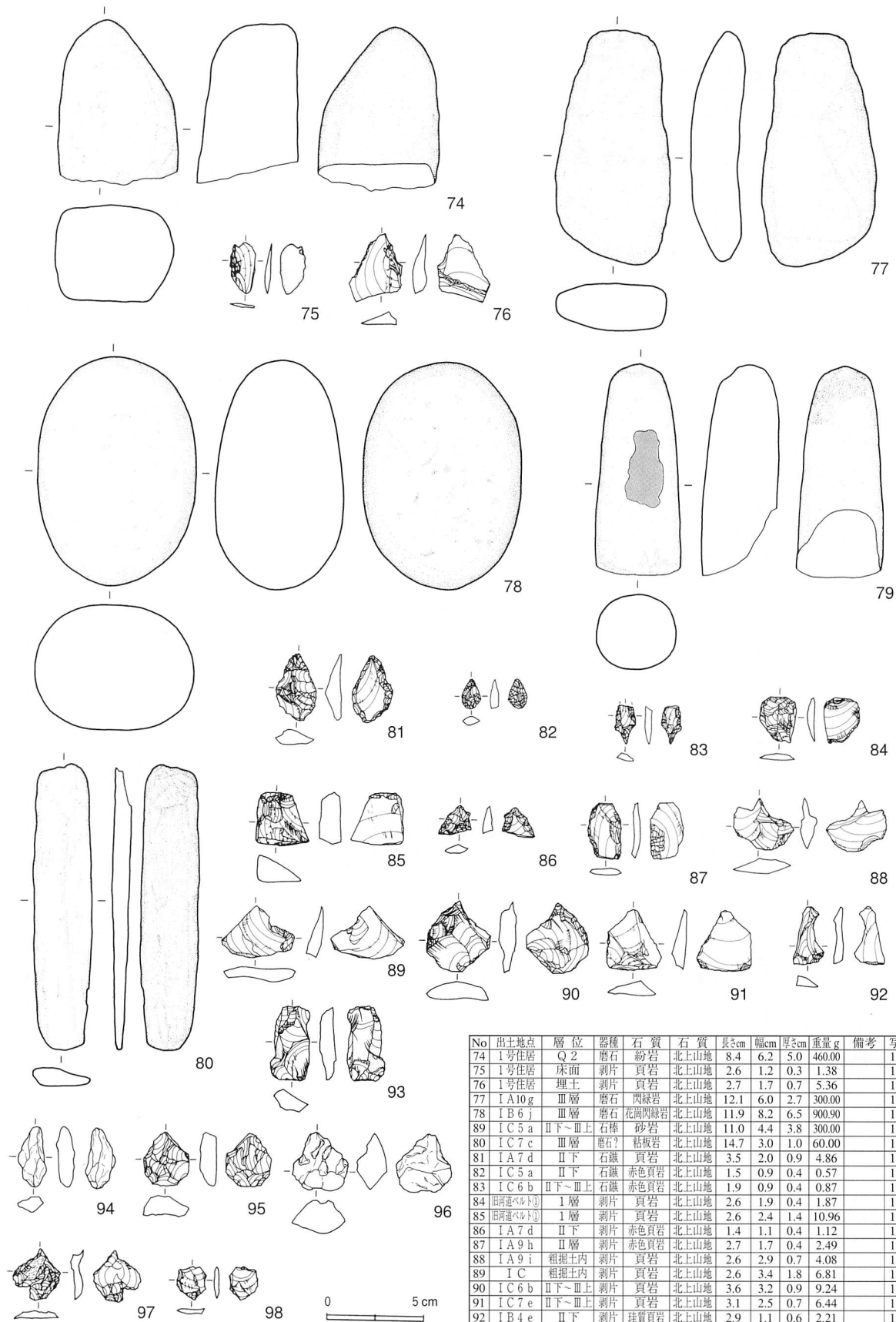
第5図 宇南田 I 遺跡出土遺物 (土器 2)



第6図 宇南田I遺跡出土遺物（土器3）

宇南田 I 遺跡出土遺物（土器）観察表

No	分類	出土地点	層位	器種	原体	部位	外 面	内 面	写真
1	1	1号住	Q4	甕		口縁部	山形口縁	沈線	1/3
2	1	1号住	Q4	甕		口縁部	山形口縁	沈線	1/3
3	1	1号住	Q4	壺		口縁部	弱い波状口縁、平行する2条の沈線	口唇部に平行する沈線	1/3
4	1	1号住	Q3上	甕	LR	口縁部	頸部ナデ、沈線	ナデ	1/3
5	2	1号住	II~III	台付高坏	LR	口縁~胴部	弱い波状口縁、上位・下位に平行する2条の沈線、斜行沈線、磨消縄文	沈線	1/4
6	2	1号住	Q3上	壺?		頸部	頸部に平行する2条の沈線、斜行沈線		1/3
7	2	1号住	Q1	壺?	LR	胴部	2条の沈線により円形区画、磨消縄文		1/3
8	2	1号住	Q4上	鉢	LR	胴部	変形工字文、磨消縄文	沈線	1/3
9	1	IC6b	III上	鉢		口縁部	口縁突起を持つ波状口縁、変形工字文	2条の沈線	1/3
10	1	IB7j	III	鉢		口縁部	波状口縁、変形工字文	2条の沈線	1/3
11	1	IC6b	III上	鉢		口縁部	波状口縁、変形工字文	2条の沈線	1/3
12	1	IC3b	V	鉢		口縁部	口縁突起を持つ波状口縁、変形工字文	沈線	1/3
13	1	IB5i	III上	甕		口縁部	口縁突起を持つ波状口縁、平行する3条の沈線	沈線	1/3
14	1	IC6d	II下~III上	高坏?		口縁部	ボタン状貼付突起を持つ波状口縁	ボタン状貼付突起	1/3
15	1	IC7d	III	高坏?		口縁部	ボタン状貼付突起を持つ波状口縁	ボタン状貼付突起	1/2
16	1	IB3h	III上	鉢		口縁部	表面と口唇部に円形刺突		1/2
17	1	IC7b	II下~III上	浅鉢	LR	口縁部	平行する沈線、磨消縄文	沈線、ナデ	1/4
18	1	IC8d	I~II	鉢	RL	口縁部	平行する沈線、磨消縄文	口縁に平行する隆体	1/4
19	1	IA7f	II下~III上	甕		口縁部	山形口縁		1/3
20	1	IB6j	III上	甕		口縁部	弱い山形口縁	ナデ	1/3
21	1	IB7j	II下~III上	鉢		口縁部	山形口縁、2条の沈線	口縁に平行する沈線	1/3
22	1	IC5a	II下~III上	鉢		口縁部	山形口縁、2条の沈線	口縁に平行する沈線	1/3
23	1	IC7d	III	深鉢	LR	口縁部	頸部ナデ、磨消縄文	ナデ	1/4
24	1	IB5j	III上	鉢	LR	口縁部	沈線、磨消縄文	ナデ	1/3
25	1	IC4c	III上	甕	LR	口縁部	頸部に平行する沈線、磨消縄文	ナデ	1/4
26	1	IA7h	II下~III上	鉢		口縁部	弱い波状口縁、頸部・胴部に平行する沈線	口縁に平行する沈線、ナデ	1/3
27	1	IA7f	III	深鉢	RL	口縁部	磨消縄文		1/4
28	1	IB9j	III上	壺		口縁部	口縁に平行する沈線を突起により区画		1/2
29	1	IB5b	IV上	壺		口縁部	口縁に平行する沈線を突起により区画	口縁に平行する沈線	1/3
30	1	IB7c	II下~III上	壺		口縁部	口縁に平行する2条の沈線	口縁に平行する沈線、ナデ	1/3
31	1	IC	II下~III上	壺		口縁部	口縁に平行する隆帯と沈線、隆体内にも沈線		1/3
32	1	IC7a	II下~III上	壺	LR	口縁部	弱い波状口縁、口縁・頸部に平行する沈線、磨消縄文	口縁に平行する沈線、ナデ	1/4
33	1	遺構外	表採III	壺		口縁部	口縁・頸部に平行する沈線	口縁に平行する沈線、ナデ	1/3
34	1	IC4c	III上	壺		口縁部	頸部に平行する沈線	ナデ	1/3
35	1	IB9b	II下~III上	壺	LR	口縁部	頸部に平行する沈線、磨消縄文		1/3
36	2	IC7b	II下~III上	高坏?	LR	口縁部	弱い山形口縁、変形工字文、磨消縄文	口縁に平行する沈線、ナデ	1/4
37	2	IC8b	II下~III上	高坏?	RL	口縁部	弱い山形口縁、変形工字文、磨消縄文	口縁に平行する沈線、ナデ	1/3
38	2	IB5j	II下	鉢		口縁部	変形工字文	口縁に平行する沈線、ナデ	1/3
39	2	IC8c	II下~III上	鉢		口縁部	平行する沈線、やや弧を描く沈線	口縁に平行する沈線、ナデ	1/3
40	2	IC6b	III上	壺?	LR	口縁部	平行する沈線と斜行する沈線により円形に区画、磨消縄文		1/3
41	2	IC7b	II下~III上	鉢?		口縁部	2条の沈線により円形区画、磨消縄文		1/3
42	3	IB6i	II下~III上	深鉢?	LR	口縁部	口縁に平行する沈線と斜行する沈線で山形に区画、磨消縄文		1/3
43	3	IC7c	II下	鉢		口縁部	弱い弧を描く沈線が連続し、交叉する		1/3
44	3	IC7c	III	鉢?		口縁部	弱い弧を描く沈線が連続する		1/3
45	3	IB5b	III	鉢?		口縁部	連続する刺突文		1/2
46	1	IC7d	III	甕?		頸部	穿孔		1/3
47	1	IB7a	II下~III上	壺?	LR	頸部	平行する沈線と円形区画、磨消縄文		1/3
48	1	IB6f	II下~III上	台付高坏		脚部	平行する2条の沈線	ナデ	1/3
49	1	IA7h	II下~III上	台付高坏		脚部	平行する沈線	ナデ	1/3
50	2	IC6b	III中	台付高坏		脚部	平行する沈線と波状文	ナデ	1/3
51	2	IA7g	III上	台付高坏	LR	脚部	全体に施文	ナデ	1/3
52	1	IC7a	III上	深鉢	LR	底部	全体に施文、弱い痕?		1/4
53	1	IC6b	III上	浅鉢	LR	底部	全体に施文		1/4
54	1	IC4c	II下~III上	鉢	LR	底部	全体に施文		1/4
55	1	IA9h	III	鉢	LR	底部	全体に施文		1/3
56	1	IC8c	III中	鉢	RL	底部	網代痕		1/3
57	1	IA9j	III上	鉢		底部	網代痕		1/3
58	3	IB9f	III下	鉢	RL	底部	弱い再調整?		1/3
59	4	IC8c	III	甕?		底部	ナデ、円形刺突		1/3
60	4	IC5d	III	坏?		底部	円形刺突		1/2
61	1	IB4g	II下	壺?	LR	胴部	沈線、磨消縄文	ナデ	1/3
62	1	IB6b	III~IV	深鉢?	LR	胴部	沈線、磨消縄文	ナデ	1/3
63	1	IC6b	III上	鉢?	LR	胴部	変形工字文、磨消縄文		1/3
64	1	IC7b	II下~III上	鉢?		胴部	変形工字文		1/3
65	2	IB6e	III中~下	壺	LR	胴部	沈線による円形区画文、磨消縄文		1/3
66	3	IC5b	III	深鉢	LR	胴部	連続する刺突文、磨消縄文	ナデ	1/4
67	3	IB9b	II下~III上	鉢?		胴部	交叉刺突文		1/3
68	3	IC3b	III中~下	壺?	LR	胴部	沈線による区画文の内部に、連続する刻目文と刺突文、磨消縄文、貼付突起		1/3
69	3	IA7j	III上	甕?	RL?	胴部	交叉する擦糸文		1/3
70	3	IC6b	III上	高坏?		胴部	弱い弧を描く沈線が連続し、交叉する		1/3
71	4	IA9h	III	甕		胴部	一部に煤が付着		1/3
72	不明	IB7b	II下~III上	不明		口縁部?	孔を持つ		1/1
73	不明	IB7e	III	土偶?		肩?	RLにより施文		1/1



No	出土地点	層位	器種	石質	石質	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	写真
74	1号住居	Q 2	磨石	粉岩	北上山地	8.4	6.2	5.0	460.00		1/3
75	1号住居	床面	剥片	真岩	北上山地	2.6	1.2	0.3	1.38		1/1
76	1号住居	埋土	剥片	真岩	北上山地	2.7	1.7	0.7	5.36		1/1
77	IA10g	Ⅲ層	磨石	閃緑岩	北上山地	12.1	6.0	2.7	300.00		1/3
78	IB6j	Ⅲ層	磨石	花崗閃緑岩	北上山地	11.9	8.2	6.5	900.90		1/3
89	IC5a	Ⅱ下~Ⅲ上	石核	砂岩	北上山地	11.0	4.4	3.8	300.00		1/3
80	IC7c	Ⅲ層	磨石?	粘板岩	北上山地	14.7	3.0	1.0	60.00		1/3
81	IA7d	Ⅱ下	石核	真岩	北上山地	3.5	2.0	0.9	4.86		1/1
82	IC5a	Ⅱ下	石核	赤色真岩	北上山地	1.5	0.9	0.4	0.57		1/1
83	IC6b	Ⅱ下~Ⅲ上	石核	赤色真岩	北上山地	1.9	0.9	0.4	0.87		1/1
84	田河邊6cト①	1層	剥片	真岩	北上山地	2.6	1.9	0.4	1.87		1/1
85	田河邊6cト②	1層	剥片	真岩	北上山地	2.6	2.4	1.4	10.96		1/1
86	IA7d	Ⅱ下	剥片	赤色真岩	北上山地	1.4	1.1	0.4	1.12		1/1
87	IA9h	Ⅱ層	剥片	赤色真岩	北上山地	2.7	1.7	0.4	2.49		1/1
88	IA9i	粗掘土内	剥片	真岩	北上山地	2.6	2.9	0.7	4.08		1/1
89	IC	粗掘土内	剥片	真岩	北上山地	2.6	3.4	1.8	6.81		1/1
90	IC6b	Ⅱ下~Ⅲ上	剥片	真岩	北上山地	3.6	3.2	0.9	9.24		1/1
91	IC7e	Ⅱ下~Ⅲ上	剥片	真岩	北上山地	3.1	2.5	0.7	6.44		1/1
92	IB4e	Ⅱ下	剥片	珪質真岩	北上山地	2.9	1.1	0.6	2.21		1/1
93	遺構外	表土	剥片	真岩	北上山地	3.9	1.7	0.9	7.69	ネコ山出土	1/1
94	IA7d	Ⅱ下	剥片	石英	北上山地	3.1	1.2	0.8	3.75		1/1
95	IA7d	Ⅱ下	剥片	石英	北上山地	2.7	2.3	1.0	6.91		1/1
96	IA7b~10h	Ⅱ下~Ⅲ上	原石?	石英	北上山地	2.9	2.7	1.7	12.57		1/1
97	田河邊6cト①	不明	剥片	めのう	産地不明	2.3	2.3	0.5	2.93		1/1
98	IC7a	Ⅲ層	剥片	めのう	産地不明	1.6	1.4	0.3	0.95		1/1

第6図 宇南田 I 遺跡出土遺物 (石器)



調査区遠景（西から）



調査区近景（上から）



調査前状況（西から）



基本土層



1号住居全景（北から）



1号住居断面（南から）

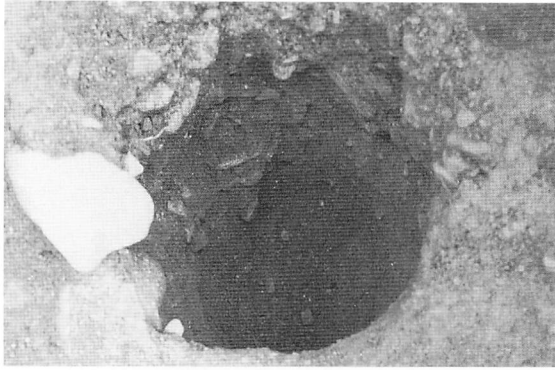


1号住居床面焼土

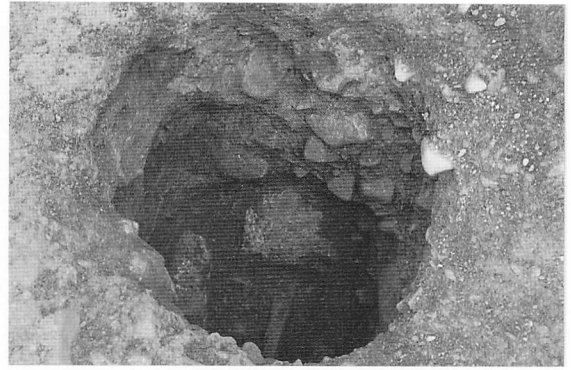


1号住居床面焼土断面

写真図版1 宇南田I遺跡調査状況、基本土層、1号住居跡



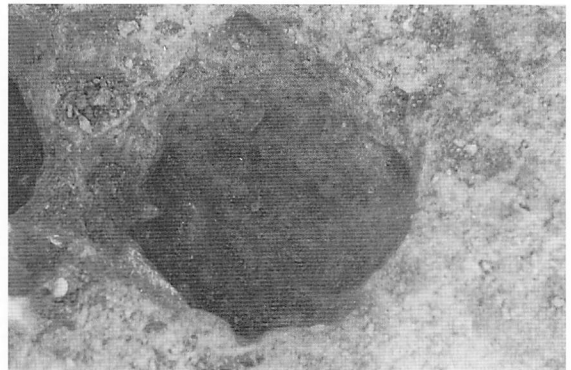
柱穴状土坑 P 1



柱穴状土坑 P 2



柱穴状土坑 P 3



柱穴状土坑 P 4



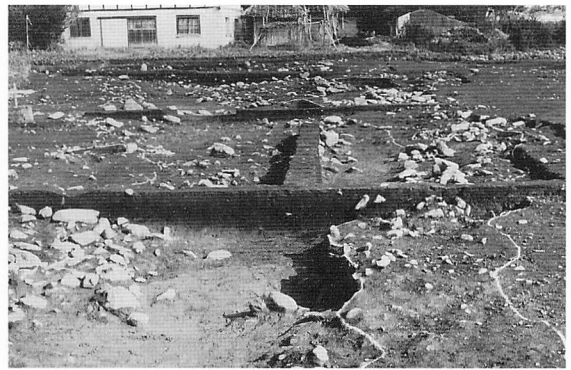
1号土坑全景



1号土坑断面

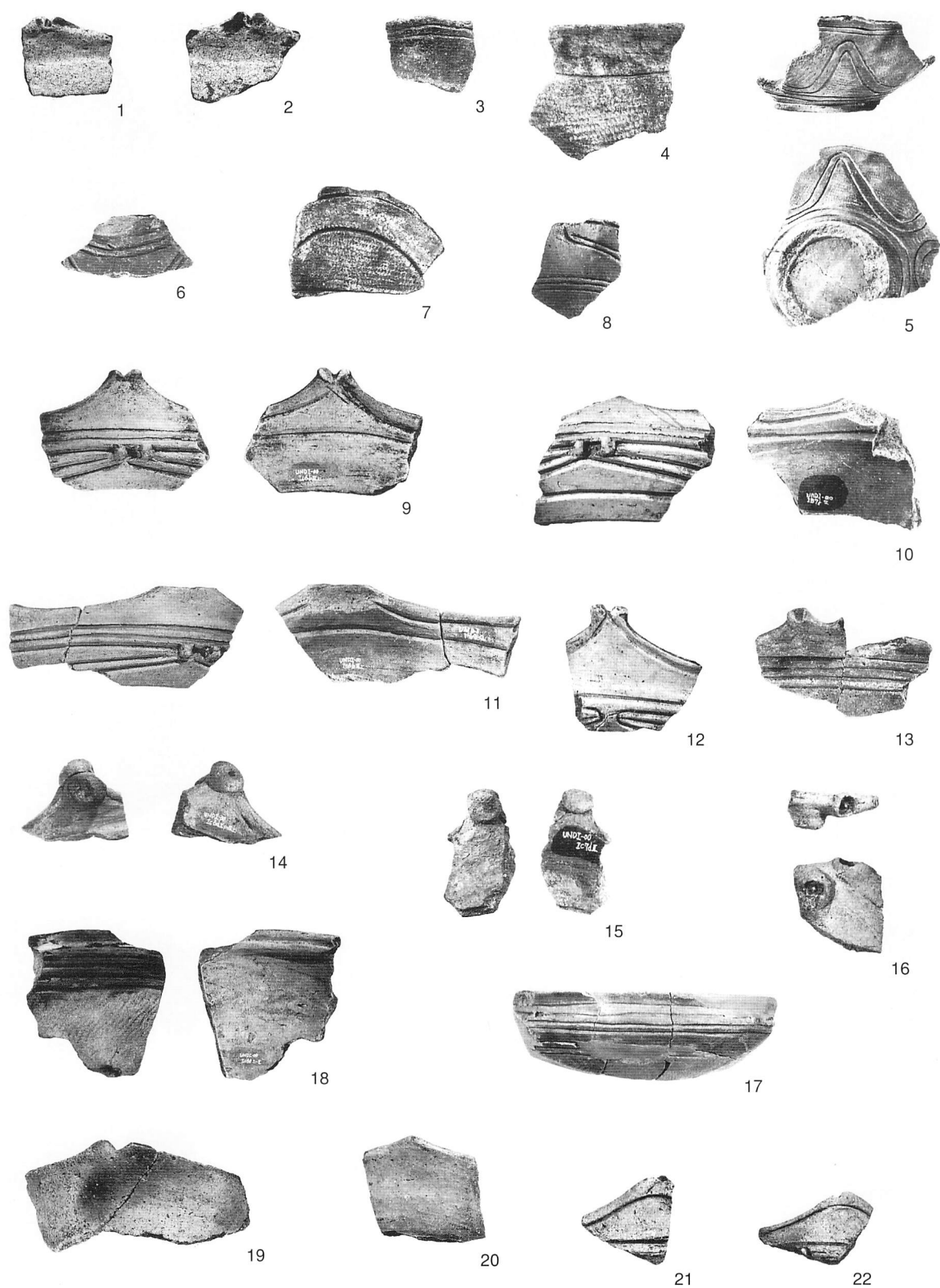


旧河道跡全景 (西から)

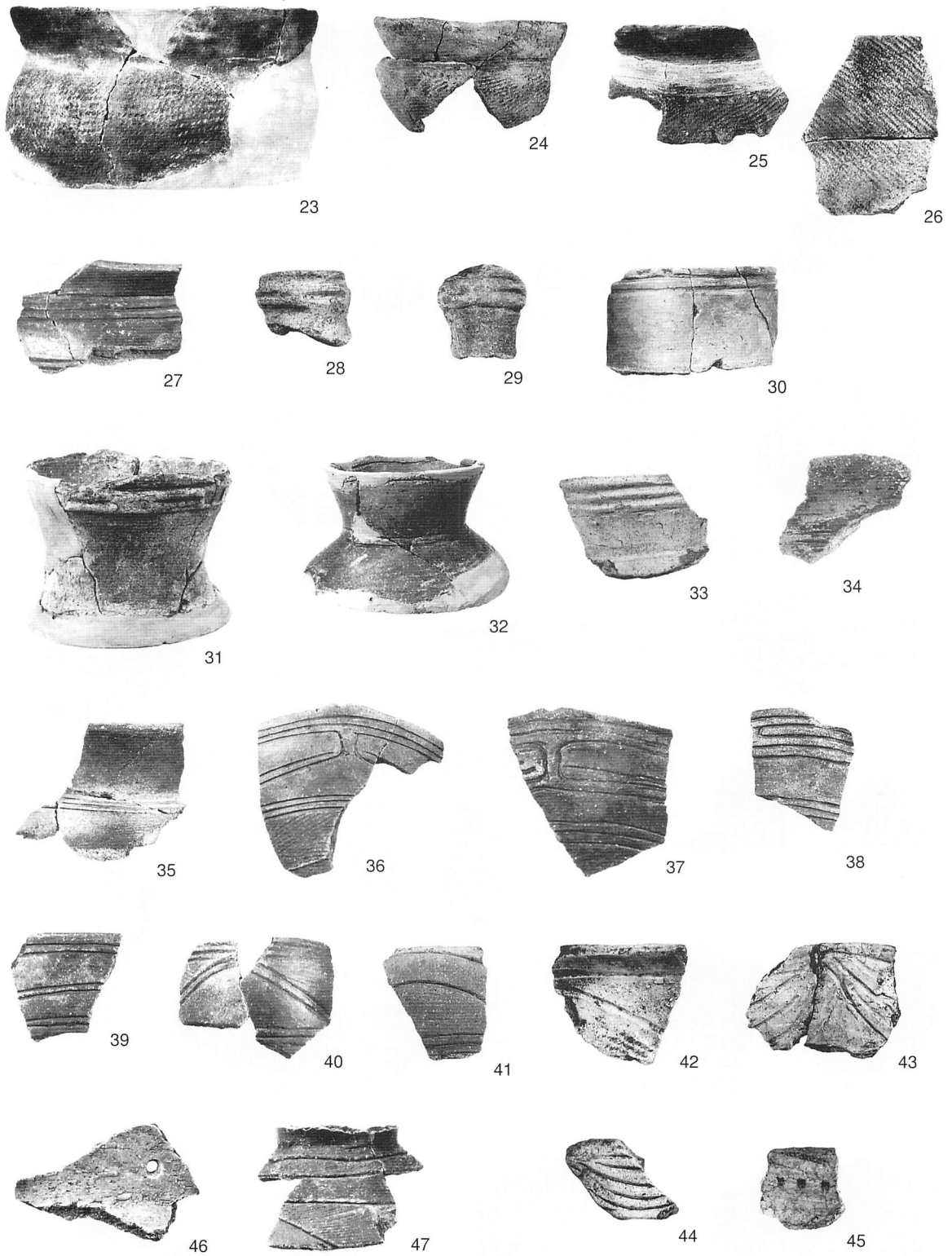


旧河道跡断面

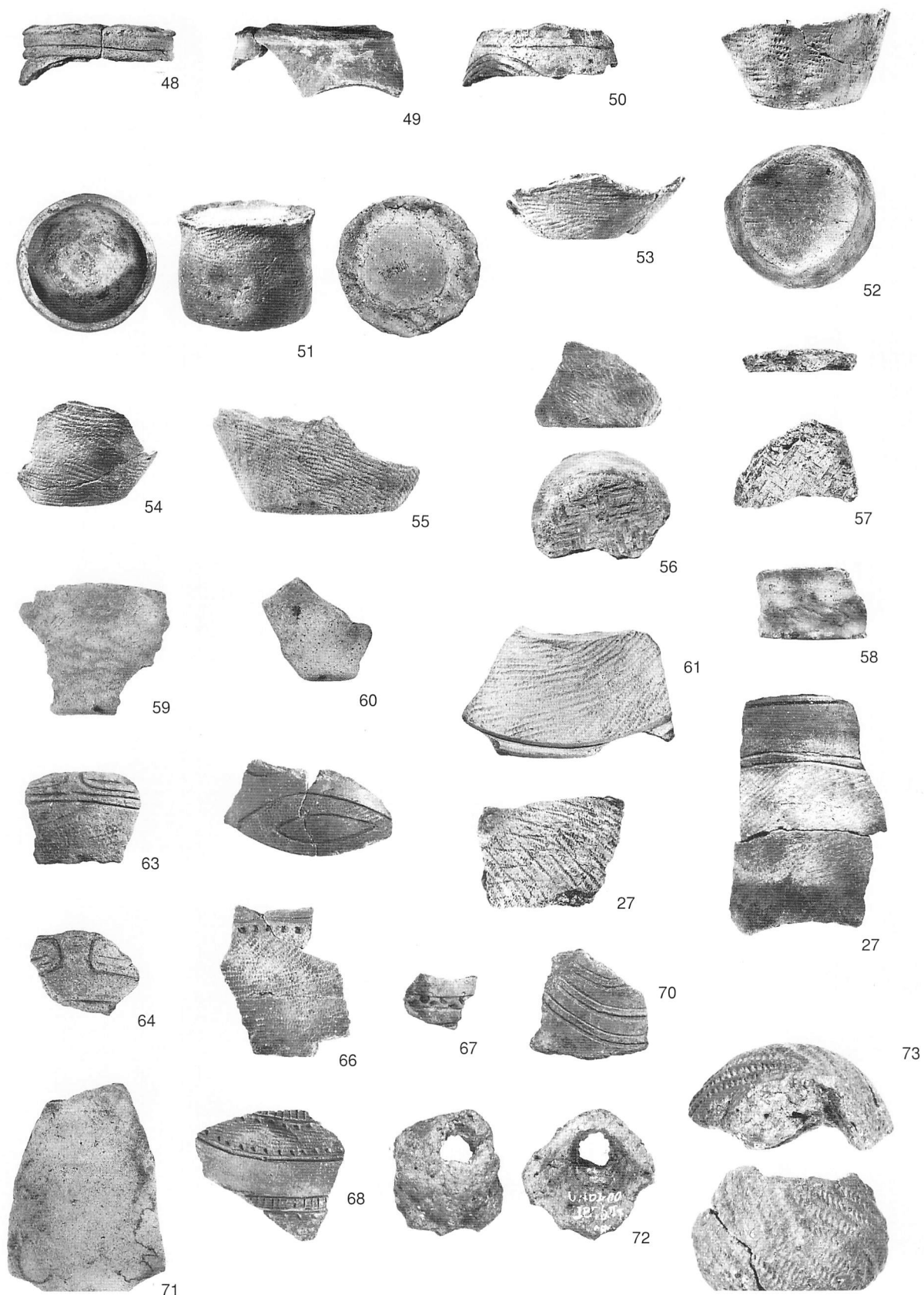
写真図版 2 宇南田 I 遺跡柱穴状土坑、1号土坑、旧河道跡



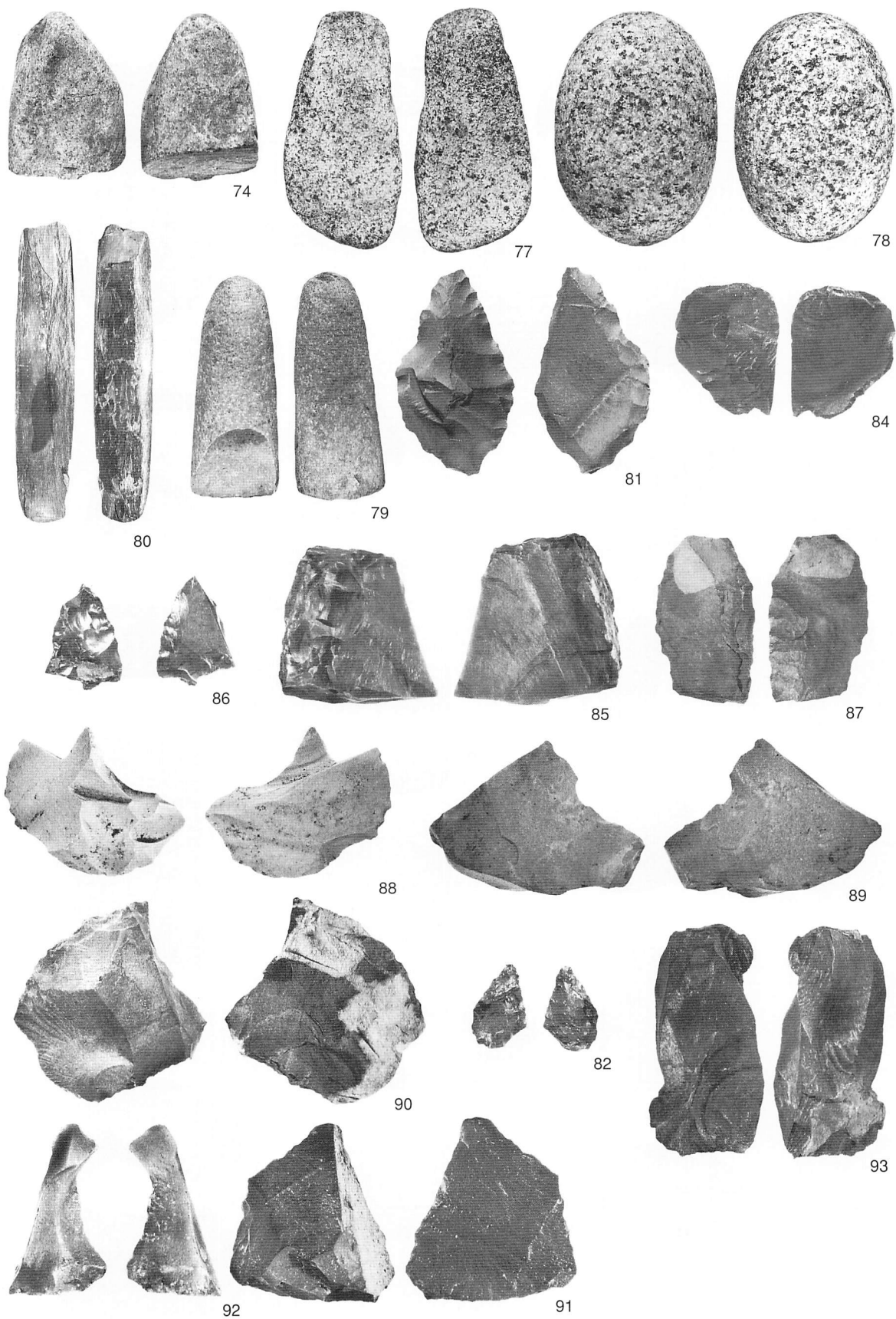
写真図版3 宇南田I遺跡出土遺物(土器1)



写真図版4 宇南田I遺跡出土遺物(土器2)



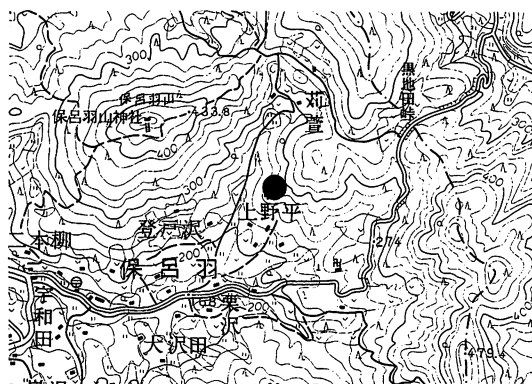
写真図版 5 宇南田 I 遺跡出土遺物 (土器 3)



写真図版 6 宇南田 I 遺跡出土遺物 (石器)

ようがいであと
(46) 要害館跡B遺跡

所在地 東磐井郡藤沢町保呂羽字上野平
183番地ほか
委託者 岩手県千厩地方振興局土木部
事業名 緊急地方道路整備事業
発掘調査期間 平成12年8月8日～9月19日
調査対象面積 3,897㎡
発掘調査面積 3,897㎡
遺跡番号・略号 OF22-1181・YGD B-00
調査担当者 長村克稔・菊池貴広
協力機関 藤沢町教育委員会



遺跡位置 1:50,000 千厩

1. 調査に至る経過

要害館B遺跡は「一級町道津谷川線苧萱地区緊急地方道路整備事業」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査することとなったものである。

当事業は、一級町道津谷川線苧萱地区において、現況1車線の道路を歩道付き2車線道路に拡張改良する道路改良事業である。事業者である岩手県千厩地方振興局土木部では、事業実施に先立ち岩手県教育委員会に対し、事業区域内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では、現地踏査により埋蔵文化財の存在を確認し、平成11年12月2日・3日の延べ2日間、埋蔵文化財の内容把握のため試掘調査を実施した。試掘の結果、中近世時代に属する城館跡等の遺構が発見されたことから工事着手に先立ち記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨、平成11年12月27日付け教文第974号により千厩地方振興局土木部に通知した。

通知を受けた千厩地方振興局土木部では、岩手県教育委員会からの平成12年度埋蔵文化財発掘調査に係る事業集約の問い合わせに対し、調査を実施して欲しい旨の回答をした。

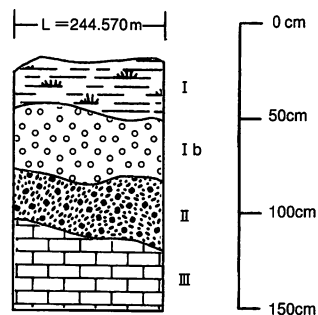
回答を受けた岩手県教育委員会は、千厩地方振興局に対し、平成12年3月6日付け教文第1220号「平成12年度埋蔵文化財発掘調査事業について」によって、平成12年度に発掘調査を実施し、実際の調査は、財団法人岩手県文化振興事業団が担当する旨を通知した。

2. 遺跡の立地

要害館跡B遺跡は、藤沢町役場の南東約3.7kmにあり、黄金山(482m)から南西に延びる尾根に立地している。標高は約240～260mで、調査開始前は山林及び畑地であった。

3. 基本土層

本遺跡の基本土層は次のI層・II層・III層である。I b層は盛土で、曲輪2の東側のみで確認された。その時の断面が第1図である。



第1図 柱状図

I層 暗褐色土(7.5YR3/4) 現表土、主に腐葉土である。粘性弱・しまり疎。層厚10～25cm。

(I b層) オリーブ褐色粘土(2.5Y4/4) 曲輪造成土(盛土)

II層 褐色粘土(10YR4/6) 検出面。ローム層。粘性強・しまり密。層厚25～70cm。

III層 オリーブ褐色粘土(2.5Y4/3) 石英礫を含むローム層。粘性強・しまり密。層厚不明。

4. 調査の概要

検出された遺構は、掘立柱建物跡4棟、曲輪3カ所、堀跡?(大溝)1条である。

<掘立柱建物跡> 掘立柱建物跡を、計4棟検出した。いずれも斜面を削平して造成した平場(曲輪)に立地する。

(1) 1号掘立柱建物跡

曲輪2の西側にあたるグリッドIV D14からIV E16に位置し、2号掘立柱建物跡と隣接する。5間×3間の建物で、平面形は長方形を呈する。II層上面で検出した。規模は桁行約9.5m、梁行約6mである。桁行の柱間寸法は、西側から2-2-1.5-1.5-2.5mである。梁行の柱間寸法は北側から1.8-2-2.2mである。柱穴の平面形は、ほぼ円形で径30～90cm、検出面からの深さは25～58cmである。軸方向は真北に対して12度西偏する南西-北東棟である。遺物はP6とP8の埋土から美濃産の灰釉陶器皿片2点が出土した。それぞれの遺物の製作年代は16世紀代と思われる。また、20基中4基に柱穴痕跡が確認された。径は12～24cmである。

(2) 2号掘立柱建物跡

曲輪2の中央部にあたるグリッドIV E11からIV E13に位置し、1号、3号掘立柱建物跡と隣接する。3間×2間の建物で、平面形は長方形を呈する。II層上面で検出した。規模は桁行約7.3m、梁行約4.2mである。桁行の柱間寸法は、西側から2.5-2.5-2.3mである。梁行の柱間寸法は北側から2.2-2.0mである。柱穴の平面形は、ほぼ円形で径25～80cm、検出面からの深さは15～63cmである。軸方向は真北に対して12度西偏する南西-北東棟である。遺物は出土しなかった。また14基中10基の柱穴痕跡が確認された。径は16～32cmである。

(3) 3号掘立柱建物跡

曲輪2の東側にあたるグリッドIV E8からIV E14に位置し、2号掘立柱建物跡と隣接する。1間×2間の建物で、平面形は正方形を呈する。II層上面で検出した。規模は桁行約5m、梁行約4.7mである。梁行の柱間寸法は北側から2.5-2.2mである。柱穴の平面形は、ほぼ円形で径15～55cm、検出面からの深さは13～50cmである。軸方向は真北に対して7度西偏する南西-北東棟である。遺物はP2の底から磨石が1点出土した。また、柱穴痕跡は、確認されなかった。

(4) 4号掘立柱建物跡

曲輪3の西側にあたるグリッドIV F17に位置する。2間×1間の建物で、平面形は長方形を呈する。II層上面で検出した。規模は桁行約3.6m、梁行約2.9mである。桁行の柱間寸法は西側から2-1.6mである。柱穴の平面形は、円形、または楕円形を呈し、径30～90cm、検出面からの深さは6～46cmである。軸方向は真北に対して18度西偏する南西-北東棟である。遺物は、P2の埋土から磨製石斧が1点出土した。また、柱穴痕跡は、確認されなかった。

<曲輪> 本調査区においては、3カ所の曲輪が確認された。それぞれの位置は、曲輪1がグリッドIV D7～III E21、曲輪2がIV D18～IV F7、曲輪3がIV F16～IV F20である。そのうちの2つの曲輪(曲輪2・3)で、掘立柱建物跡を確認した。曲輪2に関しては整地した痕跡がトレンチ6の断面(第1図)と、検出面から確認できた。境界線から西側の検出面は、II層上面の褐色粘土で形成され、境界線から東側の検出面は、

オリブ褐色粘土であった。(第3図)以上のことから曲輪2は境界線より西側を削平し、その削平した土を東側に盛土し平坦に整地したものである。また曲輪2の東側は、調査区外に約30m程延びていたことから、曲輪の範囲は、広がると推定される。曲輪3では、掘立柱建物跡が1棟構成される可能性があることから現況より広い曲輪であったと推定される。

＜柱穴状ピット群＞ 曲輪2と曲輪3あわせて柱穴状ピットを66基検出した。そのうち柱穴痕跡を確認できたのは4基あった。その中のP P24から16世紀代のものである中国の染付け皿片と美濃産の天目茶碗片が出土した。ピット群全体が掘立柱建物跡にともなうかどうかは、不明である。

＜堀跡? (大溝)＞ 掘立柱建物跡がある曲輪2から約25m西側のグリッドⅢD5からⅣC14で1条確認された。規模は上幅3～4.5m、下幅が50cm～2.0m、深さが1.10～1.60mである。調査区内では南北方向に約45m確認されている。断面形は、U字形を呈する。小規模なことから、大溝・地境の可能性も考えられる。

＜出土遺物＞ 出土した遺物は、遺構内では、陶磁器片が7点(中世の磁器片が2点、陶器片が4点、近世の磁器片が1点)、石器が3点(磨製石斧1点、磨石2点)、埴塙が1点、遺構外では縄文土器片が中2袋、弥生土器片が小1袋、石器(凹石)が1点である。土器片については、摩滅が著しく石器とともに隣接地から流れ込んできたものと考えられる。

5. まとめ

要害館について、『藤沢町史』によると「文化財調査委員である千葉真一氏が調査研究した結果、葛西家の家臣である小野寺主計頭の居館に間違いない。」と記されている。また同町史には、「小野寺氏は葛西家の家臣で、ひとかどの武将として奉公していたが、葛西没落と共に一時浪人となり後伊達氏の時代には武士としては奉公ができず、二代彦次郎から御大工として伊達氏に奉公することになった。」と記されてある。ちなみに葛西氏は、天正18年(1590)18代晴信の時代、豊臣秀吉の小田原参陣の不参加により取り潰しにされている。このことから、小野寺氏の初代は1590年までは、武士として奉公していたと思われる。発掘調査の結果、掘立柱建物跡の柱穴の埋土から16世紀代と思われる美濃産の陶器が出土し、また曲輪2から15～16世紀代と思われる中国産の磁器が出土した。町史や検出遺構・遺物から、本調査区が要害館の館跡、または館跡に伴う可能性が考えられる。前記した小野寺氏の居館の可能性も考えられよう。なお、要害館跡B遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

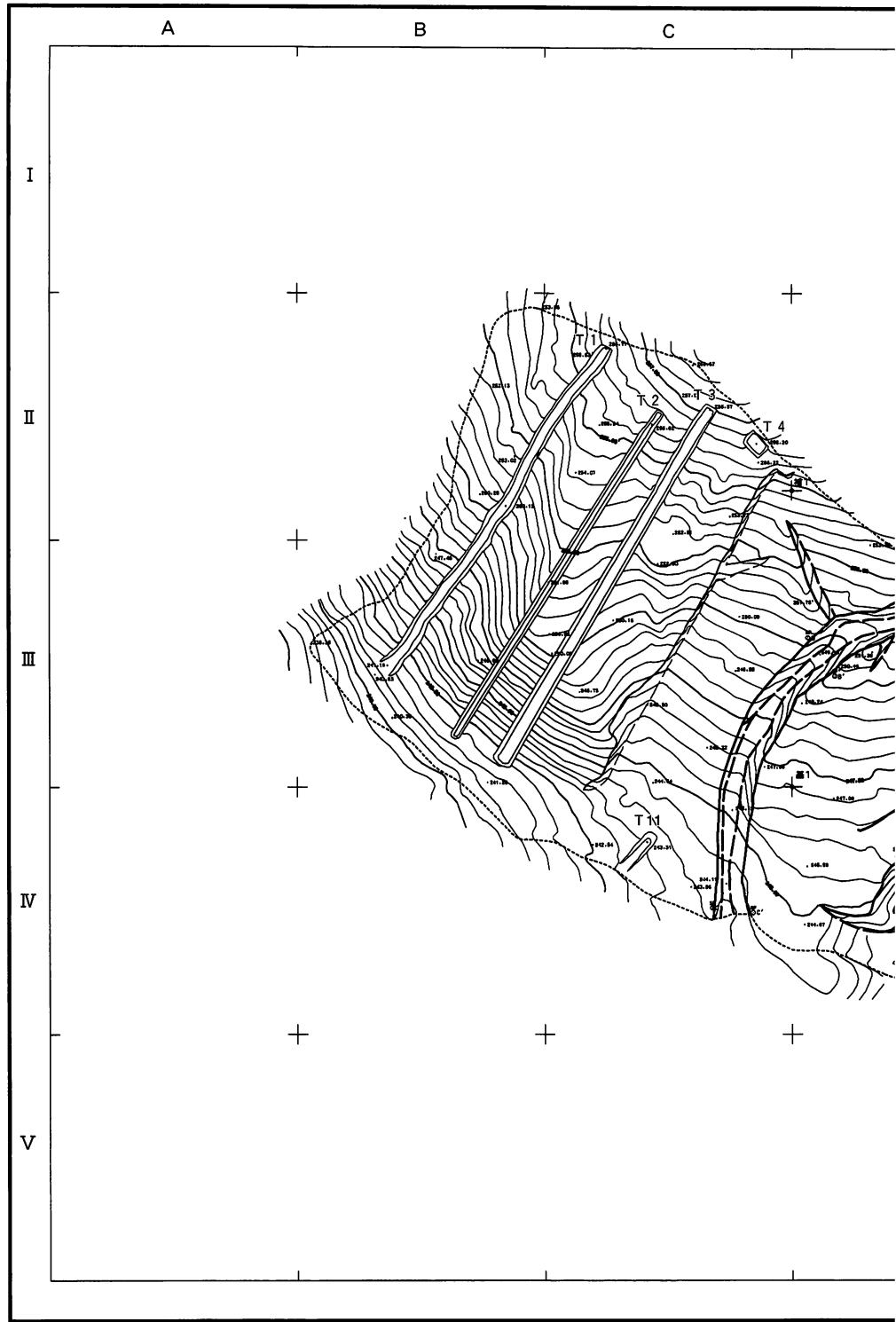
番号	出土地点・層位	種別	器種	口径cm	底径cm	高さcm	釉薬・染付	産地	製作年代	備考
1	P P 2 4 埋土中	磁器	皿		7.5	(1.95)	染付	中国	16世紀後半	見込み 蛟龍文
2	曲輪2 II層面	磁器	皿	(11.2)	(6.2)	2.95	白色	中国	15～16世紀	白磁皿
3	曲輪2 II層面	磁器	皿	(13.0)		(2.2)	白色	中国	15～16世紀	白磁皿
4	掘立1 P 6 埋土上位	陶器	皿	(11.7)		(2.5)	灰釉	美濃	16世紀後半～末	折縁菊皿
5	曲輪2東側 II層面	陶器	皿		(5.6)	(1.45)	灰釉	美濃	16世紀後半～末	
6	掘立1 P 6 埋土中位	陶器	?		(11.0)	(2.0)				江戸以降か
7	掘立1 P 8 埋土中位	陶器	皿		(5.2)	(1.0)	灰釉	美濃	16世紀前葉～中葉	印花
8	P P 2 4 底面	陶器	茶碗			(3.1)	鉄釉?	美濃	16世紀	天目茶碗

*高さ()は残存値

番号	出土地点	器種	口径cm	高さcm	備考
9	曲輪2東側 II層面	埴塙	6.0	2.5	銅成分付着

番号	出土地点	器種・部位	文様の特徴	内面	備考
10	ⅣC6区II層	甕・口縁部	L R縄文	ナデ?	弥生?
11	ⅣC6区II層	深鉢?・口縁部	L R縄文、沈線、口唇部刻目	ナデ?	弥生?

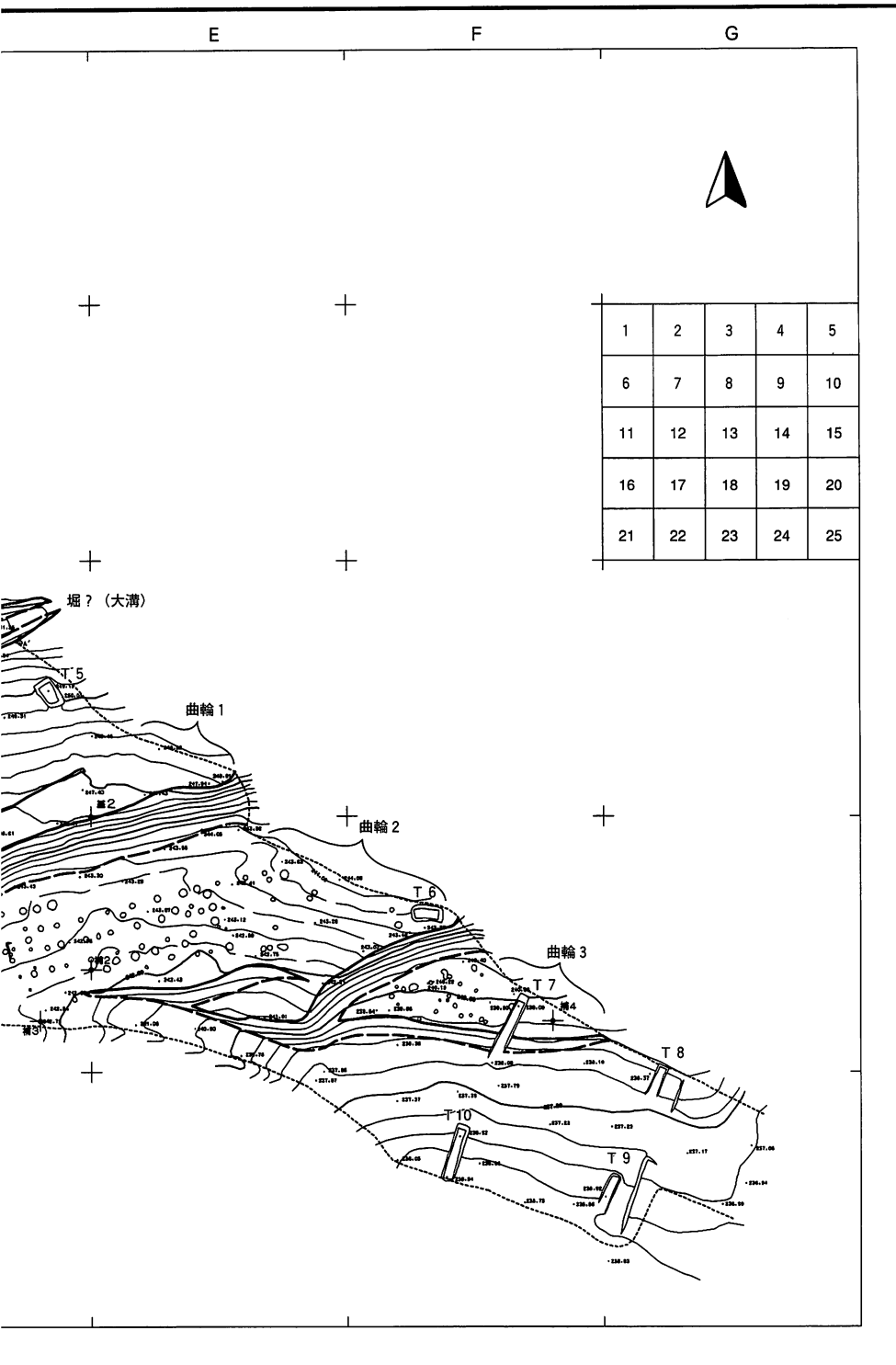
番号	出土地点・層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	石質	産地
12	掘立4 P 2 埋土下位	磨製石斧		4.7	2.1	130.0	頁岩	北上山地
13	掘立1 P 1 埋土下位	磨石	11.8	7.5	5.7	699.2	砂岩?	北上山地
14	掘立3 P 2 底から	磨石	9.1	8.8	6	702.2	砂岩	北上山地
15	ⅣD8 表採	凹石	8.7	6.6	4.6	387.3	砂岩	北上山地



座標系 第X系
等高線間隔 50cm

Y = -48,725,000

第2図 要害館跡B遺跡 地形測景図・遺構配置図

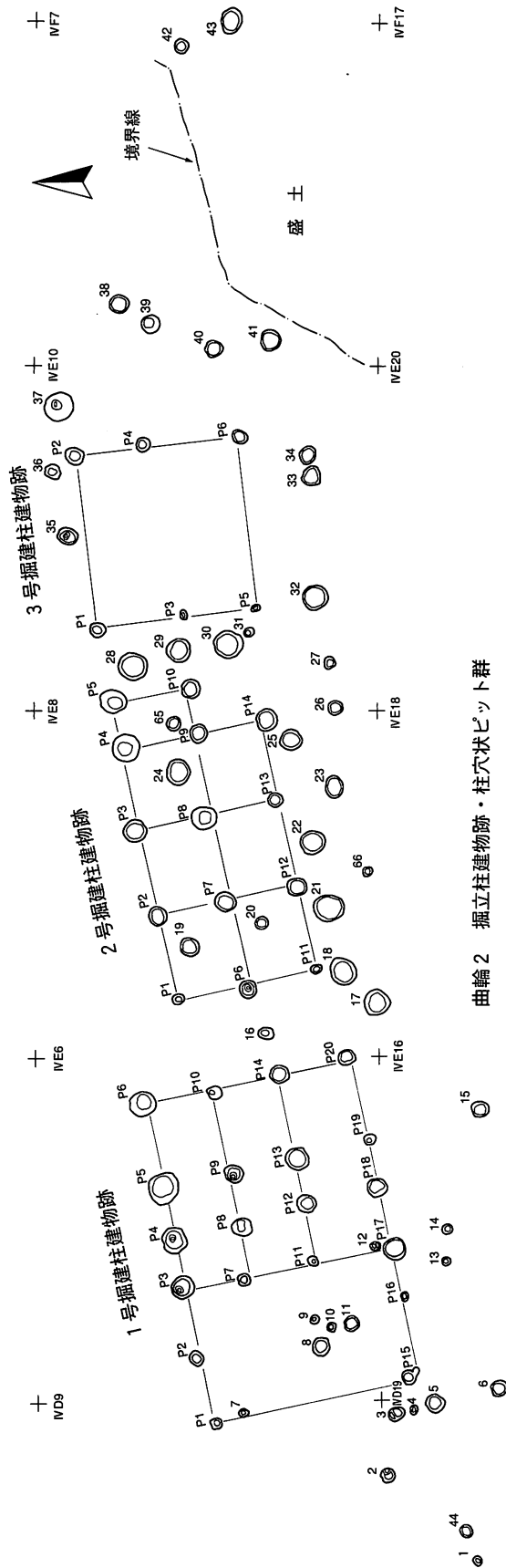


X = -127,825.000

X = -127,825.000

Y = -48,750.000

0 25 m

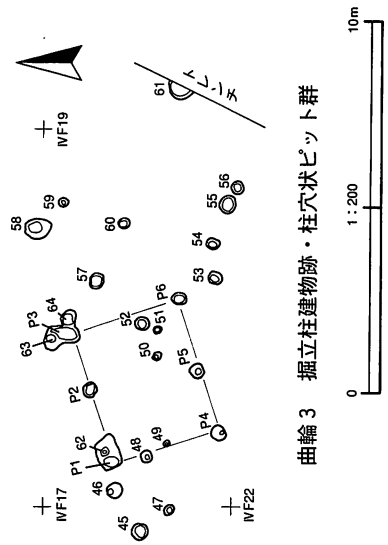


曲輪2 掘立柱建物跡・柱穴状ピット群

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡	柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡	柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡
1	28	22.5		21	88	40	有	41	60	6.3	柱痕跡
2	42	39.7		22	70	28.8		42	44	28	
3	46	23		23	66	16.2		43	74	21.5	
4	27	22.4		24	74	49.4	有	44	38	18.5	
5	57	37		25	62	22.2		45	42	52.5	
6	46	17		26	43	22.5		46	40	24.5	
7	26	14.3		27	36	4.3		47	30	21	
8	54	22.5		28	84	27.7		48	30	32.8	
9	26	22.5		29	70	42.5		49	16	9.5	
10	30	10.5		30	82	39.9		50	20	14.5	
11	46	25.4		31	28	30.7		51	22	24.8	
12	28	24.5		32	74	21.7		52	38	24.5	
13	25	10		33	56	6.8		53	32	19.5	
14	29	9.5		34	54	22.5		54	34	21.6	
15	52	15.2		35	58	39.5	有	55	48	20.2	
16	44	41.8		36	52	42.7	有	56	36	18.3	
17	76	40.5		37	84	54		57	42	8.3	
18	85	30.5		38	54	16.2		58	70	46.6	
19	58	14.8		39	52	36.7		59	27	36.7	
20	36	9.8		40	54	10.7		60	28	20.5	
								61	70	41.7	
								62	28	58	
								63	48	67.5	
								64	48	36	
								65	42	22.2	
								66	30	31.8	

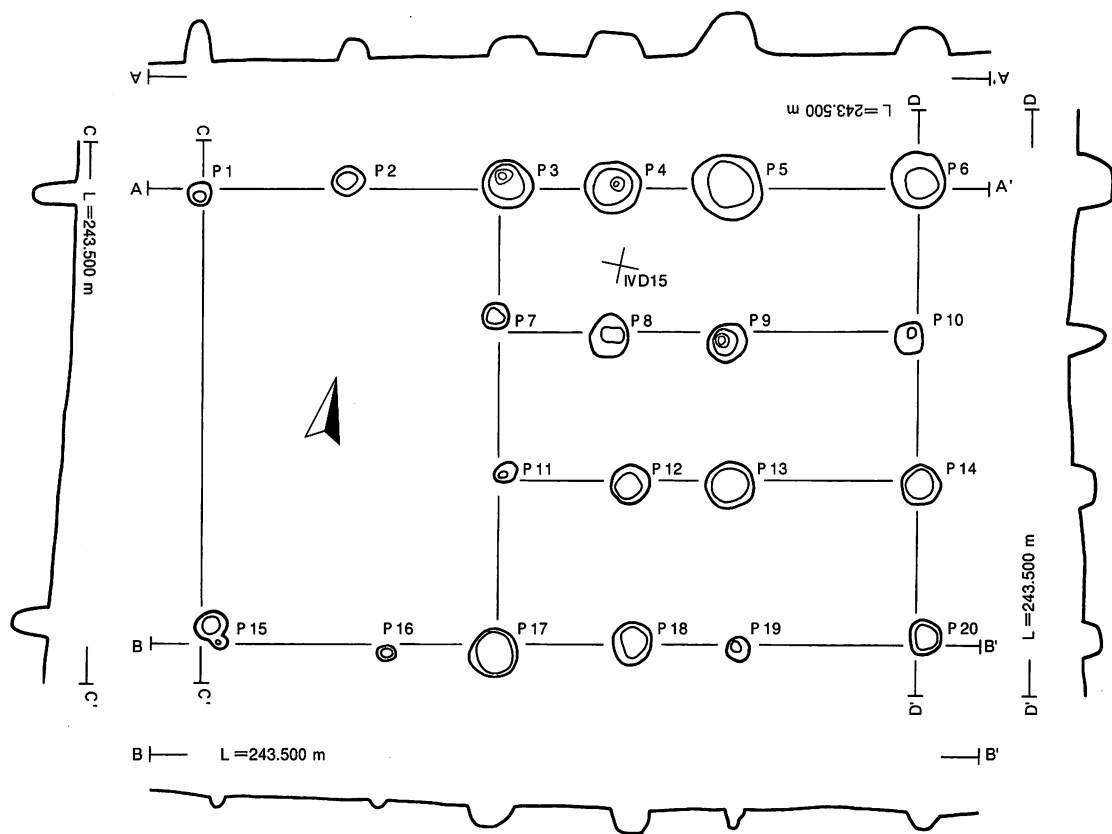
柱穴状ピット群 観察表

4号掘立柱建物跡

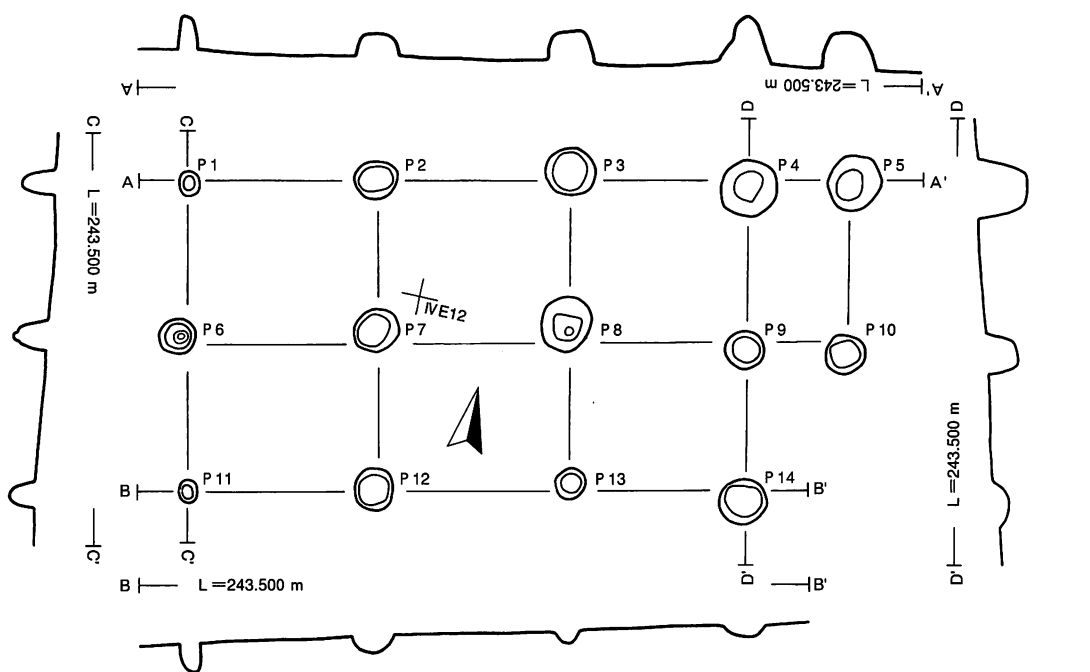


曲輪3 掘立柱建物跡・柱穴状ピット群

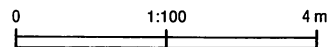
第3図 要害館跡B遺跡曲輪2・3掘立柱建物跡・柱穴状ピット群



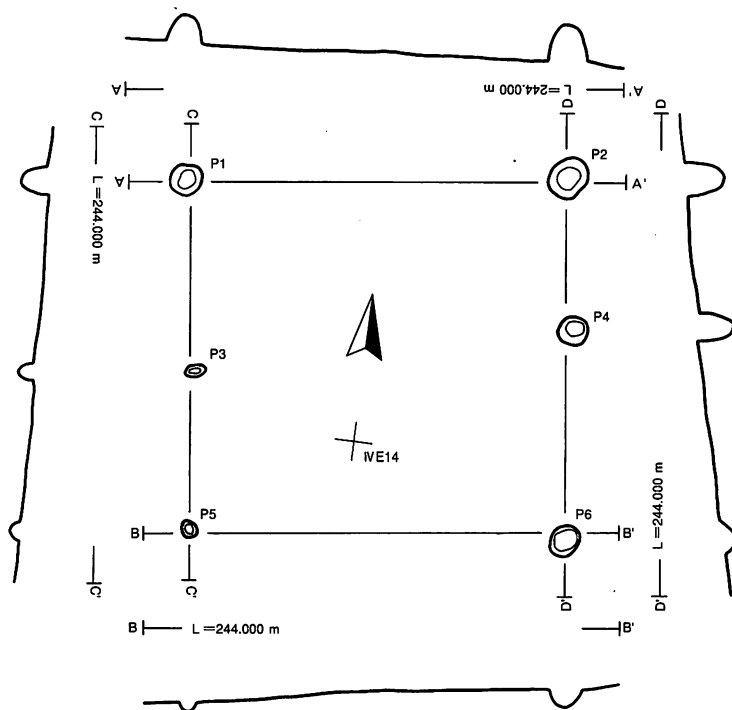
1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡



第4図 要害館跡B遺跡1・2号掘建柱建物跡



3号掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡
1	34	58.5	
2	44	48.5	有
3	66	56	
4	74	58	
5	96	51	
6	72	47	
7	34	47.4	
8	58	32.2	有
9	54	60.5	
10	46	49.7	
11	34	34.5	
12	36	52	有
13	66	26.7	
14	53	33.3	
15	42	49	有
16	34	9.7	
17	68	25.5	
18	54	38.6	
19	32	26.4	
20	48	24	

2号掘立柱建物跡

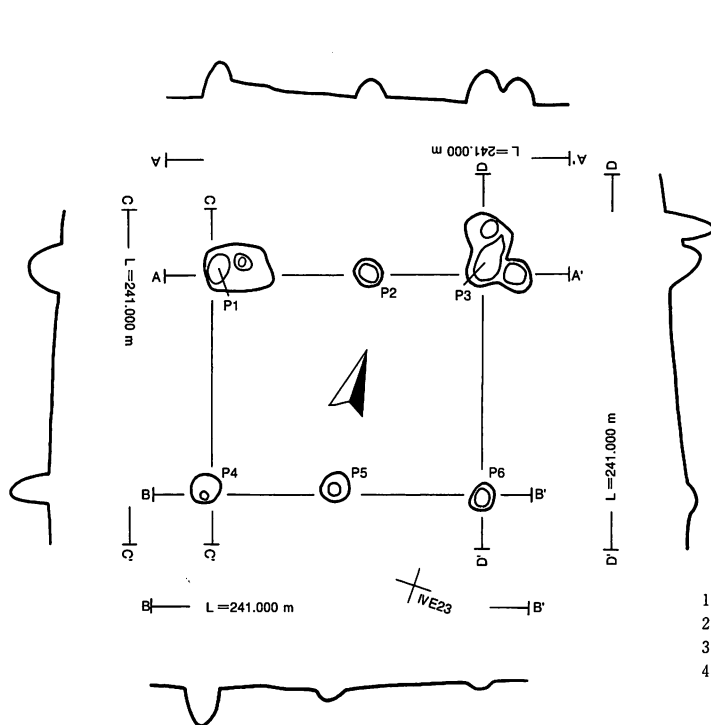
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡
1	32	46	
2	56	29.7	有
3	68	41.1	有
4	82	63.5	有
5	74	48.4	
6	54	48.3	有
7	60	53.2	有
8	72	64.6	有
9	56	45.5	有
10	56	50.5	有
11	30	35.7	有
12	58	26.9	有
13	42	15	
14	64	17.4	有

3号掘立柱建物跡

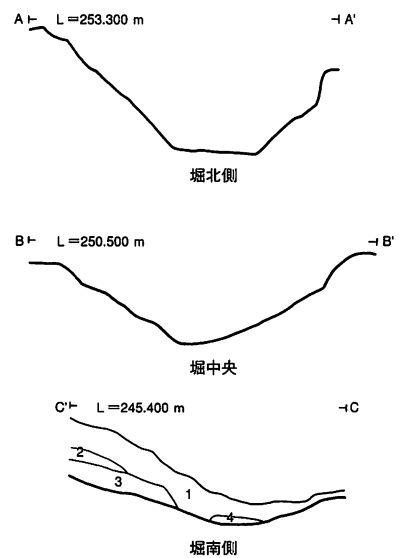
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡
1	43	38	
2	54	52	
3	30	21.4	
4	42	50	
5	24	13.3	
6	46	17.7	

4号掘立柱建物跡

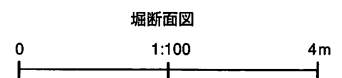
柱穴番号	直径(cm)	深さ(cm)	柱痕跡
1	38	46.5	
2	40	25	
3	86	40	
4	40	39	
5	40	19.5	
6	38	10.5	



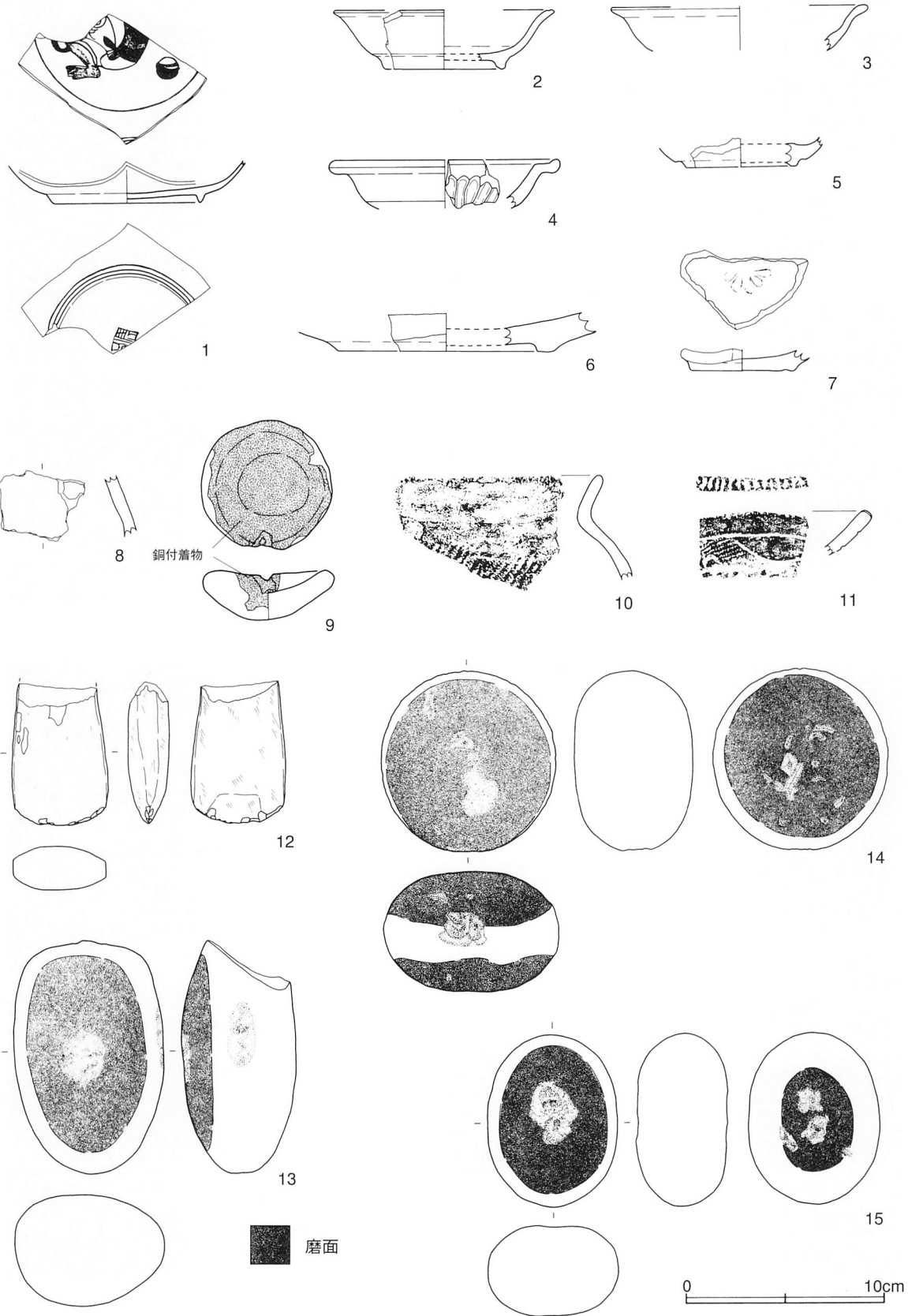
4号掘立柱建物跡



1. 10YR4/4 褐色シルト 粘強、しまりやや密
2. 10YR3/3 暗褐色シルト 粘強、しまりやや疎
3. 2.5Y5/4 黄褐色シルト 粘強、しまり密(礫を多く含む)
4. 2.5Y5/6 黄褐色シルト 粘強、しまり密



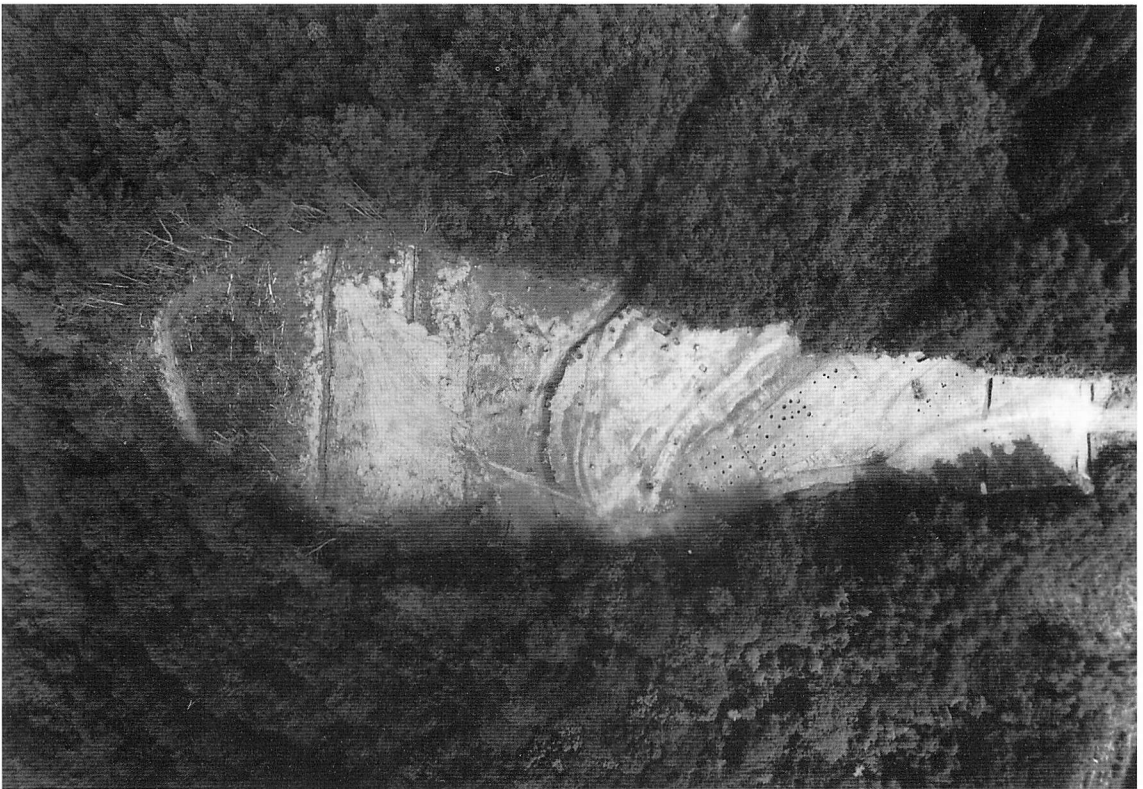
第5図 要害館跡B遺跡3号・4号掘立柱建物跡・堀断面図



第6図 要害館跡B遺跡出土遺物

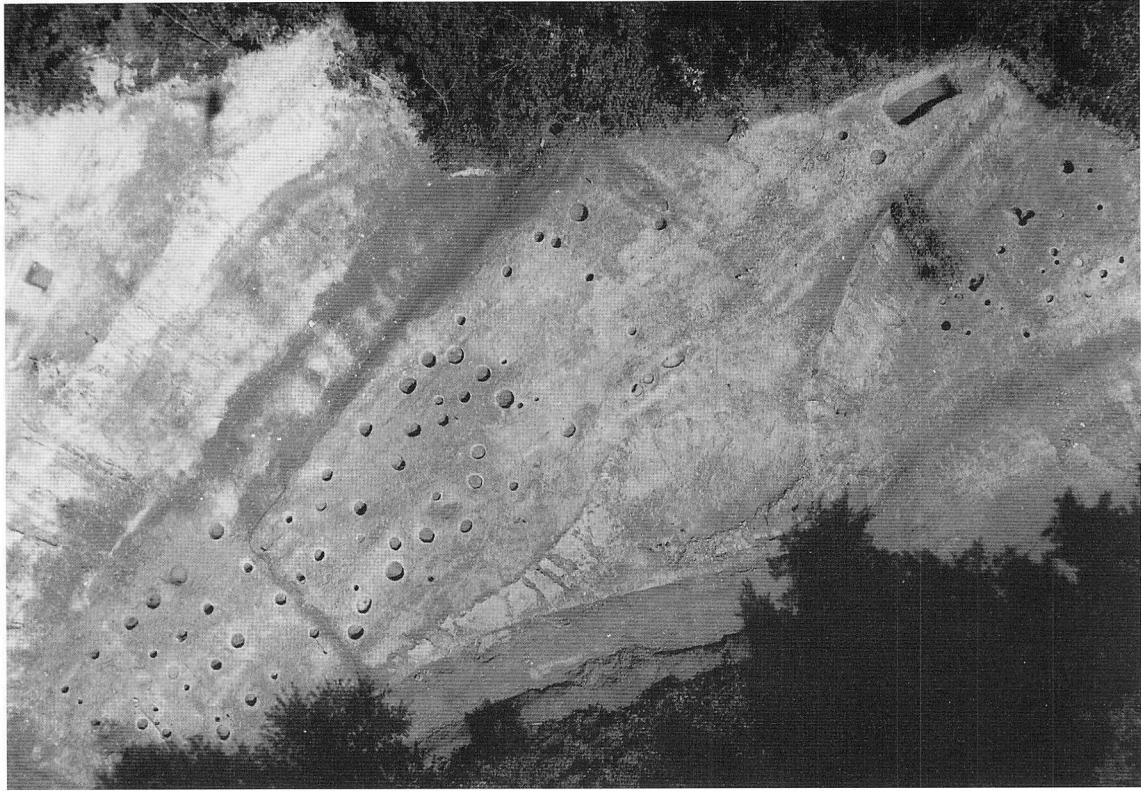


調査区近景（東から）

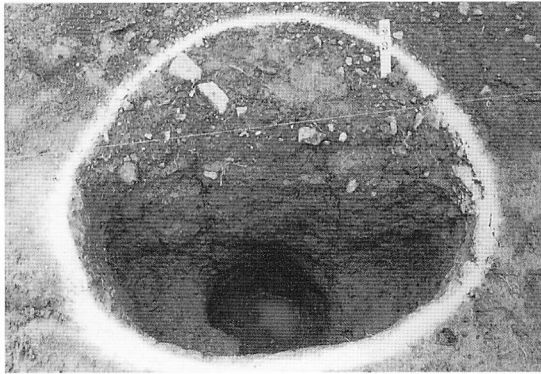


調査区全景（真上から）

写真図版1 要害館跡B遺跡検出遺構(1)



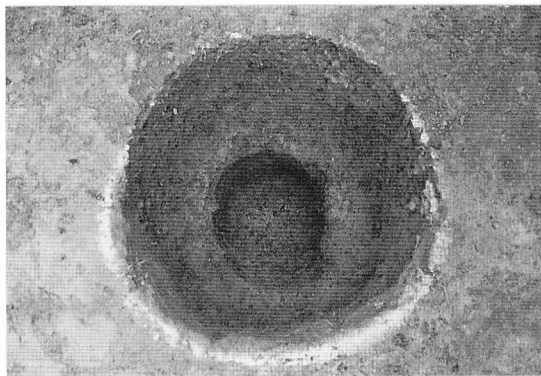
曲輪 2・3 掘建柱建物跡全景（真上から）



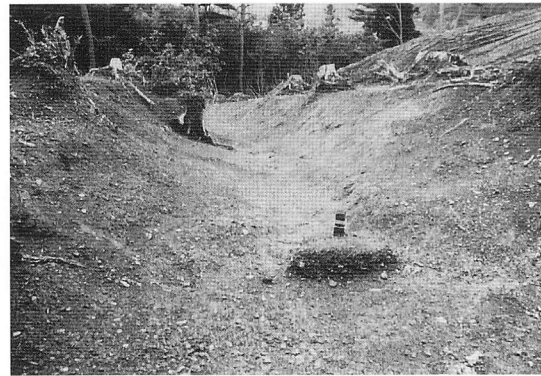
2号掘建柱建物跡 P 4 断面



堀（大溝？） 精査（北側）

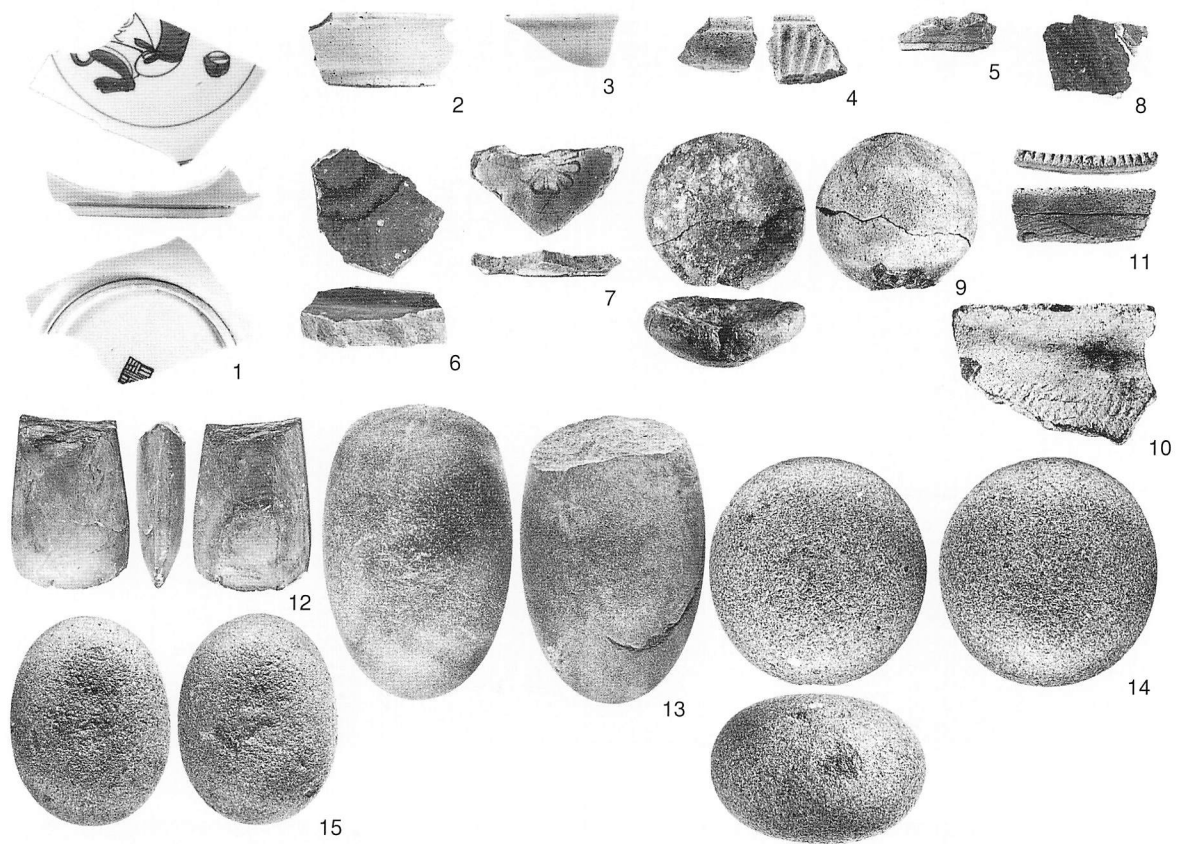


同上 平面



堀（大溝？） 精査（中央）

写真図版 2 要害館跡B遺跡検出遺構（2）



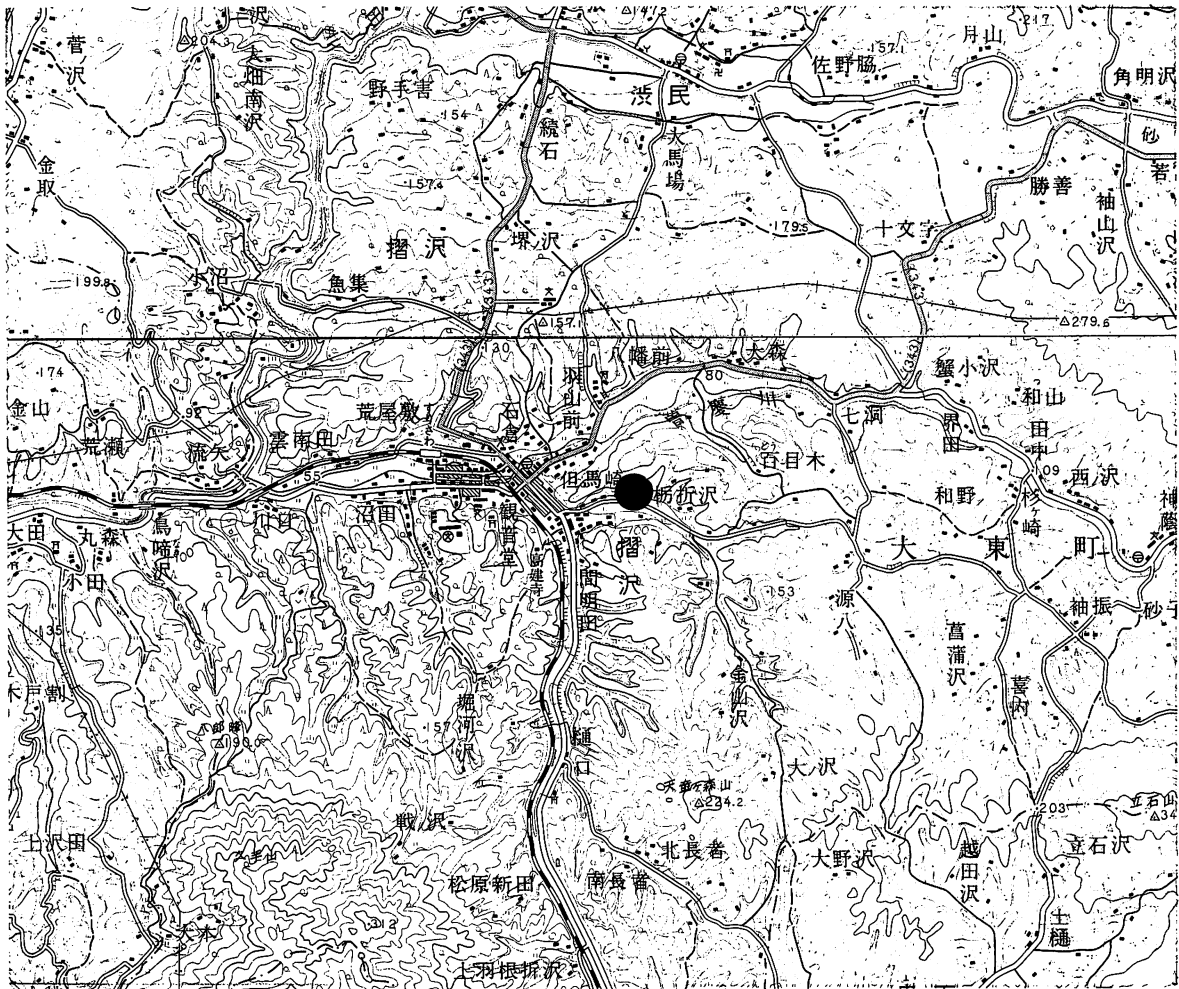
写真図版 3 要害館跡B遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうふんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	長村克稔・菊池貴広							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 。 。 。	東経 。 。 。	調査期間	調査面積	調査原因
ようがいだてあと 要害館跡B遺跡	いわてけんひがし 岩手県東磐井 ぐんふじさわちやうほろ 郡藤沢町保呂 わあざうわのだいら 羽字上野平183 番地ほか	OF22- 1181		38度 50分 49秒	141度 23分 40秒	20000808~ 20000919	3,897m ²	「一級町道津 谷川線」事業 に伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
要害館跡B遺跡	城館	中世 (16世紀代)	掘立柱建物跡 曲輪		白磁 美濃産陶器			

(47) 八丁館跡

所在地 東磐井郡大東町摺沢字折沢2番地の1ほか
委託者 岩手県千厩地方振興局農林部
事業名 折沢地区復旧治山事業
発掘調査期間 平成12年4月6日～5月24日
調査対象面積 826㎡
発掘対象面積 826㎡
遺跡番号・略号 NF70-0385・HTD-00
調査担当者 小野寺正之・北村忠昭
協力機関 大東町役場商工林政課・大東町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 陸中中原・千厩

1. 調査に至る経過

八丁館跡は「栃折沢地区復旧治山事業」の施行に伴って、その事業区域内に位置することから発掘調査をすることとなった。

栃折沢復旧治山事業は、平成10年8月の大雨により山腹面が崩壊したため、これを復旧する治山事業である。事業者である岩手県千厩地方振興局農林部では、事業実施に先立ち岩手県教育委員会に対し、事業区域内における埋蔵文化財の分布調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では、現地調査により埋蔵文化財の存在を確認した。踏査の結果、中世の城館跡で土堤、帯郭、堀切が確認されたことから、工事着手に先立ち記録保存を目的とした発掘調査が必要である旨、平成12年1月27日付け教文第1085号により千厩地方振興局農林部に通知した。

通知を受けた千厩地方振興局農林部では、岩手県教育委員会に対して平成12年度埋蔵文化財発掘調査を実施して欲しい旨回答した。

回答を受けた岩手県教育委員会は、千厩地方振興局農林部に対し、平成12年3月6日付教文第1220号「平成12年度埋蔵文化財発掘調査事業について」によって、平成12年度に発掘調査を実施し、実際の調査は(財)岩手県文化振興事業団が担当する旨を通知した。(千厩地方振興局農林部)

2. 遺跡の立地

八丁館跡はJR大船渡線摺沢駅の東方約1.4kmに位置し、室根山から西流し砂鉄川に注ぐ曾慶川の左岸に並行して張り出している丘陵上に位置している。調査区の標高は約76～97m、調査前の状況は山林であった。

3. 遺跡の基本層序

本遺跡の基本層序は、次のとおりである。

I a層 10YR4/3 にぶい黄褐色 シルト 層厚20～50cm 粘性なし しまりなし

現表土。木根を多量に含む・砂を含む。

I b層 2.5Y4/4 オリーブ褐色 砂 層厚10～30cm 粘性なし しまりなし 崩落土。大小の礫を含む。

II層 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 層厚5～30cm 粘性なし しまりなし 礫を含む。

II b層 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 層厚20～40cm 粘性なし しまりあり 礫を多量に含む。

II c層 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂 層厚5～30cm 粘性なし しまりなし 礫を少量含む。

II d層 10YR4/3 にぶい黄褐色 砂 層厚2～10cm 粘性なし しまりなし

10YR7/8(粒中)少量、10YR2/2粘土質シルト多量との混合土。礫少量含む。

III層 10YR3/3 暗褐色 シルト 層厚2～40cm 粘性なし かたくしまっている

径2～3cmの礫を北側に多く含む。

IV層 10YR3/2 黒褐色 粘土 層厚5～45cm 粘性あり しまりあり

径2～5cmの礫を含む。2.5Y7/8黄色砂質シルトとの混合土。

V層 7.5YR4/6 褐色 シルト 層厚5～20cm 粘性あり しまりあり

径2～3cmの礫を含む。北側では砂質シルト土(2.5Y7/8)粒中を含む。

VI層 5GY2/1 オリーブ黒 粘土 層厚3～25cm 粘性あり しまりなし

径2cm未満の礫を含む。グライ化している。

VII層 5GY2/1 オリーブ黒 粘土 層厚4～10cm 粘性あり しまりなし グライ化している。

VIII層 10YR3/3～3/4 暗褐色 砂質シルト 層厚2～30cm 粘性なし しまりあり 炭を少量含む。

IX層 10YR4/4～4/6 褐色 砂 層厚3～30cm 粘性なし しまりなし 湧水あり。

4. 調査の概要

初めに調査区をA区（西側）・B区（東側）の2つに区分し、A区では調査区をさらに上部・中部・下部の3つに分けた。次に雑物撤去を行い試掘トレンチを入れ、以降は状況によりそれを拡げる形で、遺構・遺物の出土状況を確認した。ここでA区中部は土砂崩落が酷く、遺構・遺物が確認できないため精査を終了し、A区は上部と下部を調査主体とした。当初は人力で表土除去を行い、その後粗掘と残土処理に重機を稼動したが、A区下部の調査対象面が当初の予測よりも深くなったため、再度重機で掘り下げ検出を進めた。B区は重機が入れず、最後まで人力で検出した。次いで、公共座標第X系に合わせて3級基準点（2点）と補点（6点）を打設し、基点から東に向かってアルファベットのA～Nを、南に向かって算用数字の1～11を付した1区画4mのグリッド（例：A1、A2…）を設定し、遺構の確認・遺物取り上げの基準とした。

(1) 検出遺構

検出された遺構は掘立柱建物跡1棟、柱穴列1基、溝3条、柱穴状土坑73基、堀跡2条、土坑1基、炭化物集中部4箇所である。

<1号掘立柱建物跡> A区C11～E10、地山上面で1棟を検出した。プランが調査区外に延びるため、全体は検出できなかった。検出部分において、桁行6間（総長10.25m－北）、梁行1間以上（総長1.15m－西）を測り、軸線方向はN-66°－Eである。桁行4間（総長8.2m－北）、梁行1間以上の身舎に廂をめぐるせていたものと思われ、北・西・東の3面を検出した。柱間寸法は、桁行の外側2間が2.1m（7.0尺）、内側2間が2m（6.6尺）を使用している。柱穴内埋土は褐色砂質シルト土によって構成されている。出土遺物がなく詳細は不明であるが、本郭の南側下に位置していることなどから、本郭に属する施設であると推定され、時期的には中世に属するものであると思われる。

<1号柱穴列> A区E10～F10、地山上面で1基を検出した。柱穴5基、4間（総長4.8m）を測り、軸線方向はN-77°－Eである。柱間寸法は外側2間がともに1.25m（4.1尺）、P11-P9が1.05m（3.4尺）、P9-P5が1.15m（3.8尺）である。柱穴内埋土は褐色砂質シルト土によって構成されている。出土遺物がなく詳細は不明であるが、1号掘立柱建物跡に隣接し検出面を同じくしており、中世に属すると思われる。

<溝> A区D10～F10（1号溝）、F10～D10（2号溝）、E10（3号溝）の3条を、地山上面で検出した。1号溝は平場と山壁の境目に沿って西から東に延びていたが、荒天による土砂崩落のため流されてしまい詳細は不明である。2号溝はF10に端を發し、E10で緩やかに北に曲がり、D10で南に曲がり消える。長さは約9m、深さは約5～6cmを測り、埋土は褐色砂質シルト土で構成されている。3号溝はE10中央部に端を發し、南に向かいすぐに消える。長さは約1m、深さは約5cmを測り、埋土は褐色砂質シルト土で構成されている。出土遺物がなく詳細は不明であるが、掘立柱建物跡と検出面を同じくすることなどから、中世に属すると思われる。

<柱穴状土坑> A区A6で3基、D6で8基、E6で4基、B11で1基、C10で1基、C11で10基、D10で6基、D11で13基、E10で14基、F10で13基、計73基を検出した。形はほとんどが円形・楕円形を呈している。深さは4～72cmを測るが、多くは10～50cmに集中している。埋土は褐色砂質シルト土によって構成されている。出土遺物がなく詳細は不明であるが、掘立柱建物跡と検出面を同じくすることなどから、中世に属すると思われる。

<堀跡> M6-N6に始まりM7-N7にまたがる1号堀と、B区J3-K3に始まりJ6-K6に繋がる2号堀の2条を検出した。1号堀は検出した部分の長さが約3.5m、上幅約5～5.3m、下幅30～60cm、深さ2.9～3.2mを測る。断面の形状は葉研状で、埋土は褐色・黄褐色の砂によって構成されている。2号堀は

調査範囲の都合により2箇所に分かれての検出となった。検出した部分の長さは、J3-K3が約2m、J6-K6が約1.3m、この2箇所を結ぶ堀を想定するとその長さは約12.5mとなる。またJ3-K3は上幅約2m、下幅40~50cm、深さ1.1m、J6-K6は上幅3.5~4m、下幅10~60cm、深さ約3.2mを測る。断面はどちらも葉研状で、埋土は褐色・黄褐色砂質シルト土または砂によって構成されている。1・2号堀ともに、八丁館跡の主郭の東側に尾根筋を断ち切るように作られていることから館に付随する堀切と推定され、時期は中世に属すると思われる。

＜1号土坑＞ B区M7で1基を検出した。堀の試掘時に南半分を掘りこんでしまったが、残存する部分の形状から、長方形を呈すると推定される。残存部分の長軸は約2.2m、短軸は約50cmを測る。底面は東に向かって凹凸を呈し、深さは7~40cmを測る。埋土は暗褐色砂質シルト土によって構成され、埋土内からは骨片がまばらに検出された。時期などの詳細は不明である。

＜炭化物集中部＞ B区堀の内部、標高80m前後の層上面4箇所において、まとまった形で出土した(第6図C1~C4)。C1は長軸15cm、短軸10cmの長方形を呈し、南端部からは骨片が出土している。C2は長径55cm、短径35cmの楕円形、C3は長径60cm、短径45cmの楕円形、C4は長径75cm、短径65cmの楕円形を呈し、厚さは2~10cmを測る。C2~C4の下部には石が円形に配置されており、特にC4は配石の中央部にある石の上に乗る形で検出された。また、C2とC4は南北にはほぼ隣接している。C4のほぼ中央部からは長さ25cm、厚さ2~7cmの焼土が検出されている。C3とC4はその周辺および内部より、やや大きめの骨片が出土している。同定の結果、炭化物はナラ・栗の木によって構成されていた。時期などの詳細は不明である。

(2) 出土遺物

＜土器＞ A区11CⅦ層よりかわらけ底部片1点、須恵器胴部片1点を出土した。かわらけは糸切り痕がわずかに見られ、反転実測により底径約5.6cmと推定した。胎土には粒小~中の砂を含む。須恵器は胎土に粒小の砂を含み、内面にロクロナデ調整が見られる。時期は共に中世以降に属すると思われる。

＜石器＞ A区上段より1点を出土した。尖頭器と思われるが、上面の一部を欠いているため詳細は不明である。全体に加工が施されている。

＜磁器＞ A区B11壁面Ⅶ層より1点を出土した。平碗の底部片で内部に釉が施されている。瀬戸・美濃産と思われる、時期は中世(15世紀頃?)に属すると思われるが詳細は不明である。

＜銭貨＞ B区堀の埋土より永楽通寶・寛永通寶を各1枚出土した。出土位置が現表土面から40cm程下と浅いため、流れ込みの遺物である可能性がある。

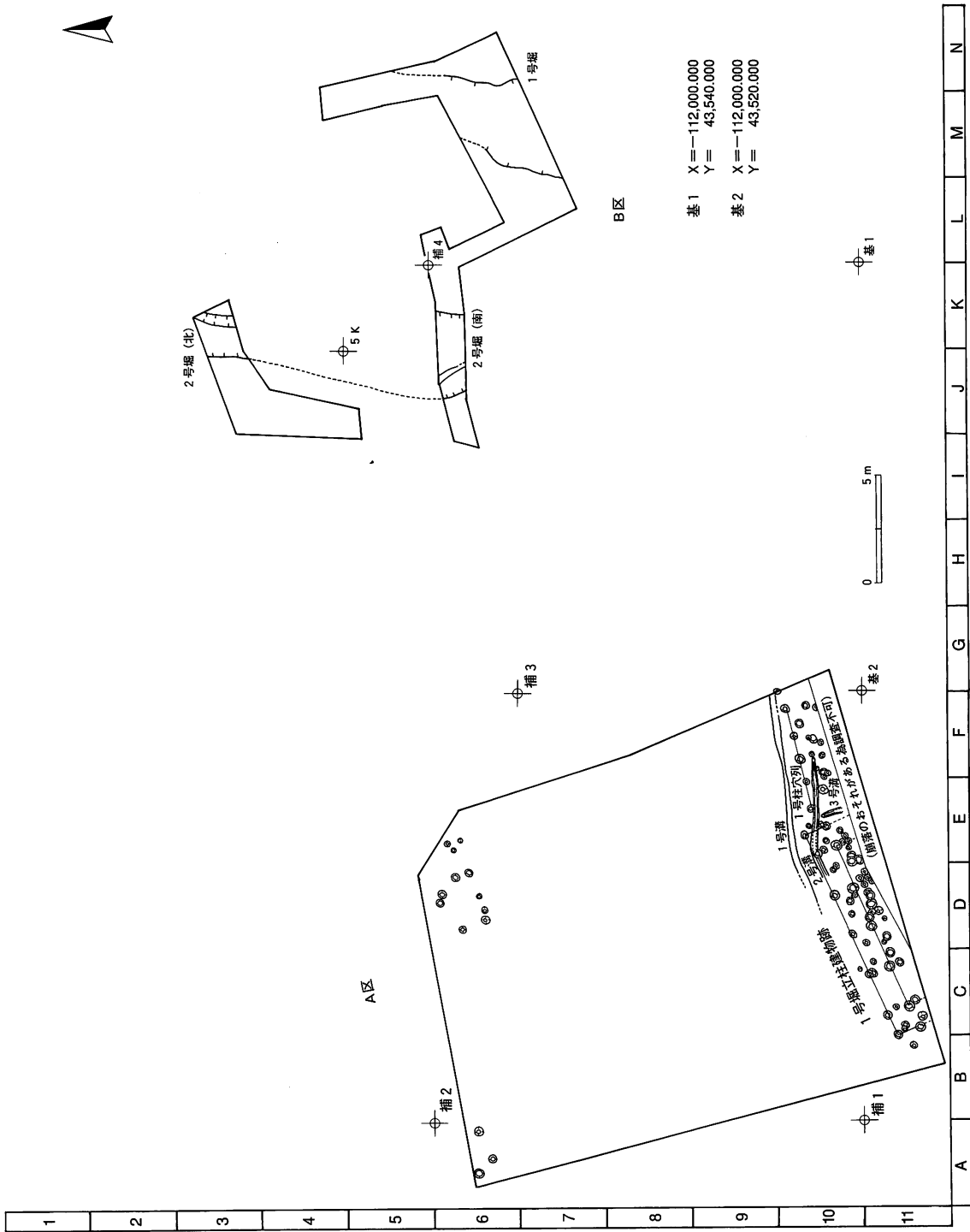
＜骨＞ B区堀の内部、標高80m前後の面において散布して出土した。その多くはC3・C4西側周辺に集まっている。同定により、そのほとんどが人骨であるという結果を得た。部位としては頭蓋骨、下顎骨などが含まれており、一部は受熱によって白く変色している。細片が多く、時期などの詳細は不明である。

5. まとめ

『大東町史(上)巻』によれば、八丁館は安倍頼時が構築したと伝えられており、前九年の役の伝えを持つ。また中世においては岩淵氏累代の居館であったと伝えられているが、今回の調査ではそれに直接関連するような具体的な遺構・遺物の出土は見られなかった。

しかし、掘立柱建物跡や堀などを検出できたことから、八丁館跡の全体像をさらに明確にするための資料を提供できたものと思われる。

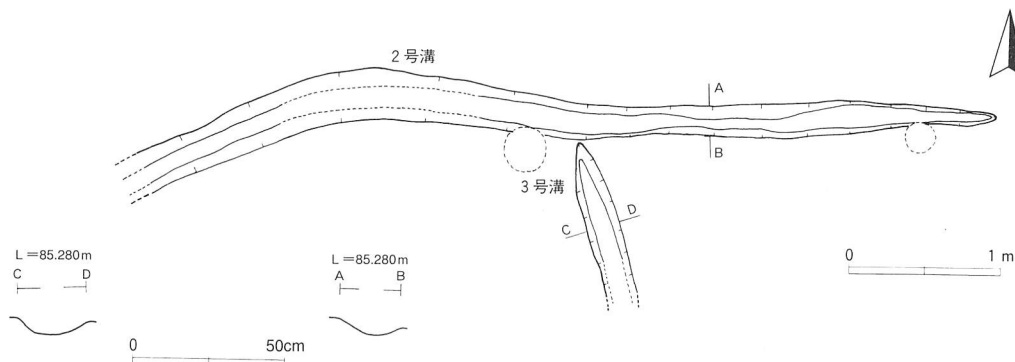
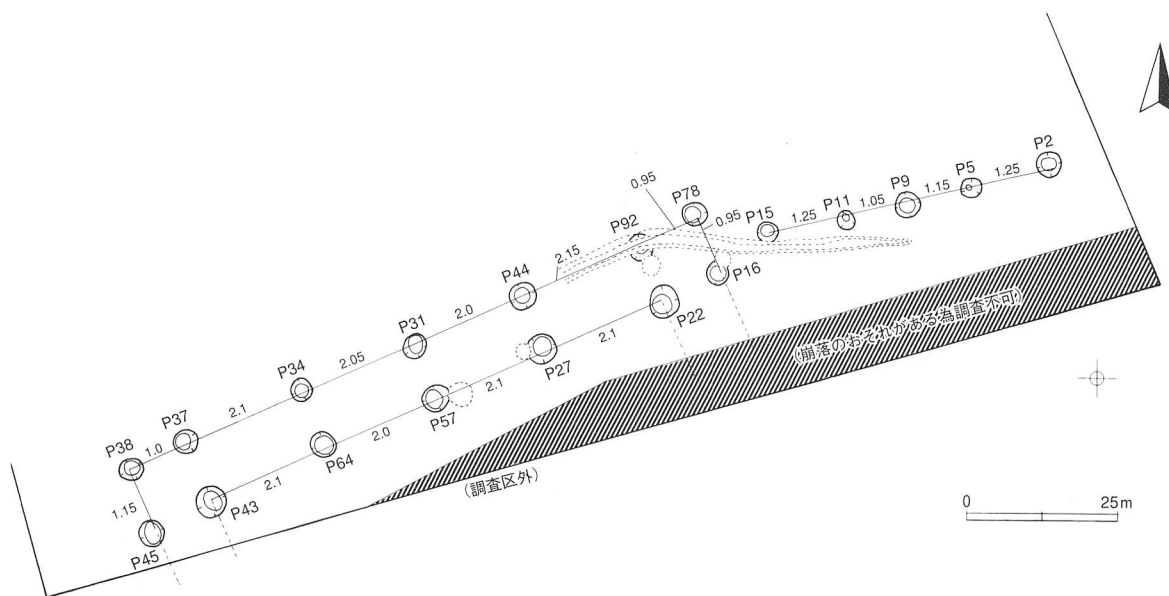
なお、八丁館跡に関わる報告は、これをもって全てとする。



第1図 八丁館跡遺構配置図

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	小野寺正之							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019 (638) 9001							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。、。、	。、。、			
はつちようだてあと 八丁館跡	いわてけん 岩手県東磐井 郡大東町摺沢 字栃折沢2番地 の1ほか	03421	N F 70- 0385	38度 59分 24秒	141度 20分 08秒	20000406~ 20000524	826㎡	「栃折沢地区 復旧治山事 業」に伴う緊 急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記記事	
八丁館跡	城館跡	中世	掘建柱建物跡 1棟 堀跡 2条 溝跡 3条 柱穴列 1条 柱穴状土坑 73基 炭化物 4箇所		須恵器 かわらけ 磁器(中世) 骨			



【2号溝・断面】

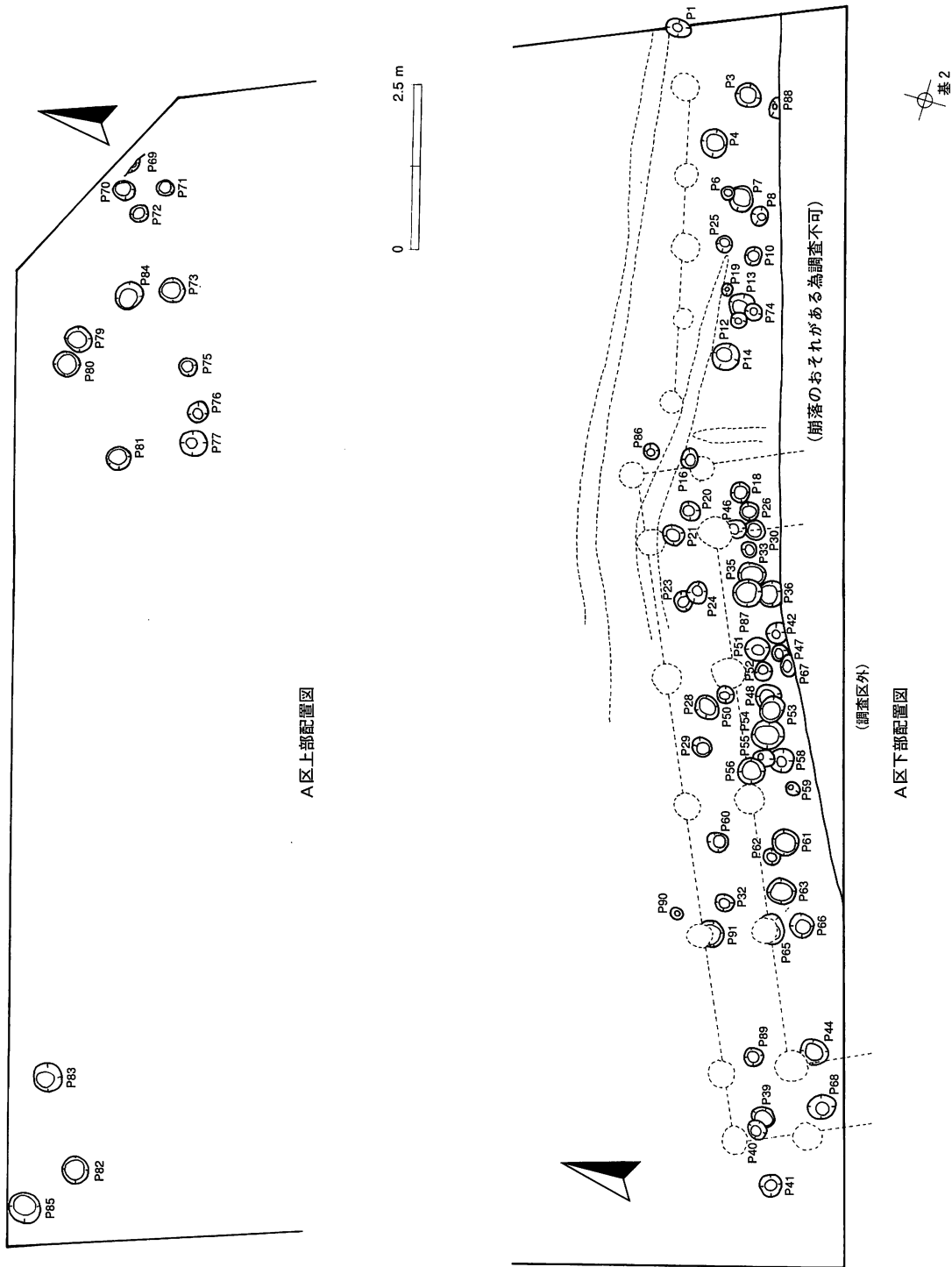
1 10YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性なし
しまりあり 径1cm未満の礫を含む。

【3号溝・断面】

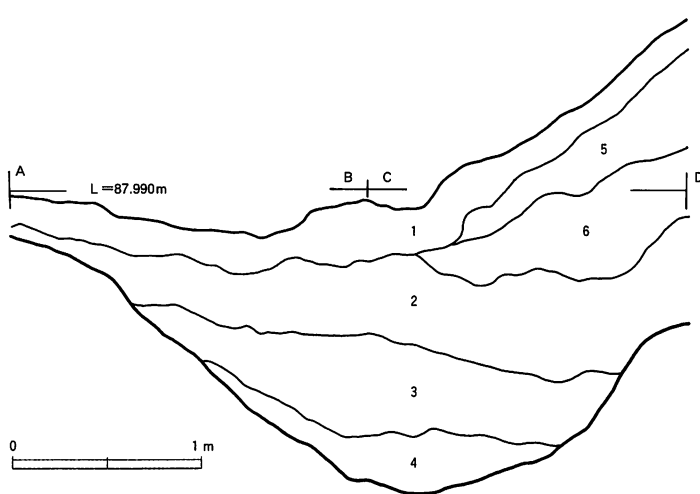
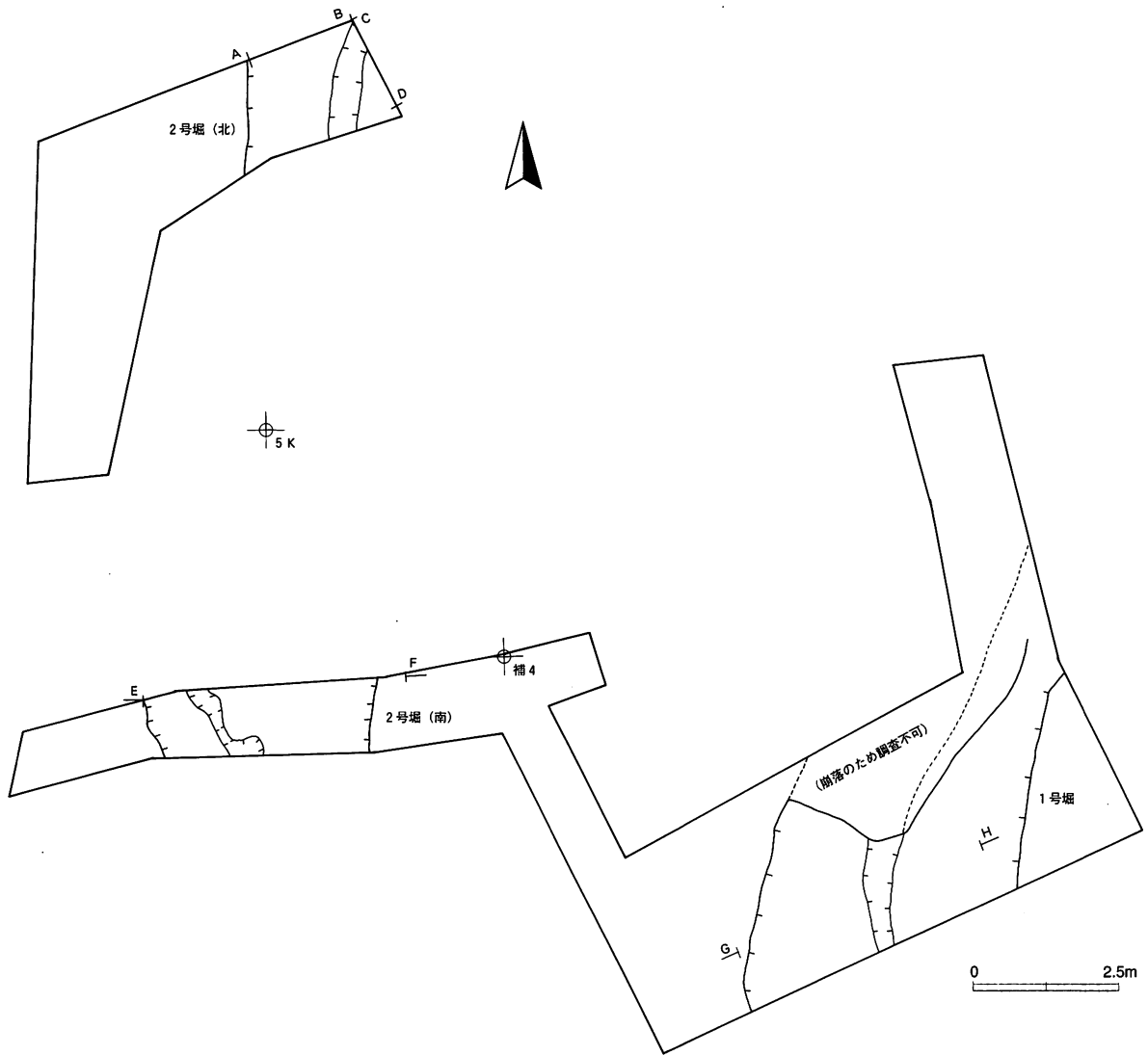
1 7.5 YR4/6 褐色 砂質シルト
粘性なし 硬くしまる 礫を含む。

第2図 八丁館跡1号堀立柱建物跡、1号柱穴列、2・3号溝

No.	深さ m	底面 高 m	形状
P03	37.4	82.892	
P04	50.8	82.892	
P06	5.3	83.361	
P07	34.8	83.040	
P08	37.9	82.892	
P10	53.1	82.892	
P12	30.3	83.156	
P13	46.9	82.984	
P14	60.6	82.876	
P16	29.9	83.220	
P18	29.9	83.220	
P19	10.4	83.372	
P20	33.4	83.135	
P21	36.2	83.147	
P23	43.1	83.079	
P24	38.8	83.385	
P25	38.8	83.385	
P26	24.1	83.135	
P28	24.7	83.088	
P29	26.5	83.042	
P30	16.3	83.183	
P31	16.3	83.183	
P33	16.9	83.313	
P35	43.3	82.892	
P36	46.5	82.838	
P39	24.2	83.037	
P40	23.8	83.118	
P41	23.8	83.118	
P42	37.6	82.903	
P44	7.9	82.798	
P46	28.0	83.133	
P47	9.5	83.174	
P48	9.5	83.174	
P50	18.3	83.138	
P51	43.9	82.872	
P52	13.6	83.140	
P53	31.5	82.920	
P54	37.3	82.831	
P56	20.9	82.982	
P58	40.6	82.792	
P59	13.9	83.026	
P60	6.1	83.143	
P62	25.9	83.809	
P63	27.3	82.812	
P65	26.1	82.730	
P66	31.6	82.780	
P67	31.6	82.947	
P69	24.8	84.950	
P70	14.4	95.110	
P71	14.1	94.970	
P72	11.2	95.065	
P73	18.2	94.990	
P74	20.4	94.895	
P75-1	20.4	94.895	
P75-2	4.1	94.958	
P76	20.4	94.895	
P77	27.6	94.820	
P78	30.9	95.310	
P80	30.9	95.310	
P81	37.1	95.138	
P82	13.3	95.695	
P83	25.7	95.650	
P84-1	43.7	94.809	
P84-2	18.7	95.770	
P86	16.8	83.369	
P87	48.4	82.874	
P88	41.9	82.799	
P89	28.7	83.357	
P91	29.7	83.138	



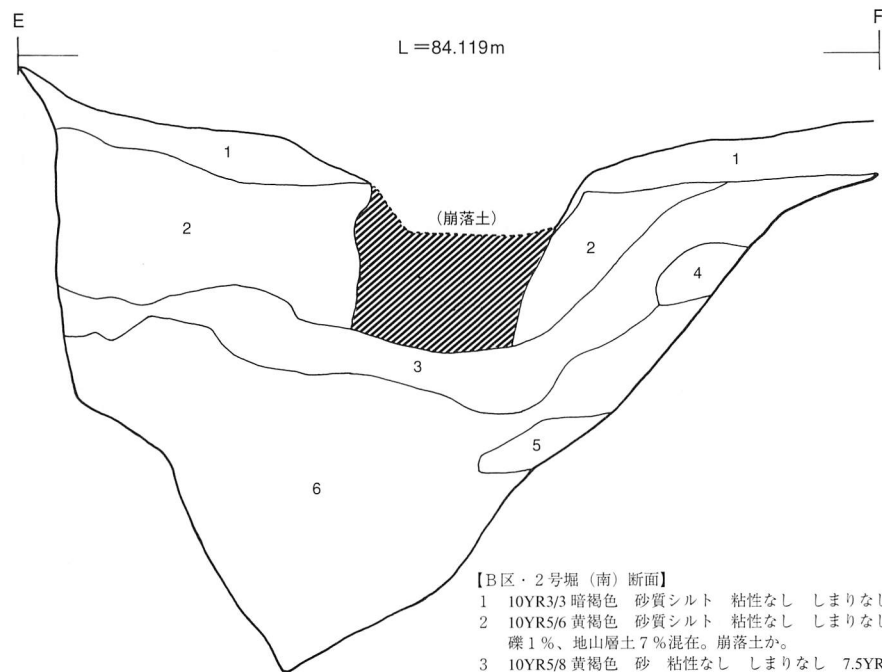
第3図 八丁館跡A区柱穴状土坑配置図



【B区・2号堀（北）断面】

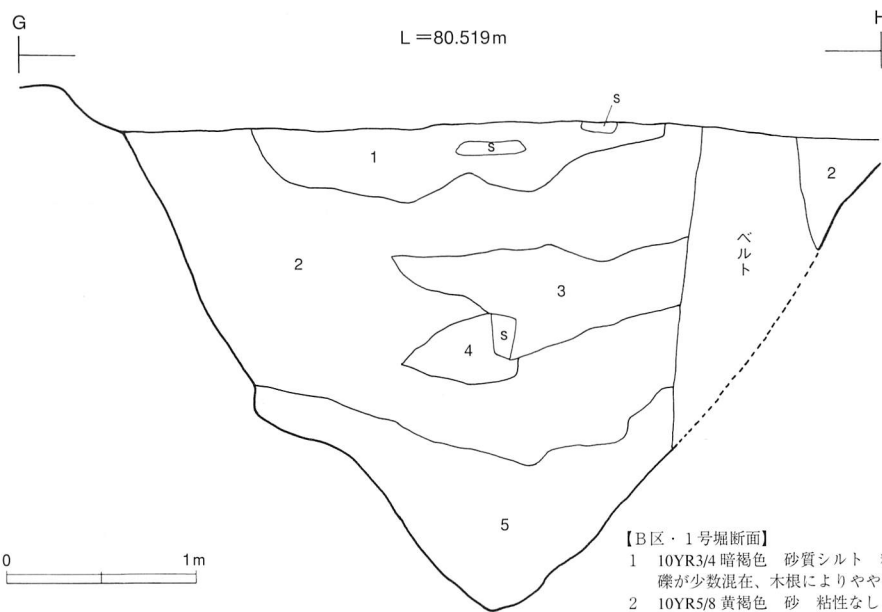
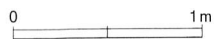
- 1 10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘性なし しまりなし
現表土、木根多、礫1%。
- 2 10YR4/4 褐色 砂質シルト 粘性なし しまりなし
10YR5/8 砂質シルト25%、礫・木根混在。
- 3 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性あり しまりあり
黄色土粒（小～中）をまばらに含む。
- 4 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 粘性あり しまりあり
礫3%含む。
- 5 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 粘性あり しまりなし
礫をまばらに含む。木根多い。
- 6 10YR5/4 黄褐色 砂質シルト 粘性あり しまりなし
礫をまばらに含む。木根多い。
粒状（極大～大）、一部に黄赤色粘土あり。

第4図 八丁館跡B区平面図・2号堀（北）断面



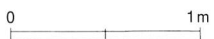
【B区・2号堀（南）断面】

- 1 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性なし しまりなし 現表土、木根多し。
- 2 10YR5/6 黄褐色 砂質シルト 粘性なし しまりなし 礫1%、地山層土7%混在。崩落土か。
- 3 10YR5/8 黄褐色 砂 粘性なし しまりなし 7.5YR5/8砂を板状(厚さ2~3cm)に含む。西側の一部で、水による鉄分を赤色化あり。
- 4 10YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性なし しまりなし 木根が露出している。
- 5 10YR6/8 明黄褐色 砂 粘性なし しまりなし 4層土が薄く入っている。
- 6 2.5YR5/6黄褐色 砂 粘性なし しまりなし 礫・木片などが多数混在。
- 7 10YR8/7 黄橙色 砂 粘性なし しまりなし 地山層、石英・雲母多。粒状(極小~小)



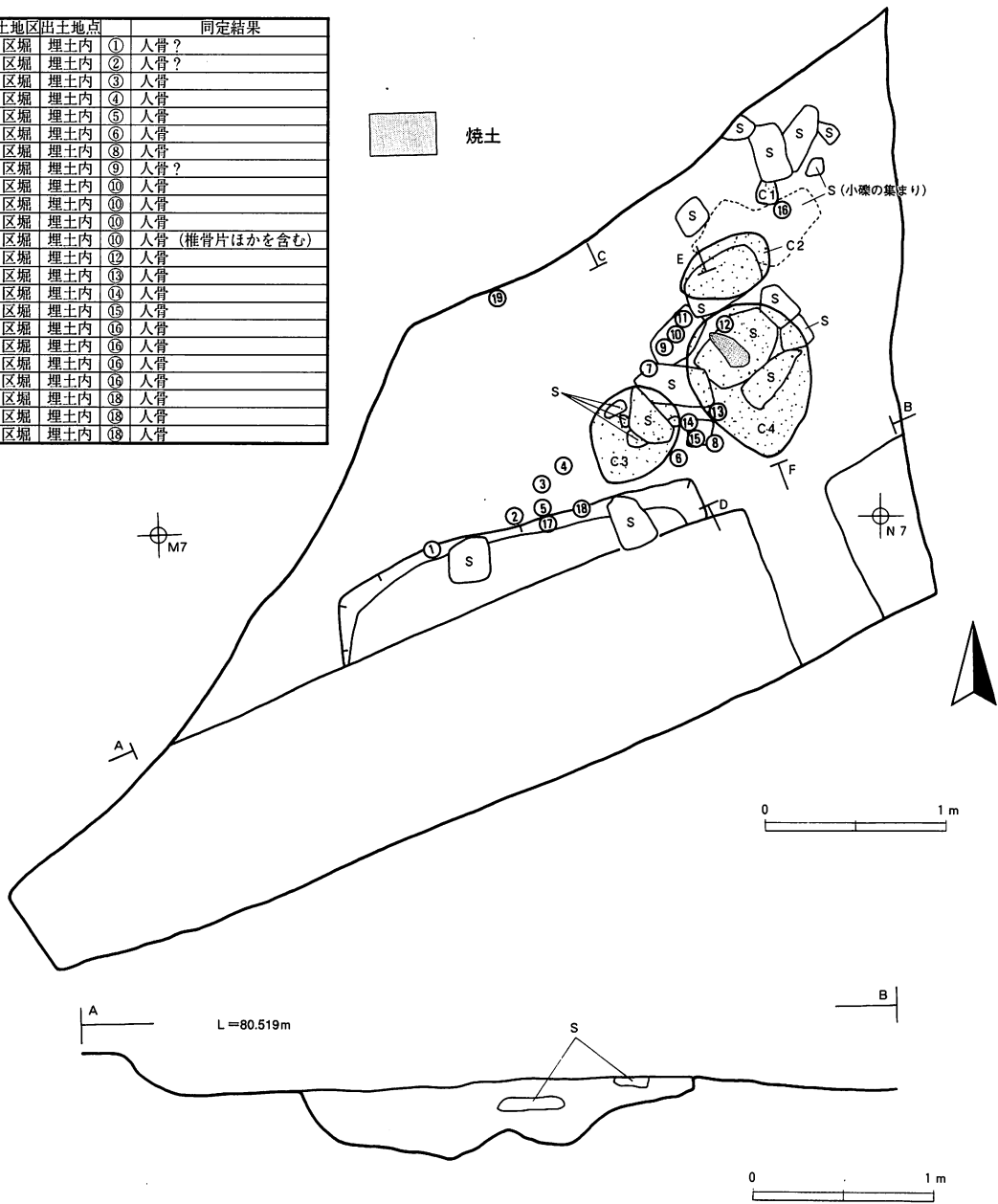
【B区・1号堀断面】

- 1 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性なし しまりなし 礫が少数混在、木根によりやや攪乱。
- 2 10YR5/8 黄褐色 砂 粘性なし しまりなし 3層土がまばらに入っている。
- 3 10YR4/4 褐色 砂 粘性なし しまりなし 2層土と混在、東側に礫(大)が入る。
- 4 10YR4/4 褐色 砂 粘性なし しまりなし 3層土に同じだが、礫なし。
- 5 10YR5/6 黄褐色 砂 粘性なし しまりなし ほぼ単一の土層。



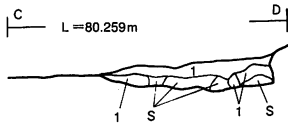
第5図 八丁館跡1・2号堀断面

No.	出土地区	出土地点	同定結果
1	B区堀	埋土内 ①	人骨?
2	B区堀	埋土内 ②	人骨?
3	B区堀	埋土内 ③	人骨
4	B区堀	埋土内 ④	人骨
5	B区堀	埋土内 ⑤	人骨
6	B区堀	埋土内 ⑥	人骨
7	B区堀	埋土内 ⑧	人骨
8	B区堀	埋土内 ⑨	人骨?
9	B区堀	埋土内 ⑩	人骨
10	B区堀	埋土内 ⑪	人骨
11	B区堀	埋土内 ⑫	人骨
12	B区堀	埋土内 ⑬	人骨 (椎骨片ほかを含む)
13	B区堀	埋土内 ⑭	人骨
14	B区堀	埋土内 ⑮	人骨
15	B区堀	埋土内 ⑯	人骨
16	B区堀	埋土内 ⑰	人骨
17	B区堀	埋土内 ⑱	人骨
18	B区堀	埋土内 ⑲	人骨
19	B区堀	埋土内 ⑳	人骨
20	B区堀	埋土内 ㉑	人骨
21	B区堀	埋土内 ㉒	人骨
22	B区堀	埋土内 ㉓	人骨
23	B区堀	埋土内 ㉔	人骨



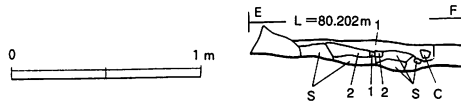
【1号土坑・断面】

1 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性なし しまりなし 礫が少数混在、木根によりやや攪乱。



【炭集中部C3・断面】

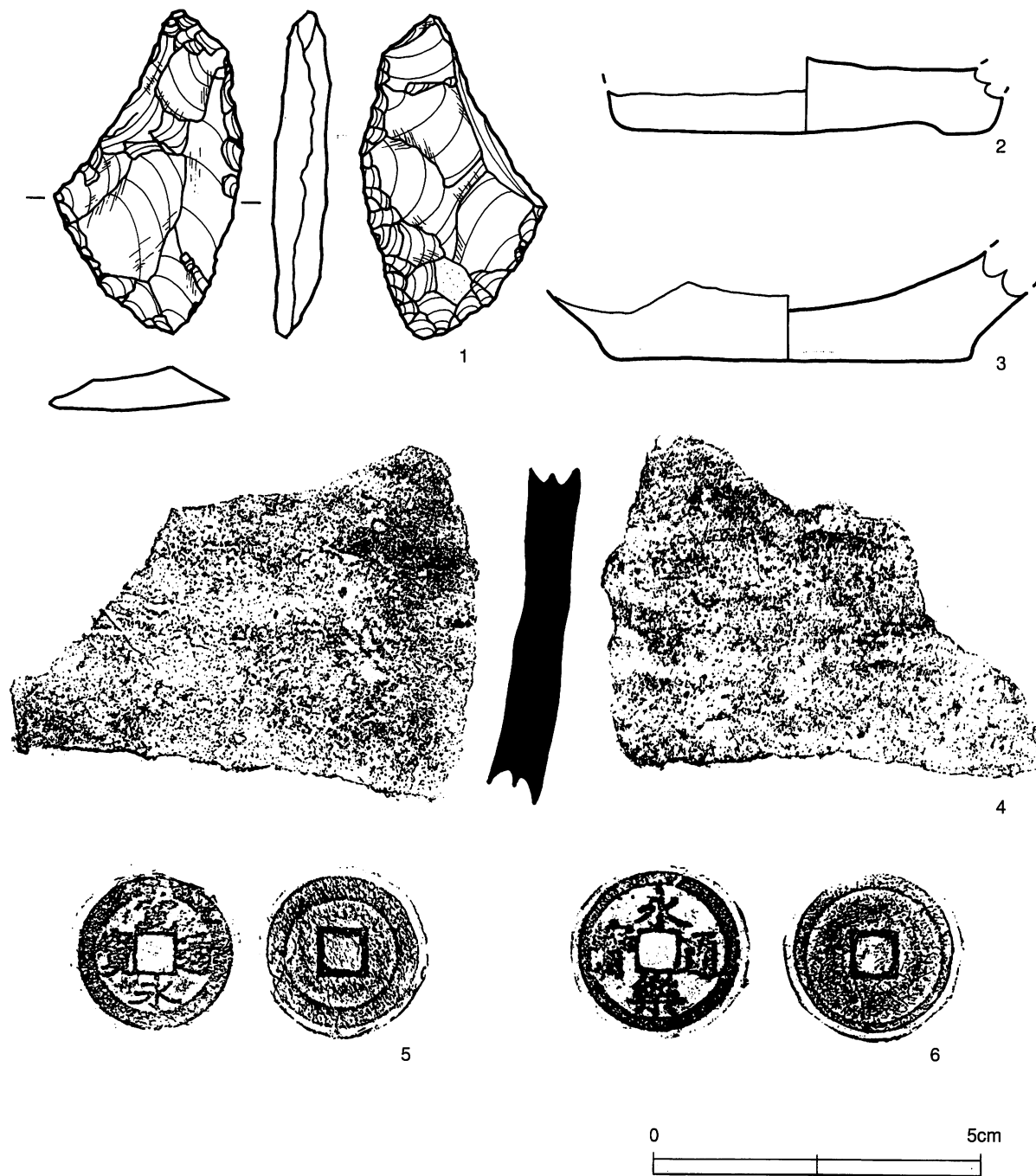
1 炭
2 10YR5/6 黄褐色 砂 粘性なし しまりなし 炭化物40%含む、骨片混入。
S (礫) は全体に炭が付着し、表面は被熱によって赤色化している。



【炭集中部C4・断面】

1 40YR5/4 におい黄褐色 砂質シルト 粘性なし しまりなし 炭粒をまばらに含む。
2 5YR4/6 赤褐色 砂質シルト 粘性なし しまりなし 焼土。骨片をわずかに含む。
3 10YR4/6 褐色 砂 粘性なし しまりなし 炭を20%含む。骨(粒小)が広く混じる。
S (礫) の周りには、炭が付着して黒くなっている。

第6図 八丁館跡B区1号堀(土坑・炭・集石・骨)検出状況



No	出土地点	層位	器種	石質	産地	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	備考	写真
1	上段平場	粗掘埋土内	尖頭器	頁岩	北上山地	4.6	2.3	0.1	8.12	一部破損	原寸
2	中段南側	Ⅶ層	磁器・平椀?		瀬戸・美濃	5.7	5.7	0.8	54.83	底部のみ	原寸
3	11C	Ⅶ層	かわらけ底部			4.9	4.4	1.0	26.31	反転実測	原寸
4	11C	Ⅶ層	須恵器胴部			8.2	10.6	1.2	146.15		1/3
5	B区堀	埋土内	寛永通寶			2.1	2.1	0.1	2.77		原寸
6	B区堀	埋土内	永楽通寶			2.2	2.2	0.1	2.63	遺構外出土	原寸
7	B区堀・C3	埋土内	人骨			7.0	2.6	1.8		写真のみ掲載	1/2
8	B区堀・C3	埋土内	人骨			8.2	2.4	1.9		写真のみ掲載	1/2
9	B区堀・C3	埋土内	人骨			4.1	2.6	1.2		写真のみ掲載	原寸

第7図 八丁館跡出土遺物



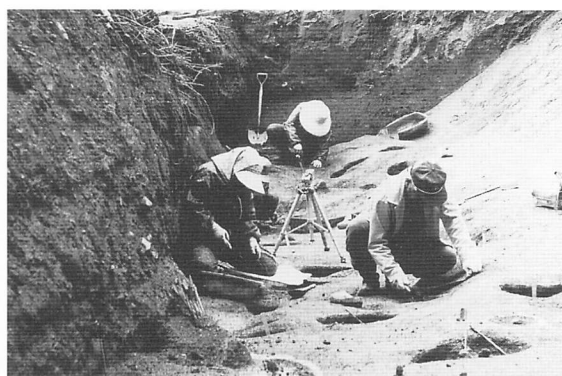
調査区遠景（南から）



調査区近景（上から）



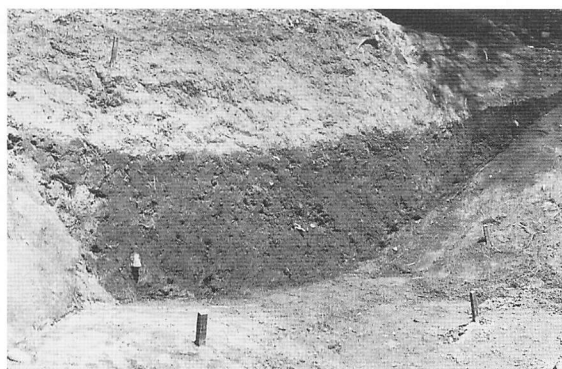
調査開始状況



作業風景



A区基本土層



B区基本土層



A区上部東側全景



A区上部西側全景

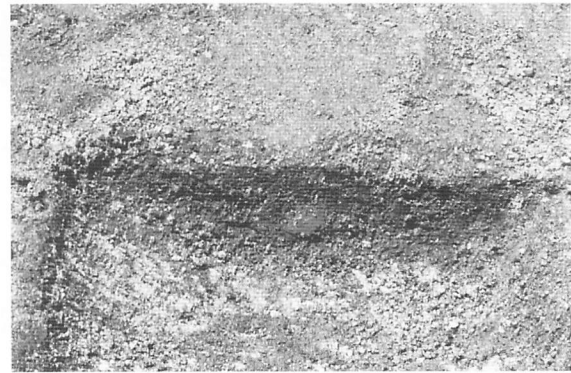
写真図版1 八丁館跡調査前状況・基本土層・A区上部全景



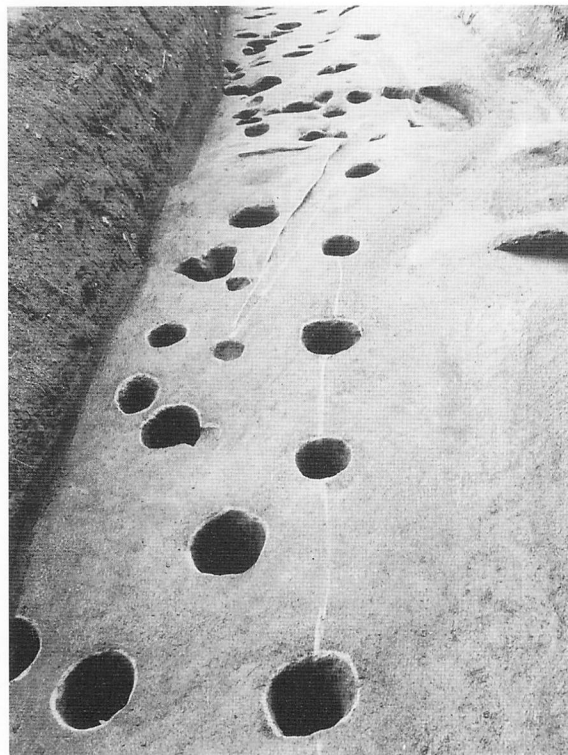
1号掘立柱建物跡



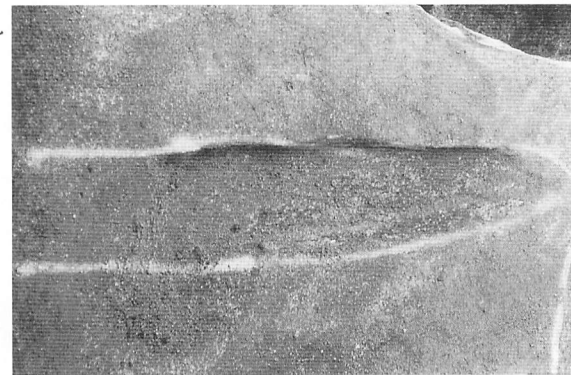
A区下部平場全景



2号溝断面



1号柱穴列2・3号溝



3号溝全景

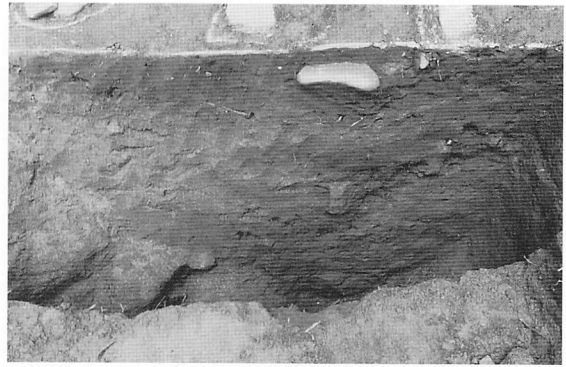


3号溝断面

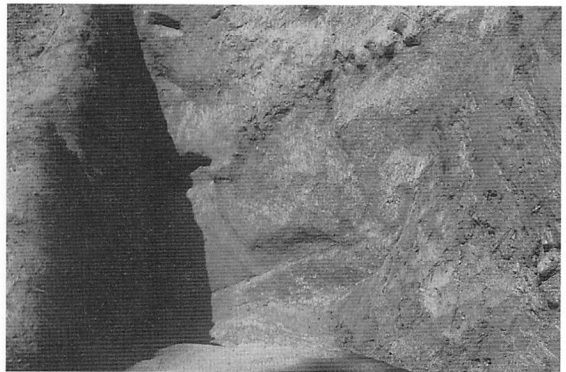
写真図版2 八丁館跡1号掘立柱建物跡2・3号溝



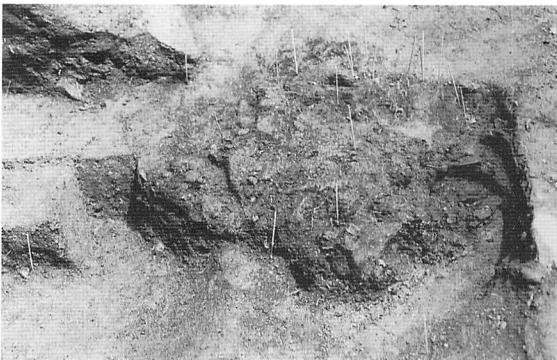
1号堀検出状況（西から）



1号堀・土坑断面（南から）



1号堀完掘（東から）



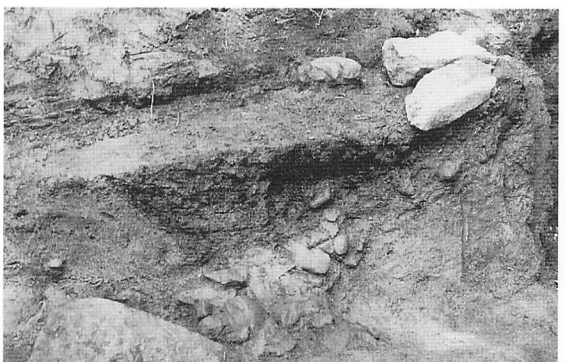
炭（C3）検出



炭（C3）断面



炭（C3）完掘

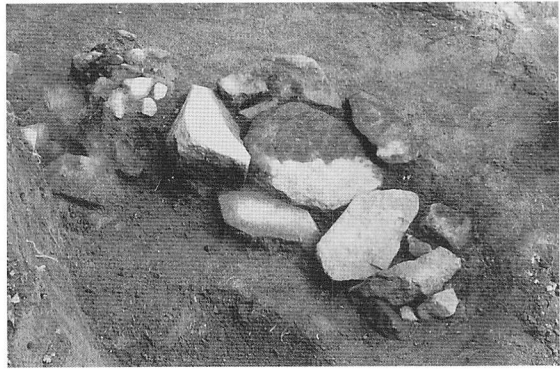


炭（C1）断面

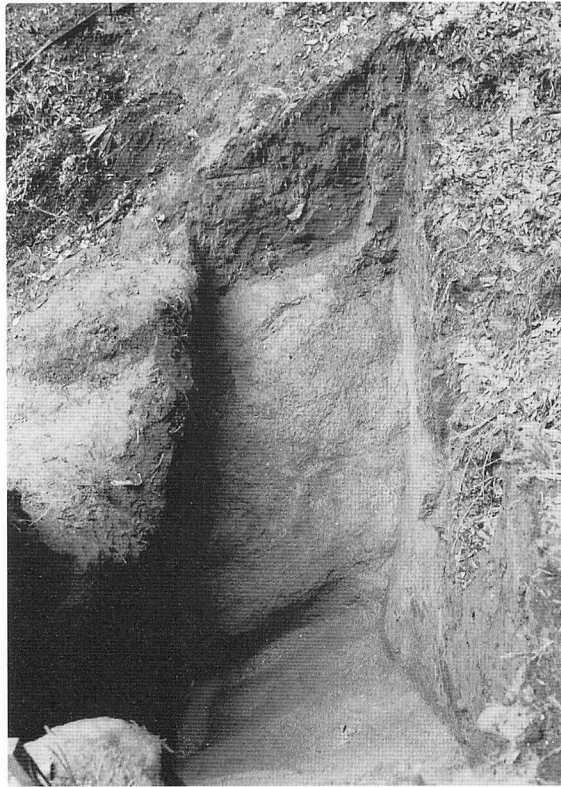
写真図版3 八丁館跡1号堀、炭集中部（C3・C1）



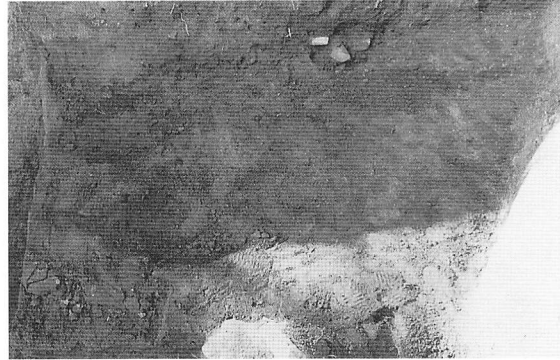
炭 (C 4) 断面



炭 (C 4) 炭除去後



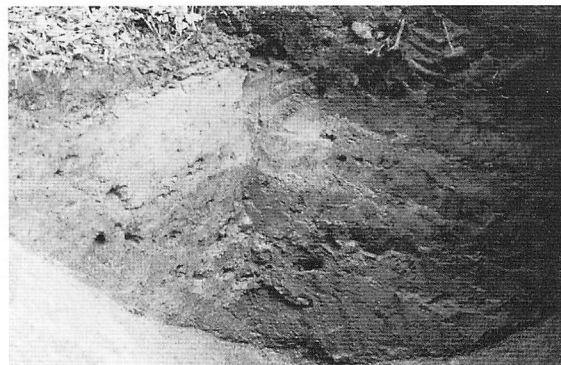
2号堀 (南) 完掘 (東から)



炭 (C 4) 石除去後



2号堀 (南) 断面 (南から)

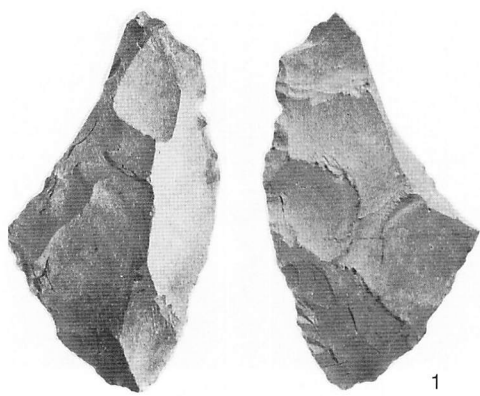


2号堀 (北) 全景



2号堀 (北) 断面

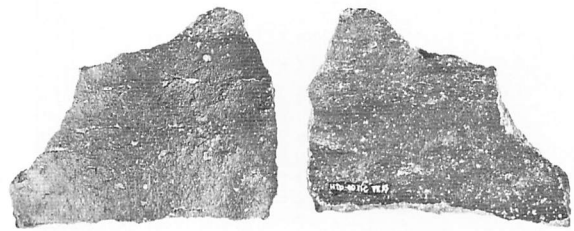
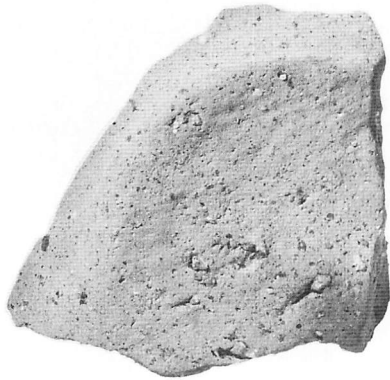
写真図版 4 八丁館跡 2号堀、炭集中部 (C 4)



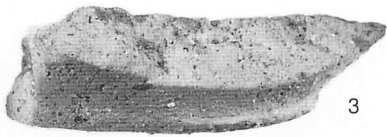
1



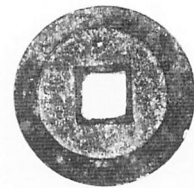
2



4



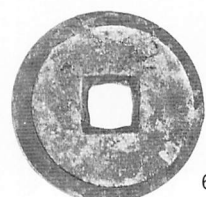
3



5



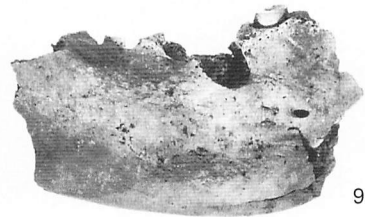
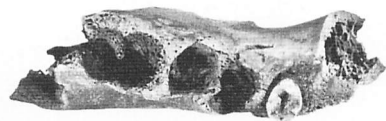
7



6



8



9

写真図版5 八丁館跡出土遺物（石器・土器・銭貨・骨）

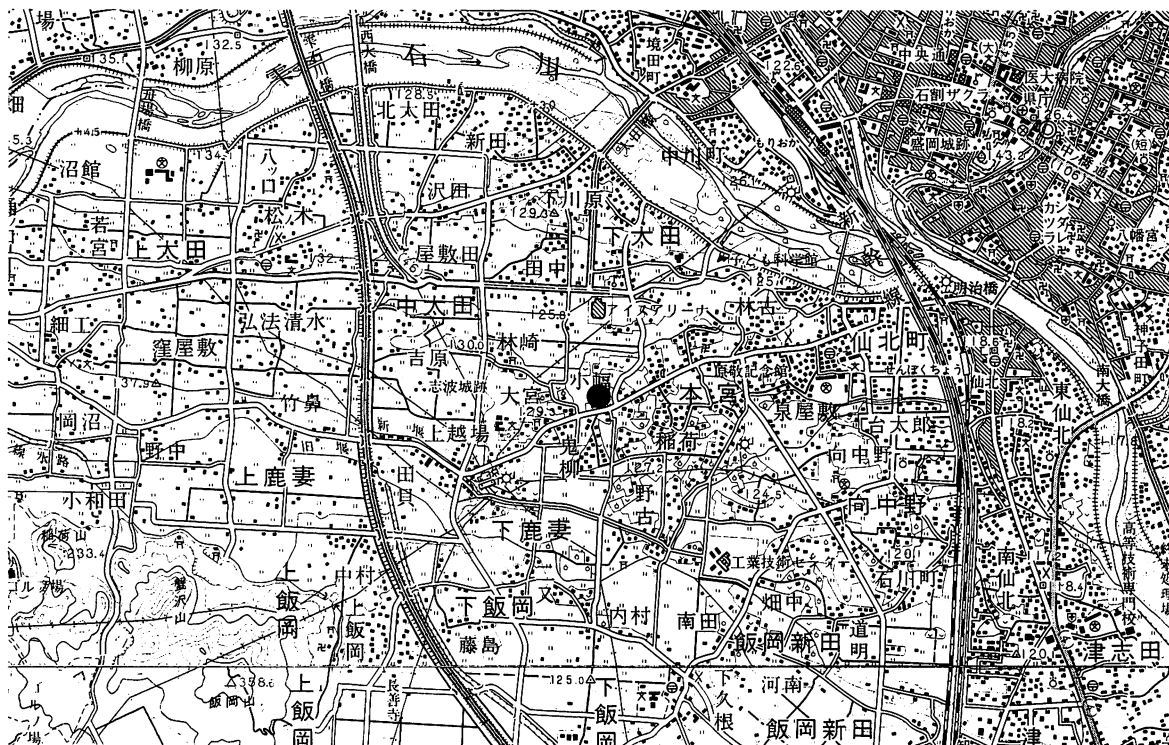
(48) 小^{こはば}幅遺跡第15次調査

所在地 盛岡市本宮字小^{こはば}幅26-2ほか
委託者 盛岡市盛南開発課
事業名 盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間 平成12年4月14日～6月30日
調査対象面積 6,022㎡
発掘調査面積 6,454㎡
遺跡番号・略号 LE16-2009・OKH-00-15
調査担当者 古舘貞身・原美津子
協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に、市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に、岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事



遺跡位置

1:50,000 盛岡・日誌

業の実施認可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間で事業予定期間とし、面積313haを対象とした、土地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業対象地域に係わる埋蔵文化財取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は、財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成12年度の事業として確定した。これを受け平成12年4月3日に財団法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結し発掘調査を実施することとなった。

小幡遺跡の第15次調査は平成12年4月14日に開始され、同年6月30日に終了する。

2. 遺跡の立地

小幡遺跡は、JR東北本線仙北町駅より西へ約2.3kmに位置する。雫石川によって形成された河岸段丘上に立地し、北緯39度41分3秒、東経141度7分31秒周辺にあたる。標高は126m前後で、調査区の現況は宅地跡の更地、及び畑地である。

なお、西方約1kmには古代城柵「志波城」跡があり、本遺跡は志波城跡の外郭東辺の外に位置する10世紀前後の平安時代の一般集落であり、周辺には本宮熊堂B遺跡・林崎遺跡・矢盛遺跡などがある。

3. 遺跡の基本層序

本調査区の周囲の土層は場所によって変化している。これは雫石川の氾濫によるものであろうか、自然堤防や後背湿地があり、場所によっては表土直下が礫層となる部分や、シルト質の堆積が見られる所など様々である。

本調査区は3ブロックに分かれており、細分すればそれぞれで違いがあるが、大きく分けて、A区B区と同一のものとし、C区は全く様相が違うため、独自に設定した。C区については、隣接する第16次調査区の基本層序を共用するため、第16次調査報告を参照されたい。

I層 10Y R2/3 黒褐色土 しまりやや疎 粘性中 ごみ・草木根・円礫が多量に混入（表土）

II層 10Y R2/1 黒色土 しまりやや疎 粘性やや強 円礫混入

III層 10Y R5/6 黄褐色砂礫 しまりやや密 粘性弱（地山）

IV層 10Y R5/6 黄褐色砂 しまりやや密 粘性弱（地山）

4. 調査の概要

調査区の現況は現代の住宅跡地及び畑地である。調査区は3つに分かれており、それぞれA・B・C区として調査した。

A区は宅地跡の更地であるが、瓦礫が散乱する状態であった。建物は建て替え等があったらしく、現畑地も攪乱を受けていた。遺構は土坑や柱穴状ピットを検出したが、埋土はほとんど同じであり、現代のものが多くあると思われる。また植木の抜根跡、風倒木痕も見られる。

B区の攪乱は宅地移転時のもので、III層にまで及んでいる箇所もあり、II層での遺構検出は困難であったため、III層で行った。遺物のほとんどは移転時の廃棄物で、陶器片、ガラス片、プラスチック類、空き缶類である。遺構は攪乱を受けていないところで、柱穴状ピット2基をかりうじて検出したが時期・性格等は不明である。

C区は畑地で、以前は水田であったらしい。厚さ20cm前後の表土を除去すると、砂質の褐色土となり、C区ではこれが平安時代の遺構検出面である。但し、この検出面は表土から浅いため攪乱を受けている模様で、

現代の耕作時の残留物等も多かった。この面での精査終了後さらに、下層の黄褐色土面まで検出面を下げ2次検出を行った。遺物は全く出土せず、遺構も柱穴状ピットと土坑が数基見えるだけで、これらも上からの掘り込みであったと思われる。

調査区内全体で検出された遺構は、土坑43基、竪穴状遺構2基、焼土遺構1基、溝跡1条、井戸跡2基、溝状遺構2条、柱穴状ピット275基である。遺構のほとんどがA区とC区で検出されており、B区の遺構は柱穴状ピット2基のみと極端に少なかった。ここで遺構として登録したものの多くはその性格が不明であるが、検出時に遺構プランとして観察されたものは全て精査を行った。

<土坑> (R D358~R D400)

検出された遺構数は43基であるが、紙面の都合上代表的なもののみを掲載し、他は表掲載とする。

A区で36基、C区で7基検出した。このうち墓坑が3基あるが、周辺住民からの聞き取りにより、近世・近代のものと判明した。

A区の検出面は黄褐色砂礫土(Ⅲ層)で、遺構埋土は黒色土を基本にした単層のものが多い。R D362、R D378は縄文時代の陥し穴のような細長い楕円形であるが、不整な底面形、断面形から判断して風倒木痕など自然的に形成されたものかもしれない。同じ埋土の土坑から縄文土器や不定形の石器と剥片が出土しているものもあるが、いずれも摩耗が激しく、河川の水 flow などによる移動、或いは人為的に運び込まれた可能性も考えられる。

C区は表土除去後の、褐色の砂質シルトの面で検出した。C区では遺構が南側に集中している。R D395は径160cm前後の円形で、深さ46cmである。底から桶底板が出土した。側板は残っていない。同様の土坑が第2次調査で2基報告されている。それらの用途は不明であるが、時期は近世以降と見てよいであろう。

<竪穴状遺構> (R E044・045)

R E044はA区北側から検出した。方形基調の不整形で、規模は長径が360cm、深さ30cm弱である。埋土はA区検出の土坑類と同様黒色土の単層である。出土遺物は無く、時期は不明である。

R E045はC区南側で検出した。1辺230cm前後の方形で、深さは19cmと浅い。埋土は酸化鉄を含む黒褐色土で、木っ端・陶磁器片が出土している。底面には特に柱穴・焼土などの跡は見られず、また平坦ではない。時期・用途とも不明である。

<焼土遺構> (R F017)

A区北端で検出した。平面形は不整形で規模は長径82cmである。表面には炭化物が散乱している。断面を見ると、焼土層は2つのブロックに分かれており暗褐色土を上下から挟んでいる。厚さは下の焼土の方が厚く、最大10cmを測る。出土遺物は無く、用途・時期とも不明であるが、北西方に近接して平安時代の溝跡(R G010)がある。この検出面と類似しており、あるいはこの溝跡と同時期のものかもしれない。

<溝跡> (R G010)

A区北西端の礫層が途切れる地帯で長さ約5m、幅約1m、深さ約30cmの溝跡を検出した。第2次調査において検出された溝跡R G010から続くもので、本調査区外まで延びていくようである。

埋土上位の黒褐色土にはT o - aと思われるものが含まれており、この層からは土師器・須恵器片が数点出土している。

<井戸跡> (R I009・010)

何れもA区中央で検出した。R I009は下半に円形の石組みが残っている。本来は上部から石が組まれていたらしく、廃棄時に周囲の石組みを崩して埋められた可能性がある。埋土に径20cm前後の礫が多量に

混じっていたことから判断した。

R I 010は、旧地権者の住宅に伴う井戸であり、これも石組みがあったそうだがその痕跡は認められなかった。2基とも検出面から約1.9m下で湧水が見られ、最近まで使われていたものらしい。

<溝状遺構> (R Z 024・025)

A区南東で2条並行して検出した。2条とも掘り込みは浅く、埋土はA区の他の遺構と同様黒色土である。時代を確定できるような遺物は出土していない。これらは現代の建物跡に並行していることから、その住宅に付属する何らかの施設だった可能性が高い。

<柱穴状ピット群> (R Z 026)

円形基調で、筒型に掘り込まれた小規模の土坑を柱穴状ピットとした。A区で209基、B区で2基、C区で34基を検出した。A区のピットはほぼ全域に散在しているが、ピットが集中している地域では掘建柱建物跡を構成する配置が、少なくとも3棟分はあると思われる。埋土は黒色土を基本としており、礫・砂の混入している場合もあるが、単層のものが多し。掘り方、柱あたり等を観察できたものはなかった。

C区の柱穴状ピットは他の遺構同様南側に集中しているが、第16次調査区と合わせてみても建物跡を構成しそうな配置は見られない。埋土は黒褐色土を基本とした単層のものがほとんどである。

5. 出土遺物

出土遺物は、縄文土器片4点、剥片石器4点、土師・須恵器片小1/2袋、古銭11点、陶磁器片少量である。

1、2は胴から底部の一部を有するもので、何れもLR縦回転で施文している。1の底部は網代痕、2の底部には棒状工具での大胆な削痕が見られる。何れも縄文時代後期の粗製深鉢と思われる。何れもRD360出土。3は側縁に刃部をもつ削器であるが、川で洗われた様に全体が摩耗しており、もともとこの近辺に在ったものではないと思われるがRD374から出土。4、6は土師器底部である。4はロクロ使用で回転糸切り痕を底部にもっている。6は坏底部と思われるが、全体に摩耗しており、調整がミガキなのかどうか判別できない。5、7は須恵器坏である。5はやや深めの坏で、底部から口縁部までを有するが、完形にはならない。底部に回転糸切り痕をもっている。7も底部に回転糸切り痕を有する。遺構と遺物が時期的に一致するのが唯一これらの遺物であり、RG010周辺から出土している。8～11は陶磁器である。うち8～10は肥前産磁器、11は大堀相馬産陶器で18～19世紀の所謂雑器といわれるものの破片と思われる。9はRE045、10はRD396、11はRI009出土である。

12以降は古銭である。うち、12～16までの5点はRD365出土である。この土坑は近世墓だったかもしれない。何れも新寛永で銅銭である。17も新寛永の銅銭でPP200からの出土である。18は永楽通宝で、RI011の埋土最上位から出土しているが、このことをもって、RI011が中世遺構だとは言い難い。これは出土地点が上位であること、また井戸の形態が近世後半の形態と思われる事などからである。19～21も銅銭であるが、21は新寛永かどうか不明である。これらは、RD365周囲のトレンチから出土している。22はC区出土である。唯一の鉄銭であり私鑄銭の可能性はある。23は大正の刻印のある五厘硬貨である。

6. まとめ

今回の調査で確実に平安時代の遺構と確認できたものは、第2次調査から続く溝跡RG010のみである。その他の遺構は時期不明なものが多いが、大半は近世後半から近現代にかけてのものと思われる。隣接して行われている第2次・第4次調査の調査結果と照合してみると、本調査区に近づくにつれ遺構が薄くなる傾向にあり、本調査区は集落の外れに位置するものと考えられる。なお、小幅遺跡第15次調査(盛岡市分)に関わる報告はこれをもって全てとする。

混じっていたことから判断した。

R I 010は、旧地権者の住宅に伴う井戸であり、これも石組みがあったそうだがその痕跡は認められなかった。2基とも検出面から約1.9m下で湧水が見られ、最近まで使われていたものらしい。

<溝状遺構> (R Z 024・025)

A区南東で2条並行して検出した。2条とも掘り込みは浅く、埋土はA区の他の遺構と同様黒色土である。時代を確定できるような遺物は出土していない。これらは現代の建物跡に並行していることから、その住宅に付属する何らかの施設だった可能性が高い。

<柱穴状ピット群> (R Z 026)

円形基調で、筒型に掘り込まれた小規模の土坑を柱穴状ピットとした。A区で209基、B区で2基、C区で34基を検出した。A区のピットはほぼ全域に散在しているが、ピットが集中している地域では掘建柱建物跡を構成する配置が、少なくとも3棟分はあると思われる。埋土は黒色土を基本としており、礫・砂の混入している場合もあるが、単層のものが多し。掘り方、柱あたり等を観察できたものはなかった。

C区の柱穴状ピットは他の遺構同様南側に集中しているが、第16次調査区と合わせてみても建物跡を構成しそうな配置は見られない。埋土は黒褐色土を基本とした単層のものがほとんどである。

5. 出土遺物

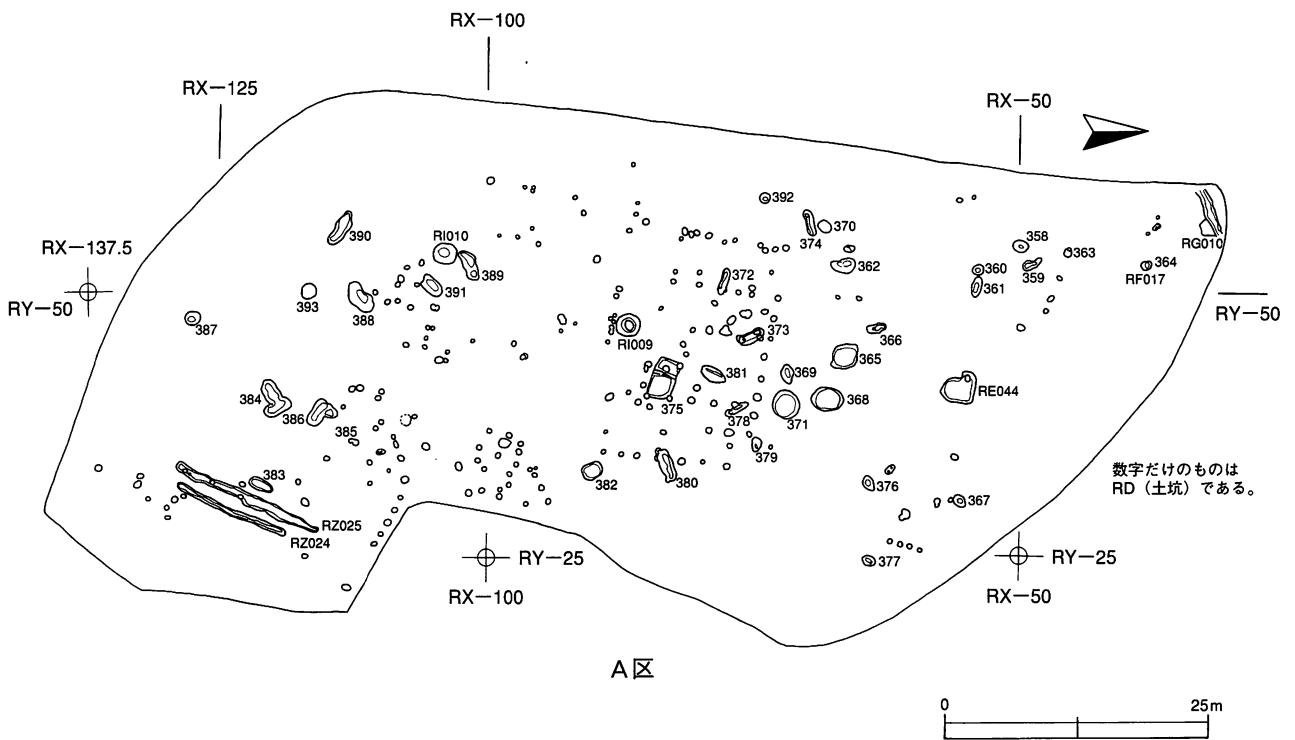
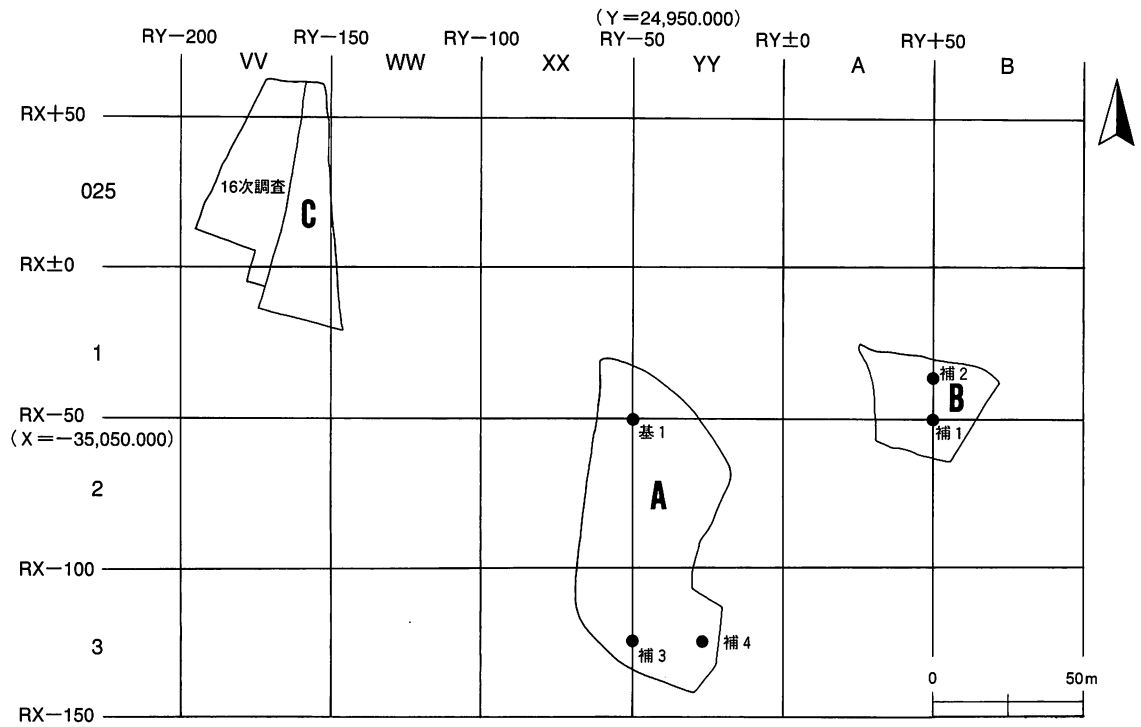
出土遺物は、縄文土器片4点、剥片石器4点、土師・須恵器片小1/2袋、古銭11点、陶磁器片少量である。

1、2は胴から底部の一部を有するもので、何れもLR縦回転で施文している。1の底部は網代痕、2の底部には棒状工具での大胆な削痕が見られる。何れも縄文時代後期の粗製深鉢と思われる。何れもRD360出土。3は側縁に刃部をもつ削器であるが、川で洗われた様に全体が摩耗しており、もともとこの近辺に在ったものではないと思われるがRD374から出土。4、6は土師器底部である。4はロクロ使用で回転糸切り痕を底部にもっている。6は坏底部と思われるが、全体に摩耗しており、調整がミガキなのかどうか判別できない。5、7は須恵器坏である。5はやや深めの坏で、底部から口縁部までを有するが、完形にはならない。底部に回転糸切り痕をもっている。7も底部に回転糸切り痕を有する。遺構と遺物が時期的に一致するのが唯一これらの遺物であり、RG010周辺から出土している。8～11は陶磁器である。うち8～10は肥前産磁器、11は大堀相馬産陶器で18～19世紀の所謂雑器といわれるものの破片と思われる。9はRE045、10はRD396、11はRI009出土である。

12以降は古銭である。うち、12～16までの5点はRD365出土である。この土坑は近世墓だったかもしれない。何れも新寛永で銅銭である。17も新寛永の銅銭でPP200からの出土である。18は永楽通宝で、RI011の埋土最上位から出土しているが、このことをもって、RI011が中世遺構だとは言い難い。これは出土地点が上位であること、また井戸の形態が近世後半の形態と思われる事などからである。19～21も銅銭であるが、21は新寛永かどうか不明である。これらは、RD365周囲のトレンチから出土している。22はC区出土である。唯一の鉄銭であり私鑄銭の可能性はある。23は大正の刻印のある五厘硬貨である。

6. まとめ

今回の調査で確実に平安時代の遺構と確認できたものは、第2次調査から続く溝跡RG010のみである。その他の遺構は時期不明なものが多いが、大半は近世後半から近現代にかけてのものと思われる。隣接して行われている第2次・第4次調査の調査結果と照合してみると、本調査区に近づくにつれ遺構が薄くなる傾向にあり、本調査区は集落の外れに位置するものと考えられる。なお、小幅遺跡第15次調査(盛岡市分)に関わる報告はこれをもって全てとする。



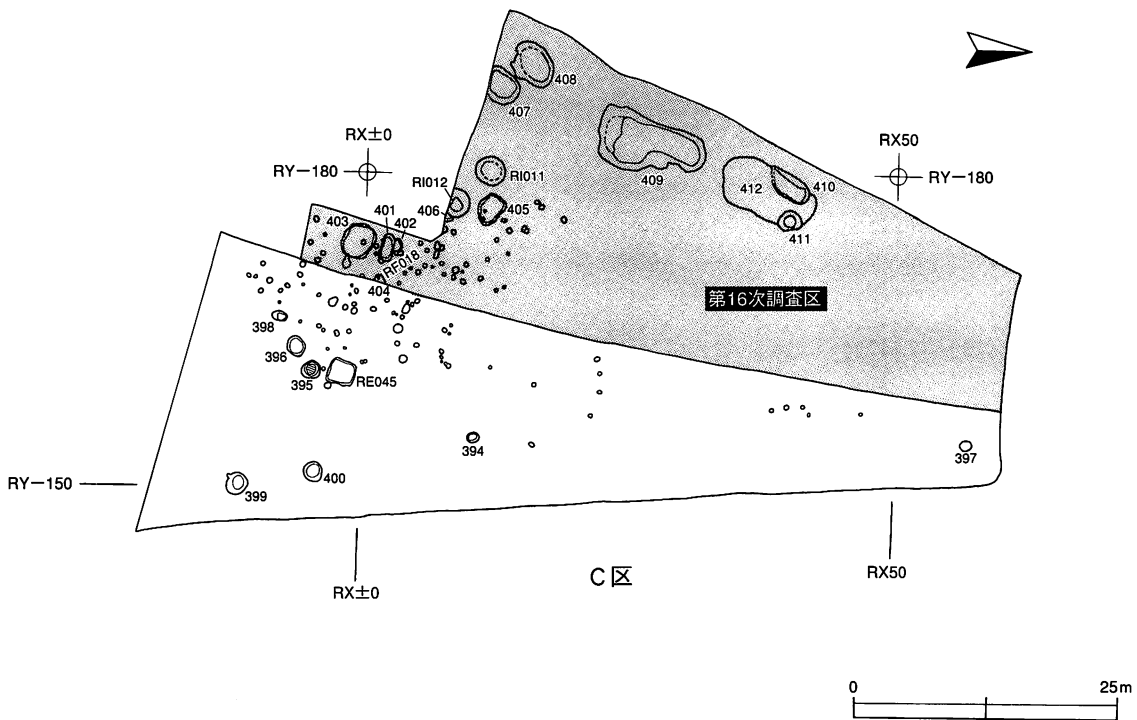
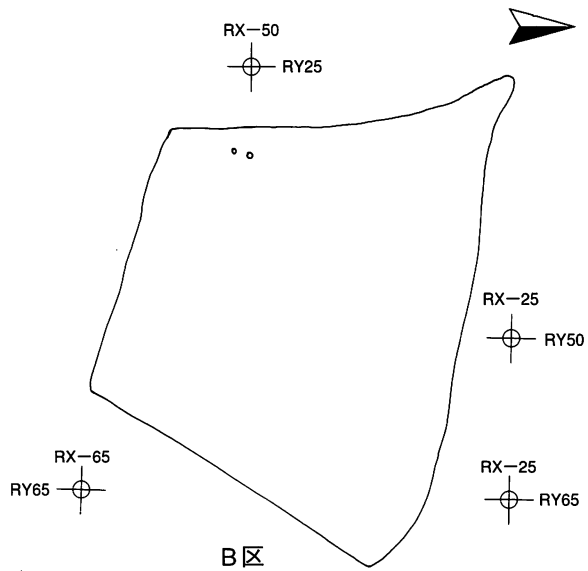
第1図 小幡遺跡第15次調査グリッド・遺構配置図

グリッドの設定にあたっては盛岡市教育委員会の方針に準じ、平面直角座標第Ⅹ系を座標変換した調査座標を用いた。本調査区域が含まれる大宮地区の調査座標原点は $X=-35,000.000$ 、 $Y=25,000.000$ である。

この座標原点を基点として一辺50mの大グリッドに区画し、原点から東へはA～Y、西にはYY～AA、南へは1～25、北には025～001を付しこれを組み合わせて大グリッドを表示した。報告書への掲載については、これも盛岡市教育委員会の方法に準じて原点をRX±0、RY±0とし、1m毎に北へはRX+○、南へはRX-○、東へはRY+○、西へはRY-○と表示した。これは第16次調査も共通である。

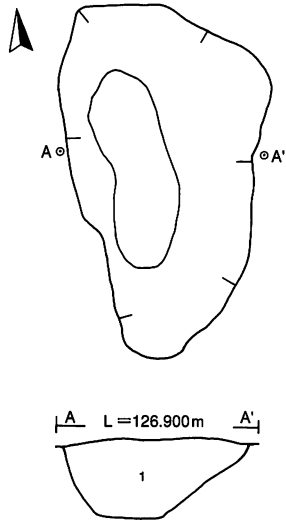
今回の調査の基準とした測量成果値は下記のとおりである。

- 基準杭 1 $X=-35,050.000$ $Y=24,950.000$
- 補助杭 1 $X=-35,050.000$ $Y=25,050.000$
- 補助杭 2 $X=-35,035.000$ $Y=25,050.000$
- 補助杭 3 $X=-35,125.000$ $Y=24,950.000$
- 補助杭 4 $X=-35,125.000$ $Y=24,975.000$



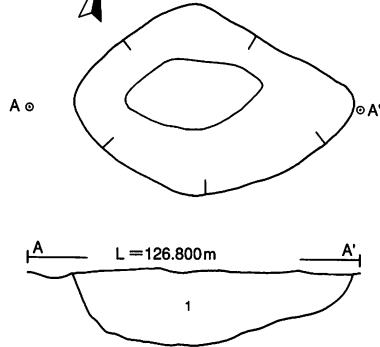
第 2 図 小幡遺跡第15次調査遺構配置図

RD362土坑



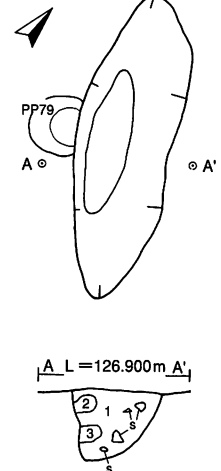
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性弱 しまりやや密 円礫を多く含む
10YR4/4 褐色の砂・円礫をブロック状に含む

RD369土坑



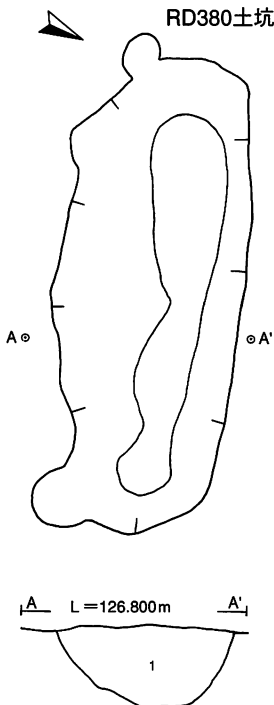
- 1 10YR2/1 黒色土 (やや白味がかかる) 粘性弱 しまりやや疎 円礫含む ガラス片、陶磁器片出土

RD378土坑



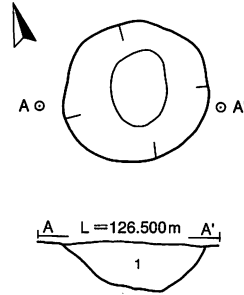
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性弱 しまりやや密 礫を多く含む
2 10YR3/4 暗褐色土 粘性弱 しまりやや密 砂が混入する
3 10YR4/4 褐色土 粘性弱 しまり中 礫(小)・砂が混入

RD380土坑



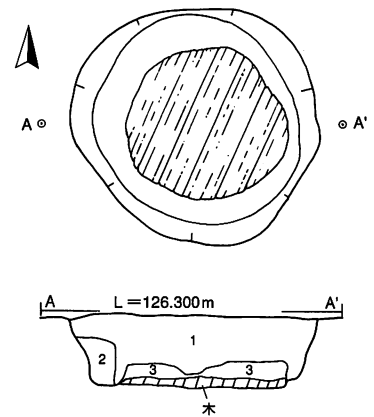
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性弱 しまりやや密 径2~5cm、10cm前後の円礫を多く含む

RD392土坑

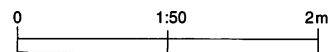


- 1 10YR2/1 黒色土 粘性やや弱 しまりやや疎 礫を全体に含む

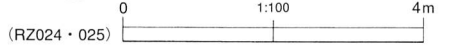
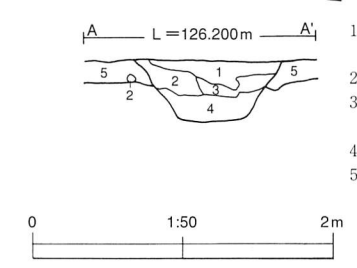
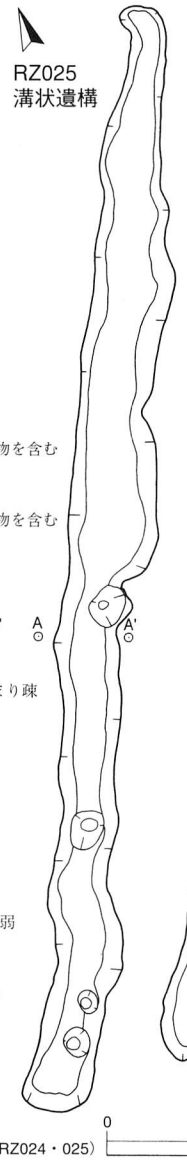
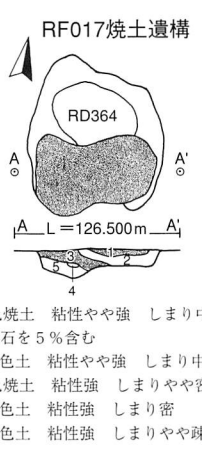
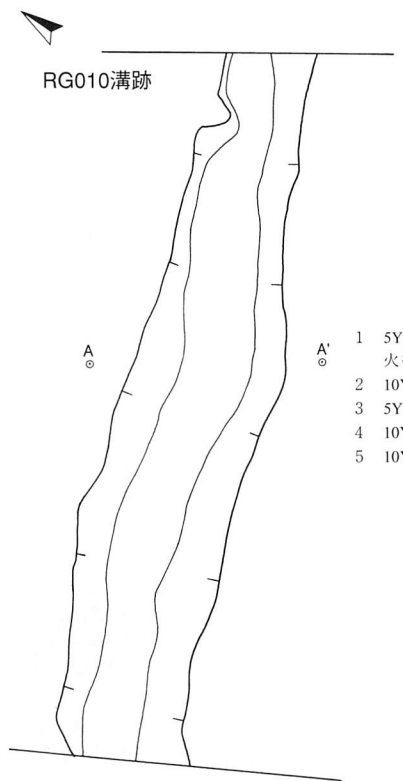
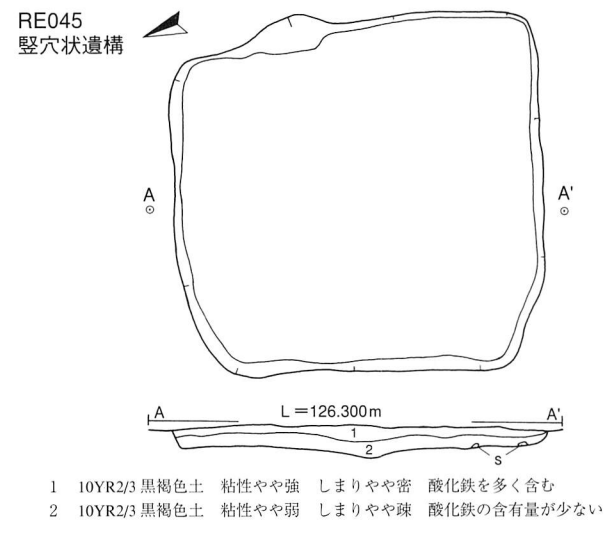
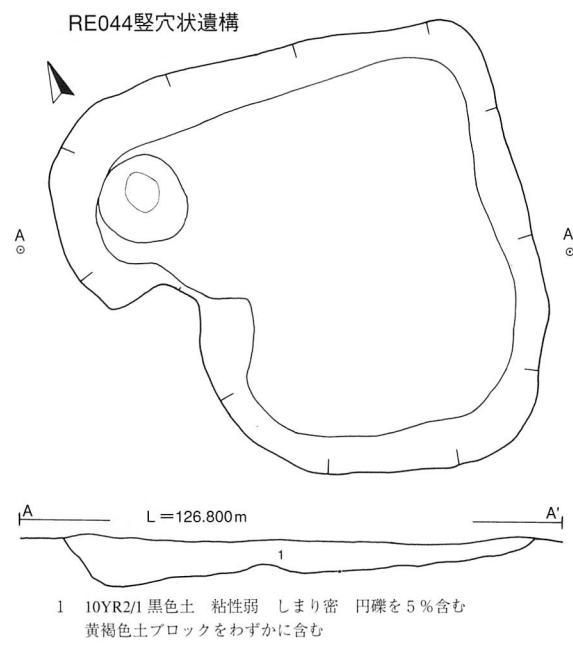
RD395土坑



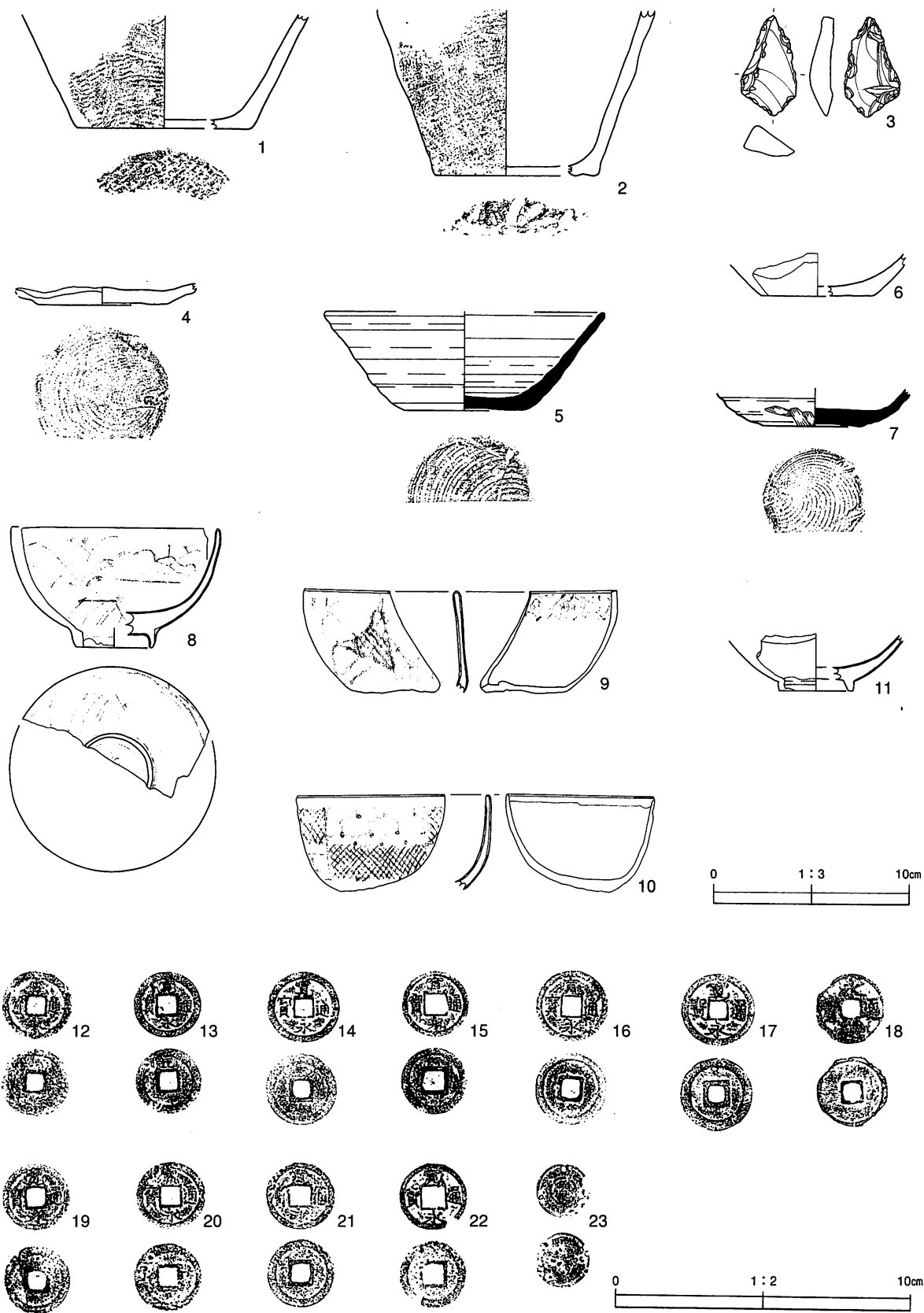
- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや弱 しまりやや密 黄色の酸化した土をブロック状に含む
2 10YR2/2 黒褐色土 粘性強 しまりやや密
3 10YR1.7/1 黒色土 粘性弱 しまり疎 水分を多く含む



第3図 小幡遺跡第15次調査土坑



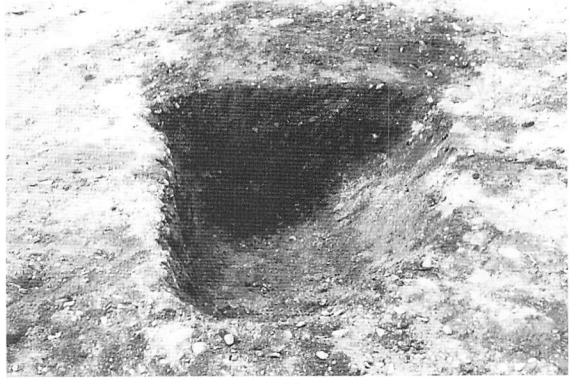
第4図 小幅遺跡第15次調査竪穴状・焼土・溝状遺構、溝跡



第5図 小幡遺跡第15次調査出土遺物



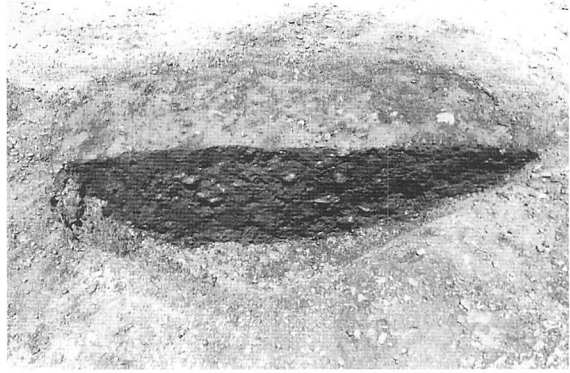
RD362 平面



RD362 断面



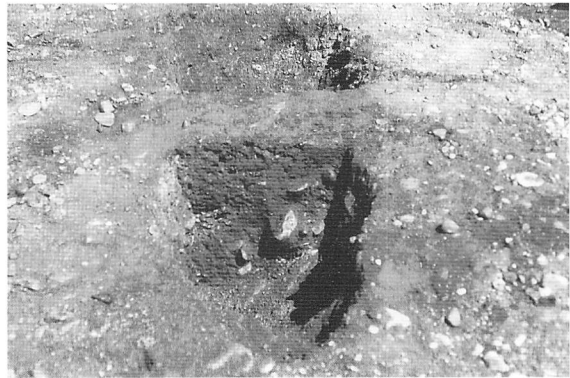
RD369 平面



RD369 断面



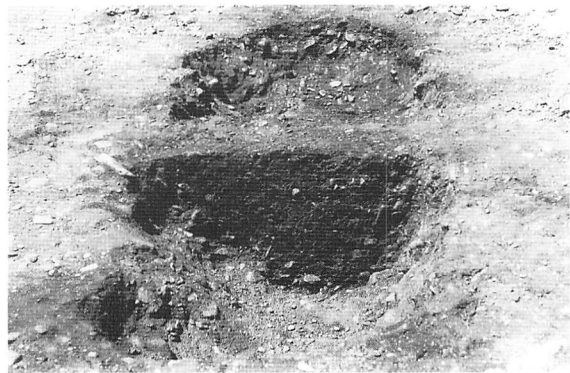
RD378 平面



RD378 断面



RD380 平面

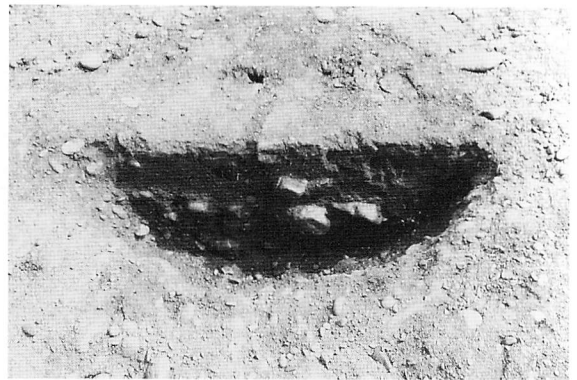


RD380 断面

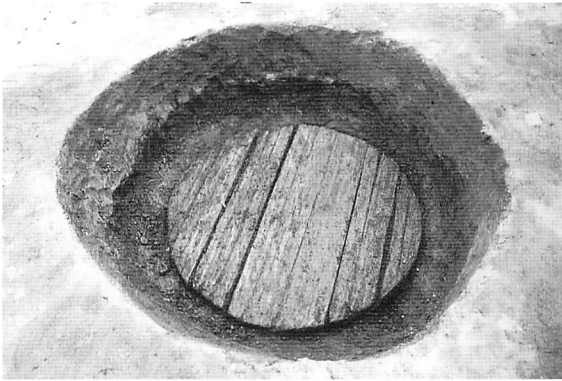
写真図版 1 小幅遺跡第15次調査土坑



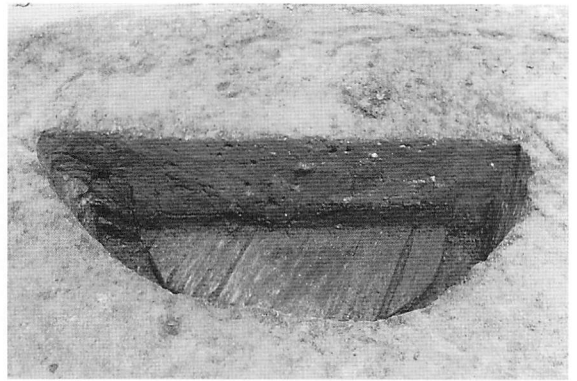
RD392 平面



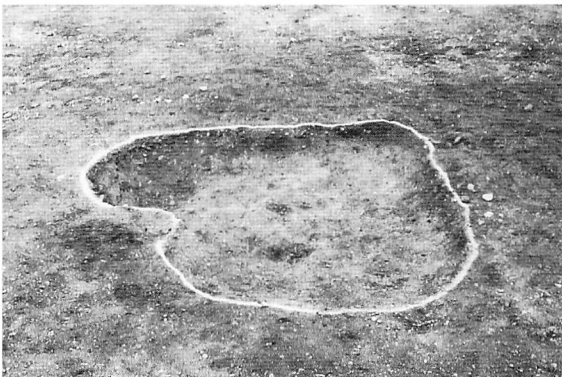
RD392 断面



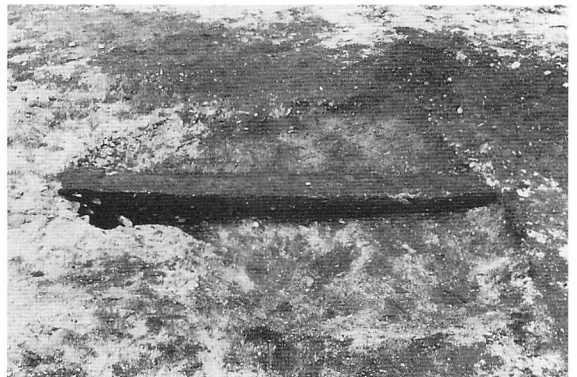
RD395 平面



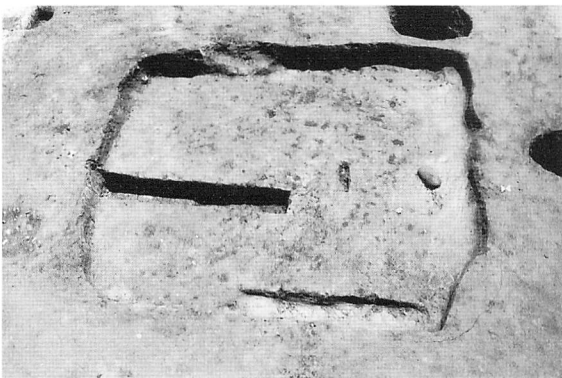
RD395 断面



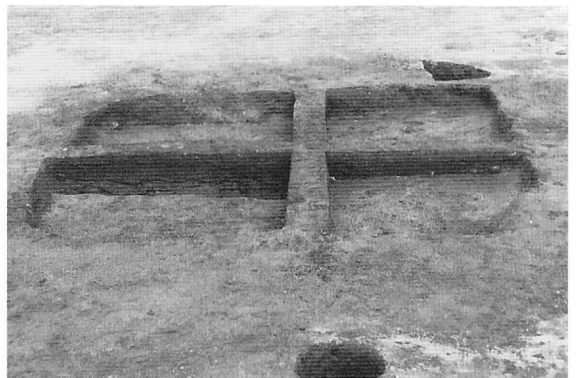
RE044 平面



RE044 断面



RE045 平面

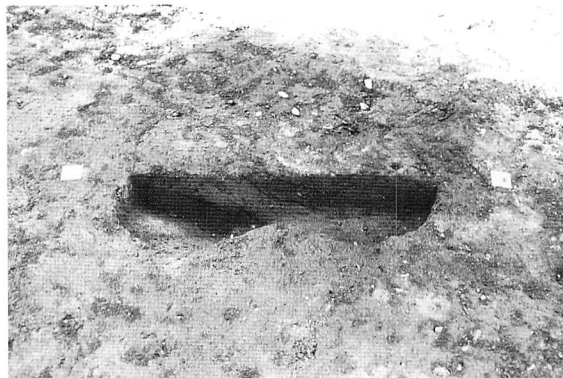


RE045 断面

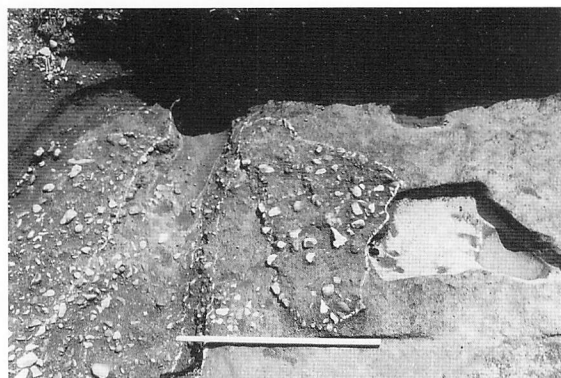
写真図版 2 小幡遺跡第15次調査土坑・竪穴状遺構



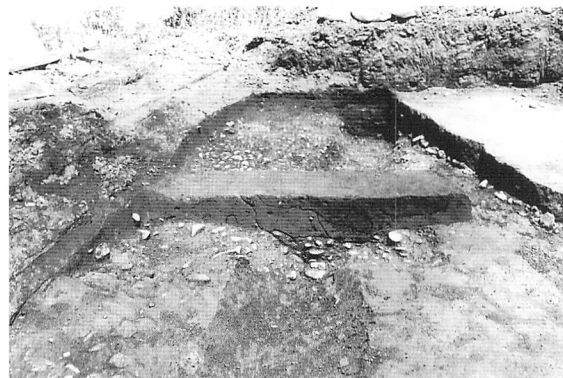
RF017 平面



RF017 断面



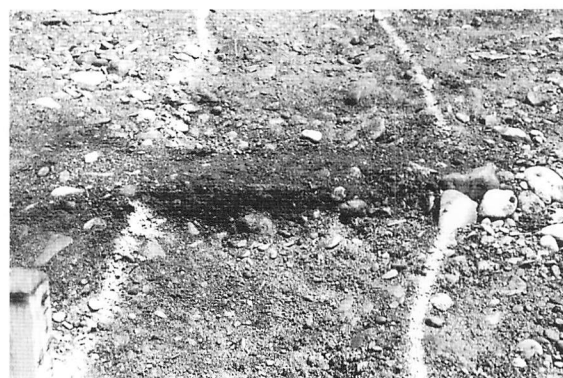
RG010 平面



RG010 断面



RZ024・025 平面

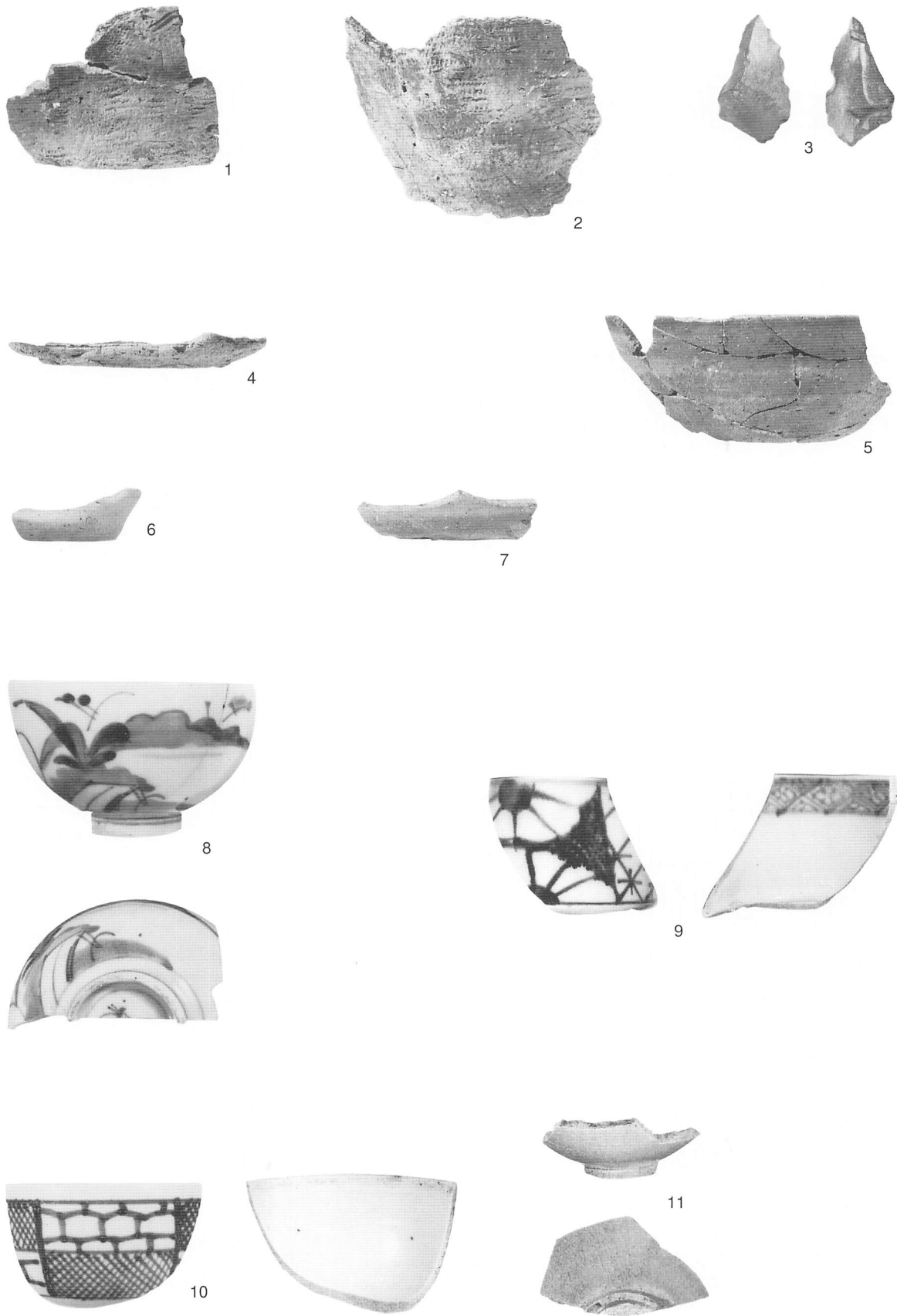


RZ024 断面



RZ025 断面

写真図版3 小幅遺跡第15次調査焼土遺構・溝跡・溝状遺構



写真図版 4 小幅遺跡第15次調査出土遺物

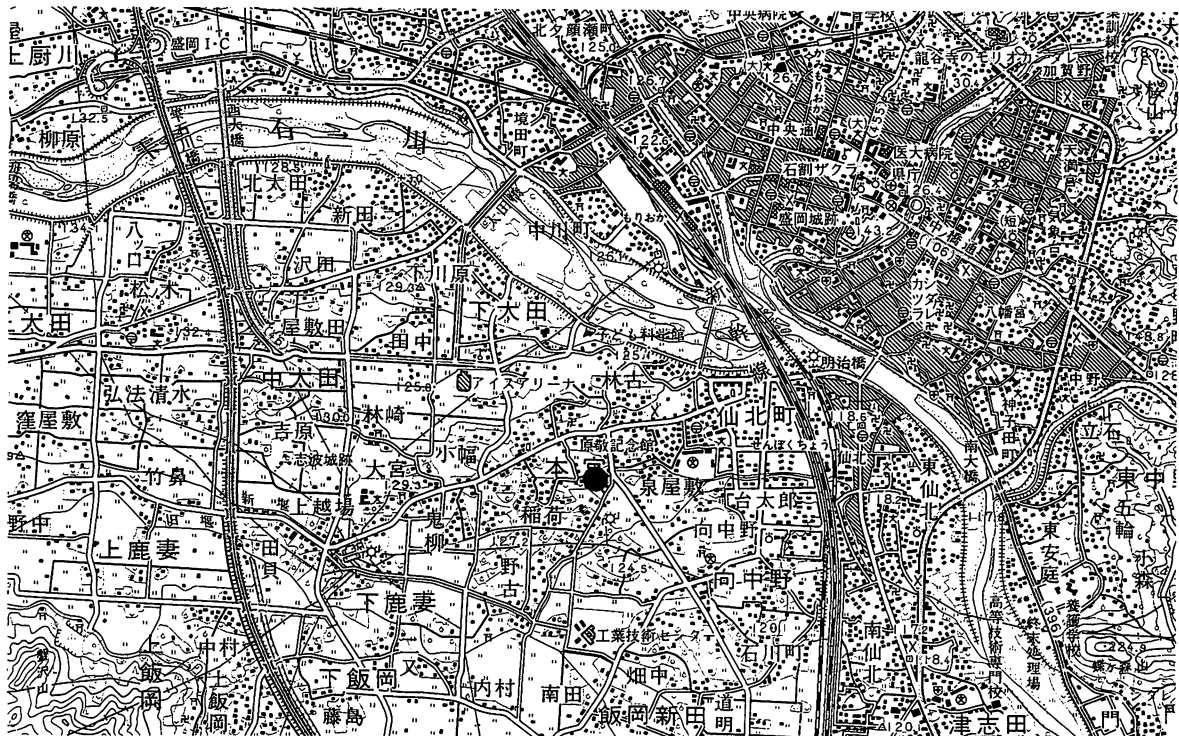
(49) 熊堂^{くまどう}B遺跡第9次調査

所在地 盛岡市本宮字野古62
委託者 盛岡市盛南開発課
事業名 盛岡南新都市開発整備事業
発掘調査期間 平成12年5月18日～5月31日
調査対象面積 186㎡
発掘調査面積 186㎡
遺跡番号・略号 LE16-2118・OKO-00-9
調査担当者 中田 迪・千葉正彦
協力機関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済、文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の概成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整備事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業



遺跡位置

1:50,000 盛岡

の実施許可が下り、平成3年から平成17年までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした土地
区画整備事業が実施される事となった。

この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、盛岡市
教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は財団法人岩手県文化振興事業団
の受託事業とすることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成12年の事業として確定した。これを受
け平成12年4月3日に財団法人岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長の間で委託契約を締結し発掘調査を
実施する事となった。熊堂B遺跡の第9次調査は平成12年5月18日に開始され、同年5月31日に終了した。

2. 遺跡の立地

熊堂B遺跡の所在する、盛岡市は岩手県の中央部に位置している。熊堂B遺跡はJR東北本線仙北町駅の
西側約1.9kmにあり雫石川右岸に形成された河岸段丘上に立地している。

国土地理院発行の2万5千分の1地形図「盛岡」NJ-54-13-14-2（盛岡14号-2）の図幅に含まれ
北緯39度40分47秒、東経141度08分40秒付近に位置する。標高は120.3~121.6m、雫石川との比高は約5m
で現状は水田及び畑地である。今次調査と並行して行われた熊堂B遺跡第10次調査区と隣接している。

3. 遺跡の基本層序

I層 10YR 2/2 黒褐色土 粘性ややあり しまりややあり

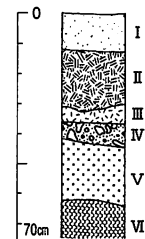
水田畑地の耕作土

II層 10YR 1.7/1 黒褐色土 粘性あり しまりあり

酸化鉄(サビ)の集積が見られる

III層 10YR 1.7/1 黒褐色土 粘性あり しまりあり

IV層 10YR 3/2 黒褐色土 粘性あり しまりあり



基本層序

4. 調査の概要

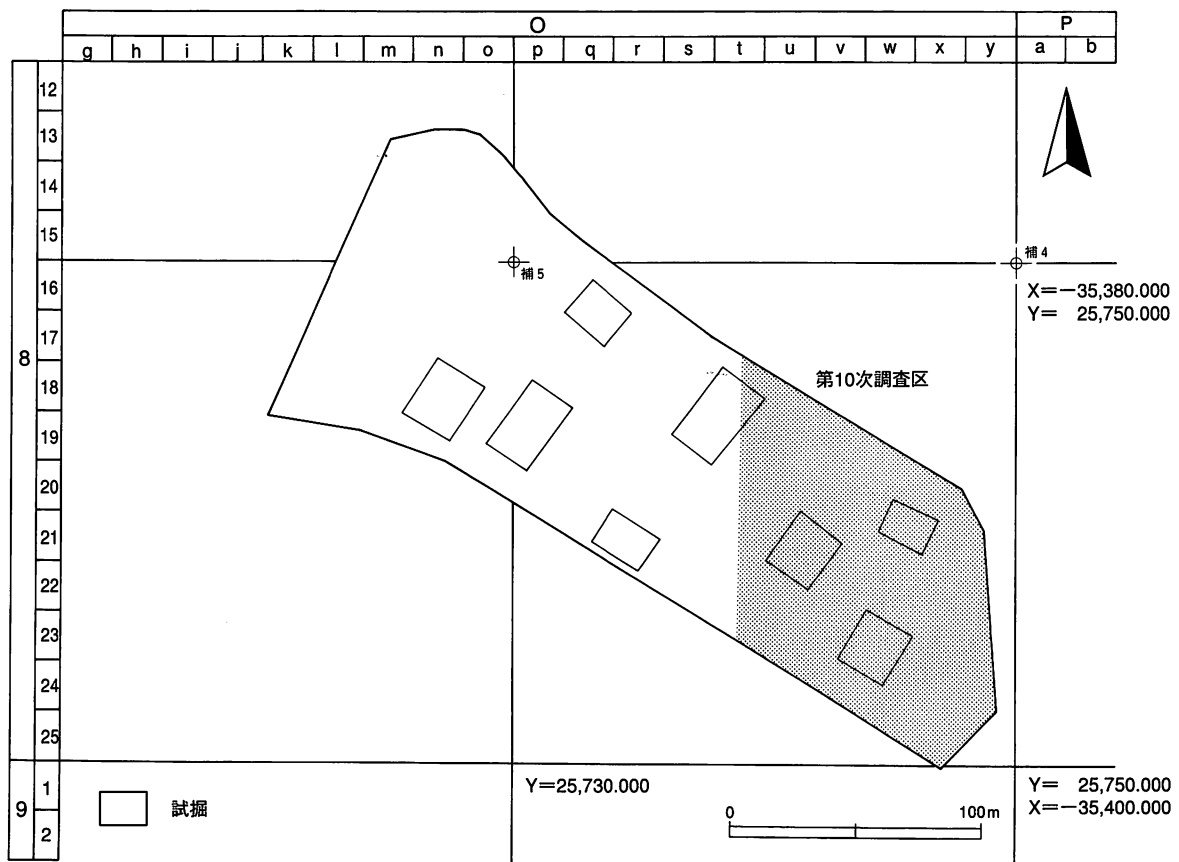
調査対象面積に試掘を入れて、遺構の有無を確認したが、
遺構は検出できなかった。

遺物は土師器片と石製品が出土している。

5. まとめ

今次調査では、遺構は確認できなかった。埋土から調査区は昔の沢跡であっただろうと思われる。表土下
から土師器1点、糸切り痕のある坏の底部破片と石製品の磨石1点が出土している。磨石は長さ11.1cm・幅
厚さ3~4.6cm・重さ270gで石質はひん岩・産地は北上山地である。片側にかすかに敲打痕が見られる。こ
の少ない資料から時代を推定することは難しい。今次調査と並行して行われた第10次調査区では古代の集落
の一部が検出されている。

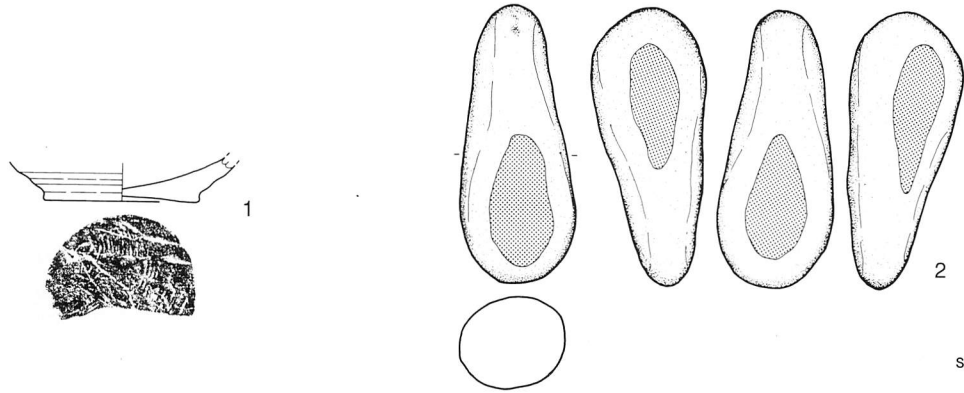
なお、熊堂B遺跡第9次調査（盛岡市分）に関わる報告は、これをもって全てとする。



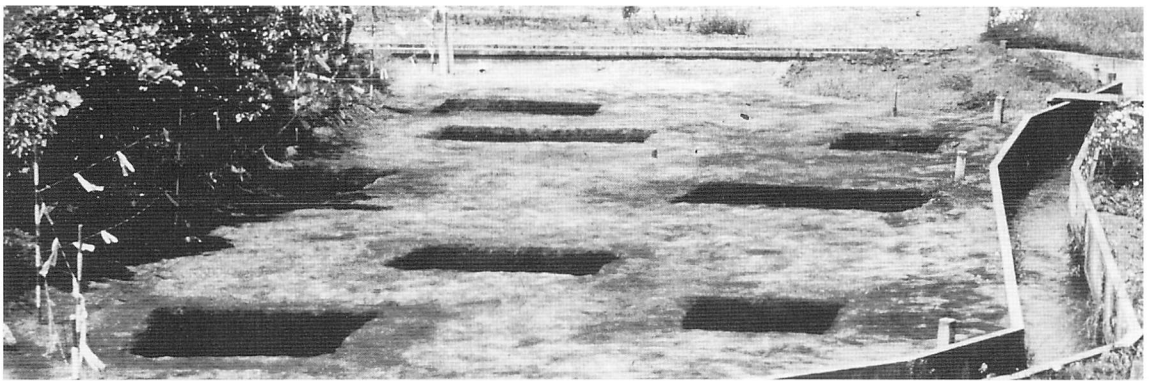
熊堂B遺跡第9次調査遺構配置図

報告書抄録

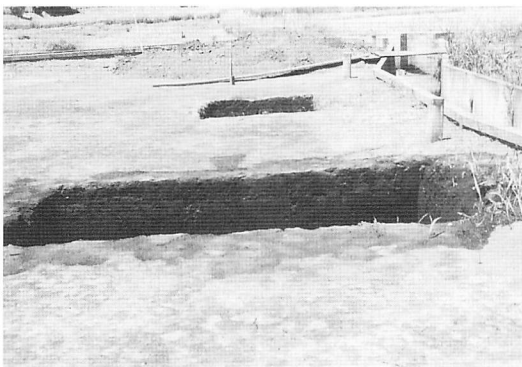
ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	中田 迪							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL.019-638-9001・9002							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃 〃 〃	〃 〃 〃			
熊堂B遺跡第9次発掘調査	岩手県盛岡市本宮字野古62	03201	LE16-2118	39度40分47秒	141度08分40秒	20000518~20000531	186㎡	盛南開発関連区画整備事業
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
熊堂B遺跡第9次発掘調査		古代?	遺構は確認できなかった		土師器片 1点 石製品 1点			



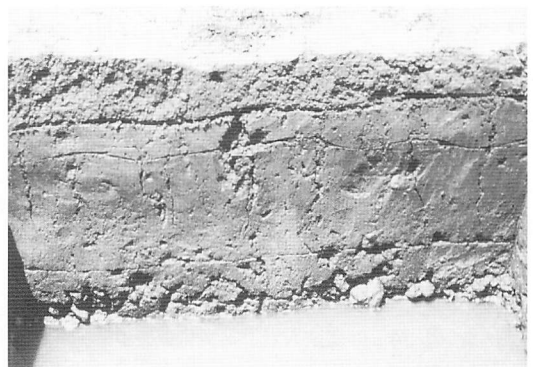
熊堂B遺跡第9次調査出土遺物



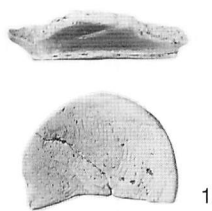
調査区全景



試掘穴



基本層序



1



2

写真図版 熊堂B遺跡第9次調査

(50) だいなかたいら
台中平遺跡

所在地 二戸市石切所字台中平108-3 ほか
委託者 二戸市新幹線対策課
事業名 新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業
発掘調査期間 平成12年6月12～8月10日
調査対象面積 1,660m²
発掘調査面積 1,660m²
遺跡番号・略号 J E09-1273 ・DNT-00
調査担当者 工藤 徹・齋藤麻紀子
協力機関 二戸市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 一戸

1. 調査に至る経過

台中平遺跡の発掘調査は、新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業に係り、その施行区域に所在する埋蔵文化財の記録保存をはかることを目的として実施した緊急発掘調査である。

二戸市施工の「新幹線二戸駅周辺地区土地区画整理事業」は平成8年に都市計画決定を行い、同年12月に事業計画決定の告示を行った。施工期間は平成8年度から平成22年度、施工面積は88.4haの計画で新幹線用地を巻き込んだ区画整理としてスタートした。事業区域内には広大な埋蔵文化財の包蔵地が複数カ所含まれているが、特に対応が急がれる新幹線関連部分の緊急調査が急務とされた。区画整理事業用地内は当初二戸市教育委員会が発掘調査を行う予定であったが、調査の規模及び予想される遺構数等を考慮し、開業時期から逆算し新幹線工事に間に合わせることを前提にすると、現在の体制では不可能であることから、平成12年に岩手県教育委員会に援助の要請をした。その中に今回の台中平地区が含まれており、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに委託し、諏訪前遺跡の調査に引き続き調査を依頼したものである。発掘調査は平成12年6月12日から8月10日の間実施した。報告書作成に係る室内整理は冬季間に実施したが、調査によって発見された遺構・遺物とも些少であったことから、調査略報（平成12年度）に掲載して一切の報告を終了することとした。

2. 遺跡の立地

台中平遺跡は、J R 東北線二戸駅の南南西約800m地点に位置し、馬淵川左岸に形成された米沢段丘上に立地する。遺跡の標高は118m前後で、南方約200mの馬淵川との比高は約30mを測る。遺跡の現況は畑地・宅地等である。本遺跡の周辺には、同位段丘上に立地する大淵遺跡や上位の福岡段丘上に立地する上里遺跡、火行塚遺跡などがある。

3. 基本層序

本遺跡の基本層序は以下のとおりである。

- I層 黒褐色土 (10Y R 2/3) 粘性・中、しまり・やや密 現表土で上位に砕石が入る。層厚45～60cm
- II層 黒褐色土 (10Y R 2/2) 粘性・やや弱、しまり・中 T o - a 及び T o - C u 微量混入。層厚6～17cm
- III層 暗褐色土 (10Y R 3/3) 粘性・中、しまり・中 T o - C u 7%含む。層厚10～18cm
- IV a 層 黒色土 (10Y R 2/1) 粘性・中、しまり・密 T o - N b (1～10mm) 10%含む。層厚16～22cm
- IV b 層 黒色土 (10Y R 2/1) 粘性・中、しまり・中 T o - N b (1～20mm) 15%含む。層厚7～16cm
- V層 明黄褐色 (10Y R 7/6) 南部浮石層 (T o - N b) 層厚6～15cm
- VI層 暗褐色土 (10Y R 2/3) 粘性・強、しまり・中 T o - N b (5～10mm) 3%含む。層厚6～10cm
- VII層 黄褐色土 (10Y R 5/8) 粘性・強、しまり・密 T o - N b (3～10mm) 微量混入。層厚14～28cm
- VIII層 褐色砂質土 (10Y R 4/6) 粘性・弱、しまり・密 炭化物粒微量混入。層厚16～25cm
- IX層 にぶい黄橙色 (10Y R 7/4) 砂礫層。層厚15cm以上

4. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、土坑類3基、柱穴状土坑10基、溝状遺構8条である。調査区南端部は削平されており遺構は確認されない。本調査区の東側は今年度、二戸市教育委員会が既に調査を終えており、ほぼ同時期と思われる遺構・遺物が確認されている。

<竪穴住居跡> 調査区南側の平坦面16e区で1棟検出された。旧道路部分直下にあたり、道路の砂利を除去したところ、南部浮石を含む黒褐色土の不整な広がりを確認した。南半は削平されており、北半もわずかに壁が残っている程度である。平面形は円形で、規模は直径約3.9m前後、壁高は約10cmを測る。埋土は黒

褐色土及び暗褐色土で南部浮石をわずかに含む。住居内の北側に柱穴と思われる小ピット1基を検出、規模は径30cm、深さは10cmほどである。住居跡のほぼ中央部分（推定）には径約50cmの石囲炉が構築されている。構成礫は5～20cmの楕円礫及び角礫で、西側一部は削平時に破壊されたものと思われる。燃烧部の焼土は石囲い内に形成され、炭化物粒を含む明赤褐色焼土が25×30cmの範囲で広がる。厚さは最大で10cmを測る。住居跡の埋土からは土器1点、石器1点が出土している。1は大木10式相当と思われる。2は石鏃で基部が一部欠損している。出土した遺物の特徴等からこの住居跡の時期は縄文中期末と推定される。

<土坑> 3基検出された。1号土坑は調査区南側の平坦面15d区IV層に位置し、1号住居跡の北北西約4.5m地点にある。調査区の南側では基本土層のII層からIV層が掘削されていることから、上部は破壊されたものと推定される。形状は、平面形が不整形円形、断面形がフラスコ状を呈する。規模は、開口部径126×120cm、底部径154×145cm、深さ59cm前後である。埋土は、黒褐色土を主体に、明黄褐色土、極暗褐色土が入る。いずれもしまりが無く、一部に炭化物粒が混入する。埋土中からは土器片12点、加工痕のある剥片石器1点が出土している。土器の特徴等から後期前葉に属すると思われる。2号土坑は調査区南側の平坦面16d区IV層で検出された。1号住居跡の北西約2.5mに位置する。上部は1号土坑と同様に破壊されたものと推定される。形状は、平面形が不整形円形で、断面形が浅鉢状を呈する。規模は、開口部径209×199cm、底部径152×156cm、深さ32～44cm前後である。埋土は、上位が黒褐色土、下位は黄褐色土でいずれの層にも南部浮石がわずかに混入する。出土遺物はないが、周囲の状況や遺構の特徴等から縄文時代に属すると思われる。3号土坑は調査区北側の平坦面5i区III層上面で検出された。形状は、平面形が不整形円形で、断面形が浅鉢状を呈する。規模は、開口部径216×190cm、底部径152×156cm、深さ74cm前後である。埋土は黒褐色土を主体とし、上位には十和田a降下火山灰がごくわずかに混入する。また上位から下位まで中掬浮石がごくわずかに含まれる。遺物は出土していない。検出面や周囲の状況から縄文時代に属すると思われる。

<柱穴状土坑> 調査区中央部で10基検出された。規模・形状とも一様ではないが、概ね径27～60cm、深さ18～46cmほどで、円形または楕円形を呈する。これらの配列からは住居跡の柱穴とは断定できず、住居の床面となる痕跡も確認されない。出土遺物もなく、用途・時期についての詳細は不明である。

<溝状遺構> 8条検出された。1号溝状遺構は南東―北西方向に伸び、長さ16m、幅65～97cm、深さ13～26cmを測る。調査区東側では既に二戸市教育委員会がほぼ同地点に溝状遺構を検出していることから一連の遺構と思われる。遺構はさらに北西方向調査区外に伸びており全容については不明である。埋土に十和田a降下火山灰がブロック状に混入していることから、遺構の時期は古代と推定される。2号溝状遺構は北東―南西方向に伸びる。規模は、長さ約15m、幅42～55cm、深さ14～16cmを測る。北東側では二戸市教育委員会が溝状遺構を検出していることから、一連の遺構と思われる。遺構の南東端は3号溝状遺構に切られているが、詳細は不明である。3号溝状遺構は北西―南方向に弧状に伸びる。規模は、長さ約32m、幅75～110cm、深さ43～50cmを測る。北西側では6号溝状遺構を切り調査区外に伸びる。南方向にさらに伸びていると予想されるが、削平されており明確な立ち上がりを確認できない。埋土にブロック状の十和田a降下火山灰が認められることから古代の遺構と推定される。4号溝状遺構は北―南方向に伸び、6号溝状遺構に合流する。規模は、長さ約6.5m、幅15～25cm、深さ5cm前後である。5号溝状遺構は北―南方向に伸びる。規模は、長さ約5.3m、幅13～28cm、深さ6～8cmである。6号溝状遺構は北東―南南西方向にやや蛇行して伸びるが、中央部分は削平されプランは確認できない。規模は、長さ約42m、幅40～104cm、深さ10～34cmを測る。1号及び3号溝状遺構に切られておりそれらより古いのが、詳細は不明である。7号溝状遺構は北西―南東方向に伸びる。規模は、長さ約9.5m、幅50～85cm、深さ18～26cmを測る。詳細は不明である。8号溝状遺構は

北北西—南南東方向に延びる。規模は、長さ約4.1m、幅25～35cm、深さ16cm前後である。詳細は不明である。
<出土遺物> 出土した遺物は、土器が大コンテナ2箱、石器45点、土製品3点である。出土地点は調査区南側から中央部にかけてがほとんどである。層位的にはⅡ～Ⅲ層が多く、Ⅳa層での出土が若干ある。土器の大半は縄文中期末から後期前葉で、前期末と晩期中葉の土器が数点出土している。ここでは最近の土器編年研究の成果を考慮に入れながら、縄文前期をⅠ群、中期をⅡ群、後期をⅢ群、晩期をⅣ群に時期区分した。これらの中で細分可能なものについては従来の土器形式によって分類を試みた。

<第Ⅰ群土器> 縄文時代前期末に位置づけられる土器群である。(円筒下層d式相当)

<第Ⅱ群土器> 縄文時代中期に位置づけられる土器群である。

1類 円筒上層a式に相当すると思われる土器群である。

2類 大木8式に相当すると思われる土器群である。

3類 大木9～10式に相当すると思われる土器群である。

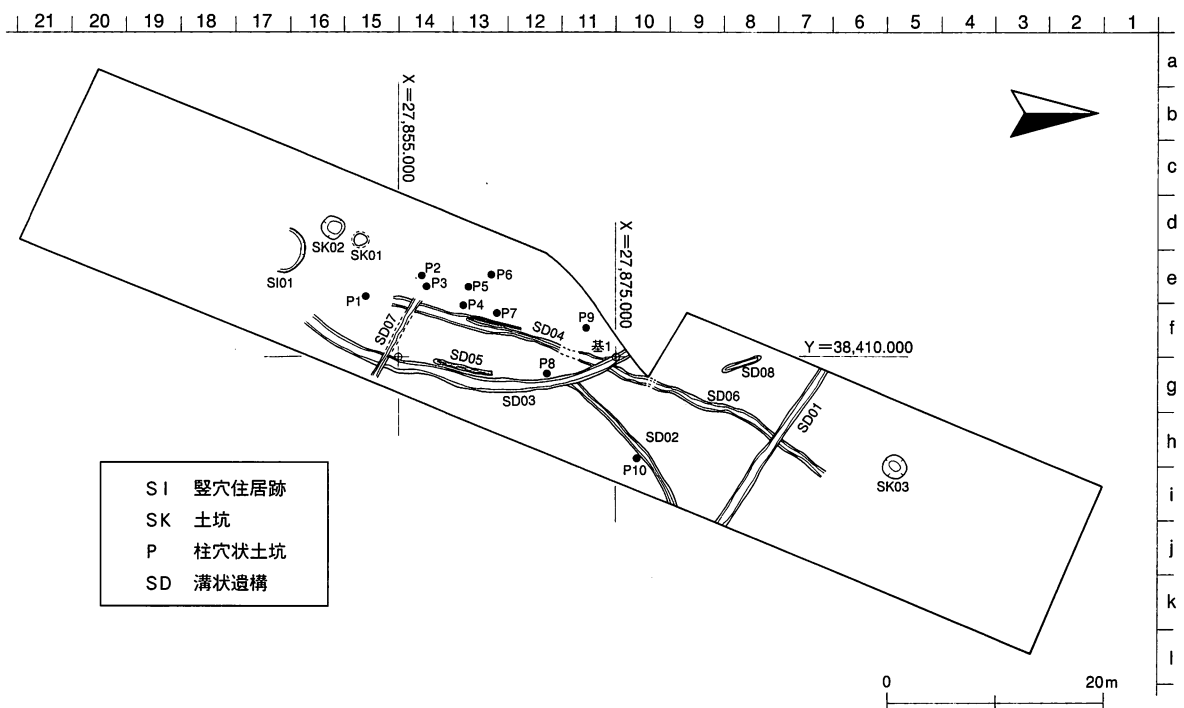
4類 大木10式に相当すると思われる土器群である。

<第Ⅲ群土器> 縄文時代後期前葉に位置づけられる土器群である。(十腰内Ⅰ式相当)

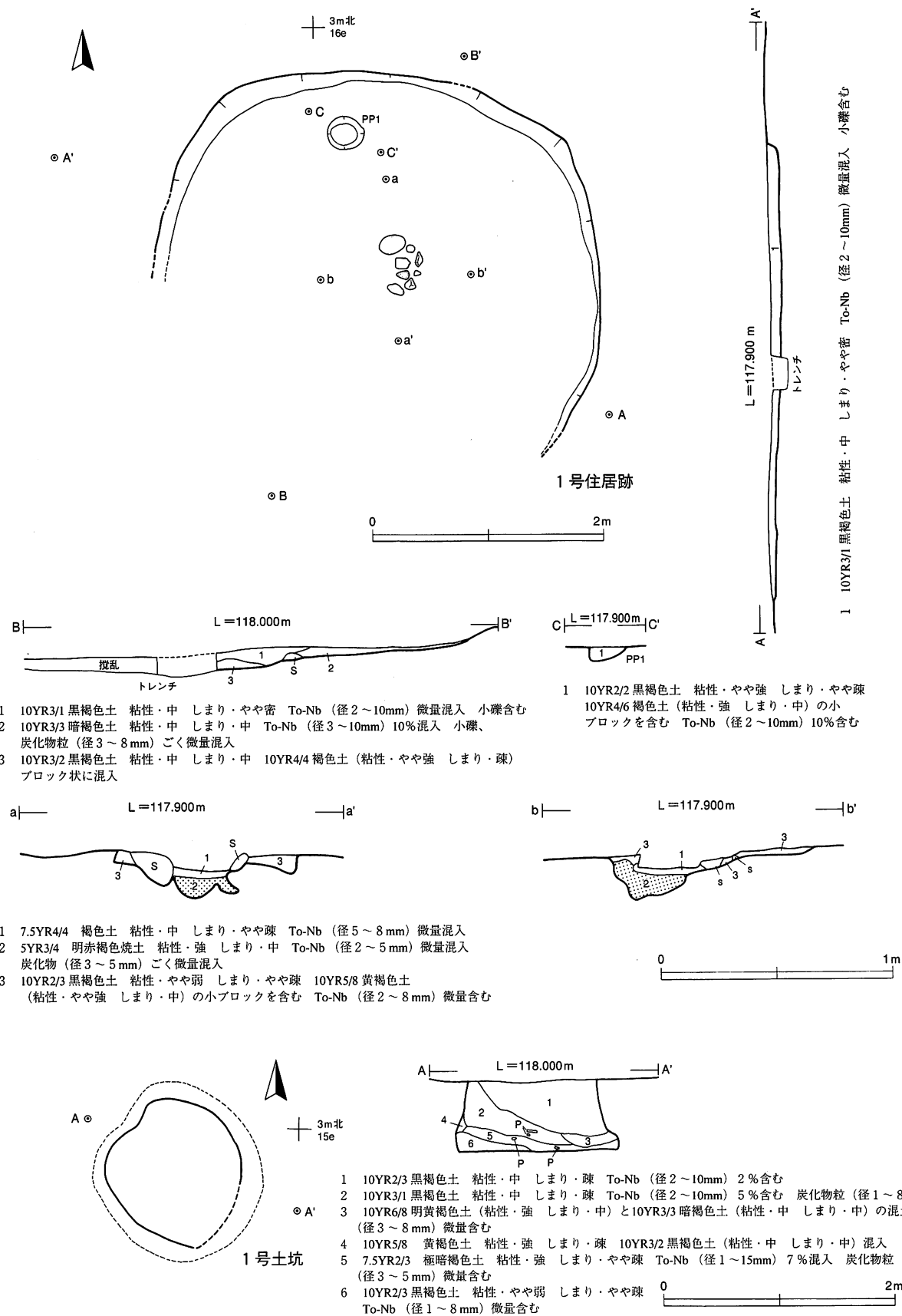
<第Ⅳ群土器> 縄文時代晩期中葉に位置づけられる土器群である。(大洞C2式相当)

5. まとめ

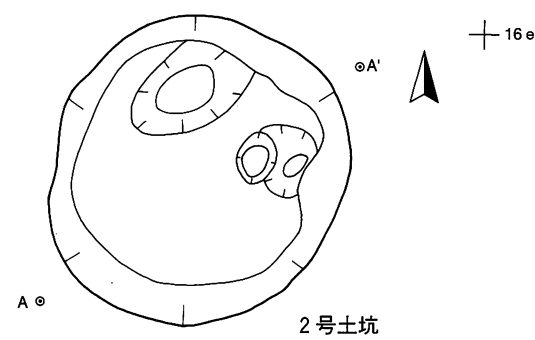
今回の調査により、本遺跡が縄文時代の集落跡であることが判明した。また、古代と思われる溝状遺構の検出から周辺地域に古代の集落跡の存在も想定される。今後、さらに周辺地域の調査が進むにつれ本遺跡の性格と広がりが見解されるものと期待される。なお、台中平遺跡に関わる報告はこれをもって全てとする。



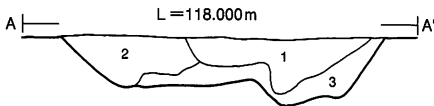
第1図 台中平遺跡遺構配置図



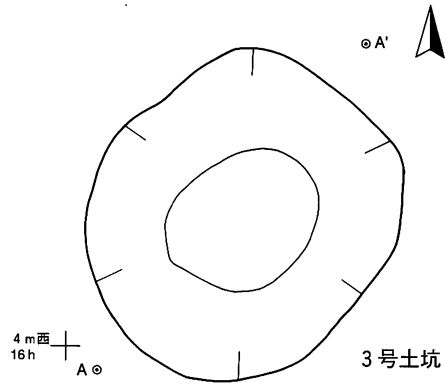
第2図 台中平遺跡1号住居跡・1号土坑



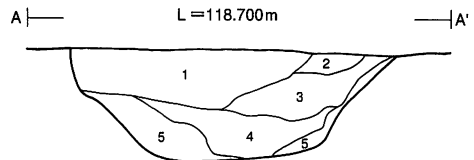
2号土坑



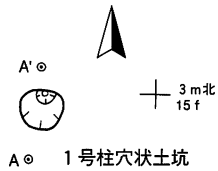
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性・中 しまり・疎 10YR4/6 褐色土 (粘性・強 しまり・中) ブロック状に混入 To-Nb (径3~8mm) 微量含む 炭化物粒 (径5mm) 微量混入
- 10YR2/2 黒褐色土 (粘性・やや弱 しまり・やや疎) と10YR5/8 黄褐色土 (粘性・やや強 しまり・やや疎) の混土 To-Nb (径3~10mm) 7%含む
- 10YR5/6 黄褐色土 粘性・強 しまり・やや密 To-Nb (径3~8mm) 5%含む 炭化物粒 (径3~5mm) 微量混入



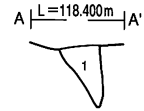
3号土坑



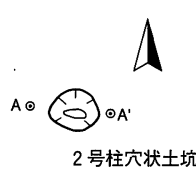
- 10YR3/2 黒褐色土 粘性・中 しまり・中 To-a及びTo-Cu 微量混入
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性・中 しまり・中 To-aごく微量混入
- 10YR3/1 黒褐色土 粘性・やや強 しまり・やや疎 To-Cu ごく微量混入
- 10YR3/3 褐色土 (粘性・中 しまり・密) ブロック状に混入
- 10YR2/1 黒色土 粘性・やや強 しまり・中 To-Cu ごく微量混入
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性・やや強 しまり・やや密 To-Cu 微量混入



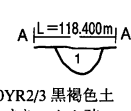
1号柱穴状土坑



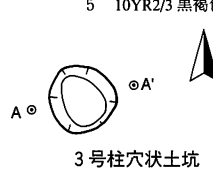
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性・やや弱 しまり・中 To-Cu 微量混入



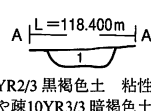
2号柱穴状土坑



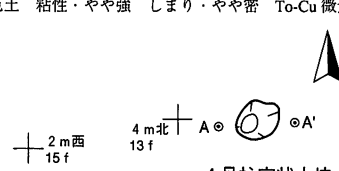
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性・やや弱 しまり・やや疎 To-Cu 微量混入



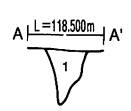
3号柱穴状土坑



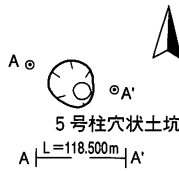
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性・やや弱 しまり・やや疎 10YR3/3 暗褐色土 (粘性・中 しまり・中) ブロック状に混入



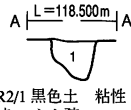
4号柱穴状土坑



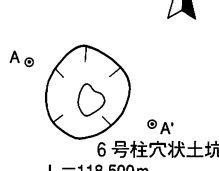
- 10YR3/1 粘性・中 しまり・やや疎 To-Cu ごく微量混入



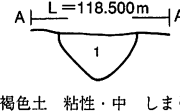
5号柱穴状土坑



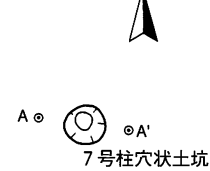
- 10YR2/1 黒色土 粘性・中 しまり・やや疎 To-Cu 微量混入



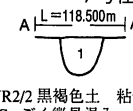
6号柱穴状土坑



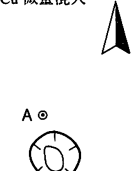
- 10YR2/3 黒褐色土 粘性・中 しまり・やや疎 To-Cu 微量混入 炭化物粒 (径5~8mm) 微量混入



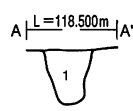
7号柱穴状土坑



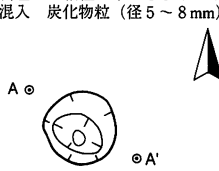
- 10YR2/2 黒褐色土 粘性・中 しまり・やや疎 To-Cu ごく微量混入



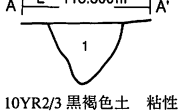
8号柱穴状土坑



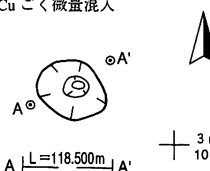
- 10YR3/1 黒褐色土 粘性・やや強 しまり・やや疎 To-Cu ごく微量混入 炭化物粒 (径3~5mm) ごく微量混入



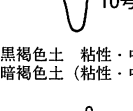
9号柱穴状土坑



- 10YR2/3 黒褐色土 粘性・中 しまり・中 To-Cu ごく微量混入

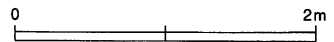


10号柱穴状土坑

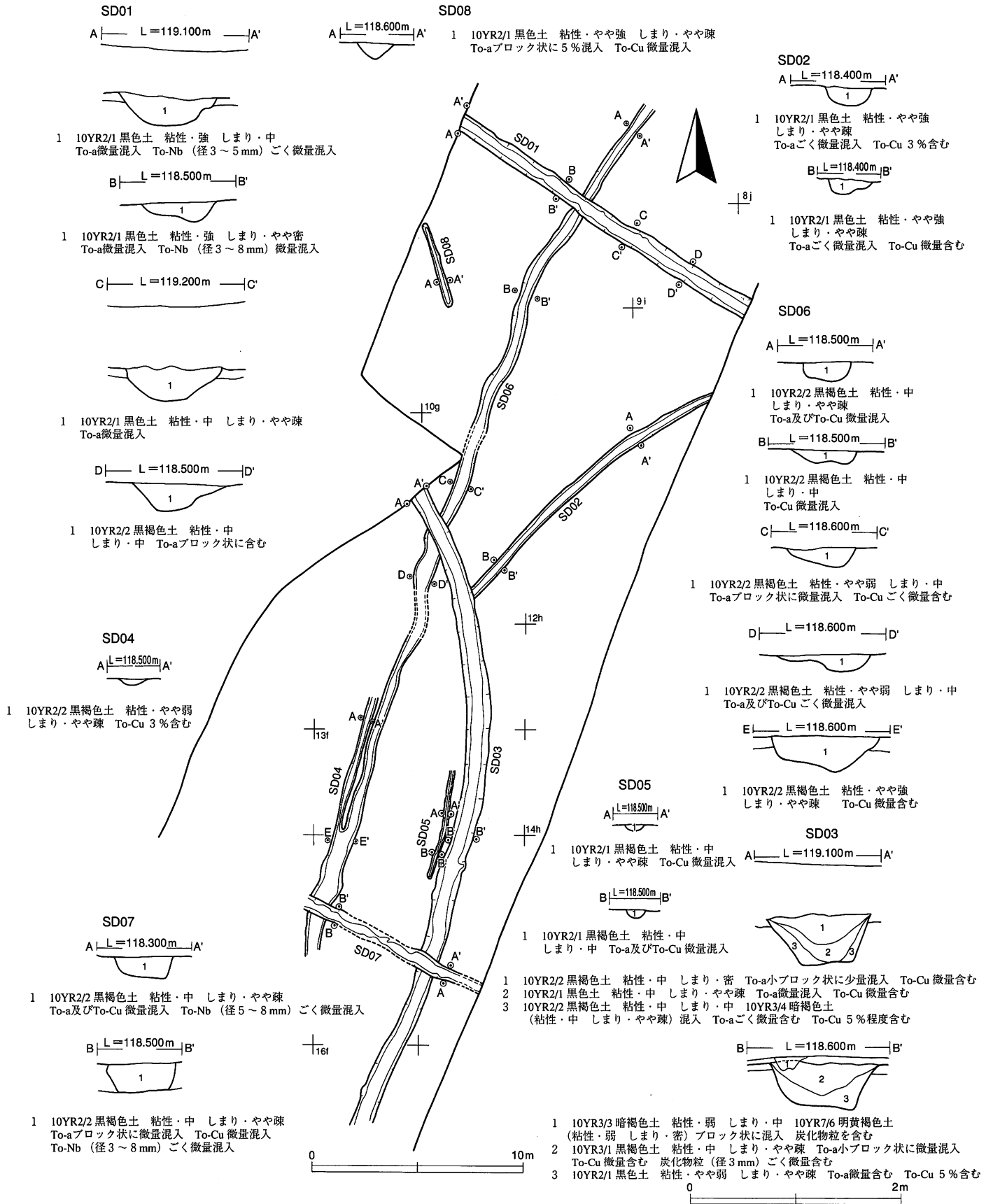


- 10YR2/2 黒褐色土 粘性・中 しまり・やや疎 To-Cu ごく微量混入 10YR3/3 暗褐色土 (粘性・中 しまり・中) ブロック状に混入

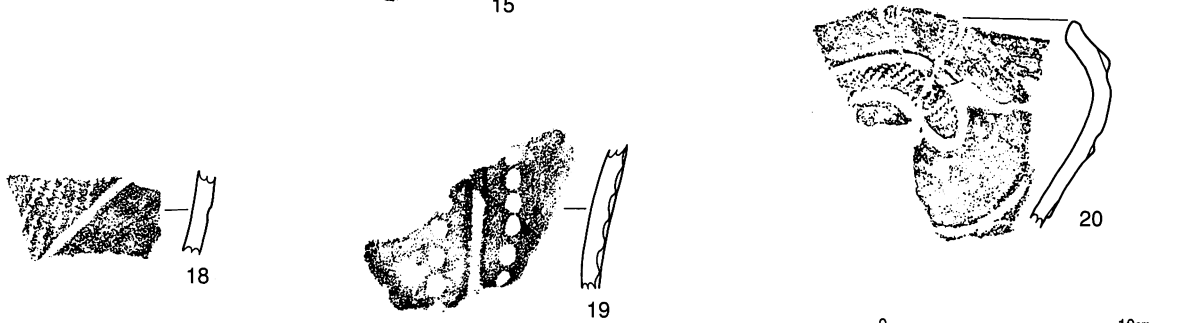
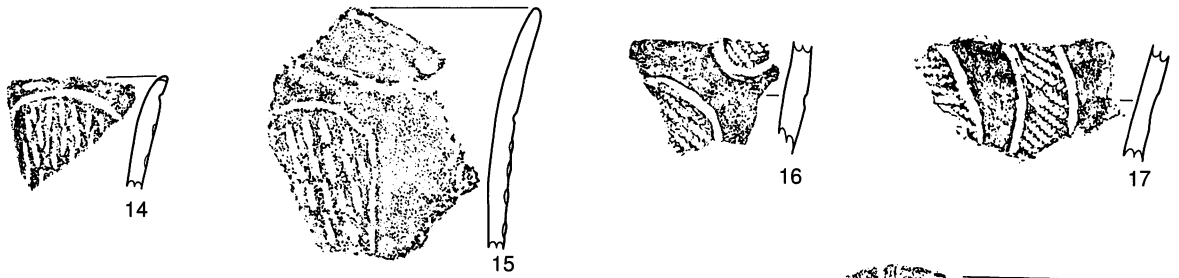
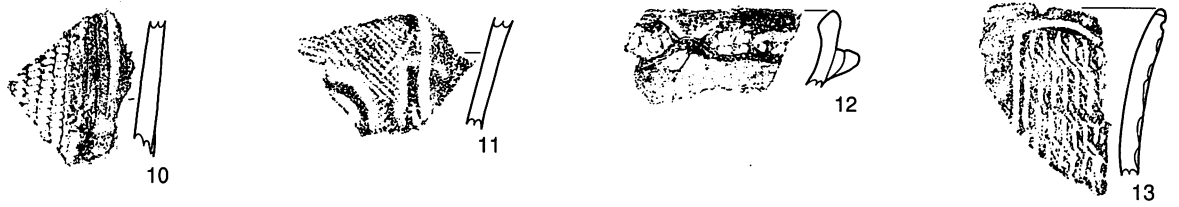
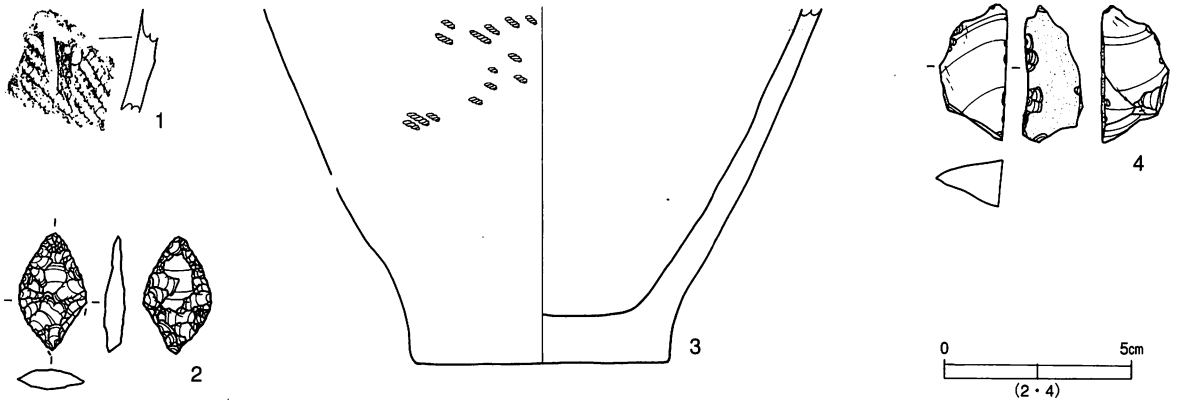
	径(cm)	深さ(m)
P 1	29×27	40.0
P 2	32×28	18.0
P 3	47×44	12.0
P 4	28×25	38.0
P 5	31×29	25.0
P 6	60×55	30.0
P 7	28×25	24.0
P 8	33×30	35.5
P 9	49×46	41.0
P 10	48×39	46.0



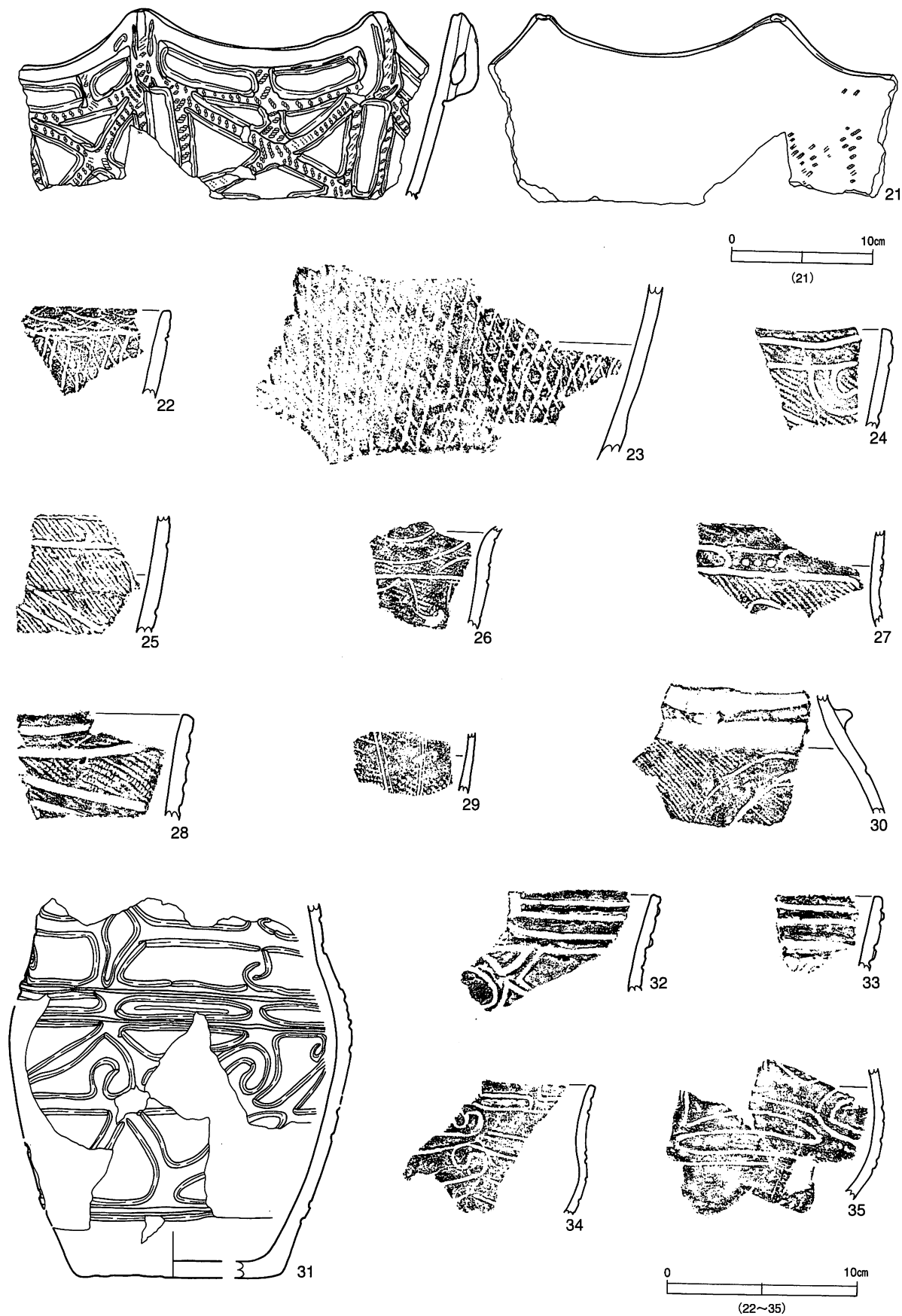
第3図 台中平遺跡2~3号土坑・柱穴状土坑



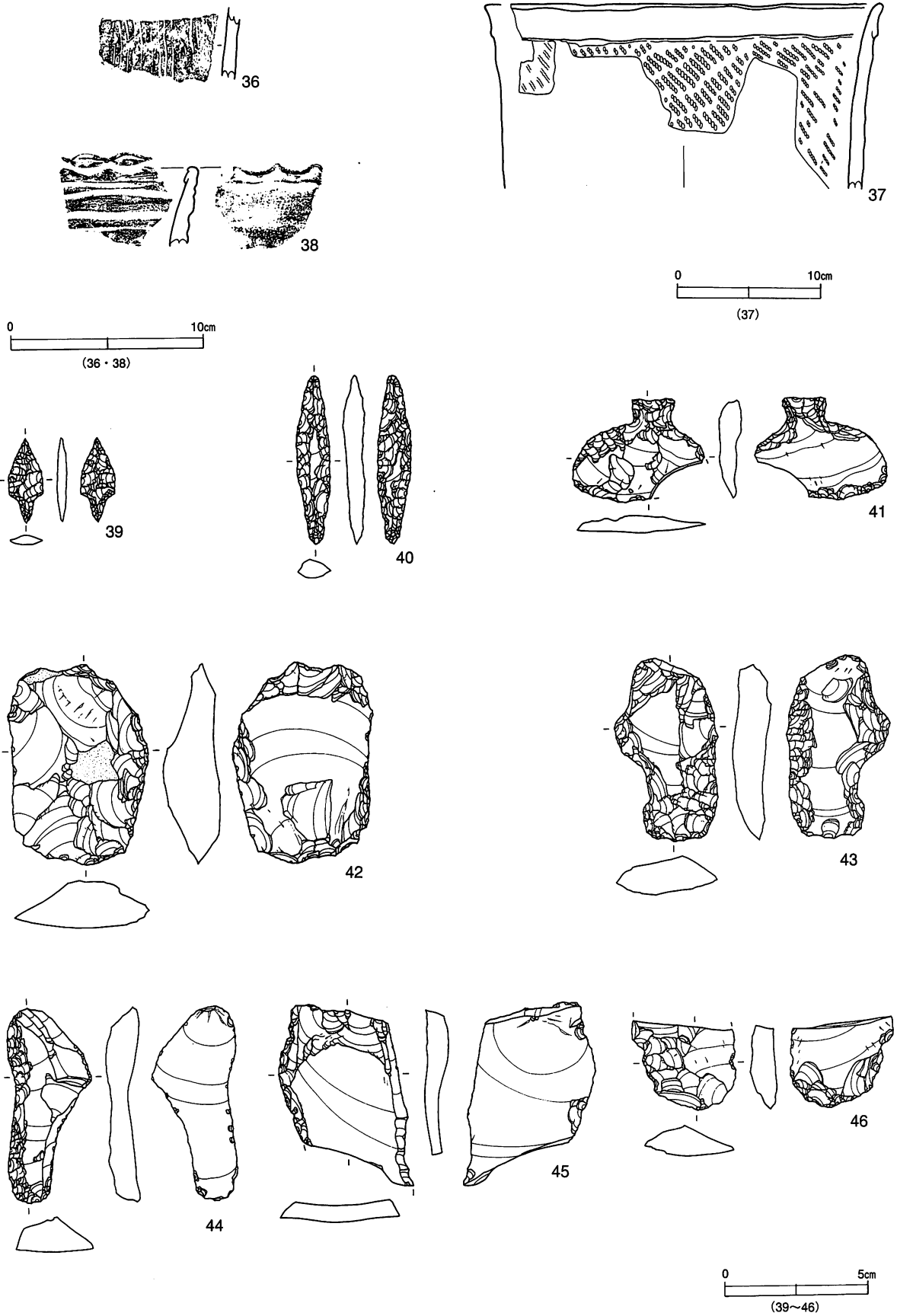
第4図 台中平遺跡1~8号溝状遺構



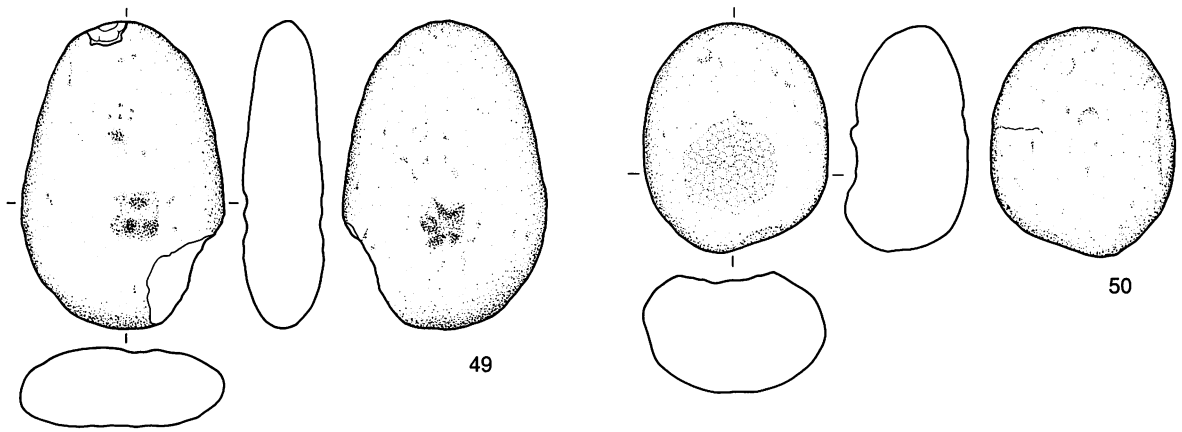
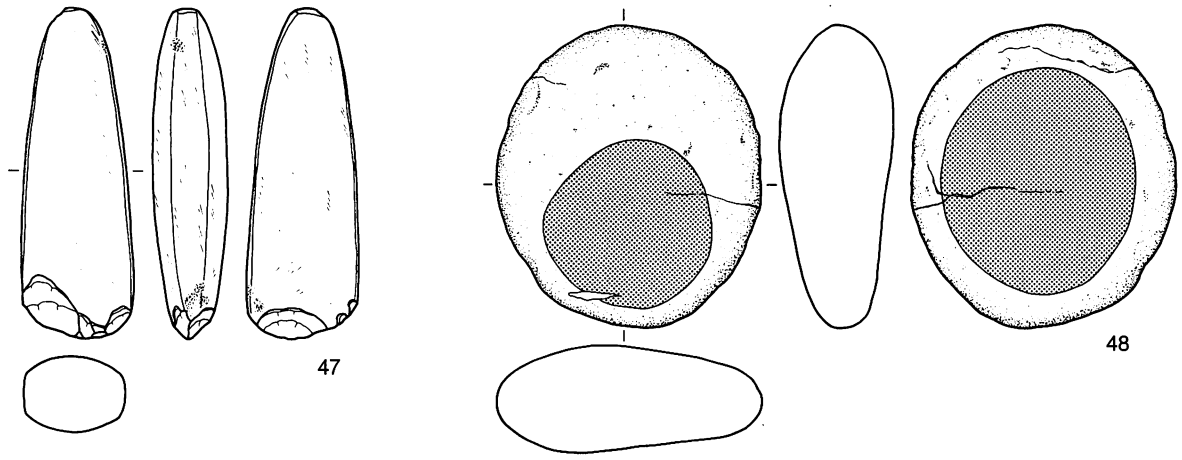
第5图 台中平遺跡出土遺物 (1)



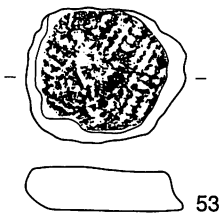
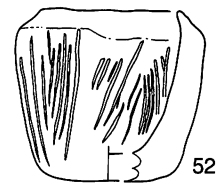
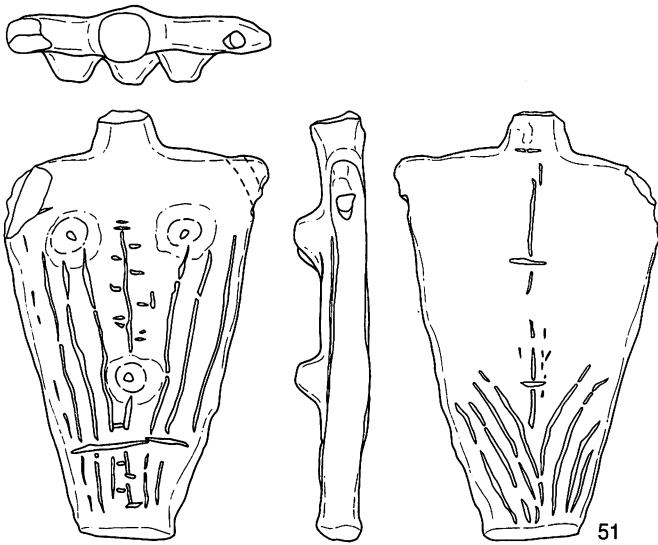
第6圖 台中平遺跡出土遺物(2)



第7圖 台中平遺跡出土遺物 (3)



0 10cm
(47~50)



0 5cm
(51~53)

第8図 台中平遺跡出土遺物(4)

遺物観察表

番号	出土地点・層位	器種	部 位	文 様 な ど	内 面	分 類
1	1号住居埋土中	深鉢	体部	沈線、RL、磨消、浮石含む	ナデ	Ⅱ 4
3	1号土坑埋土中	深鉢	体部～底部	LR、外面ミガキ	ミガキ	Ⅲ
5	14e Ⅲ層	深鉢	口縁部	口頸部に低い隆帯、撚紐押捺文による平行線文、体部羽状縄文	ナデ	I
6	13f Ⅲ層	深鉢	口縁部	口頸部に低い隆帯、撚紐押捺文による平行線文、刺突	ナデ	I
7	4i Ⅲ層	深鉢	体部	撚紐押捺文、半裁竹管刺突	ナデ	I
8	7h Ⅲ層	深鉢	口縁部	隆帯、撚紐押捺文	ナデ	Ⅱ 1
9	13g Ⅲ層	深鉢	体部	沈線、隆線による渦巻文、LR、浮石含む	ナデ	Ⅱ 2
10	8g Ⅲ層	深鉢	体部	隆帯、RL	ナデ	Ⅱ 3
11	12g Ⅲ層	深鉢	体部	隆帯、LR	ナデ	Ⅱ 3
12	9h Ⅲ層	深鉢	口縁部	隆帯、金雲母含む	ナデ	Ⅱ 3
13	11g Ⅲ層	深鉢	口縁部	口唇部刻み、沈線、細棒状工具による刺突、胎土粗粒	ナデ	Ⅱ 3
14	11f Ⅲ層	深鉢	口縁部	口唇部刻み、沈線、細棒状工具による刺突、胎土粗粒	ナデ	Ⅱ 3
15	12g Ⅲ層	深鉢	口縁部	山形口縁、沈線、棒状工具による刺突、胎土粗粒	ナデ	Ⅱ 3
16	11f Ⅲ層	深鉢	体部	沈線、LR、磨消	ナデ	Ⅱ 4
17	12g Ⅲ層	深鉢	体部	沈線、LR、磨消	ナデ	Ⅱ 4
18	14d Ⅲ層	深鉢	体部	沈線、LR、磨消	ナデ	Ⅱ 4
19	9f Ⅲ層	深鉢	体部	沈線、刺突、浮石含む	ナデ	Ⅱ 4
20	11f Ⅱ層	深鉢	口縁部	波状口縁、隆帯、沈線、充填、胎土粗粒	ナデ	Ⅱ 4
21	14g Ⅲ層	深鉢	口縁部	波状口縁、隆帯、RL、充填、内面RL	ミガキ	Ⅲ
22	16e Ⅲ層	深鉢	口縁部	網目状撚糸文、浮石含む	ミガキ	Ⅲ
23	14g Ⅲ層	深鉢	体部	網目状撚糸文、浮石含む	ミガキ	Ⅲ
24	15e Ⅲ層	深鉢	口縁部	平縁、沈線、RL、磨消	ミガキ	Ⅲ
25	12g Ⅱ層	深鉢	体部	沈線、磨消	ミガキ	Ⅲ
26	16e Ⅱ層	鉢	体部	沈線、磨消	ナデ	Ⅲ
27	14e Ⅱ層	鉢	体部	沈線、円形刺突、磨消	ミガキ	Ⅲ
28	9h Ⅱ層	深鉢	口縁部	沈線、LR、磨消	ナデ	Ⅲ
29	11f Ⅲ層	鉢	体部	沈線、磨消	ミガキ	Ⅲ
30	13e Ⅱ層	深鉢	口縁部	隆帯、沈線、磨消、浮石含む	ナデ	Ⅲ
31	16e Ⅱ層	鉢	体～底部	隆帯、沈線	ミガキ	Ⅲ
32	13f Ⅱ層	鉢	口縁部	隆帯、沈線	ミガキ	Ⅲ
33	14g Ⅱ層	鉢	口縁部	隆帯、沈線	ナデ	Ⅲ
34	16e Ⅱ層	鉢	口縁部	沈線	ミガキ	Ⅲ
35	16e Ⅱ層	鉢	体部	沈線	ミガキ	Ⅲ
36	14f Ⅱ層	深鉢	体部	条線文	ナデ	Ⅲ
37	8g Ⅱ層	深鉢	口縁部～体部	折り返し口縁、LR	ナデ	Ⅲ
38	12e Ⅱ層	鉢	口縁部	口唇短沈線状刻み、小山形口縁、沈線	ミガキ	Ⅳ

番号	出土地点・層位	器 種	長さcm	幅 cm	厚さcm	重量g	石質(産地)	備 考
2	1号住居埋土中	石鏃	3.1	1.8	0.5	2.4	頁岩(北上山地)	一部欠損
4	1号土坑埋土中	不定形石器	3.6	1.8	1.6	8.3	頁岩(北上山地)	使用痕
39	11f Ⅲ層	石鏃	2.9	1.2	0.3	0.9	頁岩(北上山地)	
40	13e Ⅳa層	石鏃	5.9	1.1	0.7	5.1	頁岩(北上山地)	
41	13e Ⅲ層	石匙	3.6	(4.6)	0.8	10.9	赤色頁岩(奥羽山脈)	一部欠損
42	14e Ⅳa層	不定形石器	7.0	4.9	2.0	63.6	頁岩(北上山地)	全縁刃部加工
43	12g Ⅲ層	不定形石器	6.4	3.6	1.4	31.1	頁岩(北上山地)	3縁刃部加工
44	16f Ⅲ層	不定形石器	6.8	2.9	1.2	22.5	頁岩(北上山地)	3縁刃部加工
45	14e Ⅱ層	不定形石器	(6.3)	4.6	0.8	23.3	頁岩(北上山地)	2縁刃部加工 欠損
46	14f Ⅲ層	不定形石器	(3.2)	3.6	1.1	10.5	頁岩(北上山地)	3縁刃部加工 欠損
47	16g Ⅲ層	磨製石斧	13.1	4.5	3.0	269.4	閃緑岩(北上山地)	刃部欠損
48	9i Ⅳa層	磨石	12.1	10.5	4.5	622.3	安山岩(奥羽山脈)	
49	13d Ⅲ層	敲石	12.3	8.0	3.2	374.2	安山岩(奥羽山脈)	
50	14e Ⅲ層	凹石	9.2	7.3	4.8	436.6	安山岩(奥羽山脈)	

番号	出土地点・層位	器 種	文 様 な ど
51	15g Ⅱ層	土偶	板状土偶、乳房と膺は隆帯、沈線文、頭部と肩部一部欠損、肩部に穿孔、後期前葉
52	14f Ⅱ層	ミニチュア	条線文、砂粒含む、後期前葉
53	15e Ⅲ層	円盤状土製品	側縁打欠、一部研磨



調査前風景（南から）



全景（北から）



基本土層

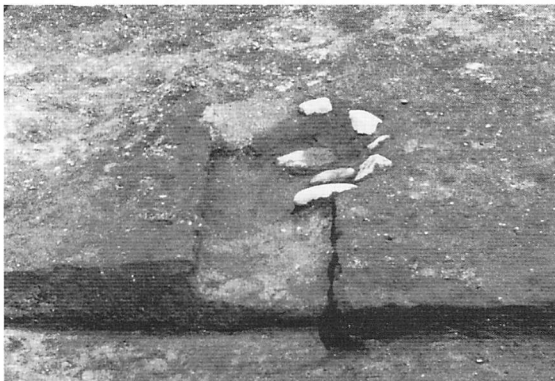
写真図版1 台中平遺跡全景・基本土層



平面



断面

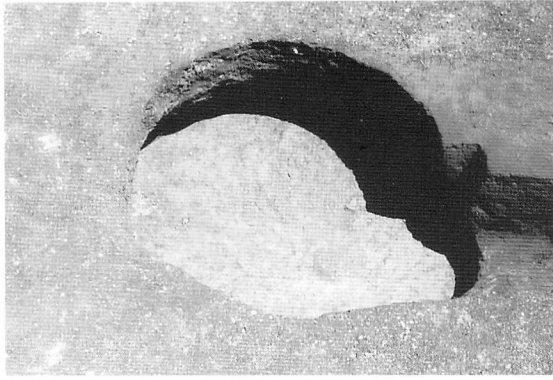


炉跡平面

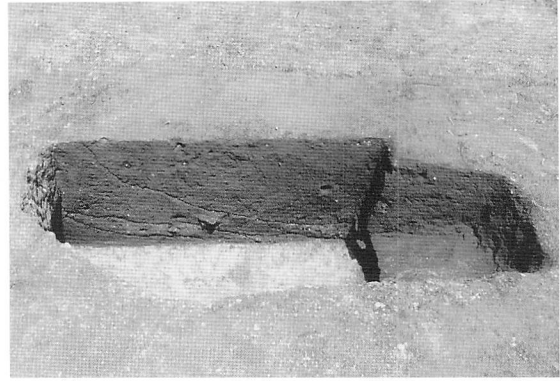


炉跡断面

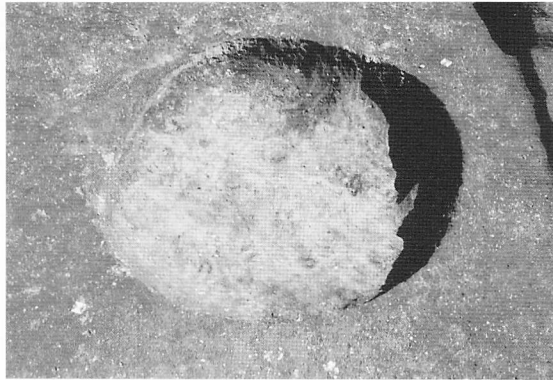
写真図版 2 台中平遺跡 1 号住居跡



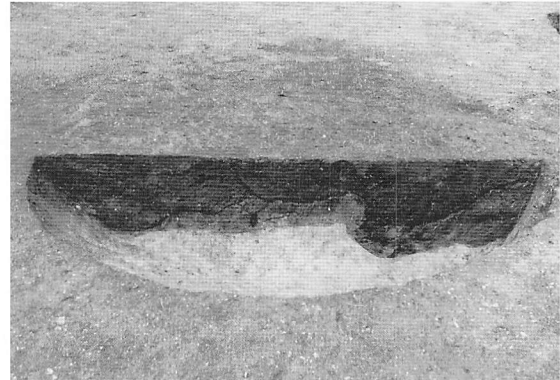
1号土坑平面



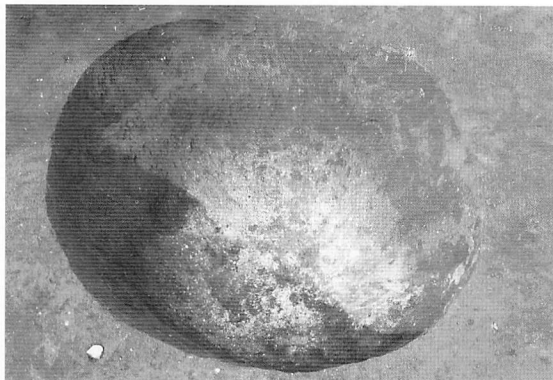
1号土坑断面



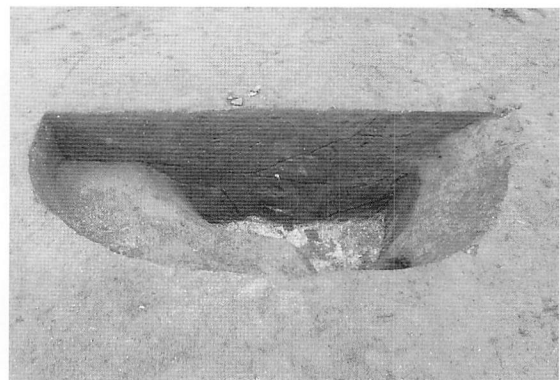
2号土坑平面



2号土坑断面



3号土坑平面



3号土坑断面



柱穴状土坑

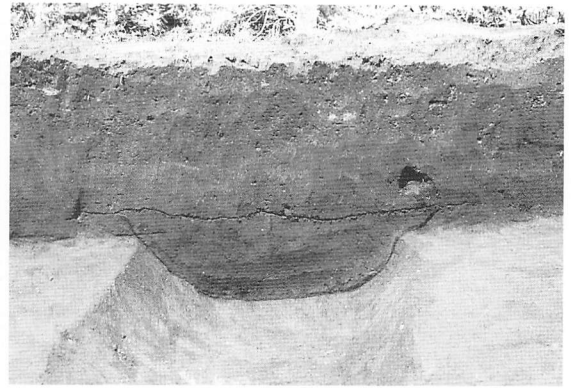


柱穴状土坑

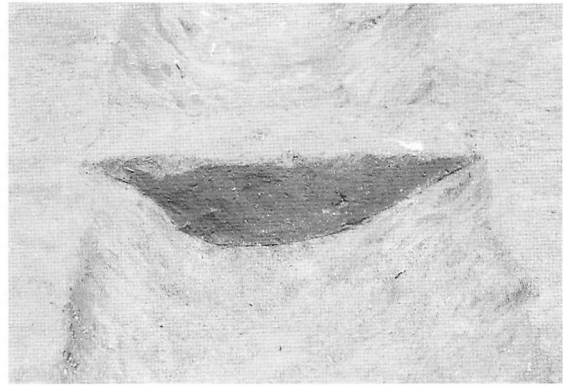
写真图版3 台中平遺跡土坑・柱穴状土坑



1号溝状遺構平面



1号溝状遺構断面 (A-A')

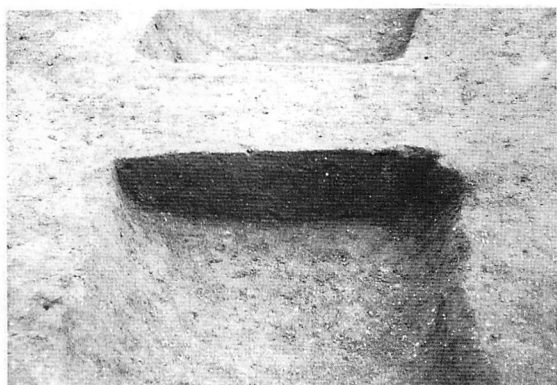


1号溝状遺構断面 (D-D')

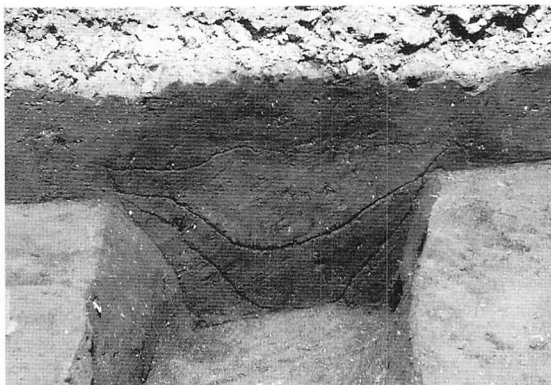


2～6号溝状遺構平面

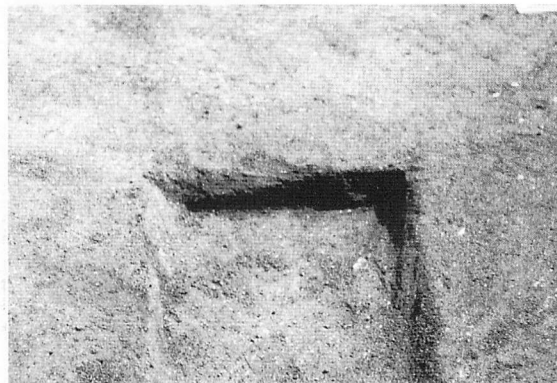
写真図版4 台中平遺跡溝状遺構(1)



2号溝状遺構断面 (A-A')



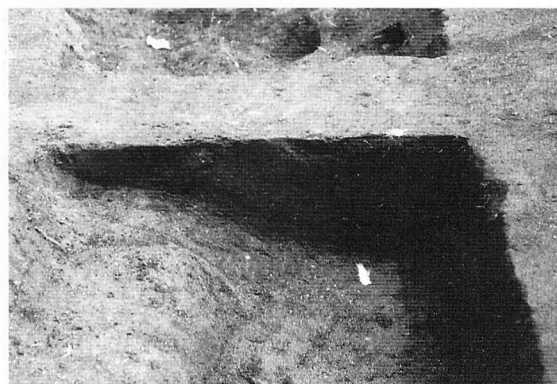
3号溝状遺構断面 (A-A')



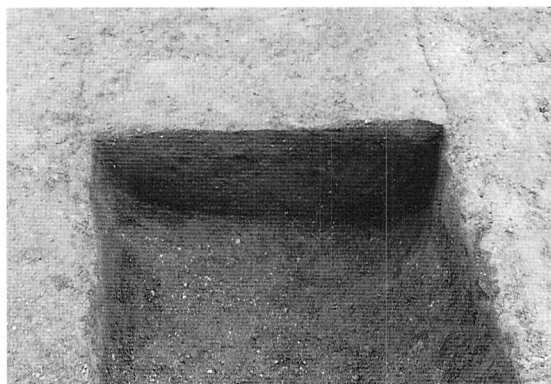
4号溝状遺構断面



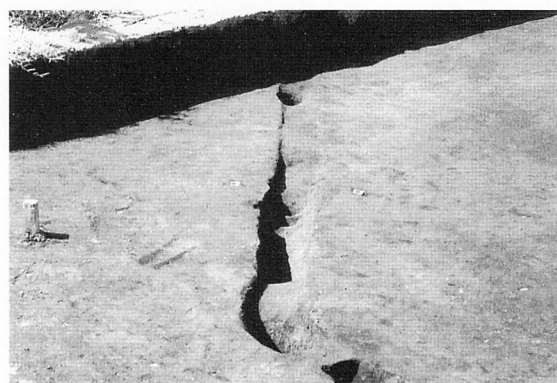
5号溝状遺構断面 (A-A')



6号溝状遺構断面 (D-D')



7号溝状遺構断面

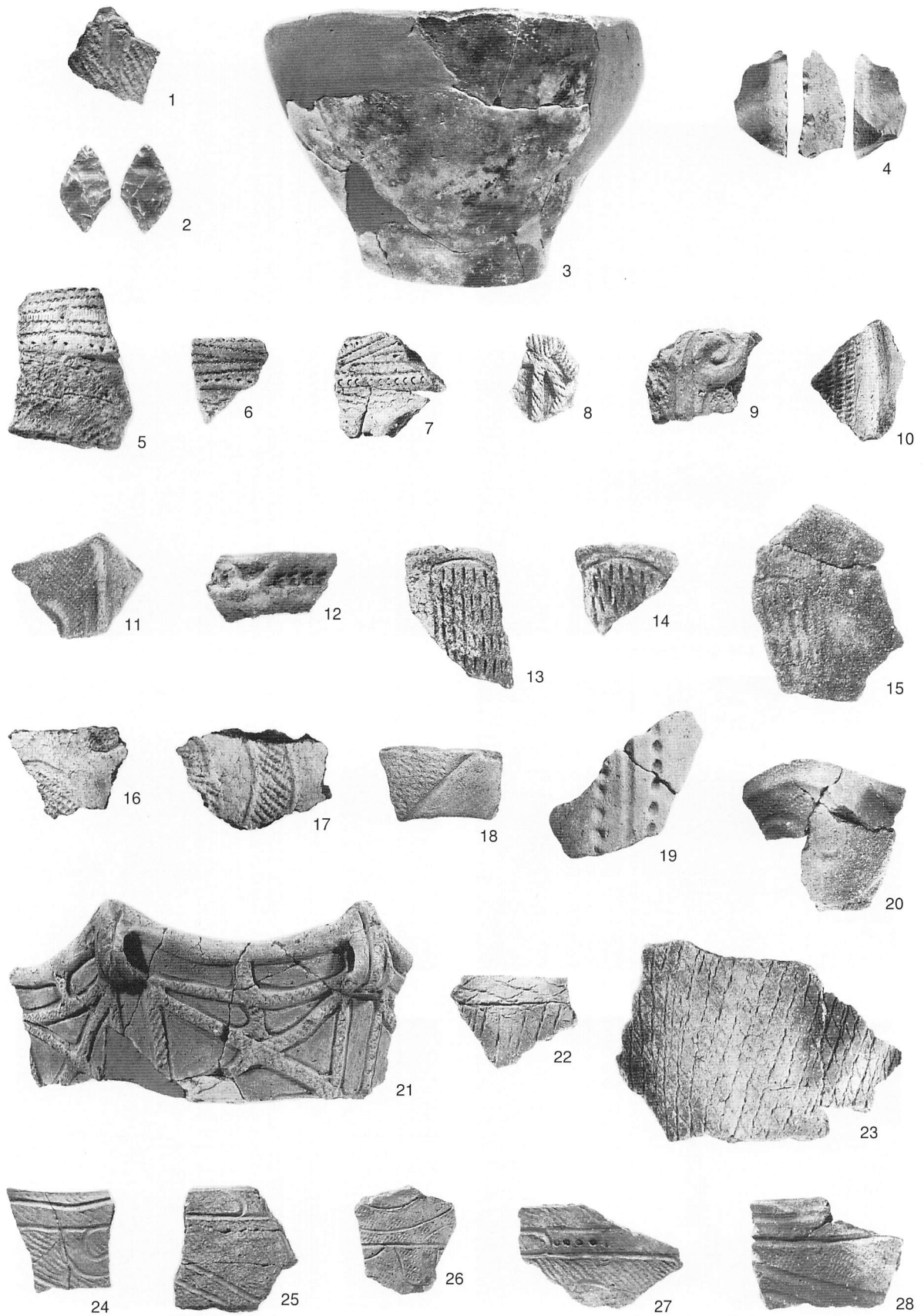


8号溝状遺構平面

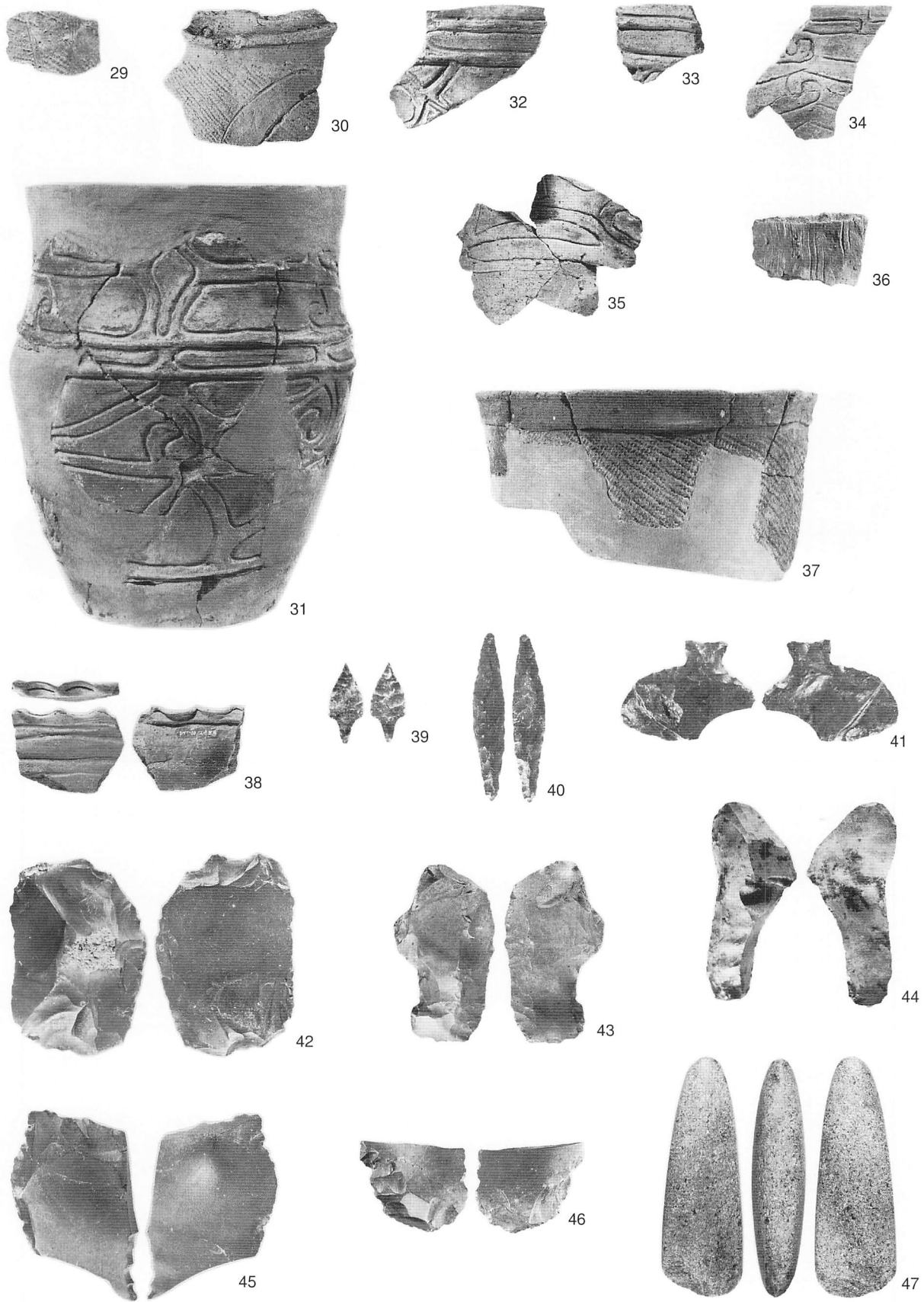


8号溝状遺構断面

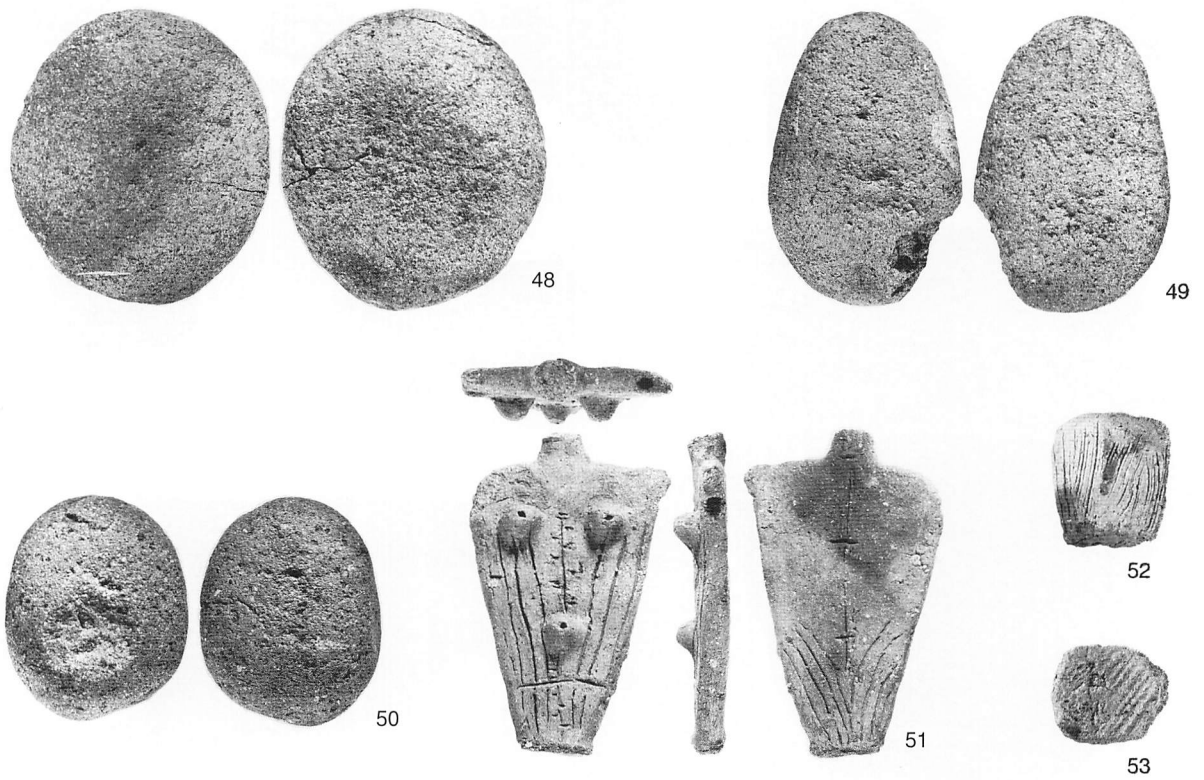
写真図版5 台中平遺跡溝状遺構 (2)



写真図版 6 台中平遺跡出土遺物 (1)



写真図版 7 台中平遺跡出土遺物 (2)



写真図版 8 台中平遺跡出土遺物 (3)

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいごうぶんかざいはつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第370集							
編著者名	工藤 徹							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL 019-638-9001							
発行年月日	西暦2001年3月27日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	〃 〃 〃	〃 〃 〃			
台中平遺跡	いわてけんじのへし 岩手県二戸市石 きりところあぎなな 切所字台中平 108-3ほか	03213	JE09- 1273	40度 15分 04秒	141度 17分 10秒	20000612~ 20000810	1,660m ²	新幹線二戸駅 周辺地区土地 区画整理事業 に伴う緊急発 掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
台中平遺跡	集落跡	縄文時代 古代	竪穴住居跡1棟 土坑3基 柱穴状土坑10基 溝状遺構8条		縄文土器 石器 土製品			

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 伊 藤 民 也
 副 所 長 櫻 田 次 男
 (管理課)
 管 理 課 長 川 浪 清 徳
 管理課長補佐 山 崎 善 光
 主 査 立 花 多加志
 主 事 日 影 睦 夫
 嘱 託 千 葉 芳 夫
 ♪ 藤 島 恵 子
 ♪ 新 田 トヨ
 ♪ 佐々木 光 重

(調査第一課)

調査第一課長 佐々木 勝
 課 長 補 佐 佐々木 清 文
 主 任 文 化 財 員 小山内 透
 主 任 文 化 財 員 赤 石 登
 文 化 財 員 吉 田 充
 文 化 財 員 小 原 眞 一
 文 化 財 員 小笠原 健一郎
 文 化 財 員 金 野 進
 文 化 財 員 鳥 居 達 人
 文 化 財 員 金 子 昭 彦
 文 化 財 員 東海林 淳 美
 文 化 財 員 阿 部 勝 則
 文 化 財 員 羽 柴 直 人
 文 化 財 員 小野寺 正 之
 文 化 財 員 菅 原 靖 男
 文 化 財 員 長 村 克 稔
 文 化 財 員 溜 浩 二 郎
 文 化 財 員 菊 池 貴 広
 文 化 財 員 村 上 拓
 文 化 財 員 本 多 準 一 郎
 文 化 財 員 北 村 忠 昭
 文 化 財 員 丸 山 浩 治
 文 化 財 員 村 木 敬 卓
 文 化 財 員 小 林 弘 卓
 文 化 財 員 江 藤 敦 徳 (6月退職)
 文 化 財 員 藤 原 賢 賢
 文 化 財 員 菊 池 賢 賢
 文 化 財 員 井 上 信 介
 文 化 財 員 川 又 晋
 文 化 財 員 吉 田 真 由 美
 文 化 財 員 北 田 博 義 (11月退職)

(調査第二課)

調査第二課長 高橋 與右衛門
 課 長 補 佐 中 川 重 紀
 主 任 文 化 財 員 高 橋 義 介
 主 任 文 化 財 員 金 子 佐 知 子
 文 化 財 員 中 田 迪
 文 化 財 員 工 藤 道 孝
 文 化 財 員 古 館 貞 身
 文 化 財 員 阿 部 眞 澄
 文 化 財 員 松 尾 芳 幸
 文 化 財 員 工 藤 徹
 文 化 財 員 前 田 稔
 文 化 財 員 岩 渕 計
 文 化 財 員 早 坂 悟
 文 化 財 員 濱 田 宏
 文 化 財 員 安 藤 由 紀 夫
 文 化 財 員 高 木 晃
 文 化 財 員 千 葉 正 彦
 文 化 財 員 佐 藤 淳 一
 文 化 財 員 半 澤 武 彦
 文 化 財 員 杉 沢 昭 太 郎
 文 化 財 員 中 村 直 美
 文 化 財 員 (星 雅 之)
 期 限 付 員 鈴 木 聡 (12月退職)
 期 限 付 員 吉 川 徹
 期 限 付 員 北 田 勲
 期 限 付 員 吉 田 里 和
 期 限 付 員 原 美 津 子
 期 限 付 員 齋 藤 麻 紀 子
 期 限 付 員 島 原 弘 征

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第370集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成12年度)

印刷 平成13年 3月21日

発行 平成13年 3月27日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019)638-9001

FAX (019)638-8563

印刷 株式会社富土屋印刷所

〒020-0841 盛岡市羽場13-30-10

電話 (019)637-6391